岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集

金附（かねつき）遺跡発掘調査報告書

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
県営ほ場整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査

（第1分冊　本文、遺構・分析・考察編）

2006

岩手県北上地方振興局土木部
岩手県北上地方振興局農林部農村整備室

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

金附遺跡発掘調査報告書

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
県営ほ場整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査

（第１分冊　本文、遺構・分析・考察編）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければ成りません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。 当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、緊急地方道路整備事業と県営ほ場整備事業下門岡地区に関連して平成14･15年度に発掘調査された北上市金附遺跡の調査成果をまとめたものです。

遺跡は、北上川に非常に近く何百年に一度の大洪水では水につかってしまうような低い場所にありますが、縄文時代中期末から断続的に利用されていました。最も栄えたのは縄文時代晩期の終わり～弥生時代初めで、村が作られ、後背湿地を利用した捨て場から大量の土器や石器などが発見されました。石器の大部分は未成品（おそらくは失敗したため、途中で捨てたもの）で、ここで大量に石器を作っていたことがわかります。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県北上地方振興局土木部、農林部農村整備室、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1　本報告書は、岩手県北上市稲瀬町字金附 195 － 1 ほかに所在する金附遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　今回の調査は、緊急地方道路整備事業及びほ場整備事業下門岡地区に伴う事前の発掘調査である。

調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県北上地方振興局土木部および農林部農村整備室の協議を経て、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号は ME76 － 2058 である。

4　発掘調査期間、担当者、調査面積（委託者）、遺跡略号は次の通りである。

平成 14 年 4 月 11 日～ 8 月 22 日　高木　晃・早坂　淳・藤原大輔　800㎡（土木部）、947㎡（農林部）

平成 14 年 10 月 17 日～ 11 月 14 日　高木　晃・藤原大輔　142㎡（農林部）　以上、遺跡略号は KT － 02

平成 15 年 4 月 9 日～ 10 月 10 日　金子昭彦・藤原大輔　2,000㎡（土木部）、205㎡（農林部）　KT － 03

5　室内整理と担当者は、次の通りである。

平成 14 年 11 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日　高木晃・藤原大輔

平成 15 年 4 月 1 日～ 10 月 31 日　金子昭彦（10 月 10 日まで野外調査と併行）

平成 15 年 11 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日　金子・藤原

平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日　金子

6　本報告書の執筆は、第Ⅰ章を北上地方振興局土木部、第Ⅱ章第 2 節、第Ⅲ章 1(2) ①～③、2(1)、第Ⅳ章を高木、それ以外を金子が担当し、金子が編集した。

7　遺物の分析・鑑定は次の方々に依頼した。なお、放射性炭素年代については、国立歴史民俗博物館の御厚意で、土器付着炭化物ほかの年代測定も行っている。

石器使用痕分析：株式会社アルカ、花粉・大型植物化石・炭化材樹種分析：古代の森研究舎、

動物骨、炭化植物、炭化種子同定、放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社、石質：花崗岩研究会（代表　矢内圭三）

8　報告書作成に当たり、次の方々に御協力・御指導いただいた（敬称略）。

石川日出志（明治大学）、稲野裕介、君島武史（以上、北上市立埋蔵文化財センター）、小林圭一（(財) 山形県埋蔵文化財センター）、小林謙一（国立歴史民俗博物館）、小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）、鈴木俊成・加藤学・荒川隆史（(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団）、高橋龍三郎（早稲田大学）、田中耕作・鈴木暁（新発田市教育委員会）、冨樫秀之（朝日村教育委員会）

9　調査成果はこれまでに現地説明会資料や調査略報に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

10　本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

11　遺構等の平面位置は、平面直角座標第Ⅹ系を利用している（座標値は第Ⅲ章参照）。基準杭は、日本測地系に基づいて設定したが、当センターの方針により、世界測地系に変更した値を示している。

12　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1990）を参考にした。

13　凡例等は、第Ⅲ章に掲載した。

14　脚注、参考文献はそれぞれの章、節、項の後に記している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　立地と環境……1
1　位置・地形・調査範囲……1
2　基本層序……7
3　これまでの調査と周辺の遺跡……9

Ⅲ　調査・整理の方法と経過……21
1　野外調査……21
2　室内整理と報告書の作成……22

Ⅳ　平成14年度の調査・遺構……27
1　調査結果の概要……27
2　遺構……29
(1) 竪穴住居跡……29
(2) 溝跡……30
(3) 土坑……32
(4) 土器棺墓……51
(5) 焼土遺構……53
(6) 火葬骨埋納遺構……53
(7) 捨て場……53

Ⅴ　平成15年度の調査・遺構……55
1　調査の目的と結果の概要……55
2　調査経過……55
3　調査区ごとの概要……57
4　時代ごとの概要……59
5　検出された遺構……61
(1) 竪穴住居跡……62
(2) 炉跡……63
(3) 焼土……66
(4) 土坑……77
(5) 柱穴状土坑……84
(6) 土器埋設遺構……86
(7) 溝跡……87
(8) 遺物包含層……89
(9) 捨て場……91

Ⅵ　遺　　物……177
1　縄文・弥生土器……178
2　土師器・須恵器……195
3　陶　磁　器……197
4　土　製　品……197
5　石　　器……203
6　石　製　品……211
7　鉄製品・鉄滓……216
8　銭　　貨……216
9　自然遺物ほか……217

Ⅶ　考　　察……242
1　縄文時代晩期末～弥生時代中期土器の型式編年的検討……242
2　縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の製作・使用状況……255
3　縄文時代晩期末～弥生時代前期の石器・石製品……294

Ⅷ　ま　と　め……321
1　縄文時代晩期末～弥生時代中期の金附遺跡……321
2　金附遺跡の歴史……323

Ⅸ　自然科学的分析……325
1　金附遺跡における縄文晩期から弥生時代の植物化石群……327
2　金附遺跡の炭化種子……336
3　金附遺跡の炭化植物遺体……338
4　金附遺跡出土骨の同定……340
5　金附遺跡出土石匙の使用痕分析……345
6　金附遺跡出土礫石器の使用痕分析……354
7　金附遺跡の放射性炭素年代測定……371
8　金附遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定……373

報告書抄録……386

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表……11
第2表　石器集計表……219
第3表　石器・石製品剥片重量集計表……234
第4表　自然遺物等観察表……238
第5表　石質分析試料一覧……299
第6表　石器・石製品法量分析試料一覧……314

図版目次

第1図　岩手県における遺跡位置……2
第2図　遺跡の位置……3
第3図　遺跡範囲と周辺の遺跡……4
第4図　地形分類図……5
第5図　周辺の地形……6
第6図　Ⅴ層上面の地形……8
第7図　周辺の遺跡（晩期～弥生時代中期）……15
第8図　遺構全体図……98
第9図　北～東区検出遺構……99
第10図　東区Ⅴ層上面検出遺構……100
第11図　中央～南東区Ⅲ層上面検出遺構……101
第12図　中央～南東区Ⅳa、Ⅳb、Ⅳc層検出遺構　102
第13図　中央～南東区Ⅴ層上面検出遺構……103
第14図　南西区検出遺構（前年度）……104
第15図　SI01住居跡(1)……105
第16図　SI01住居跡(2)……106
第17図　SD01～SD06溝跡……107
第18図　SD07溝跡……108
第19図　SD08溝跡……109
第20図　SD09～SD12溝跡……110
第21図　SK01～SK04土坑……111
第22図　SK05～SK10土坑……112
第23図　SK11・SK13～SK15・SK17～SK19土坑……113
第24図　SK20～SK25土坑……114
第25図　SK26～SK31土坑……115
第26図　SK32～SK36土坑……116
第27図　SK37～SK42土坑……117
第28図　SK43～SK48土坑……118
第29図　SK49～SK54土坑……119
第30図　SK55・SK56・SK58～SK61土坑……120
第31図　SK62～SK66土坑……121
第32図　SK67～SK72土坑……122
第33図　SK73～SK77土坑……123
第34図　SR01、SR02土器棺墓・SN01焼土……124
第35図　ST02捨て場……125
第36図　ST02捨て場土器出土量分布図……126
第37図　ST03捨て場……127
第38図　縄文時代中～後期遺構全体図（次年度）128
第39図　晩期～弥生時代遺構全体図(1)（東区）（次年度）……129
第40図　晩期～弥生時代遺構全体図(2)（南西区）130
第41図　古代～近世遺構全体図（次年度）……131
第42図　SI02住居跡……132
第43図　SNQ01・02炉跡……133
第44図　SNQ03・04炉跡、SN05焼土……134
第45図　SN02～04・30焼土……135
第46図　SN04、12～27焼土……136
第47図　SN05～11・29焼土……137
第48図　SK78～83土坑……138
第49図　SK84～87土坑……139
第50図　SK88～91土坑、SN28焼土、LⅢ柱穴群……140
第51図　MⅢⅣ柱穴群、SR03土器埋設遺構……141
第52図　縄文晩期以降自然堤防上柱穴群……142
第53図　SD08、13溝跡……143
第54図　SD14～16溝跡……144
第55図　ST01捨て場(1)……145
第56図　ST01捨て場(2)……146
第57図　ST01捨て場(3)……147
第58図　ST01捨て場(4)……148
第59図　ST01捨て場(5)……149
第60図　ST01捨て場(6)……150
第61図　ST01捨て場(7)……151
第62図　ST01捨て場(8)……152
第63図　南東区南部南側土層断面……153
第64図　ブロック別層序模式図(1)……154

第 65 図　ブロック別層序模式図 (2) ……155
第 66 図　ブロック別層序模式図 (3) ……156
第 67 図　ブロック別層序模式図 (4) ……157
第 68 図　ブロック別層序模式図 (5) ……158
第 69 図　ブロック別層序模式図 (6) ……159
第 70 図　ブロック別層序模式図 (7) ……160
第 71 図　ブロック別層序模式図 (8) ……161
第 72 図　ブロック別層序模式図 (9) ……162
第 73 図　ブロック別層序模式図 (10)……163
第 74 図　ブロック別層序模式図 (11)……164
第 75 図　ブロック別層序模式図 (12)……165
第 76 図　ブロック別層序模式図 (13)……166
第 77 図　ブロック別層序模式図 (14)……167
第 78 図　SI01 住居跡、SD03 ～ SD12 溝跡、
　　SK05 ～ SK65 土坑出土遺物 ……168
第 79 図　SK68 ～ 71 土坑、SR01・
　　SR02 土器棺墓出土遺物 ……169
第 80 図　SI02 住居跡 (1) 出土遺物 ……170
第 81 図　SI02 住居跡 (2)、SNQ01 ～
　　SNQ04 炉跡、SN05 焼土出土遺物 ……171
第 82 図　SNQ04 炉跡、SN05 焼土・
　　SN04 焼土～ SN11 焼土出土遺物 ……172
第 83 図　SN13 ～ SN30 焼土・
　　SK80 ～ SK88 土坑出土遺物 ……173
第 84 図　SK89・90 土坑 (1) 出土遺物 ……174
第 85 図　SK90(2)・91 土坑出土遺物 ……175
第 86 図　柱穴状土坑、SR03 土器埋設遺構、
　　SD08 溝跡出土遺物 ……176

＊第 87 図～第 532 図は、第 2 分冊（遺物図版編）にある。

第 533 図　金附遺跡の大洞 A′ 式古土器 ……251
第 534 図　金附遺跡の青木畑式古（大洞 A′ 式新）
　　土器 ……252
第 535 図　金附遺跡の青木畑式新土器 ……253
第 536 図　金附遺跡の谷起島式土器 ……254
第 537 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (1)……257
〳　〳
第 573 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (37) …293
第 574 図　縄文時代晩期の石器組成 (1)……296
第 575 図　縄文時代晩期の石器組成 (2)……297
第 576 図　石質分析グラフ (1)……310
第 577 図　石質分析グラフ (2)……311
第 578 図　石質分析グラフ (3)……312
第 579 図　石質分析グラフ (4)……313
第 580 図　石器・石製品法量分析 (1)……318
第 581 図　石器・石製品法量分析 (2)……319
第 582 図　石器・石製品法量分析 (3)……320

Ⅰ　調査に至る経過

金附遺跡は、主要地方道一関北上線下門岡地区緊急地方道路整備（交付金B）事業の実施に伴い、その事業区域内に存することから、発掘調査を実施することになったものである。

本路線は、通勤及び工業団地への物資運搬の経路になっており、交通量はH2:5,019台／日→H11:8,819台／日と10年間で1.76倍と大幅に伸びている。しかしながら本地区は、緩和区間の不設置かつ曲線長の不足のためにH8～H12までの5年間で事故が58件起きている（内死亡事故1件）。上記理由により、交通の安全と円滑な流れの確保を目的とし、既に着手（H11）している圃場整備事業と調整を計りながら、平成14年度より事業着手予定である。

本地区は、岩手県教育委員会が既に金附遺跡として確認しているため、岩手県教育委員会は、北上地方振興局と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。（北上地方振興局土木部）

Ⅱ　立地と環境

1　位置・地形・調査範囲（第1図～第6図）

金附遺跡は、北上駅の南約3.5km、主要地方道一関北上線沿いにある。北上川と和賀川の合流点から南に約2.5kmに位置し、江刺市との境に近い北上市稲瀬に所在する（第1図～第3図）。

北上川東岸の自然堤防上に立地し（第4図）、遺跡の西限は北上川の氾濫原、東限は段丘崖に沿う後背湿地である。調査で確認された埋没地形を第6図に示した。縄文時代には、東側の幅約40mの広い自然堤防のみが南北に連なり、その西側は北上川の氾濫原、縄文時代晩期末～弥生時代前期には、幅約20mの細い自然堤防が加わって同じく南北に連なり、二つの自然堤防の間は川のように細長い後背湿地となっていたようである。新しくできた自然堤防の西側はやはり北上川の氾濫源になっていた。この自然堤防がいつできたのか？層序からは、縄文時代後期中葉と縄文時代晩期中葉（大洞C2式期）の間としか言えない。

この後背湿地は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の廃棄によってほぼ埋まり、その後9世紀後半までに再び起こった大洪水による砂でほぼ完全に埋まったが、いくらか窪んでいたようである。南北に連なる微高地が二列（東側の方が高い）という地形は近世まで続き、近世には微高地の間の窪みに大溝が掘られた。

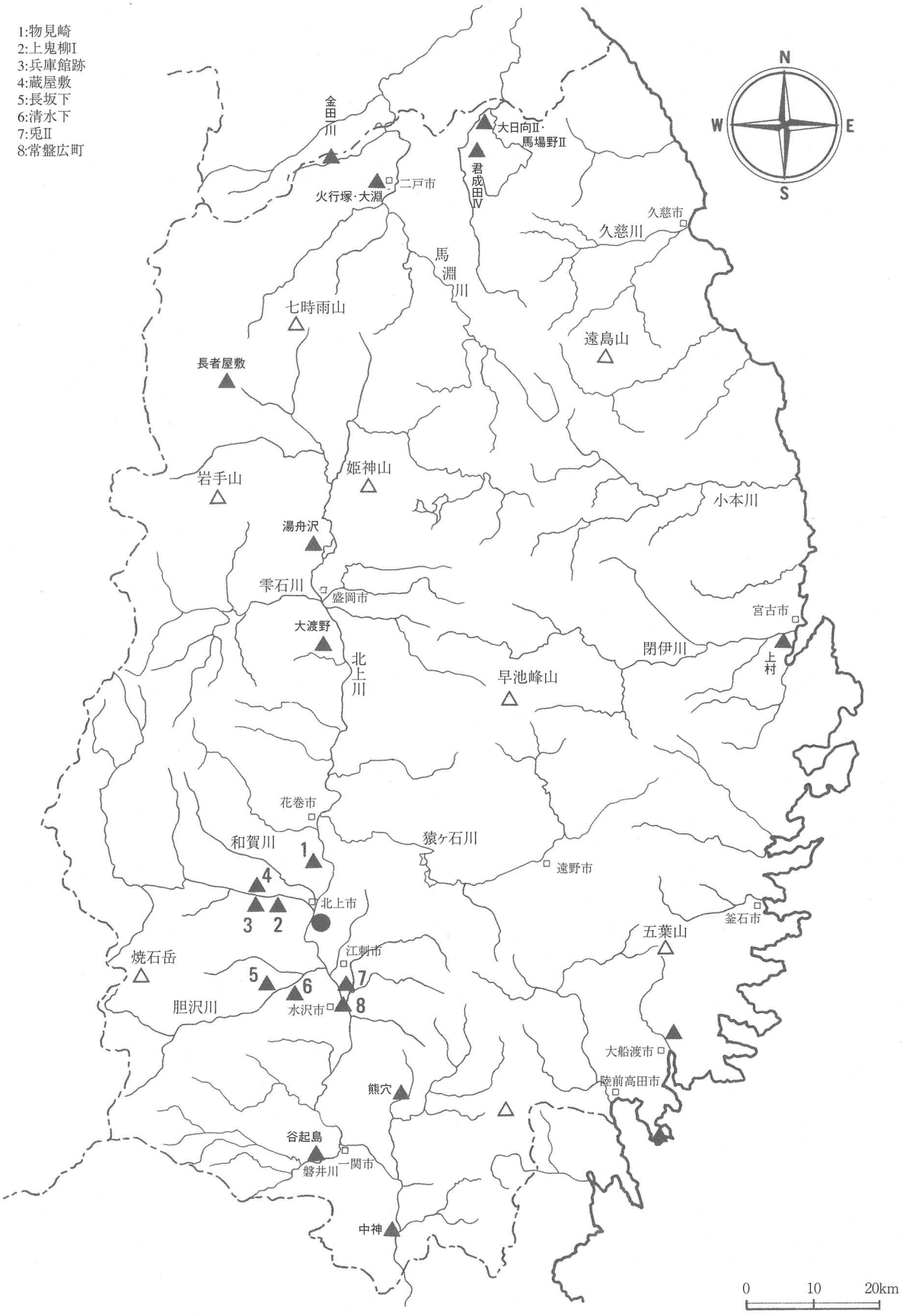
この地形は、調査が行われた遺跡の北側にのみ当てはまり南側は異なっている可能性がある。第3節に記したように、試掘調査では北と南で異なる調査結果が得られているからである。

調査範囲は、遺跡の北端に当たり（第3図）、主体となる道路部分は幅約20mのトレンチを斜に入れた形になる。現況は、第5図に示したように水田であり標高は53m前後である。

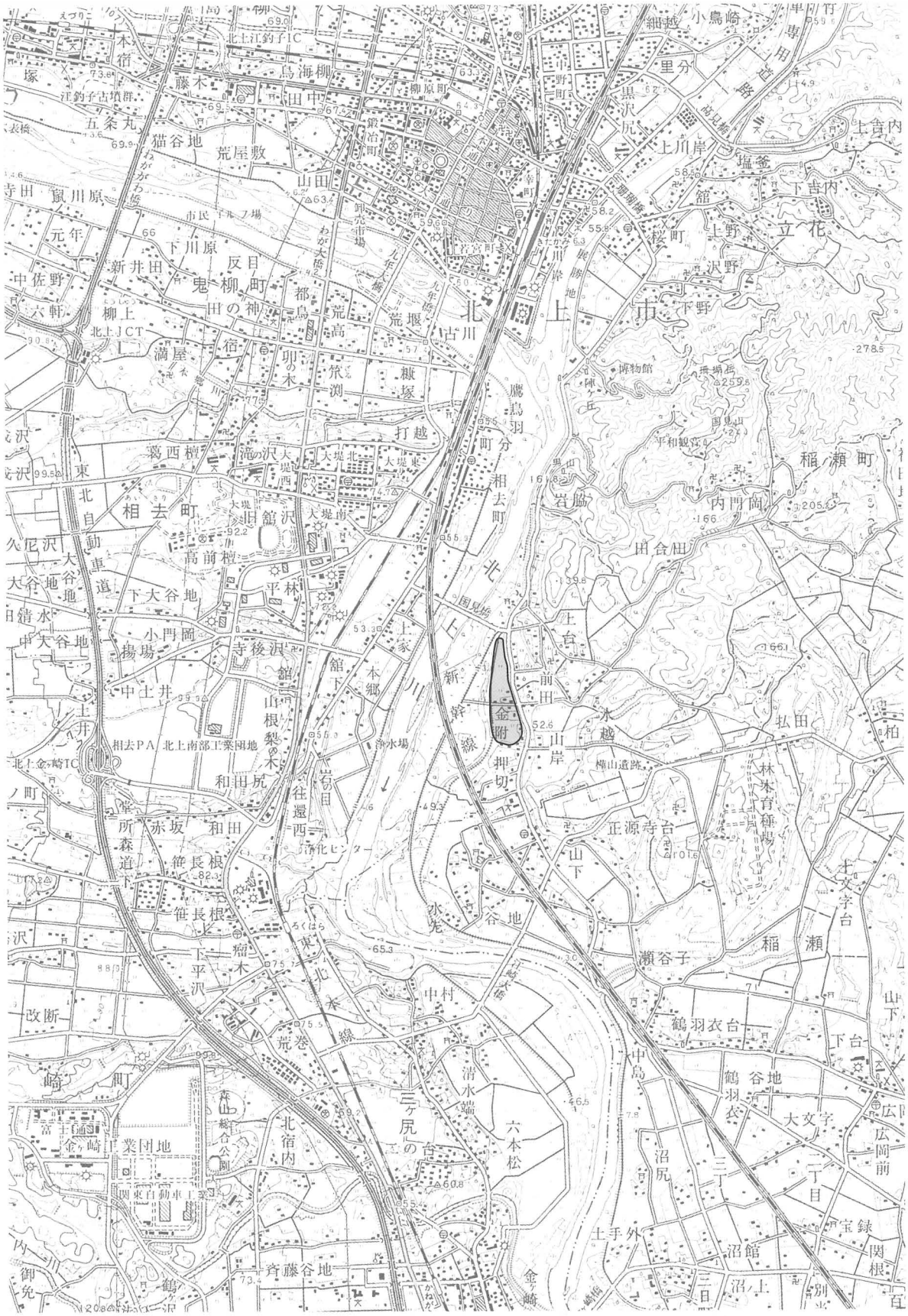
なお、第1図には、岩手県内の著名な弥生時代前半の遺跡を掲げておいた。また、第3図に掲げた周辺遺跡については、第7図の相当遺跡を参照していただきたいが、破線の遺跡および金附遺跡北東の上台という地名と寺院があり範囲が逆三角形を呈する遺跡については、本章第3節（2）の冒頭部分を参照。

参考文献

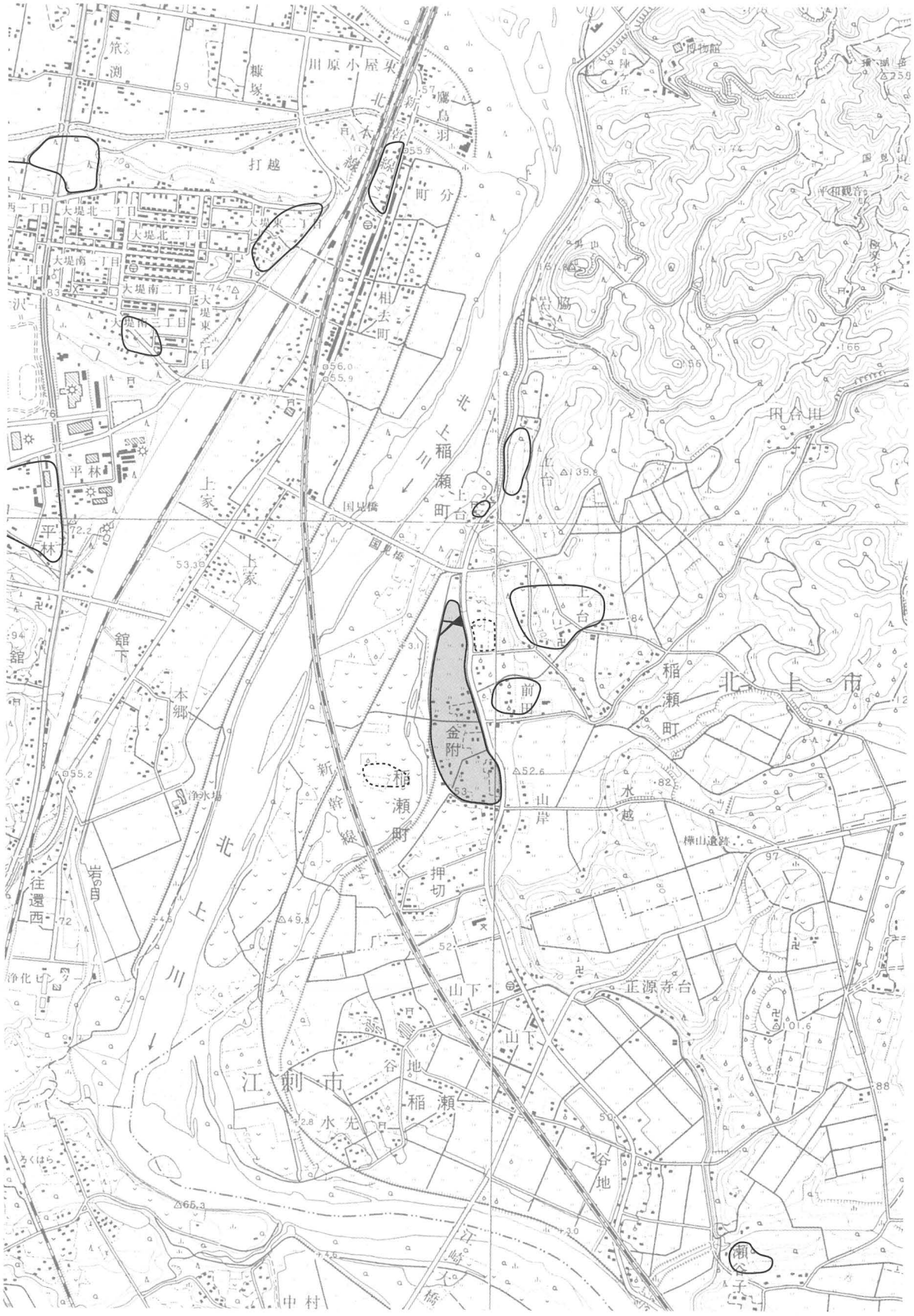
岩手県企画開発室（北上山系開発）　1976『北上山系開発地域土地分類基本調査　北上』



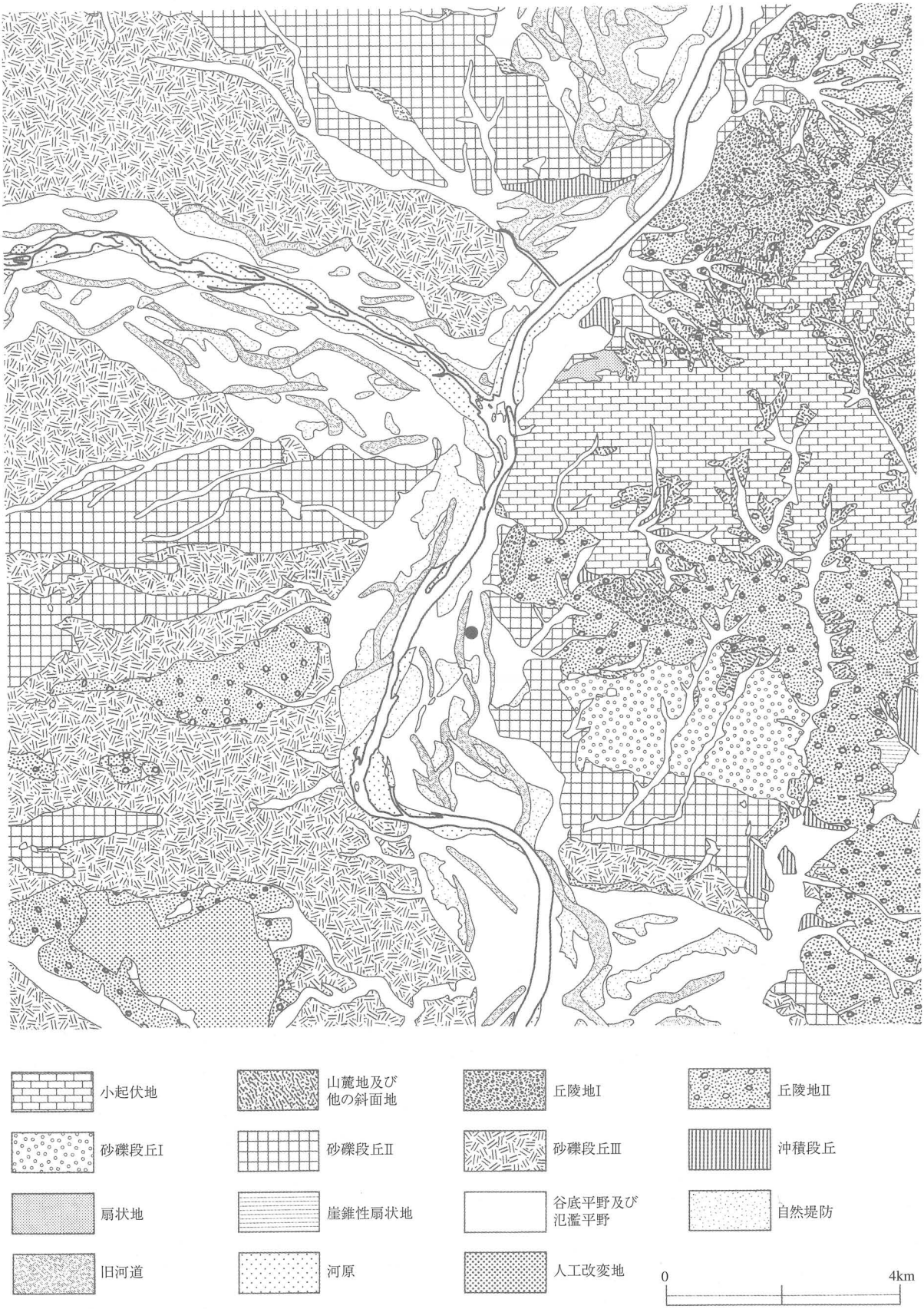
第１図　岩手県における遺跡位置（●印）



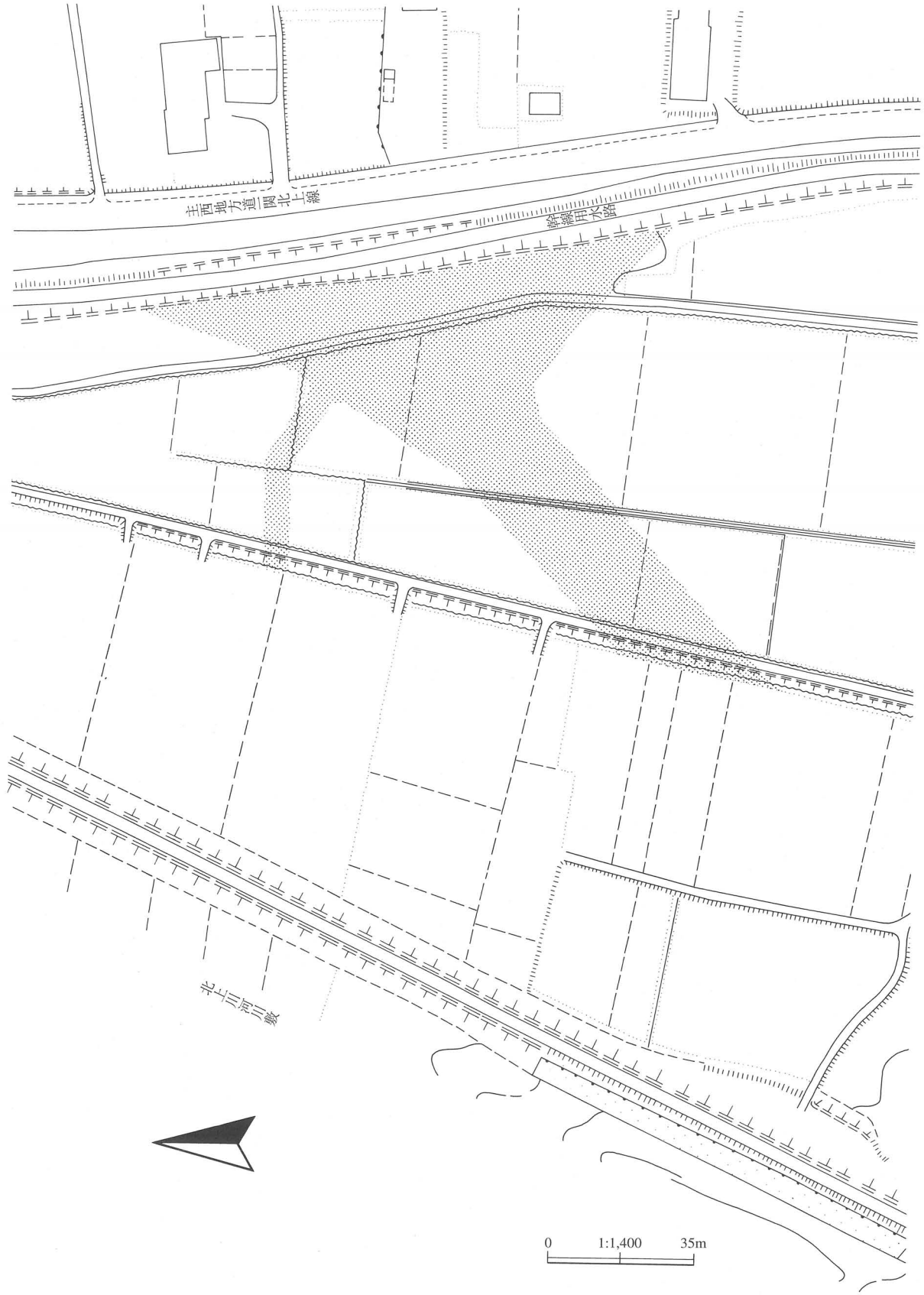
第２図　遺跡の位置（1:50,000　北上）



第３図　遺跡範囲と周辺の遺跡（1:25,000　北上　口内　金ヶ崎　陸中江刺）
（遺跡範囲内北側の黒い部分が調査範囲）



第４図　地形分類図（岩手県（1976）を改変）



第５図　周辺の地形（網がかかっている部分が調査範囲）

2 基本層序

①基本層序

調査区内の各区域で差異があるが、基本的には以下のような堆積状況である。

Ⅰ 層 表土。現在の水田耕作土。底面に床土の酸化鉄層形成。

Ⅱ 層 黒色土～黒褐色土。砂質シルト。やや明色の上部（Ⅱa層）、暗色の下部（Ⅱb層）に区分できる地点がある。下部Ⅱb層は古代の遺物包含。

Ⅲ 層 砂層。洪水堆積層。層厚は最大1mに達する。無遺物層。ラミナ発達。

Ⅳa層 黒色土～黒褐色土。シルト質。縄文時代晩期末～弥生時代初頭遺物包含層。最上部に褐色粘土質層（層厚15～20cm程）が分布する地点がある。

Ⅳb層 褐色土シルト質層、ないし砂層。洪水堆積層。層厚20cm程度（北東部）。南西部では本層が地山となる。

Ⅳc層 黒色土～黒褐色土。縄文中・後期遺物包含層。上部1/3程はより暗色でⅣc1層として区別した地点がある。

Ⅴ 層 砂層。洪水堆積層。層厚は中央部で1m以上。

Ⅵ 層 段丘基盤礫層。

このように北上川の洪水により短期間に堆積したと見られる砂層が複数存在し、それに挟まれるⅡ層、Ⅳa層、Ⅳc層の黒色土～黒褐色土が基本的に遺物包含層となっている。洪水堆積層の時期はⅢ層が弥生時代前期以降、平安時代以前。Ⅳb層が縄文時代後期中葉以降、晩期末以前。Ⅴ層が縄文時代中期末以前、と想定される。

②埋没地形

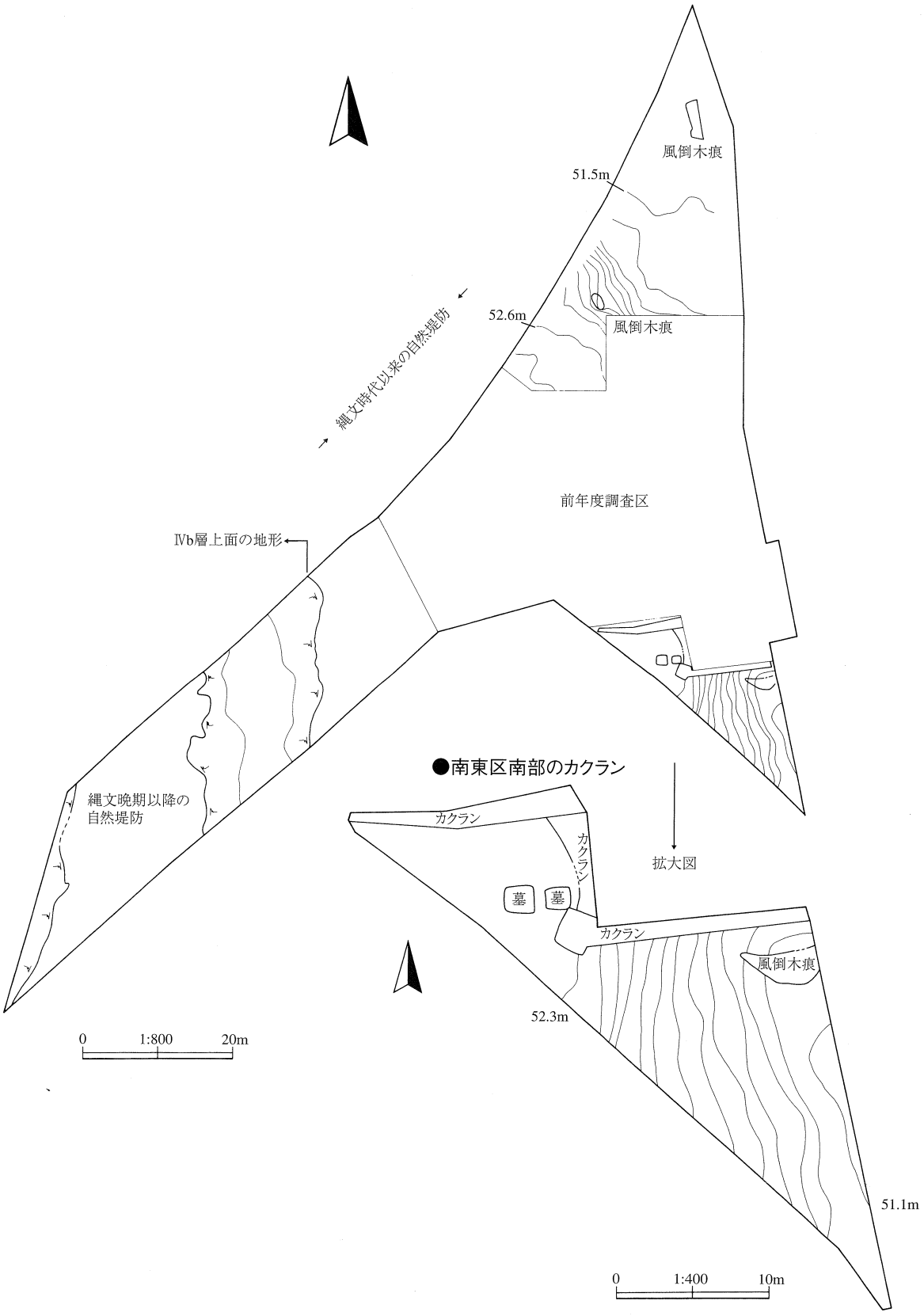
上記の基本層序が見られる地点は調査区を南北方向で東・中央・西と3分割した場合に東側に限られており、中央部と西側では様相が異なる。東側の区域では基盤礫層のレベルが低く、その上位に複数の砂層・粘土層を主体とした自然堆積層と、それらに挟まれた遺物包含層が残存する。概ね上記のⅡ層からⅤ層までが模式的に堆積する地点となる。

一方、中央部では自然堤防状の埋没地形となっており、基盤礫層のレベルが高い。現況の水田はこの自然堤防状の微高地を削平して造成されているため、中央部ではⅠ層の水田床土を除去した時点でⅤ層の褐色土層が露出する地点もある。大グリッドではJⅤ・JⅥ・KⅤ・KⅥグリッドを中心とした一帯が該当する。この付近から東西に向かってⅤ層上面が一定の緩い傾斜で落ち込み、上位に堆積する基本層序の層界もⅤ層上面の傾斜から概ね等間隔となる。このためⅠ層下面では、中央部にⅤ層が帯状に分布し、そこから東西に向かい基本層序順にⅣc層、Ⅳb層・・がそれぞれ南北に細長い帯状に露出する状況が観察できる。

また、西側では前述のようにⅣb層とⅤ層が連続すると見られ、Ⅳc層が分布しない。南西側調査区ではⅣb層上位にはST01として精査を行った弥生時代初頭の捨て場が厚く堆積する。北西側調査区ではⅣb層が急傾斜で西に向かって落ち込んでおり、この上位にST03とした弥生時代初頭の捨て場が分布する。Ⅳc層以下は確認していない。

③遺構検出面

遺構検出は以下のように各層界で可能であるが、実際に検出作業を行った面は第1面のⅢ層上面、第3面のⅣb層上面、第5面のⅤ層上面が主体である。



第６図　Ｖ層上面（最終地山面）の地形

第1面　Ⅲ層上面。古代～中近世の遺構検出。
第2面　Ⅳa層上面。弥生時代初頭以降の遺構検出。ST01 ～ 03の捨て場範囲も同面で確認している。
第3面　Ⅳb層上面。縄文時代晩期末～弥生時代初頭遺構検出。
第4面　Ⅳc層上面。南西部の一部のみで同面での検出作業を行った。黒色土中に上位Ⅳb層自然堆積層が落ち込む状態で遺構プランが確認される。
第5面　Ⅴ層上面。縄文時代中期末～後期中葉遺構検出。中央部のⅤ層以上が削平されている区域では各時代の遺構が同面で混在して検出されている。

3　これまでの調査と周辺の遺跡

(1) これまでの調査

通常の遺跡立地より一段低く現況が水田であることもあり、本遺跡が遺跡として登録されたのは最近のことである。今回の事業に伴う事前調査で初めて遺跡として登録されたのだが、分布調査の時点では遺跡としては確認できず、平成13年10・11月に行われた県教育委員会による試掘調査では、遺跡名はなく、あくまで遺跡の「可能性ありの地点」にとどまっていた。しかし、この試掘調査で明確に埋蔵文化財が確認され、平成14年1月に行われた追加調査では既に金附遺跡の名称が付けられている（北上市教育委員会の命名）。

これらの試掘調査の結果は、文献70にまとめられ、南東方向の宅地が集中している部分を除いて遺跡のほぼ全域に幅約160cmのトレンチが109本設定されている。その結果、南北で異なる様相が見られ、第3図の金附遺跡の北東部分に破線で示した遺跡のすぐ南で県道が「く」字状に屈曲する部分があるが、そこを境に、それより北では縄文時代～弥生時代初頭の遺構と遺物、南では平安時代の遺構と遺物が確認されている。破線遺跡の南に隣接する道路の延長上で遺跡範囲幅の中央付近に位置するトレンチからは、弥生時代前期の大型壷と浅鉢の合わせ口土器棺が出土している。

平成14年3月には、試掘調査で遺構が確認された部分に砂利敷きの農道の敷設が決定したため、県教育委員会が遺構確認調査を行っている（文献71）。第3図遺跡範囲中央を横断する道路のすぐ北で、北東方向から斜めに県道に接続する道路のほぼ延長方向にあり、遺跡範囲幅の中央付近に位置する（文献70の試掘トレンチ1を東西に延長して南北に縦断する道路、地境に－状に接続）。調査面積は約270㎡で、平安時代の竪穴住居跡1棟、時期不明の土坑1基、溝跡1条が検出されている。竪穴住居跡のカマド部分から土錘1点と「佛」と線刻された砥石が1点出土した。

(2) 周辺の遺跡

以下は、平成16年4月に当センターの図書室にある既刊の報告書と平成12年度版の岩手県の遺跡台帳（CD-ROM）に基づいて作成した。作成後に平成15年度版の遺跡台帳（CD-ROM）が配布され、周辺の遺跡が幾つか追加されていることを知った。しかし、ほとんどが分布調査によるものなので詳細は不明で、あえて追加訂正は行わなかった。ただし、弥生土器が近接した遺跡で出土しているので、第3図には含めておいた。金附遺跡北東の上台という地名と寺院があり範囲が逆三角形を呈する遺跡がそれで、安楽寺遺跡と言い、分布調査の結果縄文、弥生土器、土師器、須恵器が出土しているようである。平成14年度に新規に登録された。第3図のその他の周辺の遺跡については、第7図の相当箇所の遺跡を参照していただきたいが、逆に、

第7図21の遺跡は、平成15年度版にも登載されておらず範囲が不明なので-第3図の図幅内ではあるが-記入しなかった。なお、第3図の破線の遺跡は、縄文土器が出土したのみで、金附遺跡で主体となる縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺物は出土していないが、隣接しており今後の調査で出土する可能性もあるので、図示した。北東側の遺跡は、前田遺跡で、平成9年度に登録、縄文土器、剥片が出土している。南西の遺跡は、中谷起遺跡、平成9年度登録、縄文土器が出土。さらに、図示はしなかったが、本遺跡の南に隣接し、県道に沿って本遺跡と同様の広がりを示す遺跡が平成13年度に新規登録されている。境遺跡と言い、土師器・須恵器が出土し平安時代の遺跡と確認されているが詳細は不明である。その広がりから、本遺跡同様自然堤防上に立地しているものと思われる。

今回の調査で、金附遺跡からは、縄文時代中期末、後期中葉、後期後葉、晩期～弥生時代前期、古代、中世、近世の遺構、遺物が出土した。晩期は末葉がほとんどである。以下、各時期ごとに周辺の遺跡を見ていくが、多くのものが出土した時期を重点的に扱う。

金附遺跡を考える上で特に重要なのは、牡丹畑遺跡である。金附遺跡と同様の立地を示し、中期末が見られず、大洞C2式を主体とする以外は、金附遺跡と同様の出土傾向を示している。

(a) 縄文時代中期末、後期中葉、後葉の遺跡

今回の調査で、中期末は、竪穴住居跡も検出されている。Ⅳc層は中期末と後期中葉の遺物包含層で、平成14年度の調査区で特に多く、土坑も検出されている。後期後葉は、ほんの僅かの出土である。

・中期末の遺跡

北上市は、中期前半（第1表18・28・63・94など）や後期初頭（第1表2・11）の名だたる遺跡が多いが、その間の中期末は意外にもあまり振るわない。

金附遺跡の南東約1.5kmに国指定史跡樺山遺跡がある（第7図）。大木7b～8a式期の住居跡の上に大木8b式～後期初頭の配石遺構が作られているようだが（高橋ほか　1996:p.63）、該期の土器はやはり少ない（文献1ほか）。金附遺跡の南約1.5kmには、江刺市五十瀬神社前遺跡がある（第7図127の北）。金附遺跡同様自然堤防上に立地する小規模な集落跡で、土偶や斧状土製品なども出土している（文献59）。その南の瀬谷子遺跡（第7図127）でも該期の土器片が出土している（文献59）。対岸国見橋たもとにある八木畑遺跡でも、土器片が発見されている（文献60）。約2km北の対岸にある鬼柳西裏遺跡は（第7図25）、自然堤防上の小規模集落である（文献61）。その北の館Ⅳ遺跡も（第7図19）、河岸低地～沖積段丘に立地する小規模集落のようだが（文献95）、人体文付土器が出土している。大規模な集落跡は、対岸の段丘上の柳上～上鬼柳Ⅳ遺跡（第7図46、47）に見られるが、後期初頭まで継続する（文献82・100）。

・後期中葉の遺跡

岩手県一般に当てはまるように（おそらく東北地方北部全体に。ただし青森県はやや多いか）（金子2001:p.60）、この時期の遺跡は少ない。上川岸Ⅱ遺跡で比較的多くの土器が出土し（第7図22）、竪穴住居跡や土坑も検出されている。牡丹畑遺跡（第7図23）、横欠遺跡（第1表2）、八天遺跡（第1表11）、草刈場遺跡（文献18）などにも見られるが、臥牛遺跡で最も多く出土している（文献1）。

・後期後葉の遺跡

後期中葉よりさらに少なく、幾つかの遺跡で土器が散見される程度で（第1表1・38・46・70・75）、七折遺跡が最もまとまっているか（第1表90）。金附遺跡でも土器片が数点出土しただけなので、詳述しない。

(b) 縄文時代晩期～弥生時代前期の遺跡（第1表、第3・7図）

今回の調査で出土遺物の大半を占めた時期だが、晩期末以前の出土は少ない。前後の時期を含めた晩期初

第１表　周辺の縄文時代晩期～弥生時代前期遺跡一覧表　（（　）内は地名で遺跡名ではない）

No.	遺跡名	所在地	立　地	遺跡の性格・遺構・遺物	調査→機関・年号(㎡)	備　考	文献
1	臥牛	北上市	自然堤防上	瘤Ⅰ、Ⅱ、B～A（C2主）・土偶（後半主）・独鈷石	市 S40（トレンチ）		1
〃	〃	〃	〃	C2 土偶	市 S46（約 200）		5
2	横欠	北上市	段丘	土坑（A３、A′１）・C1？、A～A′（A′主）土器	市 S54（500）		35,38
3	外山	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
4	大竹廃寺跡	北上市		BC ？土器片	市 S61（確認）	市史に大竹出土のC2、A1式土器	1,20
5	堀ノ内	北上市	微高地	山王Ⅲ層式土器	県 S50（2,400）		60
6	成田	北上市	中位段丘	C2～A 土器片（鉢、深鉢）	市 H1～2（2100?）	市史に遮光器土偶	1,27,30
7	坊館跡	北上市	中位段丘	住（前？１ほか１）、屋外炉１？、焼１？、坑（晩１）・B土器片	セ S63(1,360)	県台帳二子城	77
8	加賀館	北上市	中位段丘上	C2 ？土器片	市 S60（確認）	県台帳二子城	18
9	物見崎	北上市	中位段丘	竪穴住居跡（A′新）・A′ 土器・刺突文土偶５点	セ H1(1,945)	県台帳二子城	81
10	馬場野	北上市	中位段丘	土坑(C2～A′ ？５？)・C2～A′土器片	市 H3（3,000）	県台帳二子城	29
11	八天	北上市	段丘	C1 式土器片	市 S50～52（？）		9,11
12	神行田	北上市		大型遮光器系統 C2 式土偶頭部			1
13	鴻ノ巣Ⅰ	北上市		環状石斧			1
14	黒岩宿	北上市	自然堤防	A′～山王Ⅲ層式土器	市 H12（確認）	マンホール部分のみ本調査	41
〃	〃	〃	〃	土坑？・C2～A土器	セ H13（4,681）		111
15	（下川端）	北上市		A2～A′土器片		千刈遺跡のこと？・「川端」出土品も	1
16	中居俵Ⅱ	北上市	低位段丘	C2～A式土器片	セ H11（800）		109
17	野田Ⅰ	北上市	自然堤防上	C2～A′土器片	県 S51（3,000）	市史にも「野田出土」土器あり	1,60
18	横町	北上市	中位段丘	C2、A′土器？	セ H6（1,980）		106
19	館Ⅳ	北上市	河岸低地	A～A′ 土器片（鉢、浅鉢？）	セ H1～3（8,952）		96
19b	妻ノ木	北上市		（詳細不明）		館Ⅳ遺跡とほぼ同一地点	3
20	立花南	北上市	沖積地	C2 ？土器片	県 H14（約 40）		71
21	あいの沢	北上市		（詳細不明）			3
21b	(岩脇１～３トレンチ)	〃		A土器片	市 S58（確認）	遺跡名なし・21 に隣接	14
21c	(博物館周辺)	〃		土坑・山王Ⅲ層式土器	市 S59（確認）	遺跡名なし・21 に隣接	16
22	上川岸Ⅱ	北上市	河岸低地	住（A１）、坑（A１）・C2～A土器	セ S63～H1（5,300）		80
23	牡丹畑	北上市	自然堤防	B～A（C2主、前ほとんどない）・独鈷石、石冠、岩版、石剣類		A′古土器あり？	1
〃	〃	〃	〃	C1～2 土器片	市 S62（確認）		22
〃	〃	〃	〃	古代遺構覆土からほぼ完形の石刀	市 S63（約 120 ？）		24
〃	〃	〃	〃	土坑（中葉、末～弥生初頭）、炉（中葉）、埋（初頭、弥生前期）・C2多、土偶他	市 H13（290）	山王Ⅲ層式土器、サメ歯、ヒスイ勾玉	44
24	九年橋	北上市	湿地	住（BC～C1l、C2～A2？）・坑（晩9）・ソバ・C2～Aを中心にした多種・多量遺物	市 S48～61（1,398）	7,8,10,12,13,15,17,19,21,28,115	←
〃	〃	〃	〃	土坑（後半７）・BC～A・結髪土偶	県 H8（20 ？）		68
24b	大曲南	北上市	自然堤防上	C2～A 土器・土偶？		九年橋遺跡に相当	3
25	鬼柳西裏	北上市	自然堤防	山王Ⅲ層式土器	県 S50～51（4,400）		61
26	南舘	北上市	中位段丘端	晩期集石？・BC（鉢）、C2（粗製深鉢）？破片	県 S48（4,660）		61
27	本宿	北上市	低位段丘	C1（壷）	市 H3（270）		31
〃	〃	〃	〃	晩期末土器片？	市 H7（150）		36
28	鳩岡崎	北上市	中位段丘？	フラスコ状土坑（前1、中1）・B（鉢）？、BC（浅鉢、鉢）、C1（鉢）	県S48～51(5,000？)		64
29	藤沢	北上市	中位段丘？	弥生中期土器片？	県 S49（1,600）		65
〃	〃	〃	〃	A～A′土器片	市 H63(不明)		23
〃	〃	〃	〃	Aフラスコ？・A土器	市 H1（約 4,600 ？）		33
30	堰ノ下	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
31	平和観音堂	北上市	丘陵端	「後～晩期と思われる土器片が採集」			53
32	北藤根	北上市		「晩期土器」			53
33	上中野	北上市	低位段丘	「晩期中葉の注口土器と思われる破片」			53
34	蔵屋敷	北上市	低位段丘	山王Ⅲ層式土器、岩偶	村 S56～57（確認）		48
〃	〃	〃	〃	山王Ⅲ層式土器片	県 H14（約 160）		71
35	念仏車	北上市		弥生前期末～中期土器		蔵屋敷遺跡の続き	53
36	下長沼	北上市		「晩期の土器片が採集されたという」		念仏車遺跡の続き？	53
37	一本柳	北上市	低位段丘	Ｃ２壷	分布		53
38	飯島	北上市	自然堤防上	瘤Ⅰ、C1、A・晩期後葉小型土偶	分布		53
〃	〃	〃	自然堤防上	坑（中1、後1ほか7）・B～A土器（C2主）、岩版、土版、石剣	市 H4～5（598）		34
〃	〃	〃	段丘上	A2 式土器片	セ H12（435）		110
39	千刈田	北上市	低位段丘	C1～A（C1、C2 注口）土器	分布		53

No.	遺跡名	所在地	立　地	遺跡の性格・遺構・遺物	調査→機関・年号（㎡）	備　考	文献
40	鍛冶屋	北上市	段丘	山王Ⅲ層式土器？	分布		53
41	畑中	北上市		「晩期土器片が採集されたという」			53
42	上長沼Ⅱ	北上市		「晩期の土器片が採集できたという」		県台帳では上長沼	53
43	鳥谷脇Ⅱ	北上市	低位段丘	C1（浅鉢）	町 H1（3,000）		50
〃	〃	〃	〃	弥生前期土坑２	町 H2（7,000）		52
44	大橋	北上市	扇状地端	住居、盛土遺構、配石・C2式を中心にした多種、多量遺物	セ H14 ～ 15（6,494）	遺物組成九年橋に似・今年度報告書刊行	112,113
45	田屋	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
46	柳上	北上市	低位段丘	B、BC、C2 ～Ａ′土器（Ａ主）、弥生中期？土器	セ H1 ～ 3（4,930）		101
47	上鬼柳Ⅳ	北上市	低位段丘	フラスコ状（前２、弥前１ほか）・B～C1、A、弥生中～後期土器	セ H2（9,190）		83
48	上鬼柳Ⅲ	北上市	中位段丘	土坑（末）・C1,A ～ A′ 破片	セ H2(8,370)		84
49	上鬼柳Ⅱ	北上市	中位段丘	A 破片	セ H2(300)		84
50	上鬼柳Ⅰ	北上市	低位段丘	焼（弥初１）・坑（弥初２）・埋（弥初１）・B～BC、C2～Ａ′破片	セ H2 ～ 3(8,700)		91
51	六軒	北上市		「縄文土器（晩期）」		上鬼柳Ⅰ～Ⅳに相当？・県台帳から	－
52	岩崎台地遺跡群	北上市	段丘	C2（鉢、深鉢）、A（ほ完高坏、浅鉢）、A′（浅鉢？）（A主）	セ S63 ～ H3(46,267)		102
〃	〃	〃	低位段丘	弥生前期～後期土器片	セ S63 ～ H2(15,047)		90
53	梅ノ木第Ⅲ、Ⅵ区	北上市	低位段丘	BC（鉢）土器片	県 S49～50(4,000？)	県遺跡台帳「岩崎城」に相当	62
54	岩崎城西	北上市	低位段丘	B、C2 ～ A（少）、山王Ⅲ層？土器	セ H1（5,550）		78
55	梅ノ木台地Ⅰ	北上市	低位段丘	B1（注口？）、BC（台付鉢）破片	セ H1 ～ 2(9,000)		85
56	梅ノ木台地Ⅱ	北上市	低位段丘	弥生墓・焼（弥前？）・坑（弥？）・埋（末～弥初）・BC、A′～弥生後期土器	セ H3(3,890)		92
57	兵庫館跡	北上市	低位段丘	弥生墓地・屋外炉、墓、埋３、配石・C1、A～弥生後期土器、遠賀川系	セ H1、3(3,130)		92
58	上反町	北上市	？	C1 深鉢	セ H2、3（4,710）		93
59	煤孫	北上市	低位段丘	Ａ土坑墓？・A2 式土器	セ H2 ～ 3（15,560）		98
60	法量野Ⅰ	北上市	中位段丘	坑（C1 ？１ほか２）？・C2 ～Ａ′土器（Ａ′主）	セ H2、3（9,990）		94
61	中屋敷	北上市	中位段丘	貯蔵欠様土坑（末２、弥前９ほか１）・C2 ～弥生後期土器	セ H3（6,080）		94
62	林崎館	北上市	中位段丘	C2 土器片（台付鉢？）	セ H2（14,150）		86
63	本郷	北上市	中位段丘	弥生前期墓・BC～C1 破片、弥生前～中期土器、動物意匠、岩版、石剣類？	セ H1、2(15,490)		87
64	石曽根	北上市	中位段丘	住（Ａ～Ａ′ １）、坑（中～後１）・C2 ～弥生前期土器	セ H1 ～ 2（3,150）		88
65	月館跡	北上市	段丘	弥生土器片？	セ H1（3,590）		79
66	八幡館跡	北上市	段丘	前期土坑？・前期土器、土偶、独鈷石	セ H1（3,820）		79
67	八幡野Ⅱ	北上市	低位段丘	B（浅鉢）、A（深鉢片）	セ H1 ～ 3（58,070）		95
68	田中館跡	北上市	低位段丘	埋設土器・C1（埋設土器のみ）	セ H1 ～ 2（5,980）		89
69	千手堂	北上市	河岸平野？	C2 ～ A′ ？破片（鉢、台付鉢、瓶）	セ H4（6,900）		99
70	羽黒山麓Ⅱ	北上市	低位段丘	土坑？（C2 ？）・C2 ～Ａ土器	セ H4（4,300）		99
71	羽黒山麓Ⅰ	北上市	低位段丘	B（粗製深鉢）	セ H4（3,900）		99
72	馬場館	北上市	段丘	A（甕、高坏）	セ H5（5,200）		100
73	新田真平	北上市	台地先端部	山王Ⅲ層式土器片？			51
74	小吹野	北上市	段丘	Ｂ（鉢）、C2（甕）	セ H5(5,400)		100
75	田代	北上市	段丘・川そば	瘤Ⅱ、C2 ～ Ａ・結髪土偶			51
76	鳥屋森	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
77	岩沢Ⅱ	北上市		「晩期土器片」			51
78	岩沢Ⅰ	北上市		￠晩期土器片」			51
79	下岩沢Ⅰ	北上市	下位段丘	C1 破片	セ S62(3,832)		75
80	下岩沢Ⅲ	北上市	舌状台地	C2 土器片			51
81	下岩沢Ⅳ	北上市	舌状台地	赤石Ⅱ遺跡の説明の所に「晩期土器片が採集」とある。			51
82	下岩沢Ⅴ	北上市	段丘	「晩期土器片が採集されたという」			51
83	赤石Ⅱ	北上市	舌状台地	「晩期土器片が採集されたという」			51
84	人当Ⅰ	北上市	低位段丘	縄文前～晩土坑？・C2 ～Ａ？土器片	セ H3（400）		97
85	人当Ⅱ	北上市	段丘縁辺	C2 土器片			51
86	土場	北上市	低位段丘	B1 土器破片	セ H5（570）		103
87	荒屋沢	北上市	沢岸	C1 赤彩壷			49
88	望野Ⅰ	北上市	扇状台地	C2 瓶？			49
89	蒲沢	北上市	丘陵斜面	「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
90	七折	北上市	段丘上	瘤Ⅰ～Ⅲ、BC（注口）、C1（鉢）、C2？（鉢？）・人面付注口土器？	町 S63（72）		49
91	成沢Ⅱ	北上市	中位段丘	B1 新、Ａ土器片	市 H9（2,000）		39
92	下成沢Ⅰ	北上市	中位段丘	C1 ～Ａ′？土器	県 S47（1,200）		65
93	丸子館	北上市	低位段丘	住居（C2）？	市 S47（？）他		4

No.	遺跡名	所在地	立　地	遺跡の性格・遺構・遺物	調査→機関・年号（㎡）	備　考	文献
〃	〃	〃	〃	C2 土器	市 S53～55（トレンチ）		4
94	滝ノ沢	北上市	中位段丘	台付鉢台部（前葉？）（実測図版三五）	市 S59（確認）		26
〃	〃	〃	〃	土坑（前葉）・B～BC 土器、土偶？	市 H9（450）		40
〃	〃	〃	〃	BC～C1 土器片	市 H13,14（934）		43
95	蒼前森	北上市	段丘上	C2～A 土器片	市 S56（2,000）		37
96	（平林）	北上市		独鈷石		南部工業団地内遺跡に含まれる	1
96b	南部工業団地内	北上市	中～低位段丘	BC、C2～A′土器	市 63～H1（？）		32
97	（山根）	北上市		B2～BC 土器		相去城？	1
98	上大谷地	北上市	中位段丘	C2 土器片？	県 S47（2,500）		65
99	和田尻	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
100	和田前	北上市		B～A 土器、大型遮光器土偶、土版、耳飾り、石剣類	市 S39（トレンチ）		1
101	新田Ⅳ	北上市		市史に口内町新田出土の B2 式土器片		県遺跡台帳	1
102	新田Ⅰ	北上市				県遺跡台帳	1
103	新田Ⅲ	北上市				県遺跡台帳	1
104	新田Ⅱ	北上市				県遺跡台帳	1
105	長洞	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
106	宝積Ⅱ	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
107	茶畑	北上市		「縄文土器（晩期）」		県遺跡台帳から	－
108	八王子森館	北上市		A′土器			1
109	岩脇	北上市	中位段丘	弥生前期土器破片（台部）	セ H6（1,800）		105
〃	〃	〃	〃	C2 土器片？	市 H7（100）		36
110	斉羽場	北上市		C2 土器片ほか	県 H3（試掘）		66
111	金附	北上市	自然堤防			今回報告	112,113
〃	〃	〃	〃	晩期後葉～弥生前期土器片	県 H14（270）		71
112	相田	北上市	段丘上	BC～弥生前期土器（中葉主）、石刀、独鈷石			1
〃	〃	〃	〃	BC～A 土器片・石剣類	市 S60（確認）		18
〃	〃	〃	〃	晩期末～弥生前期土器片	県 H11（試掘）		69
113	（上寒田清水西）	北上市		A′式土器破片		相去町・位置不明	114
114	（大谷地）	北上市		晩期末～弥生土器片		相去町・位置不明	114
115	千貫石Ⅰ	金ヶ崎町		A′土器片			114
116	千貫石Ⅱ	金ヶ崎町		A土器片			114
117	千貫石Ⅳ	金ヶ崎町		A式土器片	町 S48（810）		54
118	稲沢	金ヶ崎町		変形工字文土器片			114
119	萱刈場	金ヶ崎町		BC、A′～山王Ⅲ層式土器片			114
120	長坂下	金ヶ崎町		合わせ口甕棺・山王Ⅲ層式中心			114
121	（笹森西）	金ヶ崎町	段丘	A～A′式土器片、独鈷石未製品？		県台帳では笹森遺跡	114
122	柏山館跡	金ヶ崎町	高～低位段丘	C2 土器片	セ H4～6（6,713）		107
122b	館山	金ヶ崎町		C2 土器片	セ S55（18,385）	柏山館跡の一部	74
123	清水畑	金ヶ崎町	低位段丘	瘤Ⅳ～A′土器（BC 主）			114,117
124	取場石	金ヶ崎町	「沖積地」	晩期末～弥生初頭土器片			114
125	上餅田	金ヶ崎町	低位段丘	BC（台付鉢、注口？）土器片	県 S49～50（5,600）		63
126	（稲瀬付近）	江刺市		変形工字文土器片		稲瀬古墳群に相当？	115
127	瀬谷子	江刺市		C2 土器片	県 S49（2,400）		59
128	鶴羽衣台	江刺市	自然堤防	C2～A 土器片	県 S49（960）		59
129	沼の上	江刺市	沖積台地	山王Ⅲ層式土器	セ S52（確認）	2,000㎡ 調査	72
130	宮地Ⅲ	江刺市	沖積台地	A′式半完形半精製鉢	市 H10（1,523）		57
131	反町	江刺市	自然堤防	竪穴住居跡（B、弥生前期）、水田跡（弥生前期？）	市 H11～12（9,000）		58
132	朴の木	江刺市	沖積微高地	「表採として、1、2片」（p.232）の弥生土器	セ S53（1,440）		73
133	落合Ⅱ	江刺市	沖積微高地	弥生前期浅鉢？（図版 43）	県 S49（2,420）	県遺跡台帳「落合遺跡」に統合	61
133b	落合Ⅲ	江刺市	沖積微高地	「表採として、1、2片」（p.232）の弥生土器	セ S53（1,440）	県遺跡台帳「落合遺跡」に統合	73
133c	落合Ⅰ	江刺市	沖積微高地	弥生時代前期土器片？	県 S49（2,560）	県遺跡台帳「落合遺跡」に統合	59
133d	落合遺跡第1地点	江刺市	沖積微高地	C2～弥生前期土器（蓋も）	県 H4（試掘）	県遺跡台帳「落合遺跡」に統合	67
134	兎Ⅱ	江刺市	沖積微高地	弥生前～後期土器・籾圧痕土器（弥生前半壷内面）	セ S53（2,640）	県遺跡台帳「力石・兎Ⅰ遺跡」に統合	73
135	力石Ⅱ	江刺市	沖積微高地	弥生前期浅鉢	セ S53（2,160）	県遺跡台帳「力石・兎Ⅰ遺跡」に統合	73
136	松川	江刺市	自然堤防	C2 土器片、弥生前～後期土器	セ S63(1,130）		76
137	下醍醐	江刺市	谷底平野	墓壙（A？）？・A？土器	セ H10（4,600）		108

頭～弥生時代中期について周辺の遺跡を詳しくみていく。

北上市についてはできるだけ網羅したが、金ヶ崎町、江刺市については、金附遺跡付近以外は、調査した遺跡と採集量の比較的多い代表的な遺跡だけを取り上げた（第1表、第7図）。番号は、原則として北から南につけているが、北上川を和賀川の合流点まで下り、その後和賀川を西に遡り、その南側を再び下ってきて、北上川の合流点の西側を南下した後、東側を南下。北上市内はここまでで、その後再び対岸の金ヶ崎町の西側の標高の高い方から東に下ってきて、北上川の対岸の江刺市に入り南下している。以上が原則だが、あまり川の両側を行ったり来たりしないように付けている。第7図の●は、今回の調査で出土した晩期中葉大洞C2式～弥生時代前期山王Ⅲ層式までの土器が確認された遺跡で、▲は、それ以外の晩期初頭～弥生時代中期の遺跡である。

第1表の遺跡の性格・遺構・遺物の欄は略記し、時期を示す瘤付土器第Ⅰ～Ⅳ段階（高柳圭一　1988）は瘤Ⅰ～Ⅳ、大洞B～A′式（山内　1930）はB1～A′とした。「ほ完」はほぼ完形の略である。調査→機関・年号（㎡）の欄は、調査の有無を示し、調査機関・調査年号（調査面積）を記している。市、町、村は市町村教育委員会、県は県教育委員会、セは（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターである。文献は、本文の最後にまとめている。

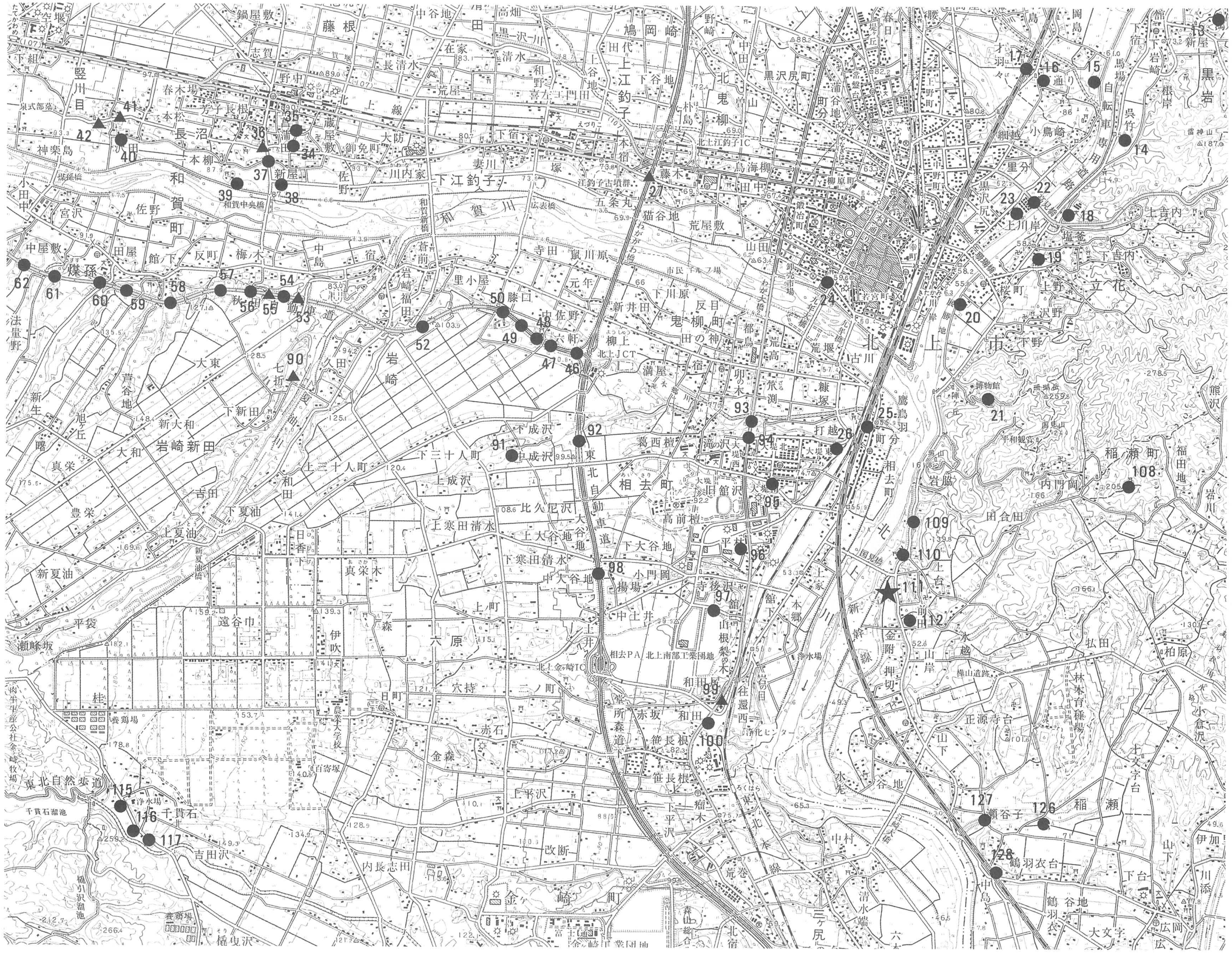
なお、北上市に寄贈された「柴田善三郎コレクション」中に、「鳩岡崎」と注記された弥生時代中期の土器、「泉」と注記された弥生時代前期？の土器が見られるが（文献46）、詳細が不明なので一覧表には含めなかった。また、本節冒頭で北東に近接する安楽寺遺跡にふれたが、確認された弥生土器の詳細な時期は不明である。

金附遺跡の主体となる晩期末～弥生時代前期については、土器片が出土した遺跡は多いが、遺構やまとまった量の遺物が出土した遺跡は少ない。これまでに遺構が検出された主な遺跡は、物見崎遺跡（第1表9。第7図の北上川北端から約3.5km遡った北上川が大きく蛇行する部分の西岸段丘上に立地）と隣接する馬場野遺跡の集落跡、和賀川南岸段丘崖に連続する、上鬼柳Ⅰ遺跡（50）と周囲の集落跡、梅ノ木台地Ⅱ（第1表56）、兵庫館跡（57）等の墓地跡、およびその周囲に広がる土坑群などである。何れも規模は小さい。

該期の遺跡は、これまで同様段丘上など比較的標高の高い場所に立地する（第1表108）と共に、沖積地中の自然堤防など低い場所にも顕著に立地するようだ（第1表15など）。特に顕著なのが、江刺市の北上川東岸の遺跡群であり（第1表129～135。第7図127から南東に約5km）、金附遺跡も同様の地形に立地する。しかし、牡丹畑遺跡（第1表23）も同様の地形だが、大洞C2式期が主で、今のところそれ以後の出土量は少ない。その他の自然堤防上立地遺跡についても同様で、該期の出土量は少ない。

むしろ、段丘上も含めて川に近い場所に主だった集落が存在すると考えた方が良いのかもしれない。第7図34の蔵屋敷遺跡では、岩偶が発見され、第1表120の長坂下遺跡では、山王Ⅲ層式期の合わせ口甕棺が出土している。長坂下遺跡の南南東約4.5km、胆沢川の対岸にある胆沢町清水下遺跡では、弥生時代中期の石包丁が出土しており、北上川にほど近い江刺市や対岸の水沢市でも中期の有名な遺跡は多く、この地方でも中期に稲作が行われていたのは確実であろう（高橋ほか　1996:pp.81～84）。なお、第1表131の反町遺跡では前期の水田が報告されているが、根拠が非常に弱い（文献58:p.25）。

“川に近い場所"で特に忘れてならないのは、晩期後半の大量に遺物を出土する遺跡である。金附遺跡の周囲には、第1表23の牡丹畑遺跡（大洞C2式主）、44の大橋遺跡（第7図の和賀川の端から約3km西に遡った場所。大洞C2式主）、24の九年橋遺跡（大洞C2～A1式主）があり、大洞A′式を主体とする金附遺跡は、これらの遺跡からの移住先とも考えられるが、大洞A2式期を多く出土する遺跡が欠落しているので、相当遺



第7図　周辺の遺跡（晩期～弥生時代中期）（●は、大洞C2式～山王Ⅲ式土器が確認された遺跡で、▲はそれ以外）

跡があるいはまだ周囲に眠っている可能性もある。

金附遺跡を理解する上で重要なのが、第1表112の相田遺跡である。非常に近い場所にありながら同じ時期の土器が多量に出土している。相田遺跡は段丘上に立地し金附遺跡より前の晩期中葉の土器も多く出土する。金附遺跡の立地と石器組成の特殊性を考えれば、相田遺跡が本来の集落で、金附遺跡は石器製作を主とする作業場であった可能性が高い。周囲に点在する該期の遺跡（第1表108～110）も、相田遺跡の活動範囲と考えられる。

なお、金附遺跡と近接した遺跡は、第3図に遺跡推定範囲を掲げた。遺跡名は、第7図の相当遺跡を参照していただきたいが、破線の遺跡および金附遺跡北東の上台という地名と寺院があり範囲が逆三角形を呈する遺跡については、本章第3節（2）の冒頭部分を参照。

また、第1図には、岩手県内の著名な弥生時代前半の遺跡を掲げておいた（▲の遺跡）。参考になれば幸いである。

（c）古代～近世の遺跡

金附遺跡の古代については、縄文時代に次いで多くの遺構や遺物が発見され、竪穴住居跡も検出されているが、遺跡内に散在し密度は薄い。中世は火葬墓が主である。近世は溝跡や墓が検出されたが、遺物は非常に少ない。

・古代の遺跡

本遺跡は、背後に国見山廃寺跡（極楽寺跡）（第7図北東約2.5km）、南南東約3kmに瀬谷子窯跡（第7図127）、南約7kmの対岸には胆沢城跡という場所にある。

本遺跡からは、8世紀後半と10世紀初めころの土器が得られている。これは、同じく自然堤防上に立地する牡丹畑遺跡（第7図23）の傾向と合致しており（文献22・24・44）、共通する背景として志波城の移転に関係する9世紀初頭を中心にした自然環境（降水量）の変化が暗示されよう。対岸約2km北にある鬼柳西裏遺跡（第7図25）も同様だが（文献61）、その南に隣接し同じく自然堤防上に立地する西野遺跡は、10世紀に限られるようである（文献60）。さらに南で国見橋たもと付近の八木畑遺跡でも10世紀の土器片が得られている（文献60）。金附遺跡の南約3km、第7図127のすぐ北にある谷地遺跡（文献59）や鶴羽衣遺跡（第7図128のすぐ南）も、同様の遺跡である。これらの集落は、伊藤博幸氏が指摘するように、9世紀末から10世紀初頭前後を境に起きてきた小規模集落の拡散化という動きの中で生まれてきたものであろう（伊藤1998）。すなわち、低位や中位の段丘面縁辺部や沖積地自然堤防上に2～3棟一組ずつ小塊をなして、散村が増える傾向である。北上川西側の段丘上にも同様の集落が見られ（例えば第7図95の蒼然森遺跡）、秋田自動車道建設関連で多くの遺跡が調査されたが、ここでは割愛する（西野　1998:p.4）。なお、国見山廃寺跡でも10世紀の土器が出土している（文献42）。

・中世の遺跡

今回の調査では、埋葬関係の遺構と古銭、陶器片（常滑）が得られている。対岸約2km北北西にある南舘遺跡（第7図26）から墳墓6基検出されているが、中世末～近世初頭と、本遺跡より新しいようである（文献61）。南舘遺跡は中位段丘の端に立地し、その北の鬼柳西裏遺跡（第7図25）は、自然堤防上に立地する遺跡で、溝跡が検出されている（文献61）。その他、県の遺跡台帳に登録されている付近の中世遺跡として、鬼柳西裏の西側に隣接する観音館遺跡（城館跡）、金附遺跡の北約2kmにある陣ヶ岡遺跡（城館跡）、同じく北東約3.8kmにある一夜館（城館跡）（第7図108の東で「地」の字の東）、同じく約1.5km南南東にある下門岡ひじり塚（塚）（樺山遺跡の北東約500m）、対岸南西約2kmに岩の目館（城館跡）がある。これより西

側の段丘面には多くの城館跡が確認されており、第7図97の相去城もその一つである。また、第7図93の丸子館跡とその西側約1 kmにある鹿島館跡（文献6）は、和賀一族鬼柳氏の居城であり、発掘調査が行われている。丸子館跡は14～15世紀、鹿島館跡は16～17世紀で、丸子館から鹿島館へ造り替えが行われたようである（本堂　1993）。丸子館跡は近年も発掘調査が行われている（文献45ほか）。鹿島館の南約500mには、葛西壇がある。1280年に存命であった葛西清基の墳墓であると言われている（本堂　1999）。なお、前述のひじり塚は、1223年に没した河野通信の墓と推定され、県指定史跡となっている（本堂　1999）。

・近世の遺跡

今回の調査では、溝跡、墓壙、陶磁器小片などが得られている。江戸時代、広大な江刺平野に灌漑用水を提供するため、現在の北上市稲瀬町の北上川から取水する大堰が造られた（文献55:p.524）。今回の調査で検出されたSD08溝跡は、まさしくこの方向に向かっており、何らかの関係があると推測される。金附遺跡から約1 km北にある岩脇遺跡（第7図109）では、塚2基、火葬墓4基、土坑墓41基などが検出され、修験山伏一族累代墓地と推定されている（文献104）。

引用文献

伊藤博幸　1998「後半期の集落」『岩手考古学』第10号　岩手考古学会
金子昭彦　2001「岩手県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会　基礎資料集　列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
高橋信雄・昆野　靖　1996『日本の古代遺跡51　岩手』保育社
高柳圭一　1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』第85号　早稲田大学考古学会
西野修　1998「北上盆地北部」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会　シンポジウム「城柵と地域社会の変容資料集　東北地方の古代集落』第3分冊　第24回古代城柵官衙遺跡検討会事務局（盛岡市教育委員会文化課内）
本堂寿一　1993「岩手県における中世城館の調査成果と課題」『北上市立博物館研究報告』第9号
1999「北上市内の中世墳墓二例・聖塚と葛西壇の測量図」『北上市立博物館研究報告』第12号
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古學』第壹號第參號　東京考古学会

資料文献（第1表）

・北上市（断りのない限り、教育委員会発行）
1）北上市1968『北上市史』第一巻原始・古代（1）
2）北上市立博物館ほか1974『北上市の原始・古代の遺跡』
3）北上市立博物館1984『縄文人の祈り-樺山・八天・九年橋-』北上川流域の自然と文化シリーズ（6）
4）1983「丸子館遺跡発掘調査略報」『北上市立博物館研究報告』第4号
5）1999「北上市更木町臥牛遺跡緊急発掘調査略報」『北上市立博物館研究報告』第12号
6）1975『鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ』北上市文化財調査報告第14集　　＜報告者未見＞
7）1977『九年橋遺跡第3次調査報告書』（第18集）
8）1978『九年橋遺跡第4次調査報告書』（第23集）
9）1979『八天遺跡（昭和50年～昭和52年度調査）図版編』（第24集）
10）1979『九年橋遺跡第5次調査報告書』（第25集）
11）1979『八天遺跡（昭和50年～昭和52年度調査）本文編』（第27集）
12）1980『九年橋遺跡第6次調査報告書』（第29集）
13）1984『九年橋遺跡第7次調査報告書』（第35集）
14）1984『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ（稲瀬地区）』（第37集）（岩脇1～3トレンチ）
15）1985『九年橋遺跡第8次調査報告書』（第39集）
16）1985『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ（立花・黒岩地区）』（第41集）（博物館周辺）
17）1986『九年橋遺跡第9次調査報告書』（第42集）
18）1986『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ（口内地区）』（第43集）（草刈場、加賀館、相田遺跡）
19）1987『九年橋遺跡第10次調査報告書』（第44集）
20）1987『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』（第46集）（大竹廃寺跡）
21）1990『九年橋遺跡第11次調査報告書』（第49集）
22）1988『黒沢尻地区遺跡詳細分布調査報告書』（第50集）

23）1989『藤沢遺跡（1988年度）』（第54集）
24）1989『牡丹畑遺跡（1988年度）』（第55集）
25）1991『国見山廃寺跡発掘調査報告』（第62集）
26）1991『滝ノ沢遺跡Ⅲ（1984・86・87・88・90年度調査）』（第63集）
27）1991『成田遺跡（Ⅰ）』（第64集）
28）1991『九年橋遺跡第10次（補遺）調査報告書』（第66集）
29）1992『馬場野遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第2集
30）1992『成田遺跡（Ⅱ）』（第3集）
31）1992『本宿遺跡』（第5集）
32）1993『南部工業団地内遺跡Ⅰ（1988・1989年度）』（第9集）
33）1993『藤沢遺跡Ⅲ（1989年度調査）』（第13集）
34）1994『飯島遺跡』（第15集）
35）1995『横欠遺跡（図版編）』（第20集）
36）1996『北上遺跡群（1995年度）本宿・岩脇』（第23集）
37）1996『蒼前森遺跡』（第24集）
38）1997『横欠遺跡（本文編）』（第30集）
39）1998『成沢Ⅱ遺跡』（第32集）
40）1999『滝ノ沢遺跡Ⅴ（1997年度調査）』（第40集）
41）2001『黒岩宿遺跡』（第47集）
42）2003『国見山廃寺跡』（第55集）
43）2003『滝ノ沢遺跡Ⅵ（2001・2002年度調査）』（第56集）
44）2003『牡丹畑遺跡（2002年度）』（第58集）
45）北上市立埋蔵文化財センター2002『北上市埋蔵文化財年報（2000年度）』（丸子館遺跡）
46）北上市立埋蔵文化財センター2003『北上市埋蔵文化財年報（2001年度）』
・江釣子村（北上市に合併）（断りのない限り、教育委員会発行）
47）1982『江釣子遺跡群-昭和56年度発掘調査報告-』
48）1983『江釣子遺跡群-昭和57年度発掘調査報告-（鳩岡崎上の台遺跡・蔵屋敷遺跡』
・和賀町（北上市に合併）（断りのない限り、教育委員会発行）
49）1989『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』和賀町文化財報告書第18集
50）1989『鳥谷脇Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第19集）
51）1990『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』（第23集）
52）1991『鳥谷脇Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第26集）
53）1991『和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』（第28集）
・金ヶ崎町（断りのない限り、教育委員会発行）
54）1973『千貫石・長根前遺跡』
・江刺市（断りのない限り、教育委員会発行）
55）江刺市1983『江刺市史第一巻　通史篇　原始・古代・中世』
56）江刺市1981『江刺市史第五巻　資料編　考古資料』
57）1999『宮地Ⅲ A遺跡発掘調査報告書』江刺市埋蔵文化財調査報告書第17集
58）2001『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書（反町下層遺跡）』（第27集）
・岩手県教育委員会
59）1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告書第33集（落合Ⅰ、鶴羽衣、鶴羽衣台、瀬谷子、五十瀬神社前、谷地遺跡）
60）1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（第34集）（八木畑、西野、野田Ⅰ、堀ノ内遺跡）
61）1980『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』（第50集）（南舘、鬼柳西裏、落合Ⅱ遺跡）
62）1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』（第58集）（梅ノ木第Ⅲ・Ⅵ地区）
63）1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ』（第59集）（上餅田遺跡）
64）1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ（江釣子村鳩岡崎遺跡）』（第70集）
65）1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ（北上地区）』（第72集）（藤沢、下成沢、上大　　谷地遺跡）
66）1992『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』（第91集）（斉羽場遺跡）
67）1993『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成4年度）』（第93集）（落合遺跡）
68）1997『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成8年度）』（第99集）（九年橋遺跡）
69）2000『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成11年度）』（第108集）（相田遺跡）
70）2002『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成13年度）』（第114集）（金附、大橋遺跡）
71）2003『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成14年度）』（第116集）（立花南、蔵屋敷、金附遺跡）
・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（旧称、（財）岩手県埋蔵文化財センター）

72）1978『江刺市沼の上遺跡（昭和 52 年度）』岩手県埋文センター文化財報告書第 5 集
73）1979『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』（第 8 集）（力石Ⅱ、兎Ⅱ、落合Ⅲ、朴ノ木遺跡）
74）1983『館山遺跡第 2 次発掘調査報告書』（第 65 集）
75）1989『下岩沢Ⅰ発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 141 集
76）1990『松川遺跡発掘調査報告書』（第 143 集）
77）1989『坊館跡発掘調査報告書』（第 145 集）
78）1990『岩崎城西遺跡発掘調査報告書』（第 148 集）
79）1991『月館跡・八幡館跡発掘調査報告書』（第 149 集）
80）1991『上川岸Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 153 集）
81）1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』（第 157 集）
82）1991『上村貝塚発掘調査報告書』（第 158 集）
83）1992『上鬼柳Ⅳ遺跡発掘調査報告書』（第 160 集）
84）1992『上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（第 161 集）
85）1991『梅ノ木台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（第 162 集）
86）1992『林崎館遺跡発掘調査報告書』（第 163 集）
87）1992『本郷遺跡発掘調査報告書』（第 164 集）
88）1992『石曽根遺跡発掘調査報告書』（第 165 集）
89）1992『田中館跡発掘調査報告書』（第 166 集）
90）1992『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』（第 176 集）
91）1992『上鬼柳Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（第 179 集）
92）1993『兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 180 集）
93）1993『上反町遺跡発掘調査報告書』（第 181 集）
94）1993『法量野Ⅰ遺跡・中屋敷遺跡発掘調査報告書』（第 182 集）
95）1993『八幡野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 183 集）
96）1993『館Ⅳ遺跡発掘調査報告書』（第 187 集）
97）1993『人当Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（第 193 集）
98）1994『煤孫遺跡発掘調査報告書』（第 196 集）
99）1993『千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 198 集）
100）1995『馬場館・小吹野遺跡発掘調査報告書』（第 210 集）
101）1995『柳上遺跡発掘調査報告書』（第 213 集）
102）1995『岩崎台地遺跡群発掘調査報告書』（第 214 集）
103）1995『土場遺跡発掘調査報告書』（第 222 集）
104）1996『沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書』（第 230 集）
105）1996『岩脇遺跡発掘調査報告書』（第 235 集）
106）1996『横町遺跡発掘調査報告書』（第 236 集）
107）1996『柏山館跡発掘調査報告書』（第 242 集）
108）1999『下醍醐遺跡発掘調査報告書』（第 325 集）
109）2000『中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第 362 集）
110）2001『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 12 年度）』（第 370 集）（飯島遺跡）
111）2002『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 13 年度）』（第 397 集）（黒岩宿遺跡）
112）2003『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 14 年度）』（第 423 集）（大橋、金附遺跡）
113）2004『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成 15 年度）』（第 455 集）（大橋、金附遺跡）
・その他
114）法政大学文学部考古学研究室 1990『法政大学所蔵　伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅰ- 伊藤陽夫収集資料編-』
115）法政大学文学部考古学研究室 1996『法政大学所蔵　伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅱ- 伊藤鉄夫収集資料編-』
116）藤村東男 1991「岩手県九年橋遺跡検出の遺構について」『研究紀要』8 慶應義塾女子高等学校
117）森　一欽 1999「岩手県清水畑遺跡採集の縄文晩期土器」『法政考古学』25 法政考古学会

Ⅲ　調査・整理の方法と経過

1 野 外 調 査

(1) 調 査 経 過

平成14年度については第Ⅳ章、平成15年度については第Ⅴ章の冒頭に記した。

(2) 特 記 事 項

①調査区域

調査原因となる事業は、遺跡中央部を北東から南西方向で横断する県道用地と、北西に分岐して伸びる圃場整備関連道路用地区域、南西部のポンプスタンド用地区域の3地区からなる。また調査区の埋没地形により、東に隣接する幹線用水に面した低地部分、中央を南北に縦断する自然堤防の微高地部分、西側の段丘崖に面した低地部分ではそれぞれ土層堆積状況が異なり、調査手順もこれに応じている。

従って、県道用地内にある東側斜面～低地部分を「東区」、南東部のポンプスタンド用地の低地部分を「南東区」、県道用地内の中央微高地部分を「中央区」、県道用地内の南西側低地部分を「南西区」、北西側の圃場整備関連道路用地部分を「北西区」と便宜的に区分した。

②グリッド設定

今回の調査区をカバーするグリッドは次のように設定した。グリッド基準線は座標南北軸に合わせ10m四方の大グリッドと2m四方の小グリッドを組んでいる。グリッド名称は大グリッドの北から南にA・B・C・・のアルファベット大文字、西から東にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・のローマ数字による名称を与え、その組み合わせをグリッド名称とする。小グリッドは大グリッド北西隅から東に向かって1・2・・25までの算用数字による名称を与える。なお遺物の注記等の際には出土地点記録を大グリッドまででとどめている場合は末尾に大文字のG、小グリッドまで表す場合は末尾に小文字のgを付けて、FⅦG、GⅧ17g等と呼び区別している。また、杭の名称はグリッド北西隅の点とした。なお、次年度調査では、検出時の遺物取り上げ区画としては、大グリッドも小グリッドも扱いにくいと考え、大グリッドを5mごとに4等分した中グリッドを便宜的に用いた。大グリッドの後に①～④と書かれているのがそれで、北西区画を①、北東区画を②、南西区画を③、南東区画を④とした。

委託測量により設置した基準点の座標値は、基準点1:X=-83605.176　Y=24978.891　基準点2:X=-83575.176　Y=25008.891である。なお上記の数値は日本測地系で、これに基づいて基準杭を設定し、測量実測を行った。巻末の抄録の緯度、経度は、これを世界測地系に変換して示したものである。

③平成14年度の遺構の検出・精査

Ⅲ層、Ⅴ層は基本的に砂層のため、ジョレンによる検出作業が可能であったが、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅳc層上面では粘土質シルトの部分が含まれ、スコップを併用して検出する。精査は基本的に半裁して断面記録後に完掘している。遺物の取り上げは層位毎に行うよう努めたが、遺構内堆積土出土一括で取り上げているものが相当数含まれる。写真記録は6×9㎝判カメラ1台（主に白黒）、35㎜判カメラ2台（カラーリバーサル、白黒）を使用している。実測は平板、簡易遣り方により適宜縮尺を決定している。

遺構は精査着手順に登録した。遺構名はSI（竪穴住居跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、SN（焼土遺構）SR

（土器埋設遺構　土器棺墓含む）、ST（捨て場）、SX（その他）の略号と2桁の数字を組み合わせている。

④平成15年度の遺構の検出・精査

平成14年度に準じているが、6×9カメラでなく6×7カメラを使用した。その他、第Ⅴ章第5節の冒頭に細かい部分を若干補足している。

2　室内整理と報告書の作成

(1) 平成14年度の整理作業

①遺構

平成14年度調査の遺構については、冬季に第2原図の作成、原稿執筆等を行い、平成15年度に野外調査と平行してトレース、遺構図版原稿作成、遺構写真図版作成を行った。

②遺物

出土遺物は以下の大別種類で仕分けし、出土地点・層位と関連づけた番号により登録した。

遺物大分類遺構内外層位（B遺構外の場合）

A: 縄文・弥生土器 A: 遺構内 A: Ⅰ～Ⅱb層包含

B: 土師器・須恵器 B: 遺構外 B: Ⅲ層包含遺物

C: 陶磁器　C:ST01　C: Ⅳa層包含遺物

D: 土製品　D:ST02　D: Ⅳb層包含遺物

E: 石器・石製品　E:ST03　E: Ⅳc層包含遺物

F: 金属製品 F: 表採・排土出土

G: 自然遺物　層位不明

これにより、例えばⅣc層出土の縄文土器は「ABE+数字（連番）」、遺構内出土金属製品は「FA+数字（連番）」というスタイルとした。

遺物水洗は野外調査と平行して夏期の内にほぼ終了させており、冬季の作業は土器接合から開始した。平成14年度出土遺物のうち、半数以上を占めるST01試掘トレンチ出土遺物については、次年度調査出土遺物との接合、出土層位対応関係を確認してから着手すべきということで登録作業を含めて先送りとし、他の地点出土遺物についての登録、掲載資料選抜、図化作業を優先させた。

掲載資料としたものはST02・03、遺構内出土資料を中心に、縄文・弥生土器547点（実測194点、拓本353点）、古代土器37点、石器類385点（うち267点実測未了）、土製品72点となる。その他、玉類、金属製品類、自然遺物類があるが、仕分けまでしか実施せず登録作業は未着手のまま次年度に引き継いでいる。

(2) 平成15～16年度の整理作業

(a) 作業経過

平成15年度の整理作業は、平成15年4月1日～平成16年3月31日に作業員12名で行った。調査員は、10月31日まで1名、11月からは2名である。

10月10日までは、野外調査と併行しての整理であり、基本的に作業員のみの作業を行った。作業員12名で、7月までは前年度整理作業を継続し、遺構トレース、土器トレース（拓影合成トレース含む）、石器実

測・トレースを行った。8月からは今年度出土遺物の水洗を行っている。

10月14日に調査員が引き上げてきてからも水洗を継続し、11月一杯までかかった。12月からは、8名で土器の接合・復元、残りの4名で遺構内出土遺物の整理（トレースまで）を行い、3月一杯で全て終了した。4名は、遺構外の土・石製品の実測も行っている。この間、調査員は遺構関係の整理作業を行い、図版、写真図版作成のみ残した。

平成16年度の整理は、平成16年4月1日～平成17年3月31日に調査員1名と作業員で行ったが、作業員の人数は変動が大きく、4月は5名、5月前半は13名、5月後半～6月前半14名、6月後半～10月は15名、11月～12月は11名、1月は10名、2月～3月前半9名、3月後半8名である。

4月は、作業員数が少ないので、遺構の図版、写真図版の作成と土・石製品の実測を行った。調査員は前段部分の原稿執筆を行っている。5月～6月上旬は、調査員も併せて全員で石器の粗分類を行った。

6月中旬～7月一杯、作業員9名で土器実測、4名で拓本を行い、拓本はそのまま10月一杯までかかった。7月からは遺物の写真撮影が始まって作業員2名がその準備・補助を行い、11月一杯までかかった。土器実測を行っていた9名のうち3名は、8月～10月一杯拓本土器の断面実測を行い、6名は9月中旬まで石器の細分類を行った。その後、1名が断面実測に移り、残り5名で石器・石製品実測を10月一杯まで行った。調査員は、この間実測図の点検、原稿執筆を行っている。

10月からは、撮影補助の2名を除いて、3名が土器トレース、5名が土器拓影合成トレース、1名が遺物集計表等の入力を行った（入力は1月一杯まで）。写真撮影は11月一杯でほぼで終了したので、2名は引き続き土製品、石製品、その他遺物の写真図版の作成を行った。土器関係のトレースは12月一杯で終了したので、1月からは、4名がその他の遺物のトレースを行い、2名が土器図版の作成、2名が石器写真図版の作成、2名が重量等の計測に入った。その他の遺物トレースは、2月中旬に終了し、そのまま図版作成に入った。各自の作業終了後は他の作業を手伝い、その結果3月中旬に図版、写真図版の作成は終了したので、割付を行った後、収納に入った。調査員は、この間遺物観察表作成、原稿執筆を行った。

(b) 特記事項

①遺物の全体量と報告書掲載基準について

平成14年度調査から引き継いだ分の詳細は、第Ⅵ章冒頭部分参照。平成15年度の調査では、土器類（30×40×30cmのコンテナ）163箱、石器類（30×40×20cmのコンテナ）761箱、土製品が約300点、石製品が約380点出土した。掲載基準は、概要を整理方針に後述したが、各遺物の組成および掲載基準の詳細は、第Ⅵ章を参照いただきたい。

②整理方針について

金附遺跡調査の「セールス・ポイント」は、石器製作址、縄文時代晩期末～弥生時代初頭には比較的珍しい大規模な捨て場、その厚い捨て場を層位的に調査したことであろう。報告書では、この三つの特長を生かすべく、整理期間を考慮して、次のような整理方針を立てた。第一に、優先順位の高い方から、(1) 土製品・石製品等の数が少ない人工遺物→ (2) 遺構出土遺物→ (3) 捨て場出土遺物→ (4) その他とし、まず1、2について。1は原則として全点掲載、2は、遺構の数は少ないが伴出遺物も少ないので、形が復元できない土器片については4×4cm以上（無文や地文のみのものは10×10cm以上）、石器は原型がわかるものだけ掲載し、残りは、土器については重量を、石器については器種を文章で記した。また、掲載方法は、図は図化する意義のあるものに限り、陶磁器小片や焼粘土塊等は写真のみで済ませた。さらに、石剣類の未成品は、数

が多く、1点1点掲載する意味があるのかわからないので、半分程度割愛した。

第二。3の捨て場出土遺物のうち土器については、良好な層位的出土資料に恵まれず型式編年も十分に確立されていない時期であり、本遺跡の資料が該期の土器型式編年に寄与するところ大と考えられること、さらに、土器以外の捨て場出土遺物の時期を推定するには出土層の形成時期を確定する必要があり、そのためには土器の検討が不可欠で、その結果を客観的に示すためには、ある程度以上の量の提示が必要とされることなどから、遺構出土と同様の扱いとした。ただし、文様を持たない口縁部以外の土器片については、器形が復元できる以上のものを掲載した。

第三は、3の捨て場出土遺物のうち石器について。石器製作址としての性格を示すことが報告書作成の際の重要点と思われたが、必ずしも図を多く掲載することがそれに繋がるわけでもない。そこで、まず分類と点数を数えることを第一義として行い、これ以降は、整理期間と第一、二の方針との兼ね合いとした。

第四は、4のその他。土器で出土位置がはっきりしているもの（グリッド出土）は、“できるだけ減らす方針"で、同じ時期のものは一つで代表させるようにした。トレンチ等から出土した出土位置がはっきりしない土器は、“選ばない方針"で、他からの出土土器の中にない時期や型式のみ選んだ。石器は、器種分類して数を数えただけで基本的に選んでいない。

第一、二、四については、ほぼ目的を達成したと思われるが、第三については全く不十分であった。量が多いため、粗分類だけでも、調査員と作業員約14名が朝から晩までへとへとになるまでやっても一ヶ月かかってしまった。石器を理解するには属性表と計測表の作成がまず必要のようだが、残り9ヶ月では表の作成だけで終わってしまう。逆に、それだけのことをしても、その先に十分な成果が得られるか自信が持てない。結局、分類を代表する遺物の実測と一部石器の使用痕分析を委託するにとどまった。本当は属性表作成も委託したかったが、経費的にとても不可能であった。

大量に出土する縄文石器の整理方法というのは未だよく見えない（金子　1998）。使用痕など特別な属性を提示する場合以外に図は必要がないというのはわかってきたが、それではどのように整理したら良いのか。出土石器全点について属性表と計測表を作成するのか。それを提示した上で（あるいはCD-ROMのような形か）、統計的な処理を中心とした分析結果を提示すれば良いのか。基礎となる一覧表が要らないなら、その分析結果が正しいとする根拠はどうやって示されるのか。図が要らないなら、属性の観察結果の妥当性は、どのように示せば良いのか。また、石器研究者のほとんどが一致を見て観察を必要とする属性とは何か。何を見ればわかるのか。

石器研究者の話を聞いていると、報告書における石器の記述というのは、既に動植物遺体の記述になぞらえるのが適当なくらい専門的になっている気がする。動植物遺体なら、通常そんなに大量に出土することはないし、大量の出土が予想される場合には、保存するか、それなりの予算措置をするか、事前に手が打てるので問題がないが、縄文石器は大量に出土するのが普通であり、これまで一般的な人工遺物と理解されてきたので、委託に出すための高額の予算確保は理解されにくい。

また、大量に出土するなら、“全頭検査”を避けて部分で全体を判断する統計的手法を欧米などでは使用するはずであろうが、日本では理解されにくいし、その方法も開発されていない。逆に、動植物遺体は、自然遺物なので全点の属性表は必要とされないようである。

何れにしろ、石器の場合は記述・報告というより分析研究という次元に既にあるような気がする。研究なら、個人の好きずきでありコストなど気にせず思う存分石器を観察できる。問題は、これを行政調査で行うことである。コストなど、もう少し現実に見合った報告書作成用の石器整理方法があっても良いような気が

する。

ともあれ、今回は、分類を代表する一部石器の実測と一部石器の使用痕分析しかできなかった。報告者（金子）の怠慢であることは間違いない。お詫びするとともに、今後金附遺跡の石器を研究する個人、団体が現れることを望むものである。

③遺構図版の点検・修整について

平面図と断面図の照合等の図面点検は、現地で全て行った。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにし本文中にその旨記している。ただし、1/20の縮尺で1㎜（原寸では2㎝、報告書では0.5㎜）の違いについては誤差範囲とし、特にふれていない。報告書に嘘を書いてはいけないという方針（金子　1998:p.10、13）によるものであり、御容赦願いたい。

④遺物の接合・復元・注記について

土器は基本的に報告書に掲載したものだけに注記した。土製品、石器･石製品については、1点、1点別の小袋にしまって、その袋に出土位置等を記載し、注記はしていない。石器素材剥片の接合は行っていない。土器の接合は、約15㎡のスペースで作業員約4名が約4ヶ月行った。原則として同じ袋、同じ遺構、同じグリッドの中でのみ試み、遺構間や異なるグリッドの間での接合は行っていない。出土土器のほとんど全てを占める捨て場出土分については、第Ⅴ章第5節（9）の遺物の整理・掲載方法に詳述。

⑤遺物の実測、拓本・トレースについて

遺物の実測・トレースは作業員が行い、それを調査員が点検した。特に石器については、調査員がよくわかっていない部分があるので、点検は外形と不自然な点がないかに留めた。

（3）報告書について

報告書の体裁は、基本的に既存の報告書に倣ったが、一部違うところがあるので、以下にそれを記す。最も違うところは、遺構の記載と遺物（特に遺構内の遺物と遺構外の土器）の記載である。

①遺構図版の凡例について

本章末にある。

②遺構出土遺物の掲載・記載の位置について

遺構出土の遺物も第Ⅴ章で掲載・記載しているが、遺構図版の後に遺構内遺物集成図として縮尺を落としてまとめてもいる（第78図～第86図）。その代わり、遺物は次に述べるように出土位置に従って並べた。その理由は、金子（1998）のpp.15～16参照。

③遺物の分類・掲載順序について

遺物は、原則として、縄文土器や石器などのそれぞれの種類ごとに、出土位置の順（遺構内→遺構外）に並べており、遺構内、外それぞれ年度別に並べ（平成14年度→平成15年度）、遺構外は、それぞれの年度ごとに、はっきりしているもの→不明なもの、はっきりしているものはグリッドの若い方から順に並べている。つまり、平成14年の遺構内→平成15年の遺構内→平成14年の遺構外（グリッド順）→平成15年の遺構外（グリッド順）である。

ただし、土製品・石製品は、全体像が見えにくくなるため、細別種類（土偶など）を優先し、同じ種類の中で、平成14年の遺構内→平成15年の遺構内→平成14年の遺構外（グリッド順）→平成15年の遺構外（グリッド順）とした。本来なら石器も同様に扱うべきだが、14年度と15年度の分類・選別方法が大きく異なるため、原型を全く失う形に混ぜてしまうことに躊躇したためである（分類記載自体は、15年度のやり

方で行っているが)。

遺構外から出土した土器を、型式学的分類ではなく出土位置によって並べた理由については、金子（1998）のpp.15 ～ 16参照。

④遺物の記載の仕方について

遺物の記載は基本的に観察表で行い、表に入りきらない場合や表の項目に当てはまらないことは本文中に記し、その頁を表の「本文記載」という欄に記した。

⑤遺物図版の凡例について

本章末にある。

⑥註・引用参考文献の掲載位置について

原則としてそれぞれの節の最後にまとめているが（例えば、第1節縄文土器)、遺構の場合はかなり離れてしまうので、当該遺構の最後に記した。

⑦本文、表、図版のレイアウトについて

原則として本文は本文、図版は図版とまとめている。報告書は通して読まれるということはほとんどないと思われるので、“捜し易さ"を優先すべきと考えたためである。

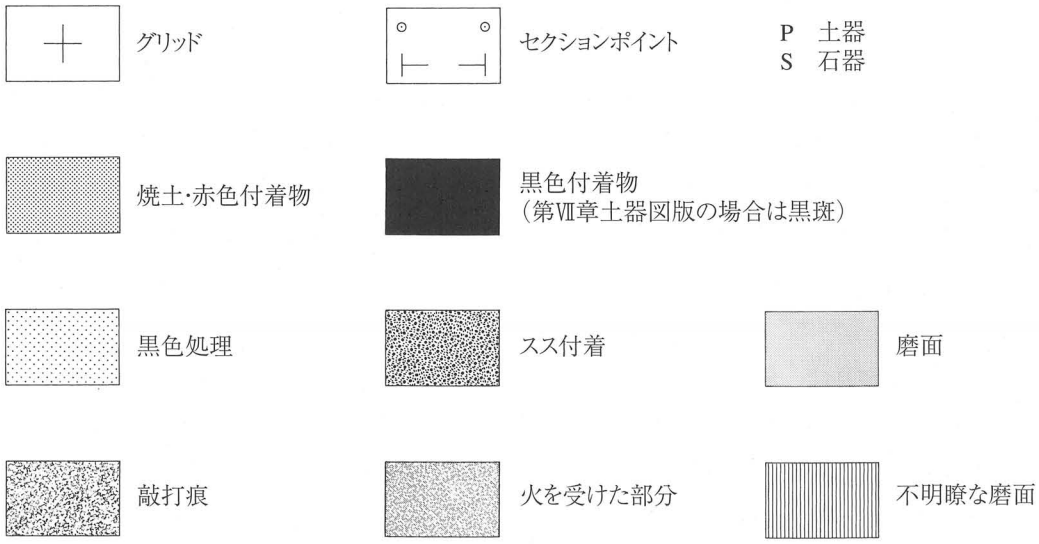
⑧様式の不統一な点について

第Ⅳ章と第Ⅴ章の遺構の記述方法、遺物実測図の線の太さ（第Ⅵ章冒頭部分参照）などに、前年度と次年度で不統一な点がある。読みづらい点、お詫びしたい。前年度担当者の異動後に十分な話し合いの時間が持てなかったのが主たる原因である。あえて変更して統一しなかったのは時間がなかったせいであるが、報告書についての討議がほとんどといって良いほどなされない現状の中、両方の代表的な記載方法を一書の中で比較して、どちらが読みやすいか比較してみるのも有意義と考えたためもある。今後の議論の高まりに期待したい（金子　1998)。

参考文献

金子昭彦　1998「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』ⅩⅧ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

凡　例



※第Ⅶ章土器製作痕･使用痕については、第Ⅶ章図版中に示した。

Ⅳ　平成14年度の調査・遺構

1　調査結果の概要

①終了区域

〔東区Ⅲ層上面〕

土坑4基、溝跡6条（古代以降）がある。土坑のうち1基は中世末期頃の土壙墓である（SK01）。

〔東区Ⅳa層上面〕

土坑2基、捨て場1ヶ所（ST02）がある。土坑のうち1基は中世末期頃の土壙墓で本来はⅢ層上面が検出面となる（SK07）。ST02は一部北区東端にまたがって南北方向の帯状に分布する。

〔東区Ⅳb層上面〕

土器棺墓1基（SR02）、風倒木痕2ヶ所がある。SR02はST02の南端に隣接し、同時期のものと捉えられる。

〔東区Ⅴ層上面〕

土坑31基がある。うち1基（SK68）は縄文晩期頃の土壙墓である。残る30基は縄文中期末～後期の年代が想定され、フラスコ状土坑を含む（SK50）が、大部分は性格等不明の土坑である。

〔南東区Ⅲ層上面〕

土坑1基、溝跡4条（古代以降）がある。溝跡は3条が平行し、土坑もこれらと接しており、一連のものと想定される。

〔南東区Ⅳc層上面〕

土坑2基（縄文晩期頃）がある。

〔南東区Ⅴ層上面〕

土坑5基（縄文中期末～後期）がある。東区Ⅴ層上面から分布が連続する。

〔中央区Ⅴ層上面〕

JⅤ・JⅥグリッドを中心に土坑20基、焼土遺構1基が分布する。出土遺物から見て縄文中期末～後期中葉の時期の遺構が主体となる。フラスコ状土坑が複数含まれる。これらとやや離れて南西側のKⅦグリッドに土坑5基がある。縄文晩期頃の土坑墓と思われるもの2基を含む。

〔北区〕

竪穴住居跡1棟（古代）、土坑4基（縄文）、溝跡1条（古代以降）、火葬骨埋納遺構（中世か?）、Ⅳa層捨て場（ST03）がある。

〔南西区〕

溝跡1条（SD08　近世）、土器棺墓1基（SR01　縄文晩期末～弥生初頭）を精査した。縄文晩期末～弥生初頭の捨て場（ST01）はトレンチによる範囲の確認にとどまる。

②調査未了区域

〔東区〕

北東端の三角形の区域、約500㎡はⅣc層除去まで終了し、Ⅴ層上面での遺構検出が未了となる。

〔南西区〕

基1付近から南西側の区域、約500㎡はⅢ層上面の遺構精査途中、及びⅣa層のST01の分布状況を確認途中段階で、ST01の精査は未着手となり次年度に持ち越す。

〔南東区〕

本年度野外調査終了後に新規に発掘対象区域に加わった部分である。

③調査経過

〔平成14年度第1次調査〕

4月11日に器材を搬入して開始した。まず調査区全域の試掘から着手する。トレンチは2m×6～8m程の規模で13ヶ所設定した。トレンチの断面観察により、現況が平坦でありながら表土下位の状況が地点により大きく異なっていることがわかり、全域の層序対応関係を把握するのに時間を要した。

4月後半から東区用水際の一帯から重機によるⅡ層上半までの掘削を開始する。Ⅱ層下部には古代遺物を包含する地点があるため人力により掘り下げ、5月にはⅢ層上面の遺構検出作業、遺構精査に入った。SK01土坑他、複数の土坑、溝を検出し精査を行った。平行して北区では調査区南壁側に沿い連続したサブトレンチを入れた。東端では表土直下にST02捨て場の広がりを検出、中央部ではSI01住居跡他、土坑等の検出、精査を行う。北区西端ではⅢ層が厚く堆積しており、この下位にあるST03捨て場の確認は7月以降にずれ込む。

5月末には東区Ⅲ層を重機により除去し、下位のST02捨て場全体の検出、精査に入る。2mの小グリッドに分割し、西側の斜面上位から東に向かって掘り進める。包含層の層厚は20～30cm程度で、遺物包含密度も極端には多くなかったため、実質10日間程度で主要な部分の掘り下げが終了する。同時にST02の南側で検出した土器棺墓（SR02）の精査を行う。なお6月14日には北上市立照岡小学校からの申し出により、6年生の社会科授業の一環として体験発掘を実施する。参加は児童17名、引率教員1名で6班に編成し、実質2時間をかけてST02の掘り下げ、遺物取り上げを行った。

ST02の精査と平行して、5月末～6月第1週にはⅢ層中位までで中断していた南西部の試掘トレンチを拡張、掘り下げた。その結果、地表下1m下位にⅣa層包含層（ST01）が極めて良好な状態で保存されていることがわかった。T8内サブトレンチでは包含層の厚さが最大1.3mに達することを把握し、またT13内では土器棺墓（SR01）を検出、精査する。6月第3週はST01の範囲を掴むためにトレンチ（TY1～9）を入れ、最大500㎡の広がりを持つとの認識に至る。これらの状況から、今年度の予定期間、7月末までの調査終了は困難と判断し、6月20日に事業者、県教委生涯学習文化課と現地で協議を行い、南西部捨て場の調査を平成15年度に延期することに決定する。なお、南西区のⅢ層上面で検出していた大溝跡（SD08）は上記のトレンチ調査と併行して精査を行った。

7月中旬からは東区のⅣb層除去、Ⅳc層上面での検出作業、Ⅳc層の人力と重機を併用しての掘り下げを行う。また中央区の表土直下でⅤ層が露出する一帯では、東区の作業と平行して7月下旬にかけてⅤ層上面での遺構検出、精査に入る。7月下旬から8月上旬にかけては東区Ⅴ層上面での遺構検出、精査を行う。東区北部は時間切れのため次年度に持ち越しとなる。

南西区でST01が地表から1m下位で検出されたことを受け、北区西端でも中断していたⅢ層下の確認作業を7月下旬に行う。この区域では地表から最大2m20cm下位にⅣa層の上面が確認され、ST03捨て場として掘り下げに着手したが、調査区の幅が約5mと狭く、安全面から可能な範囲での調査にとどめている。

7月30日には遺跡全域の空撮、8月6日に終了確認を行い、終了区域と未了区域が確定される。この後、盆休みを挟んで、次年度に再調査するST01捨て場全域と東区北端の土嚢及びシートによる養生を行い、8月

22日に撤収する。

なお、本年度調査では遺跡の核心部分と見られるST01捨て場の調査が次年度に先送りとなったため、現地説明会は実施していないが、下記の団体による見学の申し込みに対応した。

6月28日、北上市ひまわり広場一行現地見学会（10名）。

8月1日、北上市埋蔵文化財センター野外作業員一行現地見学会（40名）。

〔平成14年度第2次調査〕

10月17日、現地に調査機材を搬入して調査開始、現場設営を行う。雨天続きのため実際の調査作業は10月23日に重機によるⅡa層除去から開始する。以下、Ⅱb層人力による掘り下げ、Ⅲ層上面遺構検出･精査、Ⅲ層重機による除去、Ⅳa層上面遺構検出、Ⅳa層人力による掘り下げ、Ⅳb層上面遺構検出、Ⅳb層人力による掘り下げ、Ⅳc層上面遺構検出・精査、Ⅳc層重機による除去、Ⅴ層上面遺構検出・精査、全体の断面図・平面図実測、という経過で進めた。基本層序の層界では極力遺構検出に努めたが、実際にはⅢ層上面、Ⅳc層上面、Ⅴ層上面での遺構検出となった。また遺物の包含の可能性を考慮してⅡb層、Ⅳa～b層を人力により掘削したが、実際の遺物出土は僅少であった。11月13日には作業を終え撤収する。

2　遺　　構

(1) 竪穴住居跡

北区で検出した古代の竪穴住居跡（SI01住居跡）1棟がある。

SI01住居跡

遺　構（第15・16図、写真図版9・10）

北区中央部、EⅣ・Ⅴグリッドに位置する。調査区南壁側のサブトレンチ内で確認しており、南側の一部とカマド煙出し孔の一部を破壊してしまっている。検出面はⅤ層上面である。

カマドが取り付く東壁側は残存状況が良い。ほぼ直線的に伸びており3.6m以上の長さが確認される。西壁は北半で歪な状態で確認されるが、南半は削平により形状が不明瞭となる。ただし、調査区南壁断面では住居西壁の立ち上がりと思われる段差を検出している。これから東壁までの長さを住居東西長とすると最大5.08m。南北壁は調査区外側にありいずれも形状が不明である。調査区の幅から住居南北長は4.82m以上と想定される。東壁の方位はN-9°-E。

床面は北東側では概ね平坦であり、Ⅴ層中に設けられ硬化が著しい。カマド手前部分は縄文時代の土坑2基（SK05・06）を埋め戻して床面としている。この土坑との切り合い部分を中心に2×1.6m程の範囲が5～10cm程落ち込む。南西側では西壁から続く緩い段差が南東に向かい連続し、床面が2段となっている状態である。

住居堆積土は基本的に3層に分層され、水平に堆積する。1層はにぶい黄褐色土でしまりが強い。2層は均質で夾雑物の少ない黒褐色土、3層は褐色土ブロックと黒褐色土ブロックが斑状に含まれる暗褐色土である。全体に炭化物細片が含まれる。

カマドは東壁の南よりに設置される。本体、燃焼部は確認できない。刳り貫き式の煙道が住居壁と直交して伸びる。先端に円筒形の煙出し孔があり、この側壁は全体が被熱により赤く変色している。煙道、煙出し孔の内部には炭化物、焼土粒を含む層が堆積する。煙出し孔を含めた煙道全長は1.19m、煙道の直径は25cm、煙出し孔の直径は60cm。

柱穴で明確なものは確認できない。北側の東壁際に壁面を若干抉り込むように掘られた土坑がある。楕円形で中央部が一段深くなる。長径が55cm、床面からの深さは20cm で、壁面側が5cm 以上抉れる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土である。

遺　物

第78図1・2の土器、1～4の土師器が出土。

土器は細片が約50片出土するが、大部分は弥生時代初頭の土器でありST03捨て場からの混入と思われる。遺構の時期を示すものとしては、カマド煙出し孔、住居堆積土から頸部に段を持ち内外面刷毛目調整の土師器甕細片が出土している。

小結　古代の竪穴住居跡である。まとまった出土遺物がなく時期の判断は難しいが、前述の土師器より8世紀頃の年代が考えられる。

(2) 溝　　跡

平成14年度の調査で精査した溝跡はSD01～12の合計12条である。このうちSD07が北区、近世後半と見られるSD08が南西区に位置する他は、東区、及び南東区の平坦面、及び斜面下部のⅢ層上面で検出している。SD09～12は第2次調査での精査である。いずれも古代以降の溝跡だが出土遺物が少量もしくは皆無で時期を明確にできるものはない。

SD01 溝跡

遺　構（第17図、写真図版30）

東区斜面下部、GⅧグリッドに位置する。Ⅲ層上面検出。斜面方向に沿い東西に伸びる。延長は3.43m、幅は60～43cm、深さは最大39cm、走向はN-84°-E。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土主体で均質である。遺物の出土はない。

SD02 溝跡

遺　構（第17図、写真図版31）

東区平坦部、GⅧグリッドに位置する。Ⅲ層上面検出。東西に伸びる。延長は2.28m、幅は32～18cm、深さは最大12cm、走向はN-84°-E。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土主体。遺物の出土はない。

SD03 溝跡

遺　構（第17図、写真図版31）

東区平坦部、HⅧグリッドに位置する。Ⅲ層上面検出。ほぼ東西方向に伸びる。延長は2.46m、幅は29～24cm、深さは最大10cm、走向はN-70°-E。断面形状は半円形。堆積土は黒褐色土主体で炭化物を含む。

遺　物

第78図3の土器が出土。

SD04 溝跡

遺　構（第17図、写真図版31）

東区斜面下部から平坦面にかけてのGⅧ～GⅨグリッドに位置する。斜面方向に沿い東西に一直線に伸び

る。西側でSD05溝跡を北に分岐する。延長は11.85m、幅は81～18cm、深さは最大15cm、走向はN-88°-W。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土主体で褐色土ブロックが含まれる。

遺　物

第78図5の土師器が出土。5は坏破片で内面黒色処理がなされる。

SD05溝跡

遺　構（第17図、写真図版31）

東区斜面下部、GⅧグリッドに位置する。斜面裾に沿い南北に伸びる。南端はSD04溝跡に接する。延長は4.26m、幅は48～12cm、深さは最大20cm、走向はN-12°-W。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土主体で褐色土ブロックが含まれる。遺物の出土はない。

SD06溝跡

遺　構（第17図、写真図版31）

東区北端、DⅧ～DⅨグリッドに位置する。東西に伸びると思われるが一部のみの検出で全体は不明である。検出長は1.05m、幅は80～60cm、深さは最大40cm、走向はN-84°-W。断面形状は半円形。堆積土は暗褐色砂質シルトである。遺物の出土はない。

SD07溝跡

遺　構（第18図、写真図版31）

北区西側、EⅣグリッドに位置する。中央微高地から西側に向かって落ち込む斜面の上部を南北に横断して伸びる。検出長は3.76m、幅は1.89～1.36m、深さは最大46cm、走向はN-9°-E。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土主体で炭化物、褐色土ブロックを含む。遺物の出土はない。なお南西区で検出したSD08溝跡の延長上にあたり、連続する一連の溝であった可能性が考えられる。

SD08溝跡

遺　構（第19図、写真図版32）

南西区、LⅡ・MⅡ・NⅡグリッドにまたがって位置する。南西区で最も低くなる南北方向の窪地に方向を揃えて伸びる。検出長は30.92m、幅は5.4～4.17m、深さは最大83cm、走向はN-13°-E。断面形状は逆台形。プラン西側の輪郭は不規則な出入りが見られる。底面はほぼ平坦となる。堆積土は暗褐色～褐色を呈する細砂もしくは砂質シルトが主体となり、締まりは弱い。水成堆積の状況と考えられる。

遺　物

第78図7～9の土師器、6の須恵器、1の土製品、1・2の石製品が出土。

全体が下位のST01捨て場に位置しており、これから混入したと見られる縄文時代末～弥生時代初頭の土器片、及び石器類が相当数出土している。また古代の土師器、須恵器が若干含まれる。遺構の年代に近いものとしては図版244の1～6の磁器片がある。

SD09溝跡

遺　構（第20図、写真図版32）

南東区平坦面、K Ⅸ～L Ⅸグリッドに位置する。南端がSK70土坑に接し、SD10溝跡を分岐して南北に伸びる。延長は5.7m、幅は55～36cm、深さは最大18cm、走向はN-12°-E。断面形状は逆台形。堆積土は炭化物を含む黒褐色土でⅡb層に相当する。遺物の出土はない。

SD10溝跡

遺　構（第20図、写真図版32）

南東区平坦面、L Ⅸ・Xグリッドに位置する。西端がSD09溝跡に接し、これと直交して東西に伸びる。延長は5.37m、幅は46～21cm、深さは最大15cm、走向はN-84°-W。断面形状は逆台形。堆積土は黒褐色土でⅡb層に相当する。遺物の出土はない。

SD11溝跡

遺　構（第20図、写真図版32）

南東区平坦面、L Ⅸ・Xグリッドに位置する。西端がSK70土坑に接し、北側のSD10溝跡と平行して東西に伸びる。東端は本年度の調査区外に出る。検出長は5.54m、幅は84～50cm、深さは最大13cm、走向はN-87°-W。断面形状は浅い逆台形。堆積土はⅡb層と同質の暗褐色土である。遺物の出土はない。

SD12溝跡

遺　構（第20図、写真図版32）

南東区斜面下部、L Ⅸグリッドに位置する。東西に伸び、両側が本年度調査区外に出る。北に10cm程の間隔を開けてSD11溝跡と平行しており、SK70土坑とほぼ接する位置にある。検出長は7.04m、幅は1.42～0.56m、深さは最大24cm、走向はN-86°-W。断面形状は逆台形。堆積土は炭化物を含む暗褐色土である。

遺　物

第78図10の土師器、3の土錘、鉄滓が出土。

(3) 土　　坑

平成14年度の調査で登録、精査した土坑はSK01～77までで、このうちSK16は平面図記録の欠落があり欠番とした。またSK57は登録時点のミスにより当初から欠番である。従って土坑の総数は75基となっている。各土坑は東区の中央平坦部～斜面部を中心に分布するが、検出面は多様でありその年代も幅がある。また土坑の性格も土壙墓、貯蔵穴と思われるフラスコ状土坑、性格不明のものなど一様ではない。ここでは最初に検出面毎に概要を記し、次いで個別の土坑について記載する。

〔Ⅲ層上面検出〕　SK01・02・03・04・70の5基である。東区の斜面部付近にまとまって分布する。年代の上限は平安時代と考えられる。土坑の性格が明確なのはSK01で、人骨、渡来銭で構成される副葬銭の出土により中世末頃の土葬墓と判断できる。SK02は柱痕跡の存在により掘立柱建物跡の柱穴と判断できるが、やや規模が大きいため土坑として精査を行った。柱穴としての登録（P・）には変更していない。なお周辺に複数の柱穴状小ピットが開口しているが、建物には組めていない。

〔SI01住居跡床面検出〕　古代の住居跡に切られるものでSK05・06の2基が該当する。検出面からの年代は下限が古代という点のみ確定できるが、長楕円形の形状、縄文晩期土器片の出土から縄文時代後期以降の土壙墓ではないかと考えられる。

〔Ⅳa層上面検出〕　SK07・10の2基がある。このうちSK07は人骨、副葬銭の出土から中世末頃の土葬墓と判断できる。本来の検出面であるⅢ層上面では気がつかず、検出できなかったものである。SK10はⅣa2層上面から掘り込まれ、Ⅳa1層に覆われているため弥生時代初頭に年代が限定される。

〔Ⅳb層上面検出〕　土坑の検出はない。

〔Ⅳc層上面検出〕　南東部のSK71・72がある。両者とも小規模で遺構の性格は良くわからないが、縄文晩期頃の遺構と考えられる。

〔Ⅴ層上面検出〕　上記以外で合計64基がある。区域によっては検出面と本来の掘り込み面に食い違いを持つ可能性があるため、以下区域のまとまり別に概観する。

・東区平坦部　HⅧ・HⅨ・IⅧ・IⅨ・JⅨグリッドに位置し、SK42・43・46・47・48・55・56・58・59・61・62・64・65・66土坑の計14基が該当する。この区域はⅣc層の堆積が一定の層厚となっており、検出ミスを除けば本来の掘り込み面がⅤ層上面であったと考えられる。年代は縄文中期末～後期中葉前後に押さえられよう。土坑の形状、規模は様々でその性格を判断できる材料を欠く。Ⅴ層上面の起伏や植物根による攪乱を誤認しているものが含まれる可能性もある。SK65は2m以上の規模を持つが、これは風倒木痕の一部かも知れない。

・東区斜面下部　HⅧ・IⅧ・JⅧグリッドに位置するSK44・45・49・60・63の5基が該当する。層準の状況としては東区平坦部とほぼ等しい地点であり、遺構の内容も同様である。

・東区斜面上部　IⅦ・Ⅷグリッドに集中しており、SK11・17～20・50～54・67～69の13基が該当する。この区域はⅣa層の分布が途切れるST02の南西限付近にあたり、同様にⅢ層、Ⅳb層、Ⅳc層も途切れがちとなる。検出面よりも本来の掘り込み面が上位に位置していた可能性を否定できない遺構を含んでいる。遺物の出土はSK68以外になく、時期決定は難しいが縄文後期～晩期、ないし弥生時代初頭にかけてのものと思われる。形状はSK50のフラスコ状土坑があるが、他は皿状に窪む楕円形等が主となり東区平坦部のように自然現象による撹乱等を誤認したものを含む恐れがある。SK68は長楕円形で一端に赤色顔料を散布した土壙墓である。時期の詳細は不明だが縄文晩期前後と考えられる。

・南東区平坦部　第2次調査で検出した、KⅨ・LⅨグリッドの土坑で、SK73～77の5基が該当する。Ⅳc層の堆積が良好な場所で、年代は縄文中期末～後期中葉前後に限定して良いかと思われる。北に隣接する東区平坦部と同様に不定形で浅いものが主となり、植物根による攪乱を含む恐れがある。SK73は長軸3mを超えるもので底面付近に焼土ブロックの堆積が見られるが、遺構の性格は不明である。

・中央区平坦部　大グリッドではIⅥ・JⅤ・JⅥ・KⅤ・KⅥ・KⅦグリッドにまとまって分布する、SK12～15･21～41土坑の25基が該当する。この区域は表土Ⅰ層直下でほぼⅤ層が露出する場所にあたり、Ⅱ層～Ⅳc層が大幅に削平を受けているものと考えられる。そのため、遺構によっては本来の掘り込み面がⅤ層より上位に位置するものを含んでいる可能性がある。年代の上限は縄文中期末と押さえられるが、下限は不明である。これらの土坑にはSK27･30･32のフラスコ状土坑、円筒形に掘り込まれ深さが50cmを超えるSK29といった貯蔵穴としての性格が想定される土坑が含まれる。SK29・30・31・32等からは縄文後期中葉の土器、土偶等の出土があり、この時期の集落に伴う貯蔵穴がある程度まとまって構築されていた区域と考えられる。前述のように本来の土坑の深さが現状より大きい数値だったとすれば、これら以外にも同様な遺構が含まれているかも知れない。SK12・21は楕円形の平面形状で、SK12には赤色顔料、SK21からは石鏃の出土があり、縄文晩期前後の時期の土壙墓ではないかと考えている。

・北区　Ⅴ層上面の検出土坑はSK08・09の2基がある。Ⅳc層の堆積が良好な地点であり、検出面から縄

文中期末～後期前葉前後の年代が想定される。遺構としては不定形で出土遺物もなく、性格は判断し難い。V層上面の起伏や植物根による攪乱を誤認した可能性もある。

SK01 土坑

遺　構（第21図、写真図版11）

東区中央平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面。平面形状は若干歪な長方形で規模は長径145cm、短径105cm、深さ26cm。主軸方位はN-3°-W。断面形状は逆台形を呈し、壁面は急傾斜で立ち上がる。底面の中央部は堅く締まりほぼ平坦である。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の1層と褐色土ブロックを含む暗褐色土の2層に区分される。人為的に埋め戻した状態と捉えられる。

中央部からは埋葬された人骨1体分、及び副葬銭が出土している。人骨は北頭位で顔面を西に向けた仰臥屈葬と判断される。人骨の保存状況は全体に不良だが頭骨、下顎の一部、四肢骨の一部、腰骨が部分的に原位置を保った状態である。歯列の保存状況は良好で上下臼歯列が確認できた。副葬銭は中央部と南側の2箇所からまとまって出土した。中央部は胸の位置付近で永楽通宝2枚、同4枚がそれぞれ密着した状態となっている。南側は下肢の位置に相当し洪武通寶、永楽通宝が1点ずつ確認される。銭貨以外では鉄製品の破片が埋土中に1点あるが器種不明で副葬品かどうかは判断できない。

遺　物

第78図1～8の古銭が出土。

人骨（写真図版360、第4表）

歯式は次の通りである。咬耗が進んでおり、壮年～老年の個体であろう。

7 6　4 3	3 4
7 6 5 4 3 2	3 4 5 6

小結　本土坑は渡来銭のみからなる副葬銭、焼成を受けていない人骨の状態から見て、寛永通宝鋳造以前、中世末期の土葬墓と考えられる。

SK02 土坑

遺　構（第21図、写真図版11）

東区中央平坦部、F Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面。平面形状は若干歪な方形で規模は長径91cm、短径86cm、深さ23cm。主軸方位はN-80°-E。断面形状は浅い逆台形で、壁面は急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の1層と暗褐色土の2層に区分される。人為堆積かどうかは判断できない。北東側の壁面付近、及び底面の壁際にかけて焼土粒、炭化物が集中している。現地性の焼土ではなく、二次的に移動して堆積した焼土ブロックである。遺物の出土はない。

〔小結〕　本土坑は検出面から古代以降の年代が考えられる。堆積土に焼土を含むが土坑の機能と関わるかどうかは不明である。

SK03 土坑

遺　構（第21図、写真図版11）

東区北側平坦部、F Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面。平面形状は歪な楕円形で規模は長径66cm、短径56cm、深さ45.5cm、主軸方位はN-55°-E。断面形状は円筒形を呈し、壁面は急傾斜で立ち上がる。底面

は北東側がやや浅くなる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の1層と、中心よりやや西側に底面付近まで落ち込む炭化物を含んだ黒色土の2層、暗褐色土の3層に区分される。1・2層が柱痕跡、3層は埋め戻し土と思われる。

遺　物

第78図4の土器、1の石器が出土。

底面よりやや上位の北東壁面付近から円礫と砥石が出土した。

小結　本土坑は検出面から古代以降の年代が考えられる。断面の状態から柱穴と判断されるが、他の柱穴との組み合わせが不明で建物には組めていない。

SK04土坑

遺　構（第21図、写真図版12）

東区南側斜面上部、KⅧグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面。平面形状は円形で規模は長径47cm、短径44.5cm、深さ30cm。断面形状は擂鉢形である。堆積土は焼土粒、炭化物、焼骨細片、及び2層土起源のブロックが含まれる暗赤褐色土の1層と、少量の焼土粒と焼骨の微細破片をわずかに含む黒褐色土の2層からなる。層界は混入物の差で捉えられる。1層下部に少量の焼成を受けた粘土ブロックが見受けられる。堆積土全体を通して焼土粒、焼骨細片が混入しているが、遺構底面、及び壁面には焼成の痕跡は見られない。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面から古代以降のものと考えられる。堆積土中に焼土粒や焼骨が存在することから、削平により消失した竪穴住居跡に関わる諸施設、貯蔵穴、カマド煙道等の残存部の可能性が考えられる。

SK05土坑

遺　構（第22図、写真図版12）

北区中央、EⅤ・FⅤグリッドの境界に位置する。土坑全体がSI01住居跡に切られており、検出面は住居床面である。平面形状は楕円形で長径117cm、短径68cm、深さ33cm、主軸方位はN-85°-E。断面形状は皿形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は概ね締まりの弱い黒褐色土と捉えられたが、調査手順の手違いにより記録を欠くため、詳細は不明である。内部から10～20cm大の角礫、亜角礫が10個前後、密接するように出土している。ほぼ底面に接しており、土坑底面を覆うように人為的に配置された可能性、もしくは土坑上部の配石に由来し陥没により落ち込んだものの可能性が考えられる。

遺　物

第78図2の石器が出土。

小結　検出面から古代以前の土坑であり、形状から見て縄文時代後半期～弥生時代の土壙墓の可能性があるが、埋葬遺体、副葬品等の判断材料はなく確実ではない。

SK06土坑

遺　構（第22図、写真図版12）

北区中央、EⅤ·FⅤグリッドの境界に位置する。前述したSK05土坑の南側至近距離にあり、同様にSI01住居跡に切られる。また南東隅の一部は調査区外に伸びる。検出面は住居床面。平面形状は長楕円形で長径200cm、短径57cm、深さ20cm、主軸方位はN-52°-W。断面形状は浅い皿形を呈し、壁面は緩やかに立ち上が

る。底面は平坦だが中央からやや南東側は一段深く掘り込まれている。堆積土は炭化物、褐色土ブロックを含んだ黒褐色土の単層である。

遺　物

第78図5の土器が出土。堆積土内から縄文時代後期中葉と思われる土器片が出土した。

小結　形状から見て、SK05土坑と同様に縄文時代後半期～弥生時代の土壙墓の可能性がある。SK05と堆積土、規模等が類似しており、同時期のものではないかと見られる。

SK07土坑

遺　構（第22図、写真図版12）

東区中央斜面下部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅣa層上面だが、掘り込み面はⅢ層上面以上になる。平面形状は隅丸長方形で、長径88cm、短径65cm、深さ14cm、主軸方位はN-2°-E。断面形状は皿形を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦。堆積土は黒褐色土の単層である。

遺　物

第78図9の古銭が出土。北側底面付近から永楽通宝が出土している。人骨と思われる骨細片の出土もあるが、保存状況は不良で部位は不明、出土位置も記録できなかった。

小結　本土坑は出土遺物から中世末期の土壙墓と考えられる。

SK08土坑

遺　構（第22図、写真図版13）

北区東側、F Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径126cm、短径88cm、深さ12cm、主軸方位はN-22°-W。断面形状は浅い皿形を呈し底面中央にやや凹凸がある。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックを含んだ暗褐色土の単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期と考えられる。遺構の性格は不明。

SK09土坑

遺　構（第22図、写真図版13）

北区東側、F Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形は歪な楕円形で長径81cm、短径30cm、深さ20cm、主軸方位はN-71°-E。断面形状は概ね皿形を呈しているが、底面は若干起伏がある。底面から壁面にかけて緩く立ち上がる。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の1層のみ。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面からSK08土坑と同様に縄文中期末～後期と考えられる。遺構の性格は不明。

SK10土坑

遺　構（第22図、写真図版13）

東区南側斜面下部、K Ⅸグリッドに位置する。南半は第2次調査で精査を行った。検出面はⅣa2層上面。平面形状はやや歪んだ楕円形で長径126cm、短径114cm、深さ37cm、主軸方位はN-55°-E。断面形状は逆台形を呈し、壁面は東側の一部で上半の傾斜が緩くなる部分を持つが、全体としては一定の傾斜で立ち上がる。底面は概ね平坦である。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の1層と、やや粗粒な暗褐色土の2層からなる。なお、Ⅳa1層の褐色土は本土坑を覆う。

遺　物

第78図6の縄文後期の土器片が出土している。

小結　本土坑の時期は検出面から見て縄文晩期末から弥生時代初頭に限定される。遺構の性格は不明。

SK11 土坑

遺　構（第23図、写真図版13）

東区中央斜面上部、IⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はほぼ円形で長径102cm、短径96cm、深さ23cm。断面形状は浅い円筒形で壁面は垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。堆積土は炭化物と焼土粒の混入する1層と焼土粒を含み締まりの弱い2層からなる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降、弥生時代初頭にかけての年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK12 土坑

遺　構（写真図版14）

中央区南側平坦部、KⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。歪んだ楕円形のプランを検出し、北西側の端に赤変する部分を確認した。赤色顔料が散布されている土壙墓の可能性を考慮し、半裁、掘り下げを行ったが、断面では堆積土と地山の区別がつかず底面と壁面が把握できなかった。このため完掘記録を欠く。検出時点でのプランではC字状に近い楕円形で、規模は長径157cm、短径82cm、深さは不明、主軸方位はN-60°-W付近となる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。赤色顔料の分布から見て土壙墓の可能性があるが精査では判断がつかなかった。

SK13 土坑

遺　構（第23図、写真図版14）

中央区南側平坦部、KⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径122cm、短径73cm、深さ20cm、主軸方位はN-63°-E。断面形状は皿形。壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は褐色土ブロックを少量含む暗褐色土単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK14 土坑

遺　構（第23図、写真図版14）

中央区南側平坦部、KⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径90cm、短径58cm、深さ20cm、主軸方位はN-7°-E。断面形状は逆台形。壁面は概ね緩く内湾して立ち上がる。底面はほぼ平坦。堆積土は均質な細砂質の暗褐色土主体で、底面に酸化鉄層が形成される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK15 土坑

遺　構（第23図、写真図版14・15）

中央区南側平坦部、KⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径102cm、短径

68cm、深さ 29cm、主軸方位は N-15°-E。断面形状は壁面が急傾斜で立ち上がる逆台形を呈する。底面は概ね平坦。堆積土は黒褐色土ブロックを少量含む暗褐色土単層である。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK16 土坑

東区ⅠⅧグリッド付近に位置しており、Ⅴ層上面で検出し登録したが、精査手順のミスにより実測・写真記録を欠き詳細が不明となってしまったため、欠番扱いとする。メモ記録を参照すると径 1m 未満の楕円形を呈する小規模な土坑であり、遺物出土はない。

SK17 土坑

遺　構（第 23 図、写真図版 15）

東区中央斜面上部、ⅠⅧグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はプランに出入りのある不整形を呈し、規模は長径 160cm、短径 128cm、深さ 16cm。断面形状は皿形で底面は平坦。壁面は概ね外傾して立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックを含む黒褐色土である。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降弥生時代初頭にかけての年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK18 土坑

遺　構（第 23 図、写真図版 15）

東区中央斜面上部、ⅠⅧグリッドに位置する。南側で SK19 土坑を切る。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 80cm、短径 56cm、深さ 22cm、主軸方位は N-77°-W。断面形状は逆台形を呈しており、壁面は西側に段を持つ。底面は概ね平坦。堆積土はシルト質の黒褐色土である。全体的に均質だが、下半は暗褐色に漸変する。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降弥生時代初頭にかけての年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK19 土坑

遺　構（第 23 図、写真図版 15）

東区中央斜面上部、ⅠⅧグリッドに位置する。SK18 土坑に北側で切られる。検出面はⅤ層上面。平面形状は残存部分から見て長楕円形を呈し長径 138cm 以上、短径 64cm、深さ 23cm、主軸方位は N-34°-E。断面形状は概ね皿形だが南西端が一段深く掘り込まれる。壁面は緩く立ち上がり、底面は概ね平坦である。堆積土は褐色土ブロックを含む黒褐色土である。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降弥生時代初頭にかけての年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK20 土坑

遺　構（第 24 図、写真図版 16）

東区中央斜面上部、ⅠⅦグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はほぼ円形で長径 58cm、短径 50cm、深さ 31cm。断面形状は南西側に段はあるものの概ね壁面がなだらかに立ち上がる擂鉢形を呈する。堆積土は全体に均質な黒褐色土単層。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降弥生時代初頭にかけての年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK21 土坑

遺　構（第24図、写真図版16）

中央区中央平坦部、K Ⅶグリッドに位置する。調査開始時点で入れた試掘トレンチにより南西側半分を掘り過ぎてしまい、トレンチ壁面で遺構の存在に気付いた。平面的な検出面はⅤ層上面。平面形状は残存する部分から楕円形と推定。長径122cm、短径77cm、深さ14cm、主軸方位はN-72°-W付近と見られる。断面形状は浅い逆台形を呈している。壁面は平坦な底面から概ね緩やかに立ち上がるが傾斜の強い部分もあり一定ではない。堆積土は暗褐色土の単層である。

遺　物

第78図3・4の石器が出土。中央と南東側に各1点の石鏃が出土している。出土レベルは底面より数cm上位にある。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。形状が楕円形を呈する点、石鏃が2点出土する点から、縄文晩期頃の土壙墓の可能性も考えられる。

SK22 土坑

遺　構（第24図、写真図版16）

中央区南西側平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径94cm、短径87cm、深さは55cm。断面形状は北東側が深く落ち込み、壁面は徐々に傾斜を強めて立ち上がる。底面は平坦な部分もあるが北東側で落ち込む。堆積土はしまりの強いにぶい黄褐色土が主体。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK23 土坑

遺　構（第24図、写真図版16）

中央区南側、K Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径170cm、短径94cm、深さ42cm、主軸方位N-71°-W。断面形状は逆台形で壁面は緩く立ち上がる。底面には若干の起伏があり東側がやや下がる。堆積土は底面に明褐色土の3層が広がり、上位に3層土のブロックを多量に含む僅かに彩度の強い明褐色の4層、にぶい黄褐色土の2層、褐色土の1層で構成される。全体にレンズ状の層界で自然堆積と考えられる。

遺　物

第78図7の縄文後期中葉の土器片が堆積土中より出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物より縄文後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK24 土坑

遺　構（第24図、写真図版17）

中央区平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は長楕円形で長径190cm、短径76cm、深さ27cm、主軸方位はN-66°-W。断面形状は逆台形で壁面の立ち上がりは急傾斜。底面は平坦。堆積土はにぶい黄褐色土主体である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK25 土坑

遺　構（第 24 図、写真図版 17）

中央区平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径 90cm、短径 82cm、深さ 19cm。断面形状は逆台形で壁面は急傾斜で立ち上がる。底面はやや起伏があるものの概ね平坦である。堆積土はにぶい黄褐色土が主体となる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK26 土坑

遺　構（第 25 図、写真図版 17）

中央区平坦部、K Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 70cm、短径 55cm、深さ 15cm、主軸方位は N-3°-E。断面形状は皿形で底部中央から緩く立ち上がる。堆積土は細砂ブロックが少量混入するにぶい黄褐色土である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK27 土坑

遺　構（第 25 図、写真図版 17）

中央区平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はやや歪な円形で断面形状はフラスコ状となる。底面は皿状に中央が窪み、括れ部分から上部が浅く広がる。規模は開口部径が 138 × 106cm、底面径 108 × 102cm、深さ 74cm。堆積土は最下層に炭化物と褐色土ブロックを含む暗褐色土、中位にほぼ水平に堆積する褐色土層、上半に砂質の褐色土層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。いわゆるフラスコ状土坑であり貯蔵穴と考えられる。

SK28 土坑

遺　構（第 25 図、写真図版 18）

中央区平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 80cm、短径 67cm、深さ 25.5cm、主軸方位は N-56°-W。断面形状は逆台形で壁面は一定の傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は炭化物を含む褐色土が主体となる。

遺　物

縄文晩期と思われる土器片が少量出土した。

小結　本土坑は検出面と出土遺物から縄文晩期の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK29 土坑

遺　構（第 25 図、写真図版 18）

中央区平坦部、J Ⅵグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径 85cm、短径 78cm、深さ 55cm。断面形状は円筒形で壁面は平坦な底面から急傾斜で立ち上がる。堆積土は褐色土の 1 層、炭化物を含む暗褐色土の 2 層、明褐色土の 3 層、1 層土より彩度が若干強い褐色土の 4 層に区分される。

遺　物

第78図8の縄文後期中葉の土器片が堆積土中から、焼成粘土塊、土坑底面の3箇所から琥珀原石破片が出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物から縄文後期中葉の年代が想定される。円筒形を呈することから貯蔵穴の可能性がある。

SK30土坑

遺　構（第25図、写真図版18）

中央区平坦部、JⅥグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形、断面形状は円筒形となる。底面は皿状に中央が窪み、壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、南側ではオーバーハングしておりフラスコ状に近い。規模は開口部径が114×106cm、底面径100×94cm、深さ69cm。堆積土は褐色土の1・3層と炭化物を含むにぶい黄褐色土の2層からなる。

遺　物

第78図の縄文後期中葉の土器9～13、剥片石器5・6が出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物から縄文後期中葉の年代が想定される。いわゆるフラスコ状土坑に近い形状であり、貯蔵穴と考えられる。

SK31土坑

遺　構（第25図、写真図版18）

中央区平坦部、JⅥグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径114cm、短径102cm、深さ17cm。北西側で柱穴状ピットP85に切られる。断面形状は皿形を呈しており、平坦な底面から緩やかに外傾しながら壁面が立ち上がる。堆積土は褐色土の単層である。

遺　物

縄文後期前葉～中葉の土器片が出土している。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK32土坑

遺　構（第26図、写真図版19）

中央区平坦部、JⅥグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形。断面形状は平坦な底面から垂直に近い立ち上がりで壁面中位がわずかに括れるフラスコ状となる。規模は開口部径が118×108cm、底面径107×90cm、深さ112cm。堆積土は褐色土、にぶい黄褐色土が主体となり、底部付近に壁面の崩落ブロックと思われる黄褐色土層が見られる。層界は中央が下がるレンズ状を呈し自然堆積と考えられる。

遺　物

第78図14の土器、5～7の土製品が出土。

底面から縄文時代後期中葉の土偶と土器片が出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物から縄文後期中葉の年代が想定される。フラスコ状を呈しており貯蔵穴と考えられる。完形に近い土偶の出土が特筆される。

SK33土坑

遺　構（第 26 図、写真図版 19）

中央区平坦部、ＫＶグリッドに位置する。検出面はＶ層上面。平面形状は歪な楕円形で長径 138cm、短径 118cm、深さ 23cm、主軸方位は N-3°-W。断面形状は底面中心部に向けて開口部から緩やかに落ち込む皿形を呈する。底面北側と中央にそれぞれ柱穴状の落ち込みがある。北側は径 56cm、深さ 15cm、中央付近側は径 42cm、深さ 28cm。堆積土は黄褐色土ブロックが少量入るにぶい黄褐色土が主体となる。

遺　物

堆積土中より縄文中～後期と思われる土器細片が出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物より縄文中期末～後期の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK34 土坑

遺　構（第 26 図、写真図版 19）

中央区平坦部、ＪＶグリッドに位置する。検出面はＶ層上面。平面形状は歪な円形で長径 102cm、短径 94cm、深さ 34cm。断面形状は浅い円筒形で多少起伏のある底面から壁面が急傾斜で立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックと炭化物を少量含む暗褐色土からなる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK35 土坑

遺　構（第 26 図、写真図版 20）

中央区平坦部、ＪＶグリッドに位置する。検出面はＶ層上面。平面形状は円形で長径 76cm、短径 65cm、深さ 29cm。断面形状は逆台形を呈し平坦な底面から壁面が急傾斜で立ち上がる。堆積土はしまりの弱い暗褐色土の 1 層と、それよりやや明るい色調の暗褐色土 2 層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK36 土坑

遺　構（第 26 図、写真図版 20）

中央区平坦部、ＪⅥグリッドに位置する。検出面はＶ層上面。平面形状は円形で長径 123cm、短径 110cm、深さ 13cm。断面形状は皿形を呈で底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を多く含む暗褐色土の単層。

遺　物

弥生時代初頭と思われる土器片が少量出土している。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK37 土坑

遺　構（第 27 図、写真図版 20）

中央区平坦部、ＪＶグリッドに位置する。検出面はＶ層上面。平面形状は円形で長径 86cm、短径 82cm、深さ 12cm。断面形状は皿形を呈しており、僅かな起伏のある底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK38 土坑

遺　構（第27図、写真図版20）

中央区平坦部、ⅠⅤグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は隅丸方形で長径68cm、短径66cm、深さ28cm。断面形状は逆台形を呈し、平坦な底面から壁面が急傾斜で立ち上がる。堆積土は褐色土粒や炭化物を含む暗褐色土単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK39 土坑

遺　構（第27図、写真図版21）

中央区平坦部、ⅠⅥグリッドに位置する。調査開始時点で入れた試掘トレンチにより南西側の一部を掘り過ぎてしまい、トレンチ壁面で遺構の存在に気付いた。平面的な検出面はⅤ層上面。残存部でみると平面形状は楕円形と思われ、長径130cm以上、短径133cm、深さ21cm。断面形状は皿形を呈し、僅かに起伏のある底面から壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を多く含む黒褐色土の1層と、下部に堆積する暗褐色と褐色の砂質シルトブロックで構成される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK40 土坑

遺　構（第27図、写真図版21）

中央区平坦部、ⅠⅤグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径58cm、短径52cm、深さ24cm。断面形状は逆台形を呈し、平坦な底面から直線的に立ち上がる。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層で構成される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK41 土坑

遺　構（第27図、写真図版21）

中央区平坦部、ⅠⅥグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はやや歪な楕円形で長径136cm、短径80cm、深さ20cm、主軸方位はN-24°-W。断面形状は逆台形を呈し、底面は南西側が若干低くなり、急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の1層と、遺構下部から北東側上部まで炭化物、及び暗褐色土ブロックを含む褐色土の2層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK42 土坑

遺　構（第27図、写真図版21）

東区中央平坦部、ⅠⅨグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形、長径106cm、短径80cm、深さ20cm、主軸方位はN-14°-W。断面形状は逆台形を呈し、壁面は外傾し立ち上がる。底面は概ね平坦だが南側にやや下がる。堆積土は褐色土粒を含む黒褐色土の単層からなる。

遺　物

第78図の縄文時代後期中葉の土器片15～20が堆積土中から出土している。

小結　本土坑は検出面、出土遺物より縄文後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK43 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 22）

東区中央平坦部、I Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。調査時の手違いにより南側の一部を掘りすぎており、本来の形状は確実ではないが楕円形と思われる。規模は長径 174cm、深さ 30cm、主軸方位は N-84°-W 付近。断面形状は皿形を呈するが、底面に大きな起伏がある。壁面は急角度で外傾しながら立ち上がる。堆積土は焼土粒が集中する赤褐色土の 1 層、焼土粒と炭化物を含む暗褐色土の 2 層、炭化物を含む暗褐色土の 3 層に区分される。壁面、及び底面に焼成の痕跡がみられないため現地性のものとは考えにくい。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK44 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 22）

東区南側斜面下部、J Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は南東側がやや張り出す楕円形で長径 126cm、短径 101cm、深さ 31cm、主軸方位は N-69°-E。断面形状は皿形を呈しており、底面東側に起伏をもち、壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含んだ暗褐色土の単層でⅣ c 層下部の層相に類似する。自然堆積と考えられる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK45 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 22）

東区南側斜面下部、J Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で長径 70cm、短径 64cm、深さ 20cm。断面形状は皿形を呈し、底面は東側に傾斜する。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含んだ暗褐色土の単層でⅣ c 層下部の層相に類似する。自然堆積と考えられる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK46 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 22）

東区南側平坦部、J Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は不整形で長径 114cm、短径 78cm、深さ 26cm、主軸方位は N-12°-E。北側に径 46cm 程の落ち込み部分がある。断面形状は底面に起伏はあるが皿形を呈する。壁面は概ね緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色土の 1 層、褐色土ブロックが混入する暗褐色土の 2 層に区分される。褐色土ブロックの入り方から人為堆積と思われる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK47 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 23）

東区中央平坦部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 84cm、短径 60cm、

深さ 14cm、主軸方位は N-36°-E。底面は掘りすぎた部分があり正確には把握できないが、起伏が大きいと考えられる。壁面は急角度に立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単層。断面図の 2 層は掘りすぎたⅤ層砂層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK48 土坑

遺　構（第 28 図、写真図版 23）

東区中央平坦部、I Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 136cm、短径 70cm、深さ 40cm、主軸方位は N-82°-E。断面形状は擂鉢形を呈しており、底面は窪みをもち、壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックと炭化物の入る黒褐色土の単層からなる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK49 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 23）

東区中央斜面下部、J Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。調査時の手違いにより東側半分を掘りすぎている。平面形状は楕円形と見られる。規模は長径 186cm、短径は残存部で 52cm、主軸方位は N-7°-W 付近。断面形状は擂鉢形で、北側が緩く、南側はやや急角度で立ち上がる。堆積土は炭化物、褐色土ブロックを少量含む黒褐色土の単層からなる。

遺　物

第 78 図の縄文中期末と思われる土器片 21 が堆積土中から出土した。

小結　本土坑は検出面、出土遺物により縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK50 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 23）

東区中央斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は円形で、断面形状はフラスコ状となる。底面は概ね平坦で西側の壁面がオーバーハングして立ち上がる。規模は開口部径が 83 × 69cm、底面径が 108 × 102cm、深さ 69cm。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の 1 層、崩落土と思われる褐色土の 2 層、炭化物を含む暗褐色土の 3 層、暗褐色土の 4 層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。いわゆるフラスコ状土坑であり貯蔵穴と考えられる。

SK51 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 24）

東区中央斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 60cm、短径 44cm、深さ 28cm、主軸方位は N-89°-E。断面形状は逆台形で中央部から東側が一段低くなり、壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含む褐色土の単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK52 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 24）

東区中央斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 100cm、短径 64cm、深さ 32cm、主軸方位は N-12°-E。断面形状は皿形を呈し、平坦な底面からなだらかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK53 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 24）

東区中央斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は不整形。長径 63cm、短径 58cm、深さ 30cm、N-28°-W。断面形状は逆台形を呈し、底面は概ね平坦、壁面は外傾し立ち上がる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の 1 層と、褐色土の 2 層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK54 土坑

遺　構（第 29 図、写真図版 24）

東区中央斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は長楕円形で長径 87cm、短径 38cm、深さ 21cm、主軸方位は N-10°-E。断面形状は皿形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK55 土坑

遺　構（第 30 図、写真図版 25）

東区中央平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 104cm、短径 67cm、深さ 19cm、主軸方位は N-12°-W。断面形状は皿形を呈しており、平坦な底面からなだらかに立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックを含む黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK56 土坑

遺　構（第 30 図、写真図版 25）

東区中央平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径 112cm、68cm、深さ 39cm、主軸方位は N-71°-E。断面形状は擂鉢形を呈しており、底面は中央が窪み、壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の 1 層と、焼土ブロックと炭化物が集中する赤褐色土層の 2 層からなる。壁面や底面に焼成痕は見られない。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK58 土坑

遺　構（第 30 図、写真図版 25）

東区中央平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は長楕円形で長径79cm、短径31cm、深さ24cm、主軸方位はN-22°-W。断面形状は逆台形を呈しており、概ね平坦な底面から壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は褐色土ブロック、及び炭化物を含む黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK59 土坑

遺　構（第30図、写真図版26）

東区中央平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径103cm、短径45cm、深さ23cm、主軸方位はN-56°-W。全体は浅く皿状を呈するが南西部の一部が落ち込む。壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土はⅣc層下部に相当する黒褐色土の単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK60 土坑

遺　構（第30図、写真図版26）

東区斜面下部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径78cm、短径58cm、深さ24cm、主軸方位はN-31°-W。断面形状は逆台形。壁面は緩やかに外傾し立ち上がる。南東側底面に径28cm程一段落ち込む部分がある。堆積土は炭化物を含むⅣc層下部に相当する黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK61 土坑

遺　構（第30図、写真図版26）

東区平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪んだ楕円形で長径63cm、短径42cm、深さ46cm、主軸方位はN-45°-E。断面形状は半円形で、壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の1層と、しまりの弱い暗褐色土の2層に区分される。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK62 土坑

遺　構（第31図、写真図版26）

東区平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はプランに出入りのある不整形を呈し、長径72cm、短径56cm、深さ24cm、主軸方位はN-28°-E。断面形状は半円形で南西側に落ち込みがある。壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含む黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK63 土坑

遺　構（第31図、写真図版27）

東区斜面下部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪な楕円形で長径86cm、短径42cm、深さ29cm、主軸方位はN-81°-E。断面形状は半円形で壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は炭化物を含

む黒褐色土の1層と、暗褐色土の2層に区分される。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK64 土坑

遺　構（第31図、写真図版27）

東区平坦部、H Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪な楕円形で長径68cm、短径44cm、深さ24cm、主軸方位はN-50°-E。断面形状は逆台形を呈し、壁面は急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物を含むⅣc層下部に相当する黒褐色土の単層。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK65 土坑

遺　構（第31図、写真図版27）

東区平坦部、H Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状はプランに出入りのある不整形を呈しており、東側は調査区外となる。検出範囲での最大径240cm、深さ100cm 以上。底面は南側が落ち込み、全体に凹凸や段差が見られる。南壁側が急傾斜、北壁側が緩やかに立ち上がる。堆積土はⅣb層の落ち込みととれる褐色土の1層、炭化物を含む暗褐色土の2層、褐色土ブロックを含む暗褐色土の3層に区分される。自然堆積と考えられる。

遺　物

第78図の砥石7が堆積土中から出土している。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明だが規模や不整な形状から見て風倒木痕の可能性がある。

SK66 土坑

遺　構（第31図、写真図版27）

東区平坦部、H Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪んだ円形で長径66cm、短径58cm、深さ22cm、主軸方位はN-80°-E。断面形状は西側に落ち込みがあり、東側は皿形を呈する。壁面は急傾斜で立ち上がる。堆積土は暗褐色土単層。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK67 土坑

遺　構（第32図、写真図版28）

東区斜面上部、I Ⅷグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は南西部に突出のある楕円形で長径77cm、短径50cm、深さ13cm、主軸方位はN-17°-E。断面形状は中央にやや高まりを持つ皿形。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色土ブロックを含んだ黒褐色土の単層。遺物の出土はない。
小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK68 土坑

遺　構（第32図、写真図版28）

東区斜面上部、IⅧグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は長楕円形で若干C字状に曲がった形となる。規模は長径154cm、短径54cm、深さ12cm、主軸方位はN-52°-E。断面形状は皿形。壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は褐色土ブロックを含む黒褐色土の単層である。南西端底面には、径25cm程の円形の範囲で赤色顔料の分布を確認した。この部分から管玉が1点出土している。

遺　物

第79図3の石製品が出土。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。底面に赤色顔料がみられ、管玉も出土することから縄文後期～弥生時代初頭にかけての土壙墓の可能性が高い。

SK69土坑

遺　構（第32図、写真図版28）

東区斜面上部、IⅧグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径84cm、短径44cm、深さ12cm、主軸方位はN-13°-E。断面形状は西側が落ち込み、東側は皿形を呈する。壁面は東側は緩やかに、西側は急傾斜で立ち上がる。堆積土はⅣc層下部と思われる黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末以降の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK70土坑

遺　構（第32図、写真図版28）

南東区平坦部、LⅨグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面。SD09・SD11溝跡と接しているが、堆積土に違いが観察されず、同時存在ではないかと考えられる。平面形状は長方形で長径216cm、短径95cm、深さ46cm、主軸方位はN-18°-E。断面形状は逆台形。壁面は急斜面で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層で、褐色土ブロックが多く含まれており人為的に埋め戻された状態と見られる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より古代以降の年代が想定される。遺構の性格は不明である。

SK71土坑

遺　構（第32図、写真図版29）

南東区平坦部、KⅨグリッドに位置する。検出面はⅣc層上面だが、堆積土はⅣa層が落ち込む状態であり、本来はⅣb層上面が掘り込み面であった可能性がある。平面形状は円形で長径60cm、短径53cm、深さ29cm。断面形状は逆台形。壁面は急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土はⅣa層と類似する暗褐色土の単層。

遺　物

第79図の縄文時代晩期と思われる土器片22が出土。

小結　本土坑は検出面、出土遺物より縄文時代晩期頃の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK72土坑

遺　構（第32図、写真図版29）

南東区平坦部、KⅨグリッドに位置する。検出面はⅣc層上面。平面形状は円形で長径57cm、短径54cm、

深さ15cm。断面形状は逆台形。壁面は急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色土の単層で底面に酸化鉄層が形成されている。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文晩期頃の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK73 土坑

遺　構（第33図、写真図版29）

南東区平坦部、K Xグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形を基調とするがプランに出入りのある不整形となっており、規模は長径369cm、短径216cm、深さ58cm、主軸方位はN-1°-W。中央が舟状に低くなり北側に段差を持つ。北壁際には径52cm、深さ14cm の柱穴状の落ち込みがある。横断面の形状は擂鉢形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含みⅣc層上部に相当すると思われる黒色土の1層、暗褐色土の2層、褐色土ブロックを含む黒褐色土の3層、炭化物、及び下部に焼土ブロックを含む褐色土の4層に区分される。底面には焼成痕が見られず焼土ブロックは二次的に移動したものと思われる。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面、堆積土より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK74 土坑

遺　構（第33図、写真図版29）

南東区平坦部、K Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪んだ長楕円形で長径150cm、短径80cm、深さ29cm、主軸方位はN-84°-E。西側に径44cm、深さ24cm の柱穴状遺構を有する。断面形状は逆台形。壁面は北側が急傾斜で、南側はなだらかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で狭い。堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層。

遺　物

堆積土中より縄文時代後期～晩期と思われる土器片の出土がある。

小結　本土坑は検出面、出土遺物より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK75 土坑

遺　構（第33図、写真図版30）

南東区平坦部、K Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は楕円形で長径164cm、短径113cm、深さは29cm、主軸方位はN-75°-E。断面形状は皿形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が多い。堆積土は黒褐色土の単層である。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK76 土坑

遺　構（第33図、写真図版30）

南東区平坦部、K Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は東側がやや広がる楕円形で、長径107cm、短径78cm、深さは37cm、主軸方位はN-84°-W。底面東側に径28cm、深さ27cm の柱穴状の落ち込みがある。断面形状は擂鉢形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

SK77 土坑

遺　構（第33図、写真図版30）

南東区平坦部、K Ⅸグリッドに位置する。検出面はⅤ層上面。平面形状は歪んだ楕円形で長径94cm、短径60cm、深さは19cm、主軸方位はN-56°-W。断面形状は皿形を呈し、底面にやや起伏がある。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色土の単層。遺物の出土はない。

小結　本土坑は検出面より縄文中期末～後期中葉の年代が想定される。遺構の性格は不明。

(4) 土　器　棺　墓

SR01 土器棺墓

遺　構（第34図、写真図版33）

南西部のST01捨て場西側、O Ⅰ 8グリッドに位置する。試掘トレンチT13内部で検出、精査したものである。T13はST01の範囲を確認する目的で設定し、Ⅲ層下位に層厚10～30cmで堆積するⅣa層包含層を検出、包含層層の掘り下げを行った。この作業の終盤段階でトレンチ西端において横位の土器表面と複数の円礫を検出し、周囲を精査した結果楕円形の掘り方が見られたため土器棺墓として登録した。検出面はⅣa層下位の砂層であり、掘り方堆積土と地山の区別は容易である。

なお調査は土器上面の露出→記録→土器上半のたち割（縦断面）→土器内部断面の記録→土器内部の完掘→土器下位破片の平面記録→掘り方の半裁→掘り方断面記録→掘り方完掘→平面記録、という手順で行った。

掘り方の平面形は楕円形に近いが、北東部と南西部がいくらか角度を持つコーナーとなっており、北東～南西方向に長軸を有する不整多角形とも言える形状である。西側の一部がトレンチ西壁に掛かっており、この部分の形状は確認していない。開口部の規模は長軸方向で69cm、短軸方向で60cm。断面形状は底面が概ね平坦で下端から四周とも一定の角度で立ち上がる舟底形を呈し、深さは19cm。長軸の方位はN-49°-E付近。掘り方内部にはシルト質のにぶい黄褐色が堆積しており、この層からの遺物出土はない。

土器棺は掘り方の長軸に合わせて、上部を北東方向、底部を南西方向に向け、ほぼ90度横倒しの状態で埋設している。口縁部を欠損する甕形土器が使用されており、上から見て土器上部が広がる扇形の状態で遺存する。土器は割れが進んでおり、また横断面形状を見ると紡錘形に潰れているものの、破片の位置関係はほぼ埋設時の状態をとどめることから、恐らく埋設された後で土圧により潰れたと考えられる。

頸部の欠損部分を観察すると8割方は輪積みした粘土紐の接合面から剥落している。この剥落面は土器を正位に置いた場合、部位によりずれが見られる。体部最大径を取る上半の屈曲部から上に数えて、半周の低い部分の剥落面は2段目、反対側の半周の高い所では7～8段目の接合面が剥落面となる。埋設は前者の低い所が上位、高い所が下位になる状態に設置されている。偶然このように欠損した土器を利用したとも取れるが、あるいは意図的に口縁部を段違いに打ち欠いて埋設した可能性もある。

また土器の下位にあたる側、つまり剥落面の高い側中央部には計2～3cmの楕円形の貫通孔が開く。この部分に相当する破片は見つからないため、埋設当初に穿孔されたものと思われる。貫通孔の内面側では周囲の表面が剥落するため、土器の外側からの敲打により穿孔された可能性が高い。また貫通孔の縁は凹凸が取れており、細かく調整を加えているものと考えられる。

下位の土器下面は掘り方底面に密着する部分がある。穿孔部から掘り方下方に向かって何らかの痕跡が続

くかどうかは確認できなかった。口縁側には計10cm強の偏平な円礫が5点ほど、開口部を塞ぐ形に添えられている。このうちの1点は断面図に見られるように土器上部を仕切る状態に直立する。

土器内部は底部付近に平均的に堆積する2層のしまりが強い褐色土と上半の1層しまりがないシルト質の暗褐色土に分層できる。前述の仕切りと見られる礫の外側には2層が見られない。このため埋葬遺体が腐朽して2層が生成した可能性が考えられる。また土器底面を覆うように赤色顔料の散布が確認できた。微細な赤色の粒子が堆積土内に混じるような状態である。

出土遺物は土器内部中央付近の2層上部から4の管玉がある。また口縁付近の円礫群に伴い、8の石鏃が出土する。なお遺体の骨他の組織は残存しない。

遺　物

第79図23の土器が理設されていた他、8・9の石器、4の石製品が出土。

小結　本遺構は赤色顔料、副葬品と考えられる管玉の出土より、人骨の検出はないものの土器棺墓と判断できる。土器の横位利用、埋設時の土器底面の穿孔が特徴的である。時期は土器棺からの詳細な年代が捉えにくいが、縄文時代晩期最終末～弥生時代前期初頭の頃と思われる。

SR02 土器棺墓

遺　構（第34図、写真図版34）

北東部のST02捨て場南側、I Ⅷ 11・16グリッドに位置する。この場所は東側に落ち込む斜面の上部から中央部平坦面に至る傾斜変換線付近である。捨て場Ⅳa層の精査段階で、範囲を確定するために周辺のだめ押しを行った所、Ⅳb層上面から掘り込まれる土坑内部に逆位の浅鉢形土器が検出され、土器棺墓の可能性が高いと判断して精査を行った。この結果、前述の土器が土坑上部に蓋として設置されていることがわかり、また下位の土坑下部から小玉が計6点出土している。

付近のⅣb層は層厚5cm内外と薄くなる地域にあたり、土坑はⅣc層からⅤ層にかけて掘り込まれている。土坑の形状は北西～南東に長軸方向を持つ楕円形ないし卵形で、開口部の規模は長軸方向で82cm、短軸方向で65cmである。底面が緩く窪み、壁面が急傾斜で立ち上がる断面形状となっており、深さは最大34cmとなる。長軸の方位はN-59°-W付近である。掘り方内部は3層の暗褐色土が堆積する。3層は全体に締まりが強い。底部付近には3～5cm程の厚さでやや赤みがかる部分がある。赤色顔料を散布した痕跡と考えられる。開口部の壁面付近には埋没の過程で入り込んだ状態で1･2層の暗褐色土がある。Ⅳb層に由来する崩落したブロックと考えられるが、人為的に埋め戻した痕跡かどうかは判断がつかない。

土器は土坑上部の北西寄りに底部を欠損する浅鉢形土器を倒立状態で設置している。底部は欠損するが同様の形態となる土器の類例から見て恐らく台付浅鉢であろうと考えられる。底部欠損部分は底縁で水平に巡る沈線に相当し、輪積面から剥落している部分が目立つ。人為的に打ち欠いたかどうかは判断できない。また、土器は2/3周程の残存であり全周しないため、破損した土器を再利用した可能性が高い。残存する土器片は互いの位置関係があまり乱れない状態で出土しており、設置後に撹乱を受けたり二次的に移動された状態ではないと考えられる。土器底部の欠損部、すなわち蓋として埋設された状態の中央開口部には長20cm程の楕円形の円礫が2点置かれている。状況から見て、開口部を塞ぐ意味で設置された可能性がある。

検出段階ではこの土器を合口土器棺の蓋と認識したが、「身」となる土器は一切見られない。また土器以外の有機質等の容器が用いられた痕跡があるかどうかも検討したが、断面等の観察では明らかにすることはできなかった。容器を用いずに土坑に直接埋葬して蓋に土器と礫を設置したとも考えられる。

出土遺物は土坑中央部の底面付近に小玉が6点ある。互いに若干のレベル差があり、また1列とも言い難い位置関係であるため、紐等で連なっていた状態で副葬されたかどうかは不明である。

遺　物

第79図24の土器が理設されていた他、10の石器、5～10の石製品が出土。

小結　本遺構はSR01と同様に赤色顔料、副葬品と考えられる小玉の出土より、人骨の検出はないものの土器棺墓と判断した。土器は蓋として設置されており、棺の本体になる容器の存在が不明である。前述したように土坑墓に蓋をした形状とも捉えられる。時期は使用された土器から、縄文時代晩期最終末段階と想定される。

(5) 焼　土　遺　構

SN01 焼土遺構

遺　構（第34図、写真図版32）

中央区、ＪⅤグリッドに位置する。平坦なⅤ層上面が焼成を受ける。掘り込み等は見られない。範囲は約130cm四方の不整な範囲に広がる。中央の約50cm四方の部分が被熱による変色の程度が強いが、全体に変色はあまり顕著ではない。焼土の厚さは最大15cm程で断面ではレンズ状に焼成が及ぶ。伴出遺物はない。

(6) 火葬骨埋納遺構

SX01 火葬骨埋納遺構

遺　構（写真図版34）

位置は北区西側のＥⅣ18グリッドで、西側の低地部分に落ち込む斜面の最上部に相当する。Ⅱ層下部の黒褐色土をⅢ層上面まで掘り下げる作業の途中で、Ⅱ層最下部中に焼成を受けた人骨骨片が散乱する状態で出土し、周囲と下部の精査を慎重に行ったが明瞭な掘り込み等は発見できなかった。

骨片の分布は全体では60cm四方程度の範囲に広がり、中央部の50×30cm程の部分に集中する。ほぼ同一面に散乱する状態であり骨片の出土レベルに大きな高低差は持たないが、一部はⅢ層上部に食い込む状況となっている。骨片の集中部には焼け焦げた角礫と炭化物の集中があることから、この場所で火葬にした可能性が高いと考えられる。

遺　物（写真図版362～364、第4表）

(7) 捨　て　場

ST02 捨て場

遺　構（第35図、写真図版3）

東区北側の斜面に広がるⅣa層の遺物包含層である。調査区中央部の微高地から東に向かい下がる斜面の上部にあたり、南北に細長い範囲に遺物が集中する。北側は調査区外に伸びることが確実で、その分布範囲を正確に把握することはできないが、およそＥⅧグリッドからＩⅧグリッド付近までの南北50m、東西20mといった範囲と捉えられる。この区域は2mの小グリッド単位で遺物を取り上げており、その分布状況によればＦⅧ・ＧⅦ・ＧⅧ・ＨⅧグリッドが出土の中心となり、これから周辺部に向かい遺物の出土量は少なくなる。東側の範囲はⅣa層の連続が追えることから、大グリッドⅧ・Ⅸの境界となる南北ラインを東限とすることができる。一方、西側ではⅣa層自体が削平されているため、ＨⅦ・ＨⅧグリッドの境界付近で遺物分布が急に途切れる状態となっている。本来は南～西側にもう少し広がりを持っていた可能性が高い。

遺物を包含するⅣa層は全体に上位のⅢ層砂層と下位のⅣb層砂層に挟まれた状態となる。色調、含有物により上部の暗褐色砂質シルトⅣa1層と、下部の黒褐色砂質シルトⅣa2層に分層可能である。しかし掘り下げにこの分層を反映させることができず、一括して遺物を取り上げた地点が多い。層厚は全体で20～30cm程で、下位のⅣb層の傾斜に沿って平均的に堆積する。遺物が多い地点では層中に炭化物の含有が目立つ。

遺物の種類による分布の偏在は見られない。土器は複数の小グリッド間にまたがって接合するものが多く、斜面を二次的に移動している状況と考えられる。

ST03 捨て場

遺　構（第37図）

北区西端、EⅢ・EⅣグリッドに分布する。Ⅳa層遺物包含層が調査区西側に向かって落ち込む状態である。調査区外の北・南・西側に連続しており、中央の自然堤防状微高地から西に下がる斜面に形成された、帯状に南北に分布する捨て場のごく一部を調査したものと考えられる。範囲は東限がEⅣ13・18・23グリッド付近で、調査区内では東西約12m以上の幅となる。

地表下に最大3m近く掘り下げており、幅の狭い調査区の壁面に勾配、ステップをつけている。これにより調査区底面の幅は2m程度になったことから、小グリッド等に地点を分割しての遺物取り上げを断念し、層位別に一括して取り上げている。このため、遺物の分布状況は把握していない。

Ⅳa層に相当する暗褐色～黒褐色シルトは上位よりⅣa1層（褐色粘土質シルト層）、Ⅳa2層（暗褐色粘土質シルト層）、Ⅳa4層（暗褐色シルト層）、Ⅳa5層（黒褐色シルト層）、Ⅳa6層（黒褐色シルト層）の順に堆積しており、中間に細砂～粗砂で構成される洪水堆積層と見られるⅣa3層が介在する。上位のⅢa層、Ⅲc層とⅣa3層はほぼ同質の砂層である。Ⅳb層も砂層でありこれらはいずれもラミナが発達した洪水堆積層と見られる。

底面のⅣb層上面は傾斜の強い部分と平坦な部分を繰り返しながら、西側に向かい落ち込んでいく状態が断面から観察される。この上面に沿ってⅣa4～6層が層厚40～60cm程度で平均的に堆積し、平坦になった東側をⅣa3層の砂層が覆う。Ⅳa3層上面は西側に一定の傾斜で下り、この上位にⅣa1・2層が層厚40～80cmで堆積する状況である。

なお、Ⅳb層下位のⅣc層に相当する黒褐色土は、東側のEⅣ23グリッド付近では確認されるが遺物はほとんど含まれていない。西側のFⅢグリッド内では、実際に掘り下げた底面から1m以上検土杖で探ったものの、確認できなかった。より強い傾斜で落ち込むか、あるいはⅣc層の分布が途切れ、Ⅳb層とⅤ層が連続するか、いずれかが考えられる。

遺物の包含はⅣa3層の砂層より上位のⅣa1・2層が多く、下位のⅣa4～6層では少ない。また上下での時期差は顕著ではない。

⑧柱穴状ピット

Ⅲ層上面では主に東区北半のFⅧグリッド周辺、Ⅳb層上面の東区中央斜面部KⅧグリッド周辺、Ⅴ層上面の中央区KⅥグリッド周辺、及び東区のHⅨ・IⅨ・JⅧ・JⅨ・KⅨグリッド周辺で、概ね直径10cm程度の柱穴状ピットを検出している。総数では200基弱になる。半裁して断面、堆積土を確認し平面図に記入しているが、確実に柱穴と捉えられるものは少なく、木根の痕跡等も含んでいる恐れがある。遺構配置図に位置を記入しているが、個々の記載は省略した。

V　平成15年度の調査・遺構

1　調査の目的と結果の概要

前年度の調査で、今年度の調査では捨て場がメインであることがわかっていた。そこで、ここにできるだけ多くの時間を割こうと努め、端折れるところは涙を飲んでできるだけ端折った（南東区南部の土層を重機で剥いだこと、近世墓の調査を割愛したことなど。第2・3節参照）。しかし、後背湿地に形成されているという捨て場の全体像がなかなか掴めなかったため、無駄な時間を過ごし、また期間延長の申し出が遅くなった（7月18日（金））ことは否めない。前年度の積算と今年度の実際の最大の齟齬は、捨て場の覆土を重機で1日で剥げるとしていた点である。実際には、捨て場は後背湿地の底に主として形成されて覆土はV字に近い形にあり傾斜が急で重機のアームがうまく届かないこと、覆土の厚さの地点差が大きいことなどから、人手で剥がざるを得なかった。ベルト・コンベアーも使ってかなり急いだが、7月約1ヶ月程度を費やしている。この他、今から思えば、捨て場のある南西区（第38図）の北側部分の捨て場が及ばない部分に余分な時間を費やしている。遺物包含層を初めとする層の見極めがなかなかつかなかったためだが、ここのⅣc層がはっきりしないのは遺物がほとんどでないためであり（包含層が未発達）、そうとわかったトレンチの時点で層に見極めがつかなくても重機で剥いでしまえば良かったのだ。もし、そうしたら一週間程度早まっていた可能性がある。

8月7日（木）の調査延長についての打ち合わせに間に合わせるため、捨て場覆土除去が終了した7月28日（月）から急いで全容を掴むためのトレンチを入れた。このため、トレンチ内の遺物の上下関係は端折らざるを得なかった。西側の自然堤防上（第6図）の捨て場に柱穴が検出されることは、前年度の調査およびトレンチの時点でわかっていたが、いくら丁寧に検出しても上面では確認できないことから捨て場中の検出はあきらめ、Ⅳb層でまとめて検出することにした。捨て場が後背湿地に主として形成されているとわかり、さらにトレンチを入れた結果から、竪穴住居跡などの大きな遺構が検出される可能性は低いと判断し、出土遺物を層位的に取り上げることに全力を注ぐこととしたのである。遺物包含層は最大で厚さ約1.6mにもなり、現地で瞥見した限りでは層位的に良好に出土しているようである。この時期は層位的資料に乏しく、土器型式編年さえ明確には確立されていない。本遺跡が考古学において最大に寄与することになるのは、この点であると考えた。また、土器以外の遺物についても、層位的に取り上げておけば将来にわたって使える資料となる可能性が高い。道具はスコップが主となるなど、微細遺物については目をつぶらざるを得なかったが、ある程度の目的は達成できたと考える。

2　調　査　経　過

平成15年度の調査区は三つに分かれる。東区（土木北区）、南東区南部（農整区）、南西区（土木南区）で、東区は基本的に最終検出面（V層上面）での遺構検出と精査のみ残っており、南西区は、南西側1/4は表土剥ぎを残し、それ以外は表土剥ぎは終了しSD08溝跡の検出・精査も済んでベルトが残っているという状態であった。南東区南部は、今年度一からの調査である。

3月25日（火）に、担当調査課長補佐、前年度担当者、今年度担当者、事業者との打ち合わせを現地で

行った。南西区はかなり深くなるので、安全上、法部分をつけるため工事予定範囲より一回り（幅2m程度）多く掘削することをお願いした。また、安全柵、ベルト・コンベアーの導入も予定され、業者に委託することになった。

4月9日（水）午後に器材搬入して調査開始。概ね、4月は東区、5月は南東区南部、6月～10月は南西区を調査した。この順番に調査を行ったのは、大量の排土が予想される南西区の排土置き場として東区を確保したいこと、南東区南部は事業者が異なり工事期間の関係で調査を急がれていたためである（ただし4月は前年度調査部分の工事が続いていて入れなかった）。

東区は、覆われていたブルー・シートを剥がすことから開始した。すぐⅤ層上面の検出を始めたが、金子は前年度の調査を全く見ていないので遺構覆土がどんなものか想像できず苦労した。以前、南に隣接する江刺市で同様の遺跡を調査し、その時遺構覆土が非常にわかりにくかったという記憶から、検出された不整形のシミを片端から断ち割ることとした。結局その中に遺構となるものはなく、遺構は残されていた土層観察用ベルト中と前年度調査区の境で検出された土坑のみであった。遺構覆土が不明だったため、2日程度の余分な時間を過ごしたことは確かである。

5月は南東区南部を主として調査したが、重機で表土を剥いでいるときなどは南西区のクリーニングを行ったり試掘トレンチを入れた。南東区南部の調査は、Ⅲ層までの深さを知るために人力で試掘トレンチを入れるところから始めたが、前年度工事した場所に隣接するため、表土が攪乱填圧され、掘るのは容易でなかった。この結果に基づいて重機でⅡ層下部まで剥いだのだが、予想よりはるかに東西方向の傾斜が急であったこと、その傾斜は直線的でなく途中で段をなすようなものであったこと、基本層序が黒褐色土と黄褐色砂層の互層であったたことなどから、東端では確かにⅡ層下部だったのだが、段の部分などでは同じ黒褐色のⅣa層下部まで下げてしまった。結局、層を正しく把握できたのは、本調査区の終盤になってからである。

Ⅲ層で遺構を検出した後（SK80土坑のみ）、再び重機でⅣa層を下げ、Ⅳb層で検出したが遺構は確認されなかった。Ⅳc層からは遺物が出土したため、人力でⅤ層まで下げ、遺構を検出した（SK80土坑、SN02焼土以外の遺構）。重機で土層を下げた理由は、ここの調査区のⅡ層、Ⅳa層にほとんど全く遺物が入らなかったこと、後の調査日程が厳しかったことなどである。調査終了後、南東区南部は埋め戻した。

南西区の法部分および南西端に残っていた表土剥ぎは、5月半ばに重機で行った。調査は、南東区南部がほぼ終了した5月末、SD08溝跡より東側から始めた。幅2m弱、東西に延びる橋状にかかっていたSD08の土層観察用ベルトを挟んだ南側（MⅢ～Ⅳグリッド付近）は、Ⅲ層までしか出ていなかったが、前年度調査区隣接区（K～L列のグリッド）は既にⅤ層まで出ていたのに、Ⅲ層とⅤ層が洪水堆積層というほとんど同じ性質を持つ砂層であることと、地形的にも連続して見え、当初K～L列もⅢ層が出ているのかと勘違いし、Ⅲ層面での調査後、この面もさらに下げて検出作業を進めてしまった。Ⅳ層の遺物包含層がなかなかでてこず、おかしいと思っていたのだが。6月10日（火）に前年度担当者に現場に指導に来ていただき、やっと明確に層を捉えることができた。

6月下旬、大きな自然堤防上（Ⅳ列のグリッド以東）はⅤ層、その西側（SD08より東）はⅢ層の調査がほぼ終了したので、Ⅲ層の土を人力で剥ぎⅣa層を露出させた。急斜面となり遺構は確認できなかったので、Ⅳ列グリッド以東を排土置き場とするため、先に終了させようと考えた。遺物包含層であるⅣc層を確認するため東西方向に何本も幅1m程度の細いトレンチを入れたが、急傾斜で深くなりなかなか見つからない。結局この部分は遺物包含層が未発達であることがわかり、Ⅴ層上面までスコップで剥いだ。7月上旬に終了

した。調査区境の竪穴住居かどうか悩んでトレンチを入れ続けていたSI02がやはり住居だとこのころ見極めが付き、7月中旬にSD08以東の調査は全て終了した。

SD08の東側の調査に目途がつき始めた6月半ばころから、新しい自然堤防上に手をかけ始めた。併せて作業員も5名増員した（計約30名）。自然堤防上は、Ⅳa層上面で2回検出したが、遺構を確認することはできなかった。試掘トレンチの結果、自然堤防上は遺物包含層が薄いとわかっていたので、西端から精査を進め、それ以外は覆土を剥いだ。捨て場全体の覆土を剥ぎ終わった7月末から捨て場本体にトレンチを入れ、8月半ば以降本格的な精査に取りかかった（捨て場の詳しい調査経過については第5節（9）参照）。層境ごとに遺構の検出を繰り返したが、上面で検出された遺構は少なかった。確認された土坑はすぐ精査したが、炉跡や焼土は、柱状に残し捨て場除去後まとめて精査した。捨て場の調査に目途が立った9月の半ばから炉跡や焼土の精査に入った。そのまま自然堤防上Ⅳb層上面の検出に移り、おびただしい数の柱穴状土坑を調査している。その調査も9月中にほぼ終了し、10月には僅かに残った捨て場精査を行い、10月9日（金）午前に器材を搬出して全て終了した。

ベルト・コンベアーは、7月1日（火）に搬入されたが、先端に置く「馬」の材料調達・製作等にしばらくかかり、また雨の日が続いたため、7月15日（火）から稼働した。捨て場の覆土撤去から精査まで使用し、最大時には8台連続して使用した。天気の関係で土が貼り付いたため、休み時間ごとに土を取り、メンテナンス専門の作業員を1名つけた。また、先端には穴を掘り土を溜めたが1日で埋まってしまうため、コンマ2のパワー・ショベルを常時張り付け、ある程度量がたまると調査が終了した東区にキャリア・ダンプで運ぶということを繰り返した。

予定では8月一杯で調査終了だったが、当初見込みと違って捨て場は主として自然堤防の間にあり傾斜が急で重機で覆土（Ⅲ層）を剥ぐことができなかったこと、平均して当初見込みより厚かったことなどから、実質30日程度長くかかってしまった。その調査期間延長の打ち合わせを、8月7日（木）に現地で委託者、調査第一課長、担当者で行っている。

現地説明会を9月6日（土）に行い、約60名の参加。8月27日（水）近くにある照岡小学校6年生16名を対象に体験学習を行った。5月27日（火）に東区と南東区南部、9月30日（火）に南西区の終了確認を行い、委託者と県教育委員会、当センターの調査第一課長および担当者が出席した。

この年の4月は平年並みに定期的に雨が降り、5月に入ると雨の日は少なくなり、それが6月中旬まで続き非常に乾燥した。6月下旬以降は、平年より雨が多く、ほぼ一週間に1日以上雨が降り作業が中止となった。7月下旬にはヤマセで冷えた日もある。9月中旬以降はそれほどひどくはなくなったが、雨は定期的に降り、米は平成5年以来の不作となった。梅雨明けが特定できなかった年である。8月～9月中旬は毎日のように排水しなければならず、滑り止めのためムシロや荒縄を用意するなど調査に影響を及ぼしたが、捨て場の厚い覆土を人力で剥ぐ時期に冷えたこと、分層しなければならない時期に曇や雨の日が続いたことは、調査に良い影響を与え、本遺跡の場合は結果としてプラスにもマイナスにもなっていないと思われる。

3　調査区ごとの概要

次年度の調査区は、三区に分かれ、それぞれの間が離れているので調査区ごとに記載する（第38図）。

（1）東区（土木部北区）（写真図版6）

本調査区は、前年度の続きで、基本的に最終検出面（Ⅴ層上面）での遺構検出と精査のみを行ったが、土層観察用ベルトが残してあったので、それに含まれた遺構の精査も行っている（SK78 土坑）。調査区は、縄文時代以来の大きな自然堤防の東端～後背湿地への斜面に相当する。南西端の自然堤防上は、表土直下（地表下 40 ～ 50cm）がⅤ層となっており（一部Ⅳ c 層残る）、水田時の影響を大きく受けている（はぜ杭等）。調査面積は、600 ～ 700㎡ である。

検出された遺構は、縄文時代の土坑 1 基である（SK79 土坑）。風倒木痕等の擬似現象は多く確認され、全て断ち割ってみたが、遺構になるものはなかった。また、この他、土層観察用ベルト中から検出された弥生時代と思われる土坑が 1 基ある（本来的にはⅣ a ～ b 層で検出。SK78 土坑）。風倒木痕は、土層観察用ベルト中と北東端に検出された。

出土遺物は、遺物包含層の調査は前年度に終了しⅤ層上面まで下げられていたため、少ない。縄文時代中～後期と思われる土器片が、小コンテナ（30 × 40 × 10cm）1 箱出土している。ほとんどが小破片だが、北西隅の低い部分で、中期末（大木 10 式）の完全に近い土器が壊れた状態で発見された。取り上げた層は、Ⅴ層であるが、実際にはⅣ c 層が落ち込んでいた部分と考えるべきであろう。掲載した以外に、D ～ F、H、I グリッドⅣ c 層出土土器が、約 500g（約 30 点、7 × 6cm の縄文のみの土器片を最大とし残りは 5 × 5cm 以下、縄文中期がほとんどだが、晩期末～弥生時代初頭の土器片も 1 点ある）あり、G Ⅶ～Ⅸグリッドにはベルトや杭が残っていたので様々な層から出土土器があり、Ⅰ層から約 190g（摩耗した縄文中期深鉢底部 1/4 周辺 1、その他 3 × 3cm 以下 10 点、縄文後期、晩期末～弥生時代初頭の土器片）、Ⅲ層約 50g（3 × 3cm 以下 13 点、晩期末～弥生時代初頭の土器片あり）、Ⅳ a 層約 590g（9 号袋約 1/5、縄文晩期末～弥生時代前期の土器片主体）、Ⅳ b 層約 80g 出土している（4 × 4cm 以下 9 点、ほとんど縄文のみ、縄文後期 ?）、Ⅳ c 層（約 70g、3 × 3cm 以下 30 点、縄文中期の縄文のみ主体、摩耗多い）。石器類は、磨石、砥石などの礫石器がほとんどで、小コンテナ 1 箱出土している。

本調査区は、次年度の調査で最初に取り掛かった地区である。遺構覆土についての見通しもないまま、いきなり遺構検出に立ち向かい途方にくれた。本遺跡の南の江刺市で、同様の立地の遺跡を調査したことがあり、その遺構検出の難しさに苦しんだことがあったためである。最初に検出した際、多くのシミが確認された。あまりに多く単なる汚れと区別できなかったため、検出面を 20 ～ 30cm 下げてみた。それほど減りはしなかったが、取りあえず、あやしいと思ったシミは全て断ち割った。結果として、遺構となるものはほとんどなかった。この調査区の大部分が、縄文時代には自然堤防から外れ後背湿地となっていたからであろう。

（2）南東区南部（農整区）（写真図版 7・8）

調査区は、前年度調査したポンプ・スタンド用地の続きで、取水部分に相当する。前年度の南側に隣接する M 字形の変則的な調査区 205㎡ である。

本調査区は、縄文時代以来の大きな自然堤防の東端～後背湿地への斜面に相当する。西端の自然堤防上は、表土直下がⅤ層となるが、東端では基本層序の全てがそろい厚く堆積する（東端で表土からⅤ層上面まで約 180cm）。

検出された遺構は、縄文時代の焼土 1 基（SN02）、土坑 2 基（SK81・82）、古代の土坑 1 基（SK80）、近世と思われる溝跡 2 条（SD13・14）である。この他、自然堤防上から近世の墓壙が 2 基検出された（詳細は次節の近世の項参照）。埋蔵文化財として扱う範囲についての文化庁の指示および後の調査日程を考慮して、墓の位置のみ記録し、供養の後無縁仏扱いで近所の寺に再埋葬した。位置は、SD14 溝、SK81 土坑のすぐ南

側である（写真図版7下写真中央の四角い部分、第6図右下図）。また、近世墓のすぐ東、M字状の調査区中央の窪んだ部分には、最近掘られたと思われる墓と同様の形状の深いカクランがあった。

遺物の出土は、遺構内外とも少ない。遺物包含層からも少なく、縄文時代の包含層（Ⅳc層）から、縄文中期の土器が30×40×20cmのコンテナで約1箱、石器がほぼ同じくらい出土した程度である。

（3）南西区（土木部南区）（写真図版2・8・50～51）

前年度の続きで、調査面積約1,400㎡。前年度に近世の大溝跡（SD08）の精査が終了していた（第8図）。この大溝は、縄文時代晩期の後背湿地にほぼ重なるもので（後背湿地の方がもっと幅広いが）、この溝より東側は、縄文時代以来の大きな自然堤防、西側は縄文時代晩期以降の新しい自然堤防となる。大きな自然堤防上は表土下がⅤ層という状態だが、端の斜面（ⅢとⅣグリッド列の境界付近より西）にはⅡ～Ⅳc層が堆積している。前年度の調査で、大溝の両側の表土は取り除かれⅡ層下部～Ⅲ層上面（自然堤防上はⅤ層上面）が露出していた。ただし、新しい自然堤防上は、試掘トレンチを入れた状態で表土は残っていた。

次年度に検出した遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡1棟（SI02）、縄文時代中～後期の遺物包含層1箇所、縄文時代晩期末～弥生時代前期の炉跡4基（SNQ01～04）、焼土27基（SN04～30）、土坑6基（SK86～91）、柱穴状土坑多数（縄文時代晩期以降自然堤防上柱穴群）、土器埋設遺構1基（SR03）、遺物包含層1箇所、捨て場1箇所（ST01）、平安時代の土坑3基（SK83～85）、古代以降の焼土1基（SN03）、遺物包含層1箇所、近世の溝跡（SD15・16）、柱穴状土坑8基（大溝東柱穴群）である。出土遺物は、土器類が30×40×30cmのコンテナで約160箱、石器類が30×40×20cmのコンテナで約800箱出土したが、大部分は捨て場から出土し、他に多かったのは竪穴住居跡から出土したものくらいである。

検出された遺構は、時代ごとに場所が偏っていて、縄文時代中～後期は縄文時代以来の自然堤防上～斜面、古代以降も同様、縄文時代晩期末～弥生時代前期は、後背湿地～新しくできた自然堤防上である。

この新しくできた自然堤防は、縄文時代後期中葉以降（Ⅳc層中に土器含有）、晩期中葉以前（Ⅳa層最下部に大洞C2式土器含有）というだけで、遺跡内には時期を特定する材料がない。

この調査区は地形の変化が大きい。東から西に向かって、縄文時代以来の大きな自然堤防、川のように細長い後背湿地、新しくできた細い自然堤防と続き、何れも南北方向に展開する。縄文時代以来の自然堤防上は、表土下がⅤ層、新しくできた自然堤防上は、表土下がⅣa層となる。Ⅳa層の下はⅣb層となるが、Ⅳc層がないため、Ⅳb層以下2m近く下げたがⅤ層との境は見つけられなかった。二つの自然堤防の間、後背湿地の斜面～底は、表土の下がⅡ層で、以下、Ⅲ、Ⅳa、Ⅳb層と続く。東側斜面は、Ⅳb層の下に、Ⅳc、Ⅴ層を確認できたが、それより西については新しい自然堤防上と同様であった。ただし、東側斜面についても、はっきりとⅣb層を確認できたのは斜面上方だけで、下方はⅤ層の再堆積がやや汚れた程度で遺物もほとんど出土しなかった。

4　時代ごとの概要

今年度検出された遺構を中心に述べる。

（1）縄　文　時　代（第38図・第39図）

(a) 中期

南西区の北側、縄文時代以来の自然堤防の落ち際で竪穴住居跡（SI02）を確認している。南東区南部の土坑（SK81・82）は、この時期の可能性があり、焼土（SN02）も、そうかも知れない。今回の調査では、この時期の遺物は少ない。東区で、土器が小コンテナ（30 × 40 × 10cm）1箱弱、石器類も小コンテナ1箱弱（磨石、砥石などの礫石器がほとんど）、南東区南部で、土器が中コンテナ（30 × 40 × 20cm）で約1箱、石器がほぼ同じくらい、南西区で、土器が大コンテナ（30 × 40 × 30cm）1箱程度（復元する前）、石器類が中コンテナ1箱程度出土した。南西区の出土遺物のほとんどは、竪穴住居跡から出土したものである。

（b）縄文時代後期

この時期と特定された遺構はない。前年度確認された後期中葉の土器が、各調査区から十数点～数点ずつ出土しており、南西区後背湿地の東斜面から比較的多くの土器が出土している。また、東区の風倒木痕から後期後葉の土器片が数点出土した。

（c）不明

縄文時代としか特定されない土坑が、東区から1基（SK79）検出されている。

（2）縄文時代晩期中～後葉（大洞C2式期～大洞A1式期）

南西区後背湿地東斜面底付近から、この時期の土器が出土している。

（3）縄文時代晩期末～弥生時代前期（大洞A2式期～山王Ⅲ層式期）（第39・40図）

遺構は、東区に残されていたベルト中から1基土坑が検出された以外は（SK78）、全て南西区の後背湿地から西側で検出。炉跡4基（SNQ01 ～ 04）、焼土27基（SN04 ～ 30）、土坑6基（SK86 ～ 91）、柱穴状土坑多数（縄文時代晩期以降自然堤防上柱穴群）、土器埋設遺構1基（SR03）、遺物包含層1箇所、捨て場1箇所（ST01）。捨て場は、新しくできた自然堤防から後背湿地に掛けて形成され、土坑2基（SK86、88）、焼土1基（SK30）が後背湿地の捨て場上面から検出された以外は、全て新しい自然堤防上に作られている。

遺物は、捨て場からおびただしい量が出土し、土器類が30 × 40 × 30cmのコンテナで約160箱、石器類が30 × 40 × 20cmのコンテナで約800箱出土した。比較的まとまった量が出土した土坑もあるが（SK89）、そのほとんどが本来捨て場に帰属するものと思われる。土器は、他の調査区からも十数点～数点ずつ出土している。

（4）古代（平安時代）（第41図）

南東区南部から土坑1基（SK80）、南西区から土坑3基（SK83 ～ 85）が検出されている。南西区の古代以降とした焼土1基（SN03）は、古代の可能性がある。SK80・84は10世紀の可能性が高いが、他の詳細な時期は不明である。出土遺物（ほとんど全て土器）は、土坑内が最も多いが、南西区L Ⅲ③④付近、M Ⅲ②④付近からも土師器、須恵器片が十数点出土している。

（5）中　　世

常滑焼の陶器片が遺構内（SD08）と遺構外から1点ずつ出土している（両方とも図示）。

（6）近　　世（第41図）

南東区南部から溝跡2条（SD13・14）、南西区から溝跡2条（SD15・16）が検出されている。SD13は前

年度検出されたSD04溝跡の続きである可能性が高く、SD15、16は前年度検出されたSD08に続くようである。その他に、南西区のSD08溝跡東側から柱穴状土坑が8基（大溝東柱穴群）検出された。また詳細な記録は省略したが、南東区南部から近世の墓壙2基検出され、中から人骨が出土し、1基からは、六道銭（寛永通宝）、キセル、磁器の小皿も出土した。埋蔵文化財として扱う範囲についての文化庁の指示および後の調査日程を考慮して、墓の位置のみ記録し、供養の後無縁仏扱いで近所の寺に再埋葬した。位置は、SD14溝、SK81土坑のすぐ南側である（写真図版7下写真中央の四角い部分、第6図右下図）。

出土遺物は非常に少なく、陶磁器小片が遺構外から数点出土したのみである。

5　検出された遺構

次年度に検出された遺構は、縄文時代中期末の竪穴住居跡1棟、縄文時代の焼土1基、土坑3基、遺物包含層、縄文時代晩期末～弥生時代前期の炉跡4基、焼土27基、土坑7基、柱穴状土坑群、土器埋設遺構1基、遺物包含層、捨て場、平安時代の土坑4基、古代～近世の遺物包含層、古代以降の焼土1基、近世の柱穴状土坑群、溝跡4条である。

調査区は前述のように三箇所に分かれ、各調査区の呼称は第38図にある。調査区ごとの概要は本章第3節、時代ごとの概要は第4節を参照していただきたい。また、地山の地形（原地形）は第6図、今回の調査全体で検出された遺構は第8図、次年度に検出された遺構については、第38図～第41図に時代別に示した。

遺構の名称（番号）は、前年度に続けた（基本的に奈良文化財研究所の方式に則っている）。担当者が異なるので混乱をおそれて変更は一切行わなかった。番号がアチコチに飛んで読者にご不便をおかけするが御容赦いただきたい。本章の遺構種別記載順序は、遺構然としたもの→そうでないもの、古いもの→新しいものを原則とし、(1) 竪穴住居跡の後に (2) 炉跡、(3) 焼土と続けたのは、これらが炉跡の可能性があるためで、(4) 土坑の後に (5) 柱穴状土坑を続けたのは形態の類似性、その後は原則に従って、(6) 土器埋設遺構、(7) 溝跡、(8) 遺物包含層と続け、(9) 捨て場を最後にしたのは (8) の特殊なものであることを考慮してである。

本章を読む際に注意していただきたい点。凡例は、第Ⅲ章の最後にある。遺物の記載、掲載場所について。遺構内出土遺物は、遺構図版の後に遺構内遺物集成図としてまとめてはいるが（第80図～第86図）、詳しい記載（観察表）、実測図は、第Ⅵ章に掲載しているので、そちらを参照していただきたい（番号は共通である）。なお、前年度も同様である（第78図・第79図）

平面図と断面図の照合等の図面点検は、現地で全て行っている。合わない場合は計り直しているが、どうしても合わない場合は、そのままにし本文中〔図・精査状況〕欄ににその旨記している。ただし、1/20の縮尺で1㎜（原寸では2cm、報告書では0.5㎜）以内の違いについては誤差範囲とし、とくにふれていない。本文記載中の深さは、言うまでもなく検出面からの深さである。

遺構の検出状況。砂層（Ⅲ層、Ⅳb層、Ⅴ層）と遺物包含層（Ⅳa層、Ⅳc層）の交互層で、遺構の検出には難があったと言わざるを得ない。砂層は色は黄褐色でわかりやすいのだが崩れやすく、崩れて砂で埋まったものについては検出するのはまず無理である。SI02住居跡は、まさにこの状態で、間に遺物を多量に含む黒褐色土があり、それが壁際で検出面まで上がっていなければ、検出できなかっただろう。捨て場中の遺構についても、断面で柱状土坑があるのがわかっても上面で検出することはできなかった。やむを得ずⅣb層まで下げて検出した。今回の調査で、遺物の出土量の割に検出された遺構が少ないのは、このような事

情もあるものと思われる。

土。砂層は掘りやすいが、水につかってシルト質になったところは掘りにくかった（後背湿地のⅢ層ほか）。遺物包含層は、粘土質の部分が多く本来掘りにくいと思われるが、南東区南部を除き、精査中は雨が多かったので、さほどでもなかった。遺構内遺物の取り上げについて。半裁時には一括して取り上げ、完掘時には基本的には層ごとに取り上げているが、時間がなくて一括した場合があり、また層に変化がなくて識別しにくかった場合には一括せざるを得なかった。残りの良い土器や、床・底面出土遺物は、出土状況を図や写真等で記録したが、該当例は少ない。捨て場については、捨て場の項参照。

遺構の実測について。平面図は、基本的には一般的な簡易遣り方で作成したが、一部を平板実測や光波トランシットによる測距を基に作成している（平板実測の測量の部分を光波トランシットで行ったのに相当）。

(1) 竪穴住居跡

本年度に検出された竪穴住居跡は、1棟のみである。縄文時代中期末の住居が南西区に検出された。

SI02 住居跡（第42・80・81図、写真図版35・36、260）

〔位置・検出状況〕南西区中央。L～MⅣグリッド。縄文時代以来の自然堤防の南端に近い部分。東側の調査区外に半分続く。表土下に確認された黄褐色砂（Ⅳc?、Ⅴ?）層を20cm下げたところ、黒い土が1m程度の範囲で確認された。ぼんやりしてプランは掴めなかったので、トレンチを入れてみたところ、土器が大量に出土した。これは遺構の可能性が高いと、周囲の上面を改めてクリーニングしたが、プランは掴めなかった。そこで、トレンチを思い切り長く伸ばしてみた。それと直交する方向にもトレンチを入れてみた。相変わらず立ち上がりや床ははっきりしなかったが、黒土が壁から中心に向かって傾斜し、いわゆるレンズ状堆積の一部をなしていること、その黒土の底に土器が並んでいることから、竪穴住居跡と考えるのが妥当であろうとの結論に達した。プランは、最初にトレンチを入れた住居の南側1/5周ほどが黒土が検出面に達しているため明瞭で、その北側のトレンチを入れた部分は全く見えず、そのトレンチの北側は、不明瞭ではあるが、周囲のⅤ層とは明らかに異なった汚れた土であった。この検出状況の原因については、覆土の項参照。

〔図･精査状況〕住居覆土断面B-B′、1層の上限が不明瞭のため上場平面図と合わない。トレンチでもはっきりせず最終的に遺物出土状況で住居と判断したような有様なので、壁、床はしっくり来ない。

〔重複〕調査した範囲ではなかったと思われる。

〔覆土・堆積状況〕壁際第一次堆積土（4・5層）の上に特徴的な黒褐色土（3層）が広がり、Ⅴ層再堆積土（2層）で埋まっている。2層が、レンズ状堆積のレンズ部分に相当する。その上に堆積する1層は、水平に広がり、周囲のⅤ層とほとんど区別できない。ただし、周囲のⅤ層が砂質であるのに対し、シルト質であることから、Ⅳc層の可能性もあるかもしれない。Ⅳcでなければ Ⅴ層の最堆積ということになる。2層にも土器片が混じっているが、3層から多くの土器が出土した。3層は、炭化物を含む黒褐色土ではあるが、地点により濃淡がある。住居の北半分でプランが掴みにくかったのは、壁際に4･5層が堆積していたことと2層が壁際まで広がっていたこと、3層が淡かったためである。

〔平面形・規模〕表土を剥いだ調査範囲外には、その続きが見え、礫が並んでいるのは壁と思われる（写真図版35）。直径4.5m程度の円形か。

〔壁・床・掘り方〕壁・床は、Ⅴ層。掘り方は、確認できなかった。

〔柱穴〕遺物取り上げ後丁寧にクリーニングしたが、調査範囲内に確認できなかった。地山の性質（砂）を

考えれば、あったとしても検出するのは難しいかも知れない。

〔炉跡〕底面砂層にうっすらと焼けた焼土を確認したが、炉跡と言えるかどうか。

〔その他の付属施設〕上述のように焼土を確認。

〔出土遺物〕（出土状況）ほとんどが2層中から出土し何れも住居中央に向かって傾斜している。

（遺物）第80図の土器、第81図の土製品、石器・石製品、写真図版260の11の焼粘土塊？が出土。8は円盤、9・10は何かの一部である（10は図では耳飾のように見えるが、上側の先端はほぼこれで終わりで尖り気味である）。11は石棒の未製品で、出土土器から考えると縄文時代中期末に伴う可能性が高いが、この時期にも石器製作を行っていたのだろうか。図示した以外には、土器片が9号袋約3袋分、約5.5kg、石器は、石鏃2点（欠損未製品1点）、磨石3点（破片でない）、ハンマー類26点（破片11点）、台石破片3点、砥石10点（破片5点）、石棒破片1点、剥片A類356.31g、剥片B類371.04g出土している。

〔時期〕出土土器から、縄文時代中期末（大木10式期）。土器は、柳澤清一氏のいう大木10式b類付近に偏っているような気もするが（註）、研究の現状から一般的な大木10式（本間宏氏の言う大木10b式）ととらえておく。

註

後期初頭への系統的変遷を重視して型式学的に見れば、柳澤氏の言うように細分されるように思われるが（柳澤　1988）、岩手県大迫町観音堂遺跡（大迫町教育委員会　1986）を初めとして層位的には裏付けられない。近年調査が行われた岩手県一関市清水遺跡5～7トレンチの状況を見ても同様である（(財）岩手県文化振興事業団　2002）。さらに、後期初頭への系統的変遷についても、本間宏氏のように系列差と考え一見古く見える特徴も後期初頭に受け継がれるのだとすれば、問題ないことになる（本間　1994:p.15）。

参考文献

大迫町教育委員会　1986『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告第11集

(財)岩手県文化振興事業団埋葬文化財センター　2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集

本間宏　1994「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10（福島県目黒吉明氏）

柳澤清一　1988「「大木10式土器論」続考」『北奥古代文化』第19号　北奥古代文化研究会

(2) 炉　　跡

奈良文化財研究所の遺構分類には、炉跡という項目はなく焼土（SN）に含まれるようだが、本遺跡の炉跡は基本的に住居の一部であり、両者を弁別することが大事と考えた（焼土にも地床炉になりそうなものが含まれているが）。焼土（SN）に配石（SQ）を組み合わせ、SNQという略号を便宜的に付けた。

焼土の中にも立派で炉跡になりそうなものもあるが、一応礫を伴うものを炉跡とした。該期の炉跡は石囲炉が主となるためである（小田野　1988、金子　2000）。新しくできた自然堤防上に、4基検出されている。2基は炉体土器も検出され土器埋設石囲炉だとわかった（SNQ01・02）。何れも、縄文時代晩期末～弥生時代前期である。出土遺物は、周囲の土層から出土したものを含んでいる。

捨て場中に発見された炉跡は周囲の焼土と共に島状に残し（写真図版51）、後でまとめて精査した。なお、以下の覆土の記載は、室内で周囲の捨て場堆積状況のメモから判断したもので厳密ではない。

SNQ01 炉跡（第43・81図、写真図版36）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＯⅠ～ＰⅠグリッド。縄文晩期以降自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層にトレンチを入れた時点で確認。当然竪穴が確認されるものと思い、上面を丁寧に検出し断面でも検討し

たが、検出できなかった。

〔図・精査状況〕A-A′ 断面、北から二番目の礫、断面実測時の目測のズレ（水糸の真下を測っていない）により平面図と合わない。炉体土器とその上にある礫も全く合わないが、測り間違いかどうか不明。時間の余裕がなく合わせることができなかったことをお詫びする。B-B′ 断面、セクション・ポイント平面図と合わないのは、平面図の方を後から光波測距により付け足したため。B 側の礫は断ち割り時に崩れたため断面図にない。

〔重複〕表土に近い場所にあるため、西側の一部が壊されていて、その礫の一部が炉の中央に倒れている。

〔覆土〕捨て場遺物包含層 1 層と思われる。〔構築層〕捨て場遺物包含層 2 層と思われる。

〔種類・平面形・規模・掘り方〕土器埋設石囲炉で、石囲い部分は、一辺 1.1 ～ 1.2m の方形。北側、南側の辺等、二重に石で囲んでいる部分がある。火を受けているように見える礫もあるが、全体としては不明瞭である。埋設土器は、粗製深鉢（口縁部欠損）を正位に埋設。真っ赤に焼けている。口縁部を除き完形であったと考えられるが、取り上げ後に欠損した部分が二次焼成のため脆く粉々になってしまい接合できない。

〔焼土〕炉石に囲まれた部分は、ほぼ全域焼土が見られる。約 20cm と厚く、レンズ状に形成されている。

〔付属施設〕確認できなかった。

〔所属施設〕周囲に確認された柱穴状土坑は、本遺構を中心に同心円状に分布するものが多いので、これらからなる竪穴住居あるいは平地住居の炉跡の可能性が高い。ただし、竪穴住居であった場合でも、底はⅣ b 層までは達していない。

〔出土遺物〕60 は炉体土器、61 は精査時に周辺から出土したものである。図示した以外にも、精査時に土器片や石器が出土しているが、これらは本来炉が構築された捨て場に帰属するものと思われるので詳細については割愛する。

〔時期〕炉体土器から縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われるが特定できない。構築層から晩期末～弥生時代初頭の可能性がある。

SNQ02 炉跡（第 43・81 図、写真図版 37）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。O Ⅰ～Ⅱグリッド。縄文晩期以降自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層にトレンチを入れた際に確認。トレンチの断面から、竪穴が確認できないか検討してみたが、層境が炉のレベルに対応することは確かだが（第 60 図下の炉と書いてある部分の 2 層と 3 層の間）、立ち上がりは確認できなかった。したがって、平地住居の炉跡の可能性はあるが、竪穴住居である可能性は低い。

〔図・精査状況〕断面図、A-A′ のセクション・ポイントは平面図とほぼ合っているが礫の位置や炉体土器は合わない。平面実測時に測り間違ったもののようで、既に断ち割ってしまったため修正できない。B-B′ は、セクション・ポイントが平面図と合わないが、B′ を 2㎜（実際には 2cm）手前にすれば合う。セクション・ポイントは後に光波測距で入れたためであり、時間的な余裕がなく現場で未点検だったため合わせられなかった。

〔重複〕炉跡自体にはないと思われる。

〔覆土〕捨て場遺物包含層 2 層。〔構築層〕捨て場遺物包含層 3 層。

〔種類・平面形・規模・掘り方〕土器埋設石囲炉。石囲い部分は、40 × 30cm の楕円形に近い。西側に礫が並ばないのは、元々残りが悪かったところに調査時に礫を飛ばしてしまったためと思われる。礫は、断ち割り時ベルトをかけた東側の 2 個は明瞭に赤く焼けているが、その他ははっきりしないものが多い。炉体土器

についてだが、第43図の炉体土器に接している底部は同定できたのだが（第81図63）、肝心の炉体土器が見つからない。取り上げ後に粉々になったのかと思い捜したのだが、それらしいものを見つけることはできず炉体土器と書かれた袋自体見つけられなかった。お詫び申し上げる次第である。

〔焼土〕炉石に囲まれた部分は、ほぼ全面焼土が形成されている。16cmと厚くレンズ状に形成されている。

〔付属施設〕確認できなかった。

〔所属施設〕柱穴状土坑は周囲に確認できず、むしろ空白域をなし、はっきりしないが上記のように平地住居の炉跡の可能性があろう。

〔出土遺物〕第81図62～74の土器、12の土偶足が出土。63は炉体土器の下から出土し、その他も精査時に周辺から出土したものである。図示した以外にも周辺から土器や石器が出土しているが本来捨て場に帰属するものと思われる。

〔時期〕構築層と出土土器から、縄文時代晩期末（大洞A′式古期）の可能性が高い。

SNQ03 炉跡（第44・81図、写真図版37）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。NⅠ19～24グリッド。縄文晩期以降自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層にトレンチを入れた時点で確認。包含層が薄いせいもあるのか（第59図中央の炉と描いてある部分）、竪穴は確認できなかった。上面に焼けた礫が見られたので、炉跡として登録。

〔図・精査状況〕セクション・ポイントA′、断面図と平面図合わない。セクション・ポイントは後に光波測距で入れたためであり、時間的な余裕がなく現場で未点検だったため合わせられなかった。

〔重複〕炉跡自体にはないと思われる。

〔覆土〕捨て場遺物包含層1層。〔構築層〕捨て場遺物包含層4層。

〔種類・平面形・規模・掘り方〕礫は1つしか確認されなかったが、石囲炉か。焼土の範囲は、平面図に示した範囲で66×59cmの楕円形。礫は、火を受けて赤く焼けている。

〔焼土〕平面図に示した範囲。厚さ17cmとレンズ状に形成されている。

〔付属施設〕確認できなかった。

〔所属施設〕周囲に柱穴状土坑が広がり、平地住居の炉跡の可能性が高い。

〔出土遺物〕第81図75～77の土器が周囲から出土。図示した以外にも土器や石器が少し出土しているが本来捨て場に帰属するものと思われる。

〔時期〕構築層と出土土器から、縄文時代晩期末（大洞A′式古期）の可能性が高い。

SNQ04 炉跡（第44・81図、写真図版37～38・260）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。OⅡ6～7グリッド。縄文晩期以降自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層掘り下げ中に確認。二つの焼土が連続しているように見えたが、片方に立石が認められたので、炉跡と認定。

〔図・精査状況〕礫が一つしかなく、隣のSN05焼土と連続しているので通して断ち割った。

〔重複〕炉跡自体にはないと思われる

〔覆土〕捨て場遺物包含層1層。〔構築層〕捨て場遺物包含層2層。

〔種類・平面形・規模・掘り方〕礫（立石）が一つしか残っていないが、石囲炉と言えるか。礫の上面は、火を受けて赤くなっている。平面図に示した約90×70cmの範囲に焼土が形成されている。

〔焼土〕図に示した範囲で上述のとおり。13cmと厚くレンズ状に形成されている。
〔付属施設〕確認できなかった。
〔所属施設〕すぐそばに柱穴状土坑は検出されているが、その周りにはむしろ空白域があり、竪穴住居や平地住居は見えにくい。
〔出土遺物〕第81図78～80の土器が周囲から出土。第81図81～第82図91の土器、第82図13の円盤状土製品、12の石製玉、13の不明石製品、写真図版260の14の焼粘土塊？は、島状に残したSNQ04とSN05焼土を同時に断ち割った際に出土したものである。図示した以外にも土器や石器が出土しているが本来捨て場に帰属するものと思われる。
〔時期〕構築層から弥生時代前期の可能性が高い。

参考文献

小田野哲憲　1988「岩手県における弥生時代の住居址」『紀要』Ⅶ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
金子昭彦　2000「岩手県における縄文時代晩期の遺構」『紀要』ⅩⅨ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(3) 焼　　土

29基検出した（炉跡は別に報告した）。南東区南部の1基（SN02）は、縄文時代中期末以降～晩期、南西区中央の1基（SN03）は古代以降で、その他は縄文時代晩期末～弥生時代前期で、捨て場上面～新しくできた自然堤防上面に検出された。出土遺物は、周囲の土層から出土したものを含んでいる。

縄文時代晩期末～弥生時代前期の焼土のうち、捨て場中に発見された焼土は、炉跡と一緒に島状に残し（写真図版51）、後でまとめて精査した。炉跡の可能性のあるSN04、05については通常どおりに記録し、SN30も同様だが、SN06～29は、時間の余裕がなかったため、平面図のみ記録し（写真は集合写真のみ）、断面はスケッチのみで図、写真とも記録していない（SN17、28は後述の理由で土坑の断面図に掲載）。SN06～29は同時に精査し、番号は南から北へ連続して付けている。覆土の記載は、室内で周囲の状況のメモから判断したもので厳密ではない。

なお、SN17はSK89土坑の上面、SN28はSK90土坑の上面に検出され、特にSK90とは特別な関係がありそうである。

SN02 焼土（第45図、写真図版38）

〔位置・検出状況〕南東区南部。M Ⅸグリッド。調査区境の土層断面図（第63図）を作成するため、断面を垂直に切り落とす最中に確認。Ⅳc層が薄く、Ⅳb層との間に局地的な層が挟まる部分があり、その局地的な層（第45図4層）の上面に位置する。
〔図・精査状況〕検出位置から簡易遣り方を組むのが難しく、平面図は光波測距で作成したため焼土の位置が断面図と大きく異なってしまう。セクション・ポイントは1㎜（実際には2cm）まで合わせたのだが。
〔重複〕不明。
〔覆土〕Ⅳb層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕上述の理由で、北側を大きく壊してしまっているため、不明。
〔燃焼状態〕砂層に形成されているため、淡く赤くなっているだけである。
〔形成層〕Ⅳb層からⅣc層の漸移的な性質を持つ、局地的な層（第45図4層）。

〔所属施設〕今回の調査では、弥生時代以降の自然堤防上以外は、焼土の検出が非常に少なく、竪穴住居や平地住居の炉跡の可能性もあるかと思われる。確かに、焼土上面のラインは、焼土外に水平に続き、付近からは、柱穴状土坑（SK82）も検出され、出土土器も多い。しかし、土器は下のⅣc層から主として出土しており、局地的な落ち込み（第45図3・4・6層）は、Ⅳc層まで下がらないので、竪穴住居の炉跡の可能性は低い。平地住居の可能性は残るが、Ⅳb層との境界のラインは、地形に沿って緩やかに傾斜しており、床面とするには、やや厳しいかもしれない。
〔出土遺物〕断面クリーニング時に3×2cm以下の土器片3点（1点は土師器）、石鏃の未製品1点が出土したが、図化に耐えなかったので掲載していない。
〔時期〕形成層から、縄文時代中期末以後～晩期。

SN03焼土（第45図、写真図版38）
〔位置・検出状況〕南西区中央。NⅢグリッド。Ⅲ層上面。近世の大溝跡（SD08）のすぐ東脇。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕不明。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕焼土の形成が良くないが、焼土が見られる場所は不整形なU字形を呈す。抜けている部分がカクランされている可能性もあるが、炭化物が多く分布しているので現状を保っているものと判断した。厚さ8cm。
〔燃焼状態〕形成層が砂のためか、あまり良くない。〔形成層〕Ⅲ層。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕周囲から2×2cm以下の土器片3点出土し、2点は土師器、1点は縄文土器である。図化に耐えなかったので掲載しなかった。
〔時期〕形成層から古代以降と思われる。

SN04焼土（第45・82図、写真図版39）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。OⅠ5グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層にトレンチを入れた際に確認。島状に残し、周囲の捨て場の掘り下げが終了した後に精査した。
〔重複〕一部近接する柱穴状土坑がある。
〔覆土〕捨て場遺物包含層2層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕60×60cmの不整円形。厚さ15cm。
〔燃焼状態〕包含層中に形成されているため、比較的しっかり焼けている。
〔形成層〕Ⅳa層下部。捨て場遺物包含層3層（第45図の2層）か。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲には柱穴状土坑が見られる（第40図）。
〔出土遺物〕第82図92～100の土器が焼土下から、第82図22の剥片石器が焼き土内から出土した。図示した以外にも周囲から土器や石器が多く出土しているが（土器9号袋1.5袋、石器はほとんどが剥片だが約170点）、捨て場に帰属するものと判断する。
〔時期・所見〕出土遺物と形成層から、弥生時代初頭の可能性が高く、その規模から考えて、竪穴住居あるいは平地住居の地床炉の可能性が高い。

SN05 焼土（第 44・81 ～ 82 図、写真図版 37 ～ 38、260）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。O Ⅱ 7 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層掘り下げ中に確認。SQ04 炉跡のすぐ東側。

〔図・精査状況〕平面図に載っている土器は、断面クリーニング時に取り上げてしまったので断面図にない。隣の SNQ04 炉跡と連続しているので、通して断ち割った。

〔重複〕焼土下から柱穴状土坑が検出されている。

〔覆土〕捨て場遺物包含層 1 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕55 × 40cm 程度の不整楕円形。周囲の礫は、特に火は受けていないようで、焼土下の包含層中にも同様の礫が見られることから、抜かれた炉石ではないと思われる。約 9cm。

〔燃焼状態〕良く焼けている。

〔形成層〕Ⅳ a 層下部。捨て場遺物包含層 2 層。

〔所属施設〕確認できなかった。周囲に柱穴状土坑は見られるが、少ない（第 40 図）。

〔出土遺物〕主として焼土下から第 82 図 101 ～ 104 の土器、焼土中から第 82 図 23 の剥片石器が見つかっている。図化した以外に 9 号袋 1 袋、石器剥片等約 25 点出土。第 81 図 81 ～第 82 図 91 の土器、第 82 図 13 の円盤状土製品、12 の石製玉、13 の不明石製品、写真図版 260 の 14 の焼粘土塊？は、島状に残した SNQ04 と SN05 焼土を同時に断ち割った際に出土したものである。

〔時期〕構築層から弥生時代前期の可能性が高い。

SN06 焼土（第 47・82 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。P Ⅰ 6 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺跡の状況を把握するため試掘トレンチを入れた際に確認。検出は 5 月、精査は 9 月。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層 2 層か。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕60 × 60cm の三角形に近い。最大厚 10cm のレンズ状。

〔燃焼状態〕比較的はっきりと焼けていた。

〔形成層〕Ⅳ a 層最下部（下はⅣ b 層）。

〔所属施設〕確認できなかった。周囲に柱穴状土坑は疎（第 40 図）。

〔出土遺物〕第 82 図 105 ～ 107 の土器片等が出土。図化した以外に 5 × 4cm 以下の土器片が 5 点、石器剥片等が約 7 点出土している。

〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN07 焼土（第 47 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。P Ⅰ 2 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。柱穴状土坑検出時に確認。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層 2 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕散り散りになって、ほとんど残っていない。最大厚1cm。
〔形成層〕Ⅳb層。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕出土していない。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN08 焼土（第47図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＰⅠ2グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳb層で検出。柱穴状土坑検出時に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕下から柱穴状土坑を検出。
〔覆土〕遺物包含層2層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕散り散りになって、ほとんど残っていない。最大厚3cm。
〔形成層〕Ⅳb層。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕石器剥片B類1点が出土。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN09 焼土（第47・82図、写真図版51）
〔位置･検出状況〕南西区南西端。ＯⅠ24グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査中に確認。ややカクランを受けている。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕不明。
〔覆土〕遺物包含層1層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕60×20cmの三日月状で、不整形なのは撹乱を受けているためか。レンズ状に形成。最大厚6cm。
〔形成層〕遺物包含層2層上面。Ⅳb層上面から22cm。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第82図108・109の土器が出土。図化した以外に9号袋1/6の土器、石器ハンマー類1点、石器剥片B類5点出土している。
〔時期〕形成層から弥生時代前期の可能性がある。

SN10 焼土（第47図、写真図版51）
〔位置･検出状況〕南西区南西端。ＯⅠ17グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳb層で検出。柱穴状土坑検出に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕下から柱穴状土坑を検出。
〔覆土〕遺物包含層2層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕ほとんど残っていない。最大厚 2 ～ 3cm。
〔形成層〕Ⅳ b 層上面。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲には柱穴状土坑も少ない（第 40 図）。
〔出土遺物〕石器ハンマー類の破片が 1 点出土。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN11 焼土（第 47・82 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。O Ⅰ 20 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層精査中に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層 1 層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕40 × 22cm の不整楕円形。薄いレンズ状で面をなす。最大厚 5cm。
〔形成層〕遺物包含層 2 層中（上面 ?）。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲はむしろ柱穴状土坑の空白域になっている（第 40 図）。
〔出土遺物〕第 82 図 110 の土器、石器剥片 A 類 1 点が出土している。
〔時期〕形成層から弥生時代前期の可能性がある。

SN12 焼土（第 46 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅰ 22 グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。柱穴状土坑検出時に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層 4 層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕60 × 24cm の不整楕円形。最大厚 15cm。明瞭なレンズ状に形成。
〔形成層〕Ⅳ b 層上面。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲に柱状土坑も疎らであるが、本焼土を中心に弧を描いているようにも見える。
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN13 焼土（第 46・83 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅰ 17 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a ～ b 層で検出。遺物包含層精査中に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕柱穴状土坑と重複するか。
〔覆土〕遺物包含層 4 層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕50 × 48cm の方形に近い。最大厚 10cm。レンズ状に形成。

〔形成層〕Ⅳa層最下部～Ⅳb層上面。砂。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第83図111・112の土器が出土。図化した以外に、3×3cm以下の土器片4点、石器ハンマー類1/21点、剥片A類2点が出土している。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN14焼土（第46・84図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。NⅠ11グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳb層で検出。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕カクランを受けているか。
〔覆土〕遺物包含層4層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕約70×50cmの不整楕円。最大厚14cm。レンズ状堆積。
〔形成層〕やや汚れている気もするが、Ⅳb層。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第84図113の土器片が出土している。図化した以外に、2×2cm以下の土器片2点、石器ハンマー類破片1点、剥片類7点出土。
〔時期〕形成層から縄文時代晩期末の可能性がある。

SN15焼土（第46・83図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。MⅠ24グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査中に確認。SN16に近接。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層1-2層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕規模大きい。約100×80cmの不整楕円形。最大厚6cm
〔燃焼状態〕明瞭に焼けている。
〔形成層〕遺物包含層2層上面～2-3b層。Ⅳb層上面から60cmの高さに形成。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲は柱状土坑も少ない（第40図）。
〔出土遺物〕第83図114～117の土器片が出土している。図化した以外に、4×4cm以下の土器片約20点、石器剥片A類1点出土。
〔時期〕形成層と出土土器から、弥生時代前期の可能性がある。

SN16焼土（第46・83図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。MⅠ25グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査中に確認。SN15に近接。
〔図・精査状況〕平面図のみ。周囲の包含層断面図は第58図にある。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層2層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕カクランのせいか、ブロック状になっている部分があり不整形だが、面的に広がる部分があり、現地性のものであることは間違いない。約 76 × 64cm の不整楕円形。最大厚 8cm。
〔形成層〕遺物包含層 2-3b 層、3 層上面。Ⅳ b 層上面から 54cm の高さに形成。
〔所属施設〕確認できなかった。周囲は柱状土坑も少ない（第 40 図）。
〔出土遺物〕第 83 図 118 の土器が出土。図化した以外に、4 × 4cm 以下の土器片約 15 点、石器ハンマー類 1 点、剥片 5 点出土。
〔時期〕形成層と覆土から、縄文時代晩期末の可能性がある。

SN17 焼土（第 46・83 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅰ 10 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。遺物包含層除去後に確認。SK89 土坑の上面にある。SN18 に近接。
〔図・精査状況〕断面図は SK89 土坑参照（第 50 図）
〔重複〕SK89 土坑の上面にある。
〔覆土〕遺物包含層 5 層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕約 54 × 36cm の不整楕円形。厚さ約 6cm。
〔燃焼状態〕砂が焼けたものなので不明瞭。
〔形成層〕SK89 土坑覆土 2 層。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕焼土中から第 83 図 119、120 の土器片が出土した。図化した以外に 3 × 2cm の縄文のみの土器片 1 点、石器ハンマー類破片 1、剥片 B 類 1.79g 出土。
〔時期〕覆土及び土坑から、縄文時代晩期末の可能性が高い。

SN18 焼土（第 46・83 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅱ 6 グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層にトレンチを入れた際に確認。SN17 焼土に近接。
〔図・精査状況〕平面図のみ。周囲の包含層断面図は第 60 図にある。
〔重複〕ないものと思われる。
〔覆土〕遺物包含層 3 層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕一応レンズ状に形成されているが、一様でなくまだら。約 48 × 48cm の方形。厚さ 8cm 程度。
〔形成層〕遺物包含層 4 層上面（砂再堆積に炭混じりの土）。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第 83 図 121 の土器片、図化した以外に、2 × 2cm 以下の土器片 2 点、石器剥片 7 点出土。
〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末の可能性がある。

SN19 焼土（第 46 図、写真図版 51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅰ 14 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。遺物包含層精査時に確認。SN20 焼土に近接。

〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層4層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕形成層が砂層のため、明瞭な線を描かないがレンズ状に形成。78 × 40cm程度の不整楕円形。厚さ10cm。
〔形成層〕Ⅳb層上面（あるいは包含層最下層である4層）。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕断ち割り時に、3 × 2cm以下の土器片4点、石器ハンマー類1/21点、剥片3点出土。
〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末の可能性がある。

SN20 焼土（第46・83図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＮⅠ14グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査時に確認。SN19に近接。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土〕遺物包含層3層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕散り散りのブロック状だが堅く広がる部分もあり、現地性かどうか判断が難しい。範囲は44 × 40cm程度の三角形に近い。最大厚2cm。
〔形成層〕遺物包含層最下層（4層）。Ⅳb層上面から20cmの高さに形成。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第83図122の土器底片、図化した以外に、3 × 2cmの縄文のみの土器片1点、石器剥片A類2点出土。
〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末の可能性がある。

SN21 焼土（第46・83図、写真図版51）
〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＮⅠ18～23グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳb層で検出。遺物包含層精査後に確認。
〔図・精査状況〕平面図のみ。
〔重複〕柱穴状土坑と重複し、切られる。
〔覆土〕遺物包含層4層か。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕重複を受けて散り散りだが、全体としてはレンズ状に形成。約84 × 60cmの楕円形。最大厚8cm。
〔形成層〕Ⅳb層上面。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕第83図123の土器片、図化した以外に、2 × 1.5cm以下の土器片3点、石器ハンマー類破片1点、剥片1点出土。
〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末の可能性がある。

SN22 焼土（第 46 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＮＩ 24 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層精査後に確認。下げすぎたと思う。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思うが、周囲に柱穴状土坑が近接。

〔覆土〕遺物包含層 1 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕約 34 × 21cm の楕円形。断面形は不整形だが、レンズ状に近い。最大厚 7cm。

〔形成層〕遺物包含層最下層。Ⅳ b 層上面から 12cm の高さに形成。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕1.5 × 1.5cm 以下の剥落した土器片 1 点、石器剥片 B 類 2 点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、弥生時代前期の可能性がある。

SN23 焼土（第 46 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＮＩ 25 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a 層で検出。遺物包含層を精査した際に確認し、柱状に残しておいたが、ぶつかって壊れてしまった。明らかに掘りすぎている。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層 2 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕20 × 14cm の楕円形。レンズ状に形成。最大厚 10cm。

〔形成層〕遺物包含層 3 層か。Ⅳ b 層上面から 22cm の高さに形成。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕石器ハンマー類 1 点、剥片 4 点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、弥生時代前期の可能性がある。

SN24 焼土（第 46・83 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＮＩ 24 ～ＯＩ 4 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ a ～ b 層で検出。遺物包含層精査後に確認。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層 1 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕約 44 × 14cm の長楕円形。散り散りだが、全体としてはレンズ状に形成。最大厚 4cm。

〔形成層〕遺物包含層最下層（4 層）かⅣ b 層上面。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕第 83 図 124 の土器片、図示した以外に、石器ハンマー類 5A 破片 1 点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、弥生時代前期の可能性がある。

SN25 焼土（第46図、写真図版51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＯⅠ4グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳb層で検出。前年度試掘トレンチを入れた際に確認。上にカクランあり。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕柱穴状土坑と重複し、より新しいようだ。

〔覆土〕遺物包含層2・4層。カクランあり。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕124×46cmの不整楕円形。周囲に検出された焼土の中で最も整ったレンズ状。最大厚10cm。

〔形成層〕Ⅳb層上面（一部遺物包含層最下層含む?）。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕4×2.5cm以下の土器片2点（1点は円盤状土製品の破片?）、石鏃未製品2A類、剥片4点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末～弥生時代前期。

SN26 焼土（第46・83図、写真図版51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。ＯⅡ1グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査中に確認。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕柱穴状土坑と重複し、より新しいようだ。

〔覆土〕遺物包含層2層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕60×36cmの不整楕円形。上面は面的に広がっているが、断面は不整形。最大厚6cm。

〔形成層〕遺物包含層3層上面。Ⅳb層上面から30cmの高さに形成。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕第83図125･126の土器片、図示した以外に、土器片6×3cm以下約4点、磨製石斧未製品1A類1/21点、剥片8点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の可能性がある。

SN27 焼土（第46・83図、写真図版51）

〔位置･検出状況〕南西区南西端。ＮⅡ21～ＯⅡ2グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳa層で検出。遺物包含層精査中に確認。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層2層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕78×64cmの不整楕円形。底は面的に広がるが不整形。最大厚8cm。

〔形成層〕遺物包含層3層上面（シルト質）。Ⅳb層上面から30cmの高さに形成。

〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕第83図127の土器片、図示した以外に、2×2cm以下の土器片約5点、石器剥片11点出土。

〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の可能性がある。

SN28 焼土（第 50・84・85 図、写真図版 43）

〔位置・検出状況〕南西区南西。N Ⅱ 20 グリッド。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。遺物包含層精査後に確認。SK90 土坑上面にある。

〔図・精査状況〕SK90 土坑（第 50 図）参照。

〔重複〕SK90 土坑上面にある。

〔覆土〕検出面≒掘り込み面なら、遺物包含層 4-5 層。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕110 × 93cm の不整楕円形。約 6cm。

〔形成層〕SK90 土坑覆土。

〔所属施設〕SK90 土坑のほぼ全面を覆っており、また、SK90 では 2 層を挟んで再び焼土層と、互層になっていて、本土坑に伴うと考えるのが自然であろう。

〔出土遺物〕SK90 土坑 1 層出土遺物（第 84・85 図）。詳細は SK90 土坑参照。

〔時期〕検出位置と出土遺物から、縄文時代晩期末と思われる。

SN29 焼土（第 47 図、写真図版 51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。O Ⅰ 6 グリッド中心。縄文晩期以降の自然堤防上Ⅳ b 層で検出。グリッド杭の下で柱穴状土坑検出時に確認。自然堤防西端落ち際。

〔図・精査状況〕平面図のみ。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層 2 層か。

〔平面形・規模・断面形・厚さ〕50 × 30cm の楕円形。カクランを受けているが、明瞭にレンズ状に形成され、最大厚 13cm。

〔形成層〕Ⅳ b 層。

〔所属施設〕確認できなかった。周囲に柱穴状土坑は少ない。

〔出土遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土と形成層から、縄文時代晩期末～弥生時代前期の可能性がある。

SN30 焼土（第 45・83 図、写真図版 39）

〔位置・検出状況〕南西区中央南端。N Ⅲ 8 グリッド付近から南の調査範囲外に続く。縄文晩期以降捨て場として使用された後背湿地Ⅳ a 層の上面に近い場所で検出。遺物包含層にトレンチを入れた際に確認。8 月初めに確認したが、精査を行ったのは遺物包含層精査直前の 9 月中旬である。

〔図・精査状況〕捨て場上面にあったため時間の余裕がなく、平面図は光波測距で作成したせいか、セクション・ポイント、土器の位置、断面図と合わない。包含層 1-2 層下で検出した際には、それほど広がるようには思えなかったが（写真図版 39）、記録後焼土を土壌サンプルとして採取しようと考え、焼土を追ったところ、下にもぐりこんで南西方向にどんどん広がってしまい、調査範囲外まで進んでしまった。どこまで続くか見当がつかないことと調査期限も迫っていたことから、調査範囲外については精査を断念した。周囲の包含層断面図は第 59 図にある。

〔重複〕不明だが、調査範囲内にはないと思われる。

〔覆土〕遺物包含層1-2層。
〔平面形・規模・断面形・厚さ〕調査範囲外に続くので不明だが、調査した限りでは最大長約190cm、厚さ約10cm。
〔燃焼状態〕比較的良く焼けており、周囲に炭化物広がる。
〔形成層〕Ⅳa層。遺物包含層2-3b2層上面か（第59図）。
〔所属施設〕確認できなかった。
〔出土遺物〕焼土中に骨片や土器も含む。周囲に炭化物広がる。第83図128～134の土器片、図示した以外に、9号袋1/2の土器片、砥石片2点、石器剥片2点出土。
〔時期〕覆土と形成層、出土遺物から、弥生時代前期の可能性が高い。

(4) 土　　坑

14基検出した。縄文時代が3基、縄文時代晩期末～弥生時代前期が7基、平安時代が4基である。東区に検出されたSK78は弥生時代前期、SK79は縄文時代、南東区南部に検出されたSK80は平安時代（10世紀）、SK81･82は縄文時代、南西区北東側（SD08より北東）に検出されたSK83～85は平安時代、SK86～91は、南西区捨て場（ST01）中～下に検出されたもので、縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる。

SK90は、覆土に焼土（SN28）と黒色土の交互層が見られ、黒色土には大量のクルミが含まれていた。SK89上面にも焼土（SN17）が認められた。SK87・89・91は、現地では気づかなかったが、掘立柱建物跡を構成する柱穴かも知れない（第40図）。SK82・86・88は疑似現象の可能性がある。SK80は壁～底が火を受け、SK84は炉跡状の付属施設を持ち、特殊な機能が予想される。

SK78土坑（第48図、写真図版39）

〔位置・検出状況〕東区南端。GⅧグリッド。前年度から残されていた土層観察ベルト中に落ち込みを確認し、土坑と認定。断面でも平面でも、ほとんど周囲の土と変わらなかったが。
〔図・精査状況〕断面で周囲と比較してやっと土坑と認識できた程度なので、壁と底の把握は難しかった。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕Ⅳa層とⅣb層の境のラインが土坑状に落ち込んでおり、Ⅳa層とほとんど変わらない土で埋まっている。
〔平面形・規模〕約57×43cmの楕円形。
〔断面形・深さ〕丸みを帯びた浅鉢形。約20cm。
〔壁・底〕はっきりしない。壁は外反。
〔出土遺物〕出土していない。
〔時期〕掘り込み面から、弥生時代前期の可能性がある。

SK79土坑（第48図、写真図版39）

〔位置･検出状況〕東区南端（昨年度の調査区である土木中央区に入っている）。ⅠⅦグリッド。検出面（Ⅴ層）を10～20cm下げたところで、比較的はっきりと確認。覆土は一様であったが、輪郭はぼんやりしていた。周囲の土との境がボンヤリしており念のため断ち割ったところ、立ち上がりがはっきりと確認されたので、土坑と認定。周囲に確認された多くの土坑状のシミは、半裁した結果、全て擬似現象であった。なお、

実測前はわからなかったが、本遺構は昨年度の調査範囲に含まれることが判明した。
〔図・精査状況〕セクション・ポイント（おそらくA）断面図と平面図で合わないのは、斜めに水糸を張るピンを刺し、ピンを基点（0cm）としたためか。一番東（A′）側の上場、トレンチの上場合わないのは、完掘時に掘りすぎたためか。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕上半は灰黄褐色土、底は粘性の強い黒土、その上は黄褐色土。
〔平面形・規模〕82 × 74cm 程度の小判形か。
〔断面形・深さ〕浅鉢形。32cm。
〔壁・底〕上部は崩れている。
〔出土遺物〕出土しなかった。
〔時期〕検出位置から、縄文時代の可能性がある。

SK80 土坑（第 48・83 図、写真図版 40）
〔位置・検出状況〕南東区南部。M Ⅳ 20 グリッド。斜面下方、Ⅲ層上面を 5cm 下げたところで検出。上層の砂再堆積層はわかりにくかったが、下層の黒土が壁際に広がっていたため、はっきりと確認できた。
〔図・精査状況〕南東（A）側の下場完掘時に掘り広がったため、断面図と平面図合わない。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕上半はⅢ層再堆積砂層。下半は、黒土に砂ブロックを含む層で、埋め戻した土と思われる。土器多く、礫を含む。
〔平面形・規模〕約 56 × 40cm の楕円形。
〔断面形・深さ〕U 字形に近い。約 32cm。
〔壁・底〕壁・底は、Ⅲ層で、火を受けているのか赤黒い砂である。壁は、垂直～オーバーハング気味。底は、根穴か掘り方か、黒土が点々としている。
〔出土遺物〕（出土状況）西壁際で、拳大の礫の下に土師器の大きな口縁部破片が内面を上に向けて横倒しになって出土（第 48 図、写真図版 40= 第 83 図 12）。同一個体破片が、そのすぐ東側と、南壁近く（半裁し断面を記録した場所のすぐ東側）から出土している（第 83 図 11）。第 83 図 11 と 12 は、同一個体だが接合しない。
（遺物）上述のように第 83 図 11=12 の土師器が出土した。図示した以外に約 130g（10 × 6cm の同時期の土師器甕胴部 1 片、同じく 6 × 4cm 2 片、後は 3 × 3cm 以下の土師器細片 5、2 × 2cm 以下の縄文土器片 1）出土。土師器片は、何れも第 83 図 11=12 と同一個体と思われるが、全て合わせても全体の 1/3 にもならず、残りの 2/3 は出土していない。
〔時期〕検出面と出土土器から、平安時代（10 世紀）と思われる。
〔所見〕壁・底の様子、覆土、礫などから、墓（火葬墓？）の可能性があるが、骨が出土せず規模が非常に小さい。出土土器の残存状況も中途半端である。逆に、規模と覆土、出土土器からは、柱穴の可能性もあるのかも知れない。

SK81 土坑（第 48 図、写真図版 40）
〔位置・検出状況〕南東区南部。L Ⅷ 14 グリッド。縄文時代以来の自然堤防の東端。表土下に検出されたV

層を10～20cm下げたところで確認。全て砂の堆積土でわかりづらかったが、半裁の結果立ち上がりが確認されて、土坑と認定。表土下にあったため、根等によるカクラン多く、汚れている。
〔図・精査状況〕覆土の性質とカクランのため、わかりづらく、半裁時には下に大きく掘りすぎている。
〔重複〕SD14溝跡に切られる。
〔覆土・堆積状況〕全て砂の再堆積で、上（1）層は、黒く汚れた砂の再堆積、下（2）層は、1層とⅤ層が混在したもの、断面図を作成した部分には見えなかったが、半裁時に残った部分の1層と2層の間には、1-2層という、1層より顕著に黒い層があった。3層は掘りすぎ。
〔平面形・規模〕約72×65cmの隅丸方形。
〔断面形・深さ〕浅鉢形。約30cm。
〔壁・底〕壁～底Ⅴ層。底のⅤ層は、カクランを受けていたので、半際時大幅に掘り過ぎた。
〔出土遺物〕出土しなかった。
〔時期〕覆土と検出状況から、縄文時代の可能性が高い。

SK82土坑（第48図、写真図版40）

〔位置・検出状況〕南東区南部。MⅨ15グリッド中心。斜面下方、Ⅴ層上面で検出。炭化物が集中する場所があり、断ち割ったが、周囲にも炭化物が散り、あまりそれらしくなかった。しかし、周囲に多く見られた擬似現象と異なり炭化物が顕著なこと、近くで土器が多く出土したこと、SN02焼土を伴う住居の柱穴の可能性もあると考え、遺構と認定した。
〔図・精査状況〕頼りになるのは炭の含有量だけで、壁、底ともはっきりしない。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕上層は、灰黄褐色土に炭化物が散り、下層は、周囲のⅤ層とほぼ同じ黄色の砂層に炭化物が散る。
〔平面形・規模〕ひしゃげた隅丸長方形。約42×30cm。
〔断面形・深さ〕U字形。約20cm。
〔壁・底〕壁～底は、Ⅴ層。しかし、覆土は上記のような状態で、また、周囲のⅤ層にも炭化物が散り（根によるカクランか）、壁～底ははっきりしない。
〔出土遺物〕図示しなかったが、約20gの土器片（摩耗した斜縄文土器片1、1×1cm以下の細片2）、石器剥片A類0.06g出土。
〔時期〕検出位置と出土土器から、縄文時代の可能性が高い。
〔所見〕上記のように住居の柱穴の可能性を考え、遺構としたが、SK02焼土に記したように、住居が存在した可能性は薄く、遺構でないかも知れない。

SK83土坑（第48・83図、写真図版41）

〔位置・検出状況〕南西区中央。MⅢ13～19グリッド。近世の大溝跡（SD08）のすぐ東に隣接（縄文時代以来の自然堤防西端斜面上）。Ⅱ層下部～Ⅲ層上面。輪郭はぼんやりし、近世の遺構のようには見えなかった。また、周囲から出土したものは土師器ばかりである。
〔図・精査状況〕一部掘り過ぎた部分がある。
〔重複〕ないと思われる。

〔覆土・堆積状況〕SK85 土坑に似るが、より明るく砂っぽい。Ⅲ層ブロックを多く含み霜降り状を呈していたように思う。上部から、3㎜程度の骨片状のものが出土した。
〔平面形・規模〕約 208 × 207cm の円形。
〔断面形・深さ〕皿状。約 20cm。
〔壁・底〕壁～底、Ⅲ層。壁の一部にブロック状の灰白色火山灰（十和田 a 降下火山灰？）が見られた。
〔出土遺物〕第 83 図 13、14 の土師器片、第 83 図 135 の弥生？土器片、24 の砥石片、図示した以外に、約 280g の土器片（3 × 3cm 以下の細片約 40 点、1/4 が縄文～弥生土器片、残りは平安時代土器片）、石器ハンマー類破片 4（1Bc 類 2、1A 類 2）、砥石片 2 点、剥片 A3.96g、剥片 B35.08g 出土。
〔時期〕検出面と出土土器から、平安時代の可能性が高い。

SK84 土坑（第 49・83 図、写真図版 41）
〔位置・検出状況〕南西区中央よりやや北。M Ⅳグリッド。近世の大溝跡（SD08）からやや離れた東側に立地。Ⅱb 層中に検出。かなり高い面で確認できたが、周囲に遺構があるか否かはっきりしなかったので、本遺構を島状に残して検出を続けた。
〔図・精査状況〕断面図 C-C′、C 側の礫の右端、断面実測時の目測のズレ（水糸の真下を測っていない）により平面図と合わない。壁がはっきりと立ち上がらず、掘りすぎ多い。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕下層は、より暗い土。
〔平面形・規模〕おおむね隅丸方形だが、壁が不明瞭なため不整形である。140 × 120cm 程度か。
〔断面形・深さ〕約 18cm。
〔壁・底〕壁～底は、Ⅱb 層最下部～Ⅲ層上部。壁は、ダラダラと立ち上がる。
〔付属施設〕坑底中央に三つ礫が並び（一つは明らかに立っている）、石も周囲も火を受け赤くなっている。
〔出土遺物〕（出土状況）礫に囲まれた部分から、土師器坏？の底部片（第 83 図 18）が出土。
（遺物）第 83 図 15 ～ 18 の土師器、136 の剥落した底部片（弥生土器と考えていたが土師器の可能性が高い）、図示した以外に約 180g の土器片（弥生土器片 2 × 2 ～ 3cm 2 点、他は全て土師器、最大 7 × 6cm 1 点、5 × 5cm 3 点、それ以下約 8 点、甕胴部破片がほとんどだが、1 片坏口縁部小片）、石器ハンマー類 5A 類 1 点出土。15 は、接合した土器片の残存状況がかなり異なる。
〔時期〕検出状況からは近世とも考えられるが、半完形土器の第 83 図 15 の存在などから、平安時代（10 世紀）の可能性が高い。
〔所見〕付属施設などから考えると、墓（火葬墓）などの可能性もあるのかも知れない。

SK85 土坑（第 49・83 図、写真図版 41 ～ 42）
〔位置・検出状況〕南西区中央やや北寄り。L Ⅲ～ M Ⅳグリッド。前年度入れたトレンチ（大溝の土層観察用ベルトに沿って掘り下げた部分）をクリーニングして確認。作業進行上の都合で M Ⅳグリッドは既にⅢ層まで下げてしまっていたが、実際にはⅡb 層から掘り込まれており、M Ⅲグリッドでは、ぼんやりとではあるがⅡb 層で確認できた。
〔図・精査状況〕断面図 A-A′、A′ 側上場、完掘時掘りすぎたせいか平面図と合わない。B-B′、B′ 側の下場掘りすぎて平面図と合わない。東壁、掘りすぎ。

〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕2層に分けたが、ほとんど同じで、Ⅲ層ブロックを含む、ややシルト質の土。
〔平面形・規模〕楕円形。298 × 228cm。
〔断面形・深さ〕皿状。約45cm。
〔壁・底〕壁は、Ⅱb層、底は、Ⅱb層下部～Ⅲ層最上部。壁は、Ⅱb層から調査できた部分は、垂直に近い状態で立ち上がる。
〔出土遺物〕第83図137・138の弥生？土器片、25の石器の掻・削器類（石篦？）、図示した以外に、土器約460g（9号袋1/6、全て4 × 4cm以下、縄文土器4/5、土師器1/5）、石器掻・削器1点、ハンマー類6点（1A類片1、完形1、1Bc類片2、5B類片1、不明破片1）、砥石類6点（1類片3、4A類完形1、4B類完形1、5類片1）、台石片2点、磨製石斧原料?1点、剥片A類275.95g、剥片B類76.51g出土。
〔時期〕検出層と出土土器から、平安時代の可能性がある。

SK86土坑（第49・83図、写真図版42）
〔位置・検出状況〕南西区中央。M Ⅲグリッド。捨て場（湿地底すぐ東）Ⅳa層上面で検出。壁に沿って並ぶ炭化物で、はっきりと確認。
〔図・精査状況〕土がわかりづらいので念のため半裁時かなり下げた。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕大部分は、黄褐色のシルト質層、その下に薄く炭化物を多く含む層が底から壁まで広がる。
〔平面形・規模〕楕円形。約82 × 58cm。
〔断面形・深さ〕浅鉢～擂り鉢状。約18cm。
〔壁・底〕壁～底、Ⅳa層。
〔出土遺物〕第83図139の弥生？土器片、図示した以外に、同じく2層から3 × 2cmの斜縄文の土器片1、1.5cm以下の土器片1点（計、約10g）出土。1層から石器剥片A類37.29g出土。
〔時期〕検出位置から弥生時代前期か。
〔所見〕壁、底付近の一部は、グライ化して灰色のブロックを呈している。水に原因が求められよう。穴が埋まった後の可能性もなくはないが、おそらく窪んでいる最中に、その影響を受けたものと思われる。このことと断面がやや変わった形であることから、自然現象（植物？）の可能性もあるのかもしれない。SK88も、同様である。

SK87土坑（第49・83図、写真図版42）
〔位置・検出状況〕南西区南。N Ⅰグリッド。縄文晩期以降の自然堤防上。Ⅳb層上面で検出。輪郭はボヤーとしてはっきりせず、半裁しても、壁や底は、はっきりしなかった。悩んだが、一応壁と底らしきものを認識できることから、土坑と認定した。
〔図・精査状況〕断面図A-A′、A側の上場、完掘時崩れたため平面図と合わない。
〔重複〕柱穴状土坑2基（1・2層）に切られる。
〔覆土・堆積状況〕柱穴状土坑に相当する部分（1・2層）以外は、単層（3層）で、褐色土に黄褐色の砂のブロックを多量に含む。ただし、3層は、根による汚れに見えなくもない。

〔平面形・規模〕楕円形。約 120 × 80cm。
〔断面形・深さ〕不整形な浅鉢。約 40cm。
〔壁・底〕壁～底は、Ⅳ b 層だが、はっきりしない。
〔出土遺物〕第 83 図 142・143 の縄文？土器片、26 の石鏃、図示した以外に、縄文～弥生土器片約 230g（9 号袋 1/7、5 × 4cm 以下）、石器ハンマー類 2 点（1Bc 類破片 1、5B 類破片 1）、砥石 2 点（5 類完形 1、欠損 1）、剥片 A 類 68.53g、剥片 B 類 281.87g 出土。
〔時期〕検出層から、縄文時代晩期末の可能性がある。
〔所見〕SK87 と SK81 は柱穴状の土坑で、掘立柱建物を構成する可能性があり、位置関係から（第 40 図）、本土坑も、その一角を担う可能性がある。そうなると、重複と考えていた柱穴状土坑は本遺構に伴うのかも知れない。しかし、建物を構成する柱の 4 本目の位置に土坑は検出できなかったので確証はない。

SK88 土坑（第 50・83 図、写真図版 42）

〔位置･検出状況〕南西区中央。M Ⅲグリッド。捨て場（湿地底すぐ西）Ⅳ a 層上面に近い部分で検出。SK86 と同様、黒い土が壁際に入るので、はっきりと確認できた。
〔図・精査状況〕覆土が周囲とはっきり異なっており掘りやすかった。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕上から、洪水堆積砂層（Ⅳ b 層？）の再堆積層、グライ化した灰色土、暗褐色土の順。
〔平面形・規模〕楕円形。約 80 × 70cm。
〔断面形・深さ〕V 字形。約 30cm。
〔壁・底〕壁～底、Ⅳ a 層。
〔出土遺物〕第 83 図 144 ～ 148 の弥生前期土器、図示した以外に、縄文～弥生土器片約 290g（9 号袋 1/7、7 × 7cm の底部片 1、他はほぼ 5 × 5cm 以下、斜縄文の胴部片がほとんどだが、3 × 2cm 以下の口縁部沈線文様を持つ破片 2）、石器ハンマー類 1Bc 破片 1 点、剥片 A 類 7.11g 出土。
〔時期〕検出層と出土土器から、弥生時代前期の可能性がある。
〔所見〕底が、グライ化して灰色を呈し、またその周囲に赤い酸化鉄が見られる。SK86 同様水の影響を受けており、覆土から考えると、湿地にあった木などが倒れた跡か。

SK89 土坑（第 50・84 図、写真図版 43）

〔位置･検出状況〕南西区南西端。N Ⅰグリッド。縄文晩期以降の自然堤防上。包含層除去後、すぐ確認。Ⅳ b 層上面。
〔図・精査状況〕極端に底が狭まり、また地山が砂で覆土下部が砂の再堆積のため、掘りづらかった。
〔重複〕上面に SN17 焼土がある。
〔覆土・堆積状況〕Ⅳ b 層の再堆積が主。
〔平面形・規模〕楕円形。
〔断面形・深さ〕上場が広がり、下場が尖る T 字形。
〔壁・底〕Ⅳ b 層。壁が広がり始める中間場付近にグライ化している部分がある。
〔出土遺物〕第 84 図 149 ～ 164 の縄文土器、27、28 の石器ハンマー類、図示した以外に約 1.58kg の縄文～弥生土器片（9 号袋 1、ほとんどが胴部斜縄文片で、同一個体が 9 号袋 1/7 くらいあり、沈線文様を持つ土器

片も4～5片、5×4.5cm 以下の台部片あり、大洞A′式新?)、石器磨製石斧未製品破片6点（0類2、1A類2、2類2)、ハンマー類4点（1A類破片1、2類完形1、)、台石破片1点、砥石3点（4A類破片1、完形1、5類完形1)、剥片A類205.16g、剥片B類960.19g、石製品石棒未製品破片1点出土。

〔時期〕検出層と出土土器から、縄文時代晩期末の可能性が高い。

〔所見〕断面形から柱穴の可能性がある。掘立柱建物跡で、SK91は同様の土坑で、SK87も含めて建物を構成する可能性もあるが（第40図)、残りの部分に相当する土坑は検出できなかった。

SK90土坑（第50・84・85図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕南西区中央南端。NⅡグリッド。捨て場（湿地底すぐ東側）Ⅳb層で確認。包含層除去後、SN28焼土を確認し、その周囲に黒土が広がることから、土坑の可能性を考え、半裁後確定した。

〔図・精査状況〕覆土が明瞭で掘りやすかった。

〔重複〕上面にSN28焼土があるが、その位置から一体のものと考えるのが自然であろう。

〔覆土・堆積状況〕焼土と黒色土の互層。2層には大量のクルミ（1,490.61g)、不明種子（7.29g）を含む。

〔平面形・規模〕楕円形。約115×100cm。〔断面形・深さ〕はっきりしないが皿状か。約20cm。

〔壁・底〕壁～底、Ⅳb層。

〔出土遺物〕（出土状況）炭化物層を中心に、クルミなどの多くの植物遺体が出土し、完掘時に残った土は全て持ってきて洗った（不手際で重量計測忘れ)。

（人工遺物）第84図165～176の縄文土器片、第84図29～第85図38の石器（ハンマー類が主体で磨製石斧の未製品を含む)、図示した以外に約680gの縄文～弥生土器片（9号袋1/4、無文の同一個体片1/10、残りはほとんど5×5cm 以下の斜縄文片)、石器磨製石斧未製品破片4点（0類3、2類1)、ハンマー類11点（1A類破片2、完形1、1Bc類破片1、3B類破片1、完形1、4C類破片1、5A類破片2、5B類破片1、6類完形1)、台石破片1点、砥石8点（1類破片1、完形3、4A類破片1、完形1、6類完形2点)、剥片A類87.51g、剥片B類675.18g出土。

（自然遺物）焼土層を中心に、ギギなどの魚骨、カエルやスズメ、不明獣類骨が出土し、炭化物層を中心に、大量のクルミ、大量の不明種子、樹皮、稈などが出土している。第Ⅵ章第4表および第Ⅸ章第4節参照。

〔時期〕検出層と出土土器から、縄文時代晩期末の可能性が高い。

〔所見〕出土した自然遺物から食物加工に関係する土坑かと思われたが、出土石器からは裏付けられない。これら全体を供献品と考え墓と位置づけるべきなのであろうか。

SK91土坑（第50・85図、写真図版43)

〔位置・検出状況〕南西区中央南端。NⅡグリッド。捨て場（縄文晩期以降の自然堤防の東端）Ⅳb層で検出。包含層除去後に確認し、輪郭がはっきりしないのでただの落ち込みの可能性も疑ったが、半裁の結果深かったので、土坑と認定。

〔図・精査状況〕完掘時下場掘り広がったため、断面図A側の下場平面図と合わない。

〔重複〕ないと思われる。

〔覆土・堆積状況〕上面中央に広がる2層は、黒褐色土にⅣb層ブロックを含む。下部は汚れⅣb層再堆積。

〔平面形・規模〕楕円形。約120×100cm。

〔断面形・深さ〕T字形の変形。約60cm。

〔壁・底〕壁～底、Ⅳb層。中段は、やや汚れていて覆土のようにも想像されるが、炭化物は含まないので地山であると判断した。中断の一部にグライ化したところがある。

〔出土遺物〕（出土状況）2層上面に大量の土器が広がる。

（遺物）第85図177～183の土器、図示した以外に、約650gの縄文～弥生土器片（9号袋1/4、最大12×9cmの斜縄文胴部片、9×5cmの底部片、比較的大きな破片多い）、石器剥片ハンマー類1点（5A類完形1）、砥石1点（1類完形1）、A類158.18g、剥片B類155.34g出土。

〔時期〕検出層と出土土器から、縄文時代晩期末の可能性がある。

〔所見〕断面形から考えると柱穴の可能性がある。掘立柱建物跡が存在した可能性があり、SK89は同様の土坑で、SK87も含めて建物を構成する可能性もあるが（第40図）、残りの部分に相当する土坑は検出できなかった。

（5）柱穴状土坑

直径30cm未満の小さい土坑である。厳密にはSK82もほぼこれに相当するが、周囲にこれ1基のみしか検出できず柱穴状土坑とするには問題が多いので土坑とした。

近世の大溝跡（SD08）の東側Ⅲ層上面で検出されたもの（大溝東柱穴群）と、縄文時代晩期以降の自然堤防上Ⅳb層上面で検出されたもの（縄文時代晩期以降自然堤防上柱穴群）の二群がある。前者は、建物を構成しそうもないが近世の可能性があり、後者は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の平地住居の柱穴の可能性がある。後者は、捨て場除去後のⅣb層上面でまとめて検出を行ったが、捨て場中のトレンチ断面に掘り込みが見られたものもあり、実際には捨て場中から掘りこまれたものも多いと思われる。

大溝東柱穴群（第41図）

Ⅲ層上面で、近世の大溝跡（SD08）の東側に8つの柱穴状土坑が検出された。これらは、大きく二ヶ所に分かれる（LⅢ柱穴群とMⅢⅣ柱穴群）。両者は位置が違うだけでほとんど同じ。

・LⅢ柱穴群（第50図、写真図版43～44、242の19）

〔位置・検出状況〕南西区中央～北。LⅢグリッド。Ⅲ層上面。幾つか柱穴状土坑らしきものを検出したが、半裁の結果遺構と判断したのは2基のみ。MⅢⅣ柱穴群とは、位置が違うだけでほとんど同じ。

〔図・精査状況〕pit1の断面図セクション・ポイントBが平面図と合わないのは、断面図作成時に基点（0cm）を垂直に下ろさなかったためと思われる。pit2の下場が断面図と平面図で合わないのは、完掘時に特にA側が掘り広がったためと思われる。

〔重複〕ないと思われる。

〔配置・規模〕2基のみだが、間隔は、MⅢⅣ柱穴群とほとんど同じ。

〔柱穴〕2基のみだが、形態はかなり異なる。覆土は、MⅢⅣ柱穴群とほとんど同じ。pit1は壁～底Ⅲ層、pit2は壁Ⅲ層、底Ⅳa層。

〔炉等の付属施設〕〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕pit1の2層から、2×2cm以下のロクロ土師器坏（内黒）口縁部破片が出土している（写真図版242の19）。

〔時期〕検出層と出土土器から古代以降で、柱穴状土坑の形状から近世の可能性がある。

〔所見〕柱穴状土坑の形状と間隔から、MⅢⅣ柱穴群と一連のものと思われる。

・M ⅢⅣ柱穴群（第51図、写真図版44）

〔位置・検出状況〕南西区中央。M Ⅲ～Ⅳグリッド。Ⅲ層上面で検出し、怪しいと思って半裁したものの中から、深さ等によって遺構の可能性が高いものを選別。したがって、同じ覆土でありながら、浅いものは認定しなかった。

〔図・精査状況〕以下は、何れも平面図と断面図との照合である。pit1の下場が全く合わないのは完掘時の掘りすぎらしい。pit2の下場が合わないのは、底が平らでないための認識の違い。pit3、4のC側の下場が合わないのは完掘時の掘りすぎらしい。pit5のE側の上場合わないのは完掘時の掘りすぎのため。

〔重複〕ないと思われる。

〔配置・規模〕pit1・6・5などのように、一部並んでいるように見える場所もあるが、全体としては不規則に散在。

〔柱穴状土坑〕柱穴状の規模はほぼ同じだが、形や深さは様々である。覆土は、濃淡の違いはあるが、黒褐色～灰黄褐色土にⅢ層ブロックを含むもの。基本的にpit4は、壁～底Ⅲ層、それ以外は、壁上部Ⅲ層、壁下部～底Ⅳa層。掘り方は、pit4にはそれらしいものも見られたが、基本的に確認できなかった。

〔炉等の付属施設〕〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕出土しなかったようである。

〔時期〕検出面および覆土から、近世と思われるが、遺物による裏づけはない。

〔所見〕柱穴状土坑の形状と間隔から、L Ⅲ柱穴群と一連のものと思われる。

縄文時代晩期以降自然堤防上柱穴群（第40・52・86図、写真図版50～51）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。N Ⅰ～P Ⅰグリッド周辺。一部遺物包含層Ⅳa層中で検出できたものもあるが（第60図左下、第40図）、ほとんど全てⅣb層上面で検出。本来的には、ほとんどがⅣa層中に掘り込み面を持つものと思われる。しかし、前述のような例は偶然トレンチ断面にかかったため確認できたのであり、平面で検出することはできなかった。Ⅳa層の各細別層を掘り上げるたびに、上面をきれいにして検出を試みたのであるが、柱穴を見つけることは全くできなかったのである。岩手考古学会での報告の席上、宮古市教育委員会の竹下將男氏から柱穴の調査方法に問題があるとの指摘を受けたが、もし、柱穴の検出を第一義に調査を進めるのなら、薄く断ち割っていくしか方法はなかったと思われる。検出面を平面的に薄く剥いでいく方法を採ったとしても、どの程度検出できたか疑問である。薄く断ち割るという方法を採った場合、莫大な時間と手間がかかり、急げば今度は遺物の取り上げに支障を来たす。そして、そのような時間と手間をかけて例え柱穴が高い位置で検出できたとしても、柱穴が群在すること、自然堤防上Ⅳa層は薄く細別層にほとんど時期差はないこと、各細別層は基本土層のように大きな広がりはもたないことなどから、柱穴の組み合わせを特定することは非常に難しい。前年度および次年度の試掘トレンチの結果から、このように推測され、得られるものに対してコストがかかりすぎると判断して遺物を層位的に取り上げることに重点を置き、基本的にⅣb層上面で検出することに決めたのである。

〔図・精査状況〕平面図のみ。検出された柱穴状土坑らしきものは、全て半裁し、その結果遺構と判断されたものだけ記録した。断面図は、この時点で既に予定期間を超過していたこと、掘り方は確認できなかったので個々の断面図を作成することにどれだけの意義があるか疑問であることなどから、作成しなかった。

〔重複〕SK87土坑覆土を切る柱穴状土坑が2基ある。SN05・08・10・21・25焼土下に検出されたものがあり、その他焼土や炉跡に近接するものが多く存在する。柱穴状土坑同士の重複は少ない。

〔配置・規模〕所々に集中地点が見られるが、組み合わせを特定することはできない。なお、試掘トレンチによって確認できなかった部分も存在する（第55図）。
〔柱穴〕直径30cm程度の規模の小さなものがほとんどで、地山が砂層のためか掘り方は確認できなかった。深さは、様々であり、覆土も、Ⅳa層起源の土が多いが砂で埋まっている場合もあり、多様である。これは、炉跡や焼土と同様、掘り込み（構築）面も多様であったことを意味するのであろう。
〔炉等の付属施設〕〔所属施設〕確認できなかったが、周囲に存在する炉跡や焼土と関係すると考えるのが自然であろう。竪穴は確認できなかったことから、平地住居の柱穴と考えるのが妥当かもしれない。
〔出土遺物〕第86図に時期のわかりそうな土器片を掲げた。掲載以外に、NⅡ21Ⅳb層柱穴として取り上げられた縄文土器片が約140g（5×5cm以下の破片約10点、ほとんど縄文、無文のみ）、NⅠ18pit3から剥片A類9.8g、OⅠ3pit2から剥片A類1g、PⅠ16pit1から剥片B類4.57gなどが出土しているが、ほとんど全て混入で、本来帰属するのは捨て場包含層と思われる。
〔時期〕検出層と出土土器から、縄文時代晩期末～弥生時代前期にわたり、各柱穴状土坑は、この間でマチマチと思われる。
〔所見〕周囲の同様の層から炉跡や焼土が検出されており、これらと関係があると考える方が自然であろう。竪穴は確認できなかったことから、平地住居の柱穴と考えるのが妥当かもしれない。

(6) 土器埋設遺構

1基のみ検出した。合わせ口で弥生時代前期と思われる。前年度調査したSR01とは約5mしか離れていない。

SR03 土器埋設遺構（第51・86図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕南西区南西端。NⅠ16～17グリッド。縄文晩期以降の自然堤防西端のⅣb層上面で検出。20cm程度の薄い遺物包含層に幅50cmのトレンチを入れたときに確認。前年度の試掘トレンチにかかったSR01から5m離れている（第14図と第40図、第8図）。
〔図・精査状況〕セクション・ポイントA′が、平面図と断面図合わない。平面図のセクション・ポイントを光波測距で後から追加したためと思われる。時間の余裕がなくて現地で確認できず訂正できなかったことをお詫びする。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕本遺構に限定される覆土が存在するかどうかについては確認できなかった。捨て場遺物包含層4層が相当するかも知れない。
〔埋設土器の出土状況・掘り方〕甕を正位に埋設し高坏を逆さにして蓋をした状態。高坏の口縁および高台部は一周欠けていて、高坏は甕の中に完全に入り込み（台部の片端は甕の口縁より高く外に出ていたが）、口縁側先端の欠けた部分は甕の内部の土に埋まっていた。そして、甕の肩の部分には、高坏の口縁部破片が、口を下に向けて（割口が上）、元の状態のように並べられていた（写真図版45）。断ち割った結果、明瞭な掘り方が確認されたが、埋土は遺物包含層とよく似た土で、上面では検出できなかった。掘り方の立ち上がりを見る限り、明瞭な土坑状を呈するようではない。
〔埋設土器〕底部穿孔された完形の甕（第86図207）と口縁と台部先端を欠いた高坏（第86図208）。高坏の口縁部は、上述のようにわざと欠いて周囲に並べていたものである（208a）。接合してみたが足りない部分

が多い（208b）。甕は、内面は二次焼成で真っ赤、外面の一部も帯状に同様、下部は黒斑、一部ススが付着するというもので、転用と考えられる。

〔土器内部の様子〕中の土を全て水洗したが何も出てこなかった。

〔付属施設〕確認できなかった。〔所属施設〕確認できなかった。

〔出土遺物〕埋設土器の他、図示しなかったが、周囲から土器片（50g、7 × 5cm の縄文のみの甕肩部片1点、3 × 2cm 以下の縄文のみ、無文の土器片3点）、掘り方埋め土から石器剥片（A 類 25.62g）が僅かに出土している。

〔時期〕埋設土器から、弥生時代前期（山王Ⅲ層式）と思われる。

（7）溝　　跡

南東区南部から2条、南西区北東側から2条検出された。何れも近世の可能性がある。南東区南部から検出された2条は、前年度調査された溝跡に続く可能性がある（SD13 は SD04、SD14 は SD12）。（第8図）。南西区に検出された2条は、平行に走り、昨年調査した SD08 大溝跡に注ぐ（SD15・16）。その SD08 溝跡にも一部新たな知見が得られたので補足する。

SD08 溝跡の張り出し部（前年度の補足）（第41・53・86図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕南西区中央。前年度から予測されていたようだが、東側に張り出し部を持つことがわかった。前年度土層観察用ベルトが設定されていた部分である。ベルトを除去した後、Ⅱb層上面で溝の覆土が半円形に広がるのがわかった。壁が崩れて覆土が広がっているだけかと思い、試しに掘ったところ、深く、遺構自体が広がっているのだとわかった。

〔平面形・規模〕長さ 5m の範囲で最大 50cm 程度東側に張り出す。形は不整形である。

〔壁・底〕壁はⅡb～Ⅲ層で、比較的なだらかに立ち上がるようである。底は周囲と同じⅢ層。

〔出土遺物〕第86図 209 ～ 215 の弥生前期を中心にした土器、20 のロクロ土師器坏の口縁部片、7 の中世陶器（常滑壷）片、図示した以外に、約 2.1kg の土器片（9号袋1つ。縄文～弥生土器がほとんどだが土師器の小片も。陶磁器はない。縄文～弥生土器は、縄文時代中期が多いが、晩期～弥生時代前期、縄文後期もある）、石器類 82 点（半分以上剥片だが、ハンマー類や砥石、台石、磨製石斧・石棒の未製品も）出土。何れも混入と思われる。

〔時期〕昨年度の調査で近世と推定されている。

SD13 溝跡（第53・86図、写真図版45）

〔位置・検出状況〕南東区南部。L Ⅸグリッド。斜面Ⅲ層上面で検出。北側の調査範囲外に伸びており、前年度調査した SD04 溝跡に続く可能性が高いが（第8図、第11図）、北側ほどはっきりしており、南に行くにつれ浅くなってぼんやりし、やがてカクラン部分にぶつかり、消えてしまう。これは、この面の地形が本来南から北に向かって傾斜しており、検出時にほぼ平らに削ってしまったことに原因が求められよう。すなわち、本来は、図示した部分よりずっと南に続いていたものと想像される。なお、このカクランは、根等が腐ったシミ状のもので、その根は、水辺に生える繊維質が強い植物である。このカクランは、周囲にも見られる。

〔図・精査状況〕浅く輪郭もボンヤリしており、わかりづらかったので、サブトレンチを3箇所入れて、そ

の間を辿るという方法を採った。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕濃淡はあるが、全て、Ⅲ層再堆積土に暗褐色砂がぼんやり混じる感じ。
〔平面形・規模〕調査した範囲では、長さ約 3m、幅約 20cm。昨年からの続きでは約 13m の長さになるが、直交する部分もあるので、全体としてはＴ字状を呈す。今年度調査した範囲も、上述のように、もっと南に続いていたものと思われる。
〔断面形・深さ〕浅い逆カマボコ形。5 ～ 10cm。
〔壁・底〕壁はⅢ層、底はⅣａ層。
〔出土遺物〕SD13 か 14 か、調査後に帰属がわからなくなってしまった土器片があるが（第 86 図 216・217）、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器である。
〔時期・所見〕検出層から古代以降であり、形状から近世の水田の水路等の可能性がある。

SD14 溝跡（第 54・86 図、写真図版 45 ～ 46）

〔位置・検出状況〕南東区南部。Ｌ Ⅷグリッド。縄文時代以来の自然堤防の東端。表土下に検出されたⅤ層を 10 ～ 20cm 下げたところで確認。前年度の SD12 溝跡に続く可能性もあるが（第 8・11 図）、規模、方向に若干違いが見られる。
〔図・精査状況〕検出面の覆土と地山の色の違いは比較的はっきりしていたが、念のため各所にサブトレンチを入れて、その間を辿るという方法を採った。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕基本的には二層からなり、上層は黒くのっぺりとしたⅡ層に近い層、下層は上層とⅤ層の混土。
〔平面形・規模〕確認できた範囲では、全長 7m 程度の鍋づる状を呈すが、これが、本来の形なのか、SD12 に続く「本流」と二つの分岐した溝からなっているのか、判断が付かない。幅 10 ～ 74cm。
〔断面形・深さ〕底の凹凸が激しいので、地点によって異なる。8 ～ 39cm。
〔壁・底〕壁～底Ⅴ層。底は凹凸が著しく、浅いところでは痕跡的になっており、東端は、カクランを受けているのか、急に深くなっている。西端は、地山がカクランを受けているようで、黒っぽいぼんやりした土が下に続く。境界が曖昧な不整形なので遺構ではないと思う。
〔出土遺物〕SD13 か 14 か、調査後に帰属がわからなくなってしまった土器片があるが（第 86 図 216・217）、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の土器である。他に、約 70g の土器片（約 4 × 4cm 2 片、約 3 × 2cm 以下 6 片で、全て縄文や無文のみ。無文の小片の中に土師器あり？）、石器類 7 点（4 点剥片、他はハンマー類、砥石）出土したが、混入と判断し掲載しなかった。
〔時期〕SD13、14 が前年度に検出された SD04、SD12 に続くなら、重複関係から SD13 より新しい。時期を判断する材料がないが、形状と検出状況から近世の可能性がある。

SD15 溝跡（第 54 図、写真図版 46）

〔位置・検出状況〕南西区北。Ｌ Ⅲ～Ⅳグリッド。縄文時代以来の自然堤防の西端Ⅴ層上面で明瞭に検出。東西方向に伸び、南北に伸びる SD08 溝跡に接続する。比較的明瞭に確認。東側の、より高い部分に続かないのは、水田にする際に削平されたためかもしれない。北側に SD16 溝跡が併走する。

〔図・精査状況〕覆土が明瞭で精査は比較的容易だった。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕暗褐色土に細かいⅤ層ブロックを含む。近世に良く見られる覆土である。
〔平面形・規模〕やや弧を描くが、ほぼ直線。検出できた範囲では約10mの長さ。幅約40cm。
〔断面形・深さ〕逆カマボコ形。深さ5～20cm。
〔壁・底〕確認できた範囲では、Ⅴ層。
〔出土遺物〕約420gの土器片（9号袋1/6。縄文～弥生土器のみで縄文中期がほとんど）、石器類18点（1/3剥片、他はハンマー類、砥石、磨製石斧・石棒の未製品）出土したが、混入と判断し掲載しなかった。
〔時期〕覆土と検出状況とSD08との関係から、近世の可能性が高い。
〔所見〕併走するSD16溝跡との関連性が窺われる。

SD16溝跡（第54図、写真図版46）
〔位置・検出状況〕南西区北。LⅣグリッド。縄文時代以来の自然堤防の西端。東側部分は、Ⅴ層上面で明瞭に確認できたが、それは西側の大溝跡（SD08）に向かう途中で消えてしまう。しかし、その延長には直線状に並ぶ礫の集積が見られた。礫はⅡ層中に集中している。礫が集中するというので、たまたま土山として残しておいたものである。断ち割っても溝の底は確認できなかったが、地形は西に向かって下がっているため、溝の端の底と礫群の底の高さが対応しそうなこと、何よりも、その方向が明らかに一致していることから、礫群部分も、溝跡と考えた。南側にSD15溝跡が併走する。東側に続かないのは、SD15と同様の理由かもしれない。
〔図・精査状況〕覆土が明瞭で精査は比較的容易だったが、礫部分の底～壁は周囲がⅡ層のためか確認できなかった。
〔重複〕ないと思われる。
〔覆土・堆積状況〕SD15とほぼ同じで暗褐色土に細かいⅤ層ブロックを含むが、礫を含む点が異なる。
〔平面形・規模〕大溝跡に接続していると考えれば、直線状で、東端の確認できた部分から約12m。幅約50cm。
〔断面形・深さ〕溝跡として確認できた部分では、緩やかなカマボコ形。深さ約4～10cm。
〔壁・底〕溝跡として確認できた部分は、Ⅴ層で底は凹凸が著しいが、上記のような状況から、大部分はⅡ層にあったと考えるのが自然であろう。
〔出土遺物〕約570gの土器片（9号袋1/7。縄文～弥生土器のみで、ほとんどが縄文中期土器）、73点の石器類（ほとんどがハンマー、砥石類で、磨製石斧・石棒の未製品や剥片も少しある）出土したが、混入あるいは転用と判断し掲載しなかった。石器類のほとんどは集石を構成していたものである。
〔時期〕覆土と検出状況とSD08との関係から、近世の可能性が高い。
〔所見〕礫群部分も溝跡なら、SD15と異なり、非常に緩やかな傾斜で大溝に注ぐことになる。併走するSD15溝跡との関連性が窺われる。

(8) 遺物包含層

東区（土木北区）は、前年度にⅤ層上面まで下げておりベルト以外に遺物包含層は残っていなかったので、ここでは、南東区南部（農整区）と南西区（土木南区）の遺物包含層について、その概要を述べる。
南東区南部は、縄文時代の包含層（Ⅳc層）以外未発達で、南西区は、古代以降、縄文時代晩期末～弥生

時代前期、縄文時代中～後期のそれぞれがあり、特に縄文時代晩期末～弥生時代前期が発達しており、その主体部は捨て場（ST01）として次項に改めて報告した。縄文時代中～後期のそれは、南西区ではあまり発達していない。

南東区南部（農整区）・遺物包含層（第 38・63 図、写真図版 7・8）

本調査区は、縄文時代以来の大きな自然堤防の東端～後背湿地への斜面に相当する。自然堤防上以外は、厚さの違いはあれ、基本層序の順に堆積していたはずであるが、表土のカクランがひどく、Ⅱ層（近世～古代）は東端しか残っておらず、西側ではⅣ a 層（縄文晩期後葉～弥生前期）も影響を受けていると思われる。ただし、この地点ではⅣ a 層からほとんど遺物が出土しなかった。Ⅳ c 層（縄文中～後期）は、比較的多くの遺物が出土したが、中期ばかりのようである。SN02 焼土～ SK82 土坑付近に多く出土した。土器は、30 × 40 × 20cm のコンテナで約 1 箱、石器も、磨石等の礫石器を主体に同程度出土している。

南西区（土木南区）・古代以降の包含層（第 38 図、写真図版 8）

Ⅱ層（古代以降の包含層）は、大溝跡（SD08）の東側では、基本的に前年度に剥いであったが、溝跡に設置した北側の幅の広い土層観察用ベルトの南北両側（L Ⅲ、Ⅳ、M Ⅲ、Ⅳグリッド付近）は、Ⅱ層が厚く堆積していたため残っていた。特に南側は多くの土師器片が出土した。なお、この部分は、逆にⅢ層がはっきりしない。

大溝跡の西側は、前年度の試掘結果ではⅢ層上面まで剥いだことになっていたが、Ⅲ層と判断された砂質層は、実は大溝跡を掘った際の排土（Ⅲ層）をてん圧したものであることがわかった。そこで、前年度の試掘トレンチ（第 55 図の T6 ～ 8、TY1 ～ 8）の断面をクリーニングするとともに、各、中グリッドの北辺と西辺に「状に幅 50cm のトレンチを入れ、Ⅲ層上面までの土層堆積状況を改めて把握することにした。

その結果、M Ⅲグリッド杭付近が最も深くて 80cm くらいの厚さがあり、その周囲はこの部分に向かって傾斜して厚くなるが、M Ⅱ①と②の境あたりは 10 ～ 20cm 程度の厚さしかなく、その西側はほとんどⅡ層が堆積しておらず、この部分で急激に厚くなることがわかった。これは後にはっきりしたのだが（第 55 図、写真図版 49）、西側は南北方向に自然堤防が走っており、その東側は、自然堤防に沿った川のように細長い後背湿地になっていたためである。

この部分のⅡ層は、上下に分かれ、上層は、黒褐色土（10YR2/3）砂質シルト、炭化物、土器含む。層厚 0 ～ 40cm。下層は、黒褐色土（10YR3/2）砂、炭化物含み、土師器、須恵器比較的多く出土。Ⅲ層汚れ再堆積。

Ⅱ層が厚い部分は、下層が厚いことによるもので、上層はそれほど変化はない。また、M Ⅲグリッド杭付近が特に厚いのは、この部分にⅢ層がなくⅣ a 層上面までⅡ下層が堆積しているためである。杭下は下層が 60cm もあるが、その周囲は 20cm ほどしかなくⅢ層が 40cm 程度の厚さで堆積している。

M Ⅱ④の北半部では、Ⅱ下層の途中に炭化材が検出され、また出土遺物も比較的多かったこと、さらにⅢ層がなくⅡ下層が落ち込んでいたことから、何らかの遺構が存在していた可能性があるが、確認できなかった。

南西区（土木南区）・縄文時代晩期中葉～弥生時代前期の包含層（第 38・55 ～ 62 図、写真図版 5・46・49）

Ⅳ a 層（縄文時代晩期中葉～弥生時代前期の包含層）は、上層、中層、下層に分けられる。上層は、Ⅲ層との漸移層であり、中層は、炭化物や遺物を多く含む、いわゆる捨て場の土である。下層は、Ⅳ b 層の再堆積（シルト質の場所が多い）に比較的少ない遺物を挟むもので、いわゆる遺物包含層である。中層について

は、「捨て場」として、次項で扱う。

上層（Ⅳa層上部）は、Ⅲ層が厚いところに目立ち、後背湿地の底が埋まった場所に存在するようである。すなわち、低い場所で水がたまっていたような窪んだ場所に形成されているようである。それを裏付けるように、上面に黄灰色土（2.5Y5/1）のブロックが並び周囲に褐色（10YR4/4）の酸化鉄が見られる。Ⅳa層上部自体は、灰黄褐色土（10YR4/3）で、Ⅲ層に非常によく似るがシルト質である。最も厚いⅢ①③グリッド列では、25～30cmの厚さがあった。LⅢ③④付近はもっと深く、40cmの厚さがあった（Ⅲ層も70cmあり人力で剥ぐのは大変だった）。遺物は出土するが、中層ほどではない。なお、Ⅲ層との区別が難しいため（低い場所ではⅢ層もシルト質）、Ⅲ層を取り除く前に、各中グリッドの北辺と西辺に「状に幅50cmのトレンチを入れ、Ⅳa層上面までの土層堆積状況を把握してから人力で掘り進めた。前年度の見通しでは、Ⅲ層は重機で1日で取り除くという計画になっていたが人力で約1ヶ月かかったため、年度当初の調査計画と大きな齟齬を来たすことになった。

下層は、基本的に、川のように細長い後背湿地を埋めるように存在するが、中層（捨て場）が発達した西側斜面にはほとんど見られなかった。ⅢとⅣグリッドの境界ラインの1m東側くらいから西側の後背湿地底付近に向かって形成されている。地点によって異なり、LⅣ③グリッド杭付近では炭化物が多く散り非常にわかりやすかったが、それより南でははっきりしなかった。下のⅣb層～Ⅳc層との境もはっきりしない。出土遺物は、上層と同じ程度だが、時折完形に近い土器が単独で出土する。縄文時代晩期中～後葉の大洞C2式～A1式である。

南西区（土木南区）・縄文時代中～後期の包含層（第38図、写真図版46）

Ⅳc層（縄文時代中～後期の包含層）は、本調査区では、当時の地形の関係で、縄文時代以来の自然堤防の西側斜面にしか存在しない。本調査区では、出土遺物が非常に少なく、また地形の関係でしばしばⅤ層が崩れ再堆積を繰り返していたせいで、Ⅳb層、Ⅴ層との区別は非常に難しい。

最もはっきり確認されたのは、ⅢとⅣグリッドの境界ラインが北側の調査区境にぶつかる辺りで、炭化物や土器も多かった。後期中葉の土器が出土している。それ以外の地点では非常にわかりづらく、地山に僅かに炭化物が混じるといった程度の場所が多かった。MⅣグリッドの西端中央付近では100cm以上の深さから土器片が出土している。これより西側の斜面下方では、トレンチを入れた限りでは土器は確認できなかった。湿地底でⅣb層上面から約1m下げても土器は出土しなかった。これより下にⅣc層が存在した可能性もあるが、人力で掘り下げるのは危険であり、また工事による掘削は全く及ばないので、敢えて掘り下げて確認することはしなかった。

(9) 捨　て　場

遺物包含層のうち特に出土遺物が多く一時的な廃棄によって形成されたと考えられるものを捨て場として報告する。昨年度確認されていたST01のみである。ST01は、縄文時代晩期以降の自然堤防から東側の後背湿地に形成されたもので（第6・40図）、縄文時代晩期末～弥生時代前期の捨て場である。

ST01 捨て場（第40・55～62図、写真図版46～51）

〔位置・概要〕南西区（土木南区）南半。縄文晩期以降の自然堤防上～東側の川のように細長い後背湿地。後背湿地の東側斜面では、底から僅かに東側上方に認められるだけである。前項で述べたⅣa層の中層に相

当する。

〔規模〕調査範囲内に確認されたのは、約 500㎡（幅約 15m）、深さ 0.3 ～ 1.6m、平均 1m。約 500 ㎥。

〔調査経過〕精査に入るまでの経過、試掘トレンチ、覆土撤去を中心に述べる。

県教育委員会による試掘では確認されず、前年度調査の試掘（T8）で捨て場の存在が確認されたものである。前年度に試掘トレンチが 11 本入っていた（第 55 図 T8・13、TY1 ～ 10・8 は欠番）。T8 と T13 は、表土から、それ以外は調査中に発見された捨て場の範囲を知るためにⅢ層上面から入れたものである。その結果、捨て場が最も厚いのが TY3、7 で、T8 から南西方向に向かうと薄くなることが確認されていた。TY3 では、Ⅲ層直下に層厚約 20cm の弥生包含層があり、その下に層厚 80cm の純粋な砂層、さらにその下に層厚 1m 以上の弥生包含層が確認され、疑問が持たれていた（後に、上部の弥生包含層は、SD08 溝跡の掘削土を填圧したもの、その下の砂はⅢ層とわかった）。

次年度は、他の調査区をほぼ終了した 5 月半ばから南西区に着手した。排土の関係で SD08 溝跡より北側の検出・精査から始めたが、同時に捨て場の全体像把握にも乗り出した。重機で表土を剥ぎ終わった後、まず、前年度のトレンチ T8 をクリーニングすると共に、前年度まだ道路として使われていたため調査できなかった部分にトレンチを基盤層まで入れ（T1 ～ 3）、前年度の見通しを変更する必要がないか確認した。

変更する必要がなさそうだったので、排土を調査区（遺跡端）から続く南西側の道路用地にも出すため、Ⅰグリッド列から西側（M Ⅰグリッド除く）を先に終わらせようと考えた。今度はⅣ a 層上面までの深さを探るためトレンチを入れ（T4、5）、周囲の前年度トレンチ（T13、TY9、10）をクリーニングした。その結果に基づいて、そのままⅢ層を剥ぎ、Ⅳ a 層上面を露頭させ遺構を検出した（6 月前半）。遺構が検出されなかったので、6 月半ばから精査を開始した（小グリッドごとに L 字状にトレンチを入れ、堆積状況を記録し次に全体を層ごとに掘り下げ、各面ごとに検出作業を行う）。

このころまでに SD08 溝跡より北側の遺構精査にほぼ目途が立ったので、Ⅳグリッド列より東側を終了させ排土を出そうと考え、グリッドに沿って東西方向にⅤ層までトレンチを入れた。その結果西に向かってかなりの急傾斜であることがわかった（7 月初め）。また、前年度未確認だった TY3 の疑問を解決するため、SD08 溝底にトレンチを入れた（T6）。溝底なら浅くて済むのではないかと考えたのである。しかし、なかなか底（Ⅳ b 層）は出ない。

とりあえず、Ⅱグリッド列から東側のⅢ層を、南（0 Ⅱグリッド）から北に向かって剥ぎ始めた（7 月初め）。前年度の積算では重機で剥ぐことになっていたが、重機が入れない T8 より南西側は、大した厚さでないので人力で行った（一輪車で運搬）。N Ⅱから北は詳しいⅢ層の厚さもわかっていなかったので、中グリッドごとに、原則としてグリッドの南～東端に沿わせて L 字状にトレンチを入れながら剥いだ。トレンチ 8 より南西側のⅢ層の厚さは 20 ～ 30cm 程度だったが、北東側になると急に厚くなり始めた。それも、東に向かって急に深くなるようである。ここに至って、SD08 溝跡東側の調査結果と併せて、やっと自然堤防の間の川のように細長い後背湿地に捨て場の中心があるのだとわかった（第 40・55 図）。T7 は、この考えを裏付けるためⅢ層の厚さを確認するために入れたトレンチである（第 55 図）。

T8 より北側は、Ⅲ層が 40cm 以上あり特に底付近は 50cm 以上あった。L Ⅲ③④付近は最も深く、Ⅲ層も 70cm あり人力で剥ぐのは大変だった。重機で剥ぎたかったが、川底のため急傾斜でありアームが十分に届かないこと、さらにⅢ層の下層がシルト質でⅣ a 層との区別が難しい地点が多く、人力でやらざるを得なかった。7 月 7 日から本格的に開始。7 月中旬からベルト・コンベアーを使用し排土は北側に出したが（たまった土はキャリア・ダンプで、調査の終了した東区に運び積み上げた）、暑さもあってなかなか進まなかった。

前年度の見通しと若干異なっていたこともあり、Ⅳa層（中層）を露頭させることができたのは、7月24日であった。当初計画では8月一杯で調査終了となっており、調査期間延長を上司に願い出たが、難しいかもしれないとのことであった。積算では捨て場の覆土Ⅲ層は重機で1日で剥ぐことになっていたが、前述の理由で人力で剥がざるを得ず、この作業に一ヶ月かかり、これが積算との大きな齟齬になった。

期間延長についての打ち合わせは2週間後となり（8月7日（木））、それまでに、どのくらい延長する必要があるか見通しを立てておかなければならないので、トレンチもその頃までにほぼ終了しておく必要がある。そのため次項のように思い切った方法を採った。作業員も追加募集し計約34名となる。捨て場本体のトレンチは、7月28日（月）から入れ始め、8月8日（金）にほぼ終了した。打ち合わせの結果1ヶ月半程度の延長ということで落ち着く。

時間がないので、トレンチの済んだところから分層を始めた（詳細は分層の項参照）。この年は晴れの日が少なく土が見やすかったため分層は大いに捗り、8月12日（火）にほぼ終了した。この間、先に着手していたⅠグリッド列から西側（MⅠグリッド除く）の調査もほぼ終了していた。

盆明けの8月19日（火）から、層断面図実測･層序記録と併行し、精査（層の掘り下げ）を開始した（詳細は記録、精査の項参照）。排土は、底が地表から3.5mと深いため、ベルト・コンベアーを8台繋げて使用した。この作業は、8月19日（火）から10月9日（木）まで、調査終了までかかったが、9月中旬からは作業員の半分を新しい自然堤防上の遺構調査（検出・精査）に振り向けた。9月一杯でそれも終わり、10月から主力は片づけに入り、捨て場の精査は数人で細々と続けた。9月下旬には、精査の終了した東側斜面にトレンチを入れ、縄文の遺物包含層（Ⅳc層）の確認を始めたが、1m以上下げても見つからなかった。

精査の中心は、7月28日～9月上旬にあり、この間は、一日の遺物量が土器類が30×40×30cmのコンテナ6箱、石器類が30×40×20cmのコンテナ20箱に及んだ。すぐにプレハブ一杯になるので週に2度センターへワゴン車で運んでもらった。

この夏は天候不順で、特に捨て場を精査していた7月～9月は雨が多く、作業が中止になった日が9日、半日が7日あり、特に8月25日（月）～29日（金）はひどく、半日作業となった27日、28日の他、25日、26日もにわか雨で待機さざるを得ない時間があった。元々斜面であることもあり、包含層は雨に濡れると滑りやすく、滑り止めのためムシロや荒縄を活用した（写真図版47）。特に後背湿地の底は、にわか雨の後水につかり、毎日ポンプで排水する有様であった。底は本来は砂層で水がたまらないのだが、包含層が雨で流出し底に土がたまるため水を通さなくなるのである。雨で包含層断面に一度引いた線が見えなくなり、もう一度引き直すこともしばしばであった。土器や石器が落ちて帰属が不明になったものも多い。しかし、それでも太陽の光線がなくて分層がスムーズにいった点の方が有り難かった。

なお、この間、8月7日（木）と9月2日（火）に古代の森研究舎の吉川夫妻に植物遺存体等について現地指導いただき、花粉分析用の土壌を採取していただいた。

〔Ⅳa層へのトレンチ〕捨て場は、主な居住域である新しい自然堤防上まで広がっていたが、ここは30～50cmと薄かったので、2×2mの小グリッドごとにL字状に幅50cmのトレンチを入れた（グリッド内部）。グリッドは上下左右連続しているので、残った部分は島状に浮き一周観察できることになる。

さて、メインである後背湿地の捨て場は、その立地から遺構が検出される可能性は低くく、捨て場を調査するに当たっては、遺構よりも遺物の取り上げに重点を置く方が良いと考えた。したがって、ベルトを残して調査を進めるのではなく、トレンチを入れて、残った部分を層位的に掘り下げるという方法を採った。

遺物を層位的に取り上げるには、できるだけ小さい区画で、平面と共に断面を観察しながら行うのが一番

である。断面を観察するにはトレンチを入れる必要があるが、その数と幅が問題になる。

たくさんトレンチを入れれば表面に現れない隠れた層が減って良いが、トレンチ出土遺物はどうしても取り上げ層位がはっきりしなくなってしまうので、たくさん入れるほど層で取り上げる遺物が減ることになる。幅についても同様で、広げれば明るく見えやすくなり層を観察するのに都合が良いが、層で取り上げる遺物が減ってしまうことになる。また、安全上の理由から、厚く（深く）堆積していれば広げざるを得ない。

今回の調査では、川底にあって深いこと（1.2m 以上）から、幅は 1m より狭くはできないと考えた。数については、かなり悩んだが、この時点で調査予定期間は残り 1 ヶ月となっていたこと、期間延長についての打ち合わせは 2 週間後となっており、それまでに、どのくらい延長する必要があるか見通しを立てておかなければならないので（事前の感触から 2 ヶ月以上の延長は無理であろうと推測）、トレンチもその頃までにほぼ終了しておく必要があること。そこで、次のようにトレンチを設定した。

最小取り上げ区画（小グリッド）を 2 × 2m とし、それを 4 つ合わせて 4 × 4m の区画を考え、その縁に幅 50cm のトレンチを一周入れた。これらの区画は上下左右に連続しているため、結局幅 1m のトレンチを 3m ごとに交叉するように縦横に入れたことになる（第 55 図下、グリッドに沿わない区画は試掘トレンチ）。

〔分層〕先に終了していた自然堤防上の層から追いかけ、辻褄が合うように分けた（釘で断面に層名を記入）。その作業の中で、新しく出てきた層は、前後の層との関係を明示するように名を付け（例えば、3 層と 4 層の間に出てきたら 3-4 層）、層の広がりにも心を配ったが、行政調査で作業員のいる中での作業のため、全体を通して検討することはできず、この点に関しては十分な成果を上げていない。例えば、4b、4c 層は、3-4 層の下に位置するはずだが、関係する全ての層が一箇所で同時に確認されたわけでもないので、出土土器を見ると、4b、4c 層では青木畑式、3-4 層で大洞 A′ 式と逆転。しかし、それぞれのグリッドの中での層序関係は、問題はないようだ。

トレンチと併行して進めざるを得なかったので、最終的に一部かなり無理をした所がある（同じ層と思われるものを二つに分けたり）。これは、本遺跡の土層の特徴による部分も大きい。層は連続しているのだが、途中でその性質が大きく異なっている場合が非常に多いのである。例えば、本来炭化材を多く含み砂も含んでいる層が、途中から砂に僅かに炭化物が混入している層に変わってしまうのだ。層境は明らかに連続しているのにである。これは、整地している可能性が高いことにも原因があるかも知れない。

このような点も考え合わせ、今回は層を「遺物取り上げ単位」と割り切ることにした。周囲と辻褄が合っていなくても、そのグリッド内の上下関係には影響ないだろう。また、逆に、周囲に比べ非常に細かく分かれる部分があっても、幅（高さ）10cm 未満のものは敢えて分けず○層の上層、下層として一括して扱った。

〔記録〕土層断面は、南北トレンチは西面、東西トレンチは北面を、端から端まで通して実測した。南北断面は 4 面、東西断面は 7 面ある（第 55 ～ 62 図）。そして、遺物の取り上げの際使用するため、島状に残った部分（小グリッド 4 つ合わせた区画からトレンチ分を除いたもの）ごとに、東西南北面をスケッチし層名を記入した（第 64 ～ 77 図）。これらの作業も精査と併行して行ったので、実測班は 2 名、スケッチは 1 名の作業員にお願いした。

〔精査・遺物の取り上げ〕一つの島は 4 つの小グリッドからなる（第 55 図）。このうち、北西と南東グリッドを先に、北東と南西グリッドを後に原則として調査した。上面をきれいにし、遺構の有無を確認した後、断面で層が途中で途切れているものについては、上面に釘で線を引いて層のつながりを作業員に示した。この作業を各層ごとに行った。北西、南東グリッド除去後、残ったグリッドは、北西、南東グリッドに接していて線を引けなかった断面も分層して、一周り層の連続性が確認できるようにしてから、同じ作業を行った。

遺物は各グリッド層ごとに取り上げたが、その掘り下げは、時間の関係でスコップを基本とし、移植ベラを補助として使わざるを得なかった。石器類は、石器製作跡としての性格と、大量の石を石器とそうでないものに分ける時間的余裕がなかったことから、原則として全て取り上げてきた。実際、第Ⅵ章に記すように、材料とも推測できないただの石はほとんどなかった。

大量に遺物が出土するので、収納する袋のラベル書きも容易でない。調査員一名の他、作業員一人を専従にしてこれに当たった。

期間に余裕がなく、また人工遺物だけでも多量であったため、現地で水洗することはできず、石器チップなどの微細遺物を回収することはできなかった（土器や石器類も、ほとんど全て室内で洗った）。ただし、M Ⅱ 16付近の2-3b、2-3b2層は、肉眼でも炭化した種子などが見えたので、土のう袋4袋分土を詰めて持ち帰り室内で水洗した。

〔包含層の様子〕後背湿地東斜面は、炭化物や焼土など生活廃棄物の混入が少なく、Ⅳb層の再堆積に遺物が混入しているという「遺物包含層」といったニュアンスが濃い（第55図以下のA-A′ ～ D-D′ 断面）。新しくできた西側の自然堤防上（N Ⅰの北、東面を除いた部分より西、O Ⅰグリッドより西）は、包含層が20～30cmと薄く、西側に行くにつれ、さらに薄くなり、Ⅳb層の再堆積に遺物が混入しているという「遺物包含層」といったニュアンスが濃くなる（第55、59図のF-F′ 断面）。

以上の間が、捨て場としての主要部分になり、新自然堤防の東端～後背湿地（東側斜面の上がり初めまで）が相当する。この間は、炭化物や焼土など生活廃棄物の混入が顕著である（特にM Ⅱ 16付近の2-3b、2-3b2層は純黒層に近かった。写真図版47の分析資料採取地点KTA）。出土遺物も多い。後背湿地の一番深いところには、薄い縞状の水成堆積層が見られ（第57図下の8層）、確かに湿地だったことを物語っている。

層の境を追っていくと、それぞれの層は厚さ20cm程度で安定的に広がっていく場合がほとんどだが、層の内容を見ると、いつの間にか変化していることが多い。すなわち、例えば本来炭化材を多く含み砂も含んでいる層が、途中から砂に僅かに炭化物が混入している層に変わっているということである。別の層が始まったのかと層境を追っていくと途切れず続き途中で分けられるようには見えない。

〔分層補足〕B-B′ 断面では、3b層、3-4層は、それぞれ二つの層に細分できそうである。D-D′ 断面では、2-3b2層は、三つの層に細分できそうである。L Ⅲ 16グリッド杭を中心とする島の南面は、3上層と2-3b2層の境はっきりしなくて、ややこじつけ気味。L Ⅲ 16の島とM Ⅲ 1の島は、3-4層=3層の可能性が高い。M Ⅲ 11グリッド杭を中心とする島は、3-4=7層の可能性がある。M Ⅲ 21グリッド杭を中心とする島と、東隣の23グリッド付近で、西、南から順に精査を進めたところ、辻褄が合わなくなってきたので、2-3b層の拡大で乗り切った。N Ⅲ 6グリッド杭を中心とする島で、3層がいつのまにか黄色の砂層になっており、1-2b=3層の可能性が出てきてしまった。これは、N Ⅱ 19グリッドの堆積状況からあり得ないので、東面で何とか辻褄を合わせた。同じく、N Ⅲ 6の島で、4=4b層になりそうになったので、4bを石の多い層として無理やり分けた。

〔包含層補足〕1上層は、M Ⅱ 14グリッド杭を中心にする島の東端で確認され、1層に似るが黄色い。Ⅳa層上層に相当か。1b層は、N Ⅲ 8グリッド杭を中心にした島の北西隅～西側に続く。黄色土に炭混じり。1-2層の上。1-2b層は、N Ⅱ 18、19、23、24グリッド付近に確認され、2層の分層か？ 2層の上にあり、黄色と灰色の部分がある。1-2c層は、N Ⅲ 6、16グリッド杭を中心にする島で確認された黄色い砂層である。N Ⅲ 6の島の東面で3層といっしょになってしまい苦労した。上は2-3b2層、下は1-2b層。2b層は、M Ⅱ 7、8グリッドに確認。1層と2-3b層の間にあり、黒土である。M Ⅱ 24グリッド杭を中心にする島では、2b=1-

2層の可能性がある（一応1-2層の下に2b層が入るとしたが）。2c層も、MⅡ7、8グリッドにあり、2b層と2-3b層の間に入る黒土である。2d層は、NⅡ9グリッド杭を中心にする島の北東隅に少し確認された層で、2層と2-3b層の間に入る。炭化物多いが黄色い土が混じる。2e層は、NⅢ6グリッド杭を中心にする島の北東隅～NⅢ8の島の北西隅に確認され、少ししか存在しない。黄色い砂層に炭化物混じる層で、1-2層の下、2-3b2層の上に存在する。2-3b層は、NⅠ5～NⅡ1トレンチで確認された層で、2と3層の中間に出てきたが、2-3層とは関係ない。北に続き、真っ黒な土に続く。南は炭化物ほとんど含まないが、そのまま連続する。黒い場所は限られており、捨て場東側では炭化物ほとんど含まない。2-3b2層は、MⅠ20、MⅡ16グリッド付近に確認され、真黒な土だが、周辺は黄褐色土に炭化物混じりの土。MⅡ16～17グリッドでは、三層に分かれそう。2-3b層同様、黒い場所は限られ、捨て場東側では炭化物ほとんど含まない。

3上層は、MⅡ7、8グリッドに確認され、2-3b2層と3層の間に入る。基本的には、砂の再堆積だが、上部にシルト質の土を含み、そこに遺物がある。3層は、本来黒土だが砂混じり層のため、ほとんど砂だけの地点もある。3中層は、MⅡ4グリッド杭を中心にする島の東端で確認され、灰や炭化物を多く含み、厚いところは、上面に厚さ10cm程度のシルト質黄色層を含む。3b層は、MⅢ11、13グリッド杭を中心にした島で確認され、3層および3上層の下、3-4層の上に位置する。褐色～暗褐色砂層で、遺物少ない。

3-4層は、MⅢ21グリッド杭を中心にした島の北～東面で確認され、砂の縞状を呈するが、ボヤーとして炭化物も比較的多い。3層の下、4-5層の上にある。4b層は、NⅠ5～NⅡ1トレンチで確認され、4層と同様に砂地に炭、灰多量に含むが、北に向かって途中から始まっており、4層と別物の可能性が高いので、別に認定した。4c層は、NⅢ6、16グリッド杭を中心にする島で確認された黄色と灰色の混土である。4層と4-5層の間に入る。4c上、中、下層は、NⅢ8グリッド杭を中心にする島の北西隅に確認され、4c層が厚くなって細分されるものである。上層は褐色砂層、中層は暗褐色の礫層、下層は褐色砂層である。4-5層は、NⅡ18、19、23、24グリッドで確認され、4と5層の間にあり、炭化物多く、一番下に礫多い。

6層は、MⅡ14グリッド杭を中心にする島の東端で確認され、3層の下、7層の上に位置する黒土で、東に続く。7層も、MⅡ14グリッド杭を中心にする島の東端で確認され、シルト質で色は少しにごった黄色の地山再堆積土で、最初Ⅳb層と勘違いし掘り足らない部分が多かった。8層は、MⅢ21グリッド杭を中心にする島やMⅢ13、23グリッドで確認され、水成堆積で、きれいな縞状の砂層が高さ1～3cmと薄く連続する。9層は、8層と同じ場所に確認され、8層の下にある暗褐色土で、炭化物が比較的多い部分がある一方、MⅢ23の東の方では炭化物ほとんど入らない堅い縞状堆積になる。10層は、MⅢ11のグリッド杭を中心にした島から北東に確認され、Ⅳb層に似るが炭化物含む。

SⅡ～Ⅲ層は、調査区最南西端、自然堤防の西端落ち際の覆土である。おそらく基本層序のⅡ～Ⅲ層に相当すると思われたが確信が持てず、南側を意味するSを頭に付けた。砂の再堆積がほとんどである。

〔精査補足〕MⅠ25グリッド杭を中心にする島は、調査区境にあるため、南東グリッドの25を先に調査し、その後20と24を調査した。NⅡ19グリッド杭を中心とする島は、北側に前年度の試掘トレンチが入っているので三角形の変則的な形をしているが、精査は、13グリッドとその北側に残った僅かなNⅡ8グリッドを同時に、19グリッドとその北側に僅かに残った14グリッドを同時に行っている。

調査区境にあるLⅡ18グリッドでは、3層下部に、投げ捨てか現地性かわからない焼土があったが、確認する前に掘り上げられてしまった。区境に残った断面を見る限り、投げ捨ての可能性が高いが。

〔捨て場の形成過程〕後背湿地底を中心にして西斜面と東斜面に分かれるが、東斜面のほとんどは自然堆積層に近く、砂の再堆積がシルト化したものに土器や炭を疎らに挟むといった感じで、所謂捨て場によく見ら

れる炭化物や土器等を多く含む層は、東斜面では、川底からやや上がった地点までしか見られず、この層が西側から供給されたことは確実である。したがって、この捨て場のほとんどは、西側から投げられて形成されたと考えられる。このことは、この時期の遺構が西側の自然堤防上に顕著なことと符合する。

なお、本捨て場は、後背湿地に形成されたと考えられるが、薄い縞状の水成堆積層は、最も深いところにしか見られず（第57図下の8層）、かなり早い段階で乾燥したようである。この結果は、花粉分析からも裏付けられている（第Ⅸ章参照）。

〔遺物の出土状況〕年度当初の期限を延長しての調査であり（前年度の調査開始からは二度目の延長となる）、時間の余裕がなく、遺物を層位ごとに取り上げることにほぼ専念せざるを得なかったため、出土状況の観察は十分でない。礫は、集中して出土することが多い印象を受け（写真図版47～48）、NⅢ7グリッド（写真図版47の分析資料採取地点KTB）は階段状の遺構ではないかという指摘を受けたが、精査した限り雑然と並び遺構には思えなかった。

〔出土遺物の概要〕前年度試掘分を併せて、土器類は30×40×30cmの箱で約200箱、石器類は30×40×20cmで約800箱（整理後に、石器原料でもなく「ただの石」とせざるを得なかったものが約60箱あった）、土製品が約350点、石製品が約400点。詳細は第Ⅵ章参照。土器もさることながら石器の多さには困惑した。砥石や原料など重いものも多いので運ぶのは大変であった。

〔遺物の整理・掲載方法〕土器の接合は、当センターの一般的なやり方で、基本的に同じ袋、同じ小グリッド間で行ったが、できるだけ隣接したグリッドは一緒に広げ接合も試みた。ただし、スペースは約15㎡しかなかったので、出土量の多いグリッドは部分的にしか広げられなかった。接合は、約4人で4ヶ月行った。土器の選別基準は、原則として、ミニチュア土器は全て（ミニチュアとわかるもの）、文様のある土器片は5×5cm以上、粗製深鉢の口縁部は10×10cm以上、それ以外はほぼ一周あるものであるが、地点ごとの出土量の多少に配慮して若干出入りさせた。点数がかなり多くなったため、実測は文様がほぼ一周しているものに限り、できるだけ拓本で済ませた。

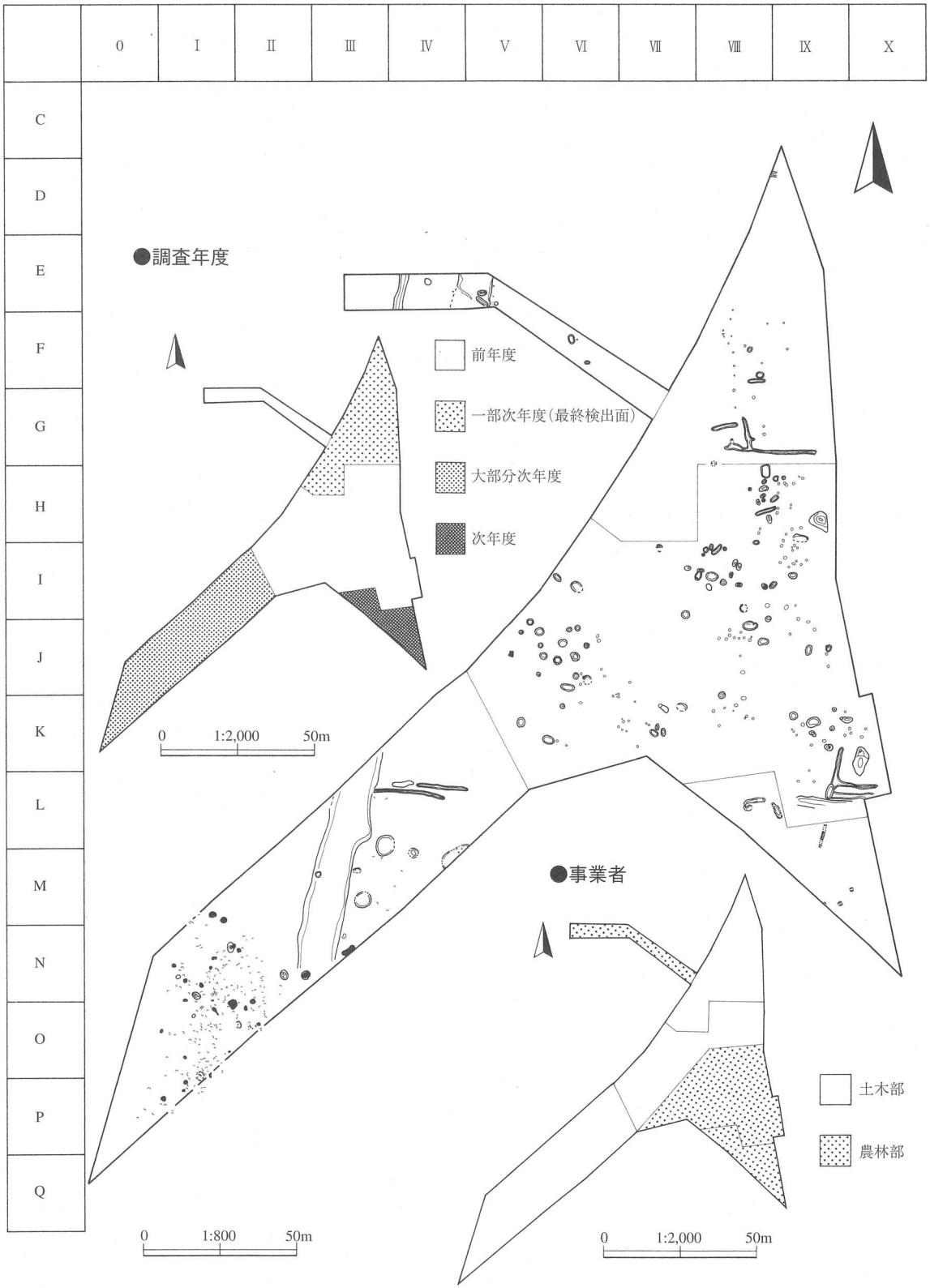
石器は、調査員が粗分類した後、調査員の作成した分類表を元に作業員が細分類し、点数（剥片類は重量）を数えた。分類の具体例として、作業員4名・2ヶ月間で実測できる程度の量を抽出した。使用痕の分析に出す関係で、石匙、凹石の一部は全点実測した。

石製品、土製品は、全点掲載したが、写真のみで済ませたものもある。

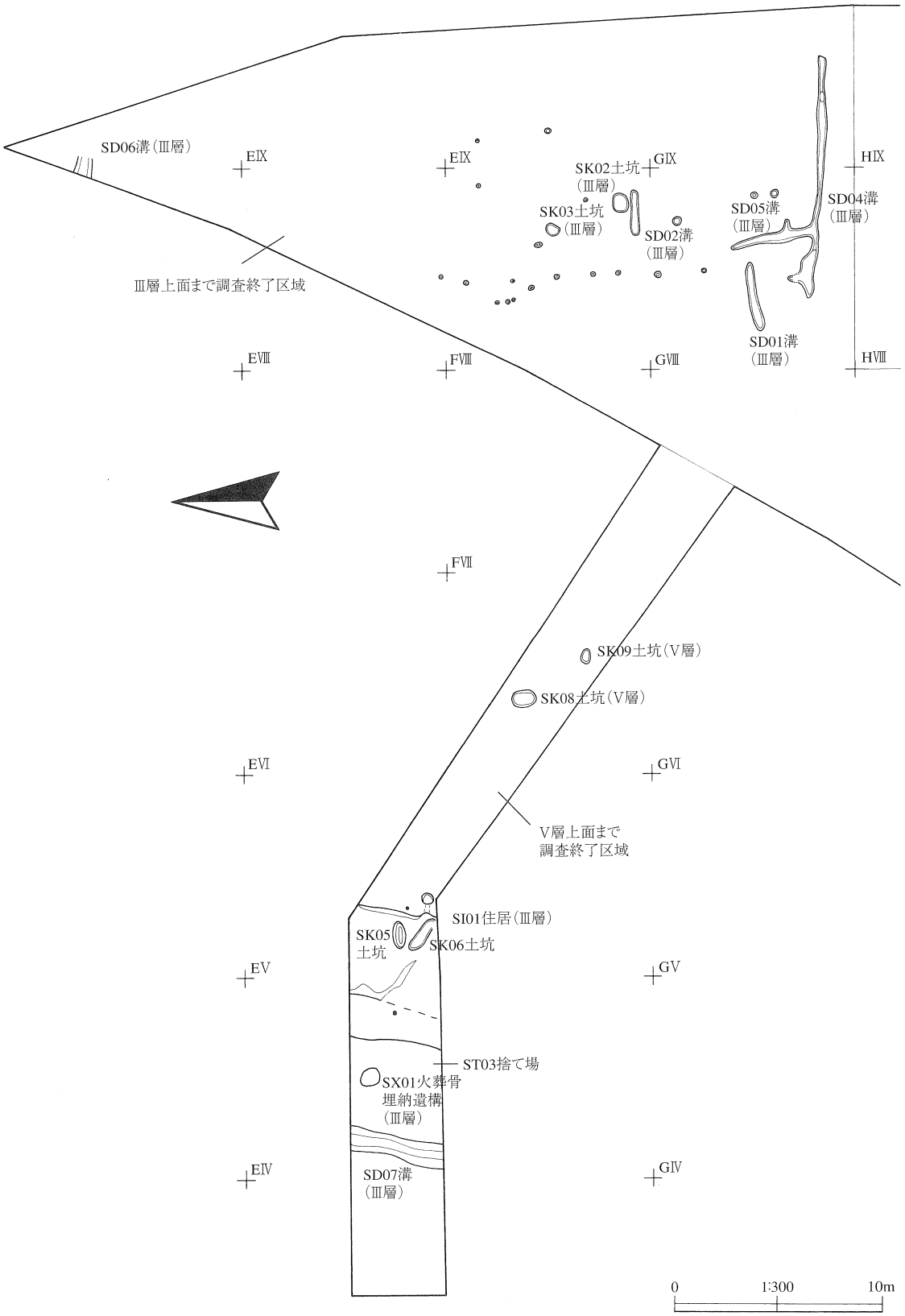
自然遺物。作業員の粗分類（同じもの）に基づいて、同定に耐えそうなもののみ委託に出した。同じものが多量にある場合は一部のみ委託した。

〔時期〕東斜面最下層の砂の再堆積層からは、大洞C2式やA1式も出土したが、所謂捨て場層は大洞A2式～山王Ⅲ層式で、ほとんどが大洞A′～青木畑式期である。

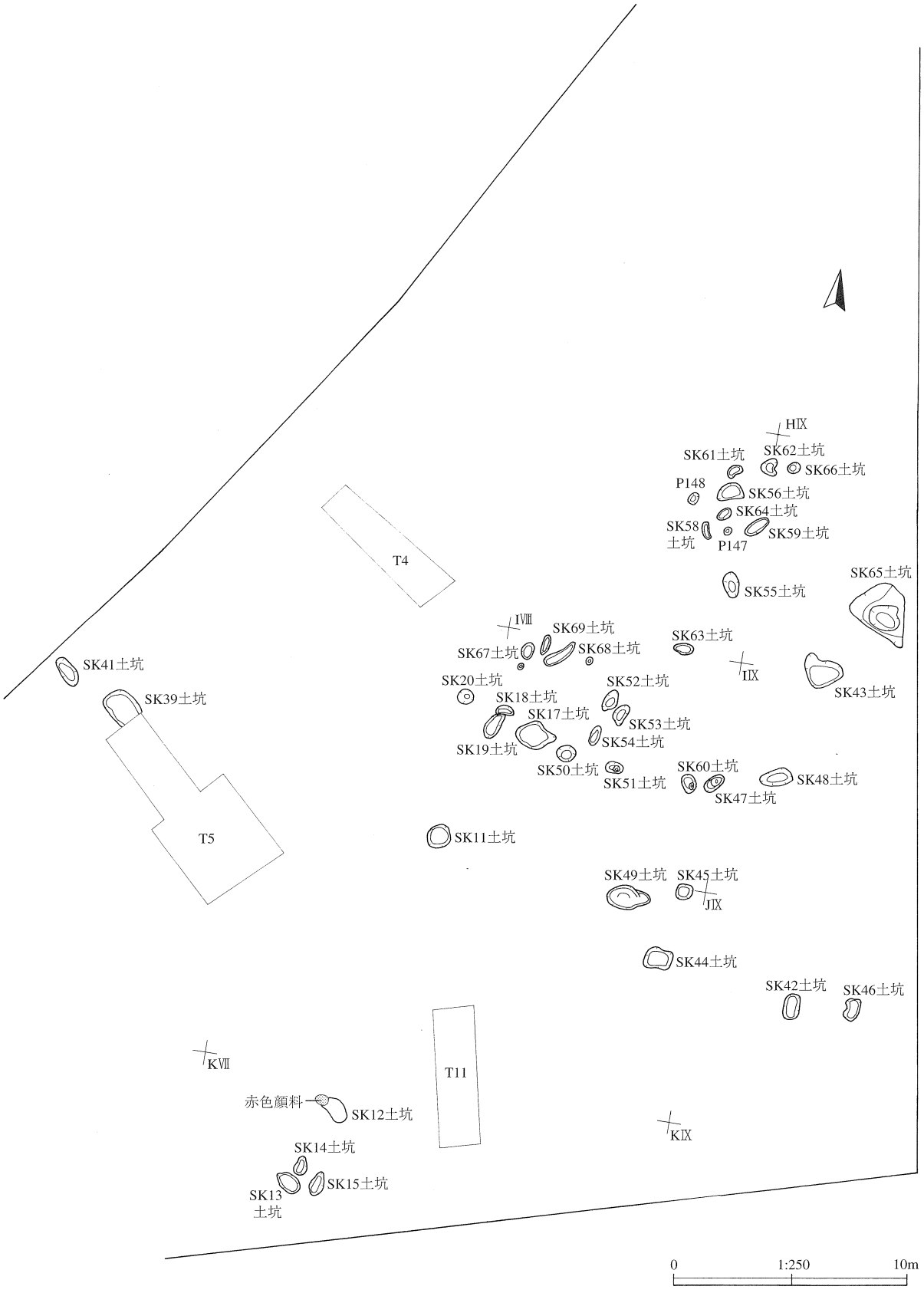
〔所見〕大洞C2～A1式期には、縄文時代以来の東側の自然堤防で細々と何らかの活動をしていたと思われる。自然堤防上から崩れ落ちた土に土器が混じっている。その頃の後背湿地底は、若干水がたまっていたようである。大洞A2式期以降、新しい自然堤防上に住み始め、大洞A′式古以降は格段に多くなり、石器製作を盛んに行ったようである。山王Ⅲ層式期ころ、後背湿地がほぼ埋まりきったころ突然人はいなくなった。埋まりきった捨て場上面に東側の縄文時代以来の自然堤防上から砂が崩れてきて、雨が降ると若干水がたまっていたようである（遺物包含層の所で述べたⅣa上層）。


0
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
●調査年度
前年度
一部次年度（最終検出面）
大部分次年度
次年度
0　1:2,000　50m
●事業者
土木部
農林部
0　1:800　50m
0　1:2,000　50m

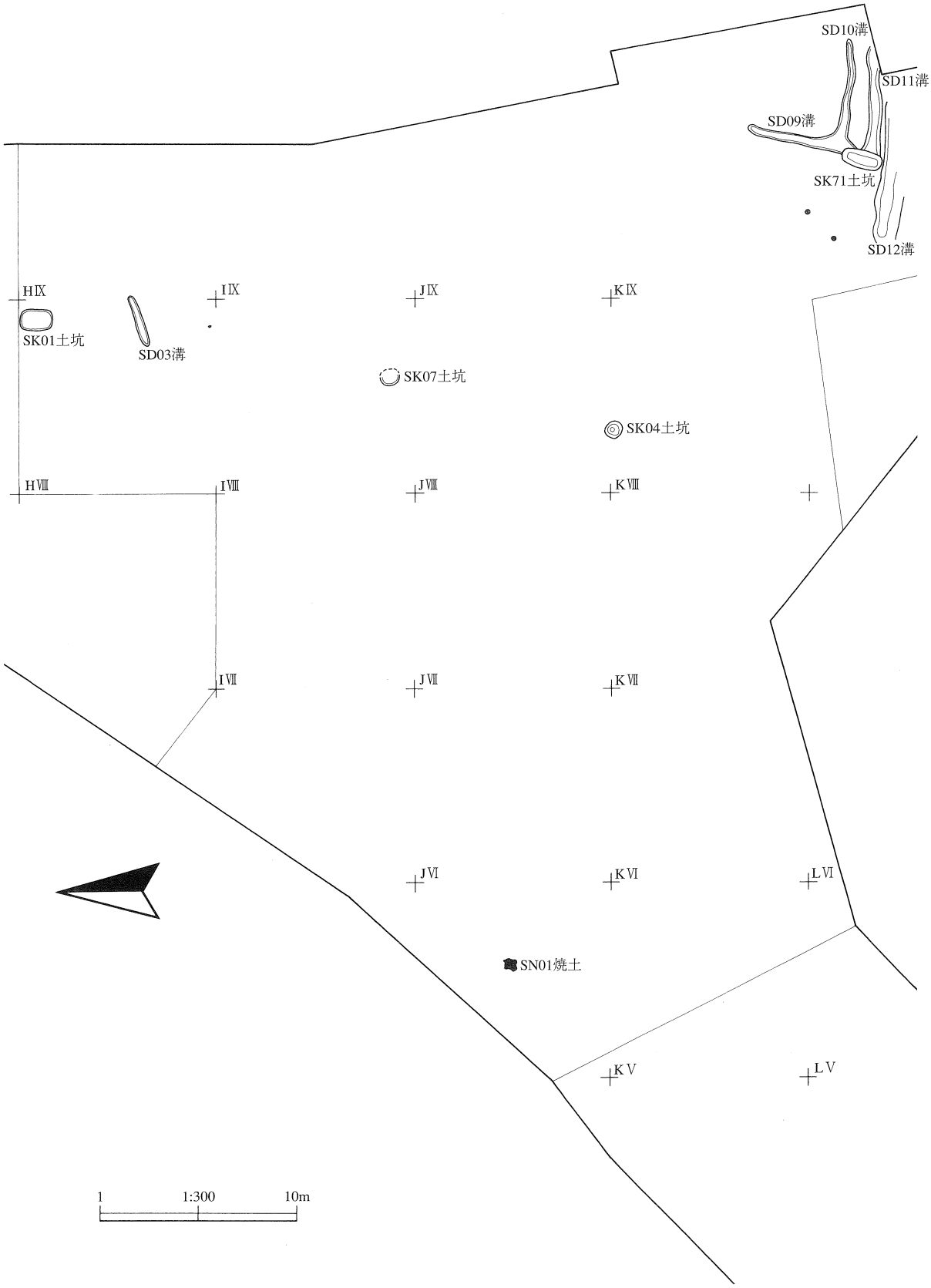
第８図　遺構全体図


SD06溝（Ⅲ層）
EⅨ
EⅨ
SK02土坑
（Ⅲ層）
GⅨ
HⅨ
SK03土坑
（Ⅲ層）
SD02溝
（Ⅲ層）
SD05溝
（Ⅲ層）
SD04溝
（Ⅲ層）
Ⅲ層上面まで調査終了区域
SD01溝
（Ⅲ層）
EⅧ
FⅧ
GⅧ
HⅧ
FⅦ
SK09土坑（V層）
SK08土坑（V層）
EⅥ
GⅥ
V層上面まで
調査終了区域
SI01住居（Ⅲ層）
SK05
土坑
SK06土坑
EⅤ
GⅤ
ST03捨て場
SX01火葬骨
埋納遺構
（Ⅲ層）
EⅣ
SD07溝
（Ⅲ層）
GⅣ
0
1:300
10m

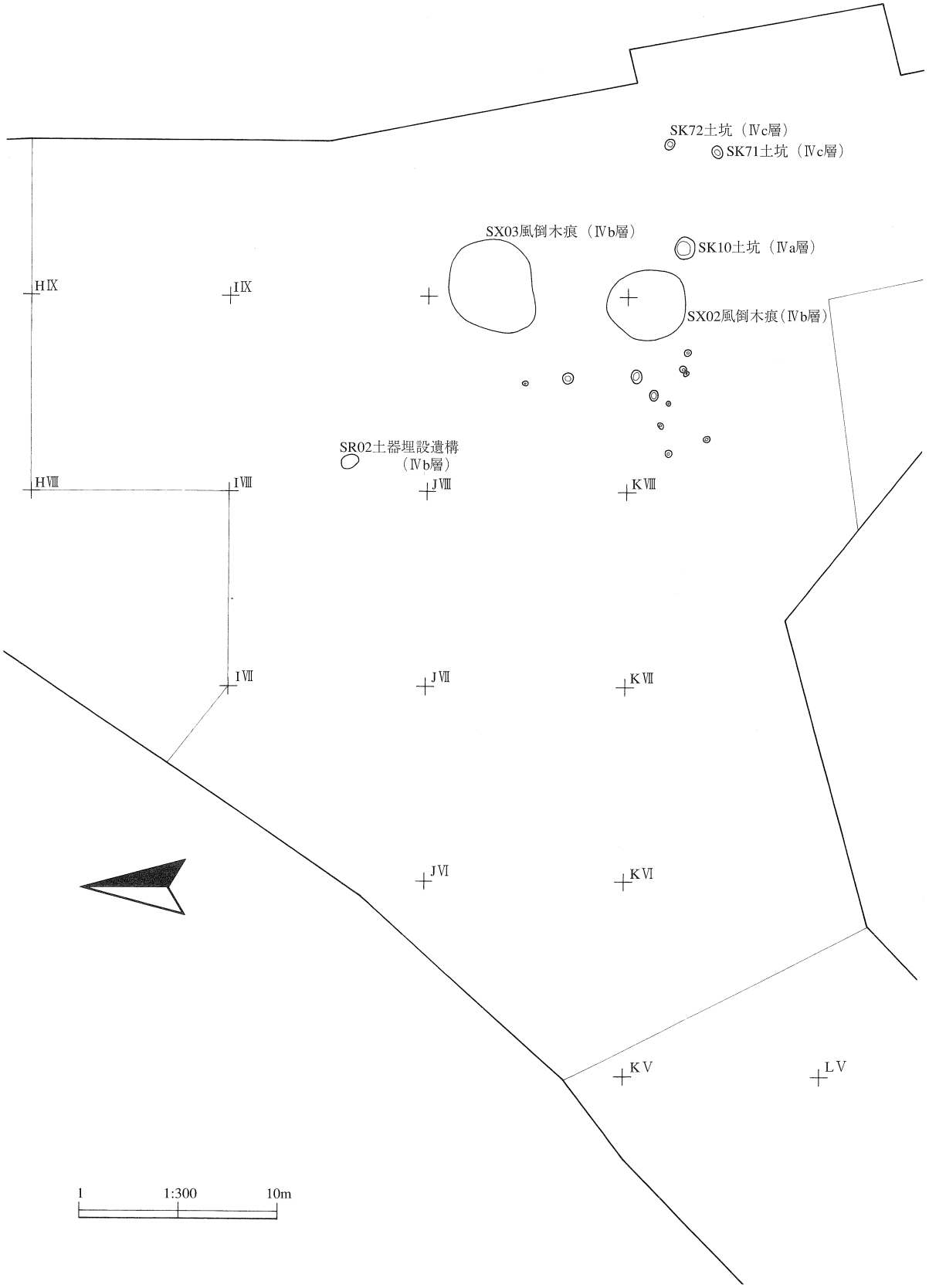
第９図　北～東区検出遺構



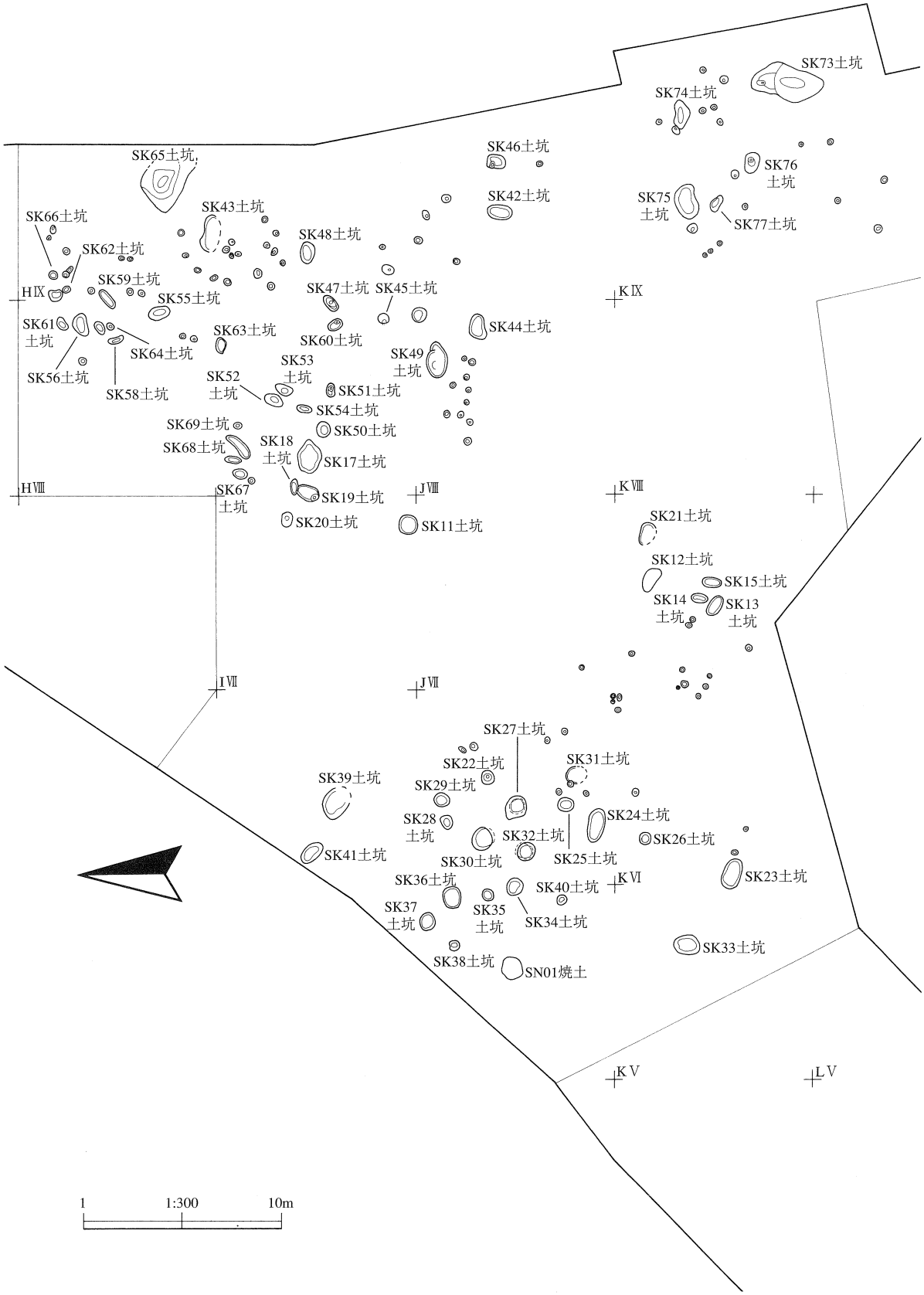
第10図　東区Ⅴ層上面検出遺構



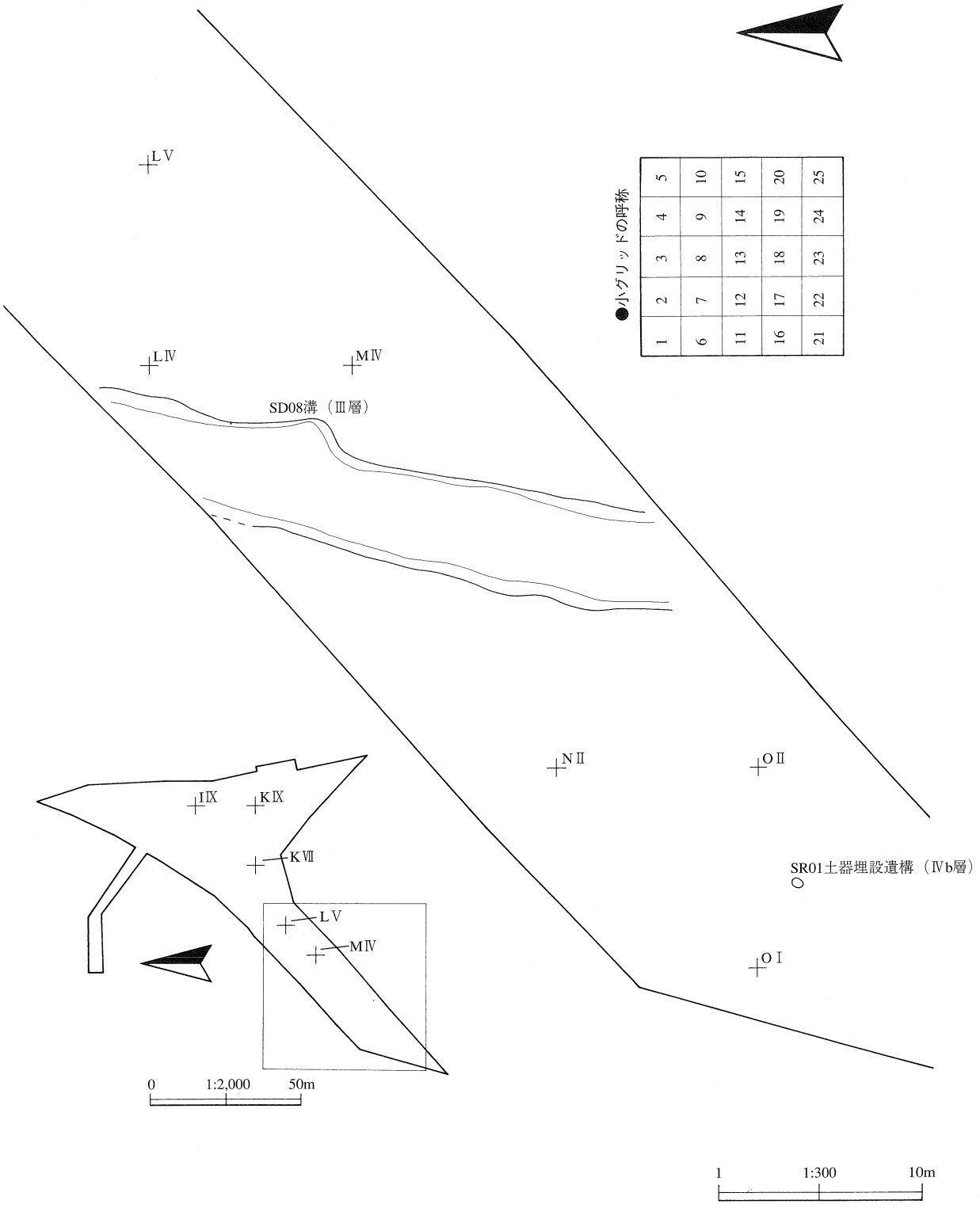
第 11 図　中央～南東区Ⅲ層上面検出遺構



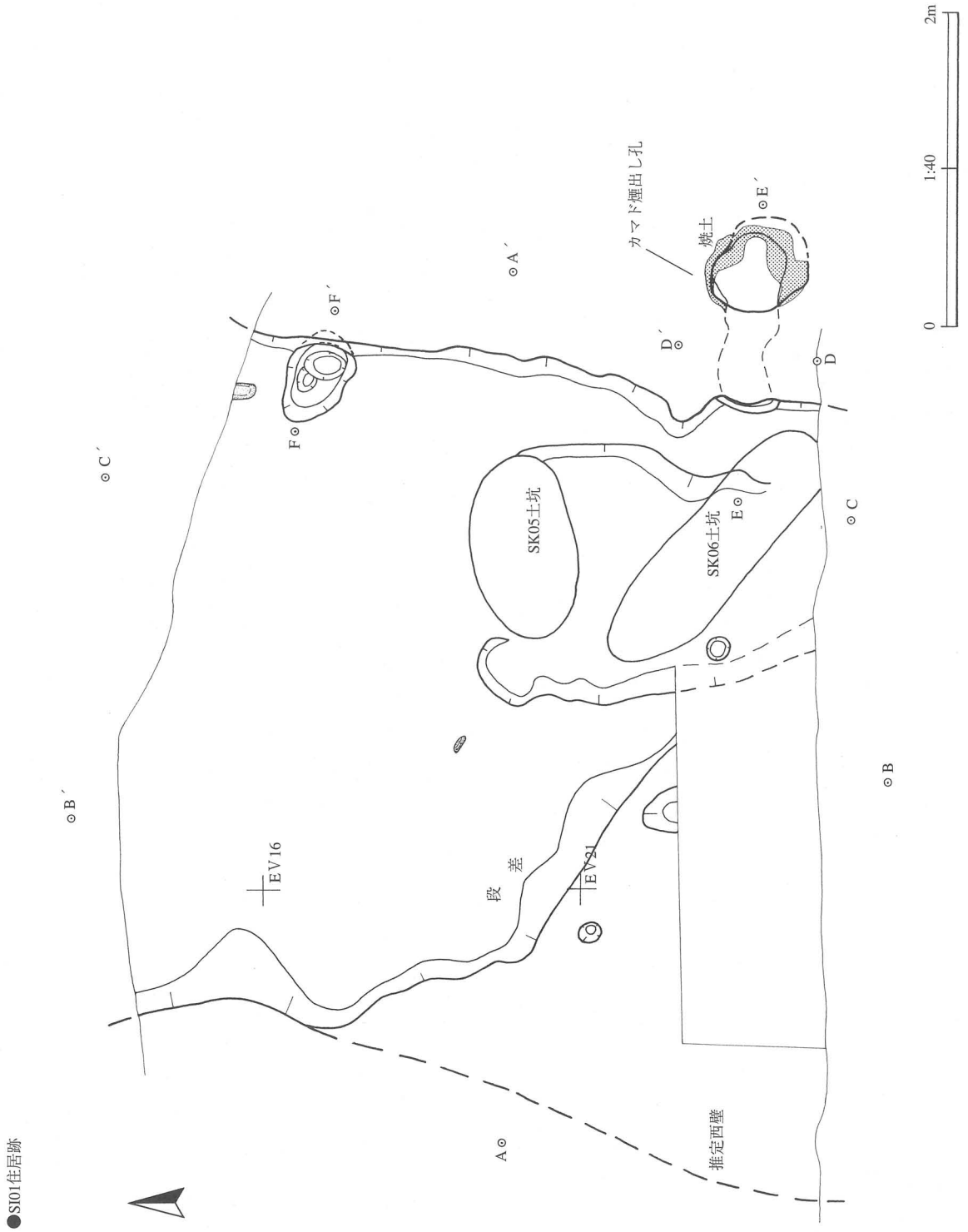
第 12 図　中央～南東区Ⅳ a、Ⅳ b、Ⅳ c 層検出遺構



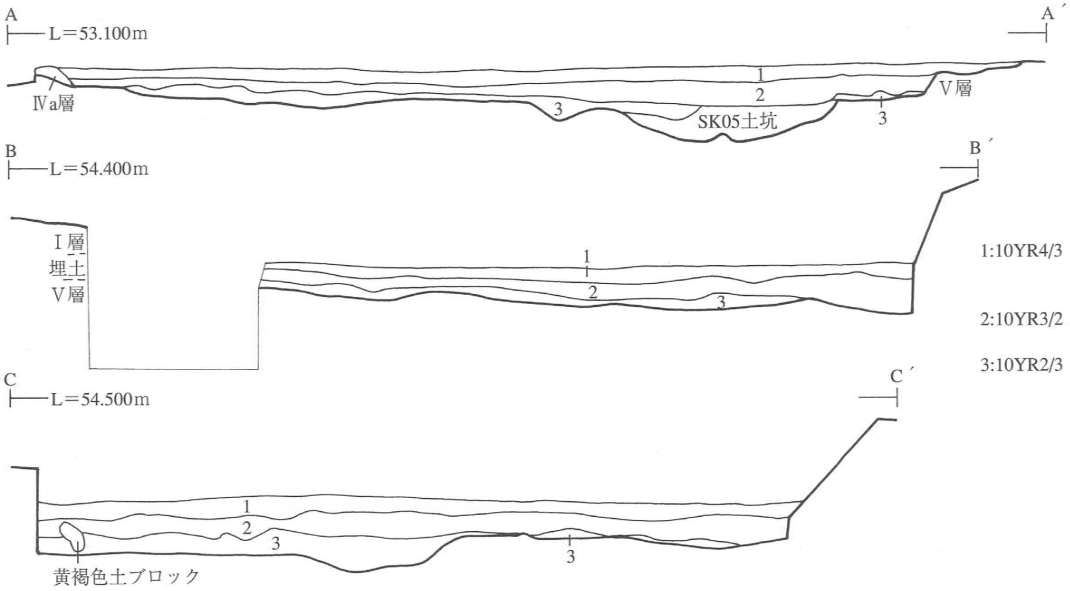
第13図　中央～南東区Ⅴ層上面検出遺構

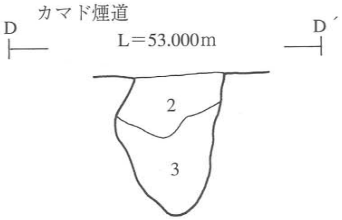


第14図　南西区検出遺構（前年度）

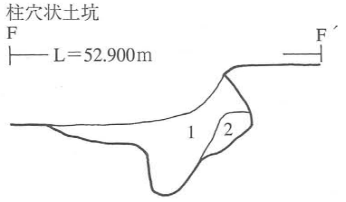


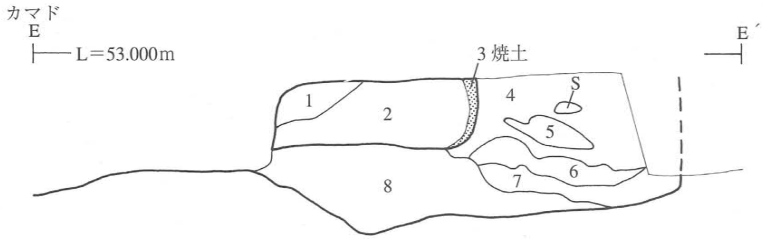
第15図　SI01住居跡（1）





1:10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　しまり強
グレーに近い色調で当初表土かⅡ層目の水田土が低い地点と勘違いしたような土質　斑鉄が発達　炭粒含む
2:10YR3/2　黒褐色　シルト　均質　しまりは1層より弱　含有物は少ない
炭粒若干含む
3:10YR2/3　暗褐色　砂質シルト　しまりは2層と同程度　炭粒含む
褐色土ブロックと黒褐色土ブロックが斑状に5～10%程度混ざる





1:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　Ⅲ層相当
2:10YR2/3　黒褐色　シルト　しまり強
Ⅲ～Ⅳa層相当か?　地山天井
3:5YR3/3　暗赤褐色　シルト　煙出壁面焼成部
4:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　しまり中　炭粒含む
焼土ブロック下部に含む
5:10YR4/4　褐色　砂質シルトの大ブロック
6:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　しまり弱　均質
7:7.5YR2/2　黒褐色　シルト　しまり弱　焼土ブロック
炭粒含む
8:10YR3/3　暗褐色　シルト　しまり強　煙道埋土と
考えられるがやや疑問

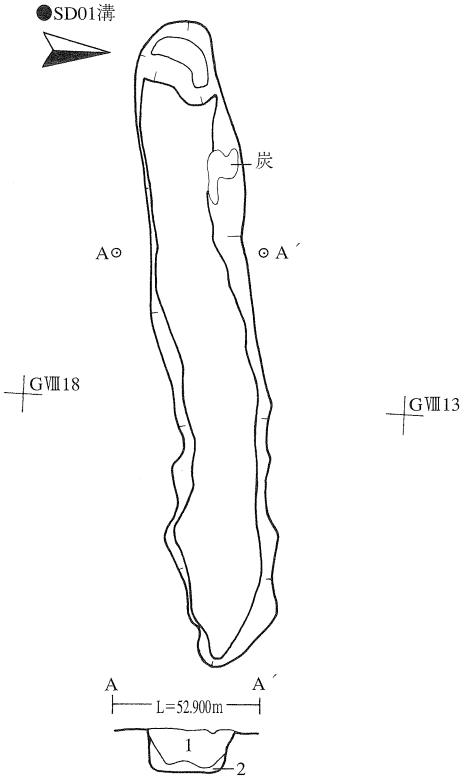
1:10YR3/2　黒褐色　シルト　しまり強
褐色土ブロックを含む　炭粒含む
2:10YR3/3　暗褐色　シルト

A.B.C
0　1:40　2m

D.E.F
0　1:20　1m

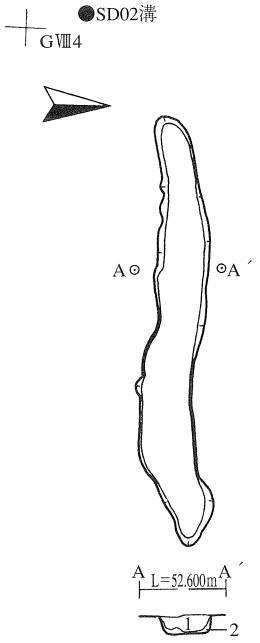
第16図　SI01 住居跡（2）

●SD01溝



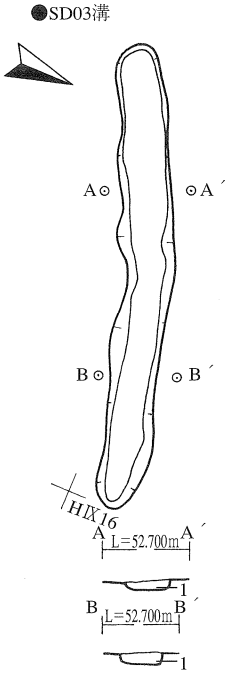
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　しまり中
2:10YR3/4　暗褐色　シルト

●SD02溝



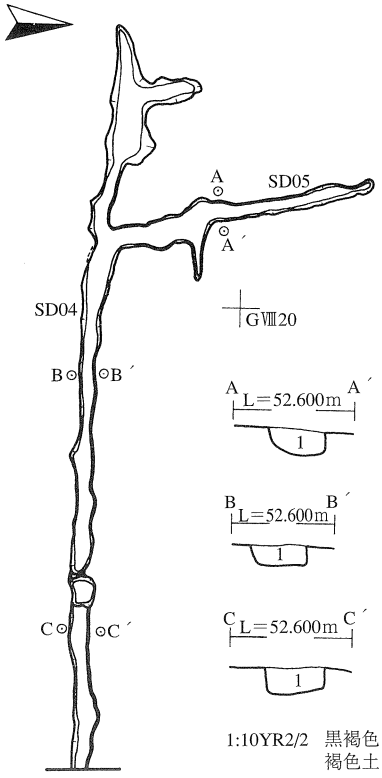
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　しまり中
2:10YR3/4　暗褐色　シルト

●SD03溝



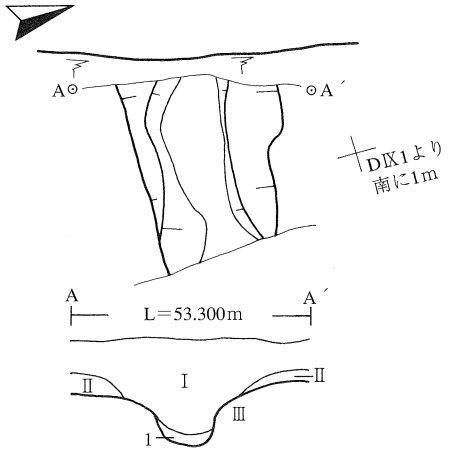
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　しまり中
炭粒含む

●SD04、05溝



1:10YR2/2　黒褐色　シルト　しまり中
褐色土ブロック・炭粒含む

●SD06溝



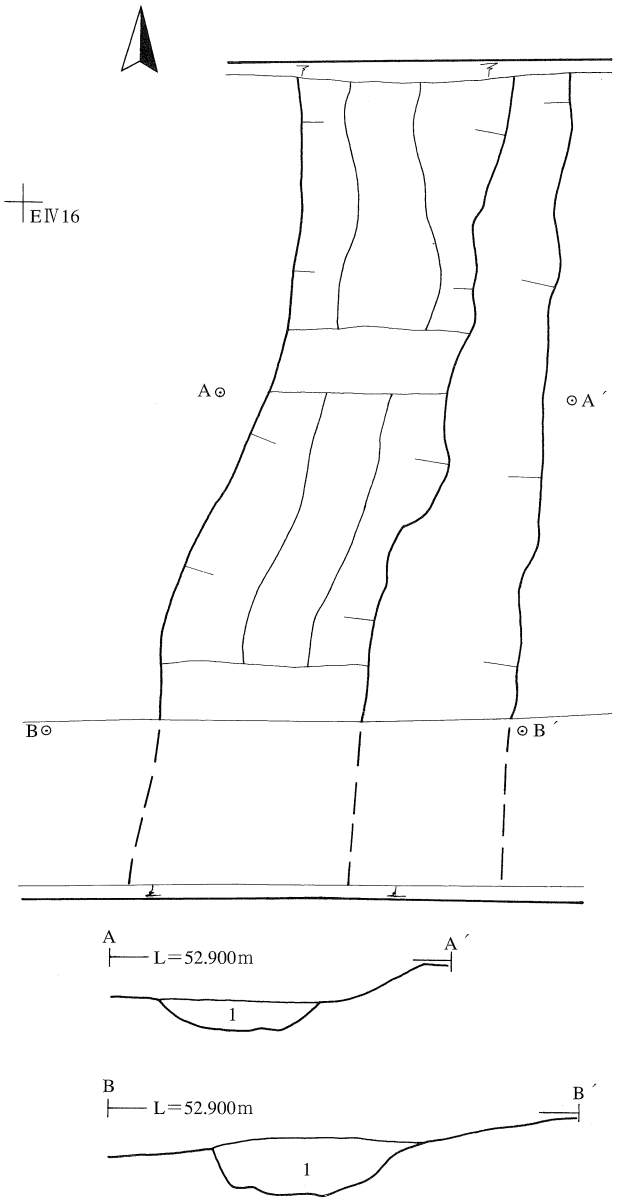
Ⅰ層:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む
Ⅱ層:10YR2/3　黒褐色　シルト
Ⅲ層:10YR4/4　褐色　砂
1:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト

SD04、05の平面図
0　1:120　6m

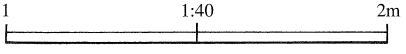
上記以外
0　1:40　2m

第 17 図　SD01 ～ SD06 溝跡

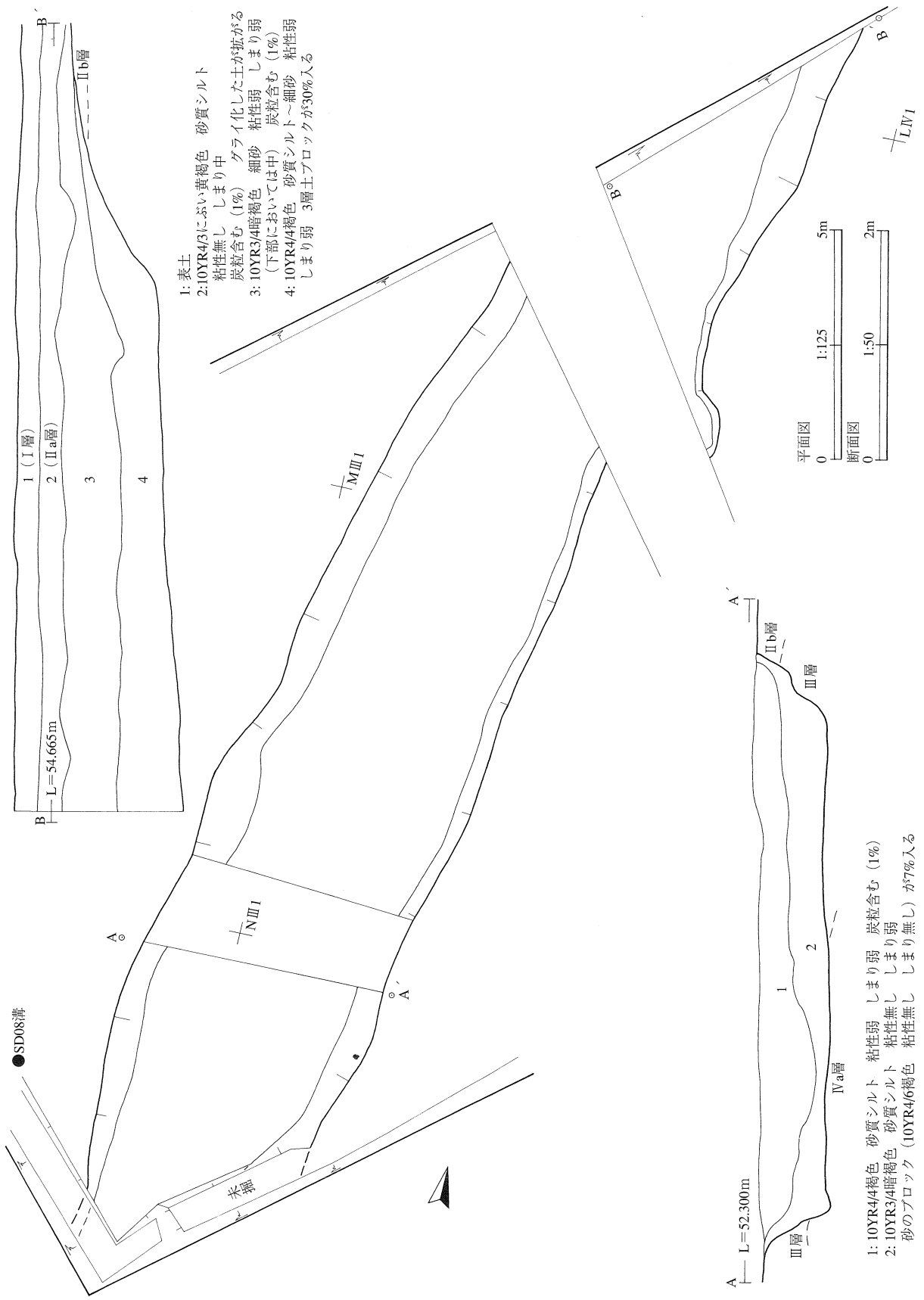
●SD07溝



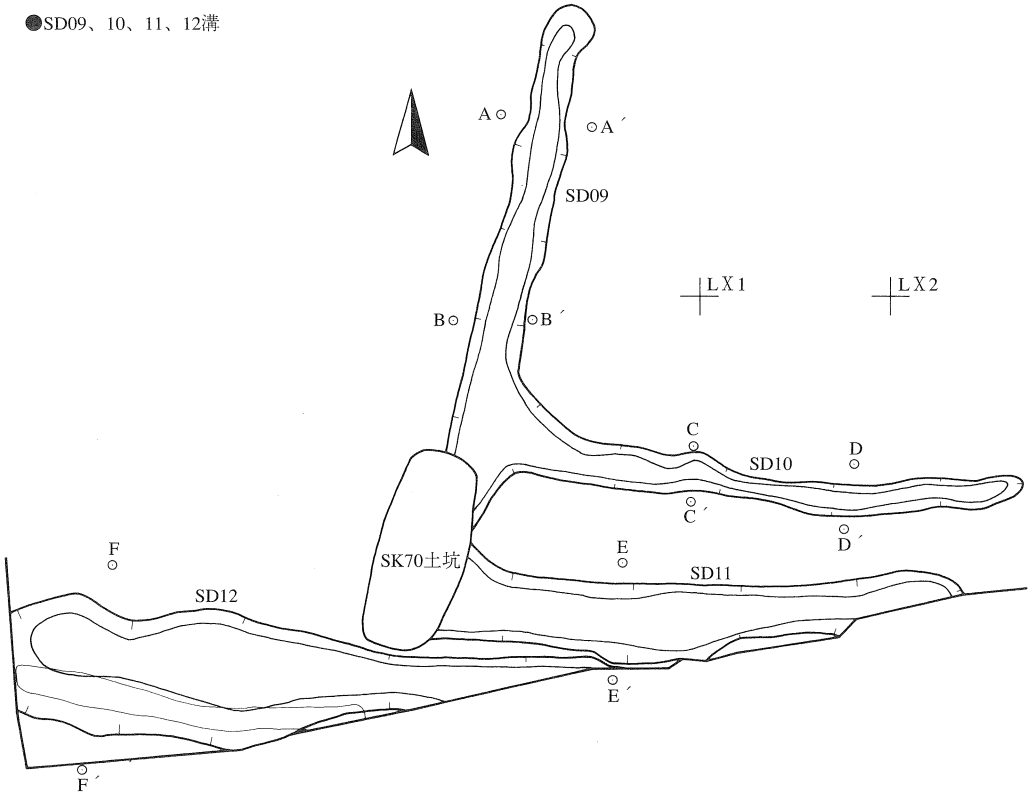
1:7.5YR2/2　黒褐色　シルト　しまり弱
褐色土粒・炭粒含む（2～3%）

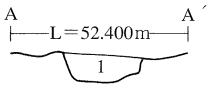


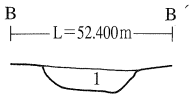
第18図　SD07溝跡


SD08溝
未掘
NⅢ1
MⅢ1
LⅣ1
1（Ⅰ層）
2（Ⅱa層）
3
4
Ⅱb層
L＝54.665m
B
B′
A
A′
1: 表土
2:10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト
粘性無し　しまり中
炭粒含む（1%）　グライ化した土が拡がる
3: 10YR3/4暗褐色　細砂　粘性弱　しまり弱
（下部においては中）　炭粒含む（1%）
4: 10YR4/4褐色　砂質シルト～細砂　粘性弱
しまり弱　3層土ブロックが30%入る
平面図
0
1:125
5m
断面図
0
1:50
2m
Ⅱb層
Ⅲ層
Ⅳa層
L＝52.300m
1
2
1: 10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり弱　炭粒含む（1%）
2: 10YR3/4暗褐色　砂質シルト　粘性無し　しまり弱
砂のブロック（10YR4/6褐色　粘性無し　しまり無し）が7%入る

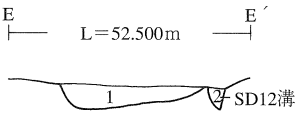
第 19 図　SD08 溝跡



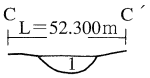


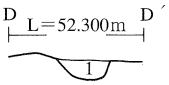


1:10YR2/3　黒褐色　砂質シルト
炭粒含む　Ⅱb層相当

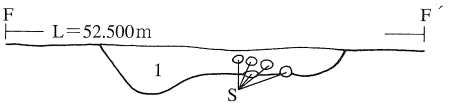


1:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　Ⅱb層相当

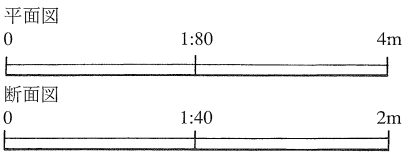




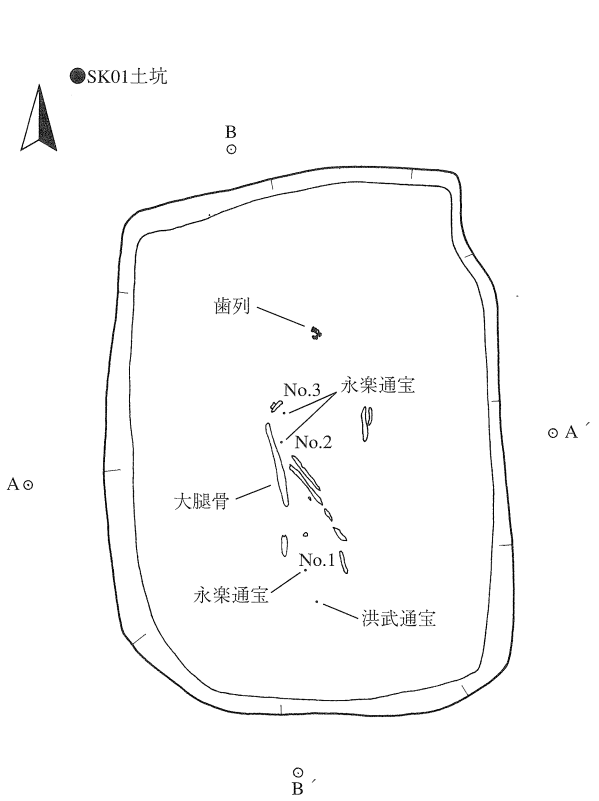
1:10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　Ⅱb層相当

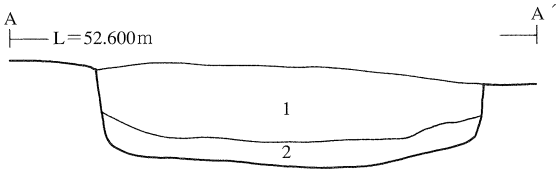


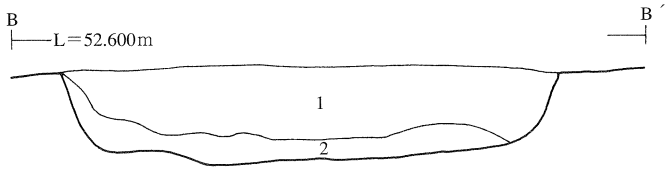
1:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　均質　炭粒若干含む



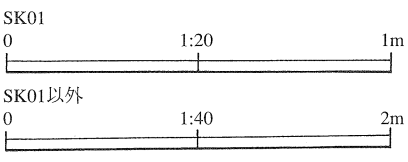
第 20 図　SD09 ～ SD12 溝跡

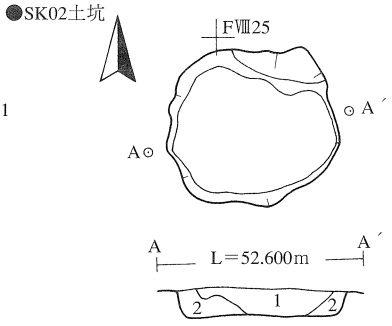




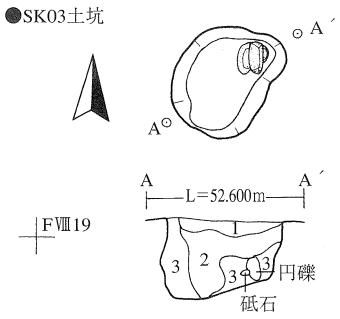


1:10YR2/3　黒褐色　シルト　炭粒含む　褐色土粒（5%）
2:10YR3/4　暗褐色　シルト　褐色土ブロック（20~30%）

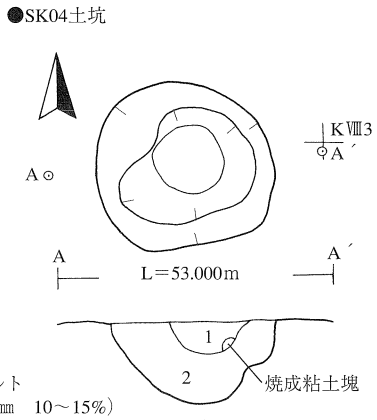




1:10YR2/2　黒褐色　シルト　しまり弱　炭粒含む
2:10YR3/4　暗褐色　シルト



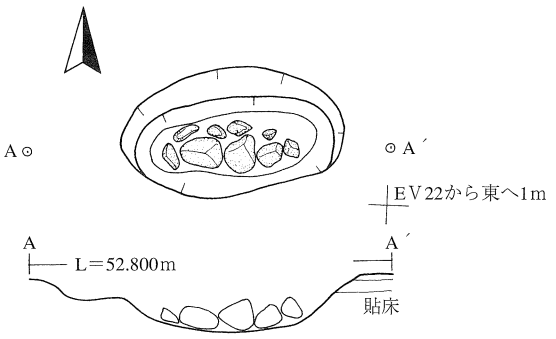
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む
2:10YR2/1　黒色　シルト　しまり弱
　　炭粒含む　（柱痕）
3:10YR3/4　暗褐色　シルト　しまり強　埋戻土



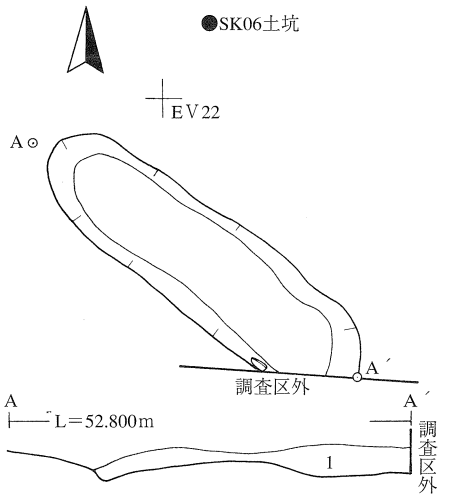
1:5YR3/2　暗赤褐色　砂質シルト
　炭化物粒（径5～10㎜　10～15%）
　焼土粒（5YR4/6赤褐色　径5～10㎜　5～8%）
　焼土粒（5YR3/3～3/4暗赤褐色　径5～20㎜　5%）
　2層のブロック（径10～30㎜　5%）が全体として斑状に混在する
　焼骨細片わずかに含む
2:7.5YR3/2　黒褐色　砂質シルト　均質
　焼土粒（5YR4/6赤褐色　径5～10㎜　2～3%）
　Ⅲ層褐色砂ブロック（2～3%）がそれぞれ含まれる
　焼骨微細破片ごくわずかに含まれる
※1・2層は混入物の差で明瞭に分かれる

第21図　SK01～SK04土坑

●SK05土坑

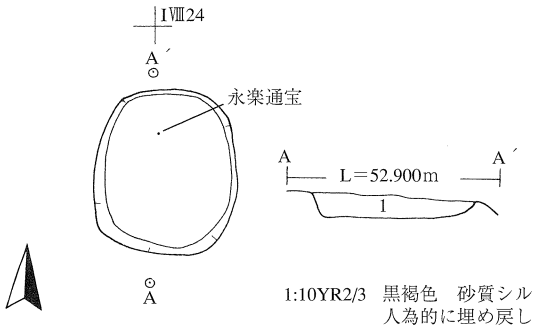


●SK06土坑



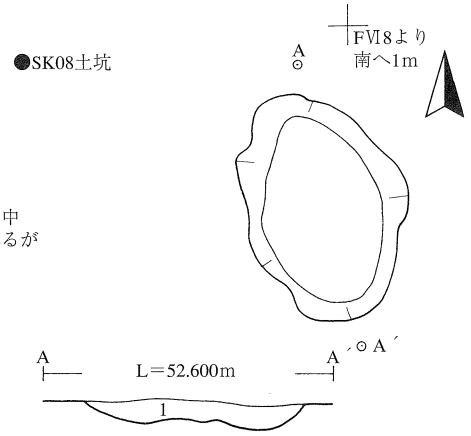
1:10YR2/3　黒褐色　シルト　炭粒含む
褐色土ブロック含む（5%）

●SK07土坑



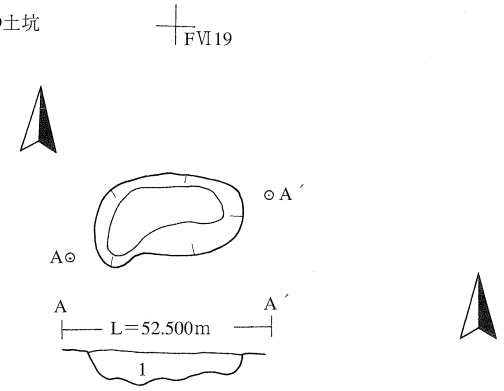
1:10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　しまり中
人為的に埋め戻したと思われるが
明確な埋め戻し痕跡はない

●SK08土坑



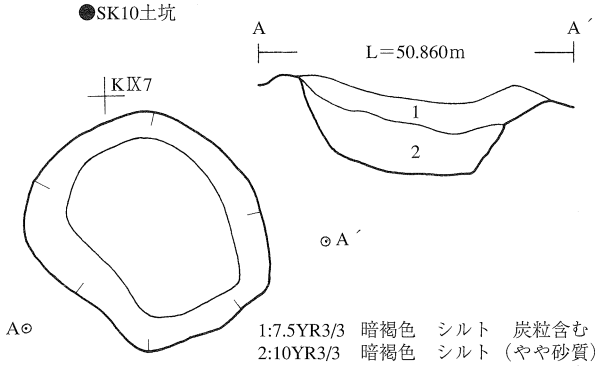
1:10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　しまり中～強
褐色土ブロック

●SK09土坑

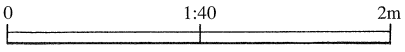


1:10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　炭粒含む

●SK10土坑

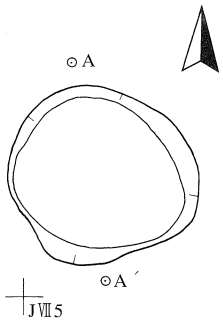


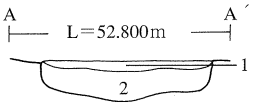
1:7.5YR3/3　暗褐色　シルト　炭粒含む（10%）
2:10YR3/3　暗褐色　シルト（やや砂質）
Ⅳb層に近いが炭粒集中（10%）で
埋土と認識した
※Ⅳa層上部のしまる粘土質シルト（7.5YR4/3褐色）
が遺構を覆う



第22図　SK05～SK10土坑

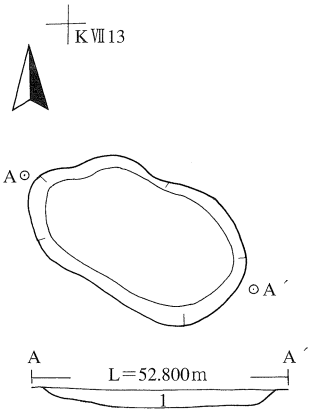
●SK11土坑





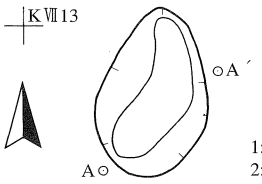
1:5YR4/3　にぶい赤褐色　砂質シルト　焼土粒含む
炭粒含む　褐色土ブロック（大）含む
2:7.5YR3/3　暗褐色　シルト　しまり弱　焼土粒含む

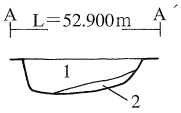
●SK13土坑



1:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
褐色土ブロック含む（10%）

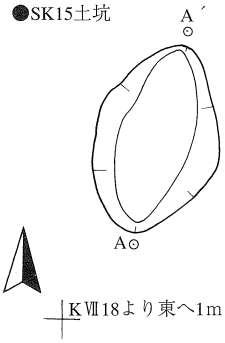
●SK14土坑

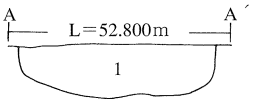




1:10YR3/2　暗褐色　細砂　均質
2:10YR3/1　黒褐色　粘土質シルト
底面に酸化鉄層形成

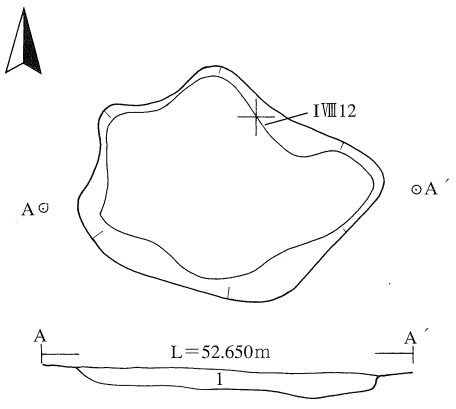
●SK15土坑





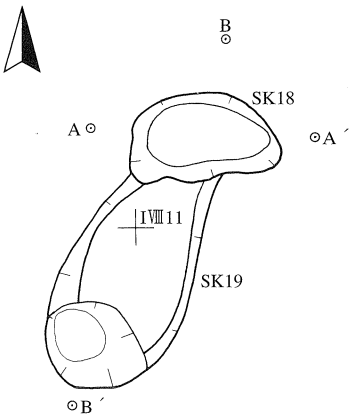
1:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
黒褐色土ブロック斑状含む
（5～10%）

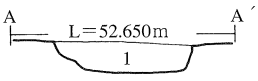
●SK17土坑



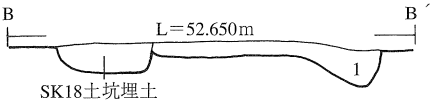
1:10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土ブロック含む（5～10%）

●SK18、19土坑

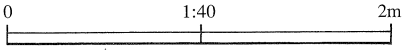




1:10YR3/2　黒褐色　シルト　下半10YR3/4暗褐色へ漸変

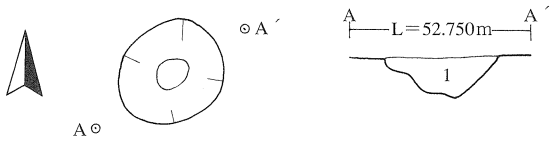


1:10YR3/2　黒褐色　シルト　褐色土ブロック含む（5～10%）
※SK18との切り合い不明



第23図　SK11、SK13～SK15、SK17～SK19土坑

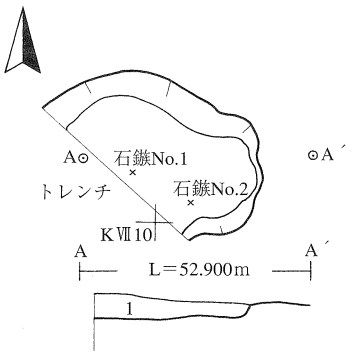
●SK20土坑



1:10YR3/2　黒褐色　シルト　均質

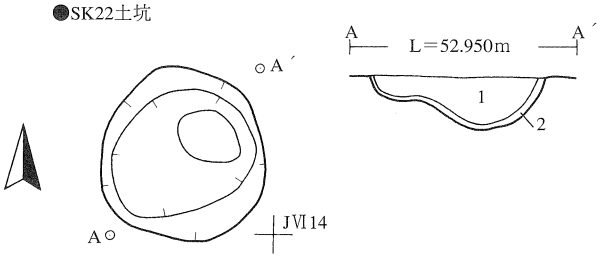
IⅦ15

●SK21土坑



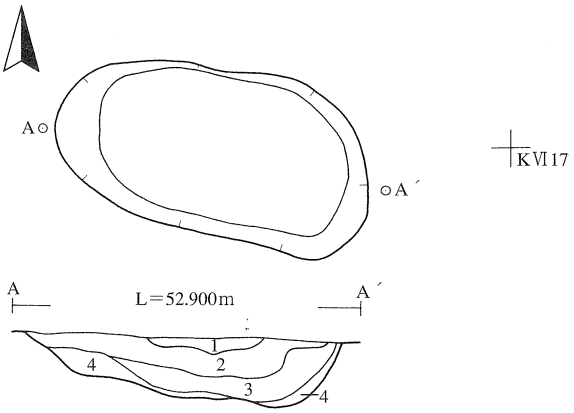
1:10YR3/2　暗褐色　砂質シルト
粘性無し

●SK22土坑



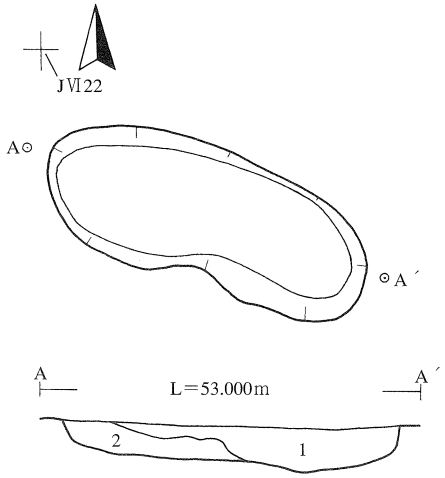
1:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
粘性弱　しまり強
2:10YR4/4褐色　シルト
粘性弱　しまり中

●SK23土坑



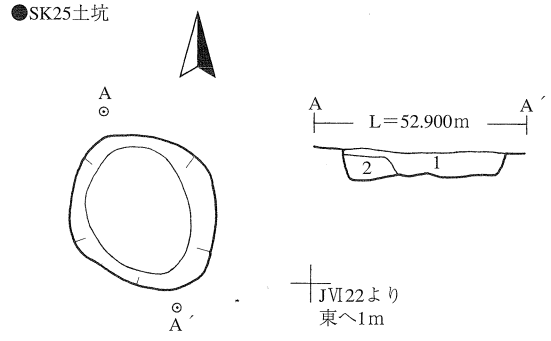
1:10YR4/6　褐色　細砂　しまり無し　粘性無し
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり強
3:7.5YR5/8　明褐色　シルト　粘性弱　しまり中
3層土のブロック（30～50㎜）が入る（40%）
4:7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性弱　しまり中

●SK24土坑

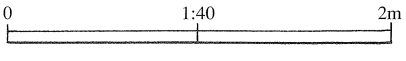


1:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり強
2:10YR4/4　褐色　シルト　粘性中　しまり中

●SK25土坑

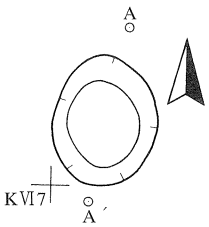


1:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり強
2:10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり中

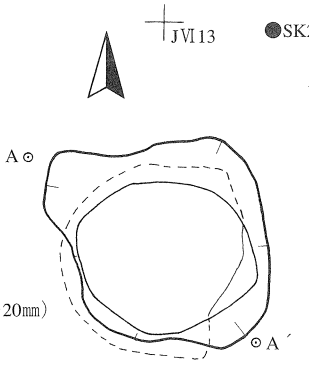


第24図　SK20～SK25土坑

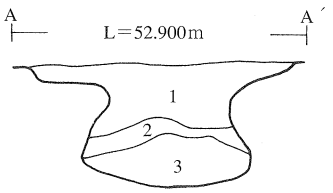
●SK26土坑



1:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト
粘性中　しまり中
細砂ブロック（10YR4/6褐色
粘性無し　しまり無し　10～20㎜）
入る

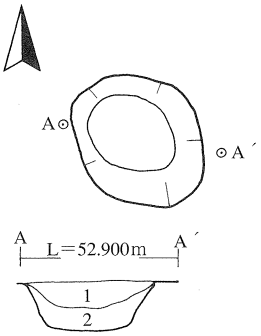


●SK27土坑



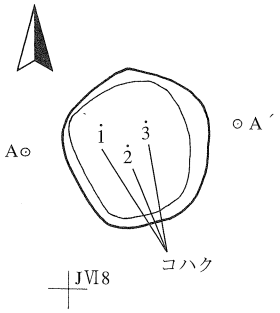
1:10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性無し
しまり中
細砂ブロック（10YR4/6褐色
粘性無し　しまり弱　10～20㎜）が
7%程度入る
2:10YR4/6　褐色　細砂　粘性無し　しまり弱
砂質シルトブロック（10YR4/4褐色
粘性無し　しまり弱　5～10㎜）が
10%程度側面に入る
3:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性極少
しまり中
細砂ブロック（10YR4/6褐色
粘性無し　しまり弱　5～10㎜）が
5%程度入る
※全体に5～10㎜程度の炭粒が2%程度入る

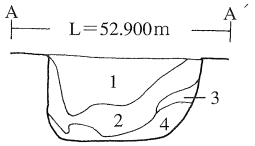
●SK28土坑



1:10YR4/4　褐色　シルト　粘性中　しまり中　炭粒含む
2:7.5YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり弱

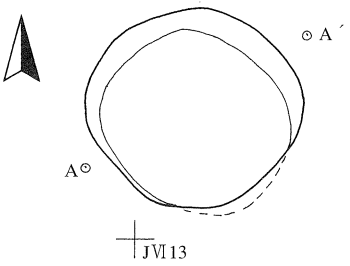
●SK29土坑

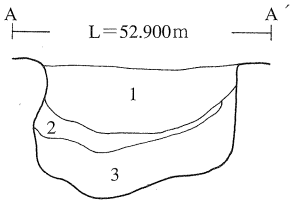




1:10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性無し
しまり中
2:10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱
しまり弱　炭粒含む
3:7.5YR5/6　明褐色　砂質シルト　粘性弱
しまり中
4:10YR4/6　褐色　シルト　粘性無し
しまり弱

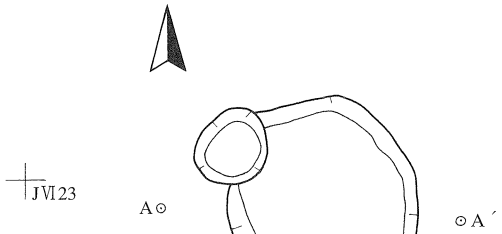
●SK30土坑



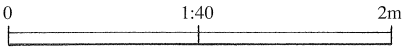


1:10YR4/4　褐色　シルト　粘性無し　しまり弱
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中
炭粒含む（30%）
3:10YR4/6　褐色　砂　粘性無し　しまり弱

●SK31土坑、P85

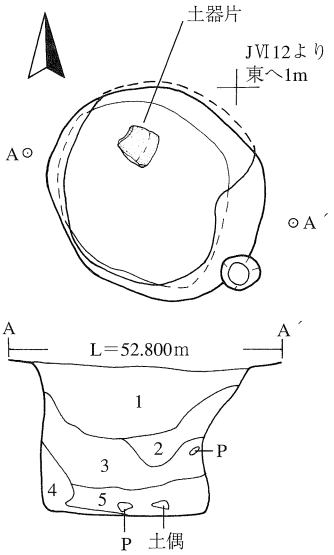


1:10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性極少　しまり中



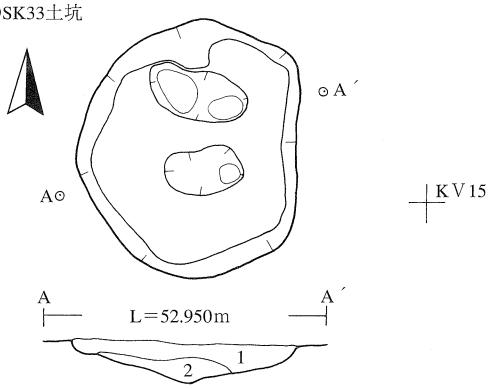
第25図　SK26～SK31土坑

●SK32土坑



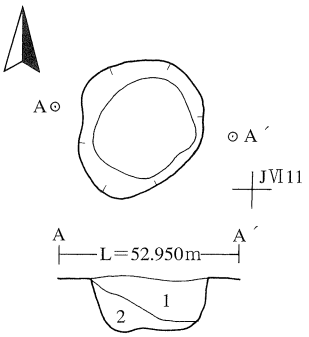
1:10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり中　炭粒含む
2:7/5YR4/6　褐色　シルト　粘性中　しまり弱
1層土ブロック（20～40㎜）が入る（30%）
3:10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり弱
4層土ブロック（10～20㎜）が入る（5%）
4:10YR5/6　黄褐色　細砂　粘性無し　しまり弱
壁土の崩落土と思われる
5:7.5YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性中　しまり弱
4層土ブロック（20～50㎜）が入る（30%）

●SK33土坑



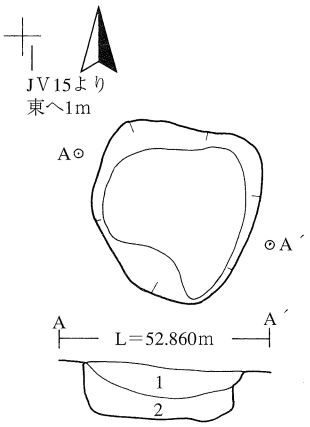
1:10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性極少　しまり中
シルトブロック（10YR5/6黄褐色　粘性弱
しまり中　20～50㎜）が5%入る
2:10YR4/4　褐色　シルト　粘性極少　しまり中

●SK35土坑



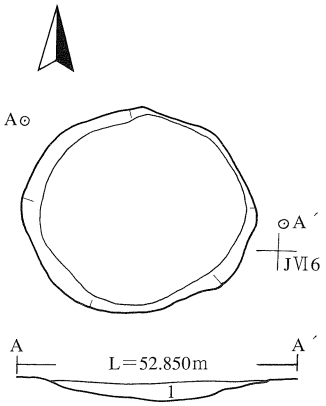
1:10YR3/3　暗褐色　シルト　しまり弱
2:10YR3/4　暗褐色　シルト

●SK34土坑

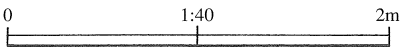


1:10YR3/3　暗褐色　シルト　炭粒含む
褐色土ブロック少量含む
2:10YR3/4　暗褐色　シルト　炭粒含む

●SK36土坑

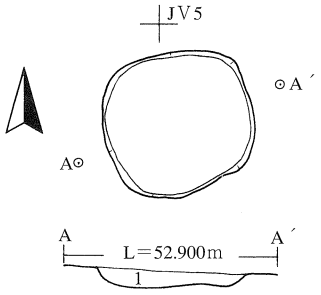


1:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　炭粒多く含む



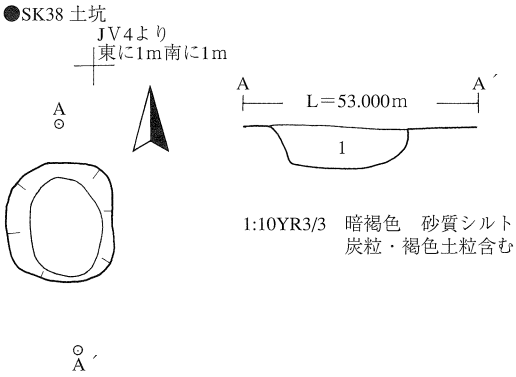
第26図　SK32～SK36土坑

●SK37土坑



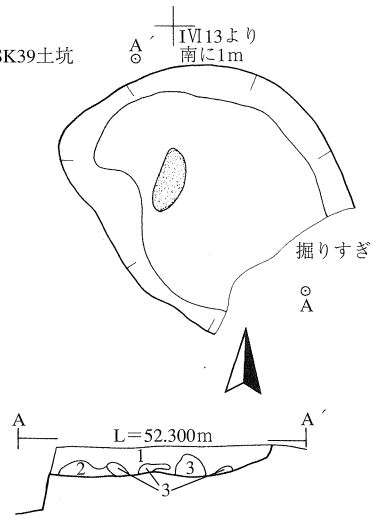
1:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　炭粒含む

●SK38土坑



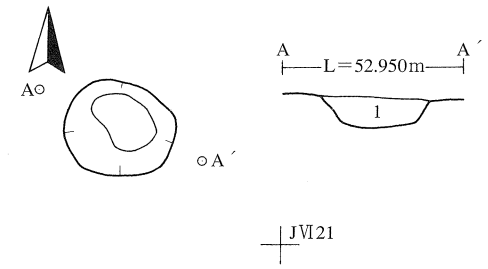
1:10YR3/3　暗褐色　砂質シルト
炭粒・褐色土粒含む

●SK39土坑



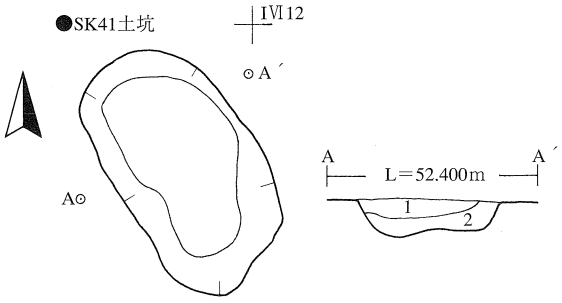
1:10YR2/3　黒褐色　シルト　炭粒多く含む　しまり弱
2:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト
3:10YR4/4～4/6　褐色　砂質シルトの大ブロック

●SK40土坑



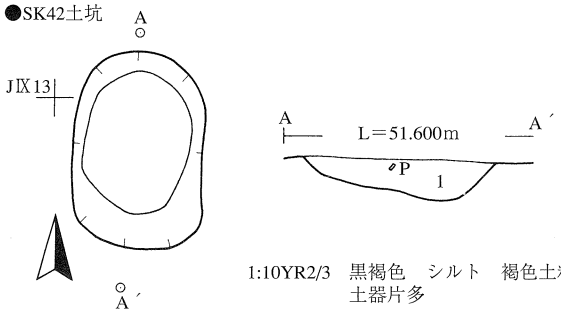
1:10YR3/4　暗褐色　シルト　炭粒含む

●SK41土坑

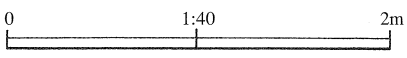


1:10YR3/4　暗褐色　シルト　炭粒集中
2:10YR4/4　褐色　炭粒多く含む　暗褐色ブロック含む

●SK42土坑

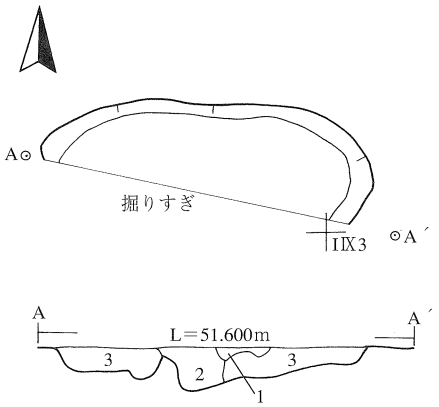


1:10YR2/3　黒褐色　シルト　褐色土粒含む（5%）
土器片多



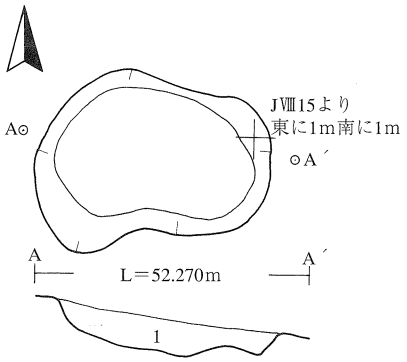
第27図　SK37～SK42土坑

●SK43土坑



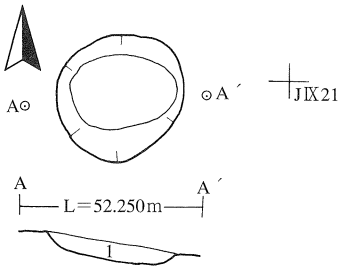
1:5YR4/6　赤褐色　シルト　焼土粒集中
2:10YR3/3　暗褐色　シルト　焼土粒・炭粒含む
3:10YR3/4　暗褐色　シルト　炭粒含む

●SK44土坑



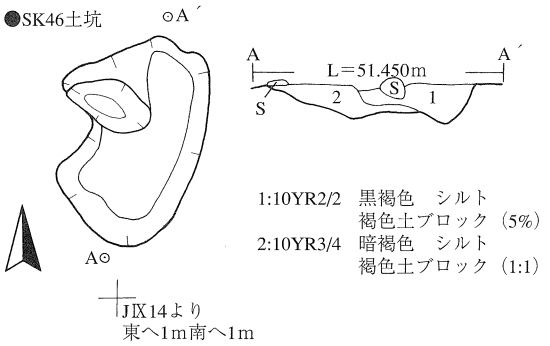
1:10YR3/3　暗褐色　シルト　炭粒含む
Ⅳc層下部に類似

●SK45土坑



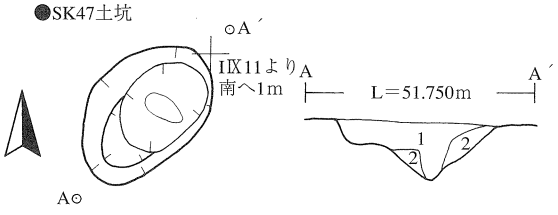
1:10YR3/3　暗褐色　シルト　炭粒含む　Ⅳc層下部に類似

●SK46土坑



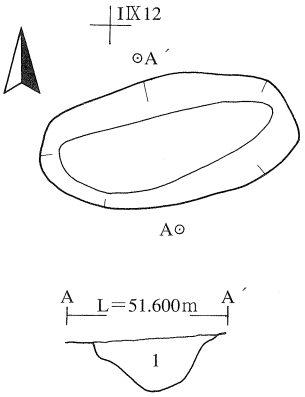
1:10YR2/2　黒褐色　シルト
褐色土ブロック（5%）
2:10YR3/4　暗褐色　シルト
褐色土ブロック（1:1）

●SK47土坑

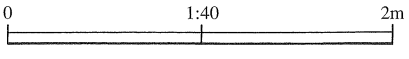


1:10YR2/2　黒褐色　シルト　2層との境に酸化鉄層有り
2:10YR4/4　褐色　シルト　（掘りすぎか?）

●SK48土坑

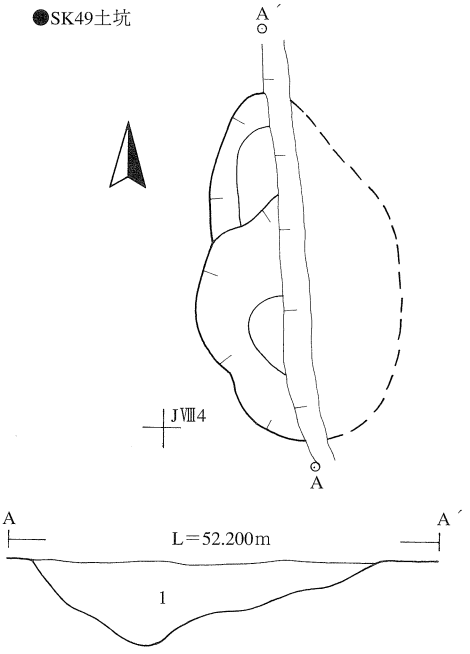


1:10YR2/3　黒褐色　シルト　均質　炭粒含む
褐色土ブロック混じる



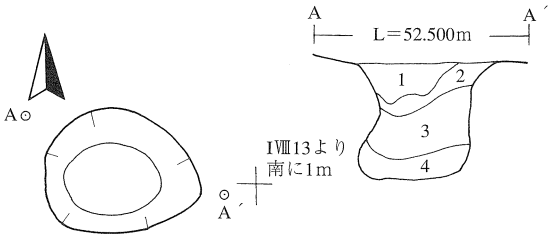
第28図　SK43～SK48土坑

●SK49土坑



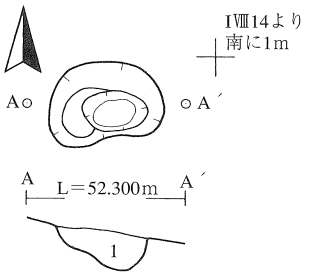
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む　褐色土ブロック（2～3%）

●SK50土坑



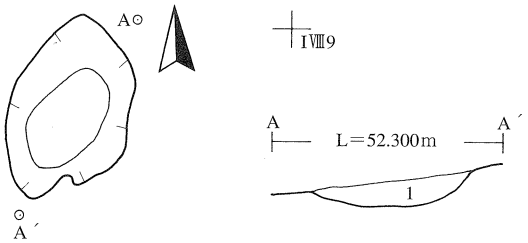
1:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む
2:10YR4/4　褐色　砂質シルト　崩落土
3:10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　炭粒含む
4:10YR3/4　暗褐色　細砂　（掘りすぎか?）

●SK51土坑



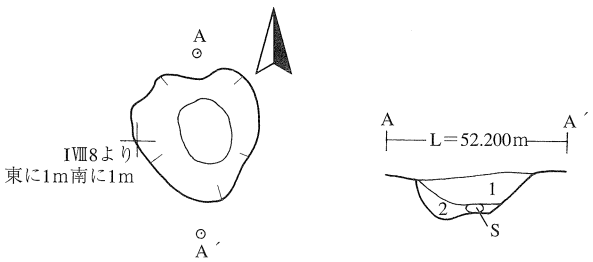
1:10YR4/4　褐色　シルト　炭粒含む

●SK52土坑



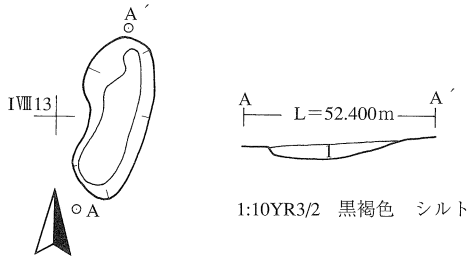
1:10YR3/2　黒褐色　シルト　炭粒含む

●SK53土坑

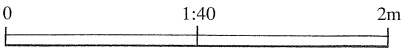


1:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む
2:10YR4/4　褐色　粘土

●SK54土坑

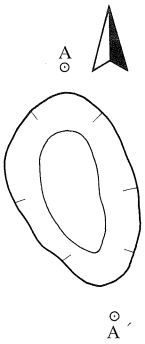


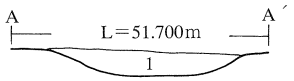
1:10YR3/2　黒褐色　シルト



第29図　SK49～SK54土坑

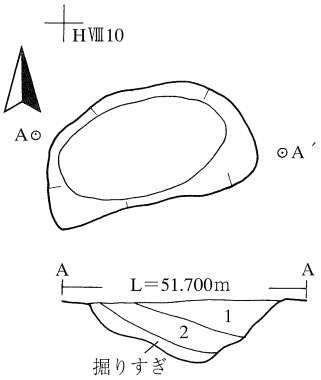
●SK55土坑





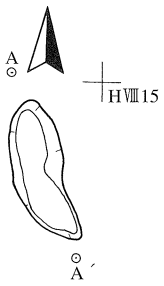
1:10YR2/3　黒褐色　シルト　褐色土ブロック含む

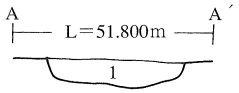
●SK56土坑



1:10YR3/3　暗褐色　シルト　炭粒含む
2:5YR4/6　赤褐色　焼土ブロックと炭化物集中
3:10YR4/6　褐色　粘土質シルト　（掘りすぎ）

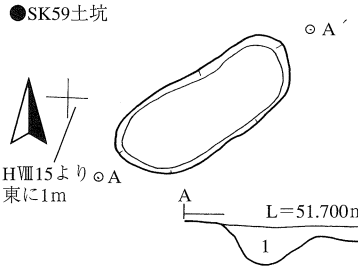
●SK58土坑





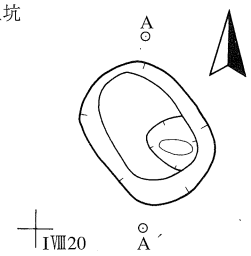
1:10YR3/2　黒褐色　シルト
褐色土ブロック含む　炭粒含む

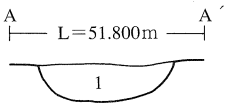
●SK59土坑



1:10YR3/2　黒褐色　シルト　IVc層下部

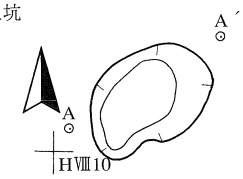
●SK60土坑

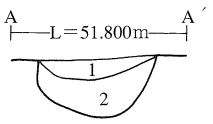




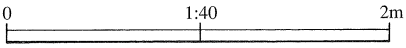
1:10YR3/2　黒褐色　シルト　炭粒含む　IVc層下部

●SK61土坑



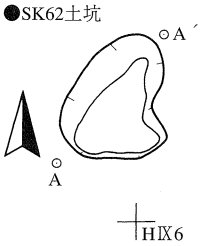


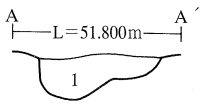
1:10YR2/3　黒褐色　シルト　炭粒含む
2:10YR3/4　暗褐色　シルト　しまり弱



第30図　SK55、SK56、SK58～61土坑

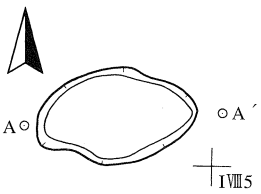
●SK62土坑

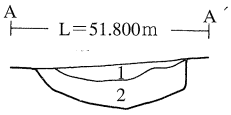




1:10YR3/2　黒褐色　シルト　炭粒含む

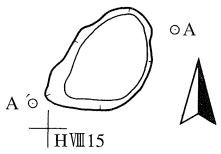
●SK63土坑

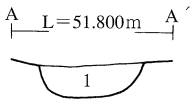




1:10YR2/2　黒褐色　シルト　炭粒含む
2:10YR3/4　暗褐色　シルト

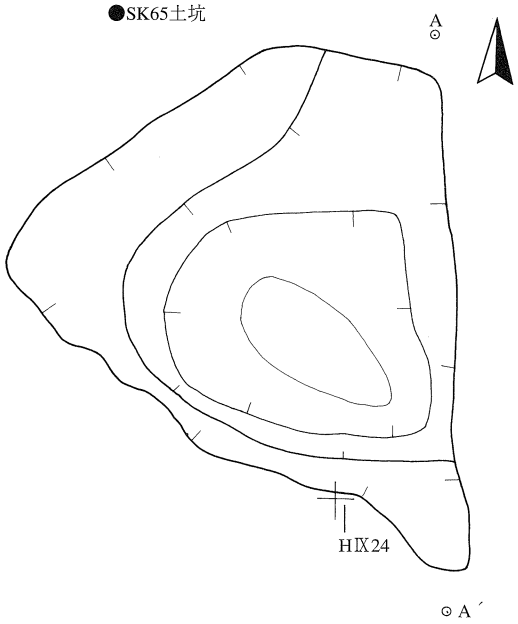
●SK64土坑

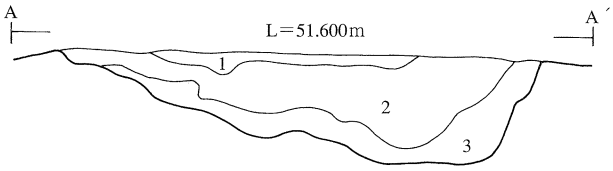




1:10YR3/2　黒褐色　シルト
炭粒含む　Ⅳc層下部

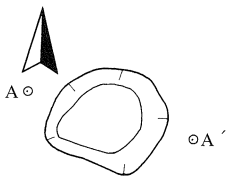
●SK65土坑

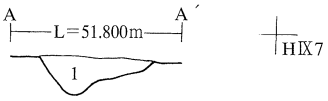




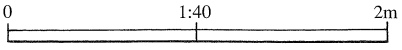
1:10YR4/6　褐色　粗砂　（Ⅳb層の落ち込み?）
2:10YR3/3　暗褐色　炭粒含む
3:10YR3/4　暗褐色　シルト
シルトブロック（10YR4/6褐色　50㎜程度）が30%混在する

●SK66土坑



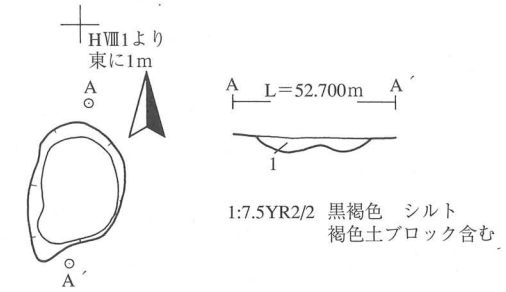


1:10YR3/4　暗褐色　シルト

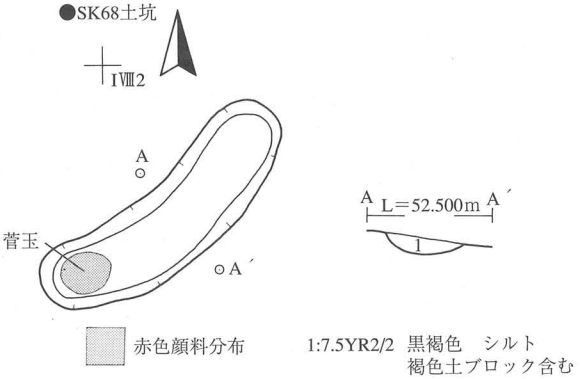


第31図　SK62～SK66土坑

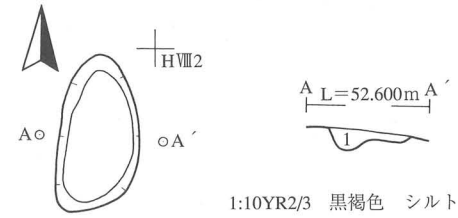
●SK67土坑



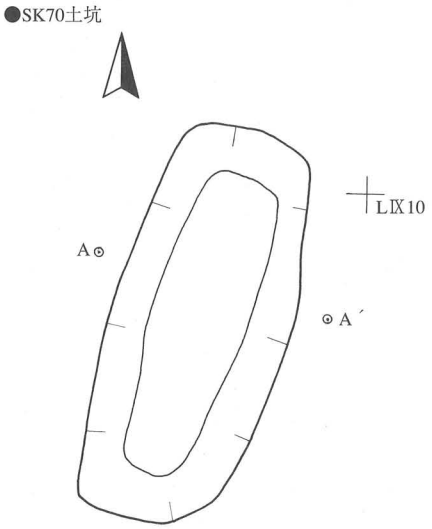
●SK68土坑



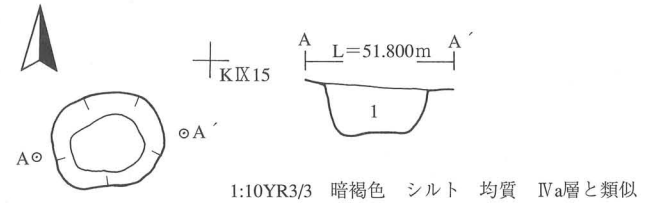
●SK69土坑



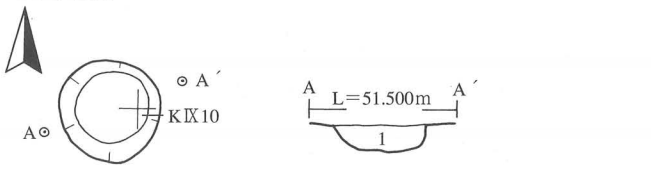
●SK70土坑

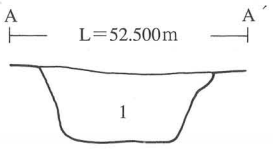


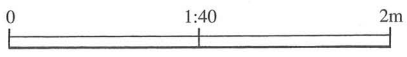
●SK71土坑



●SK72土坑

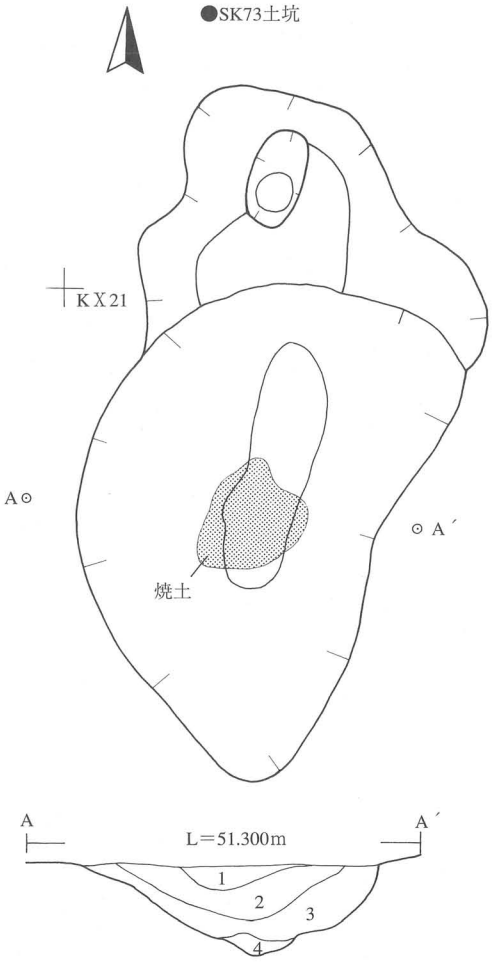






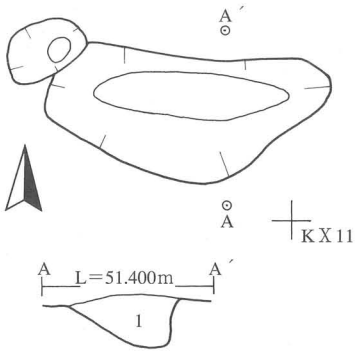
第32図　SK67～SK72土坑

●SK73土坑



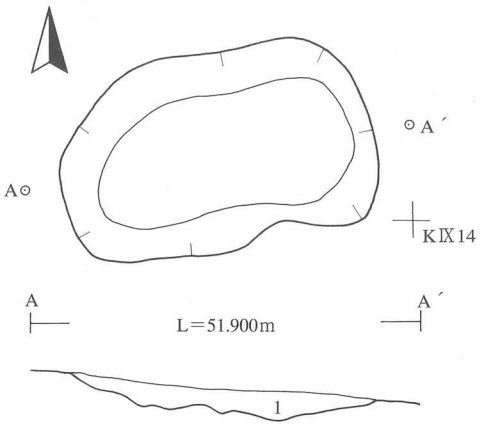
1:7.5YR2/1　黒色　粘土質シルト　炭含む　（Ⅳc層上部に相当）
2:10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　均質
3:7.5YR2/2　黒褐色　粘土質シルト　褐色土ブロック含む
4:10YR4/4　褐色　炭含む　下面に焼土ブロック含む

●SK74土坑



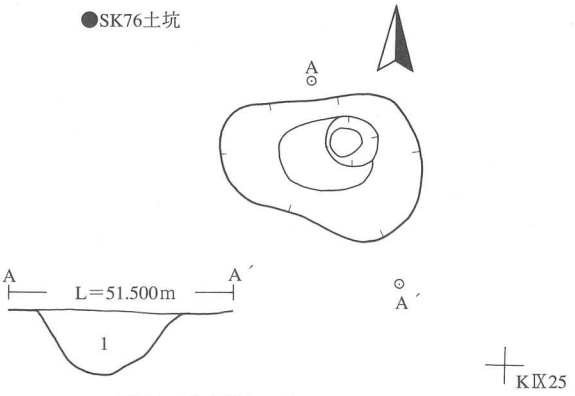
1:10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　炭含む

●SK75土坑



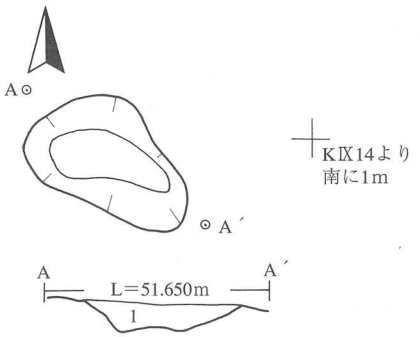
1:10YR2/3　黒褐色　粘土質シルト

●SK76土坑

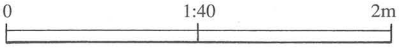


1:10YR2/3　黒褐色　粘土質シルト

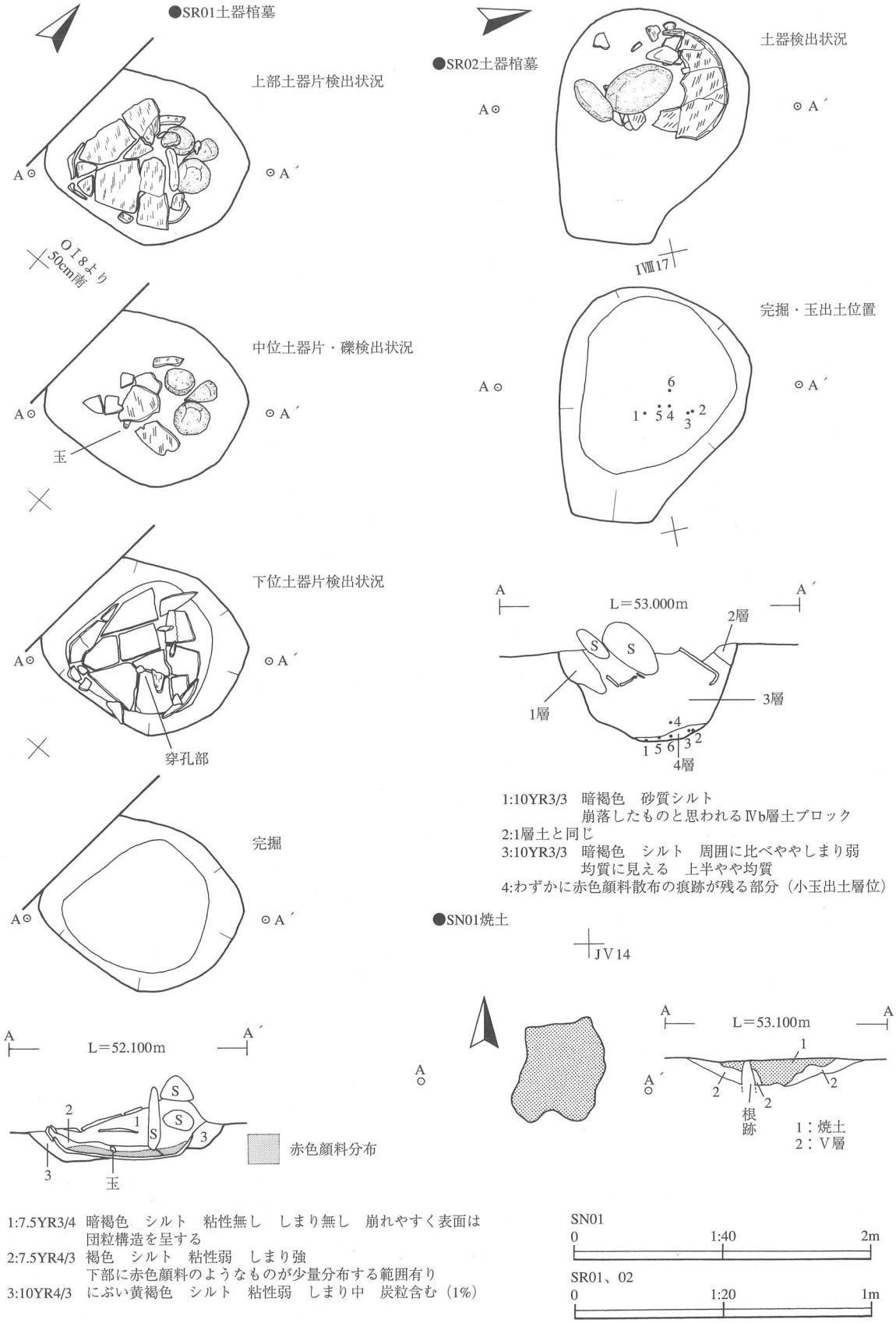
●SK77土坑



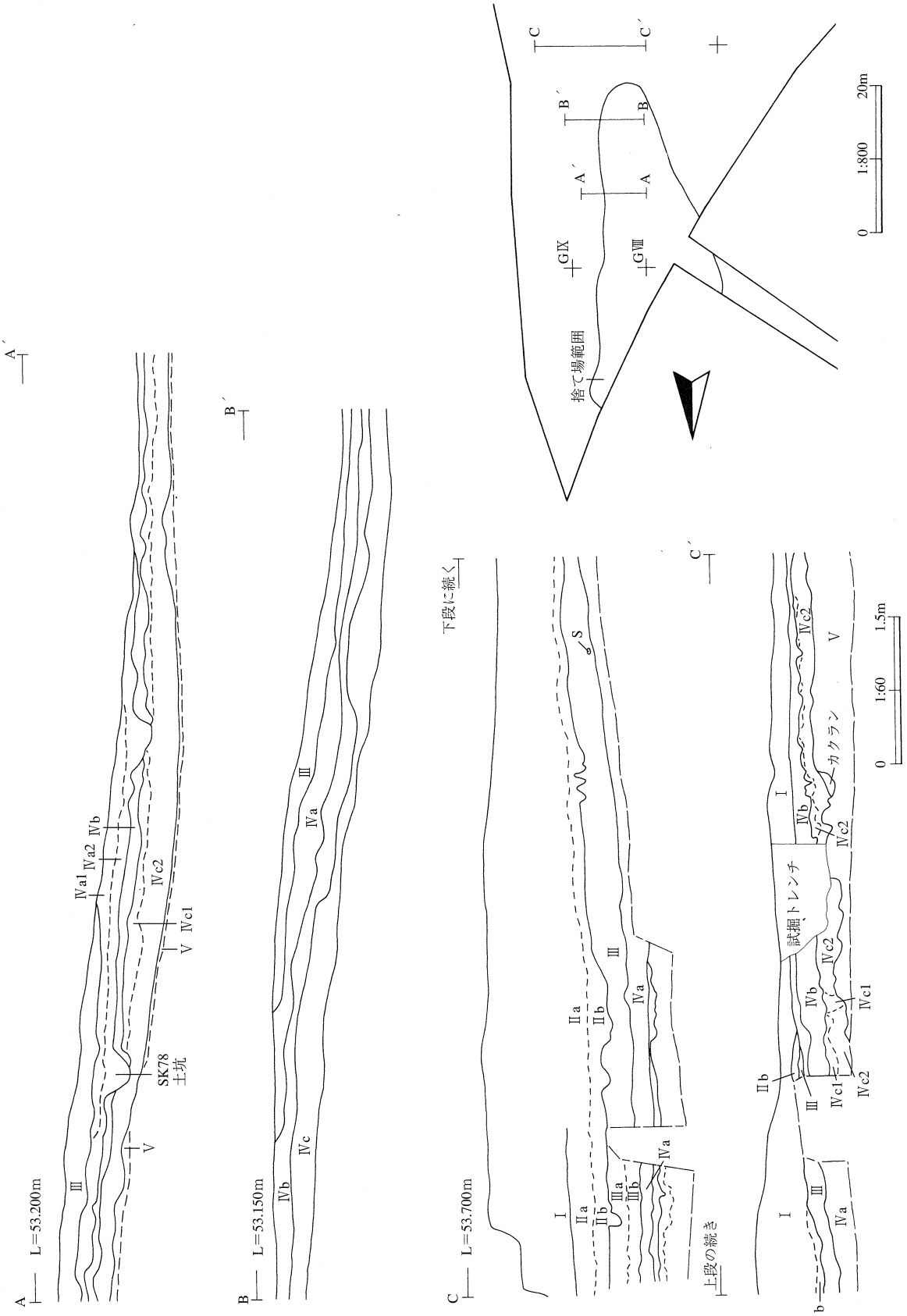
1:10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト



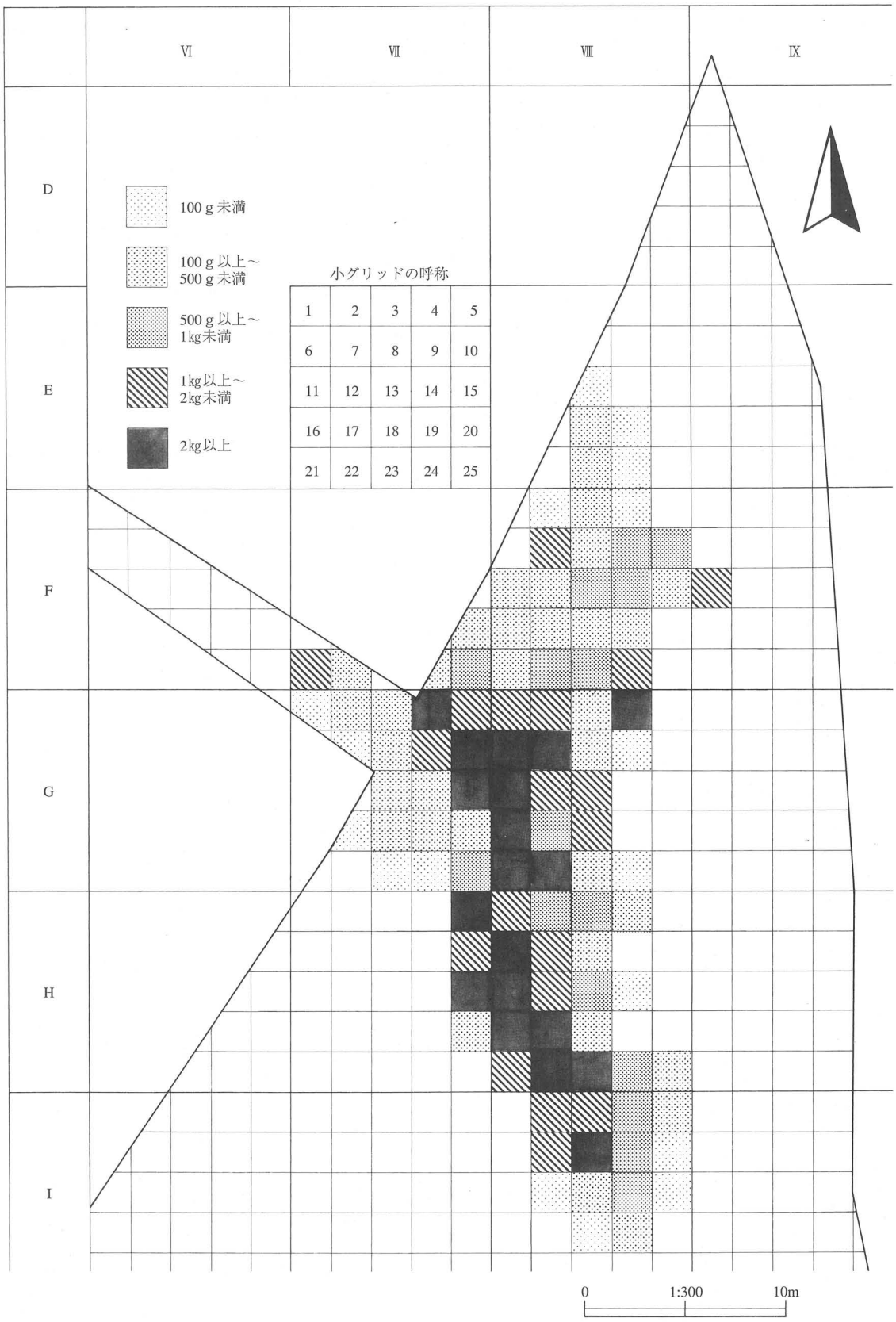
第33図　SK73～SK77土坑



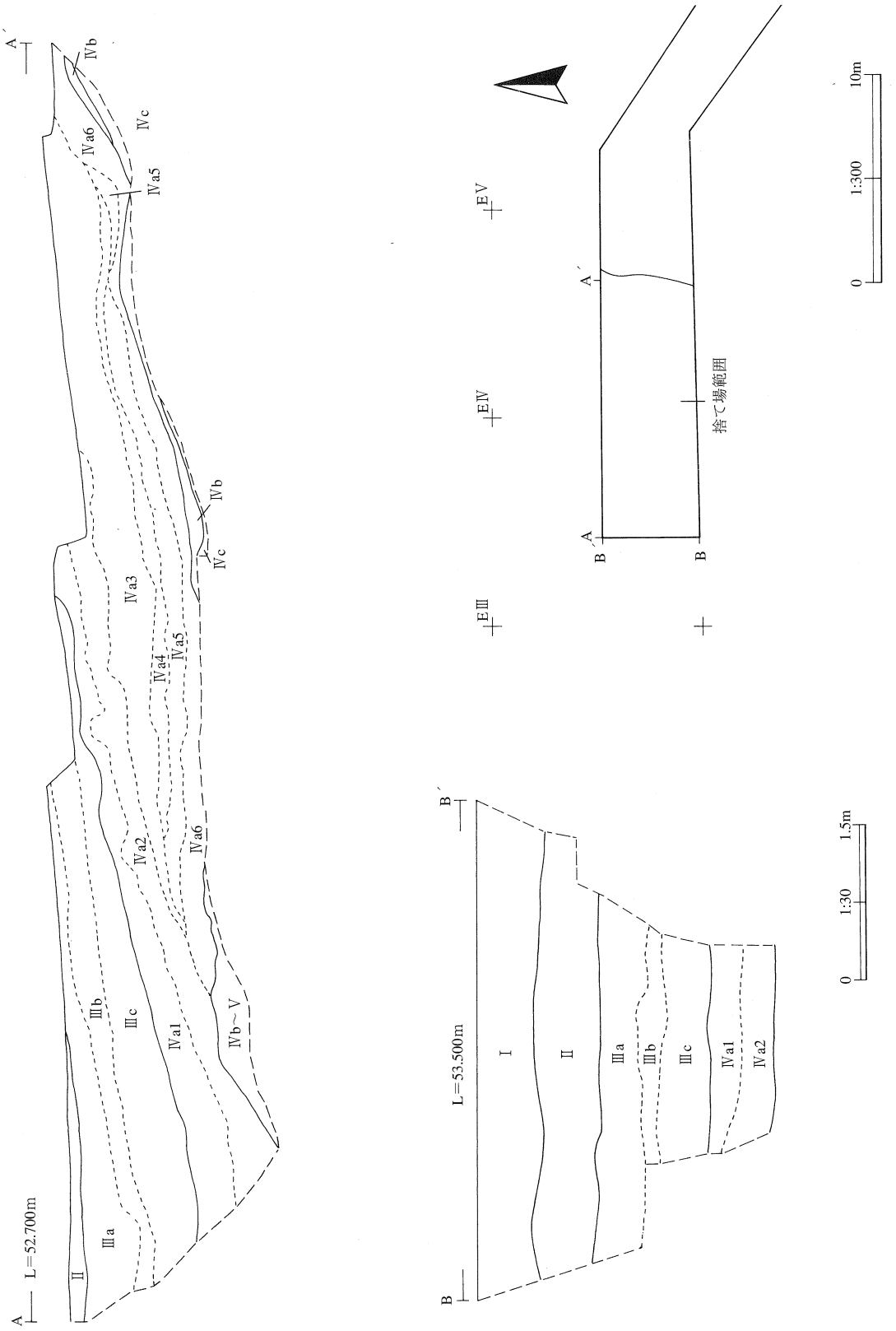
第 34 図　SR01、SR02 土器棺墓、SN01 焼土



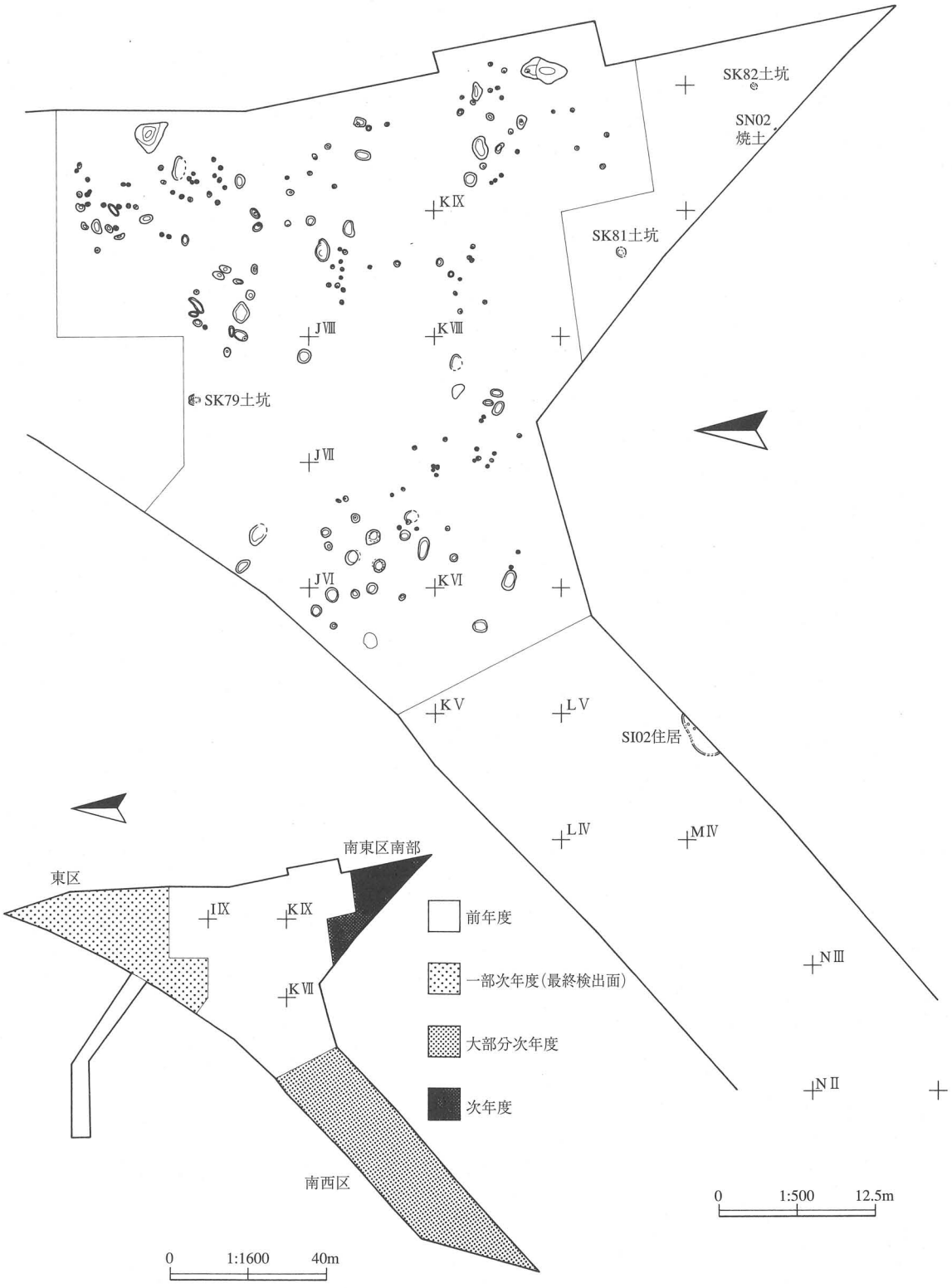
第35図　ST02捨て場



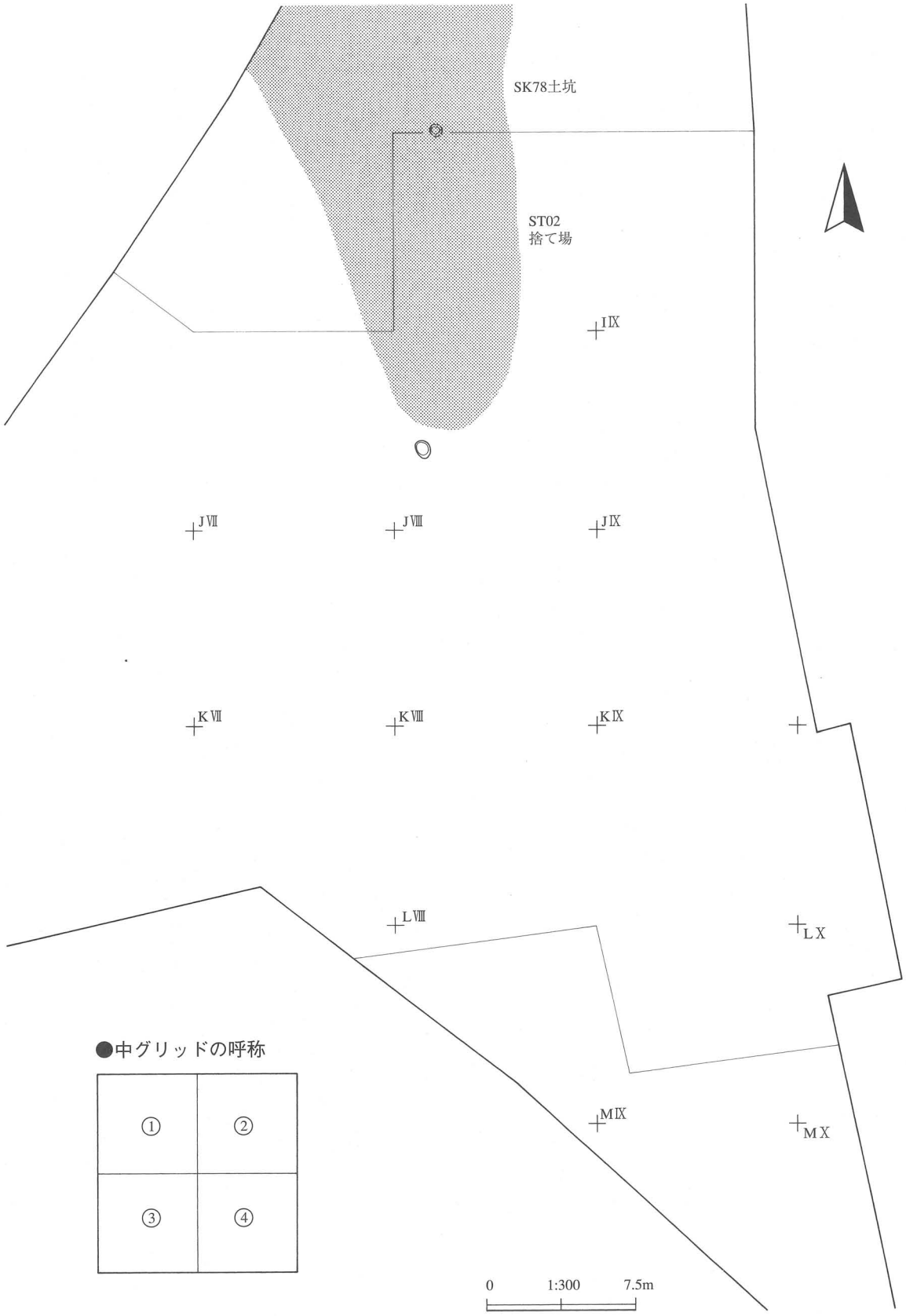
第 36 図　ST02 捨て場土器出土量分布図



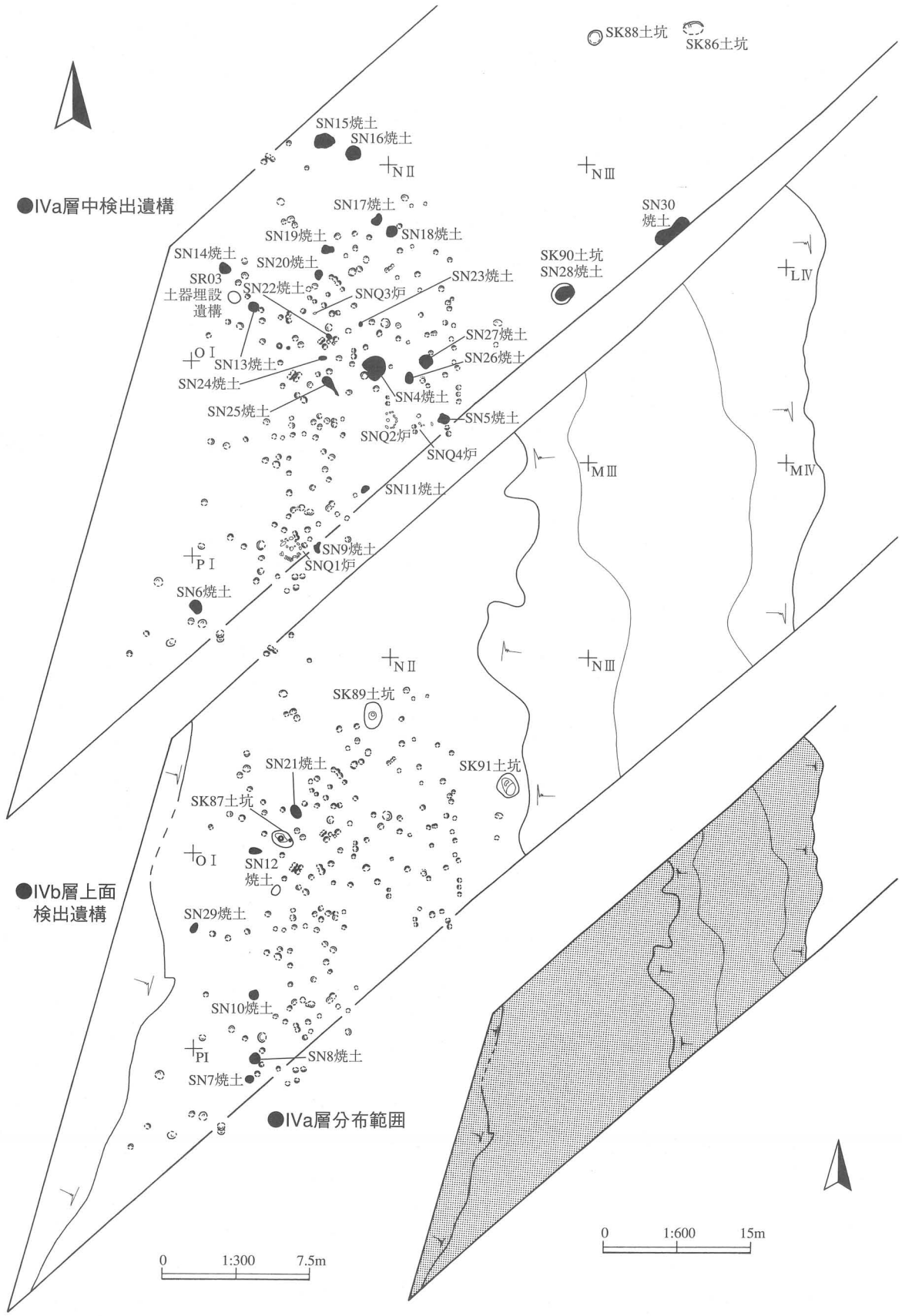
第37図　ST03捨て場



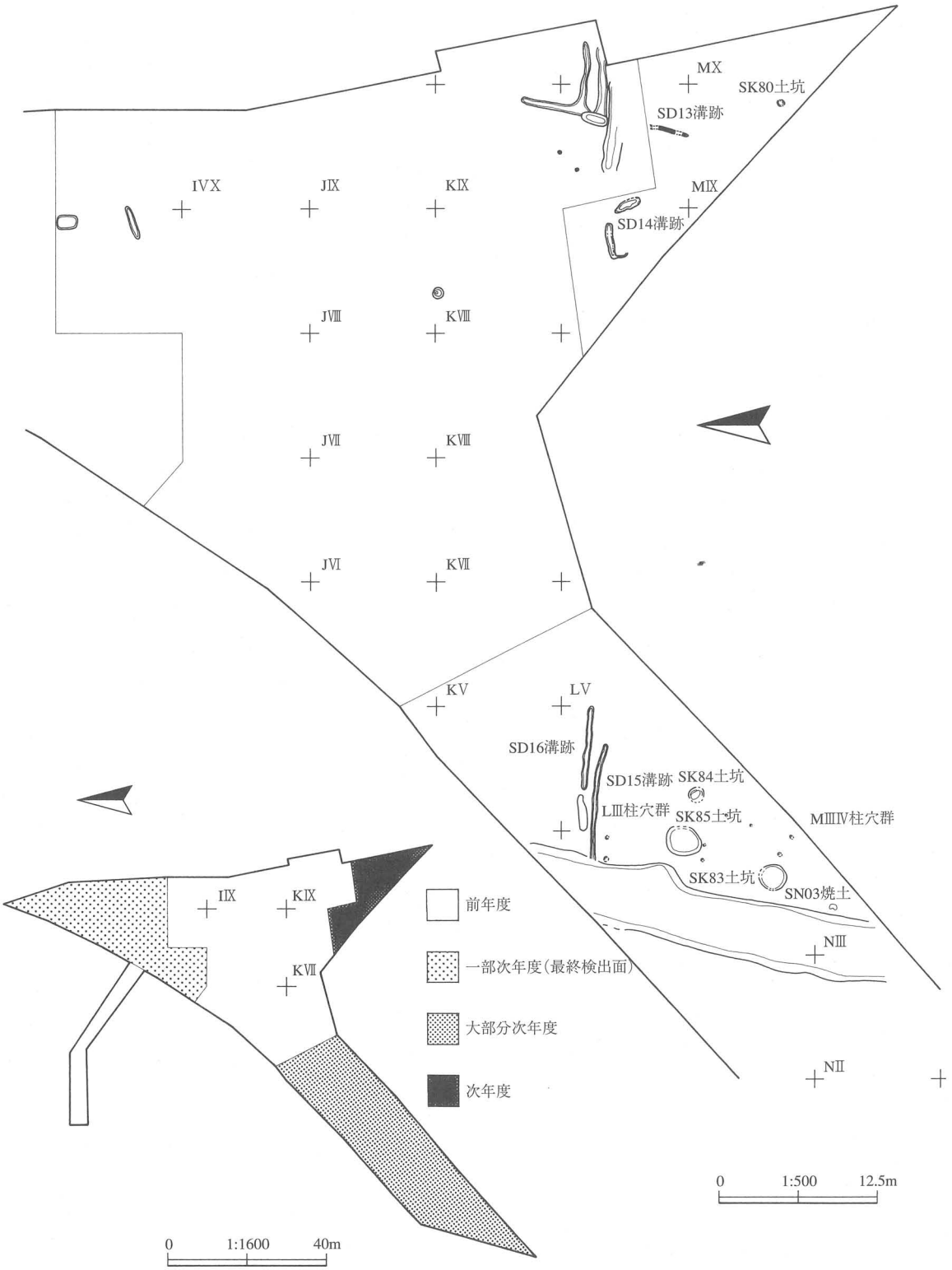
第 38 図　縄文時代中～後期遺構全体図（次年度）



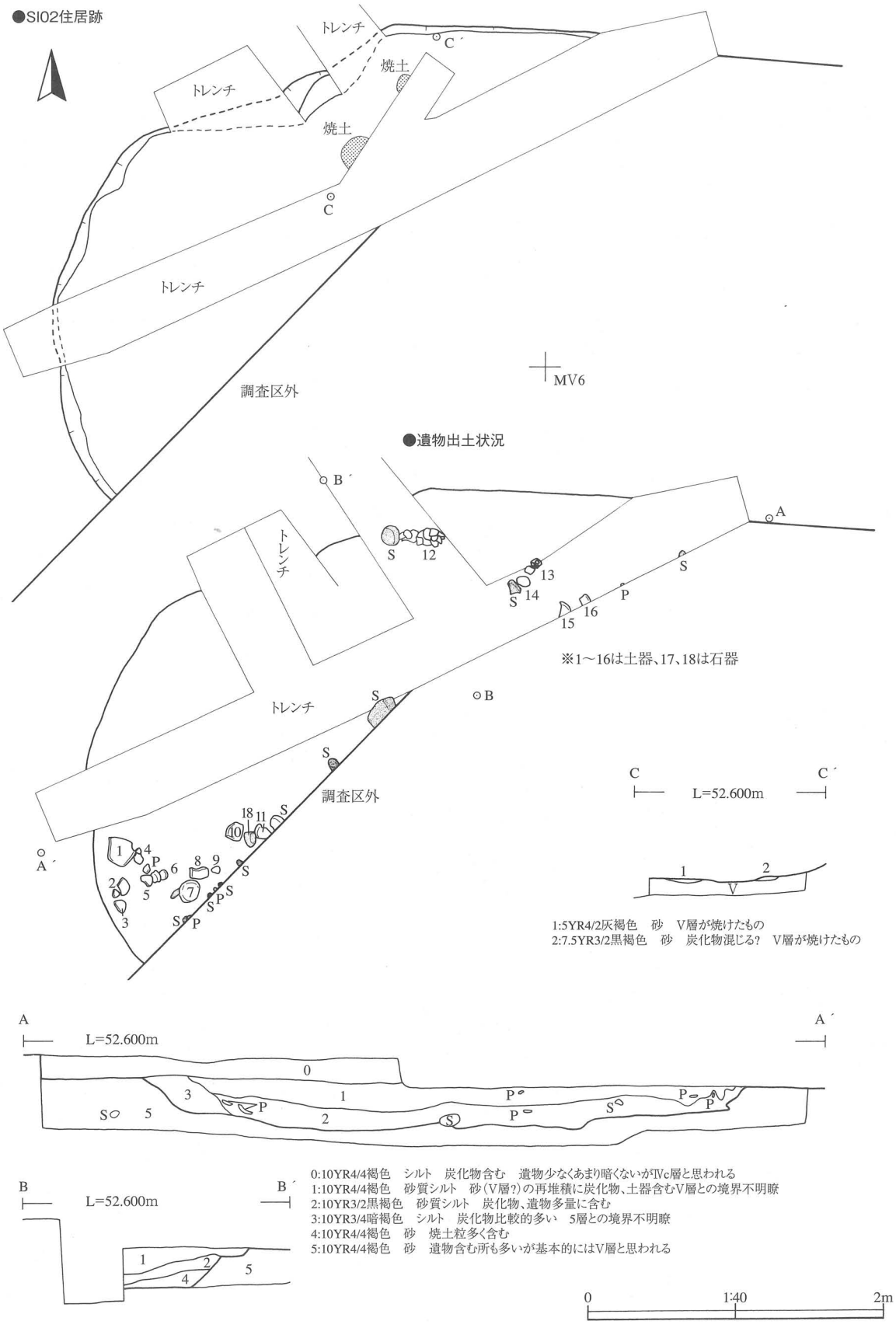
第39図　晩期～弥生時代遺構全体図（1）（東区）（次年度）



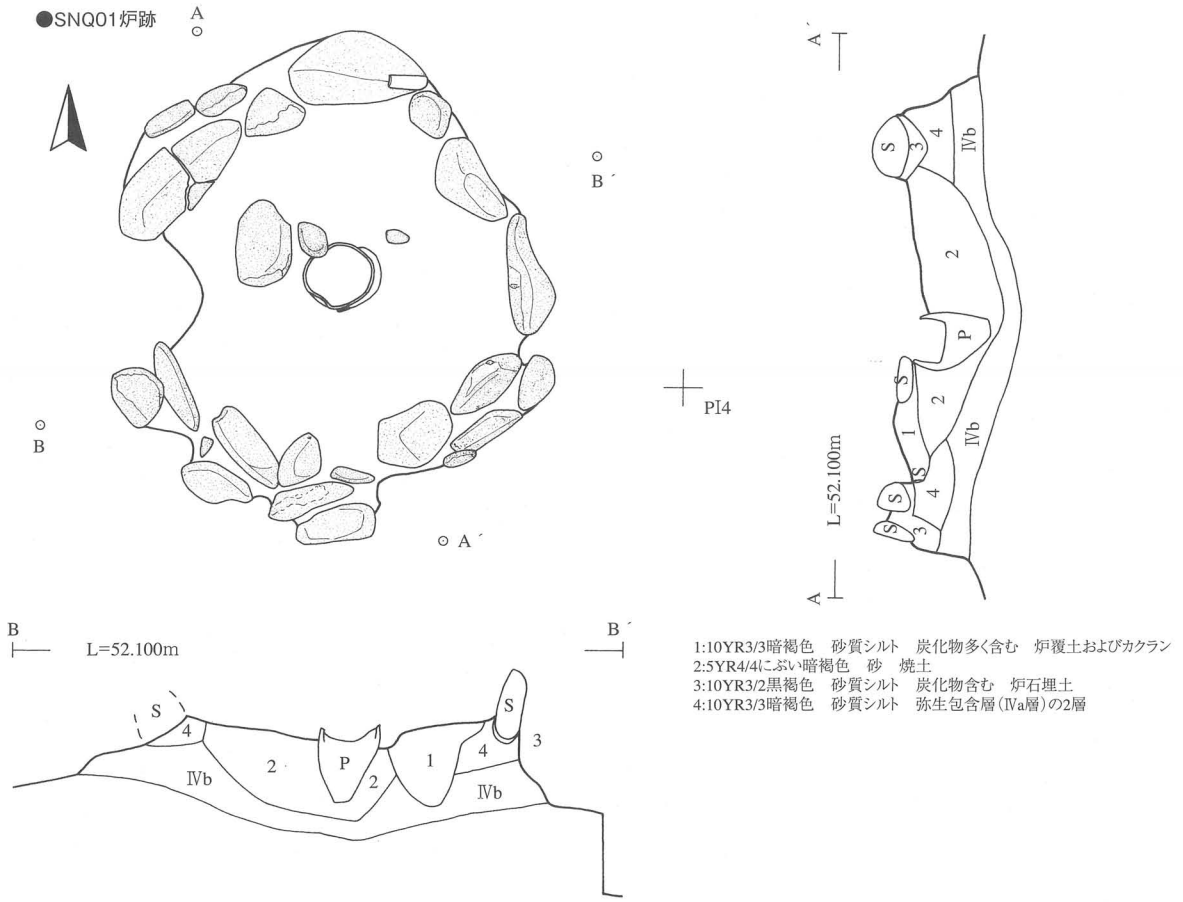
第 40 図　晩期～弥生時代遺構全体図（2）（南西区）



第 41 図　古代～近世遺構全体図（次年度）



第 42 図　SI02 住居跡

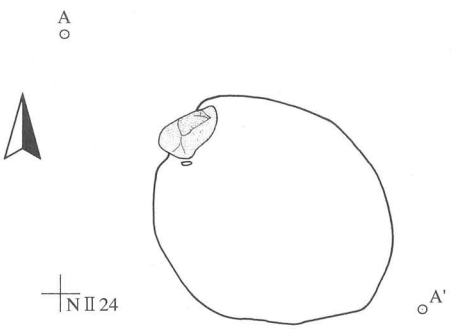


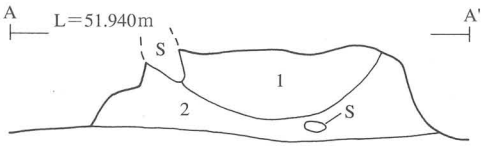
1:10YR3/3暗褐色　砂質シルト　炭化物多く含む　炉覆土およびカクラン
2:5YR4/4にぶい暗褐色　砂　焼土
3:10YR3/2黒褐色　砂質シルト　炭化物含む　炉石埋土
4:10YR3/3暗褐色　砂質シルト　弥生包含層（Ⅳa層）の2層

1:7.5YR4/4褐色　砂　焼土
2:10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　シルト質のⅣb層ブロック、炭化物含む
　3層に似るが淡い　炉石の掘り方埋土か
3:10YR3/1黒褐色　砂質シルト　シルト質のⅣb層ブロック、炭化物含む　弥生包含層の3層
4:10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　Ⅳb層が汚れた部分

第43図　SNQ01・02炉跡

●SNQ03炉跡

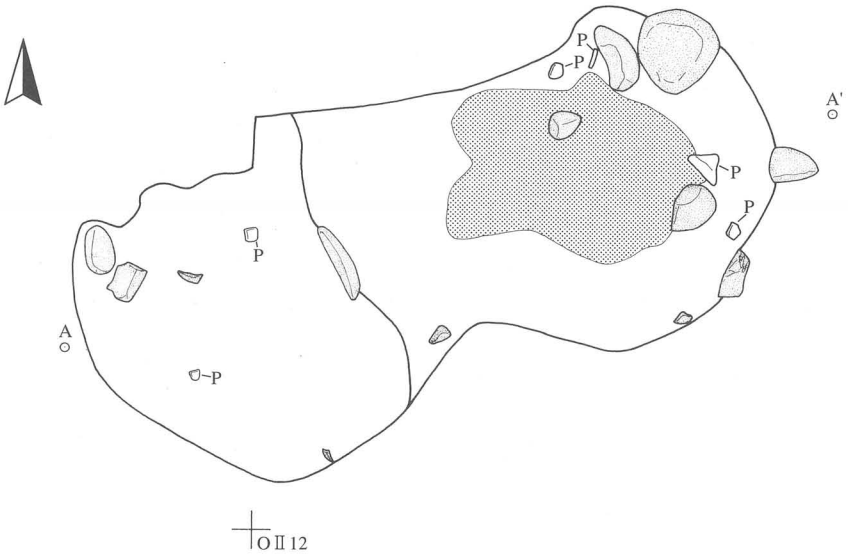


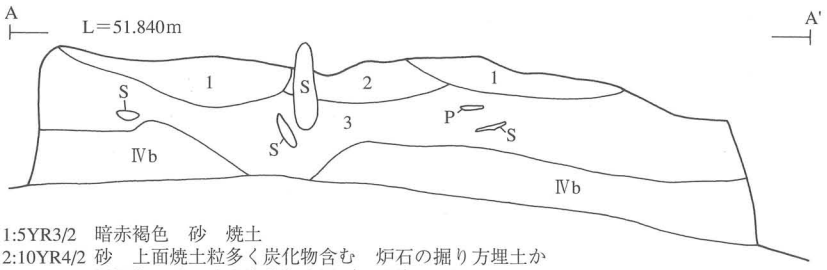


1:7.5YR4/4 褐色　砂　焼土
2:10YR4/2 灰黄褐色　砂　弥生包含層（Ⅳa層）の4層

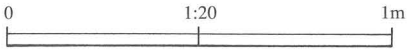
●SNQ04炉跡

●SN05焼土





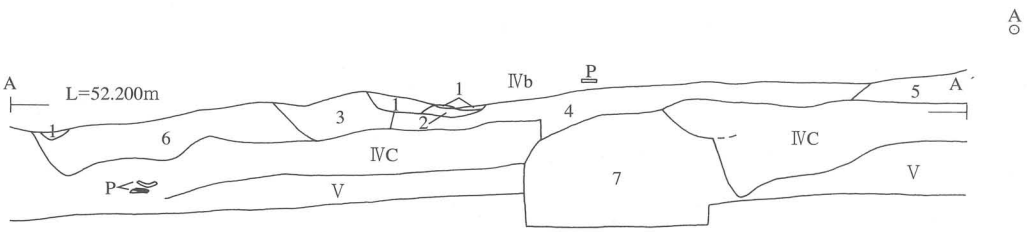
1:5YR3/2　暗赤褐色　砂　焼土
2:10YR4/2 砂　上面焼土粒多く炭化物含む　炉石の掘り方埋土か
3:10YR3/1 黒褐色　砂　弥生遺物包含層（Ⅳa層）の3層



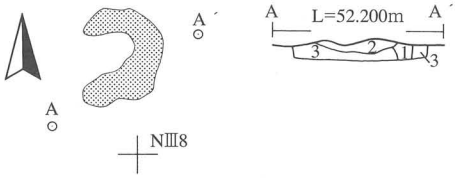
第44図　SNQ03・04炉跡、SN05焼土

●SN02焼土

1:7.5YR4/4褐色　砂　焼土粒、ブロック多く含む　炭化物含む
2:5YR4/3にぶい赤褐色　砂　砂層が火を受けたもの
3:10YR4/2灰黄褐色　砂　炭化物、焼土粒わずかに含む　Ⅳb層が汚れたもの
4:10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト全体的にシルト質で貼床の可能性も考えられるがⅣb層の一部か
5:10YR5/4にぶい黄褐色地に10YR3/2黒褐色混じる　砂　4層に似るが砂　Ⅳb層の一部か
6:10YR3/2黒褐色　砂質シルト　Ⅳb層とⅣc層の漸移層（Ⅳc層に近い）
7:10YR4/4褐色　砂質シルト　Ⅴ層に似るがシルト質強い　風倒木の可能性も考えられるが
周囲に黒土は広がらない

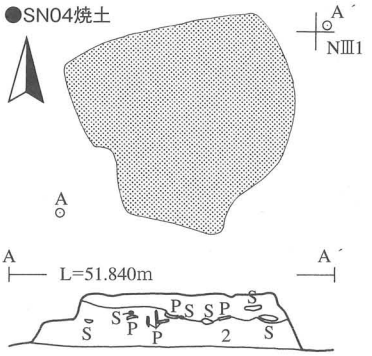


●SN03焼土

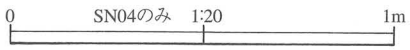


1:10YR4/2（灰黄褐色）地に5YR4/4（にぶい赤褐）色混じる　カクラン
2:5YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土
3:10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　Ⅱb層か

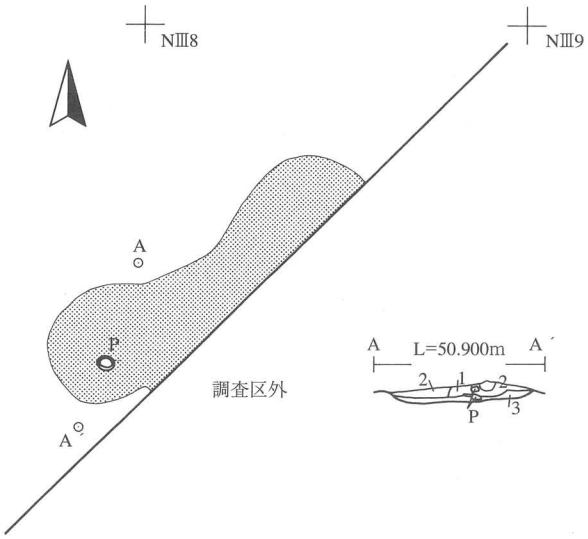
●SN04焼土



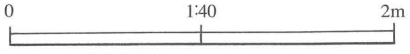
1:5YR4/4にぶい赤褐色　砂　焼土
2:10YR4/2灰黄褐色　砂　炭化物含む　弥生包含層（Ⅳa層）の3層か



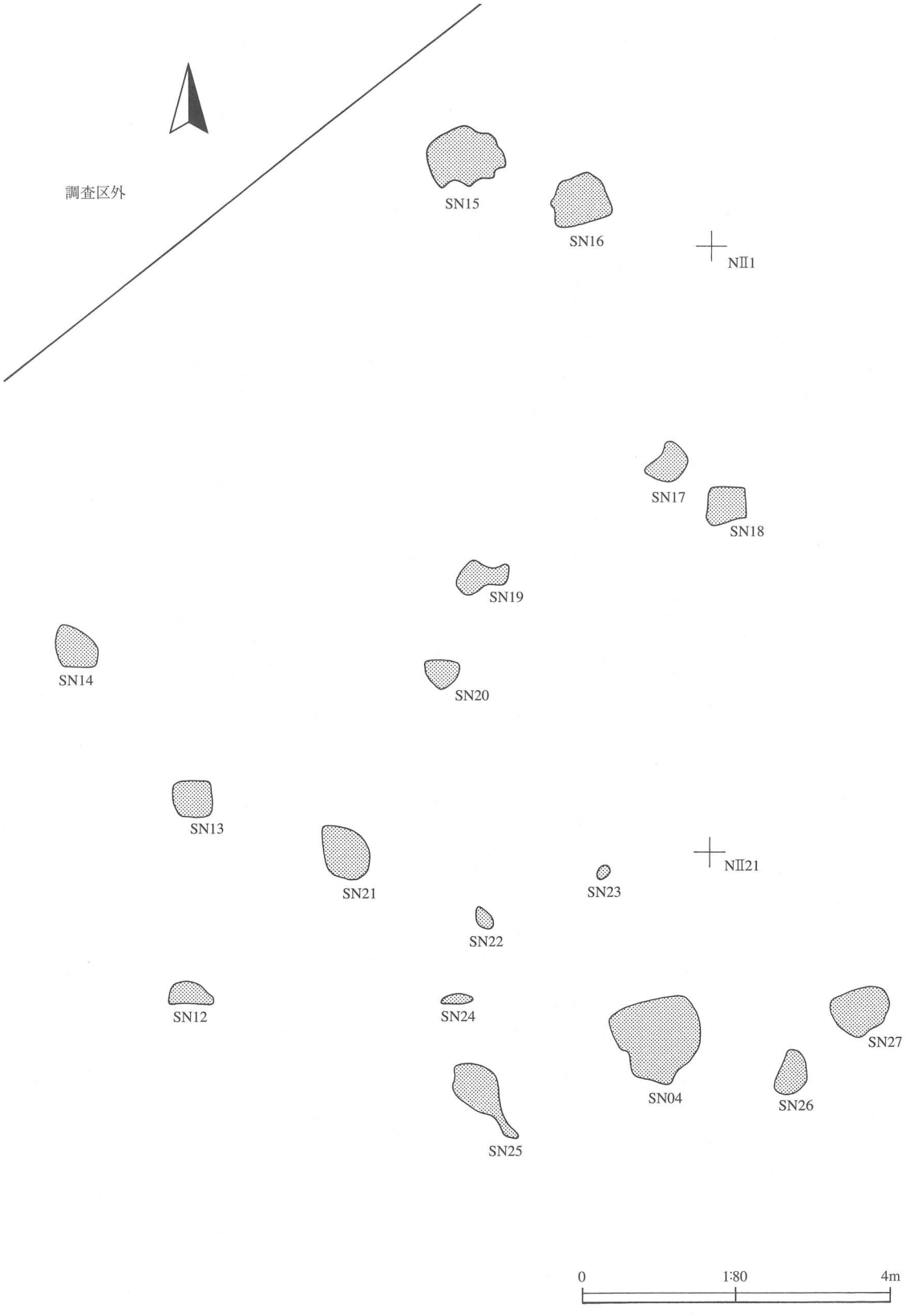
●SN30焼土



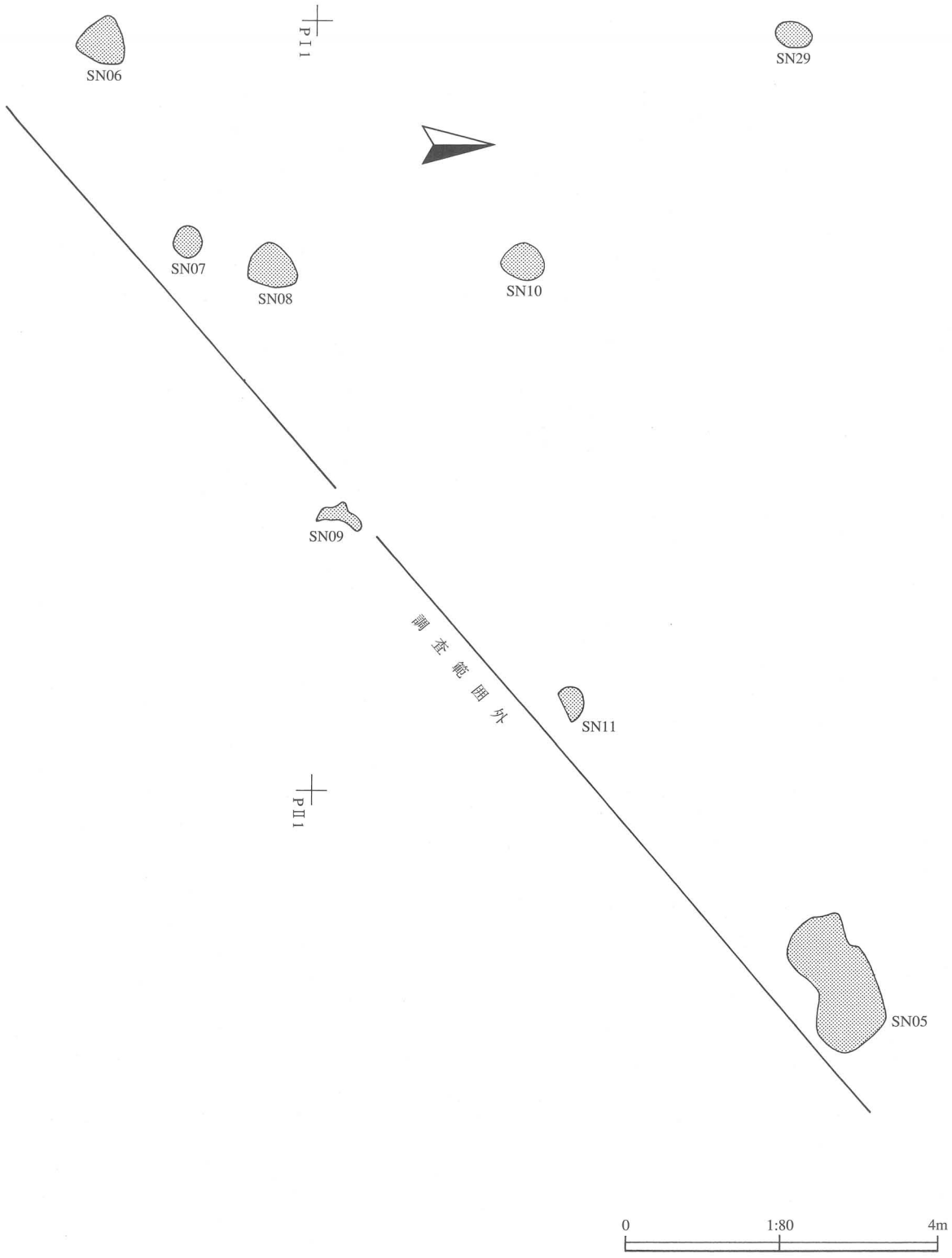
1:10YR3/1（黒褐色）地に7.5YR4/4（褐色）のブロック　シルト　炭化物、灰混じり　撹乱
2:7.5YR4/4褐色　砂　焼土
3:10YR3/2黒褐色　砂　Ⅳa層（2-3b2層）



第45図　SN02～04、30焼土

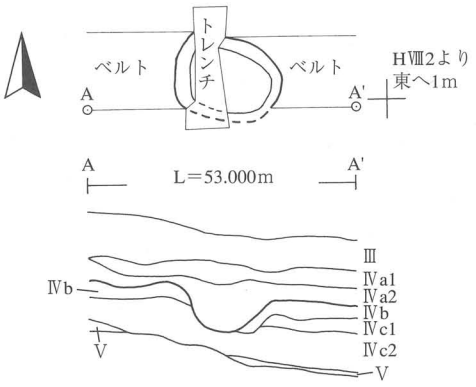


第 46 図　SN04、12 ～ 27 焼土



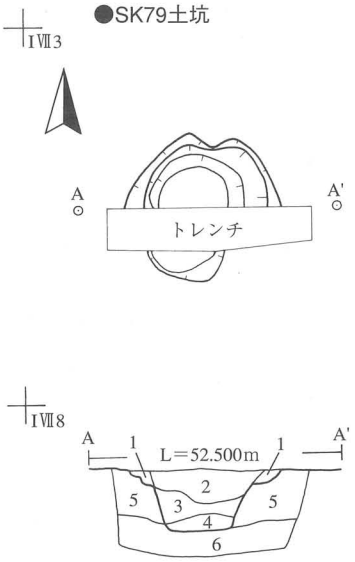
第47図　SN05～11、29焼土

●SK78土坑



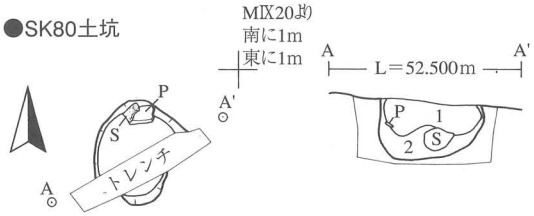
1:10YR2/2黒褐色　シルト　粘性中　しまり強

●SK79土坑



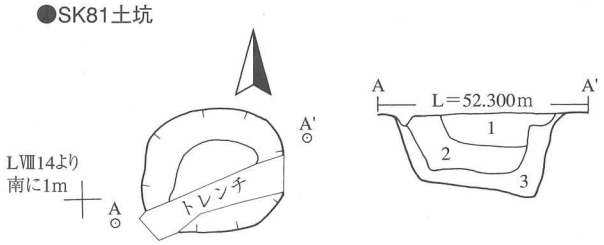
1:10YR5/4（にぶい黄褐色）地に10YR4/2（灰黄褐色）の斑　砂　Ⅴ層再堆積土に2層の土上場が崩れた部分の覆土
2:10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　Ⅴ層粒子含む　Ⅳc層の一部?
3:10YR4/4褐色　粘土質シルト　炭化物わずかに含む　5層が汚れたような土　Ⅳc層の一部?
4:10YR3/1黒褐色　粘土?　5層土含む　Ⅳc層の一部?
5:10YR5/4にぶい黄褐色に一部10YR4/4褐色土入る　砂質シルト　Ⅴ層上面で汚れている部分
6:10YR5/4にぶい黄褐色　砂　Ⅴ層

●SK80土坑



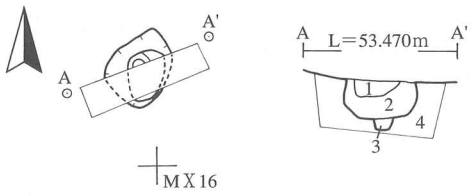
1:7.5Y4/3オリーブ褐色　砂　2層の2.5Y3/1（黒褐色）土ブロック（5~10㎜）含む　Ⅲ層の再堆積か?
2:7.5Y4/3（オリーブ褐色）と2.5Y3/1（黒褐色）の混土　砂質シルト　ブロック状に1層土入る　土器多　礫含む　埋め戻した土か?

●SK81土坑



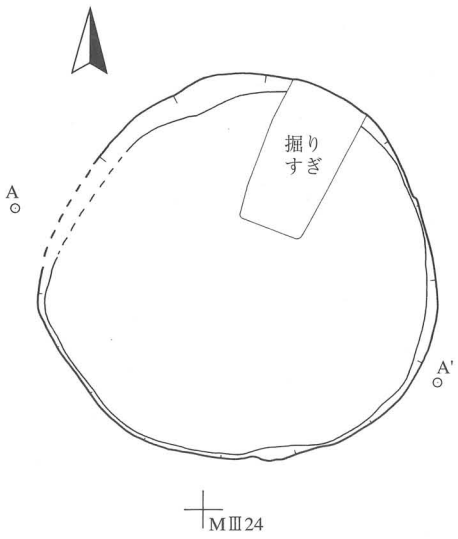
1:10YR3/2　黒褐色　砂　汚れたⅤ層再堆積
2:10YR4/4　褐色　砂質シルト　Ⅴ層と1層の混土
3:Ⅴ層が撹乱を受けて汚れたもの

●SK82土坑

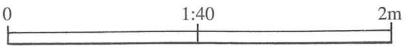


1:10YR3/2黒褐色　砂　3~10㎜大の炭化物多い　Ⅴ層起源の黄色い砂混じる
2:10YR5/4（にぶい黄褐色）地に10YR3/2（黒褐色）のブロック　砂　1層と黒、黄褐色逆転したもの　2㎝大の炭化物もある
3:2層とほとんど同じだが大きな炭化物少ない　より一様に見える
4:Ⅴ層に2層の土が混じったもの（根による撹乱か?）

●SK83土坑

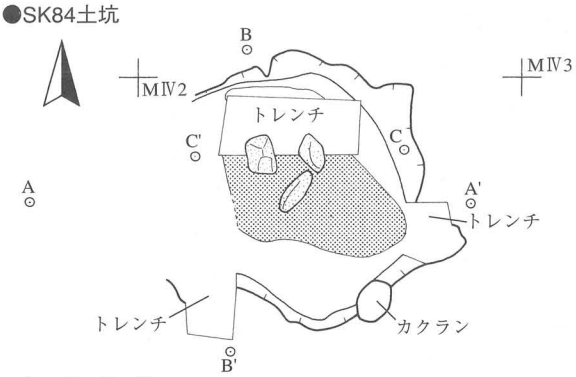


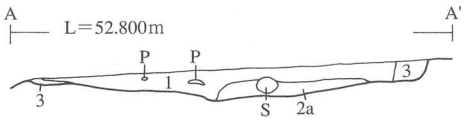
1:10YR4/3にぶい黄褐色　砂　固くしまる　炭化物含む

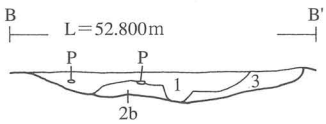


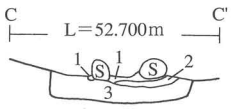
第48図　SK78～83土坑

●SK84土坑









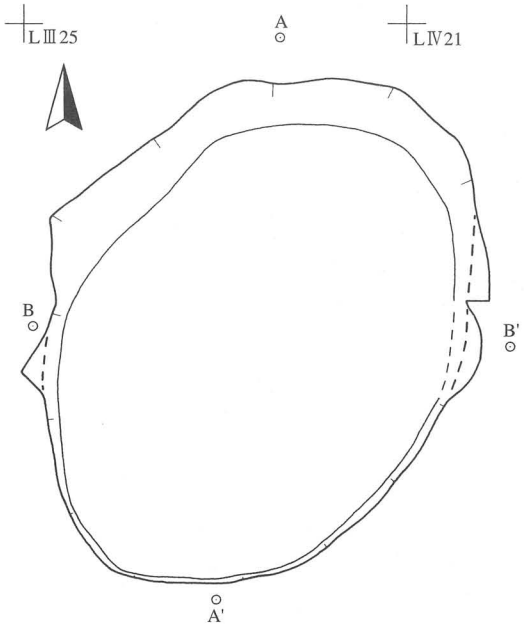
A—A'、B—B'

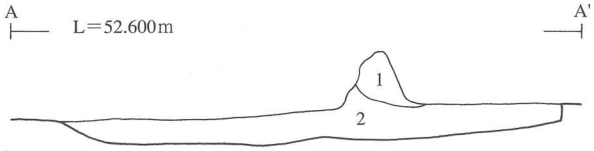
1　:10YR4/2灰黄褐色　砂　2~5㎜の炭化物含む　水田の床土（5Y4/1）散る
2a　:10YR2/2黒褐色　砂　炭化物多く含む　Ⅲ層の再堆積多い
2b　:10YR4/3にぶい黄褐色　砂　2a層と同じと思うがⅢ層の再堆積より多く明るい
※掘った結果2a層と同じだった
3　:10YR4/4（褐色）に5Y4/1（灰色）のブロック（水田の床土）混じる
Ⅲ層上部が水田時の撹乱を受けたもの

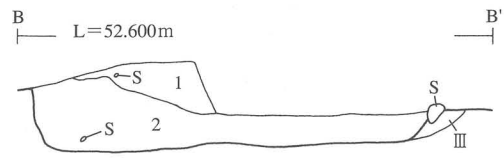
C—C'

1:7.5YR3/2黒褐色　砂　炭化物多く焼土粒含む
2:5YR3/2　暗赤褐色　砂　Ⅲ層（砂）が焼けたもの
3:10YR4/3 にぶい黄褐色　砂　Ⅲ層が汚れたもの

●SK85土坑

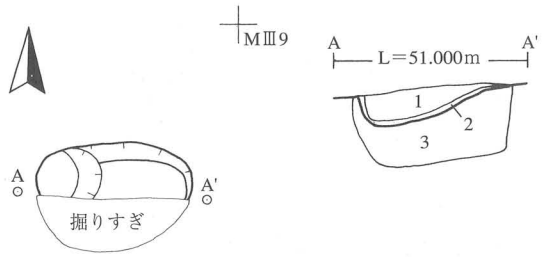






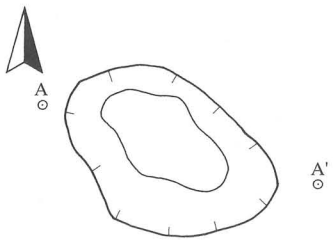
1:10YR2/2黒褐色　砂　径5㎜程度の10YR4/4褐色ブロック含む
周囲に広がるⅡb層より明るい
2:10YR2/2（黒褐色）地に10YR4/4（褐色）の霜降り　砂

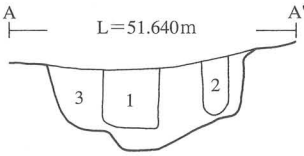
●SK86土坑



1:10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性強
Ⅳb層のシルト質の部分の再堆積にわずかに炭化物散る
2:10YR3/2（黒褐色）地に10YR2/1（黒色）のブロック　シルト　炭化物多く含む
3:10YR3/3暗褐色　砂質シルト
汚れたⅣb層の再堆積に炭化物多く散る　Ⅳa層（2-3b2層?）

●SK87土坑

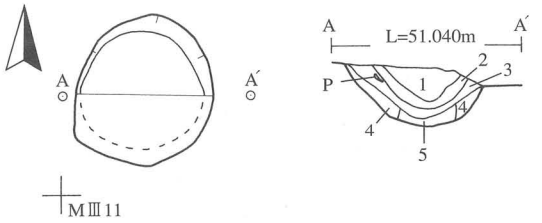




1:10YR3/2黒褐色　砂　炭化物、Ⅳb再堆積土含む　柱穴と思われる
2:10YR3/2（黒褐色）地に10YR4/4（褐色）の斑　砂　炭化物含み、Ⅳb再堆積土も
3:10YR3/3暗褐色　砂　炭化物含む　Ⅳb層がボヤーと汚れた感じ

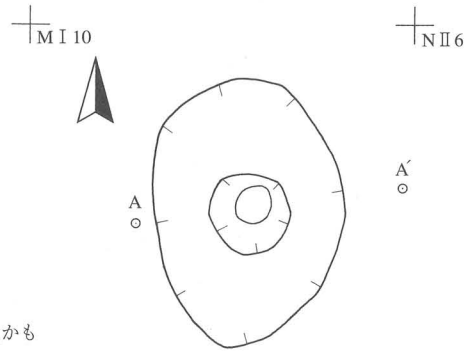
第49図　SK84～87土坑

●SK88土坑

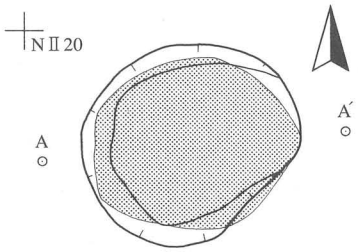


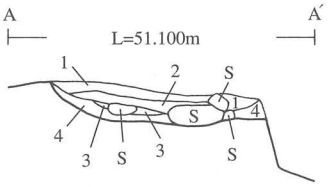
1:10YR4/4褐色　シルト　シルト質のⅣb層の再堆積
2:10YR4/1褐灰色　シルト　1層がグライ化したものか（周囲に酸化かも）
3:10YR2/2黒褐色　シルト　炭化物多
4:10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　弥生包含層（2-3b2層～3上層?）
5:10YR4/1褐灰色　シルト　4層が水につかって?グライ化したもの　周囲に酸化かも

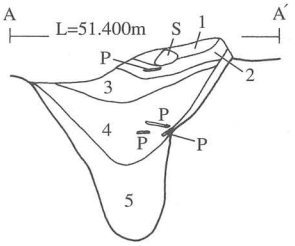
●SK89土坑



●SK90土坑（上面SN28焼土）



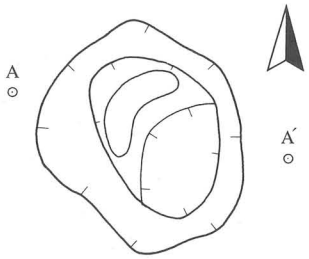


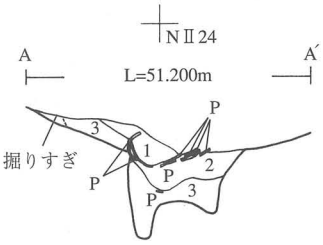


1:7.5YR4/4 褐色　砂　SN28焼土
2:10YR1.7/1黒色　シルト　炭化堅果類の層
3:7.5YR3/2 黒褐色　砂　非常にもろい　焼土
4:7.5YR3/1 黒褐色　シルト　炭化物含む

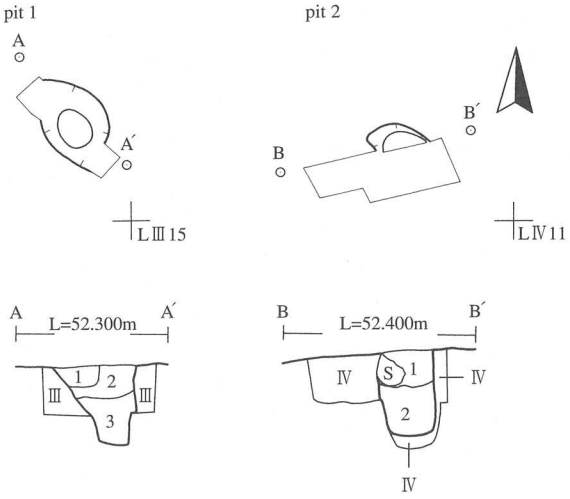
1:7.5YR4/6褐色　シルト　SN17焼土　一部Ⅳb層再堆積含む
2:10YR3/2 黒褐色　砂質シルト　灰～炭化物層に　Ⅳb層再堆積含む
3:10YR4/6 褐色　砂質シルト　シルト質Ⅳb層の再堆積（人為堆積?）
4:10YR3/2 黒褐色　砂　炭化物多く、一部Ⅳb層再堆積含む
5:10YR4/2 灰黄褐色　砂　Ⅳb層再堆積

●SK91土坑





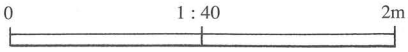
●LⅢ柱穴群



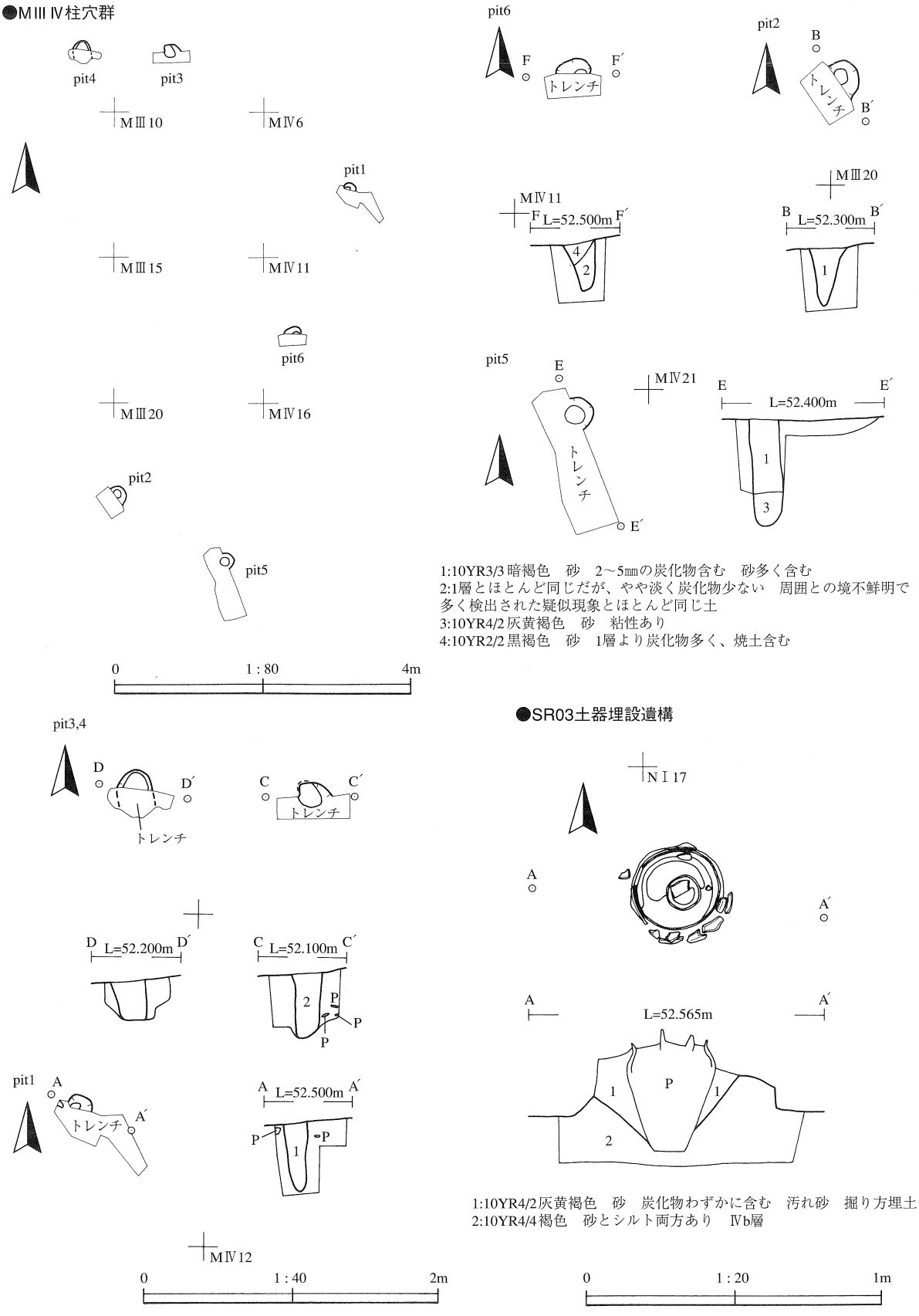
1:10YR4/1褐灰色　砂　Ⅲ層粒子多
2:10YR3/1黒褐色　砂　Ⅲ層粒子多
3:10YR3/2黒褐色　砂　ややシルト質　Ⅲ層粒子多

1:10YR3/1黒褐色　砂　Ⅲ層粒子含む　LⅢpit1よりずっと黒い
2:10YR3/2黒褐色　砂　ややシルト質

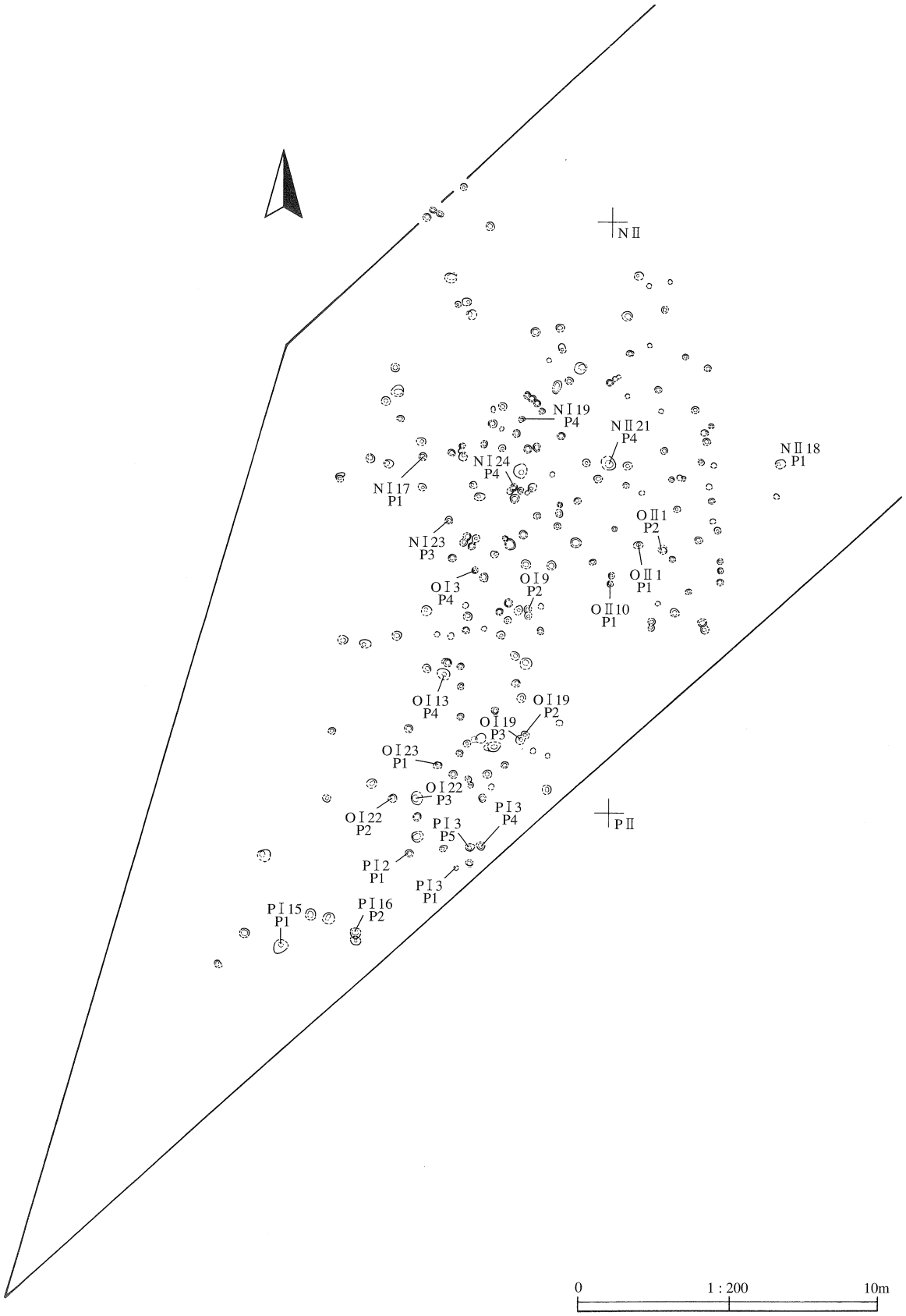
1:10YR3/1（黒褐色）と10YR4/4（褐色）の混土　砂　炭化物多く含む
2:10YR4/4（褐色）地に10YR3/1（黒褐色）混じる　シルト　炭化物含む
3:10YR3/3暗褐色　砂質シルト　炭化物わずかに含む　汚れ砂再堆積



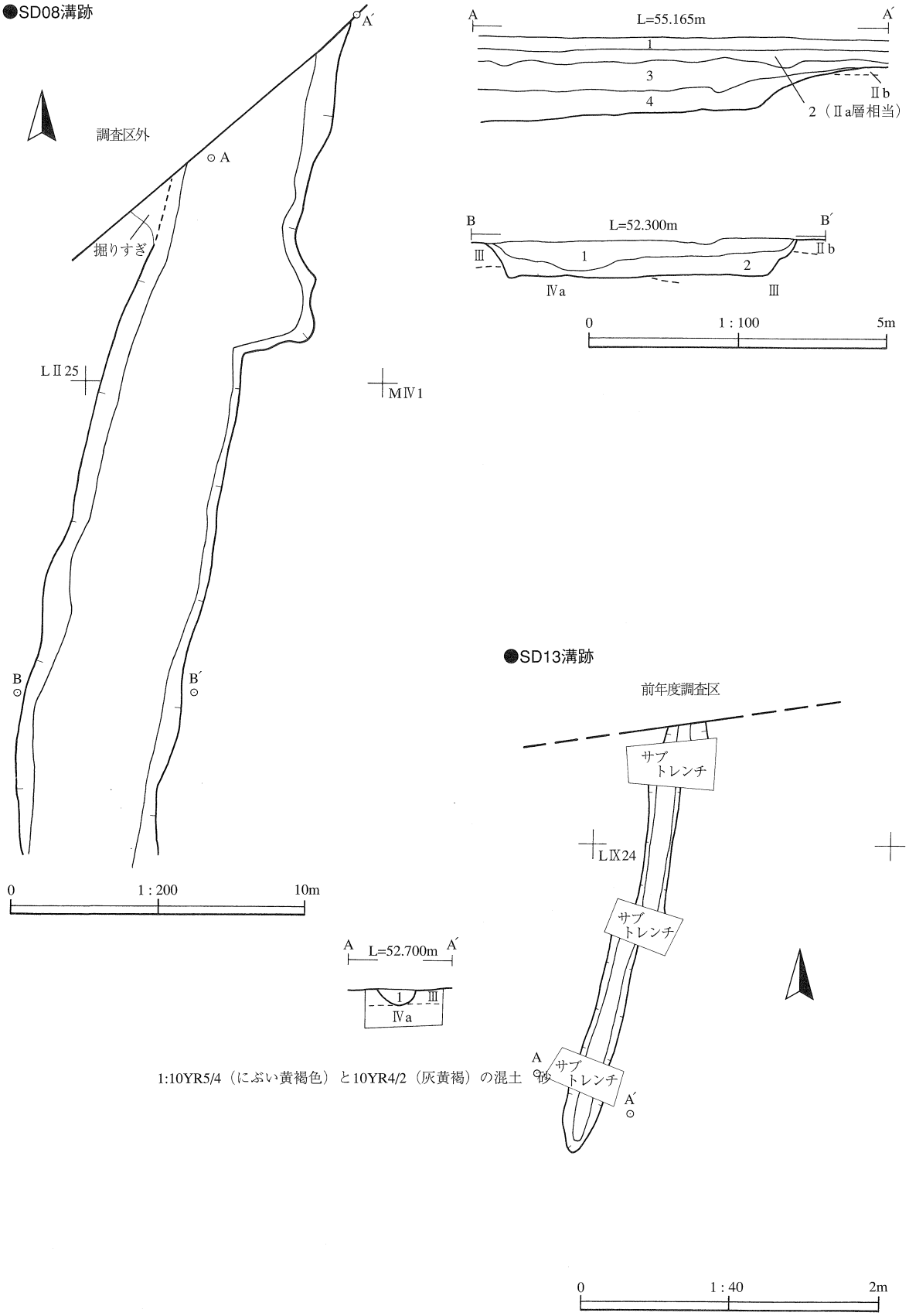
第50図　SK88～91土坑、SN28焼土、LⅢ柱穴群



第51図　MⅢⅣ柱穴群、SR03土器埋設遺構

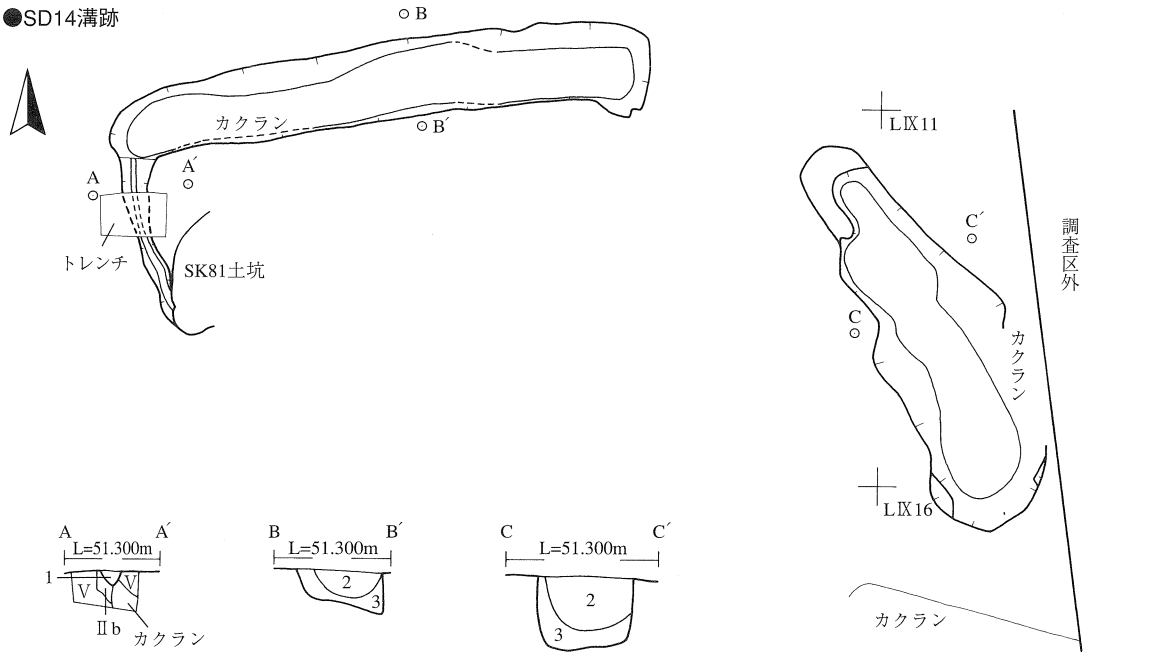


第 52 図　縄文晩期以降自然堤防上柱穴群



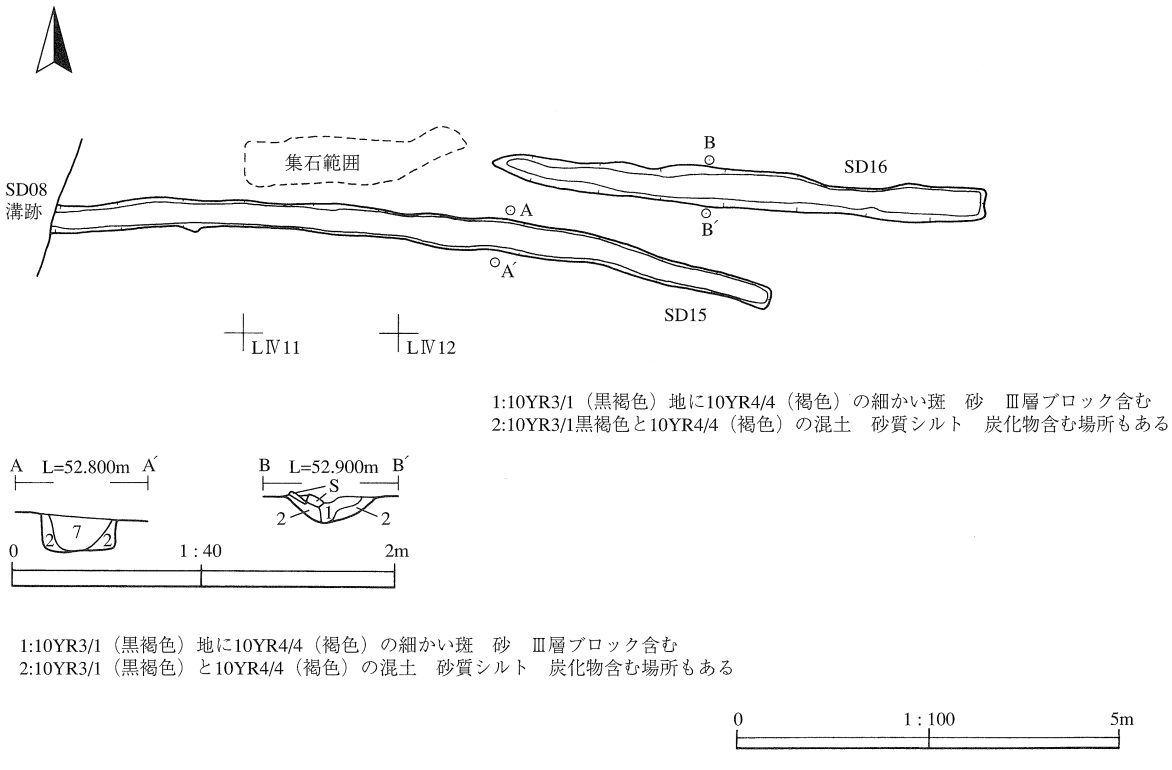
第53図　SD08、13溝跡

●SD14溝跡



1:10YR4/4 （褐色）地に10YR3/2（黒褐色）のシミ　砂　V層が汚れたもの?
2:10YR3/2 黒褐色　砂質シルト　II層あるいはIVc層に似る
2b:10YR3/2（黒褐色）と10YR4/4（褐色）の斑　砂質シルト
　2層に10YR4/4褐色の砂が入ったもの
3:10YR3/2 （黒褐色）と10YR4/4（褐色）の混土　砂質シルト
　V層の再堆積に2層の土が混じったもの

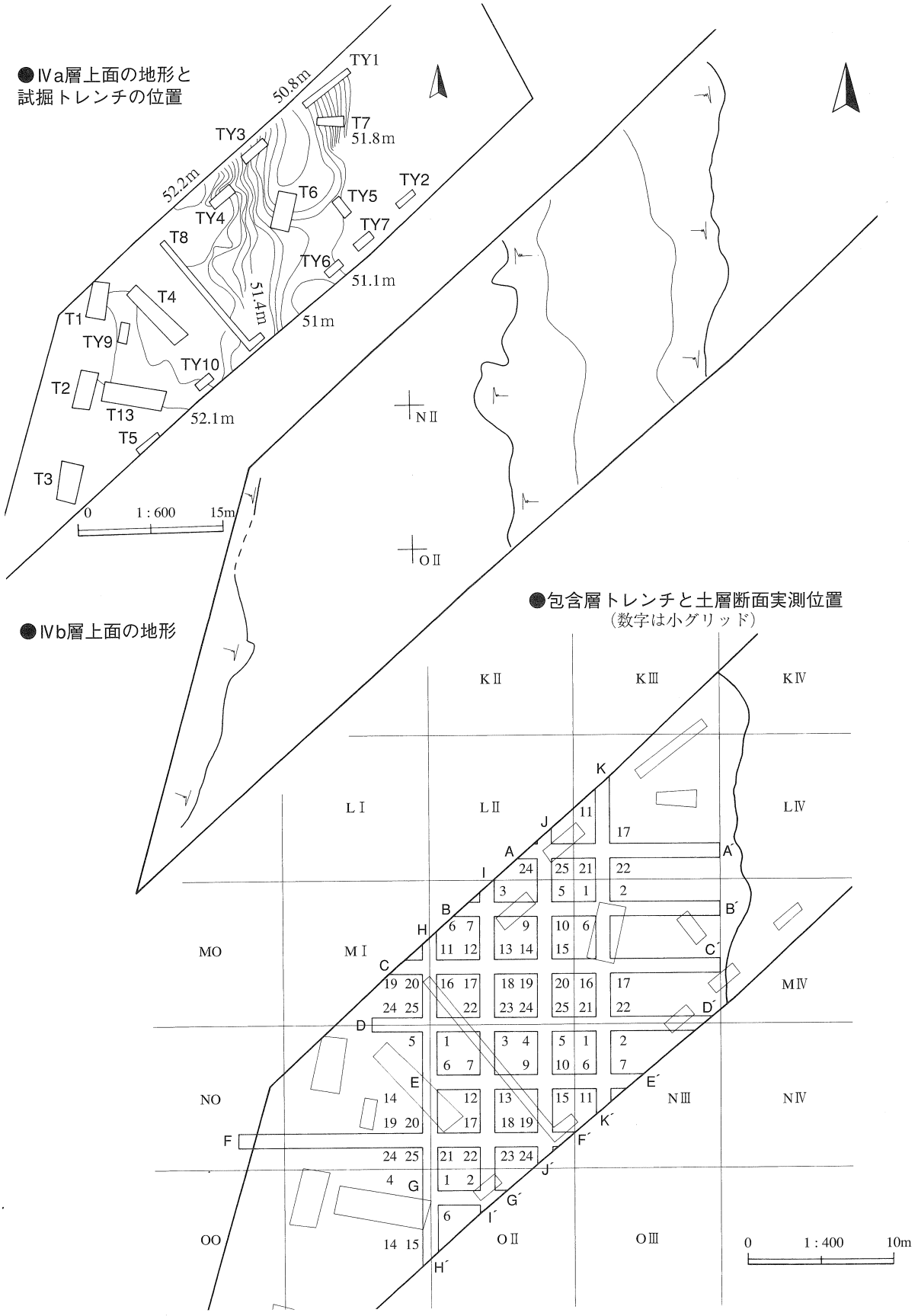
●SD15・16溝跡



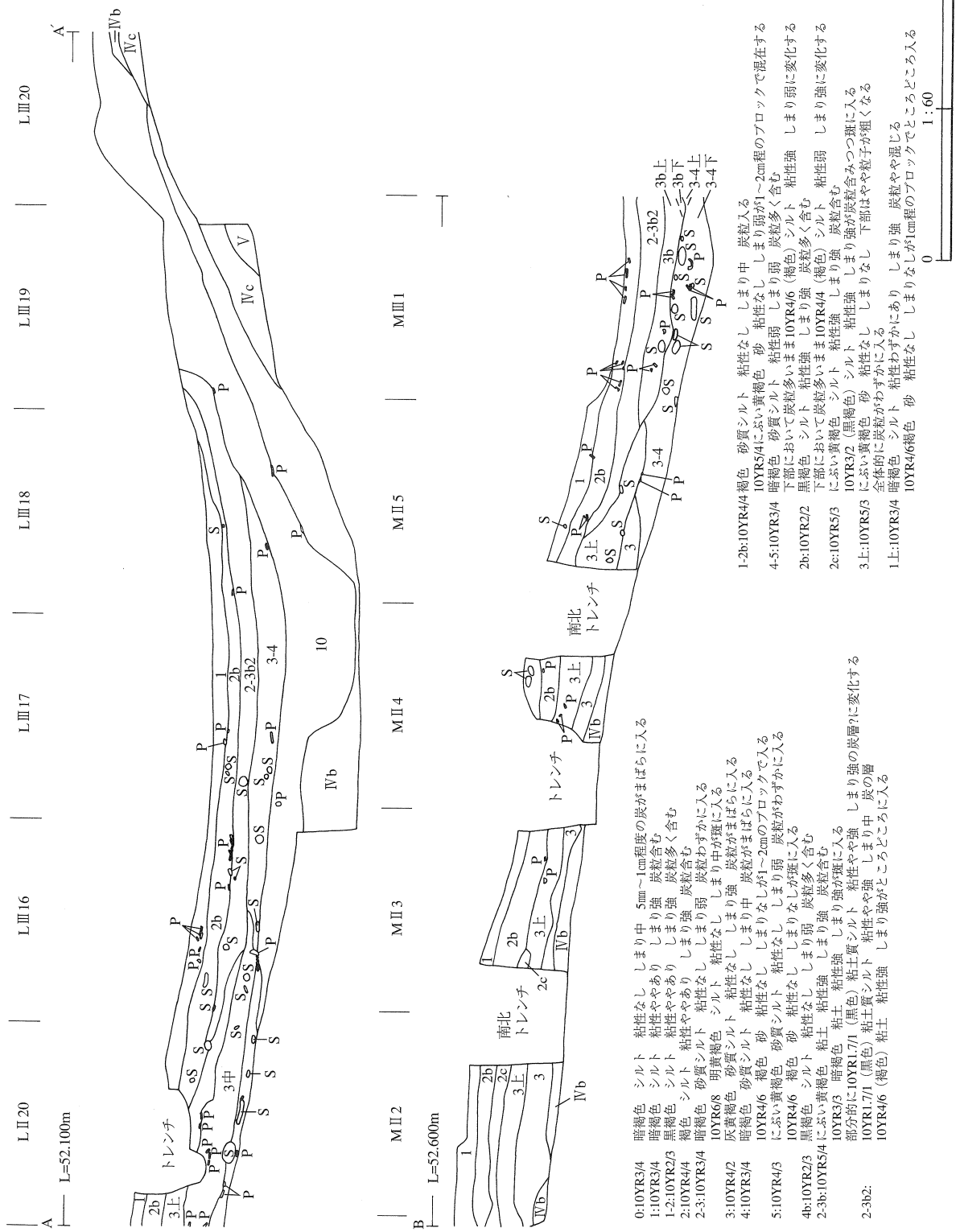
1:10YR3/1（黒褐色）地に10YR4/4（褐色）の細かい斑　砂　III層ブロック含む
2:10YR3/1黒褐色と10YR4/4（褐色）の混土　砂質シルト　炭化物含む場所もある

1:10YR3/1（黒褐色）地に10YR4/4（褐色）の細かい斑　砂　III層ブロック含む
2:10YR3/1（黒褐色）と10YR4/4（褐色）の混土　砂質シルト　炭化物含む場所もある

第54図　SD14～16溝跡

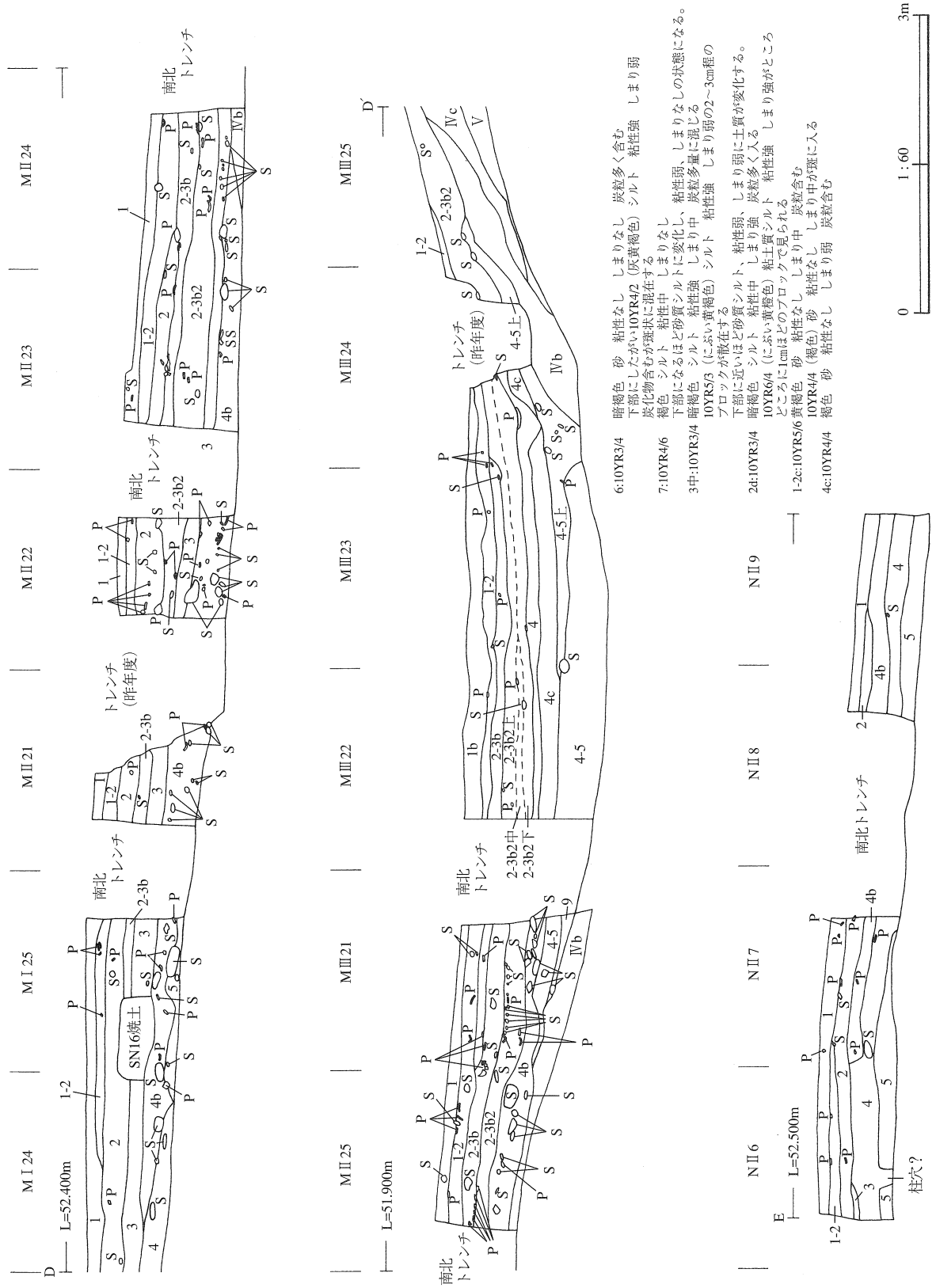


第55図　ST01 捨て場（1）

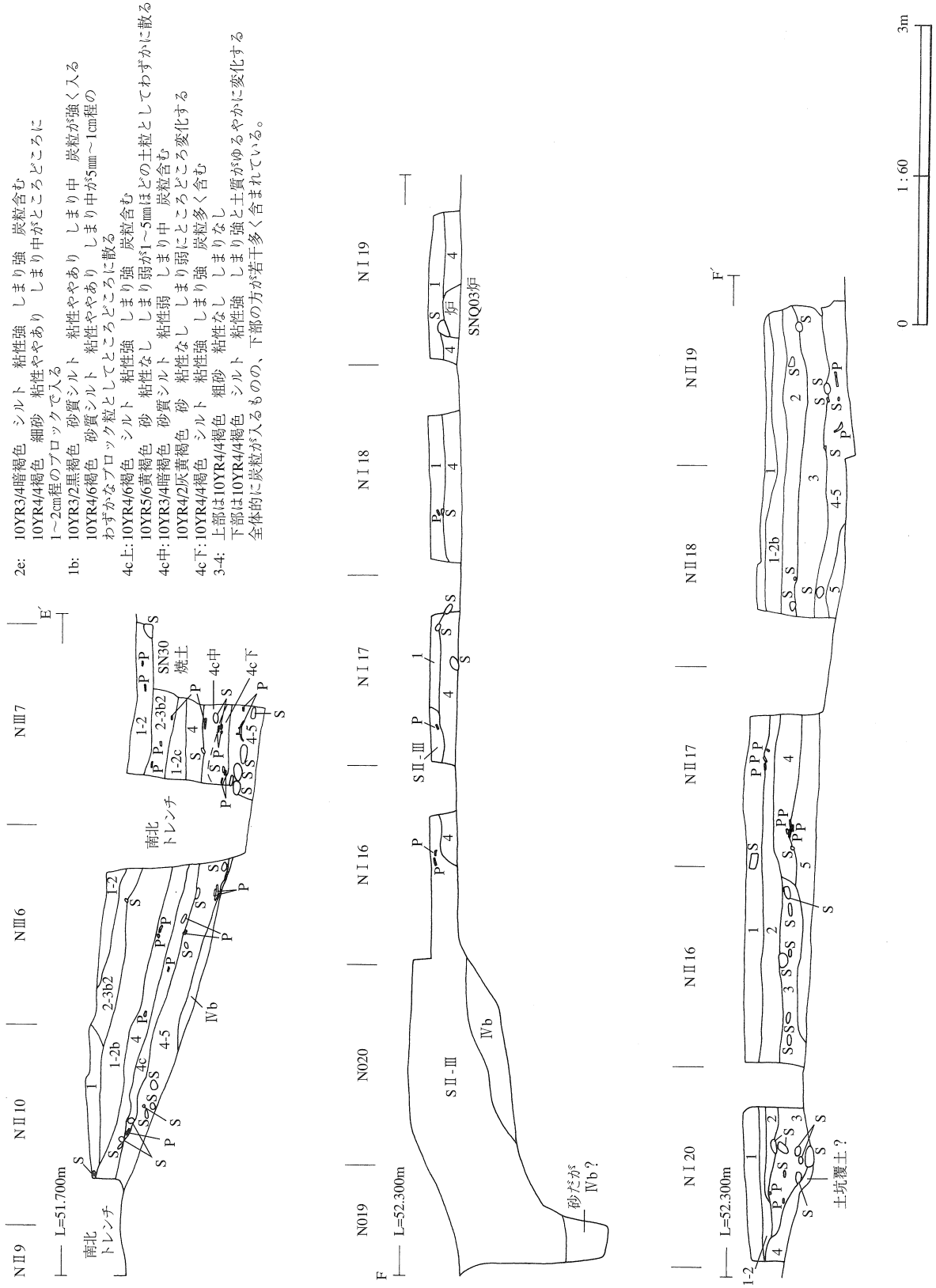


第 56 図　ST01 捨て場（2）（実測位置は第 55 図）

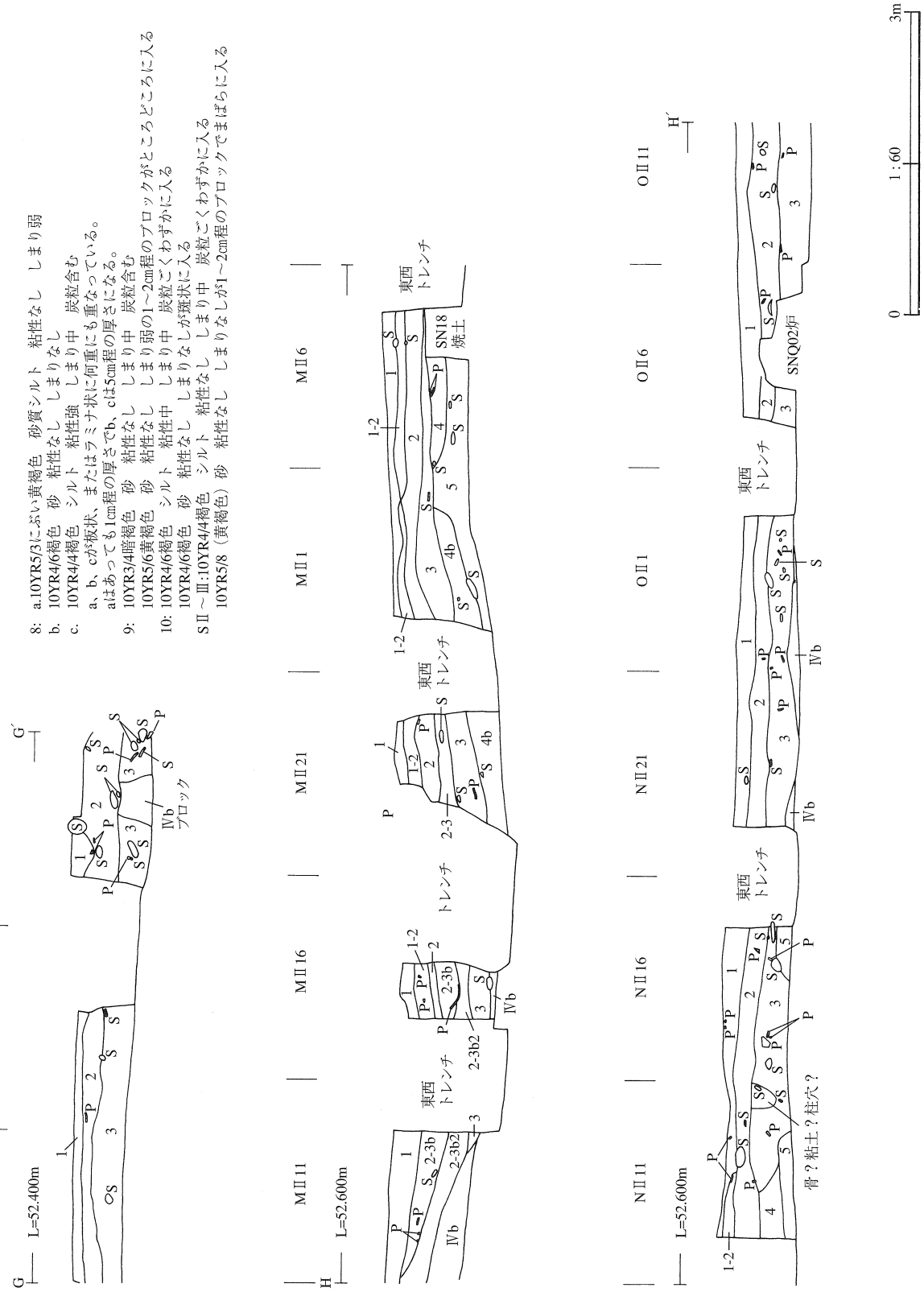
第 57 図　ST01 捨て場（3）（実測位置は第 55 図）



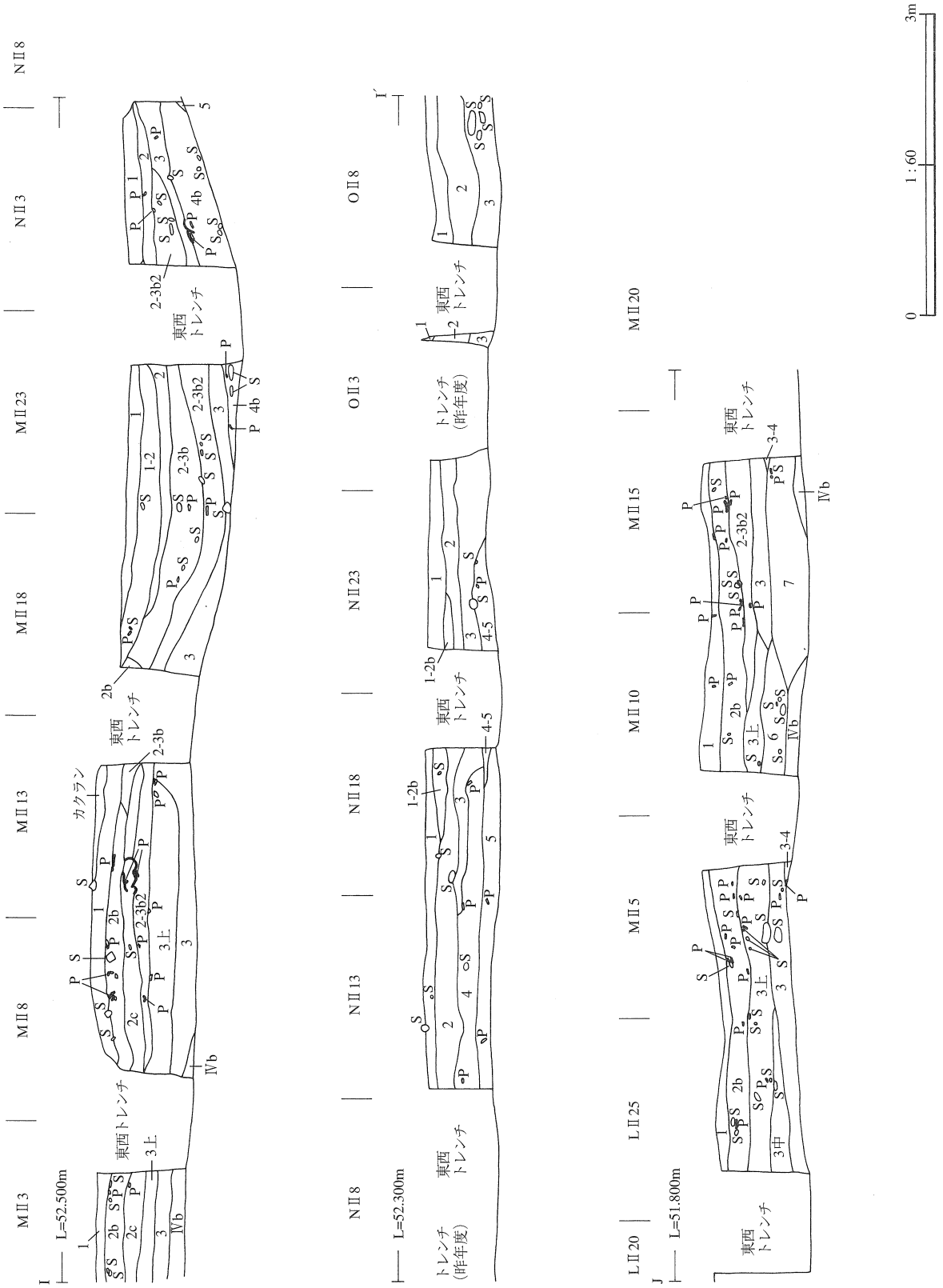
第58図　ST01捨て場（4）（実測位置は第55図）



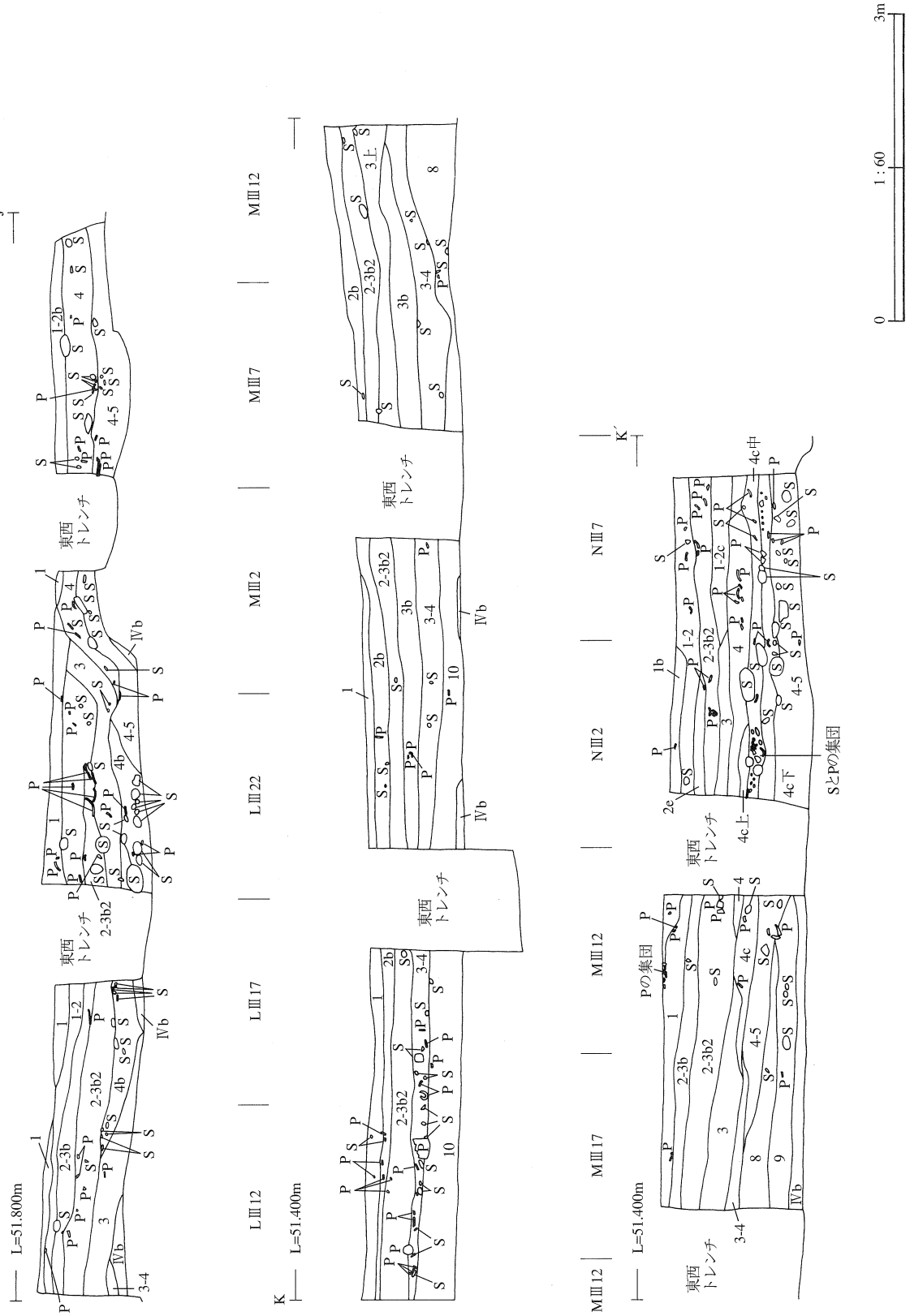
第59図　ST01 捨て場（5）（実測位置は第55図）



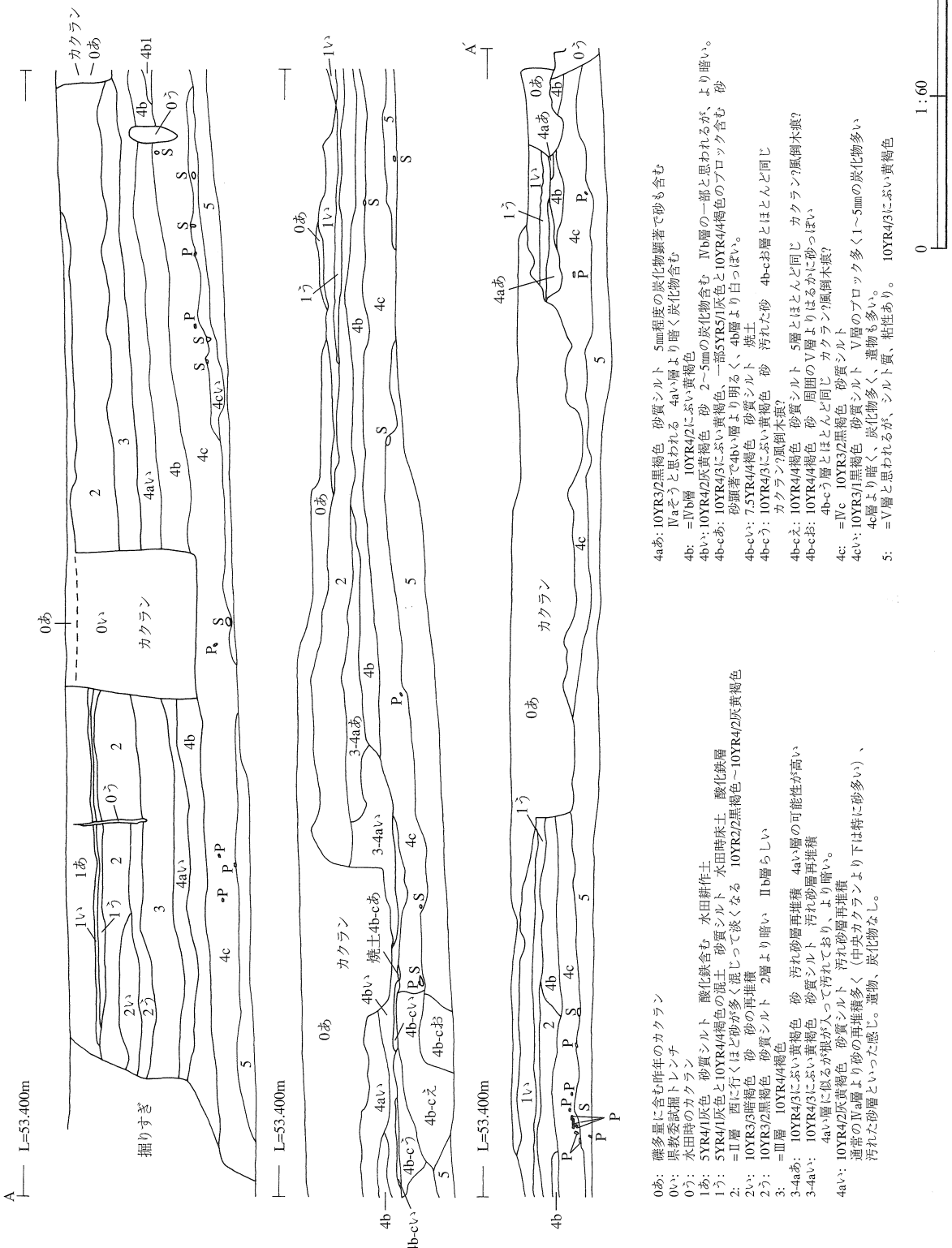
第60図　ST01 捨て場（6）（実測位置は第55図）



第61図　ST01 捨て場（7）（実測位置は第55図）



第62図　ST01 捨て場（8）（実測位置は第55図）

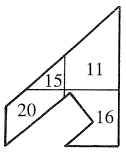


0あ:　礫多量に含む昨年のカクラン
0い:　県教委試掘トレンチ
0う:　水田時のカクラン
1あ:　5YR4/1灰色　砂質シルト　酸化鉄含む　水田耕作土
1う:　5YR4/1灰色と10YR4/4褐色の混土　砂質シルト　水田時床土　酸化鉄層
2:　＝Ⅱ層　酉に行くほど砂が多く混じって淡くなる　10YR2/2黒褐色～10YR4/2灰黄褐色
2い:　10YR3/3暗褐色　砂　砂の再堆積
2う:　10YR3/2黒褐色　砂質シルト　2層より暗い　Ⅱb層らしい
3:　＝Ⅲ層　10YR4/4褐色
3-4aあ:　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　汚れ砂層再堆積　4aい層の可能性が高い
3-4aい:　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　汚れ砂層再堆積
　4aい層に似るが根が入って汚れており、より暗い。
4aい:　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　汚れ砂層再堆積
　通常のⅣa層より砂の再堆積多く（中央カクランより下は特に砂多い）、
　汚れた砂層といった感じ。遺物、炭化物なし。

4aあ: 10YR3/2黒褐色　砂質シルト　5mm程度の炭化物類著で砂も含む
　Ⅳaそうと思われる　4aい層より暗く炭化物含む
4b:　＝Ⅳb層　10YR4/2にぶい黄褐色
4bい: 10YR4/2灰黄褐色　砂　2～5mmの炭化物含む　Ⅳb層の一部と思われるが、より暗い。
4b-cあ:　10YR4/3にぶい黄褐色、一部5YR5/1灰色と10YR4/4褐色のブロック含む　砂
　砂類著で4bい層より明るく、4b層より白っぽい。
4b-cい: 7.5YR4/4褐色　砂質シルト　焼土
4b-cう: 10YR4/3にぶい黄褐色　砂　汚れた砂　4b-cお層とほとんど同じ
　カクラン?風倒木痕?
4b-cえ: 10YR4/4褐色　砂質シルト　5層とほとんど同じ　カクラン?風倒木痕?
4b-cお: 10YR4/4褐色　砂　周囲のV層よりはるかに砂っぽい
　4b-cう層とほとんど同じ　カクラン?風倒木痕?
4c:　＝Ⅳc　10YR3/2黒褐色　砂質シルト
4cい: 10YR3/1黒褐色　砂質シルト　V層のブロック多く1～5mmの炭化物多い
　4c層より暗く、炭化物多く、遺物も多い。
5:　＝V層と思われるが、シルト質、粘性あり。　10YR4/3にぶい黄褐色

1:60
0
3m

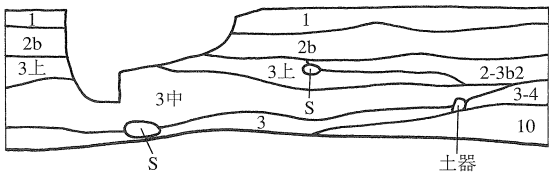
第63図　南東区南部南側土層断面



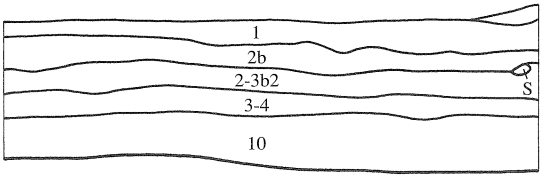
グリッド位置

●LⅡ15,20, LⅢ11,16グリッド

・南面

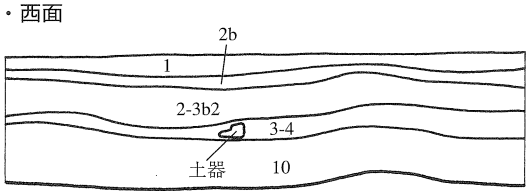


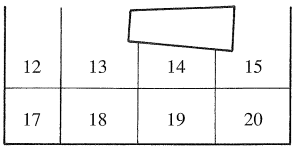
・東面



●LⅢ12,13,14,15,17,18,19,20グリッド

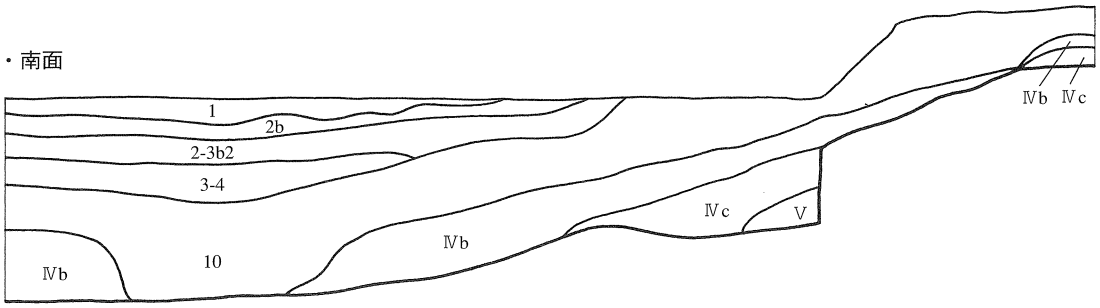
・西面





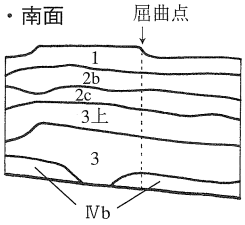
グリッド位置

・南面

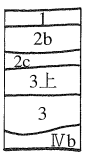


●MⅡ2グリッド

・南面



・東面

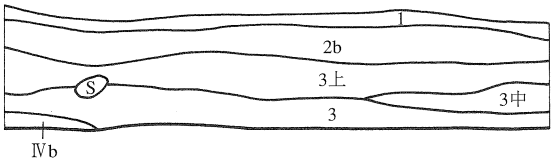


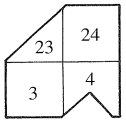
グリッド位置

第64図　ブロック別層序模式図（1）（位置は、第55図参照）

●LⅡ23,24, MⅡ3,4グリッド

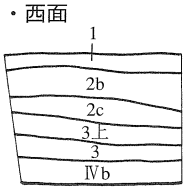
・東面



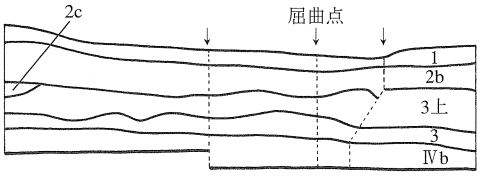


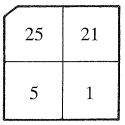
グリッド位置

・西面



・南面

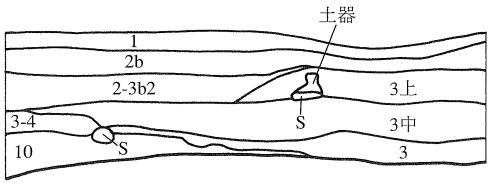




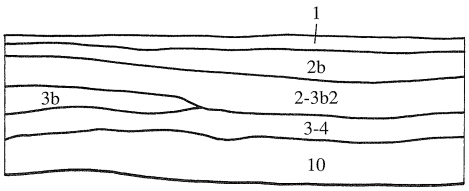
グリッド位置

●LⅡ25, LⅢ21,MⅡ5,MⅢ1グリッド

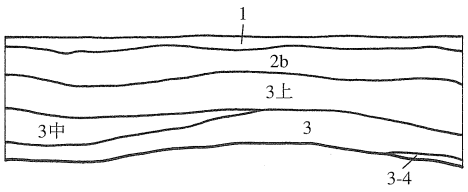
・北面



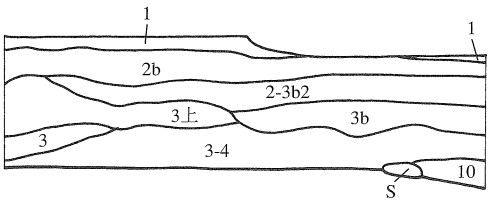
・東面



・西面



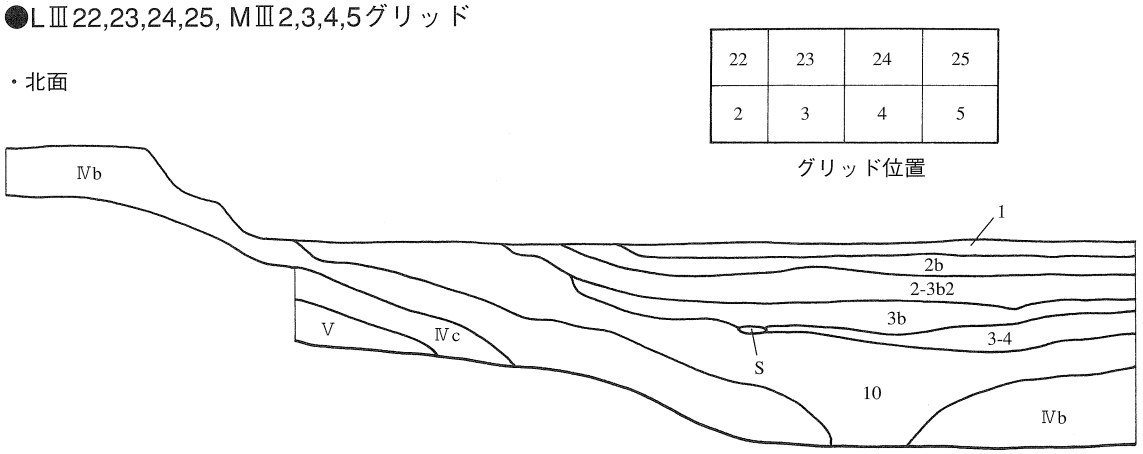
・南面



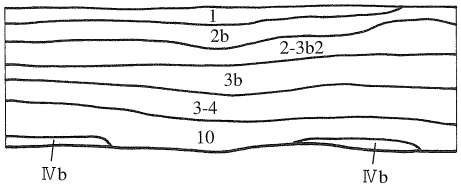
第65図　ブロック別層序模式図（2）（位置は、第55図参照）

●LⅢ22,23,24,25, MⅢ2,3,4,5グリッド

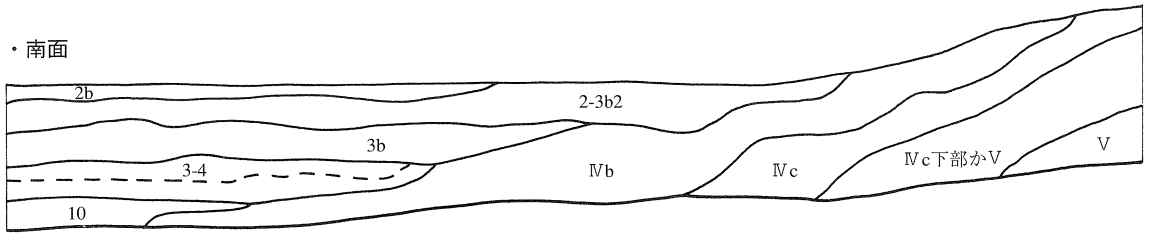
・北面



・西面



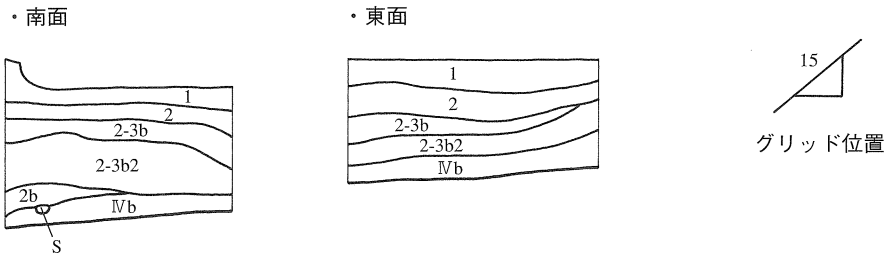
・南面



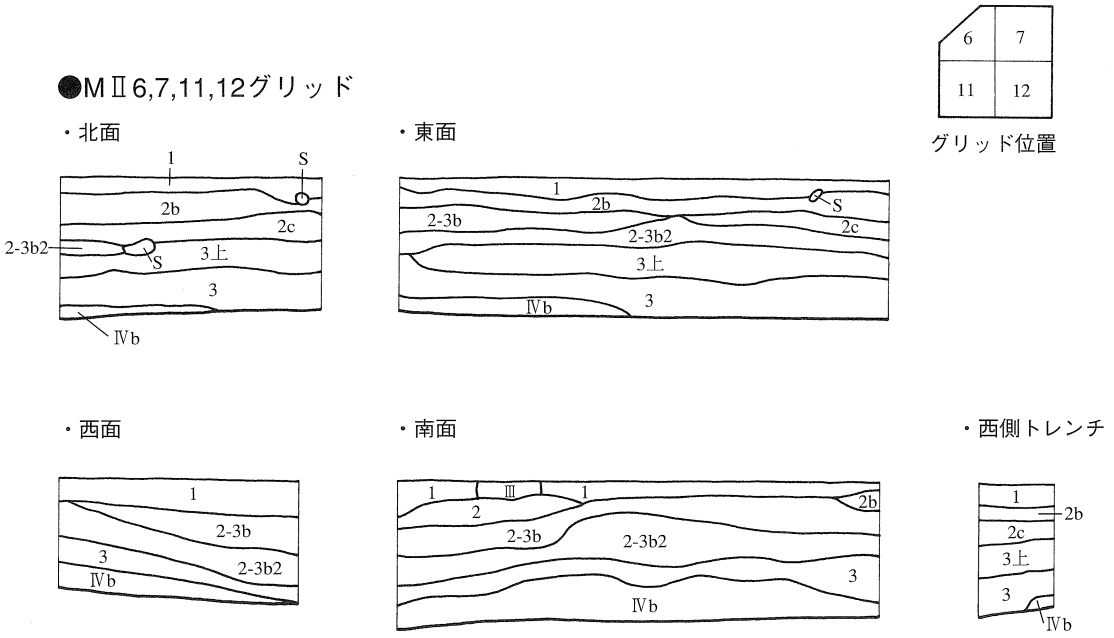
●MⅠ15グリッド

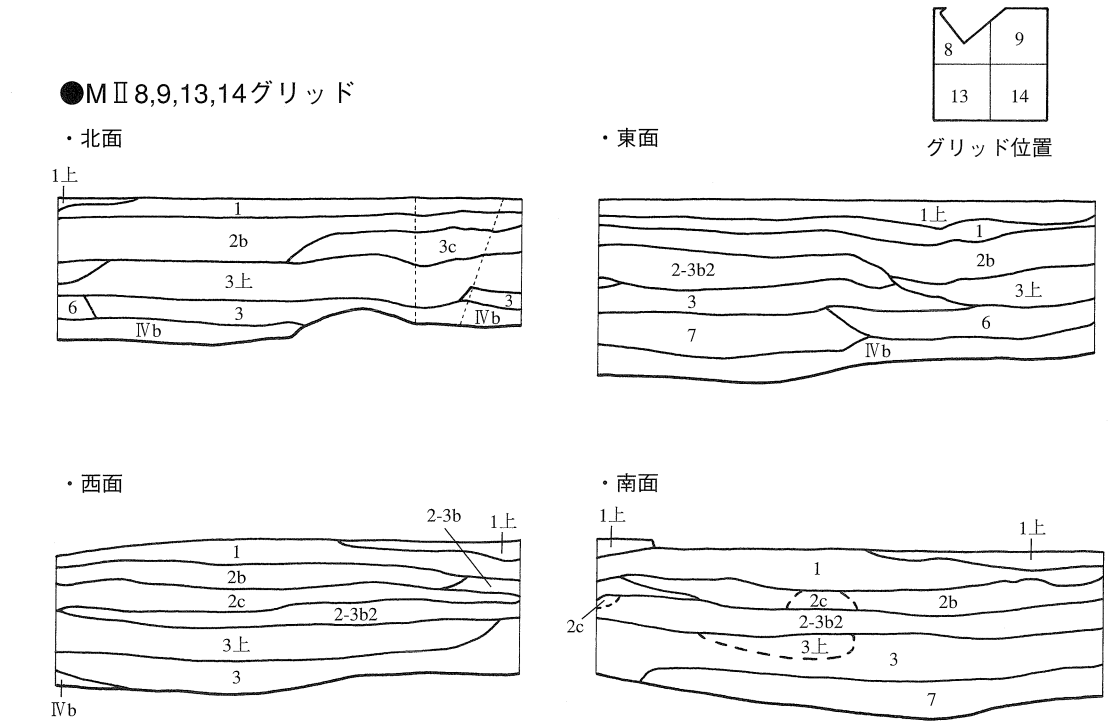
・南面

・東面

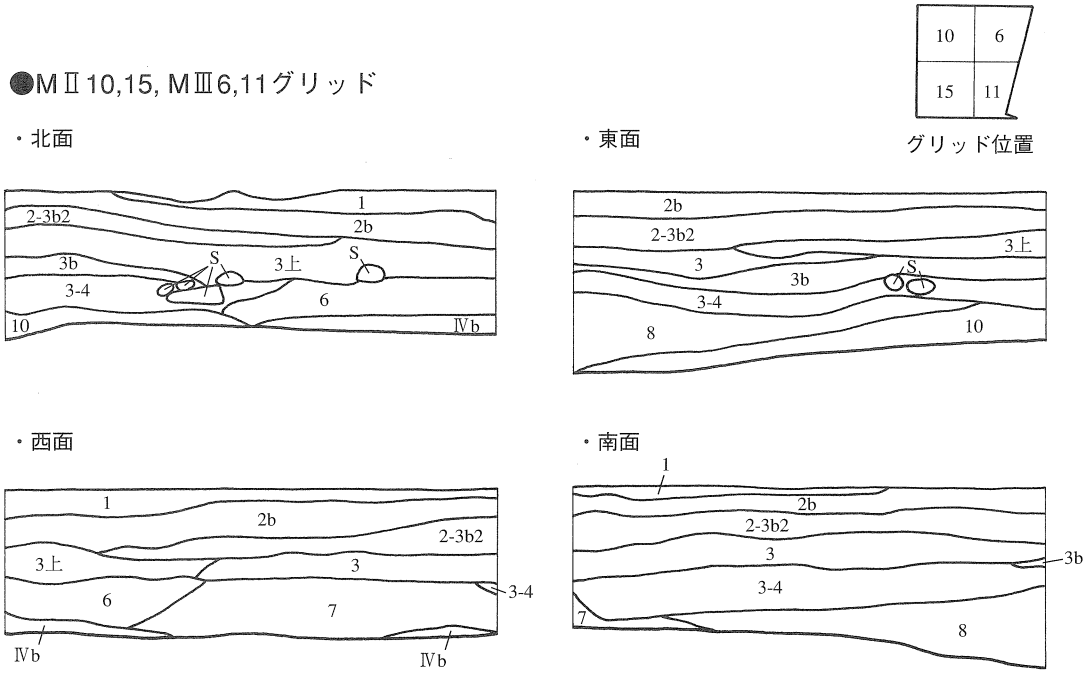


第66図　ブロック別層序模式図（3）（位置は、第55図参照）

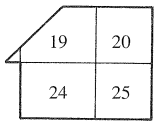




第67図　ブロック別層序模式図（4）（位置は、第55図参照）



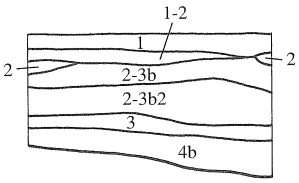
第 68 図　ブロック別層序模式図（5）（位置は、第 55 図参照）



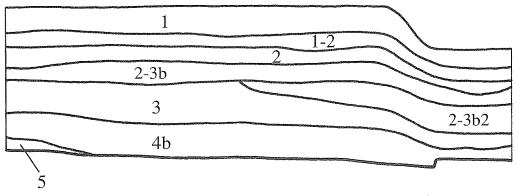
●MⅠ19,20,24,25グリッド

グリッド位置

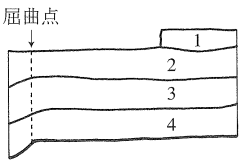
・北面



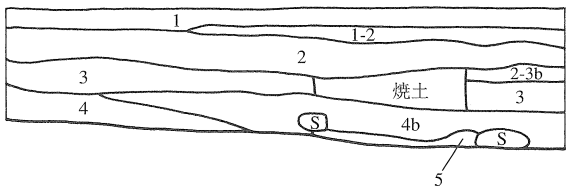
・東面

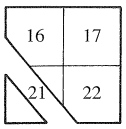


・西面



・南面

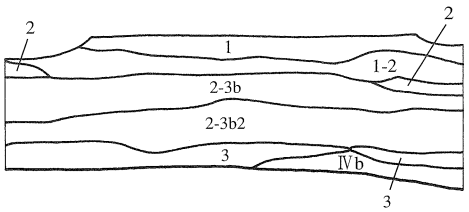




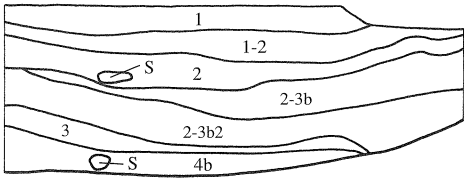
●MⅡ16,17,21,22グリッド

グリッド位置

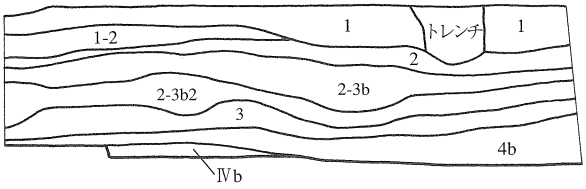
・北面



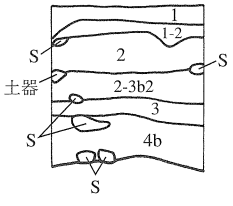
・東面



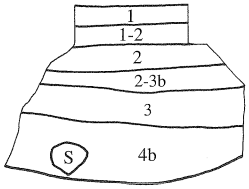
・西面



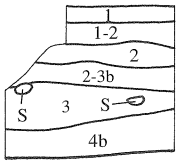
・南面



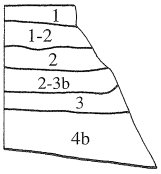
・北東面



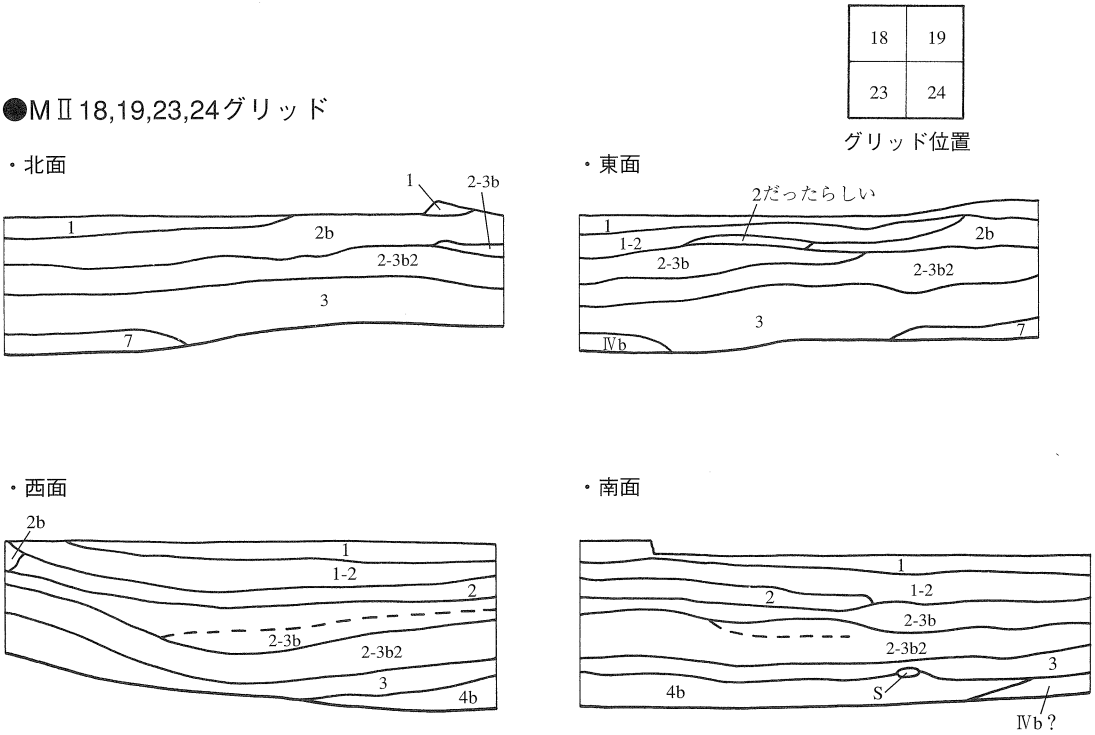
・西面

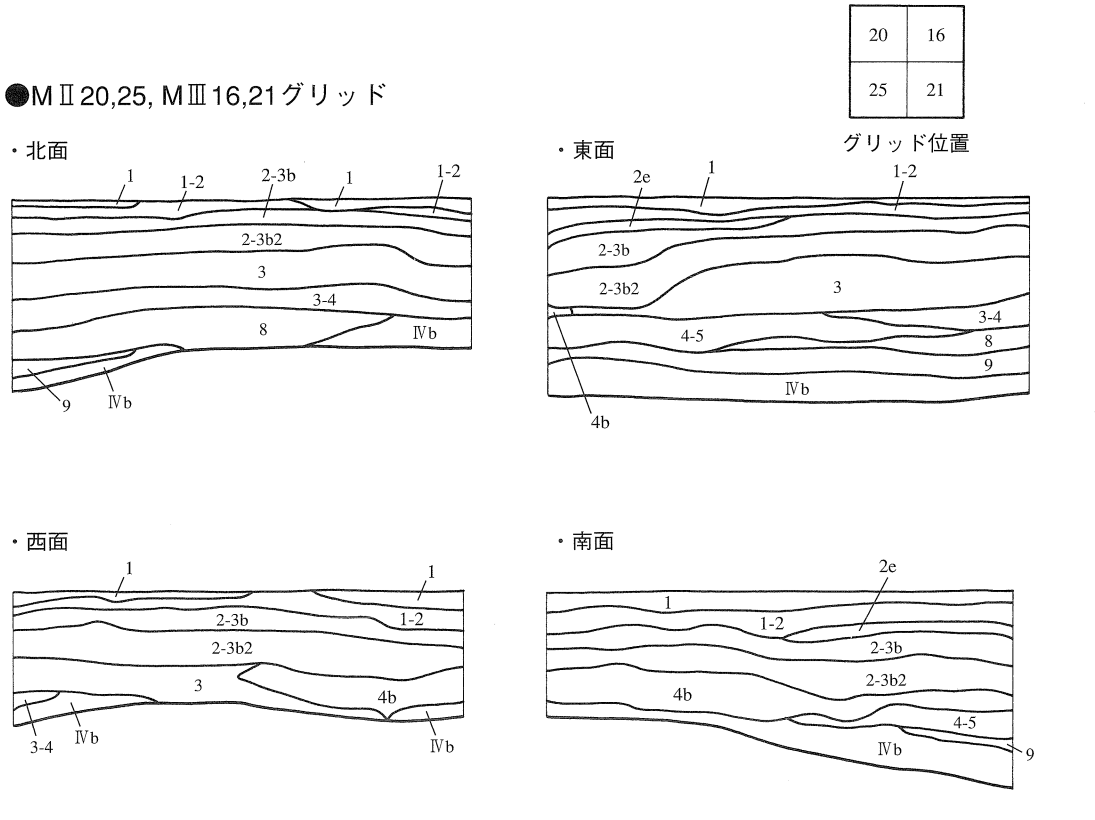


・南面



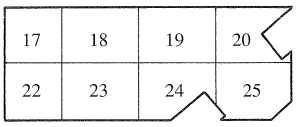
第69図　ブロック別層序模式図（6）（位置は、第55図参照）





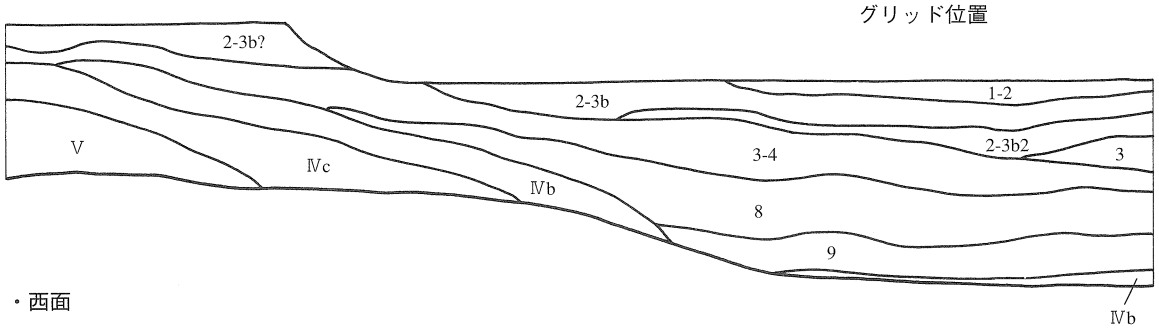
第 70 図　ブロック別層序模式図（7）（位置は、第 55 図参照）

●MⅢ17,18,19,20,22,23,24,25グリッド

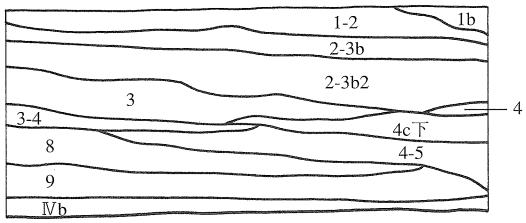


グリッド位置

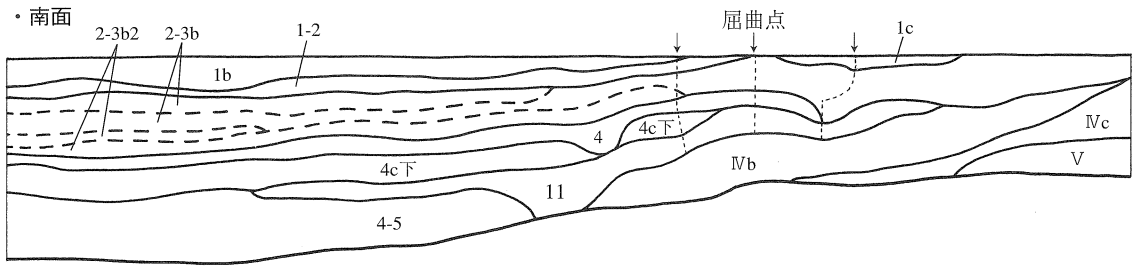
・北面



・西面

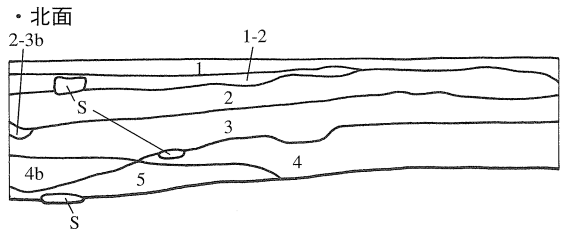


・南面

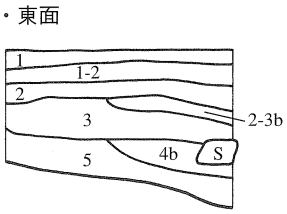


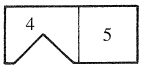
●NⅠ4,5グリッド

・北面



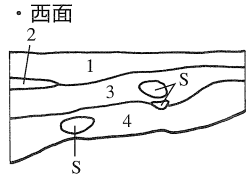
・東面



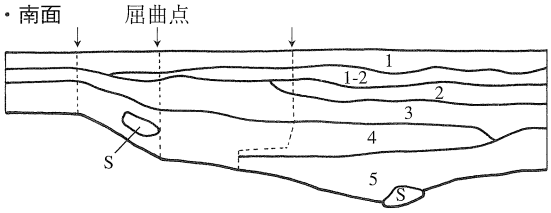


グリッド位置

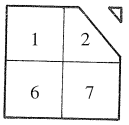
・西面



・南面



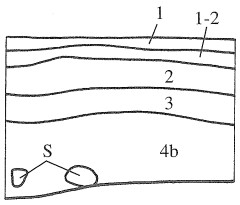
第 71 図　ブロック別層序模式図（8）（位置は、第 55 図参照）



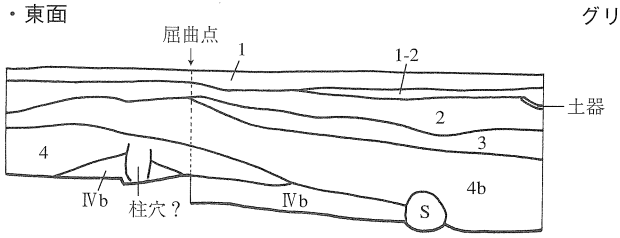
グリッド位置

●NⅡ1,2,6,7グリッド

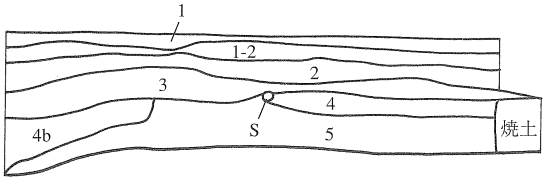
・北面



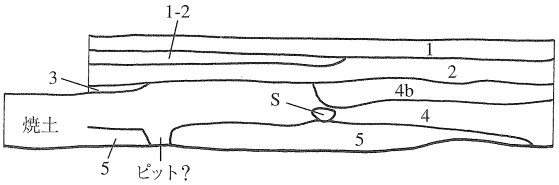
・東面



・西面

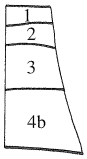


・南面

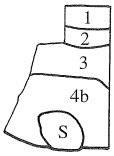


◥部分

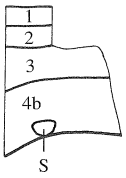
・北面

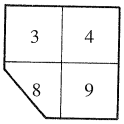


・東面



・西面

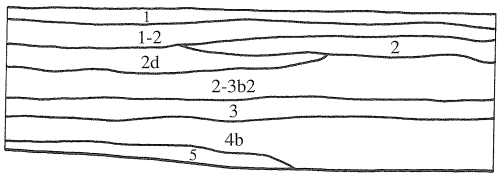




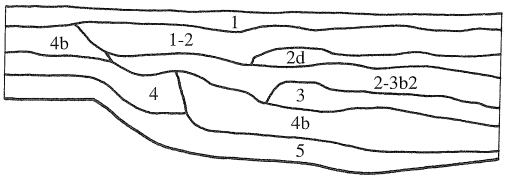
グリッド位置

●NⅡ3,4,8,9グリッド

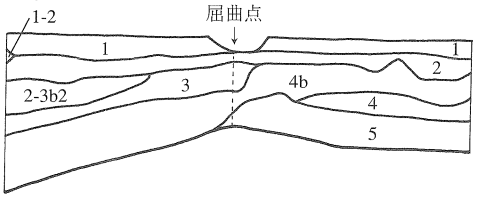
・北面



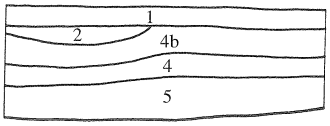
・東面



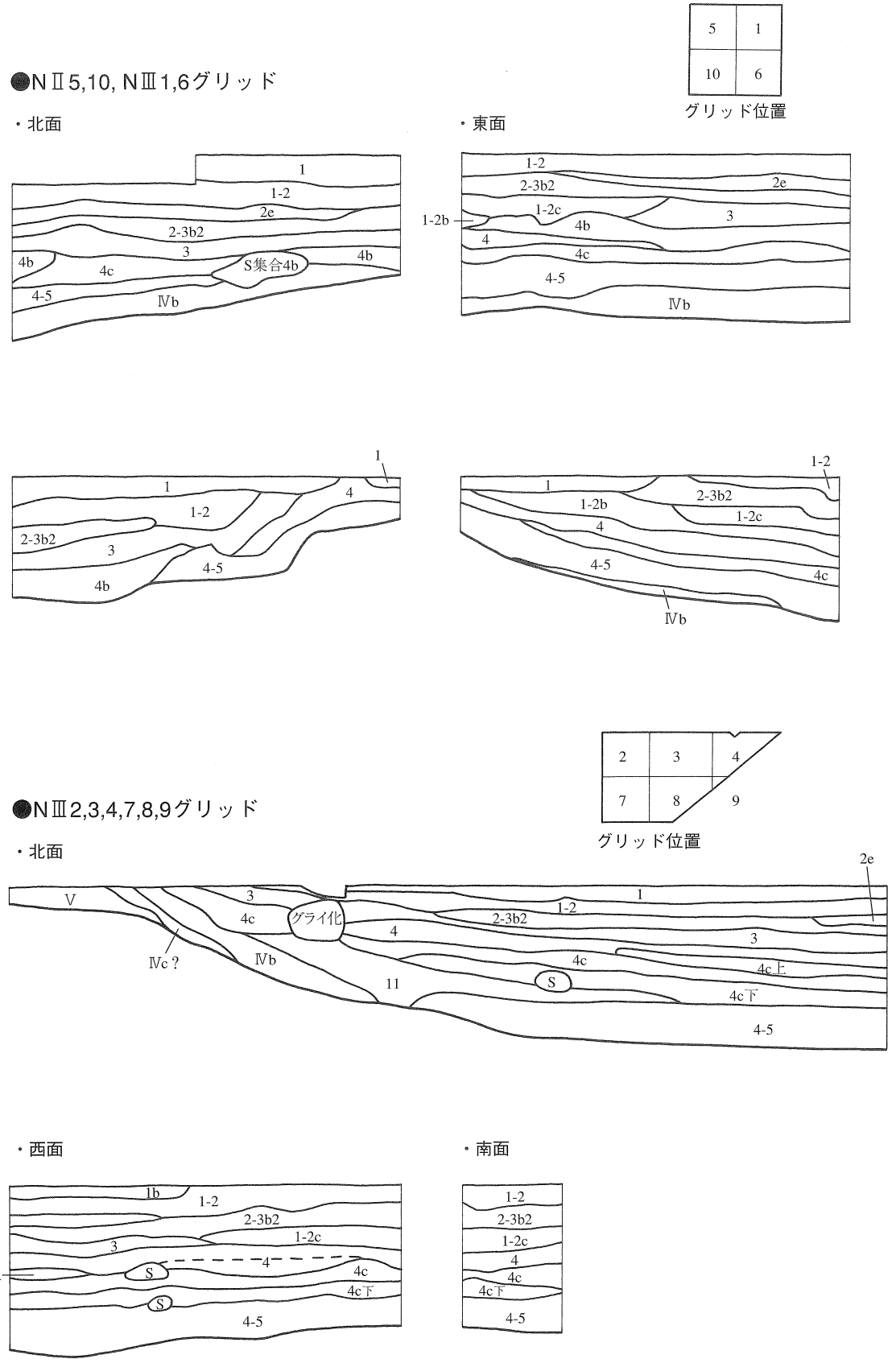
・西面



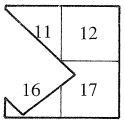
・南面



第 72 図　ブロック別層序模式図（9）（位置は、第 55 図参照）



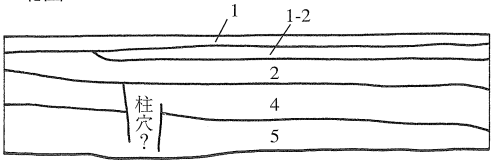
第73図　ブロック別層序模式図（10）（位置は、第55図参照）



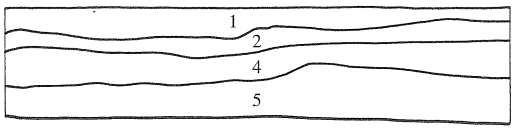
グリッド位置

●NⅡ11,12,16,17ブロック

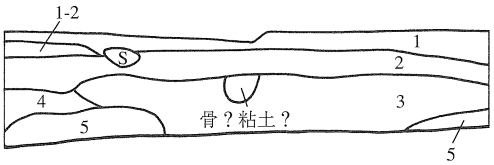
・北面



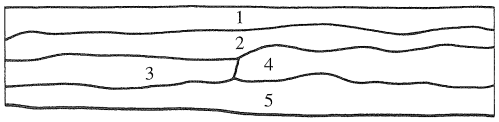
・東面



・西面

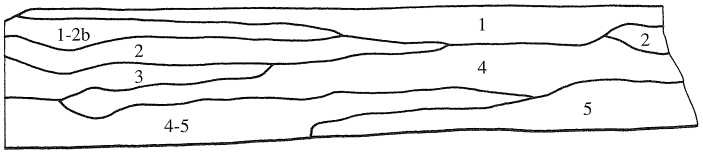


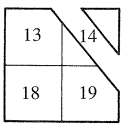
・南面



●NⅡ13,14,18,19ブロック

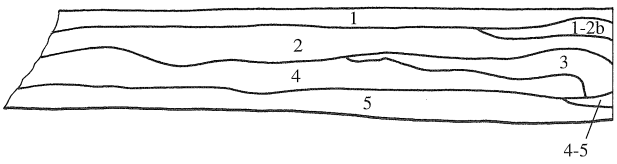
・北東面



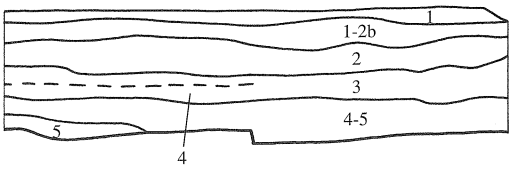


グリッド位置

・西面

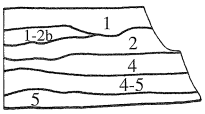


・南面

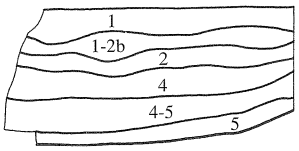


◹部分

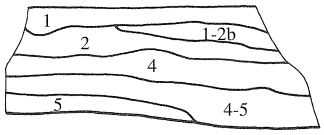
・北面



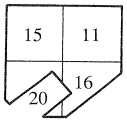
・東面



・南西面



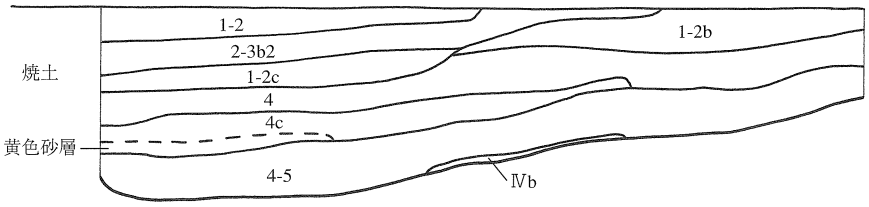
第74図　ブロック別層序模式図（11）（位置は、第55図参照）



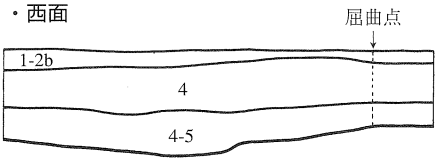
グリッド位置

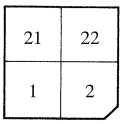
●NⅡ15,20, NⅢ11,16

・北面



・西面

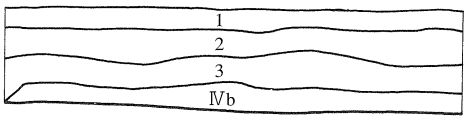




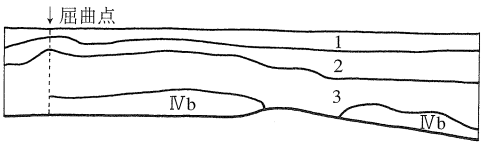
グリッド位置

●NⅡ21,22, OⅢ1,2グリッド

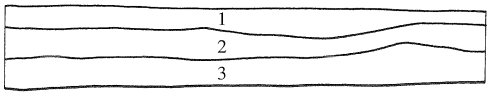
・北面



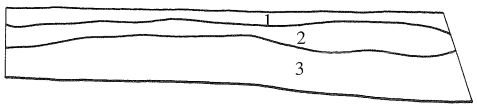
・東面



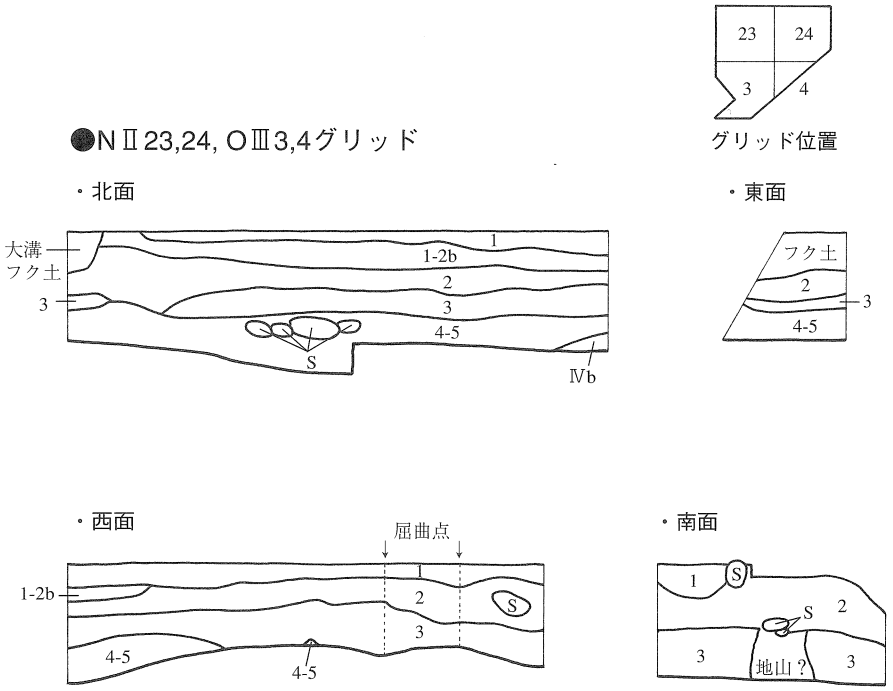
・西面

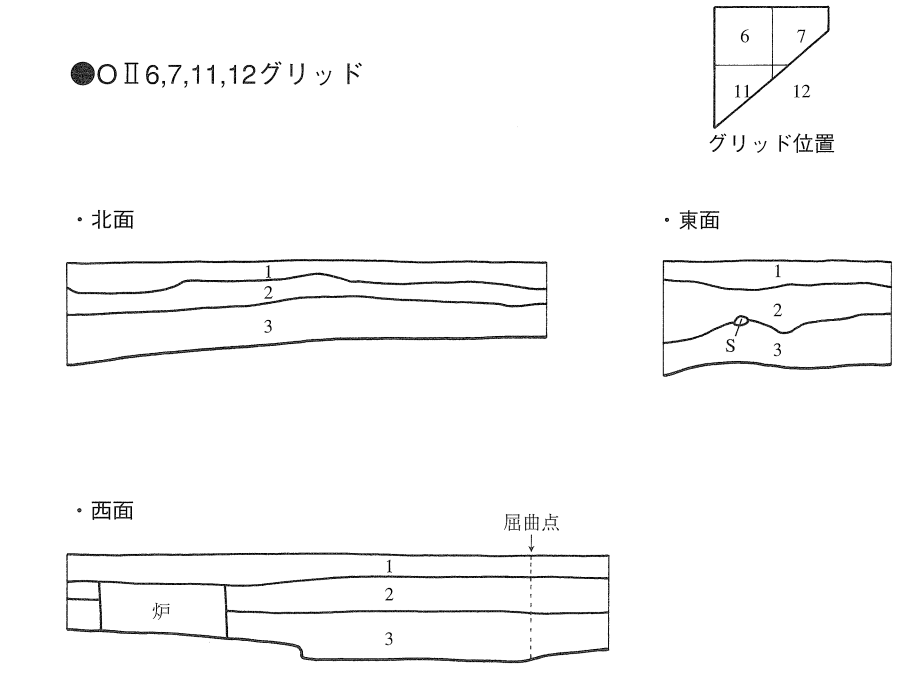


・南面



第75図　ブロック別層序模式図（12）（位置は、第55図参照）

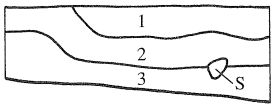




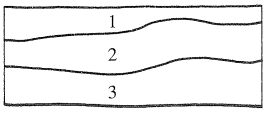
第 76 図　ブロック別層序模式図（13）（位置は、第 55 図参照）

●OⅡ8グリッド

・北面



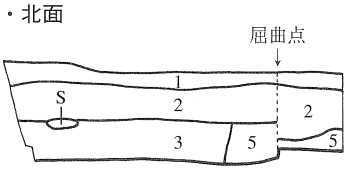
・西面

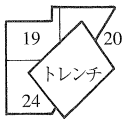


グリッド位置

●OⅠ19,20,24グリッド

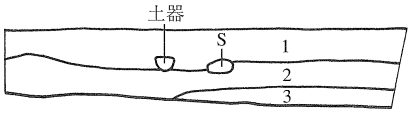
・北面



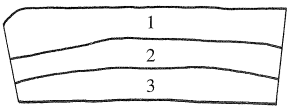


グリッド位置

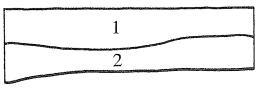
・北面（トレンチ内側）



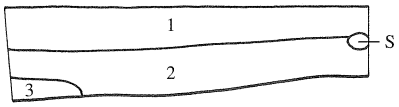
・東面（トレンチ内側）



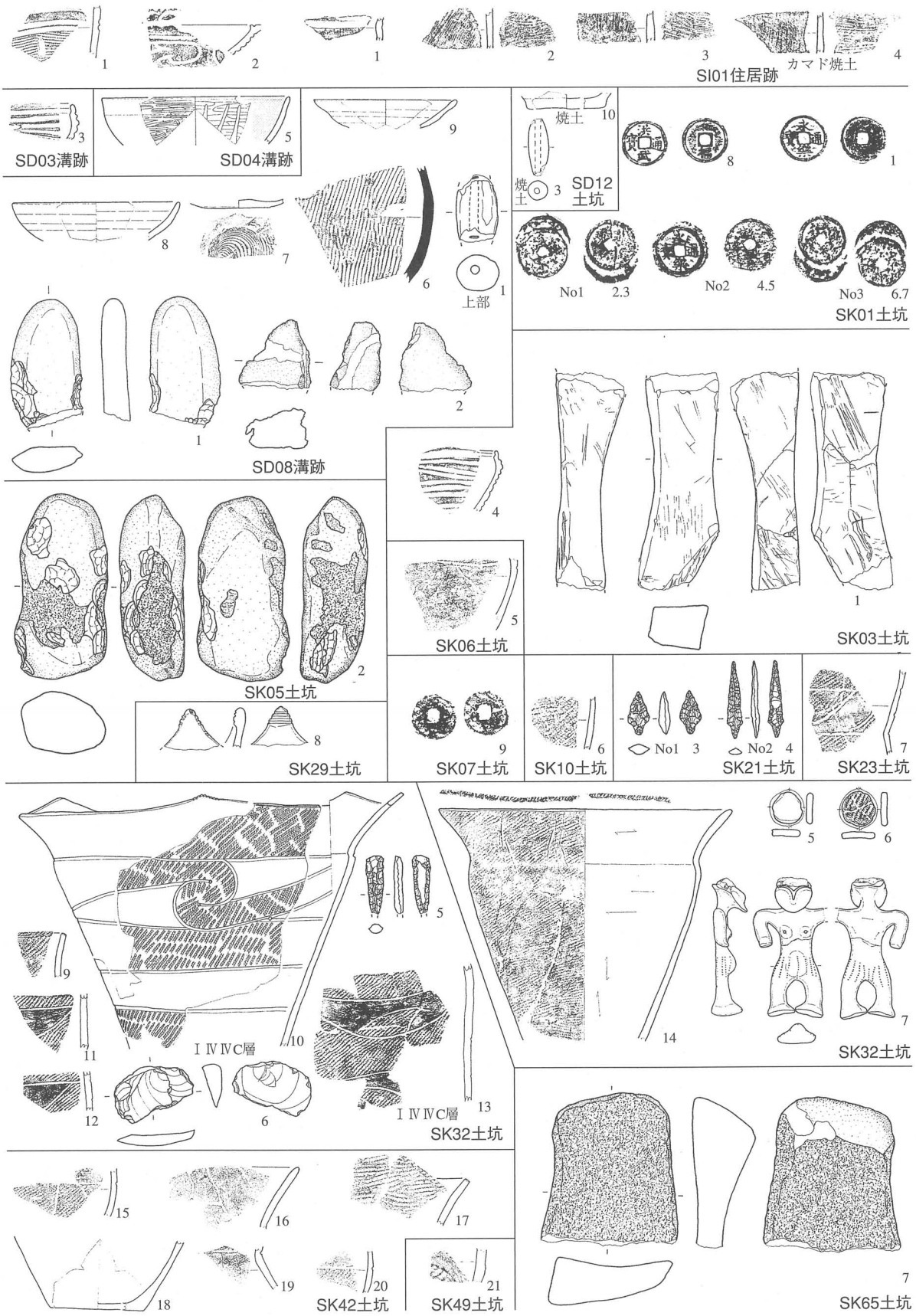
・西面（トレンチ内側）



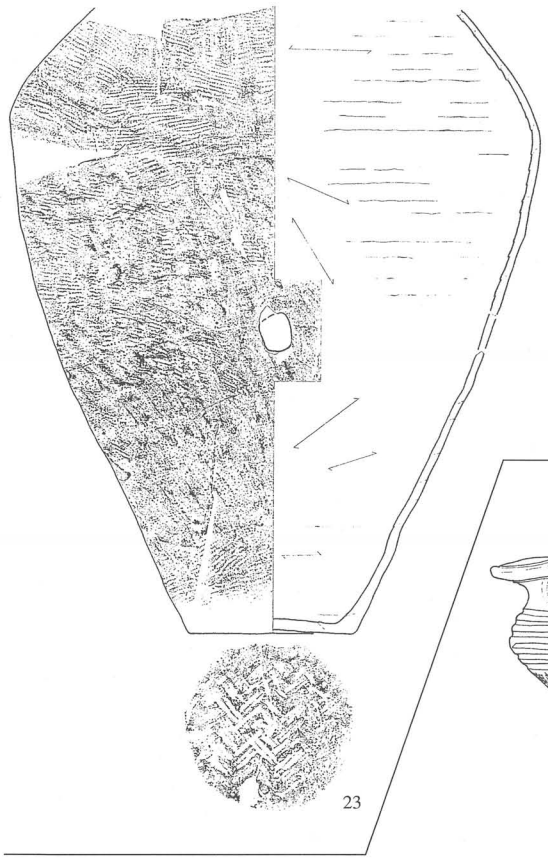
・南面（トレンチ内側）

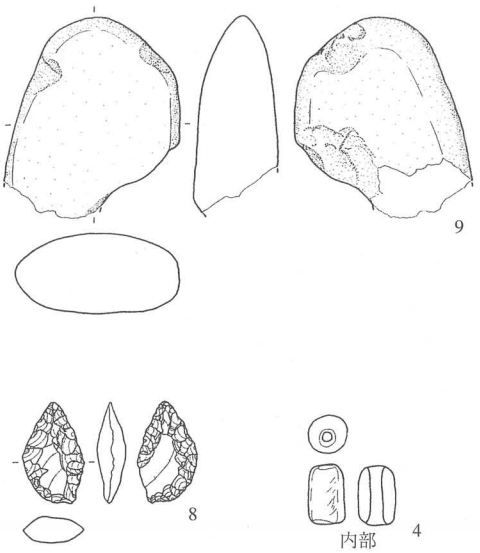


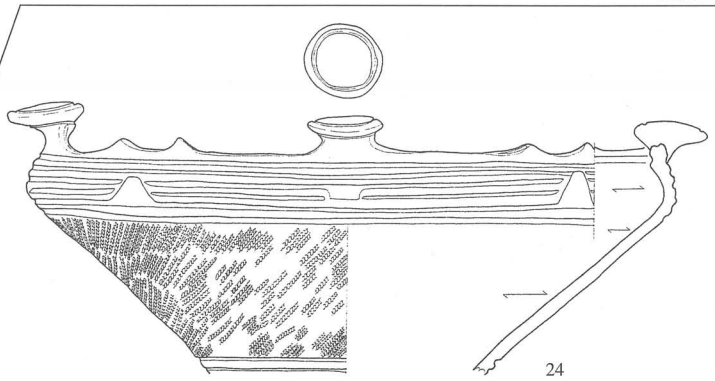
第77図　ブロック別層序模式図（14）（位置は、第55図参照）

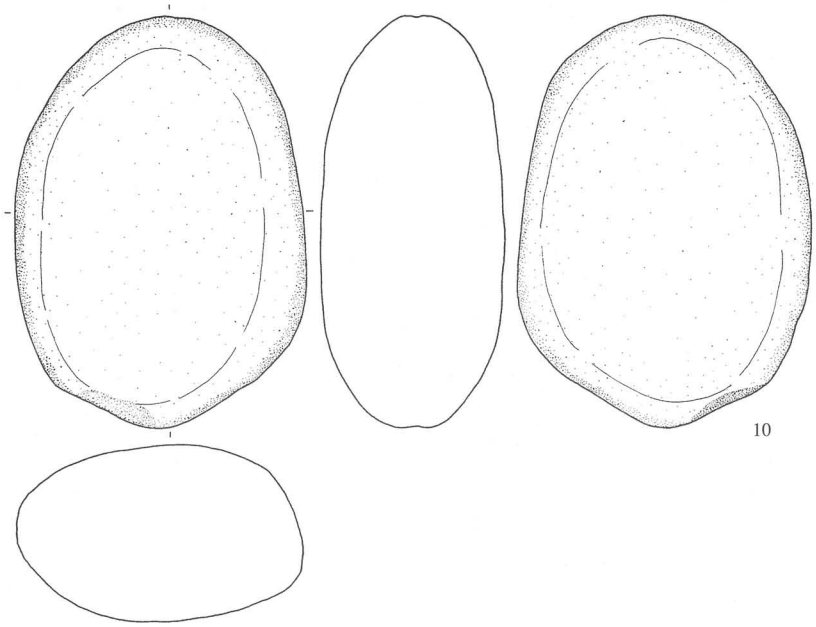


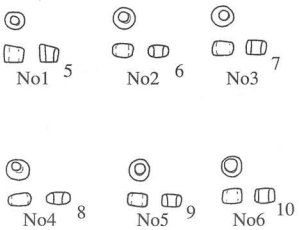
第 78 図　SI01 住居跡、SD03 ～ SD12 溝跡、SK05 ～ SK65 土坑出土遺物
（土器・礫石器 1/5、剥片石器・土製品・石製品・銭貨 1/3）





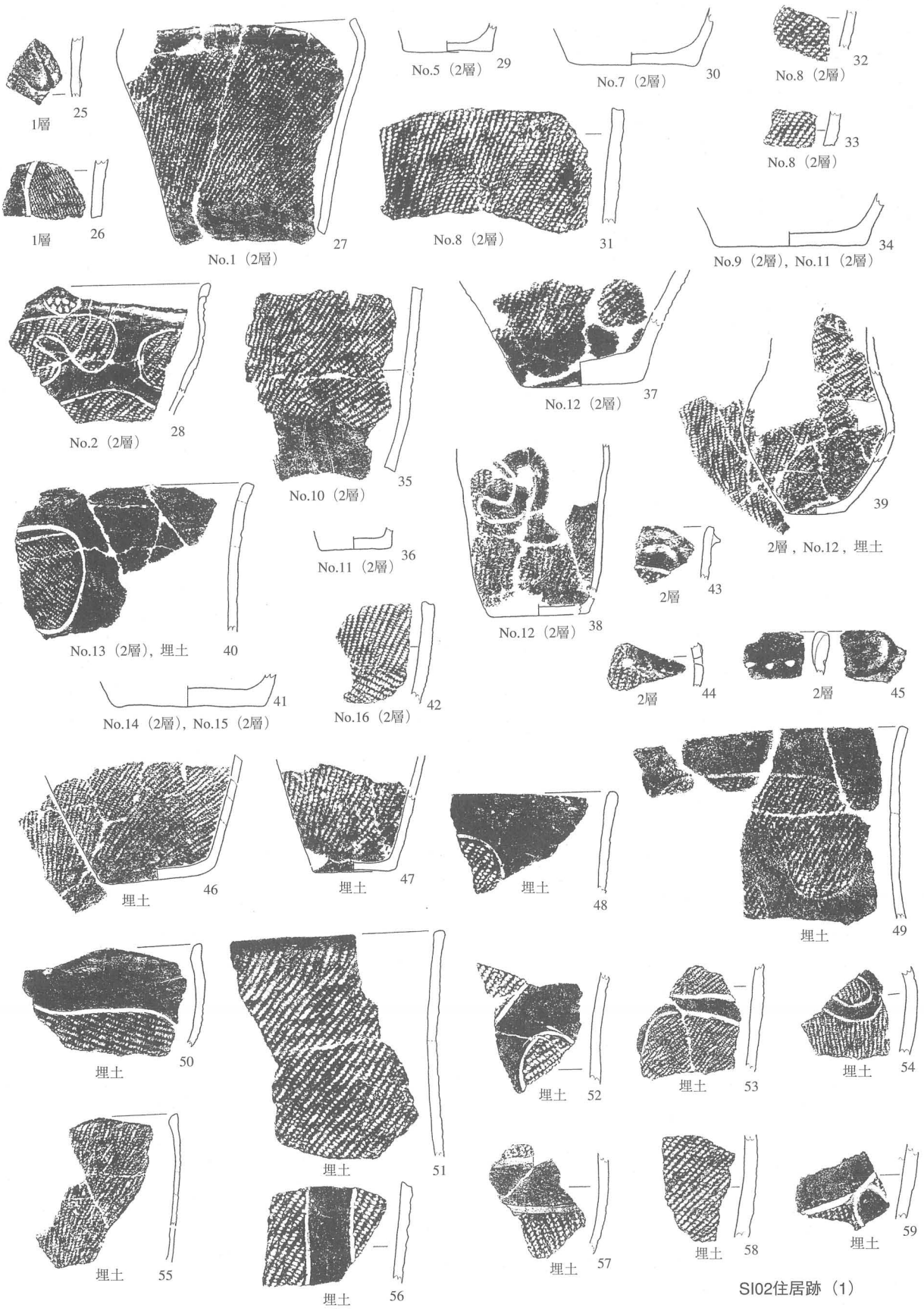




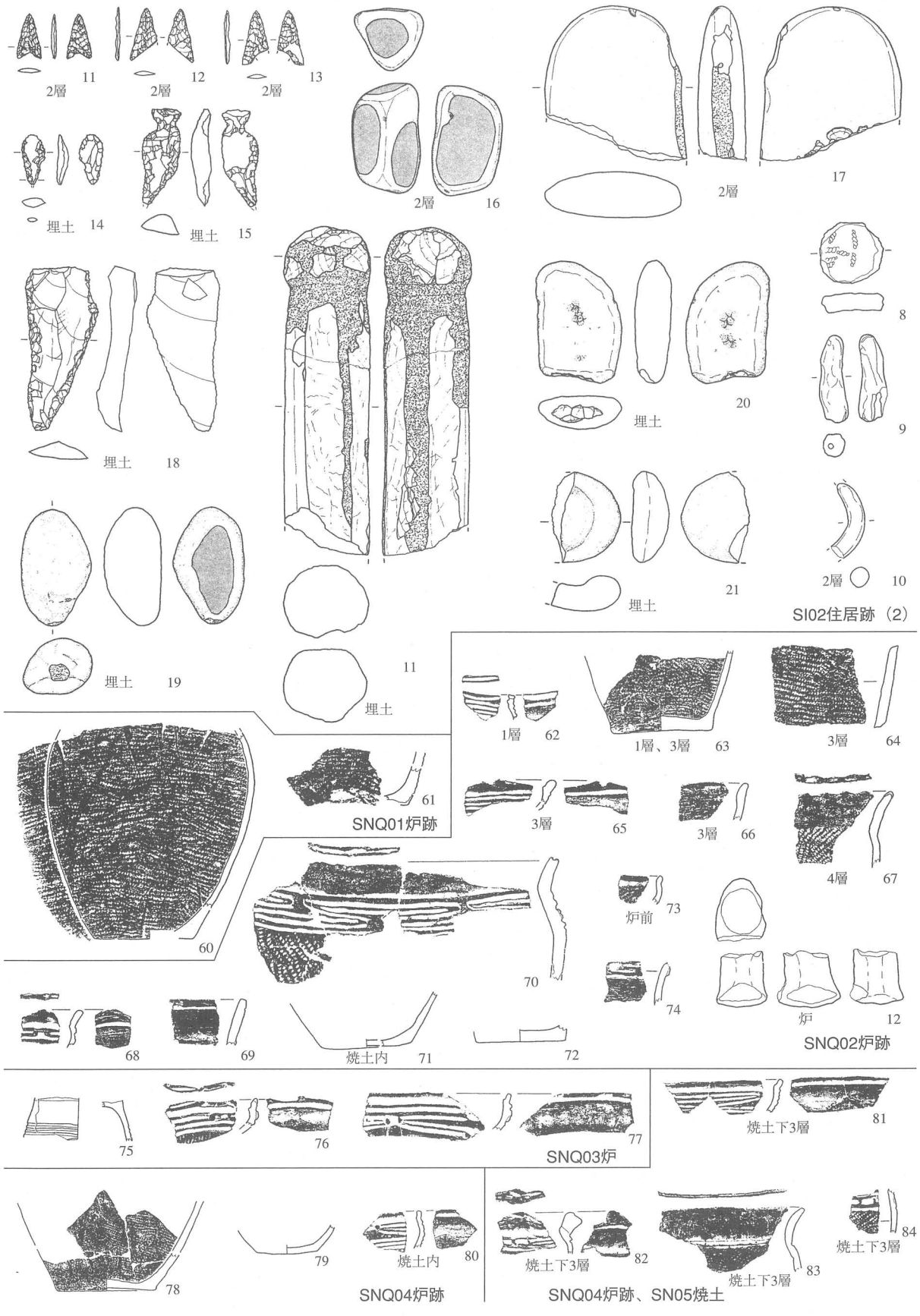


SR02土器棺墓

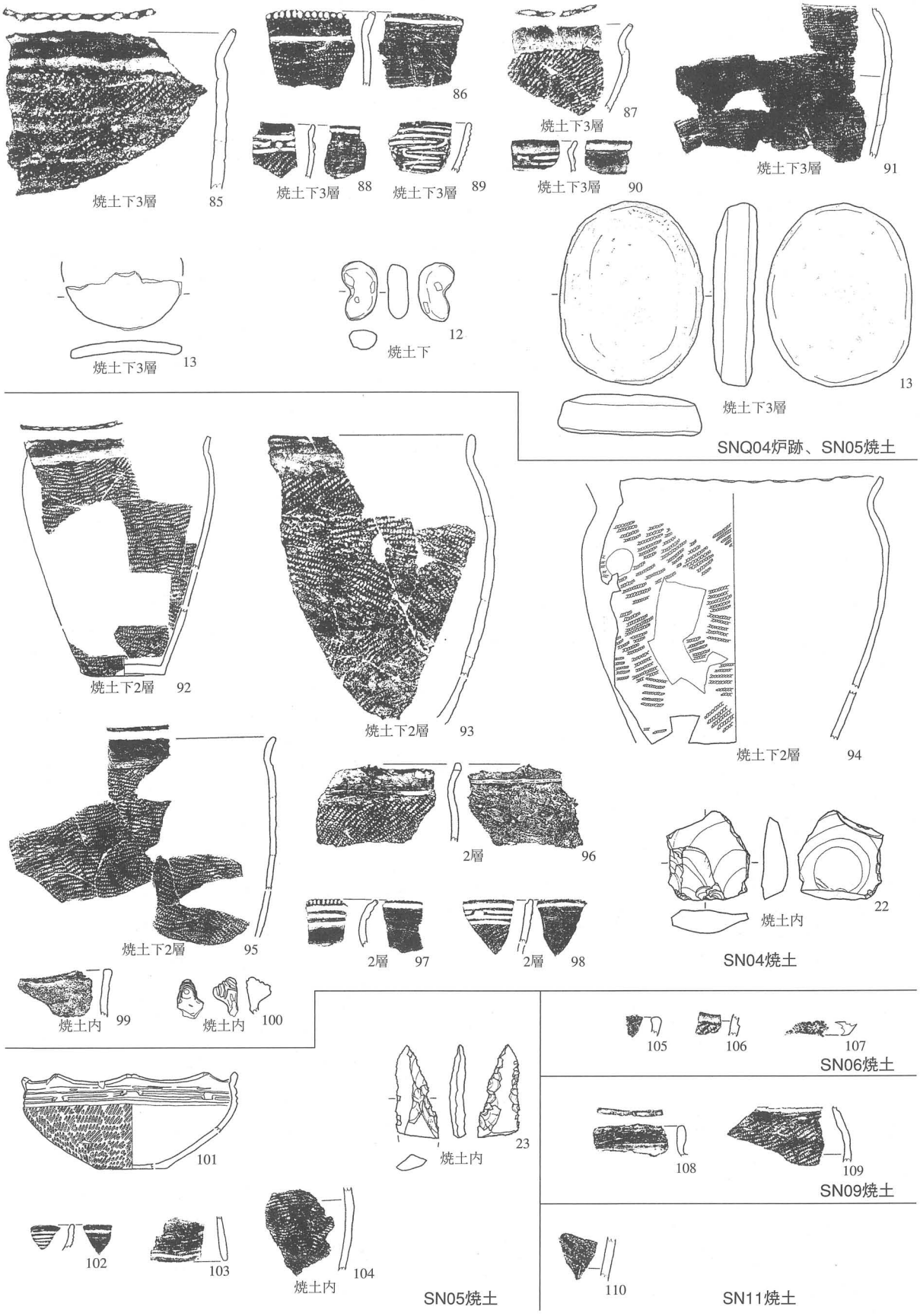
第 79 図　SK68 ～ 71 土坑・SR01 ～ 02 土器棺墓出土遺物（土器・礫石器 1/5、剥片石器・石製品 1/3）



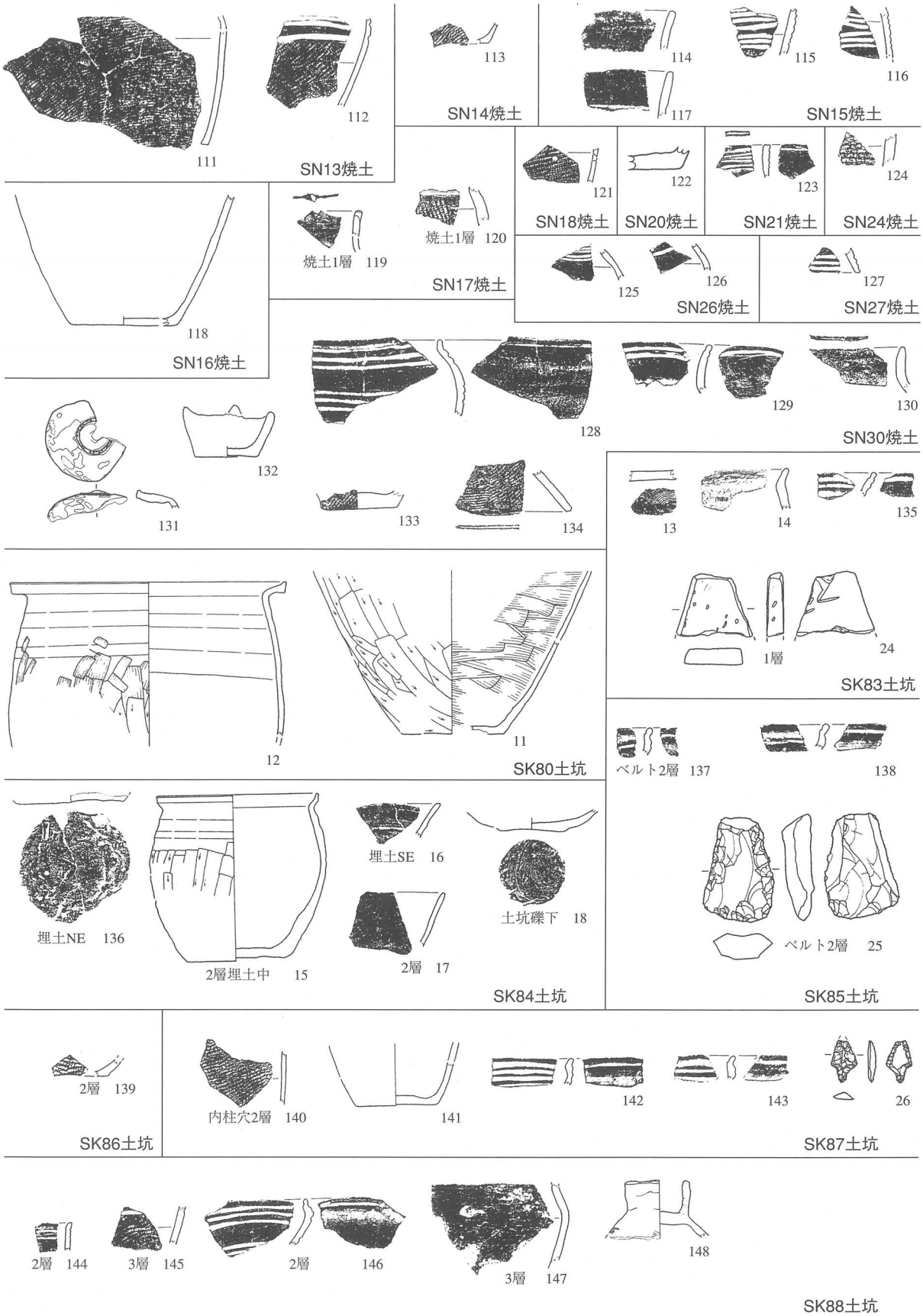
第 80 図　SI02 住居跡出土遺物（1）（土器 1/5）



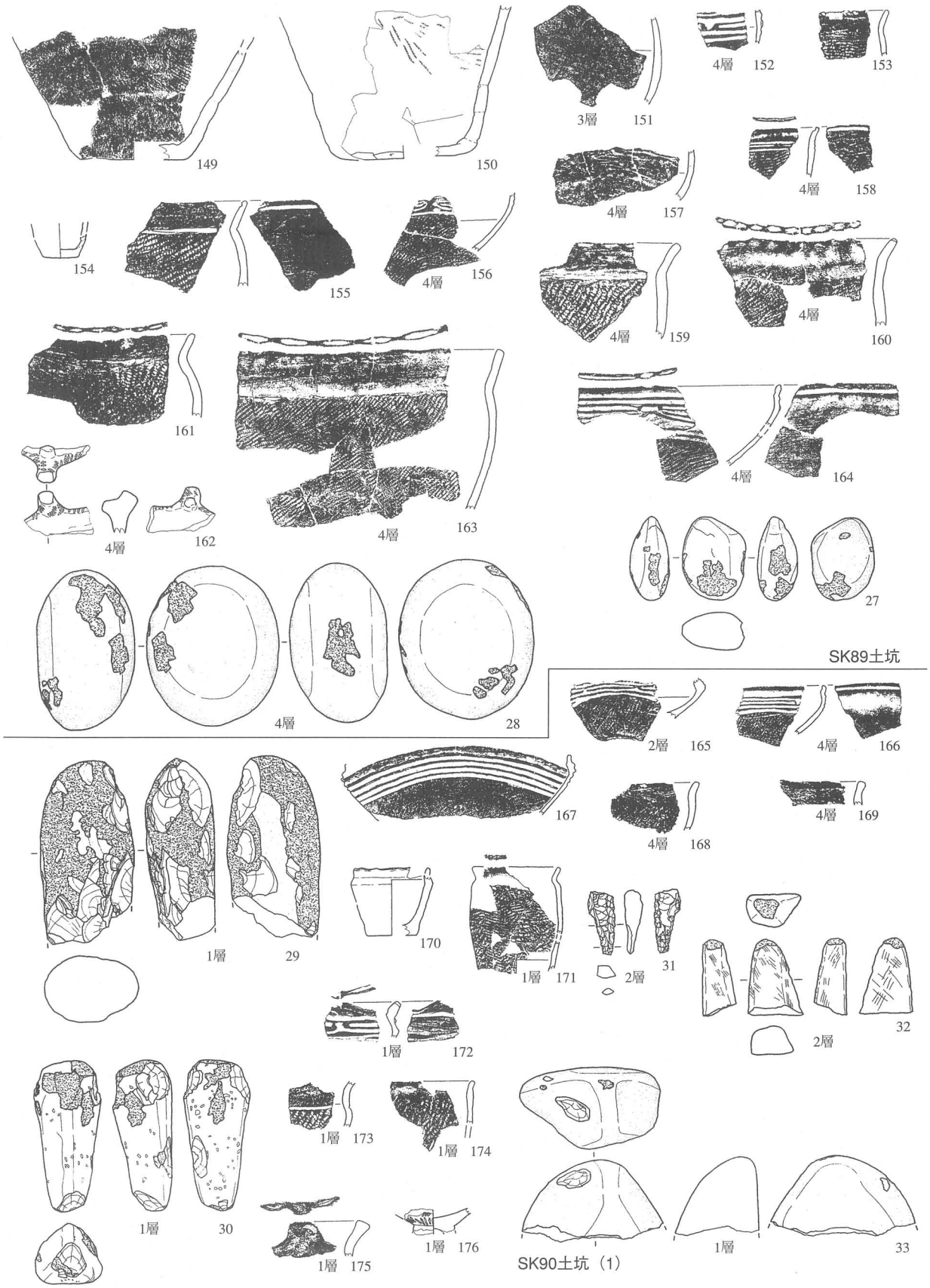
第 81 図　SI02 住居跡（2）、SNQ01 ～ SNQ04 炉跡、SN05 焼土出土遺物
（土器・礫石器 1/5、剥片石器・土製品・石製器 1/3）



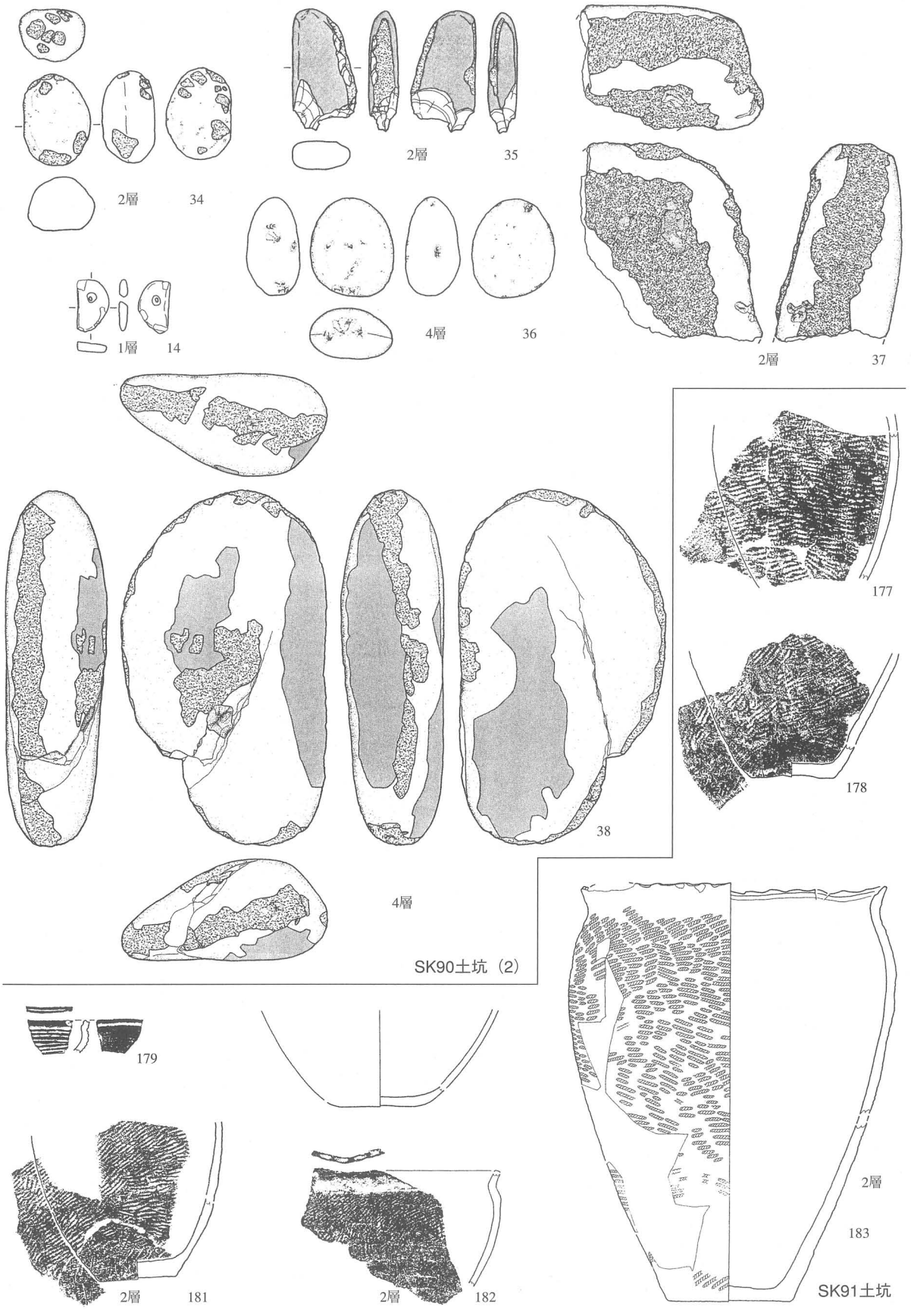
第 82 図　SNQ04 炉跡、SN05 焼土・SN04 焼土～ SN11 焼土出土遺物
（土器・礫石器 1/5、剥片石器・土製品・石製品 1/3）



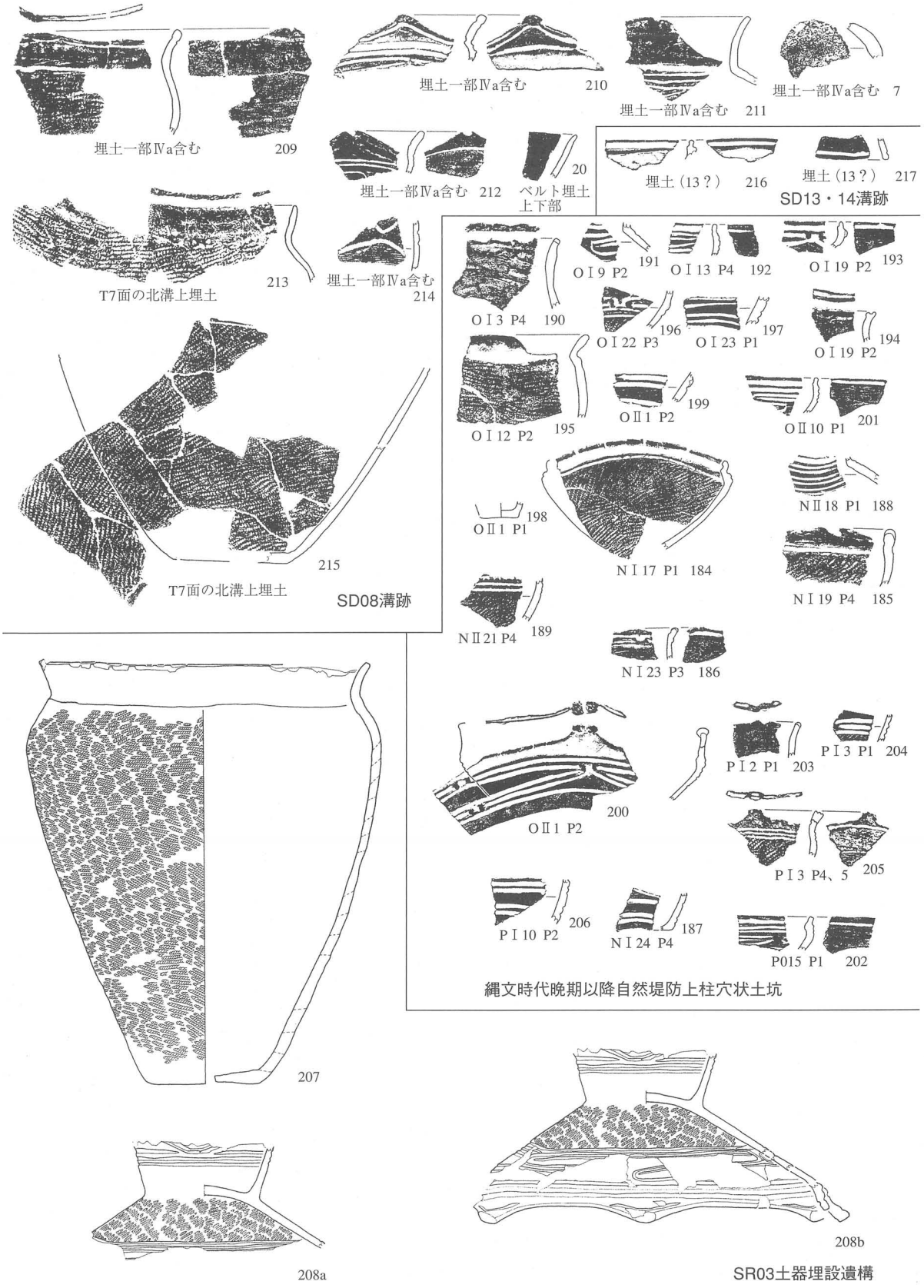
第 83 図　SN13 ～ SN30 焼土・SK80 ～ SK88 土坑出土遺物（土器・礫石器 1/5・剥片石器 1/3）



第 84 図　SK89・90 土坑（1）出土遺物（土器・礫石器 1/5、剥片石器 1/3）



第85図　SK90（2）・91土坑出土遺物（土器・礫石器34～37 1/5、礫石器38 1/6、石製品1/3）



第 86 図　柱穴状土坑、SR03 土器埋設遺構、SD08 溝跡出土遺物（土器 1/5）

Ⅵ 遺　　物

今回出土した遺物は、縄文・弥生土器が大コンテナ（30 × 40 × 30cm）で約 208 箱、土師器・須恵器は大コンテナ（30 × 40 × 30cm）1 箱に満たない（土師器が 2/3 以上）。陶磁器は、中世のもの 2 点、近世（後半）は、30 点以下である。

土製品は 397 点で、耳飾 2 点、小玉･垂飾品 3 点、土偶 99 点、動物形土製品 2 点、動物形把手 4 点、土版 2 点、「スタンプ状」土製品 2 点、円盤状土製品 184 点、三角状土製品 1 点、焼粘土塊 77 点（以上）、土錘 2 点、不明 17 点である。

石器は、原料も含めると、30 × 40 × 20cm のコンテナで約 780 箱出土している。石器は 23,453 点、剥片類は 683,659.13g 出土した。内訳は、石鏃 223 点、石鏃未成品 411 点、石錐 144 点、石匙 16 点、石篦 18 点、掻・削器等 A 類（U フレイク・R フレイク、ピエス・エスキーユ含む）68 点、掻・削器等 B 類 9 点、磨製石斧 24 点、磨製石斧未成品 5,008 点、打製石斧 1 点、「ハンマー類」13,181 点、台石 1,037 点、砥石 3,000 点、石皿 22 点、凹石 58 点、磨石 231 点、不明 2 点、剥片石器製作時の剥片 221,404.96g、その他（磨製石斧の製作剥片主体）の剥片 462,254.17g が調査で出土した。「ハンマー類」13,181 点のうち、2,086 点は多面体石で、また 493 点は通常の凹石に分類される可能性がある。

石製品は 457 点で、岩偶 1 点、玉類 14 点、その未成品 69 点、垂飾品 6 点、その未成品 10 点、有孔石 6 点、琥珀 3 点、環状石斧 4 点、その未成品 61 点、独鈷石未成品 31 点、石冠未成品 2 点、陽物型石製品 1 点、石棒（ほとんど未成品）8 点、石剣類未成品 219 点、不明（完成品）4 点、不明（未成品）18 点である。

鉄製品は 7 点、鉄滓は 9 点出土した。銭貨は 11 点出土した（中世末期の土坑墓の副葬品が多い）。

自然遺物として、アスファルト塊 1 点、生粘土塊 3 点、動物遺体（人骨含む。魚骨ではギギあり）、植物遺体（炭化クルミほか）、赤色顔料・赤鉄鉱、その他大量の炭化物（樹種はクリが多い）が出土している。

遺物の記載は図・写真図版と表で行い、本文中にはその補足と概要のみ記したので、ここで、図版、写真図版、表を見る際の留意事項について述べておく。

本章では遺構出土の遺物も含めているが、それぞれ、その種類の遺物の中で最初に並べている。遺構出土の遺物は、第Ⅴ章の後に遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第 78 図～第 86 図）。個々の遺物（遺構内）の出土状況は第Ⅳ章、第Ⅴ章を参照していただきたい。

遺物の掲載順序については、各種類の冒頭部分を参照していただきたいが、原則として、遺構→遺構外、前年度→次年度の順に並べている。なお、捨て場は遺構外に含めた。

遺構外出土の遺物は、遺構出土遺物の後に出土位置の順（はっきりしているもの→はっきりしないもの、はっきりしているものはグリッド順としているが、若干混乱がある）に並べている。出土位置の欄の遺構の①、②等については第Ⅴ章の冒頭部分、グリッドの①、②については第Ⅲ章を参照していただきたい。ST01 捨て場のⅣ a 層トレンチ出土分については、例えば「M Ⅰ 24 ～ 4･Ⅳ a 層トレンチ」のように、○～△と出土グリッドが示されているが、これは二つのグリッドにまたがってトレンチを入れたためである。煩雑さを避けるため△（後）の方は省略して記しているので、正確なグリッド名については第 55 図を参照していただきたい。なお、「～」でなく「､」となっている箇所もある。

観察表中のグリッドの後のアラビア数字の層は、捨て場（Ⅳ a 層）の細分層である。残念ながら（調査時の袋書きから）注記ミスが多い。例えば 3b 層を 2b 層に書き間違うなど。第 67 ～ 77 図等を参照して、正し

いものが判明した場合には直しているが、層序模式図にないからといって、そのグリッドにないとも限らない。内部にその層が存在し認定したこともあったからである。

観察表中の石器・石製品の石質欄の（奥羽）、（北上）等の略称については、本文中各種類ごとの冒頭に記している。

なお、第Ⅲ章に記したように、本遺跡の調査は途中で担当者に変更があり、引き継ぎの際、前年度出土品の整理は、次の段階まで進んでいた。図化で残っていたのは、陶磁器、剥片石器のごく一部、礫石器、石製品の玉類、銭・金属製品だけである。拓影貼り（土器断面トレースも含む）以外は、縄文・弥生土器、土師器・須恵器、土製品についてはトレースまで終了していた

観察表は全て次年度の担当者が作成したが、特に前年度担当者の記載を記す必要があるときは、表中括弧（「　」）内に示した。また、次年度担当者がうっかりしたため、図の表現（トレースの際の線の太さ）が年度ごとに違い、前年度は隆帯下端を細く、上（頂部）を太くしているのに、次年度は逆になってしまった。お詫びする次第である。

1　縄文・弥生土器（第 87 図～第 396 図、写真図版 52 ～ 241、観察表は図の方にある）

〔概要〕前年度は、大コンテナ（30 × 40 × 30cm）で約 45 箱、次年度は約 163 箱、計約 208 箱出土した。縄文時代中期末の土器が 2 ～ 3 箱、縄文時代後期初頭 ?、前葉、中葉、後葉～末、晩期前半、弥生時代中期（桝形囲式のみ）の土器が 1 ～ 2 箱（各いずれも数片程度だが、後期前～中葉はやや多く十数片程度）、晩期中～後葉が 2 ～ 3 箱、その他のほとんど全ては、縄文時代晩期末（大洞 A′ 式）～弥生時代前期（山王Ⅲ層式）と思われる。

〔掲載基準〕前年度は、登録土器を選抜し（仮番号を打ちノートに出土位置を記録）、その中からさらに選抜して掲載土器を決定した。ST02、03 捨て場出土土器は、細片まで極力登録対象とし、ST01 捨て場分（トレンチ出土分）は、次年度扱いとし登録を見送った。登録土器の点数は、ST02 捨て場 1,477 点、03 捨て場 303 点、遺構内 27 点、遺構外 184 点である。登録されなかった土器は、大コンテナ約 45 箱中 14 箱である。

次年度の掲載基準は、遺構内および ST01 捨て場のうち出土位置の明瞭なもの、ST01 捨て場の出土位置の不明瞭なもの（トレンチ出土分ほか）、その他の三つで異なる。遺構内云々は、文様のある部分は 4 × 4cm 以上、小型土器は 1/2 以上のものを掲載し、胴部や底部破片など時期の特定できないものは割愛した。遺構内はこの限りでなく、基準を満たさない土器でも必ず 1 点以上は掲載しているが、新しい自然堤防上の縄文時代晩期末～弥生時代前期の柱穴状土坑出土土器の場合は、本来は ST01 捨て場の方に帰属するものと思われるので、基本的に「捨て場のうち出土位置の不明瞭なもの」として扱い、一部のみ掲載した。また、出土点数が少ない時期・型式、他と大きく異なる特徴を持つ土器も、この限りでなく積極的に掲載しているが、概ね時期の不明な土器については通常よりかなり辛めで基本的に選んでいない。

ST01 捨て場で位置の不明瞭なものは、文様を持つ土器でも形を復元できるものや特に目立って変わったものしか選んでない。その他については、「基本的に選ばない」方針で、完形に近い土器や他に出土していない時期・型式に限って掲載した。

次年度は以上の方針で選別した結果、概算で 3,000 点になり、まあ妥当な数字ということで作業を進めていたが、拓影用土器を登録する段になって 4,000 点を越えていることがわかり（概算したときに数えていなかった土器があったことが判明）、これでは多すぎるので約 1,000 点減らそうということになった（8 月 11 日）。多

めに選んでいる捨て場から削ることとし、最初自然堤防上で層序に乱れが想定される捨て場周縁部から減らしたが、とても足りず、次に、文様があっても5×5cm以下のものや、それより大きくても時期が特定できないもの（水平沈線のみなど）、形が推測できない破片を取り除いて、やっと現行の3,000点弱とした（前年度を含めて3,691点）。

なお、次年度出土分のうち、掲載土器と同一個体破片で接合しないものについては、原則として、1点のみ掲載して、その他の破片については観察表や文章で補足するに留めたが、一部徹底していない所がある。

〔掲載順序〕本章冒頭に述べたように、出土位置に従って並べた。大きくは、遺構内→遺構外で、それぞれの中は年度順にした（前年度→次年度）。各年度ごとの遺構外は、原則としてグリッド順、層順に並べているが、統一が取れていない部分が多い。特に、3層の後に3上層が来てしまっていることなど。3115は、3層なのに4-5層の後にある。記載ミスや入力ミスも多く、1352がここに位置しているのは、グリッド名のＮＩをＭＩに書き間違ったためである。また、複数の地点から出土した土器片が接合した土器については、原則として一番“若い"グリッド、層に合わせて配置しているが、徹底していない場合が多い。

〔記載要領・表の見方〕記載は基本的に図と表で行ったので、最初にその作成要領、表を見る際の留意事項について述べておく。なお、掲載土器が多量のため、観察していくうちに考えが変わってきても、途中から遡って変更することはできなかったことをお断りしておく。

番号。仮番号の段階では同一個体についてはA、Bとふっていたのだが、本番号付けの段階で手違いで違う番号をふられてしまい、わかりづらくなってしまった。

出土位置等の欄に示した分数は、掲載土器のうちその場所から出土した土器がどれだけの割合あるのかを示す。

器種のうち、「袋物」とは、壷や注口土器などの袋状を呈した土器の総称である。蓋の部位は、把手と傘部分に分け、どちらも土器の端は口端と表現した。本遺跡からは弥生時代前期の土器も比較的多く出土しているのだが、縄文時代晩期末からの系統性を考え、「甕」という用語は使用せず、全て「深鉢」で統一した。観察をしていくうちに器種名称にブレが生じてしまっている（特に深鉢と鉢）。器高20cm程度で文様を持つものは、プロポーションは深鉢でも鉢に分類している。

外面、内面の観察事項の欄の「→」は施文順序を表す。水平沈線は、破片の場合、全体が水平だという保証はない。

備考の欄。「赤色付」は赤色付着物の略である。「スス」「オコゲ」「黒斑」については註1。「焼けはじけ」とは、煮炊きによって土器の表面に直径0.5～1cm程度の円がたくさんできたように剥落した状態を示し、剥落がひどい場合を「ただれている」と表現している。

上記以外の事項については本章の冒頭部分を参照していただきたい。なお、掲載順序についても、冒頭に述べたとおりなのだが、不注意で不手際が生じている。

〔図〕前年度出土分については、整理作業を引き継いだときには基本的にトレースまで済んでおり、拓影貼り合わせなど一部残っていた作業は、調査員が野外に出ている間に進められた。次年度出土分については通常どおり調査員のいる中で作業は進められたが、いざ図版作成の段になって、できあがったトレース表現に違いが認められることがわかった。それは特に隆帯や貼付表現に顕著で、前年度は低い方を細く高い方を太くしているのに、次年度は逆なのである。わかりづらいが、既に時間的に修正は不可能であったので、そのまま掲載することにした。

〔出土状況〕遺構内遺物の個々の出土状況は、第Ⅳ章、第Ⅴ章を参照していただきたい。出土量の大半を占

める縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器は、捨て場（Ⅳa層遺物包含層）からほとんどが出土し（一部遺構からも）、縄文時代中期末の土器は、竪穴住居跡と遺物包含層（Ⅳc層）から、縄文時代後期中葉の土器は、土坑を中心に出土し、その他の時期の土器は、基本的に遺物包含層から他時期と混じって出土している。

本遺跡の土層の堆積状況は、基本土層に区分したように遺物包含層が洪水堆積層にパックされることを特徴とし、該期の場合は、縄文時代晩期中葉～弥生時代中期（Ⅳa層）、洪水堆積層（Ⅳb層）、縄文時代中期～後期中葉（Ⅳc層）となる。縄文時代後期後葉～晩期前葉の土器も出土しているが、数が極端に少なくて細片が多く、また出土位置もカクランを中心にマチマチで、どちらに帰属するか明確でない（可能性としては、晩期初頭を中心に上下層に分かれそうだ）。

縄文時代以来の大きな自然堤防の西斜面と東斜面には、前記二つの包含層が存在するが、両者は洪水堆積層によって隔てられているので、二つの時期の土器は基本的に混じっていない。新しい自然堤防（Ⅳb層で構成）上は、Ⅳc層は存在しない。縄文時代以来の自然堤防上は、洪水堆積層が及んでいないので、各時期の遺物が混じる可能性があるが、遺物自体の出土量が少なく、また遺構の重複も少ないので、あまり混じっていない。このように、本遺跡の出土状況は極めて良好で、特に縄文時代晩期中葉～弥生時代中期と縄文時代中期～後期中葉の両者間は明瞭に区分される。また、それぞれの中での細かい時期差も、包含層の中での上下関係（層位差）や遺構を含めた地点の違い（地点差）に現れ、良好であると言える。

出土量の大半を占める（〔概要〕参照）、縄文時代晩期末（大洞A′式）～弥生時代前期（山王Ⅲ層式）は、その5/6近くが新しい自然堤防上～後背湿地底に存在するST01捨て場から出土しているが、残りの1/6は、この後背湿地の北側延長部分に相当するST03捨て場（第6図、第8図、第9図参照）、縄文時代以来の自然堤防の西側斜面の一部に相当するST02捨て場から出土している（第6図、第8図、第36図）。ST03捨て場は調査できた部分が少ないので、残り1/6の大半はST02捨て場からの出土である。

〔残存状況〕高坏の台部と本体の間の欠損が顕著に見られたり、小型の壺や浅鉢は残りがよいという、構造上弱い部分が壊れているという傾向で、特に変わった状況は読みとれなかった。3404の蓋は、傘、把手とも口端が一周欠けているが、これは使用状況に関係するか。

〔器種組成〕縄文時代晩期末～弥生時代初頭では、高さ10cmくらいの小型の鉢と大形浅鉢が一般的な組成をなしているようである。縄文時代晩期後半では、胎土や整形に見るように大洞A′式古まで精粗の分化があまり顕著でなく、より顕在化するのは大洞A′式新期以降である。

〔型式学的特徴〕（胎土）縄文時代晩期末～弥生時代前期では、胎土は砂を混入するのが普通なので、観察表では特に多いものだけ記した。粗製土器では砂が目立つのに対し、精製土器では金雲母を混入するのが普通（特に山王Ⅲ層式）で、当時の人の分類・扱いが示唆される。この点で、縄文のみの蓋は、金雲母が見られず、粗製土器の一種と言える。また、金雲母の混入は、大洞A′式古辺りから始まり、それ以前は精製土器と言えど基本的に見られず、大洞A2式と思われる3514にはないし、もちろん後期中葉にもない。

（成形）2451は、蓋の傘天井に網代痕が見られ、製作工程を示唆するものかも知れない。

（形）縄文時代晩期末～弥生時代前期では、高坏の胴部と浅鉢の違いとして、高坏の方が大きく開いており胴部の角度は緩やかで、さらに底部から口縁に向かって丸く弧を描いているのに対し、浅鉢は胴部の角度は急で底部から口縁に向かって直線的である。観察表作成途中で気づいたので、初めの方は十分に区別できていない。

（文様・装飾）縄文時代晩期末では、隆帯上に刻目列を持つものが比較的多く見られ（例えば1767、1909、2868、3311、3314、3381）、地域性を示しているのだろうか。やや異なるが、弥生時代前期にも刻目列が認められた

（2648、3636）。変形工字文の施文技法変遷について、本遺跡の傾向から、古い段階で、粘土を大きく彫り去り（その一部を）左右に寄せ集めて粘土粒を作っていたのが、新しい段階で粘土粒を別のところから調達し、彫り去っていた部分が刺突やナゾリとなるという見通しを持っていたのだが、粘土粒を明らかに貼付している例が大洞A2式にあり（2268）、一概には捉えられないかも知れない。

（地文・縄文原体）（弥生時代前期）の蓋は、縄文を転がした後触らざるを得ないことが多いらしく、ナデで縄文がつぶれている箇所多い。縄文時代中期の土器は、縄文原体が複節らしいものが多く、単節に見えたものも複節の可能性が高い。縄文時代晩期末～弥生時代前期の粗製土器の胴部縄文の施文方向は、肩部がヨコ、胴上部がナナメ、胴下部がタテ、底部付近ヨコ、ナナメを原則とし、転がしやすさを考えているようだが、大きさによっても異なり、厳密ではない。

（整形）縄文時代晩期末～弥生時代前期の粗製深鉢でもミガキが施されているものがある（例1455）。
縄文時代晩期末～弥生時代前期の壷に表面剥落しているものが多いのは、整形上の理由であろうか。2900も、表面の“皮"が浮き上がってきている。

（色調）弥生時代前期山王Ⅲ層式になると、それまで赤～朱色を基本とする色調だったのが茶色を基本とする色調に顕著に変わる。

（修理）746は、補修孔が10、2565は、補修孔が6つもある。3629は、補修孔が未貫通である。

（再利用・転用）2449は、把手端の割口を整形している。2273も、転用「紅皿」か。3182は、壷を鉢に転用したものか。

〔用途が推定できる土器〕赤色顔料容器と考えられるものが比較的多く出土している（1108、1177?、1343?、1882、1884?、2273?、2902）。1343には、内面に赤鉄鉱の塊が見られた（土含む）。

〔ミニチュア土器・異形土器〕ミニチュアおよびやや小型と思われる土器は、132、154、165、170、171?（やや）、174、198、205、221（やや）、229（やや）、269、275（やや）、290、321（やや）、325、348（やや）、360、373（やや）、387、391（やや）、414（やや）、438（やや）、496、537、657（やや）、673（やや）、678、731、886（やや）、898（やや）、1153（やや）、1511（やや）、1324、1683（やや）、1697（やや）、1726（やや）、1732（小蓋?）、1744（やや）、1748（やや）、1775、1828（やや）、1903（やや）、1906（やや）、1948（やや）、1949（やや）、1951（やや）、1958（やや）、1981、2029（やや）、2078（やや）、2127（やや）、2174、2182、2190、2235（やや）、2241、2290（やや）、2273（やや）、2303（やや）、2328（やや）、2335（やや）、2362（やや）、2424（やや・把手とアンバランス）、2460、2506、2527、2541（やや）、2628（やや）、2856（やや）、2753、2806、2917、3011（やや）、3134（やや）、3148（小?）、3214（所謂袖珍土器）、3321、3334、3427（やや）、3455（高坏としてはやや小）、3466、3484、3489、3544（やや）、3618（やや）、3681（やや）、3690（やや）、3691（やや）

異形あるいは、やや変わった土器と思われるのは、157、224、452、739、889（特大蓋）、1142、1188（変わった器形の高坏）、1189（やや）、1229（やや）、1339（やや）、1477（やや）、1628（特大深鉢）、1809と1872（註2）、1874、、2093（器種不明）、2106、2181、2182（やや）、2195、2220、2240、2252、2271、2304（異形壷）、2307（特大深鉢）、2313（やや）、2318、2427（やや）、2782（壷?）、2854（やや）、2864、2887、2991（手づくね）、3009、3035（やや）、3068、3088（やや）、3205、3215=3221、3263、3291、3395、3408（やや）、3429、3465、3479（やや）、3492、3551（器形やや変）、3677（やや変わった蓋）、3686。

〔クマ形突起〕265は、クマ形突起を持つ。土製品で扱う、写真図版253の120の動物形把手は、言うまでもなく土器の一部である。3241も、動物形把手??　3624は、クマ形突起？

〔異系統土器〕かなり注意してみたが、遠賀川系の土器は確認できなかった。この地域の地域性として、石川日出志が指摘するようとおりである（石川　2003:p.363、2005:p.2）。

弥生時代前期の1524、2645?は、東北地方北部の粗製系。特に1524は、砂沢式の粗製深鉢の搬入品か。弥生時代初頭の3094は、東北地方北部系の深鉢？　2864は、砂沢系か。3645の突起も、砂沢式の影響か。

その他、平成17年7月24日の岩手考古学会の際、識者から次の点が指摘された。3514は、文様、さらに丸底で色が黒っぽい（他の土器より明らかに黒い）ことから、阿武隈川流域（仙台市赤生津遺跡より南）からの搬入品であろう。2318は、仙台湾周辺からの搬入品か。2822、2823も、仙台湾からの搬入品か（原式?）。2056、2658、3619は、鱸沼式（搬入品？あるいはそのもの）らしい。3619は、内面の整形が雑なので台かと思ったが、筒形土器のようである。2975は、砂沢式の搬入品のようである。3221は、福島県辺りからの搬入品か。3613は、内面ハケメ整形で明らかに弥生系の甕のようである。

1317は、大船渡市下船渡貝塚の土器によく似ているようだ（文様が頼りなげで確かに他と違う）。2040は、秋田県横長根遺跡の土器に似るが、そのものではない。2427は、山形県小田島城跡などの土器に似るが、交点の処理の仕方が異なる。

大洞A2式、砂沢式、鱸沼式には、変形していない「そのもの」の土器が存在するようだ。特に阿武隈川流域との結びつきは継続的で、それはむしろ地理的に近い松島湾と比べて顕著である。すなわち、本遺跡では、山王Ⅲ層式と桝形囲式の間を、鱸沼式よりはるかに地理的に近い寺下囲式が埋めるものと考えていた。しかし、寺下囲式に相当するものは見出せず、その欠落に悩んでいたのだが、それは寺下囲式ではなく鱸沼式が分布するためであったのである。

〔付着物・圧痕、その他〕赤色付着物は、全体的に残りが悪く、沈線底に痕跡的に見られる程度である。1786は、外側に特にぶ厚いススが付着している。2385の内面には、“漆状"の付着物が見られ、皮のように浮き上がっている。

1837は、底面に籾圧痕の可能性を考え掲載したものであるが、その後本遺跡の土器を通覧し他の遺跡の籾圧痕土器を見た結果、今回の調査では籾圧痕土器は出土していないとの結論に達した。3220も、籾圧痕土器の可能性を考え掲載したもの（これが一番可能性ある?）。

〔特徴的あるいは例外的な土器〕375の土器は、胴部に縄文施文忘れたものか。1221は、あくまで土器の一部で「土製品」ではないと思う。1267は、蓋なのに赤色付着物が見られミガかれている。1628の粗製深鉢は、口縁内面に縄文を持つ。1643は、小型壷なのに底部穿孔され赤色付着物が見られる。1736は、突起が変。1855は、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の粗製土器には珍しく頸部の作り出しがない。1861は、変わった工字文。1880は、変わった文様。1909は、やや変わった土器。1934は、合わせ口土器の蓋か。1938は、文様を描いてはいるが（真似してはいるが）、粗製土器のようであり、胎土に金雲母も含まない。2142は、文様が変わっているが器形もやや変。2273は、付着物から推測すると転用紅皿（赤色顔料の容器）か。2449は、把手端の割口を整形。2451は、蓋の傘天井に網代痕が見られる。2452は、高坏なのに無文である。2459は、文様一端描いて消している。2558は、底部穿孔。2565は、補修孔が6つもある。2581は、蓋なのに貫通孔（蒸気孔?）を持ち、胎土金雲母含まないのに把手内赤色付着物。2588は、文様やや変わっている。2648は、弥生前期なのに刻目列を持つ。2864も変わっている。2868は、刻目帯を持ち文様変わっている。3245は、文様が変。3394は、器形・文様構成においてやや変わっている。3569は、文様雑なのにミガキ。3636は、弥生時代前期なのに内面に刻目列。3637は、文様稚拙なのにミガいている。

〔時期・型式〕時期・型式を同定するに当たっては参考文献に掲げたものを参照した。時期別の出土量につ

いては、〔概要〕参照。

縄文時代中期末葉。大木10式と思われるのは、25?、26、27、28、38、40、43、44、45、48、49、50、51?、52、53、54、55、56、57、59?、666、667、668、686、690?、691、693?、694、699、710?、718?、722、724?、725、726?、730、734、1344、1345、1346、1347、1348、1349、1350、2471、2472、2477、2481、2484?、2485。大木10式と推定はできないが中期末と推測されるものは、21、29、30、31、32、33、34?、35、36?、37?、39、41?、42??、46?、47?、58、672?、689（後期前葉?）、692??、2483。

縄文時代後期初頭。門前式の可能性があるのは、712、717、3649?

縄文時代後期前葉。大湯式（金子　1998）の可能性があるのは、662?

縄文時代後期中葉。「新山権現社1式」（註3）に相当すると考えるのは、7～17、18??、19、20??、483??、512?（弥生?）、682?、683?、695??、698??、705?、706～708、711?、713、714?、715、716、721、723、740、741、745。「新山権現社2式あるいは3式」（註3）2473、2767。

縄文時代後期後葉。瘤付土器第Ⅰ段階（註4）と思われるのは、664、同第Ⅱ段階の可能性があるのは、685、737、同第Ⅲ段階と思われるのは、320、736、738。

縄文時代後期末～晩期初頭（大洞B1式古）と思われるのは、702。

縄文時代後期末～晩期前葉と思われるのは、655、677、687。

縄文時代晩期前葉。709は、大洞B2～BC1式。669と744は、大洞BC2式か。681は、大洞BC2～C1式くらいか。

縄文時代晩期中葉後半（註5）。大洞C2式古と思われるのは、2、684、728、1917?　大洞C2式中と思われるのは、1261。大洞C2式後半と思われるのは、1255、1262。大洞C2式の範疇と思われるのは、329、435?、1110?、2293?、

縄文時代晩期後葉。大洞A1式と思われるのは、3?、1227、1230。大洞A2式と思われるのは、754、853、859?、860、1252、1622、2268、3514。大洞A1～A2式と思われるのは、1228?、1229?、1245?、1246?、1247?、1248?、1249?、1250?、1613。

弥生時代中期。桝形囲式と思われるのは、619、1506?、1507、2373、2374、3022、3613?

残りのほとんど全ては、一部大洞A2式を含む可能性があるが、基本的には縄文時代晩期末（大洞A′式から）～弥生時代前期（山王Ⅲ層式まで?）に含まれると考える。山王Ⅲ層式と弥生時代中期桝形囲式の間には、寺下囲式が入ると考えられているようだが（須藤1983）、類例が少なくて不明瞭なため、本遺跡から出土しているかどうか定かでない。ただし、標式資料と対照する限り、明確に寺下囲式と言えるものは出土していない。すると、本遺跡では、この時期に断絶が見られることになる。不自然だが、寺下囲式が岩手県中央部まで広がるのかという地域性にも配慮せねばならず、現状では何とも言えない。

このように考えていたのだが、前述のように平成17年7月24日の岩手考古学会の際の識者の指摘により、寺下囲式ではなく鱸沼式が存在することがわかった（2056、3619など）。

（1）遺構出土の土器（第87図1～第104図217、写真図版52～62）

前年度遺構→次年度遺構の順に掲載している。竪穴住居跡は縄文時代中期末、土坑は、縄文時代後期中葉、晩期末～弥生時代前期の土器を主体とし、その他の遺構は縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器を主体とする（第78～86図）。

（a）竪穴住居跡出土の土器（第87図1・2・第89図25～第93図59、写真図版52～55）

SI02 住居跡だけで、出土土器のほぼ全て縄文時代中期末と思われる。なお、SI01 住居跡からは晩期中葉の土器片なども出土しているが（第 87 図＝第 78 図 1・2）、住居自体は古代のものである。

以下、観察表の補足。27 には、同じ場所から出土して接合しない 1/5 周の土器片がある（ただし「覆土」として取り上げ）。外面の最大径より下二次焼成を受け、内面は全体的にただれている。32 と 33 が、なぜ掲載されたのか不明である。選別時のミスか。47 の外面は、幅 3 ～ 4cm で垂直方向に帯状に広がる黒い部分があり、その他の部分は二次焼成で赤い。内面は、底面から 2.5cm の高さまでが肌色で、それより上は黒い。56 の図の右下角の裏面、角を中心に、右上に続く辺約 5cm、左に続く辺約 3cm の、扇状に広がる範囲に黒色付着物見られる。コゲというよりは墨で描いたような感じ。

（b）炉跡・焼土出土の土器（第 93 図 60 ～第 98 図 134、写真図版 55 ～ 58）

炉跡は、全て新しい自然堤防上、焼土も、土器が出土していない SN01 ～ 03 を除けば（時期も他と異なる）、ほぼ全て新しい自然堤防上で（SN30 のみ自然堤防上から続く後背湿地上の捨て場上部）、遺物包含層中～下に確認され、出土土器も、ほとんど全て縄文時代晩期末～弥生時代前期である。

以下、観察表の補足。60 の胴下部～底面が欠けているのは、野外での取り上げ時に粉々になってしまったためで、元はあった可能性が高い。92 の出土場所、焼土中が 2/3、焼土下が 1/3。94 の取り上げ場所、「焼土内」が 1/55、「焼土下 2 層」が 42/55、単に「焼土」として取り上げたのが 12/55。101 の口縁内水平沈線が、突起下では突起につられて上方に延びて幅を広げている。103 は、内面整形と口端摩耗から台と判断した。

（c）土坑出土の土器（第 87 図 4 ～第 88 図 22、第 98 図 135 ～第 101 図 183、写真図版 52、58 ～ 60）

前年度は、全て縄文時代中期末～後期中葉の土器（21 が中期末で、それ以外は全て後期中葉の土器のようである）、次年度は、土器を出土した土坑が全て新しい自然堤防上～東斜面の包含層中にあることから、全て縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器である。縄文時代後期中葉の土器は、全体の出土量がそれほど多くないのに、土坑から比較的多く出土していることが注目される。

以下、観察表の補足。10 の出土割合、SK30 土坑が 3/5、Ⅰ Ⅵ・Ⅳ c 層が 2/5。13 の出土割合、SK30 土坑が 7/8、Ⅰ Ⅵ・Ⅳ c 層が 1/8。残存状態が異なる三つの部分とは、SK30 土坑 7/8 のうち 6/8 が残りやや悪く肌色、1/8 が残り良く内面黒い、Ⅰ Ⅵ・Ⅳ c 層出土分は中程度で灰色。177 の外面は、ほぼ中くらいの高さを境に、上半分がスス付着し焦げ茶色で下半分がクリーム色、その境は細い帯状にタール状の付着物が見られる。内面は、下半分のさらに横半分に炭化物が付着し黒い。外面と内面で基本的な色は同じである。183 の取り上げ、「SK91 土坑・2 層」が 1/3、単に「SK91 土坑」で取り上げたのが 2/3。所々欠けるという割れ方で、ある一箇所の全部が欠けるという在り方ではない（胴下半部は欠けている所多いが）。外面は、最大径より上はススや吹きこぼれ？が認められ、それより下は場所によって異なり、基本的には白っぽいが、一部二次焼成で赤く、下から 2cm くらいの高さまでは黒っぽい。内面は、最大径より上はコゲが斑状に見られ、底から 4cm 上に幅 8cm 程度の帯状にコゲが見られ、上下のコゲの間の中間部分は白っぽい。

（d）柱穴状土坑出土の土器（第 101 図 184 ～第 102 図 206、写真図版 60 ～ 61）

次年度に検出された該期の柱穴状土坑は、ほぼ全て新しい自然堤防上に検出されたため、出土土器は全て縄文時代晩期末～弥生時代前期である。しかし、柱穴状土坑は捨て場中に掘りこまれているため、実際にはほとんど全て捨て場からの混入と思われる。したがって、掲載してもあまり意味がないと思われるので、（掲載基準を満たしていても）半分程度割愛した。

以下、観察表の補足。186 の口縁内面沈線は、突起下で突起頂部に引っ張られ上に山状に広がっている（痕跡的だが）

（e）土器埋設遺構出土の土器（第 88・89 図 23・24、第 103 図 207・208、写真図版 52・53・61）

いずれも、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器で、新しい自然堤防上に検出された SR01（23）と SR03（207、208）は、山王Ⅲ層式、縄文時代以来の自然堤防上に検出された SR02（24）は、（大洞 A2 式～）大洞 A′ 式古期と思われる。

23 の胴下部は人為的に穿孔されたものか。穴の内側の周囲に剥落が認められる。24 の口縁部二山突起の突起内山と山の間には口唇沈線なし。匹字文だが、ネガ部を削って左右に粘土を盛っている。207 の外面は、所々黒斑が見られ、口縁から胴部へ釉薬が垂れるように赤い部分が広がる。内面も真っ赤なのは二次焼成を受けているためか。内外面とも、輪積痕が下半部に残る。底面の穿孔部分は、内面では周囲が欠けて剥落しているのに対し、外面はそうでない。208 は、高坏の転用と考えるのが自然だが、高坏にしては口縁部の屈曲がほとんどない。底部付近のみが欠けておらず、先端部分は別に出土している（第 51 図、写真図版 45）。内面には酸化鉄様のものが付着。内面口縁は、水平沈線の他に口縁の形に沿う沈線を持つ。

（f）その他の遺構出土の土器（第 87 図 3・第 104 図 209 ～ 217、写真図版 52・61・62）

溝跡から出土しているが、明らかに混入である。大洞 A1 式か。

（2）遺構外（捨て場含む）出土の土器（第 105 図 218 ～第 396 図 3691、写真図版 62 ～ 241）

前年度調査の ST02 捨て場出土分は、218 ～ 226、228 ～ 550、ST03 捨て場出土は、227、551 ～ 649。次年度に主として調査した ST01 捨て場出土分は、739、746 ～ 1343、1352 ～ 2470、2473 ～ 2476、2488 ～ 2580、2582 ～ 3610、3612、3615 ～ 3689、3691 で、2471 ～ 2487 付近の欠番は、南東区南部のⅣ c 層、それ以外の欠番は、捨て場範囲内ではあるが出土層が異なるものである。これらの捨て場からは、基本的に縄文時代晩期中葉～弥生時代中期の土器（ほとんど晩期末～弥生時代前期）が出土している。

捨て場以外でも、時期によって出土位置が比較的偏る傾向が見られる。縄文時代中期末の土器は、J Ⅵ～L Ⅴグリッド付近の縄文時代以来の自然堤防の西斜面、F Ⅸ～M Ⅸグリッド付近の同東斜面（Ⅳ c 層）から点々と出土。J Ⅵ・Ⅳ c 層を中心にした I Ⅵ～K Ⅲ、Ⅵグリッドの調査区境付近（682 ～ 745 付近）では、縄文時代後期中葉の土器が顕著に出土している。G Ⅷ～H Ⅵグリッド付近の風倒木痕から、縄文時代後期後葉の土器小片が出土している（736 ～ 738）。E Ⅳ～M・N Ⅱグリッドの縄文時代以来の自然堤防の西斜面に、晩期前半の土器小片が点々と出土している。

なお、土偶に含めていた写真図版 247 の 44 は、観察表作成の時点で「土器の脚」であると気づいた。

218 の口縁部突起は、丁度間の部分だけ欠損しており、故意によるものか。口縁内面沈線、水平と口の形に沿うものの二つ。238 には、接合しない胴部、底部破片あり。胴部破片は、7 × 7cm 片 4、5 × 5cm 片 13、3 × 3cm 片 20 ある。底部破片は 2/3 周分あり、こちらでは底面はナデているようにも見える。265 には、接合しない同一個体口縁部破片が 2 つあり、片方の破片には図示したのと同様のクマ形突起が見られる。267 の出土割合、F Ⅷ 15 が 1/273、F Ⅷが 16/273、F Ⅸ 11 が 224/273、F Ⅸが 32/273 である。270 の出土割合、F Ⅷ 17 が 2/5、G Ⅷ 13 が 3/5。両者は残存状況が異なり、外面は F Ⅷ 17 の方が残りが良いが、内面は G Ⅷ 13 の方が残りが良い。F Ⅷ 13 の方は内面黒く、G Ⅷ 13 の方は外面は F Ⅷ 13 より摩耗しているが、内面はクリーム色を呈す。274 の外面は、写真図版 64 に見るように、下半にスス付着し口縁から吹きこぼれたような跡がある。内面も同じ場所に同様の痕跡あり。276 の出土割合は、注記不十分で不明。胴部最大径から下で底部から 10cm 上までと口縁部に帯状にススが付着。282 の外面、口縁部に帯状にスス付着し、胴部にもススあるが、むしろ二次焼成で赤くなっている。内面は逆に口縁部幅 1.5cm を残し（赤い）下はコゲ付着。288 の外面

底部付近スス付着し、底面も縁だけ付着している。内面は底部から7cmより上にコゲが付着。292は、中が覗けないので出土割合不明。肩部は粘土接合面から剥離。295の出土割合、G Ⅶ 9が5/7、G Ⅷ 11が2/7。出土位置によって残りが異なり、G Ⅶ 9は摩耗、G Ⅷ 11は残りが良い。296は、粉々の破片が完形に近い状態まで復元されたものであり、また個々の破片の出土位置がモザイク状に入り混じっており、さらに次年度のように出土割合を出すことを想定して注記していないため、出土割合を出すのは非常に困難である。ただしG Ⅷ 10・Ⅳ a1層が主で全体の1/4ほどを占めることは間違いない。300の出土割合、G Ⅶ 10が4/23、G Ⅶ 10・Ⅳ a2層が9/23、G Ⅷ 6・Ⅳ a2層が5/23、G Ⅷ 11・Ⅳ a2層が5/23。305の取り上げ割合は、「G Ⅶ 10」が2/9、「G Ⅶ 10・Ⅳ a2層」が7/9。他に接合しない同一個体破片が5 × 5cm程度で4片あり、これらを含めた取り上げ割合は、前者が4/17、後者が13/17となる。315の出土割合は、「G Ⅶ 15」が2/9、「G Ⅶ 15・Ⅳ a2層」が2/9、「G Ⅷ 11」が5/9。336は、口縁から底部に向かって帯状にスス状付着物が見られ、周囲は赤い。337は、注記不十分で出土割合不明。338の出土割合、G Ⅷ 6が1/3、G Ⅷ 12が1/3、G Ⅷ 13が1/3。349の注記剥落し出土割合不明だが、H Ⅶ 20とI Ⅷ 8が主。同一個体で接合しないG Ⅷ 11とG Ⅶ 25出土（接合している）口縁部破片あり。350は、注記不十分で割合不明。突起頂部に刻目。365の外面の摩耗は、二次焼成によるものか。注記していないは片あって不確かだが、出土割合は、G Ⅷ 16が13/15、G Ⅷ 21が2/15。375の胴部は、縄文施文忘れか。388の内面は、上下で帯状に色が異なり、その割合はほぼ1:1で文様帯の位置にほぼ対応し、上が黒、下がクリーム色である。外面も、これに近い。402の出土割合、H Ⅶ 5,10,15,20,25が3/4、H Ⅶ 5が1/4であるが、同一個体で接合しない破片がH Ⅶ・Ⅱ層から出土しており、それを含めると、前者が3/6、後者が1/6、H Ⅶ・Ⅱ層が2/6となる。429の出土割合、H Ⅷ 3 ～ 5が6/37、H Ⅷ 6が5/37、H Ⅷ 11が12/37、H Ⅷ 24が4/37、I Ⅷ 2が4/37、I Ⅷ 2が4/37、I Ⅷが6/37であり、これらの残存状況は変わらず、外面スス内面コゲが認められる。貫通孔はほとんど外側からの穿孔のようである。438は、接合しない同一個体片があり、H Ⅷ 11から出土したのは口縁から胴下部まで1/2周残存するもので、H Ⅷ 6から出土したのは口縁から胴中央まで1/4周強残存するものである。443の外面は、底から1.5cmが赤い他はススびっしりで、底面は、中央に円形にススが付着し、その周囲は赤い。内面は、底面から3.5cmの高さにきっ水線があり、それより上はコゲがびっしり付着。457の外面、肩部中心にスス付着するが、その上下にも見られる。内面のコゲは、下半に見られ帯状に広がる。469の内面底、周囲1.5cmを除いた中心の直径4cmの範囲が、スポットライト状に赤～クリーム色に残り、それ以外はコゲがびっしり見られる。固形物も残っており成分分析できないだろうか。475の口縁内部の沈線太い。外面全面スス付着、内面、胴下部～底を除いて、上部コゲ付着。486の内面、底から5cmまで黄色くて、その上コゲ付着。外面、全体的に摩耗しているが、一部分だけ黄色く二次焼成を受けているような場所がある。487の外面、胴最大径より下全面スス付着し、口縁部も一部に。内面は、肩部以下二箇所にパッチ状コゲが付着。506の壺は、接合済みで中が覗けないので出土割合不明。511の内面、底部から6cm上にきっ水線が見られ、その下は肌色。外面は二次焼成で赤くなっている所あり。胎土砂多い。525の内面のコゲは、肩部以下に見られ、ほぼ帯状に広がっている。532の文様交叉部刺突で、ケズリは見られない。535の外面、胴上部の屈曲より上スス付着し、それより下は白い。567の内面、頸部の屈曲から下8cmにきっ水線があり、屈曲ときっ水線の間に帯状にコゲが広がる。603の出土割合、E Ⅳ 17が5/11、18が3/11、22が3/11で、E Ⅳ 17からは接合しない破片が4/11程度出ており、これを加えると出土割合は、17が9/15、18が3/15、22が3/15となる。614の出土割合は、注記不十分のため不明だが、トレンチでの出土が主体を占める。E Ⅳ・Ⅱ層、E Ⅳ 17から、接合しない同一個体片が出土しており、口縁から底まで1/5周程度分ある。底部穿孔が途中まで行われており、穿孔は内面からが主だが、外側も少し開けている。底部以外の

欠損で中止することになったのだろうか。内外黒斑見られる。638の内面沈線、水平と口の形に沿うものの二つだが、水平の方は、ずれてすれ違いになって段になっているところがある。639の外面上部と内面台部に黒斑あり。640の出土割合、石膏で汚れている所があり不明だが、トレンチ出土が8/20、EⅣ19が10/20、19か24が2/20程度か。EⅣ19か24から出土したのは、それぞれの出土位置から同じくらいの割合で接合しない同一個体破片が出土しており、さらにEⅢからも同一個体破片が出土しており、前記の割合では1/20以下に相当し、2×3cm片1点のみである。これら同一個体破片は、接合しており、口縁から胴下部まで1/5周程度ある。645は、胴上部が1/3周以上、底部が3/4周以下残っている。注記不十分で割合不明だが、トレンチ出土がほとんどを占める。他に、口縁～胴下部まで1/6周程度の接合しない同一個体破片があるが、アチコチ欠けているので実際にはその1/3程度の分量しかない。同一個体破片の出土位置は、トレンチ出土が2/3とやはりほとんどを占め、残りの1/3を掲載分と同様EⅣ・Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅳa1層が占める。外面縄文以下は赤い。内面下部にはコゲと言うよりスス状の付着物が見られ、ススは口縁部にも見られる。外面、胴最大径から下、底より8cm上までススというよりコゲ状の付着物が見られ、それより下は二次焼成で赤い。底より8cmという線に対応して、内面も、ここより下はコゲの色が変色している。口縁内面沈線は、いいかげんな施文である。696胴部の縄文施文方向は、上部ヨコ、中央ナナメ、下部タテで、縄文施文部は全体的に摩耗している。746は、珍しく台の内部もミガいている。口縁～台下まで10～12cmくらいの幅で、摩耗している所がある。極めて補修孔が多く、二個一対の場所が7箇所、欠けているため一個だけしか確認できない場所が3箇所ある。これらは、いずれも土器の半周に集中している。欠損部分が比較的多くあるので、おそらくもっと多くの補修孔が存在するものと思われる。747の外面底部付近二次焼成で赤い。内面は、底から4.5cmにきっ水線があり、それより上にコゲが認められるが、底面にもコゲ状の付着物が見られる。土器はあまり割れておらず、胴部は二つに割れているが、口縁、底部は、それぞれの部位の中で割れていない。763の突起上部には、短沈線が横にあり、その両側には縦に刻目が入る。口縁内面沈線は、水平と口の形に沿うもの。外面全面スス、内面全面（底面も）コゲ付着。772の出土割合、2b層が22/27、3上層が4/27、3中層が1/27。口端が隆帯状に肥厚しているため、内面突起下では、水平沈線との間に三角形状の窪みが見られる場所も。底部縄文なし。内面底黒斑見られる。補修孔は、内側から穿孔か。775の出土割合、LⅡ19が2/10、20が5/10、20～25が3/10。内面も丁寧にナデており粘土のつなぎ目ははっきりしない。827には、3中下層から接合しない同一個体胴部破片が出土（20×12cmの面積分）。外面肩部以下剥落、内面胴中央～肩部剥落。内面は指圧痕が見られ粘土のつなぎ目あまり顕著でない。828の内面、底から4cm上にきっ水線があり、その上幅3cmにわたって帯状にコゲが認められる。847の内面、底から6cmの高さにきっ水線（胴ほぼ中央）が見られ、その上口縁部までコゲがある。内面底粘土まくれ痕。855の外面底面に黒斑。内面底面から5cmの高さ（胴中央よりやや下）にきっ水線、その上コゲ。856の内外面赤い？　沈線底粘土まくれ痕少し。857の接合しない同一個体片の外面上部にスス、内面上部にコゲ付着。861は、LⅡ25・1層から出土した接合しない同一個体口縁部破片6×6cmがある。862の出土割合、トレンチが1/17、3上層が16/17。3上層出土部分は、3～4片からなり、そのうちの1つが3/4を占め、くの字に近いような変わった形の破片もある。外面摩耗。台内ナデか。内面底付近に黒斑。864の出土割合、LⅡ20～25が1/70、LⅢ17～22が69/70。外面、底面以外全面スス付着。内面、底から5cm上にきっ水線、それより上コゲ。あまり細かく割れておらず、口縁は細かいが胴は縦にヒビが入っているだけ。920には、同じ場所から出土した接合しない同一個体口縁部破片4×2cmがある。935の出土割合、2b層出土が6/13、トレンチが7/13。2b層出土破片の内面が赤いのに対し、トレンチ出土の内面は黒と好対照である。963の内面には、意味のなさそうな深い刺突列がランダ

ムに見られる。内面頸部ミガキの下にケズリ痕見える。991には、同じ場所から出土した接合しない同一個体でほぼ同じ部位の破片が16 × 8cmある。内面のコゲ、胴最大径より下。胴部縄文LRヨコ。胎土金雲母含む。やや摩耗。

1016の出土割合、2-3b2層が10/24、Ⅳa層上面？が1/24、Ⅳa層上部が13/24。外面ススの付着は肩部を中心とするが、一箇所下まで見られる。内面は、底から1cm上にきっ水線があり、そこから屈曲部までの間コゲが付着。1045には、同じ場所から出土した接合しない同一個体の同じ部位の破片が18 × 5cmある。1057の出土割合、10層が2/3、3-4層が1/3。LⅢ16・3層出土の接合しない同一個体胴部破片が22 × 5cmあり、これを加えて考えると、10層が4/13、3-4層が2/13、LⅢ16・3層が7/13となる。1060の口縁部突起は胴部文様に対応するが脚は対応しない。1061の内面きっ水線、底から5cmと8cmの所にある。1066は、接合してしまったので中を覗けず出土割合不明。剥落は胴下半部中心。1067の出土割合、LⅢ11～12が21/22、16～17が1/22。接合しない同一個体破片が、同じ場所と違う場所から出土しており、同じ場所の方はLⅢ11～12が9 × 6cmの胴部片、16～17が6 × 4cmの胴部片、違う場所の方はLⅢ17・2-3b2層出土で、9 × 9cmの口縁部破片で、これらの割合は、2/6:1/6:3/6で、これらを含めた全体の出土割合は、67/72:4/72:1/72となる。1084の出土割合、2-3b2層が1/5、3-4層が4/5で、3-4層には接合しない同一個体破片があり、これを合わせると、1/7:6/7となる。1085の出土割合、2-3b2層が10/13、トレンチが2/13、Ⅳa層が1/13で、この三つの破片に割れているだけである。1090の出土割合、LⅢ12が20/21、17が1/21。口唇部の装飾は、写真図版101に見るように、立体的な突起の対角線上に二山突起（図の右側に示したもの）があり、立体的な突起の両側に山形突起（頂部に刻目）があり、立体的な突起と山形突起の間だけ口唇に沈線、その他は刻目列がめぐる。交叉部彫り去り→粘土左右寄せ集め（中～大）。文様間LRヨコ。ミガキ状の工具痕見られるが、粘土まくれ痕もあり。全体的に破片が大きく、調査時の欠損によるものか。外面、胴屈曲部より下ほぼ中央付近から上部にスス付着、その下は二次焼成で赤い。内面、欠損しているので、きっ水線明確でないが、上半部にコゲ付着。ただし立体的な突起下にはない（第555図参照）。1107の外面、胴中央屈曲部より上スス付着、その下対角線方向に二箇所二次焼成で赤い。内面底中央以外コゲ付着。外面黒斑あり。1111の出土割合、LⅢ13が2/59、17が3/59、18が36/59、トレンチが18/59。1112の出土割合、LⅢ13が2/13、19が4/13、23が3/13、トレンチが4/13（注記に不手際があり不正確だが）。外面スス付着、肩部以下中心だが、一部口縁部にも。粘土まくれ痕所々に見られる。1116の出土割合、LⅢ14・2b層4/416、LⅢ14・10層6/416、LⅢ15・2b層133/416、LⅢ15・10層7/416、LⅢ②266/416。外面下部二次焼成で赤い。内面、底から8cm上まで帯状コゲで、その上はチリヂリのパッチ状コゲ、底は白い。外面黒斑、内面も？　1132の出土割合、LⅢ16・1層2/67、LⅢ16～17・Ⅳa層トレンチ4/67、LⅢ16～21・Ⅳa層トレンチ58/67、LⅢ17～22・Ⅳa層トレンチ2/67、LⅢ②・Ⅲ～Ⅳa層トレンチ1/67。1133の出土割合、注記不十分で不明だが、LⅢ1・1層出土分が2/3くらいを占める。1157の外面、ほぼ全面スス付着し、そうでない所は二次焼成で赤い。内面は、口縁から下14cmにきっ水せんがあり、それより上にコゲ付着、さらに、きっ水線から下6cmの間は何もなく、その下にコゲ付着。1169の出土割合、2-3b2層7/24、3上層1/24、3-4層16/24。1170の出土割合、注記ミスで不明だが、2-3b2層が多く約2/3を占める。外面、底から12cm上を境に、上はスス付着、下は二次焼成で赤い。内面、胴部の底ぎりぎりにコゲが見られる。1171の出土割合、2-3b2層が1/32、トレンチが31/32。内面沈線底、赤色付着物。1172の胴上部欠損。口縁丸い突起と脚の位置対応。脚は均等に4つ配置され、間に匹字文。匹字文は、彫り去り→周囲粘土盛り上げ。外面底は残りが良いが、他は摩耗。内面突起裏三角形の彫り去り。1177の交叉部刺突→左右粘土寄せ集め。LRヨコ。摩耗。内面ナデ、輪積痕見える。内

外赤色付着物？　1178の内面コゲ、底面以外ぶ厚くビッシリ。1179の外面、二次焼成による摩耗か。内面、底から上6cmにきっ水線があり、その上コゲ。1181の出土割合、3層10/11、3-4層1/11。外面、髪の毛らしい圧痕。1185の出土割合、？（注記読めない）・Ⅳa層トレンチが3/4、LⅢ16・3上層1/4。外面沈線底、赤色付着物。1194の外面、底面以外全面スス付着。内面、底から1/3より上コゲ付着。1195の黒色付着物の周囲に赤色付着物残っている。口縁内部水平沈線、二山突起下では片方の山に向かって枝を出し、丸い突起の下では丸みを帯びた三角形の区画（掘り去りはなし）。同一地点出土の接合しない同一個体破片、12×4cm片。1198の外面、底から2cm上に、線状にその縁をなぞるようにススが付着、その下～底との間は、黒斑ない場所が半周くらい続くが、これは二次焼成で“飛んだ"ものか。内面も、この2cmのラインに対応するかのように、底との間は黒斑がなく外面と同じ色である。内面の底には黒斑が大きく広がる。1204の出土割合、LⅢ16～17が4/9、16～21が4/9、17～22が1/9。外面、底から上12cmのラインを境に、上はスス付着、下は二次焼成。内面は、コゲが全面に広がり底にも。1206の口端から土器沿い（斜め）に上に1cm、天井から土器沿い（斜め）に下に2cm空けた、斜めに3cmの幅の部分に帯状のオコゲ。口端摩耗しており、このこととオコゲから、蓋として使用したことがわかる。内外赤色付着物。把手内整形雑なナデ。あまり壊れておらず（破片の数少なく）、調査時に壊れた可能性が高い。1207の出土割合、注記不十分で不明だが、LⅢ21・1層が約半分を占め、LⅢ17・2b層出土分はほんの僅か。1208の出土割合、LⅢ16～21が1/3弱、17～22が2/3強。補修孔は、外側からの穿孔である。1211の出土割合、LⅢ17・1層とトレンチ、ほぼ1:1で、ほぼ前者が土器上半、後者が下半に相当。外面、頸部屈曲部付近スス残っているが、他は二次焼成で“飛んだ"可能性が高い。内面、肩部～胴中央付近の凹みにのみコゲ。1213の割れ方少なく、口縁部はほとんどが欠けていて2×1cm大の破片のみ（トレンチ出土）、胴部は完形に復元されているが、二つの破片に割れているだけで、一つは6×3cm大の2b層出土土器片、残り全てはトレンチから出土した割れていない土器である。1214の出土割合、2b層：トレンチ=1:1で、割れ方も少なく、この二片のみである。内面肩菊練り状圧痕。1217の外面スス付着口縁部のみで、他は二次焼成で赤い。内面、底から3cm上胴部中央屈曲部付近で幅3cmの帯状にコゲ付着、口縁最上部幅1cmで帯状にコゲ付着。胎土砂多い。1230の出土割合、10層が1/17、トレンチが12/17、Ⅲ層まで2/17、Ⅳc層下2/17で、この4片に割れているのみ。表面にさらされている部分は濃い灰色であり、つまり内面は頸部まで濃い灰色だが、それ以下は白色。1245の胴下半部の一部二次焼成で赤く、内面のその部分に当たる所の口縁部だけコゲなし。1255の正面の立体的な突起と左右両脇の小さな突起の間だけ口唇部に沈線見られる。外面二次焼成。内面、屈曲部よりやや下で土器中央部の底から6cm、口から6cmにきっ水線が見られ、上にはコゲが付着。内面底黒斑。1262の頸部隆帯上に縄文消し忘れ。内面ほぼ全面コゲ付着。1266の内面、垂直方向ではなく土器に沿って、口端から2cm上、天井から2cm下の間の幅4cmにわたって帯状にコゲ付着。口端近くの2cmの部分にもパッチ状にコゲが付着しているが、天井にはない。1271の出土割合、1層3/5、2b層が2/5で、2b層には接合しない同一個体片10×8cmがあり、これを入れると、ほぼ1:1になる。1291の出土割合、2-3b2層2/22、3中層16/22、Ⅳa層排土3/22、トレンチ1/22だが、接合しない同一個体胴部破片が、2-3b2層に15×4cm、トレンチ出土分に9×9cmあり、これらを入れると、2/24、16/24、3/24、3/24となる。1292の出土割合、2-3b2層1/9、トレンチ8/9、トレンチ出土には接合しない同一個体胴部片7×3cm（2片で）があるので、これらを含めると6/34:28/34となる。1293の出土割合、トレンチ出土が17/19、2-3b2層2/19。1296=1297の出土割合。1296は、3層4/7、3中層3/7、1297は、3層2/3、3中層1/3、両方合わせると、3層26/42、3中層16/42。LⅢ21・3-4層から出土した接合しない同一個体片が8×7cmと8×6cmの2片あり、これらも含めると、3層26/54、3中層16/54、3-4層12/54

となる。1300=1301の出土割合。1301は、3層7/15、3中層8/15。1301は、3層3/4、3中層1/4で、3層には接合しない底部直上破片5×2cmがあり、これも含めると、1300=1301全体では、3層3/5、3中層2/5となる。1302には、3中層から出土した接合しない同一個体破片14×2cmがあり、これもふくめると、3層:3中層:10層は、1/27:19/27:7/27となる。1303の出土割合、3層2/19、3中層12/19、10層5/19。外面、LRイロイロ→底部～底面ナデ。文様内、粘土まくれ痕。外面、二次焼成で赤く摩耗。内面、底面以外コゲ付着。1317は、底部欠損部から高坏と判断（台の天井の一部が残っている）。外面、粘土まくれ痕。1318の外面上部スス付着（帯状でない）、下部二次焼成で、その境は水平直線でなく上下に大きく蛇行している。内面、底部中央除きほぼ全面コゲ付着。内面沈線、突起下、正しく沈線になっている所と三角形状の窪み（整形痕）の所もある。1320は、LⅢ21・2b層から、接合しない同一個体破片10×4cmが出土しており、これを合わせると、出土割合は、トレンチ出土が48/75、LⅢ22が1/75、23が23/75、21が3/75。1322の外面、下半の口端部分にスス付着、上は二次焼成。内面、土器沿い斜め方向に、口端から8cm上までコゲ付着、その上3cm空く。1340は、1層と10層出土破片が接合しており、不自然である。調査時に、1層から雨などで転げ落ちたものを一番下層の10層の精査の際に一緒の袋に入れてしまったものと推測される。1369のスス、コゲ付着、図のとおり。外面の上部には、赤い付着物が見られ、酸化鉄か。上部、水平に欠損。1376の出土割合、注記不十分で不明。MⅠ20グリッドに2b層はなく、2層か2-3b層、2-3b2層の何れかの間違いと思われるが、特定できない。胴部屈曲部より上、外面スス、内面コゲ付着。1467の出土割合、MⅠ24・1層2/11、MⅠ25・1-2層3/11、MⅠ25・2層6/11で、MⅠ25・1-2層出土破片は、比較的いろいろな部位に散っている。1554には、同一地点出土で接合しない同一個体の頸～胴上破片26×10cmあり。1555の出土割合、ほぼ1:1。他に、これらと接合しない同一個体突起片がある。二箇所から出土して接合したもので、MⅠ25・2層出土破片が4×6cm、MⅠ24・1-2層が4×2cmである。口内沈線、水平と口の形に沿うもの。1563の出土割合、注記ミスで不明。1586=1587の出土割合。1586は、1層が2/3、2b層が1/3、1587は1層が3/4、2b層が1/4で、両方合わせると、1層が5/7、2層が2/7となる。この他に、1587には、1層から接合しない同一個体胴部破片21㎠が出土しているが、割合としてはほとんど変化なし。1587は、残りが悪く摩耗している。1587の外面下部、ケズリ状痕跡。1602の出土割合、注記不明瞭だが、2b層47/72、3上層24/72、トレンチ1/72で、接合しない同一個体破片が、2b層には6×5cm、3上層には3×2cm分あるが、割合はほとんど変わらない。1606の出土割合、MⅡ9・2b層が10/46、同・3上層が7/46、MⅡ10・1層2/46、MⅡ4～9・Ⅳa層トレンチ上から30～40cmまで14/46、MⅡ9～10・Ⅳa層トレンチ13/46。底部の欠損状態から高坏とわかる。補修孔、主に外側から穿孔。1628の出土割合、MⅢ1が13/28、MⅡ5が1/28、トレンチが14/28。1654の出土割合、2c層2/3、2b層1/3。内面剥落。1663の出土割合、2c層8/17、2-3b層4/17、2-3b2層5/17。1674の内面沈線底に粘土まくれ痕。1715の出土割合、トレンチ1/37、2-3b2層27/37、3上層9/37。内面底剥落。口縁以外はほぼ完形で、特に台は完形で出土。1743の出土割合、注記ミスで不明だが、MⅡ17・3層出土分が1/2弱を占めるようだ。1753の出土割合、MⅡ16・2-3b2層8/16、MⅡ11～16・Ⅳa層トレンチ7/16、MⅡ17～18・Ⅳa層トレンチ1/16で、MⅡ16出土分には、この他接合しない同一個体破片3×3cmがある。1754の外面胴部縄文わりと疎ら。内面整形、頸部下ケズリに近く、底は指なで（菊練り状）。1757の出土割合、1層18/21、2-3b2層1/21、トレンチ2/21。多くのきっ水線があり、底から上6cmと11cmの所がはっきりしている。ただし、一部のコゲは底まで垂れ下がっている。1776の出土割合、MⅡ13・2-3b2層5/37、同・3上層4/37、MⅡ12～13・Ⅳa層トレンチ12/37、MⅡ12～17・Ⅳa層トレンチ2/37、MⅡ13～18・Ⅳa層トレンチ8/37、MⅡ17～18・Ⅳa層トレンチ6/37。1777の出土割合、2b層1/26、2c層6/26、トレンチ

19/26。1778の出土割合、トレンチ1/14、トレンチ60cm下まで13/14。内面コゲ、底付近、胴上部に付着し、胴中央にきっ水線状のものがある。1779の出土割合、注記ミスで不明。表に示した他に、「M Ⅱ 12～17・Ⅳa層トレンチ上から60cm 下まで」で取り上げたものがあり、出土割合が多いのは、「M Ⅱ 12～17・Ⅳa層トレンチ上から40cm まで」である。1780の出土割合、M Ⅱ 16・3層が4/33、M Ⅱ 17・3層14/33、M Ⅱ 12～17・Ⅳa層トレンチ2/33、M Ⅱ 12～17・Ⅳa層トレンチ上から60cm 下まで5/33、M Ⅱ 17～18・Ⅳa層トレンチ8/33。1786の出土割合、M Ⅱ 13・1層3/59、M Ⅱ 13・2b層30/59、M Ⅱ 13・2c層2/59、M Ⅱ 14・2b層6/59、M Ⅱ 13～18・Ⅳa層トレンチ12/59、M Ⅱ 14～19・Ⅳa層トレンチ6/59。外面肩部下、内面肩部、輪積痕。外面胴部、一部ケズリ状の工具痕。内面下半、ケズリ。外面、上部中心に「吹きこぼれ」?（一部厚いスス?）。内面コゲ、タール状ほぼ全面に。1792の出土割合、各位置出土破片がモザイク状に入り組み数えにくく正確でないが、2b層1/5、2c層1/5、2-3b2層3/5。1804の内面、底から7.5cm 上にきっ水線。1816の出土割合、注記不明瞭で不明だが、みんな“どんぐりの背比べ"。1826には、M Ⅱ 14～19に接合しない同一個体破片9×6cmがあり、これを合わせると、M Ⅱ 14～15が2/43、M Ⅱ 14～19が41/43となる。内面整形、頸部はナデ（線状痕見える）、肩部は指なで（菊練り状圧痕）、胴部上半（区局部より上）ケズリ、下半ナデ（輪積痕見える）。1842の出土割合、1層が1/4、2-3b層が3/4、1層には接合しない同一個体破片12㎠ある。1895には、トレンチ出土分に接合しない同一個体破片120㎠程度あって、これを合わせると、3層2/13、トレンチ11/13。1909の口縁部に沿って、外面スス、内面コゲ付着。外面、赤色付着物。1920=1921には、同じ場所から同一個体口縁部破片5×4cm片が出土。1948は、口唇が摩耗していないので、蓋ではないと思う。1949の出土割合、2-3b層が1/4、2-3b2層が3/4。穿孔部分の内面、周囲剥落している。外面底面、剥落。内面整形、雑なナデの上ミガキ（光沢あり）？ 1960の出土割合、1-2層1/4、トレンチ3/4。トレンチ出土には、この他に接合しない同一個体破片10×6cm あり、少しだが、さらに割合多くなる。1-2層出土破片は部位が離れており、トレンチを入れた際に壊れた可能性が高い。1961の出土割合、2-3b2層12/14、3層1/14、トレンチ1/14。1975の沈線底、粘土ひきつれ痕、粘土まくれ痕。外面スス付着。

2029の沈線底、赤色付着物残る。2079の出土割合、2-3b中層8/15、2-3b2層5/15、トレンチ2/15。同一個体破片として、口縁～底部まで残存し1/8周ほども残っているものがあるが、手違いで不掲載となってしまった。注記ミスで出土割合も不明である（2-3b中層、トレンチ出土分が多い気がするが）。土器全体としては、2-3b中層出土分が主となるようである。2102の出土割合、2-3b中層1/12、2-3b2層7/12、トレンチ4/12。2115の出土割合、M Ⅱ 23が3/5、24が2/5。外面の低い部分＝沈線底、縄文底には、赤色顔料が多く、今回の調査では珍しいくらい残っている。内面沈線、水平と突起間を弧状に結ぶもの。2133の出土割合、2-3b層1/17、1層1/17、1-2層7/17、M Ⅱ 24～25・Ⅳa層トレンチ8/17で、2-3b層には接合しない同一個体破片14×6cm、トレンチには13×9cm あり、これらを含めると、3/22:1/22:7/22:11/22となる。内面、底から7cm 上にきっ水線状のものがあるが、これより下にもコゲあり。2140の出土割合、注記不明瞭ではっきりしない。表に示したほかに、「M Ⅱ 24～4・Ⅳa層トレンチ」出土があり、これが半分以上を占めるのは確かである。2156の出土割合、2-3b層1/3、2-3b2層2/3。底部、粘土接合面から剥離。突起は、欠損部から見ると、中に粘土芯がある。2159の出土割合、注記不明瞭で不明だが、2-3b層が1/3程度、2-3b2層が少ないのは確か。接合しない同一個体破片が、トレンチから他に10×5cm、M Ⅱ 24･3層から3×3cm出土している。2161=2185の出土割合、2161が、2-3b層1/3、トレンチ2/3で、2185が、2-3b層2/5、24～4トレンチが1/5、25～5トレンチが2/5、両方合わせると、2-3b層3/7、24～4トレンチ1/7、25～5トレンチ3/7となる。2162の出土割合、2-3b層が1/3、2-3b2層が2/3だが、2-3b層に接合しない同一個体破片14×5cm あり、これを入れ

ると 1/2:1/2 となる。外面、口端付近を除き傘中央中心に帯状にススがめぐるが、下側の境界は直線でなく蛇行する。内面は、下端は外面とほぼ対応し口端付近にはないが、コゲがびっしり付着。2163 は、三つの破片にしか割れていない。口縁内面にタール状付着物。台内整形、見える所はケズリ。2173 の出土割合、注記ミスで不明だが、トレンチ出土分が多いのは確か。2177 の出土割合、注記ミスで不明だが、トレンチ出土分が主で、二つ合わせると 3/4 以上を占める。M Ⅱ 25 ～ 5 トレンチには、接合しない同一個体口縁部破片 7 × 4 cm あり。2183 の外面、土器沿いに斜めに、口端 4cm を除いてススが付着するが、ススない部分に接する幅 3 cm くらいの所が帯状に濃い。内面も口端なく、口端の上は黒っぽく、さらにその上、傘の中位（天井から土器沿いに斜めに 4cm 下）に 3cm くらいの幅で帯状にタール状付着物（コゲ ?）。内外、黒斑。2185=2161 で、出土割合は 2161 の所に記した。2186 の出土割合、3 層が 1/17、4b 層が 6/17、24 ～ 4 トレンチが 1/17、N Ⅱ 2 トレンチが 9/17。2201 は、欠損部分が少なく、また個々の破片も大きいので調査時に壊れた可能性が高い。整形丁寧だが、外面頸部には指圧痕残る。外面、胴最大幅～底から 13cm の高さまで（出っ張っている所）にスス付着し、その下は二次焼成を受けているが、一部、上のススが底に向かって垂れ下がっている。内面、底から 18cm 上にきっ水線があり、その上薄いコゲ付着し、一部、コゲが下方まで見られるが底にはない。2213 には、同一地点・同一個体同一部位 6 × 7cm 破片があり、こちらの方が摩耗しておらず、外面黒斑あり。2282 の内面、口縁から 10cm 下を境に、その下は横方向にコゲが帯状に広がるが、一部、その上にも縦方向に帯状にコゲが延びる。2283 の出土割合、3-4 層が 25/26、トレンチが 1/26。底部中央付近に穴が開いているが、外面はその周囲が大きく剥落しており、自然か人為か不明。2289 の出土割合、1-2 層 11/35、Ⅳ a 層上面 9/35、トレンチ 14/35、「南西区・Ⅳ a 層排土」1/35 で、「南西区・Ⅳ a 層排土」には 7 × 6cm の接合しない同一個体破片がある。2292 の出土割合、2-3b2 層 4/7、3-4 層 1/7、トレンチ 2/7。外面、摩耗、剥落ひどい。内面黒斑。2293 の出土割合、注記ミスで不明だが、M Ⅲ 4 ～ 9 トレンチが約半分を占め、2-3b2 層は 3 × 3cm の僅かな小片で、10 層も 8 × 8cm と少ない。2302 には接合しない同一個体口縁部破片があり、同じ場所から 12 × 3cm 片、「M Ⅲ 6 ～ 7・Ⅳ a 層トレンチ」から 8 × 3cm 片が出土している。内面、底から 3cm 上にきっ水線があり、その上はコゲでビッシリ。2312 の沈線底、赤色付着物。内面コゲ付着。2334 の出土割合、2b 層 1/15、トレンチ 14/15。内面コゲ底近くまで付着。2343 の出土割合、注記ミスで不明だが、「M Ⅲ 16・1 層」が多く約半分を占める。表に示した他に、「M Ⅲ 11 ～ 16・Ⅳ a 層トレンチ」、「M Ⅲ 13 ～ 18・Ⅳ a 層トレンチ」、「M Ⅲ 16 ～ 17・Ⅳ a 層トレンチ」、「M Ⅲ②・Ⅳ a 層上部」からも出土している。2349 の出土割合、1-2 層が 27/28、トレンチが 1/28。内面、口縁部ミガキ？　外面びっしりスス付着。内面コゲ？上部のみ。胎土金雲母含む。2352 の出土割合、1 層 3/9、1-2 層 2/9、トレンチ 4/9。2413 の出土割合、M Ⅲ 21・3 層 4/13、M Ⅲ 22・1b 層 5/13、トレンチ 2/13、N Ⅲ 2・1b 層 2/13。2422 の出土割合、トレンチ 4/9、4-5 層 5/9。内面きっ水線、下の割れ口から 2cm 上。2423 の出土割合、注記ミスで不明。肩部、太い隆帯による文様。2429 の内面、口縁から下 2cm スス付着 ?、胴部最大径中心に幅 6cm で帯状にコゲ付着。2448 の出土割合、M Ⅲ 22 ～ 2 トレンチ 1/3、N Ⅲ 1 ～ 2 トレンチ 1/3、4c 層 1/3。2451 の内面コゲ、全面にあったようだが、天井及びその周辺に顕著。2459 の出土割合、M Ⅲ 23 が 3/6、M Ⅲ 24 が 1/6、M Ⅲ④が 2/6。2462 の外面、ミガキ。台内は摩耗して不明だが、ミガキ？（滑らか）。内面底中央に円形沈線。台、口端摩耗。2465 の出土割合、4 層 13/34、トレンチ 10/34、Ⅳ a 層上部 11/34。2495 の出土割合、注記ミスで不明だが、4 層出土が約半分を占め、トレンチ出土は少ない。2533 の出土割合、5 層が 1/2、トレンチが 1/2 で、接合しない同一個体破片が、それぞれ 18 × 12cm と 14 × 9cm あり、これらを含めると、6/11:5/11 となる。内面、底から 14cm 上にきっ水線あり、その上はコゲ付着 ?、きっ水線を境に上は焦げ茶色、下はクリーム色。きっ水線より下にもパッチ状コゲ

あり。口縁内面、沈線というより段。2540 には、同一地点・同一個体胴部破片 90 ㎠あり。2547 の出土割合、1-2 層 1/7、2 層 6/7 で、1-2 層には、接合しない同一個体破片 6 × 6cm あり、これを含めると、5/23:18/23 となる。2601 の出土割合、1-2 層 8/17、2 層 9/17 で、1-2 層には接合しない同一個体胴部破片 6 × 3cm があり、これを含めると 10/19:9/19 となる。2659=2660 の可能性があり、2659 の同一個体破片中に 2660 にくっつきそうなものがある。2722 は、本来二股突起なのに頂部に刻目を施してしまったため、混乱が見られ、二股突起の内部には口唇沈線を通常持たないのに、口唇沈線が見られる場所がある。ただし、通常通りない場所もある。2763 の外面、ススビッシリ。内面コゲ、口縁と下部付着。胎土、金雲母含む。2776 の赤色付着物、漆状付着物の上に見られ、また割れ口にも見られるが、これは、土器の上に赤色顔料が廃棄？されたのか、あるいは、水洗の際に赤色付着物が広がったのか。2854 の出土割合、トレンチ 2/3、2 層 1/3 で、2 層には接合しない同一個体破片 6 × 6cm がさらにあり、また「N Ⅱ 12・1 層」からも 9 × 6cm 同一個体破片が出土しており、これらも合わせると、トレンチ 12/25、2 層 10/25、N Ⅱ 12 が 3/25 となる。2934 の内面口縁沈線、水平と口の形に沿うもの。台内、輪積痕、粘土まくれ痕。2942 の出土割合、N Ⅱ 11 が 1/16、12 が 15/16 で、後者には接合しない同一個体胴部破片 6 × 5cm があり、これも含めると、2/33:31/33 となる。2943 の出土割合、N Ⅱ 11・2 層 3/31、N Ⅱ 16 ～ 17・1 層（Ⅳ a 層トレンチ内）1/31、N Ⅱ 16・2 層 12/31、N Ⅱ 17・2 層 8/31、N Ⅱ 12 ～ 17・Ⅳ a 層トレンチ 7/31。3039 を蓋と判断したのは、岩手県二戸市火行塚遺跡出土例（(財）岩手県埋蔵文化財センター　1981: 第 51 図 1）による。3079 の出土割合、トレンチ 5/7、4-5 層 2/7。内面のコゲは、底面少ない。3080 の出土割合、18 ～ 23 トレンチ 4/15、19 ～ 24 トレンチ 11/15。胎土、金雲母混入。外面、全面スス付着。内面、上半コゲ付着。底面ナデ→摩耗。3093 の出土割合、N Ⅱ 19（注記剥落して、層名不明だが“4" の数字が見える）7/16、O Ⅱ 3 が 9/16。3102 の内面のきっ水線、半周ごとに高さ異なり、片方は底から 5cm、片方は 3cm。3124 の出土割合、1 層 1/114、3 層 13/114、4-5 層 20/114、Ⅳ a 層トレンチ 78/114、Ⅳ b 層 2/114。二股突起（頂部刻目）の内部も口唇沈線。底面、内外円形沈線。脚は、丸い突起と対応。3126 の出土割合、1 層 9/12、2 層 1/12、Ⅲ- Ⅳ a 層上面 2/12。外面、底面接地面摩耗し、口縁は摩耗していないこと、さらに、内面の整形と内面にコゲが付着していないことから、蓋でないと判断。3138 の内面、きっ水線 2/3 周だけ見られ（底から 4cm の高さ）、その下にもパッチ状コゲ付着。3157 の内面、底から 5cm（ほぼ胴中位）にきっ水線があり、その上はコゲが見られるのだが、突起ある部分 1/4 周にはない。これに対応するように、外面も、突起ある部分 1/4 周は胴下半にスス付着、それ以外は頸部（胴屈曲部より上）にススが付着。第 555 図参照。胎土、砂混入。3160 は、N Ⅱ 24・4-5 層から接合しない同一個体口縁～胴部破片 6 × 8cm も出土しており、これを含めると、N Ⅱ 23 の割合は 1/12 に下がる。3163 の出土割合、N Ⅱ 23 が 1/4、O Ⅱ 3 が 3/4。内面、底から 5cm の高さにきっ水線が見られ、上はコゲ。3166 の沈線浅く、ナデでつぶれている所も。3167 のきっ水線、底から 5cm 上で（これより上はコゲ）、ほぼ中位に相当する。3173 の出土割合、注記ミスで不明だが、Ⅳ a 層排土出土破片が多く、約 2/3 を占める。3180 の出土割合、注記ミスで不明だが、2-3b2 層出土破片が多く、約 2/3 を占めるか。内面コゲ、底から 10cm より上で、土器中位より上となる。3181 の出土割合、2e 層 3/10、2-3b2 層 2/10、4 層 3/10、4c 層 2/10。3215=3221 の出土割合。3215 は、トレンチ 4/27、1b 層 5/27、1-2 層 10/27、「2 層」8/27 で、3221 を含めると、4/38:5/38:21/38:8/38 となる。さらに、N Ⅲ 2・1-2 層には接合しない同一個体胴部破片が 2 つあり、一つは刺突を持つ 5 × 3cm 片、もう一つは胴下下半で縄文のみの 4 × 2cm 片で、これらを含めると、4/45:5/45:28/45:8/45 となる。なお、N Ⅲ 2 に「2 層」はないが、2e 層、2-3b2 層のどちらの間違いか特定できなかった。3217 の出土割合、1 ～ 2 トレンチ 5/9、6 ～ 7 トレンチ 4/9。口縁内面沈線、水平と突起を弧状に結ぶもの。3303 の突起頂部に刻目。文様いいかげん。外面

底面ナデ→剥落。内外、一部ミガキと見える所も。内面コゲ、底面に貼り付いているが、底から4cm上にきっ水線らしきものも。3316の内面コゲ、肩直下から6cm幅で水平方向に帯状に広がる。3399の内面、ケズリ痕見える。3403の出土割合、4-5層11/43、6～7トレンチ2/43、6～11トレンチ30/43。3407の出土割合、6～7トレンチ3/12、7～12トレンチ5/12、2-3b2層4/12。3409の出土割合、6～11トレンチ7/15、7～12トレンチ3/15、1-2層5/15で、この他に接合しない同一個体破片が2片あり、NⅢ11・4層から口縁部片7×7cm（前述の大きさに換算すると1.5/15に相当）、NⅢ③・3層から胴部片11×6cm（同様に3/15）で、これらは互いに接合する。3423の内面沈線は、粘土接合面の窪みに引かれている（図参照）。3457の内面底、円形沈線。台内天井はナデ？　3461の沈線底、赤色付着物残る。内面、口縁から3cm下から始まって幅4cmの帯状にコゲ付着（胴屈曲部に相当）。3502の口内水平沈線、突起下で突起に向かって両側から枝を出して三角形状を呈し、三角形の内部が若干窪んでいるように見えるのは故意に削ったものか?3520の出土割合、注記ミスで不明だが、4c中層が約半分を占める。外面文様部ミガキだが、びっしりスス付着。内面、底から7cmの高さにきっ水線（これより上はコゲ付着）。胎土金雲母混入。3553の突起4単位だが、等間隔でない。一つは頂部に短沈線、他は刻目。3560は、赤色付着物あり？　3582の外面、全面スス付着。内面コゲもほぼ全面だが、胴屈曲部が主で底付近は少ない。3619の出土割合、1層3/5、Ⅲ層2/5で、それぞれに接合しない同一個体破片が12㎝と60㎝あり、これらを含めると10/23:13/23となる。3623の外面、赤色付着物→スス付着。内面コゲ底まで？　3633の上の交叉部ナゾリ?、下は彫り去り→左右粘土寄せ集め？　3642の出土割合、OⅡ1～6が2/7、トレンチが5/7。3650の出土割合、1層3/45、3層4/45、3～8トレンチ2/45、7～8トレンチ36/45。3661の内面も、最上部粘土まくれ痕。3664の胴隆帯上断続沈線。LRイロイロ。外面底面中央、円形彫り去り。3668の出土割合、トレンチ2/12、1層5/12、2層5/12。3672には、接合しない同一個体同一部位破片72㎝あり。3684の内面、底から15cmの高さ（ほぼ頸部屈曲部付近）にきっ水せんがあり、その上はコゲが付着するが、その下にもパッチ状のコゲ見られる。3686は、あえて今回の調査結果の中で捜すとしたら「蓋」に近いということである（施文、整形において）。例えば、傘部に縄文を持ち、口端をナデることもある点で。しかし、器の厚さは、蓋とは全く異なり、コゲなどの使用痕もない。3688の内面、やや摩耗。

註

（1）2004年12月10日に所内で行われた、スス・コゲ、黒斑についての小林正史氏の研修講義に準拠したつもりである。その他、小林（1999）、小林ほか（2003）など。

（2）同様の特徴を持ち完形に近い土器が、県教委の試掘の際に出土している（岩手県教育委員会　2002: 第147図24）。

（3）通用している一般的な型式名がないので、あえて使ったが拘るものではない。新山権現社1式が加曽利B1式併行、同2式が同B2式併行、3式がB3式併行と考える土器型式である（金子　1994）。

（4）高柳圭一氏の瘤付土器編年を参照（高柳　1988）。晩期初頭についても同様である。なお、鈴木克彦氏は、私が未だ型式名を使用せず段階で時期を示すことについて批判されているが（鈴木　1999:p.145ほか）、私としては高柳氏の編年案に準拠しているつもりなので、その批判は高柳氏に向けられるものであると思う。高柳（新姓、小林）氏は、近年、「段階」に変えて、西ノ浜式、金剛寺1式、金剛寺2a式、金剛寺2b式という型式名を提唱しているが、資料を福島・宮城・山形県という東北南部に限った発表の中での提唱なので（小林ほか　2001）、これを岩手県に敷衍するわけにはいかないだろう。

（5）大洞C2式土器の細分に当たっては、高橋（1993）を参照したが、準拠できるほど理解が進んでいないので、古中新の三つに分けて示した。古段階は、大洞C1式に近い様相を示す段階（高橋氏の第Ⅰ段階～第Ⅱ段階の大部分に相当）、中段階は、高橋氏の合体型ネガ文様が出現し一般化する段階（第Ⅱ段階の一部～第Ⅲ段階に相当）、新段階は、工字文への近似を示す段階（第Ⅳ～Ⅴ段階に相当）である。

参考文献

石川日出志　2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観第1巻　弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館
2005「岩手の弥生文化研究の諸問題」『2005年岩手考古学会第34回研究大会　岩手県における弥生前期から中期の諸問題』岩手考古学会
岩手県教育委員会　2002『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成13年度）』岩手県文化財調査報告書第114集
（財）岩手県埋蔵文化財センター　1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書　二戸市上田面遺跡　大渕遺跡　火行塚遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集
金子昭彦　1994「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器」『紀要』ⅩⅣ（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1998「十腰内Ⅰ式に併行する東北地方中部の土器（3）」『縄文時代』第9号　縄文時代文化研究会
熊谷常正　1986「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』第4号
小林圭一　1997「Ⅴ　調査の成果」『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
2004「岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡出土の晩期縄文土器（前編）」『研究紀要』第2号（財）山形県埋蔵文化財センター
2005「岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡出土の晩期縄文土器（後編）」『研究紀要』第3号（財）山形県埋蔵文化財センター
小林圭一ほか　2001『第14回縄文セミナー　後期後半の再検討-記録集-』縄文セミナーの会（群馬県関根慎二方）
小林正史　1999「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元-遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所　研究集会報告集2
小林正史ほか　2003「黒斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」『日本考古学』第16号　日本考古学協会
鈴木克彦　1999「十腰内文化の土偶の研究」『土偶研究の地平　『土偶とその情報』研究論集（3）』勉誠出版
鈴木正博　1985「『荒海式』生成論序説」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
1987「続　大洞A2式考」『古代』第84号　早稲田大学考古学会
須藤　隆　1983「東北地方の初期弥生土器-山王Ⅲ層式-」『考古学雑誌』第68巻第3号　日本考古学会
1987「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻第1号　日本考古学会
1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89輯　東北史学会
高柳圭一　1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』第85号　早稲田大学考古学会
高橋龍三郎　1993「大洞C2式土器細分の諸課題」『先史考古学研究』第4号　阿佐ヶ谷先史学研究会
本間　宏　1994「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』第10号（福島県目黒吉明氏）
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号
1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
山内清男ほか　1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号　北奥古代文化研究会

2　土師器・須恵器（第397図～400、写真図版242～244）

両年度併せて大コンテナ（30×40×30cm）1箱に満たない（土師器が2/3以上）。

前年度は、遺構内10点、遺構外27点を掲載し、その他、掲載するにはあたらないが遺構・層位の時期を判断する上で必要と判断し登録したもの（番号を与えノートに出土位置を記入）が、遺構内4点、遺構外19点ある。次年度の遺構内については、胴部破片は径が復元できるもの、それ以外は、3×3cm 以上を掲載した（須恵器はなし）。遺構外の土師器についても同様だが、ST01捨て場中に混入した径の復元できない破片は全て割愛した。遺構外の須恵器は、5×5cm以上の比較的大きな破片のみとし、捨て場混入破片は全て割愛した。手違いで土師器・須恵器一緒に番号をふってしまったので(6のみ須恵器)、わかりづらくなってしまった。また、土師器とした27は、須恵器の間違いである。

遺構外は、縄文時代以来の自然堤防の両側斜面、新しい自然堤防の東側斜面に顕著だが、これは遺構の分

布と重なるものである。次年度では、M Ⅱ付近の出土が目立った。

(1) 土　師　器（第 397 ～ 399 図、写真図版 242 の 1 ～ 5・7・写真図版 243・写真図版 244 の 50 ～ 54、観察表は写真図版の方にある）

前年度遺構（1 ～ 10）、次年度遺構（11 ～ 20）、前年度遺構外（21 ～ 47）、次年度遺構外（48 ～）の順で掲載した。27 は須恵器の間違いである。

前年度出土分の図化は、トレースまで前年度に済んでいた。観察表および本文記載は、次年度担当者が作成したため、齟齬が見られる所があるが（26）、時間がなかったので、そのまま掲載した。次年度の実測図は、調整痕の種類、方向については点検したが、各調整痕（例えばミガキ）の中での厳密な重複（切り合い）関係については点検しなかった。

時期。11、12、15 は、土坑で共伴したと考えて良い資料で、10 世紀初めころか。これ以外はセット関係を捉えられる資料がなく、形と調整から時期を判断するしかないので難しいが、28 は 10 世紀前半、47 は 9 世紀前半、48 ～ 50 は、9 世紀後半ころか。38 は赤彩土器で、奈良時代か。南西区の後背湿地両側は 9 世紀中頃前後、縄文時代以来の自然堤防の東側斜面は 10 世紀初頭前後の土器が目立つようにも思える。

以下、観察表の補足。11 の取り上げ割合、「No.1」が 2/7、「半裁時」が 5/7 で、胴下部は二次焼成を受けて桃色を呈す。15 の取り上げ割合、「SK80 土坑・No.1」が 7/19、「SK80 土坑・半裁時」が 1/19、「SK84 土坑・2 層」が 5/19、「SK84 土坑・覆土中」が 6/19。SK80 土坑は南東区南部、SK84 土坑は南西区にあり、その間は 55m 離れている。書き間違いが懸念されるが、注記されている日付が 1 ヶ月ほども違っており、両土坑から同時期の土器が出土していることから考えると、事実であるようだ。また、「SK84 土坑・覆土中」で取り上げた土器片には、色調が大きく異なるものが含まれており、桃色、橙色、灰黒色（須恵器と同じ色）のものがある。外面下部、二次焼成で剥落。内面のコゲはほとんど残っていない。

23 の内面黒色処理とれかかっており、外面にも炭化物が付着しているが、それとあまり違いがないので、本当に黒色処理されているか不明である。外面部分的に摩耗。26 は、前年度作成された図では、ロクロ使用と表現されているが、そのようには見えない。27 は、間違って土師器に登録していたもので、漸移的だが須恵器である。33 の図は、前年度に図上で合成して復元実測したもので、実際には接合しない同一個体片 5 片から成る。「K ～ L、Ⅳ～Ⅴ・Ⅱ～Ⅳ a 層」出土分が 4 片、そのうち口縁～胴部破片が 3 片で、4 × 3cm 片 1、8 × 5 ～ 6cm 片 2、残りが胴下部破片で 7 × 7cm の大きさがあり、下部は底部との粘土接合面からの剥離、赤く二次焼成が強い。「L Ⅲ・Ⅲ層」出土片は 1 片で、口縁～胴部破片で 5 × 3cm の大きさがある。全体的に内外摩耗しており、調整痕よく見えない。43 は、底部がただれており、直径 2 ～ 3mm の穴がたくさん見える。上の割れ口の大部分は、粘土接合面からの剥離である。49 の取り上げ割合は、注記ミスで不明だが、同じ日付なので、単なる書き間違いで同じ地点からの出土の可能性もある。50 の取り上げ割合は、「Ⅲ～Ⅳ a 層」が 1/8、「Ⅳ c 層」が 7/8。なお、「Ⅳ c 層」は「Ⅳ a 層」の書き間違いと思われる。51 ～ 54 の層名も、「Ⅳ c 層」になっているが「Ⅳ a 層」の間違いか。

(2) 須　恵　器（第 400 図、写真図版 243 の 27・244 の 6・55 ～ 61、観察表は写真図版の方にある）

前年度遺構（6）、前年度遺構外（55 ～ 57）、次年度遺構外（58 ～ 61）の順で掲載した。前年度出土分の図化は、トレースまで前年度に済んでいた。破片ばかりで（57 は三つの破片を合成した図上復元）、時期の特定が難しいが、57 は 9 世紀後半か。

以下、観察表の補足。27は、間違って土師器に登録していたもの。土師器から漸移的で、焼成温度が低かったせいか灰白色で土師器に近い色をしているが、敲くとキンキン高い音がする。57の図は、前年度に図上で合成して復元実測したもので、実際には接合しない同一個体片3片から成る。口縁～胴部破片が2片で、大きさは両方とも5×4cm、片方が実測図に示されている。もう一つは、底のみの破片で、拓影に示されているものである（2.5×2.5cm）。

参考文献

伊藤博幸　1998「北上盆地南部」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会　シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集　東北地方の古代集落』第3分冊

3　陶　磁　器（第400図7・8、写真図版244の1～8、観察表は写真図版の方にある）

当センター文化財専門員の羽柴直人氏の同定を聞き書きしたものであり、間違いがあれば全て担当者の金子の責任である。中世のものは全点掲載した（7･8）。近世（後半）は、遺構の時期に関わる1～6のみ掲載したが、元々の出土量も少なく、全部で30点にも満たない。

4　土　製　品（第401～413図、写真図版245～263、観察表は写真図版の方にある）

今回の調査で出土した土製品は397点で、耳飾2点、小玉・垂飾品3点、土偶99点、動物形土製品2点、動物形把手4点、土版2点、「スタンプ状」土製品2点、円盤状土製品184点、三角状土製品1点、焼粘土塊77点（以上）、土錘2点、不明17点である。全点掲載したが、図は割愛したものもある。土錘は古代、それ以外は、ほとんど全て縄文時代中期末～弥生時代前期と思われる。

整理作業の都合で、遺構内出土遺物を種類に関係なく先に番号を付けてしまったので、わかりづらいと思われる。ちなみに、1～15が遺構内出土品で、1・3は土錘、2・10は不明品、4・11・14・15は焼粘土塊、5・6・8・13は円盤状土製品、7・12は土偶、9は土偶？である。遺構外は、種類ごとに番号を付け、それぞれの種類の中は、前年度→次年度の順に並べているが、円盤状土製品、土偶の場合は、さらに細別形態に分けて、その最初に遺構出土品を掲げているので、煩雑になっている。お詫びする次第である。

以下、それぞれについて概要と表の補足を述べていく。なお、表の見方などの注意事項は本章の冒頭にある。

(1) 耳　　飾（第401図16・17、写真図版245の16・17）

2点出土した。16は縄文時代後期末と思われる。17は耳飾かどうか怪しいが、把手としても、本遺跡で主体を占める縄文時代晩期末～弥生時代前期には把手がないので、何とも言えない。

(2) 小玉・垂飾品（第401図18～20、写真図版245の18～20）

3点出土した。時期は、18は不明、19は縄文時代後期か、20は縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる。18は、平成17年7月24日の岩手考古学会の際、識者から「これは側面が摩滅しているためはっきりしないが、本来側面に刻目を持つもので、類例が青森県八戸市田向冷水遺跡で出土している」との指摘を受け、図

を訂正したものである。田向冷水遺跡の類例なら、弥生時代前期ころの可能性が高い。

(3) 土偶・動物形土製品・動物形把手（第401図7・21～第410図120、写真図版245の7・12・21～写真図版253の120、写真図版252の9）

(a) 土偶（第401図7・21～第409図117、写真図版245の7・12・21～写真図版253の117・写真図版252の9）

100点掲載したが、44は、観察表作成の時点で土偶でないとわかったので、99点の出土である。土偶と土偶？（9・103～）に分けて掲載したが、吟味が十分でなかったため、当初「土偶」とした中にも「土偶？」が混じってしまった。

時期は、7・33?・34?が縄文時代後期中葉、63が不明の他は、ほとんど全て、縄文時代晩期末～弥生時代前期に入るものと思われる。後期中葉の土偶は、該期の土器片が集中する付近からいずれも出土している。晩期末～弥生時代前期についても同様である。

大体が摩耗しているのではっきりしないが、全体的に整形が良いものは少ない。胎土に金雲母含むものは認められず、胎土は精製土器のそれより明らかに下である。

本遺跡の土偶は摩耗しているのが普通であったため、観察表では特にひどいものしか指摘していない。本章冒頭でも指摘したように、図の表現に前年度と次年度で若干違いがあり、特に土偶の場合は隆帯が貼付されることが多いため紛らわしくなってしまったことをお詫びする。

7の土偶は、SK32土坑の底面直上から出土しており、特別な事情を窺わせるが（副葬品?）、土偶は、出土時には二つに割れやや離れて出土したようで(写真図版19)、また土坑自体も断面形は袋状で自然堆積が推定されており（第26図）、必ずしも土坑に伴うものとは言えないのかも知れない。ただし、同じ層から出土した土器から時期がほぼ特定できる重要な資料であることは確かであろう。

以下、観察表の補足。まず「土偶」としたもの。28は、左腕先端と胴中央が十字状に割れたもので（第402図の割れ線参照）、右手～右胸はH Ⅷ 18・Ⅳ a2層、左胸がG Ⅶ 20・Ⅳ a2層、左手がG Ⅷ 22・Ⅳ a2層、胴右がG Ⅷ 16・Ⅳ a2層出土である。胴は円筒形でなく薄目なので貼り合わせのように見えるが、粘土輪積みによる中空と思われる。正面にケズリ痕のようなものが見えるので、整形の最終段階で磨かれた可能性が高い。44は、観察表作成時点で「土器の脚」であると気づいた。報告者は、以前にも岩手県大船渡市長谷堂貝塚で同様のものを土偶と報告しており（(財）岩手県文化振興事業団　1999: 第191図5、第192図13)、ここにお詫びして訂正する。45は、図では不明瞭だが、後ろの左耳の部分に刺突がある。図に表現されていないが、正面の胸の隆帯上沈線の付け根に刺突がある。6字文を持つ。50の縦方向の断面が表現されていないが、短沈線のある方がイモムシの頭状に盛り上がっている。裏面に粘土まくれ痕が見える。短沈線の様子からは、41のような結髪土偶の可能性を窺わせる。57は、大洞A2～A′式古期の可能性があり、胸の隆帯の先端（乳房部分）が分離しつつあるようなので大洞A′式古期か（金子　2004a)。沈線底、粘土まくれ痕。ナデで沈線つぶれ。背中6字文。62は、二箇所から出土した破片が接合したもので、はっきりと図示しなかったが、上面図の三角形状に抉れた部分を結んだ線より下（先端）がM Ⅲ 21から出土したもののようである。63は、丸く小さな瘤状の突起を乳房と見立てて腕と考えたいが、その下の粘土接合面からの剥離が不自然であり、結髪の可能性もあろう。もし、腕なら縄文時代後期中葉、もし結髪なら縄文時代晩期末～弥生時代前期の可能性がある。側面図に示した窪みは、スプーン状の窪みである。65の側面に見られる沈線は何を表現したものであろうか。75は、股のところで接合したもので、左側の図の左の長い方の破片がトレンチ

出土で、右側の短い破片がM Ⅲ 22・1b層の出土である。77は胴部破片と思われるが、背中の刻目が側面図の平らな所まで続いていて短沈線状を呈しており、胴にしてはやや変な在り方である。80は、図示し忘れたが、下面の頸欠損部は剥落しているのだが、その左端に2つ、右端に1つ刺突文が見える（深い刺突がここまで貫いたもの）。81は、表と裏の粘土板を貼り合わせて作ったもので胴中央に空洞が見られる。正面の文様に比べ裏の文様はよくなぞっており深くはっきりしている。82は、胎土、砂も見えないが金雲母も見えない。97は、正面から背中に向けて粘土板3枚を貼り合わせたもののようである。98は、典型的な大洞A′式古期の結髪土偶である（金子　2004）。臍は、粘土粒を貼付した上に刺突を施したもので、背面背中の装飾も同様である。右側乳房の上に隆帯に沿って溝状に黒斑が認められる。6字文。

次に「土偶?」。9は、見た目が焼粘土塊で、そちらに含めた方が良いように思うが、芯棒痕が気になる。「不明」として分類した10は、9に似ており、逆に「土偶」の腕の可能性がある。104の上下位置の判断は、岩手県一戸町田中4遺跡例を参考にし（金子　2004a: 第4図6）、脚でなく結髪と判断した。112には、土偶には珍しく胎土に金雲母が認められ、土器の脚の疑いがあるが、四脚浅鉢にしては有機質な印象を受ける。

（b）動物形土製品（第410図118・119、写真図版253の118・119）

2点出土した。両方とも縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われ、出土層から、118は青木畑式期、119は山王Ⅲ層式期の可能性がある。118は、鼻の穴状に二つ穴がある。119は、背中に黒斑がある。腹側、腕と腕、脚と脚の間は窪んでいる。イノシシか。

（c）動物形把手（第410図120、写真図版253の120）

4点出土し、土器の方で扱ったものが3点ある（第108図265・第361図3241・第389図3624）。いずれも縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われ、3241は、土器の文様から青木畑式期?、3624は、土器の文様から大洞A′式古期の可能性がある。120は、酸化鉄付着、やや摩耗している。

（4）土　　版（第410図121、122・写真図版253の121・122）

2点出土。時期は、縄文時代晩期後葉～末であろう。

（5）「スタンプ状」土製品（第410図123・124、写真図版253の123・124）

縄文時代後期後半に見られる一般的なスタンプ形土製品とは異なり、縄文時代晩期末～弥生時代前期のものと考えられるが、類例を見つけることができなかったので、形状から便宜的に命名したものである。2点出土した。先端が二股に分かれ、そこに刻目を持つことなど、形状は、岩手県小田遺跡のスプーン状土製品の柄の部分に似ているが（大迫町教育委員会　1979: 第24図4）、該期の同じような形状の例を今回見つけることができなかったので確信は持てない。

（6）円盤状・三角形土製品（第410図125～第412図305、写真図版254の125～写真図版260の305）

再利用の土製品である。

（a）円盤状土製品（第410図125～第412図295、写真図版254の125～写真図版260の304・写真図版255の13・写真図版258の5、6、8）

穴あき（完形→破片）→穴あき未成品→穴なし→不明（破片）の順に掲載しているが、260は観察表作成時に（穿孔）未貫通、300も同様?、296は（穿孔）欠損品とわかった。184点出土した。土器と同様に、

ST01を中心にした捨て場からほとんどが出土しており、縄文時代晩期末～弥生時代前期に帰属するものがほとんどと思われるが、5と6のように縄文時代後期中葉の土坑から出土しているものも存在し、特に穴あきでないものには、その他の時期のものも含まれていると推定される。

観察結果から読みとれる傾向。厚さは比較的均質。同じ場所から複数出土することが比較的多く見られる。穴あきのものは、主として裏側から穿孔開始し、壷の胴らしきもの多い。他の時期の穴の開いてないのに比べ、器面平らで凹凸がないものが好みで（厚さ平均4～5㎜）。中心からずれると良くないようで、ずれたものは未成品。製作工程は厳密なものはないようで、周辺研磨してから穿孔するものとその逆のものがあるようだ。

5と6は、SK32土坑から出土し、この土坑からは完形に近い状態に復元された土偶（7）が出土しており、特別な事情を読みとる必要があるだろうか（土偶の項参照）。

以下、観察表の補足。126は、図では全周研磨ということになっている。下半は確かに完全に研磨されているが、上半は欠損時の凹凸が残り、研磨はされているようだが表面平らではない。また、表裏面どちらも研磨されているが、本来壷の胴部であったようなので、片側の部分は元々は磨かれていなかったのではないか。127の周辺の研磨、断面平らになるほどではなく凹凸を残す。128の左右辺は平らになるほど研磨しているが、上下辺は凹凸を残す。129の周辺の研磨、全周凹凸残す。深鉢の胴部片を再利用。130の上の半周凹凸残す。132の周辺の研磨、表面平らになっている所ない。133も、表面平らになっている所ほとんどない。134は、利用した土器自体が摩耗しているので不明瞭だが、周辺の研磨、全周表面ほぼが平らになる位行われている。136の周辺の研磨、表面が平らになっている所ほとんどなし。137の周辺の研磨、表面が平らになっている所1/3周くらい。138の割れ口は、それほど新しく見えないので調査時にやった可能性は低い。未成品か。139の周辺加工、研磨しているようには見えないが、凹凸もほとんどないので、135、138を参考にすれば調整している可能性が高い。140は、摩耗ひどいのでよくわからないが、周辺研磨してないようであるが、139の例を参照すれば調整している可能性もある。141は、研磨されている可能性ある部分もあるが、全体的に凹凸がある。142は、一部表面が平らになるくらい研磨されている。143の周辺、研磨されているようには見えないが、凹凸ほとんどないので調整されている可能性が高い。144は、摩耗しているので周辺の研磨はっきりしないが、一部表面が平らな所あるので研磨しているのは確実。一部大きく凹んでいて円形をなしていない。146の周辺研磨、表面平らなのは1/2周。珍しく利用土器の外側を中心に穿孔している。147の周辺の研磨、表面平らなのは3/4周。珍しく、穿孔は、表、裏のどちらかに偏るのではなく、表裏ほぼ1:1で穿孔している。148は、ほぼ全周研磨で表面も平らだが、一部窪んでいる所には及んでいない。これも147同様、表裏1:1の穿孔である。149の周辺の研磨、表面平らなのは1/3周以下で凹凸多い。これも表裏1:1の穿孔に近いが、やはり裏が多めである。150の周辺の研磨、表面平らなのは2/3周で、これも表裏1:1の穿孔である。151の周辺の研磨、元々欠損、剥落あってはっきりしないが、表面平らな所もある。152は、元々摩耗しているので周辺研磨はっきりしないが、表面はそれほど平らでもないが滑らかではある。穴も滑らかだが、欠けている所あり。153の穴が中心からずれているのは、周囲に欠けている部分があるためか。全体的に摩耗気味なので研磨はっきりしない。154の周辺の研磨、表面が平らになっている部分僅か。155の周辺研磨凹凸多い。157の周辺の研磨、表面が平らになっている部分僅か。159は、全体的に摩耗しているのではっきりしないが、周辺の研磨ほぼ一周している。ただし表面が平らな所は少ない。160は、全体的に摩耗しているのではっきりしないが、周辺の研磨ほぼ一周しているようだ。ただし表面が平らな所は少ない。穴は中心からずれている。161の周辺の研磨、ほぼ全周平ら。穴は中心から僅かにずれる。穴の周囲に擂り鉢状の遊び

がなくまっすぐである。162の周辺の研磨、あまりはっきりせず凹凸多い。穴は、ほんの僅か中心からずれる。164の穴は、ほんの僅か中心からずれる。揺り鉢状の遊びは、裏表ほぼ同じ大きさである。165の周辺の研磨、表面平らな部分1/3周くらい。166の周辺、研磨しているようには見えないが、凹凸少ないので割る際に調整していることは確実である。168の周辺の研磨、表面平らになっている部分2/3周以上。169の周辺の研磨、平らな部分なし。利用土器は、裏を見ると底部のような接合痕が見え、そのような角度をしているが、表面は普通の胴部である。170の周辺、研磨と言うより摩耗。凹凸著しい。172の周辺の研磨、平らな所僅か。173の周辺の研磨、表面平らな所1/3周。175の周辺の研磨、表面全て平らであり、穿孔途中に欠損したものか。176の周辺、研磨と言うより摩耗に近い。177の研磨部分、表面全て平ら。178の周辺の研磨部分凹凸あり。179の周辺、研磨というより摩耗に近く、凹凸ある。180の周辺の研磨部分、凹凸著しい。181の周辺の研磨部分、表面平ら。182の周辺の研磨部分、凹凸若干あるがほぼ平ら。183の周辺の研磨部分、平ら。184の周辺の研磨部分、凹凸あり。185の研磨部分、ほぼ平ら。186の研磨部分、平らな所もある。187の研磨部分、半分以上平ら。188の研磨部分、半分以上平ら。189の研磨部分、凹凸著しく、研磨していない可能性もある。厚さ不均衡で、3㎜の所と4㎜の所がある。192の研磨部分、凹凸あり。193の研磨部分、ほぼ平ら。195の研磨部分、凹凸あり。197の周辺凹凸著しいが、一応残存部全て研磨しているらしい。198、199、200の研磨部分平ら。201と202の研磨部分ほぼ平ら。203の研磨部分凹凸あり。204の研磨部分一部平ら。205の研磨部分ほぼ平ら。206の周辺、凹凸著しく研磨しているかどうかはっきりしないが、割ってそのままでもない。207と208の研磨部分ほぼ平らで、同じ個体の破片を再利用しているようだ。209の研磨部分平ら。穴が径3㎜と小さい（通常は5㎜）。210の研磨部分平ら。211の研磨部分ほぼ平ら。215の欠損部の割れ口新しく、調査時に欠損したものか。研磨部分の2/3周平ら。219の研磨部分2/3周平ら。220の穿孔は、珍しく表中心に行われている。225の穴、径7、深さ4㎜。226の表の穴は、ほんの僅かで227と同じくらいであり、径2㎜、深さ1㎜以下。裏はかなり大きく、238と同じくらいで、径7㎜、深さ4㎜。228の穴は、径5㎜、深さ3㎜。229の研磨部分、1/4周程度平らで、穴の径は5㎜、深さは2㎜。233の穴は、径5㎜、深さ3㎜。237の周辺の研磨、平らな部分僅か。穴の径5㎜、深さ2㎜。238の周辺の研磨、平らな部分ほとんどない。利用土器の表、LR→半裁竹管状工具を引いた痕跡。239の穴、中心から3㎜ずれている。径4㎜、深さ2㎜。表にも少し削った痕跡が見られるが、穴のようなのではなく移植ベラの「ガジリ」に似る。周辺の研磨、平らな部分なく、研磨しているかどうかも微妙。240の周辺の研磨、平らな所はないが凹凸もほとんどない。241の全体の形状は五角形で、粗割段階であることを意味するか。しかし、割れ口の凹凸は少なく、一部研磨しているように見える部分さえある。242の図を見てわかるように、裏面の周囲の欠損部通常より内側に及んでいる。243の穴は中心から5㎜程度ずれ、径5㎜、深さ2㎜。土器は反っており、周辺の割れ口の凹凸著しいが一部研磨しているように見える部分もある。244の穴は中心から4㎜ずれ、径2㎜、深さ1㎜。245は、全体形が角張っているが、割れ口は整形しているようで凹凸非常に少ない。260の穴は、単なる剥落と見間違うくらいの穴だが、中心部にあるので穿孔に間違いないだろう。径1.5、深さ0.5㎜。265の左上の直線的な部分は、研磨していない所で粘土接合面から剥離した部分である。267の周辺、研磨しているか不明瞭だが、全体的には直線的で凹凸少ない。内（裏）面整形からは底部のように見えるが、外（表）面は普通の胴部のように見える。276は、研磨していないが凹凸少ない。287の全体形は、整円形で整っているが、周辺の加工が研磨様ではなく見えるのは、胎土に砂多いせいか（一周研磨？）。291は、前年度作際された図では中央に穴があることになっているが、そのように見えない。293は、図の下半を研磨している可能性もある。300は、観察表作成時に気づいたが、キズのように見えていたがほぼ中央なので未貫通孔であろう。径2㎜、深さ0.5

㎜。

(b) 三角状土製品（第 412 図 305、写真図版 260 の 305）

円盤状土製品と同じ再利用品であるが、全体が円盤状ではなく三角形を呈するものである。1 点出土した。305 の土器は、反っている。

(7) 焼　粘　土　塊（第 412 図 308、写真図版 260 の 4・11・14・15・306 ～写真図版 262 の 378）

登録は 77 点であるが、2 個を 1 点と数えているものもあるので、出土個数はもっと多くなる。形状から大きく 5 種類に分けられるが、多いのは次の 3 種類である。粘土をそのまま手の中でひねったような形で（人糞状）、表面は割とザラザラしており、やや重く橙色を呈するもの（手びねりと仮称）、方形を基本としたブロック状で軽く、表面が滑らかで、朱～クリーム色（白色基調）を呈するもの（軽石状と仮称）、橙色で薄く粘土の圧痕がはっきりしない土器破片状。この 3 種類は、他の時期・地域でも一般的に見られるようである（金子　2004b:p.209）。しかし、金子（2004b）で指摘した、表面の凸凹著しく（ギザギザ）金平糖のような形状で、やや重め、土器破片（が摩耗した）のように見える場合もあるもの（金平糖状と仮称）は、本遺跡ではほとんど見られなかった。また、逆に、本遺跡では、橙色で土器破片状に似るが（薄く表面ツルツル）ねじれているもの（樹皮状と仮称）が認められた。しかし、金平糖状、樹皮状を加えて 5 種類ということになるが、これらは、それぞれ土器破片状あるいは手びねりの変形と捉えることもできるので、ほとんどが以上の 3 種類のいずれか、あるいは折衷的なものとすることができる。

大部分が捨て場出土で、縄文時代晩期末～弥生時代前期に帰属するものがほとんど思われるが、4 のように縄文時代後期中葉、11 のように縄文時代中期末に帰属する可能性を持つものもある（306 は古代の土坑の混入）。

なお、306 は遺構内出土だが、古代の土坑への混入のため最初の通し番号になっていない。「土偶」に含めた写真図版 252 の 9 も、焼粘土塊の可能性がある。

以下、観察表の補足。357 は、1.7 × 1.7 × 0.8cm、2.82g が 1 個、1.3 × 1.3 × 1.3cm が 2 個で、重さ 1.05、0.68g、1.3 × 0.7 × 0.7cm 程度が 5 個で、重さ 0.87、0.36、0.46、0.37、0.25g で、全体的に軽い。365 のもう 1 片は、3.0 × 2.5 × 1.0cm、5.01g。他のものと違って破片同士で色調異なり、“寄せ集め" は肌～白色、もう一つは橙色。

(8) 土　　錘（第 412 図 1・3、写真図版 263 の 1・3）

古代の管状土錘が 2 点出土したが、共伴土器等が明確できないため時期を特定するのは難しい。

(9) 不　　明（第 412 図 10・381 ～第 413 図 393、写真図版 263 の 2・10・379 ～ 393）

特定できない土製品が、17 点ある。写真図版 263 の 10 は、写真図版 252 の 9 に似ており、土偶の可能性もある。

以下、観察表の補足。384 の瘤状に近い半円形の突起部分に下から刺突（貫通はしてない）。胎土は精選されている印象を受ける（ただし金雲母は見えない）。386 は、ドーナツ状か U 字状の土製品か（387 と同様 ?）。

参考文献

（財）岩手県文化振興事業団　1999『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 296 集

大迫町教育委員会　1979『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第4集
金子昭彦　2004a「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号　早稲田大学考古学会
2004b「Ⅴ.3.（4）焼粘土塊」『平清水遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

5　石　　器（第414～488図、写真図版264～321、観察表は写真図版の方にある）

〔概要〕原料も含めると、30×40×20cmのコンテナで約780箱出土している。石器は23,453点、剥片類は683,659.13g出土した。出土点数の項に示したように、磨製石斧の未成品が5,008点、その製作に関係したと思われるハンマー類、台石、砥石を合わせると17,218点となり、磨製石斧の製作関係品が大部分を占める。その他の未成品としては、石鏃の411点があり、石製品に含めた石剣類219点、環状石斧61点、独鈷石31点などから、本遺跡は石器類の製作を中心とした遺跡であることは確実であろう。ただし、少ないながらも、石匙や石皿、凹石なども出土しているので、通常の生活も営まれていたことも確かである。これらには、縄文時代中期末を中心にして、その他の時期の石器も含まれているが、その出土点数は誤差範囲に収まり（第2表（15）参照）、ほぼ縄文時代晩期末～弥生時代前期の石器組成と見なして良いと考える。

〔分類〕本書では、大別-器種分類-細別という分類体系を採った。通常の器種分類の上に大別という括りを設けたのは、（B）の「ハンマー類」が原因である。ST01捨て場精査の段階から、磨製石斧未成品の多さ、そして「多面体石器」を初めとした石器製作に使用する石器が極めて多いことに気づいた。また、整理の際に、逆に凹石が極めて少ないこと、その使用痕は後述のように通常の凹石とは異なると思われたことから、本遺跡は石器製作に特化した遺跡で、敲打痕を持つ石器は全て石器製作に関連しているのではないかと推測するに至ったのである。また、「多面体石器」は使用痕から名付けられたものだが明らかに石器製作具であり、ハンマーの一種である。しかし、敲石に含めてしまうには、あまりに類型的であり機能が特化している。そこで、これらの器種を含む石器製作具としての「ハンマー類」という上位概念（分類）が必要だと考えたのである。なお、後述のように、本遺跡の凹石は、推測とは違い、石器製作具ではなく通常の植物加工具だったようである（第Ⅸ章参照）。

器種分類は、原則として一般的な分類方法を採ったつもりだが、やや異なる掻・削器A、B類とは、いわゆる不定形石器のうち、一般的に剥片石器を作る石材が使われているものをA類、それ以外のもの（例えば磨製石斧製作時の剥片を利用）をB類としたものである。各器種内の細別分類は、粗（器種）分類の際に把握した本遺跡での出土傾向を元に、製作工程や推測される用途に配慮しながら作成したものである。詳細は、各器種の項参照。

以上の分類は、次年度に行った分類である。前年度分は既に済んでおり、原則として前年度分は分類をそのまま残そうと考えたが、前年度分も観察表を作成したのは次年度担当者であるため、器種名や分類を若干変更・移動して統一性を持たせた。前年度の器種名を特に記す必要がある場合は、「　」内に示した。特に大きく変更したのは、次の通りである。尖頭器→石鏃未成品、○○類→○○（例えば凹石類→凹石）。その他、denticulateなどは、掻・削器等に一括した。尖頭器については、単なる名称以上の変更になるが、本遺跡からは両面を全面剥離して尖頭器然とした石器はほとんど出土しておらず、次年度に大量に出土した類似資料の検討から、これらは石鏃の未成品と捉えた方が良いのではないかと考えた。このことは前年度でも既にその可能性が指摘されていたことではあるが。さらに、（A）（B）（C）の大別の中では前年度分の細かい移動があり、特に石錐の比較的多数を石鏃未成品に変更した。

なお、前年度出土分の中でもST01捨て場トレンチ出土品に関しては、次年度とのつながりから未選別であったので、次年度に選んでいる。

写真図版319の459、460については、類例を見つけることができず「不明」としたが、形状は石製品の独鈷石未成品によく似ている。ただし、非常に薄く石質も明らかに異なる。

石鏃完成品、石鏃未成品、石錐などの器種分類は、調査員が行った。各器種内の細別は、調査員が分類を示しはしたが、実際の作業は時間の関係で作業員に任せざるを得なかった。全員実測にも慣れており、中には調査員より多くの石器を見てきたと思われる方もいて、分類を任せることにそれほど無理はないと考えていたが、観察表作成時に掲載分の細分を見て若干気になる点があった。もちろん大半は問題はないのだが、「本来の○○が欠けてこうなっている」、すなわち「○○の一部である」という「欠損」品という概念が念頭になく常に「完成品」として取り扱ってしまう方がいたようで、例えばハンマー類の4Cの欠損品を小さいからと言って5Bに分類しているような場合が見られた。掲載分は調査員が変更したが、不掲載は時間的にどうにもならなかった。したがって、以下の細分に示された点数は若干の誤差を含むものとして考えていただきたい。しかし、大きな変動はないものと思われるし、何より調査員自身が行っていたとしても誤差は含まれるものと予想される。途中で考えが変わることや（大きさなどの概念が）いつの間にかずれてきてしまうということはよくあるし、当然ケアレス・ミスもあるからだ。途中で気づいても、本遺跡のように大量に出土した場合には、元に戻って再度ということは不可能である。したがって、本稿の分類は、調査員自身が行う分類結果から大きく外れていないと考えている。

〔出土点数〕石鏃223点、石鏃未成品411点、石錐144点、石篦18点、石匙16点、掻・削器等A類（Uフレイク・Rフレイク、ピエス・エスキーユ含む）68点、掻・削器等B類9点、磨製石斧24点、磨製石斧未成品5,008点、打製石斧1点、「ハンマー類」13,181点、台石1,037点、砥石3,000点、石皿22点、凹石58点、磨石231点、不明2点、剥片石器製作時の剥片221,404.96g、その他（磨製石斧の製作剥片主体）の剥片462,254.17gが調査で出土した。「ハンマー類」13,181点のうち、2,086点は多面体石で、また493点は通常の凹石に分類される可能性がある。その他は敲打痕を持つ様々な石器群である。第2表参照。

〔器種組成〕縄文時代晩期末～弥生時代前期のこの地域の石器の器種組成については多くの研究があるが（相原　1989、1990、禰宜田　1993、佐藤　1997）、概要と出土点数の項で述べたように、本遺跡は、石器製作、特に磨製石斧の石器製作に偏った遺跡であるため、一般的な傾向は当てはまらない。

ただし、基本的な器種も揃ってはいるので、石器製作に特化した遺跡（工房）でもなく、集落でもあるのだろう。さらに、第2表（15）を見る限り、晩期後葉から弥生時代前期にかけて、石器組成に大きな変化は認められず、この間石器製作は継続して行われていたと考えて良いだろう。

〔掲載基準〕前年度は、石製品も含めて登録作業を行い、そこから選別されている。登録は、剥片類を除いて基本的に全ての出土石器について行われているようで、仮番号を付け、ノートに出土位置と器種（分類）が記されている。前年度出土遺物のほとんどを占めるST02、03捨て場では、977点が登録され、324点が掲載されている。石製品も含んでいるので正確ではないが、いずれにしろ通常よりかなり高い掲載率である（1割は確実で、2割を超えているかも）。この他、遺構内剥片石器5点、石斧類未成品2点、その他（ほとんど石製品）4点、遺構外剥片石器17点、石斧類未成品12点、礫石器10点、その他（ほとんど石製品）6点で、全部で385点掲載した（さらに、写真のみの接合資料が3点）。ちなみに、ST01捨て場出土分（トレンチ）の選別は、次年度に行っている。

次年度は、出土石器が原料も含めてあまりに大量であったため（前述）、分類作業に多くの時間をとられ

て図化にはほとんど時間を割けなかった。そこで、遺構出土分以外は（捨て場も遺構外扱い）、前年度に図化されなかった器種を中心に穴埋め的に掲載することとした。ただし、石匙、凹石は出土点数も少なく、また特殊な意味を持つと考え、全点掲載した。結果として75点のみの掲載となった。

なお、写真は、礫石器については実測図に準じて撮影したが、剥片石器は裏表のみとした。

〔掲載順序〕報告者（金子）は、前年度の不掲載石器を見ていないことと石器の記載に自信が持てないので、前年度分と次年度分を明確に分け、本番号を、遺構（前年度遺構→次年度遺構）出土（1～38）→前年度（39～347、461～463）→次年度（348～460）の順に原則として付けた。ただし、このまま掲載すると読者にご不便をおかけするので、図や写真図版への掲載は器種ごととし、そのため番号が飛んでいる。

掲載順序は、遺構内については出土位置（遺構）に従って、遺構外については分類に従っている。遺構外の分類内順序は、出土位置に従っており、細別ではない。

〔記載要領・表の見方〕写真だけのものも多いので観察表は写真図版の方に掲載した。観察表中の石質の略称について。（奥羽）→（奥羽山脈）、（北上）→（北上山地）、（第四紀）→（第四紀火山）。その他、本章の冒頭部分参照。

〔石器集計表について〕次年度は、ST01捨て場から大量の石器類が出土した。ST01捨て場は、縄文時代晩期中葉～弥生時代中期という時間幅で形成され、この間の変遷は多くの遺物包含層から追うことができる。特にも、本遺跡の場合は磨製石斧を中心にした石器製作関係品の出土が多く、その変遷を辿ることも遺跡の記載をする上で重要な事項となろう。そこで、各遺物包含層ごとの出土石器の点数を集計することにしたが、最終的に全部の出土点数を集計しなければならないということで、ついでにその他の出土地点の集計も示すことにした。ただし、紙幅と時間的な問題で次年度（03年度）出土分に限ることにした。

なお、ST01捨て場出土品の場合は、層位別だけでなく地点別（小グリッド）でも集計したが、むしろ層の分布範囲に左右され、あまり意味がなかったので掲載を割愛した。

〔作業工程〕前年度の整理作業は平成14年11月1日から行われた。大体の器種分類を行い登録作業は終了したが、石器と石製品を一緒にするなど最終的な器種分類は保留された。登録977点中324点を掲載することに決め、平成14年度中に118点の実測を終了していたが、残り206点の実測は平成15年5月1日～7月中旬に作業員約4名で行った。

大量の石器が出土した次年度の作業工程。水洗は、土器とともに平成15年11月30日までに終了した。冬は大量の石器を広げる場所がないので土器のみの作業とし、本格的な整理作業が再開された平成16年5月に調査員を含め全員で器種分類を行った。当初細別まで同じ体制で行うつもりだったが、器種分類までで6月上旬までかかり、再考せざるを得なくなった。報告書は基本的に図を載せてこそであり、この時点でまだ土器の図化が全く行われていなかったからである。そこで、先に石器以外の図化作業を行い、この作業に目途がついた8月上旬から石器の細分類を始めた。石器の実測を何年も行い石器の扱いに慣れている作業員約6名を選抜し、調査員が図示した分類に従って行い、9月中旬に終了した。調査員の指示が適切でなく分類が周知徹底しなかったため、一部やり直しも含んでいる（分類の項参照）。細分類の後、作業員は、そのまま石器実測に移行し10月一杯で終了した（次年度分75点）。その後、12月一杯まで石器も含めたトレースを行い、1月からは掲載石器の計測および石器製作時の剥片（不掲載）の重量計測・集計を、作業員約3名で3月前半まで行った。1～2月に石器の図版、写真図版の作成も行っている。なお、石質鑑定は、基本的にそれぞれの年度ごとに鑑定者を招いて数日間かけて行い、作業員1～2名が補助でつき、その入力を作業員1名が数日間かけて行っている。

〔補足〕最後に、前年度出土品のうちST02・03捨て場から出土した石器について。ST02・03を記すとST01も記載せざるを得なくなり、煩雑になるので出土地点の欄から省略し、出土グリッド・層だけを記すこととしたので、ここで補っておく。ST02出土は、39～44、46～54、56～63、66～75、79～82、86～93、95～98、101～103、105～110、112～125、127～133、139～145、150～154、157～168、170～175、178～184、186、187、189、191～206、209～218、223、225、229～237、239～245、247～249、252～276、279～303、316～341、344、346、347、ST03出土品は、55、83、94、104、146～148、155、176、177、188、219、220、226、228、277、278、304～307、345である。

(A) 剥片石器類（第414～426図、写真図版264～276）

石鏃（未成品含む）、石錐、石匙、石篦、掻・削器等その他（Rフレイク、Uフレイク、ピエス・エスキーユ含む）である。

(1) 石鏃（第414～418図、写真図版264～267）

粗分類の際に、未成品があると気づいていたので、製作段階に基部の形状を組み合わせた分類を考えた。阿部（2000）を参考にして、明らかな未成品をⅠ類、黒色付着物が見られ明らかな完成品と考えられるものをⅢ類、完成品かどうかはっきりしないものをⅡ類とし、破片でわからないものを0類とした。Ⅰ類は製作段階で、Ⅱ、Ⅲ類は、基部の形状で分けたが（第2表（1）の下）、Ⅰ類の中の1類と21類は、主観に左右される意味のない分類であった。なお、基部の形状のA類は凸基、B類は凹基である。

上記の分類に従って、次年度出土品について分類を試みたのが第2表（1）上である。

なお、第Ⅶ章では、未成品も含めた石鏃の石質、完成品と未成品の大きさの違いについて検討している。

(a) 完成品（第414～415図、写真図版264の3・4・11・39～56・348～350・写真図版265の351～353）

ここでは、Ⅱ類も含めて完成品とする。223点出土した。次年度出土分について詳細に検討したが（第2表）、凸基（A類）が多いことしかわからない。

(b) 未成品（第415～418図、写真図版265の8・12・13・26・57～写真図版267の88・354～360）

411点出土した。次年度出土分について詳細に検討したが（第2表）、特に顕著な傾向は読みとれず、細別層ごとの出土点数では、基本的に土器の出土量に一致するようであり、晩期後葉から弥生前期まで継続して存在するようである。石川（1996）や松本（2000）によれば、石鏃の未成品は、この時期の拠点集落では普通に認められるもののようである。

(2) 石錐（第417・418図、写真図版267の5・31・89～写真図版268の100）

144点出土した。なお、次の石匙に含めたものの中に、把手（つまみ）を持った石錐といった形状の物が見られる（第419図361・367・368など）。使用痕分析でも（第Ⅸ章）、他と違って先端部に顕著に使用痕が見られ、石錐に含めた方が良いのかも知れない。

次年度出土分について、把手（つまみ）の有無によって三つに分類し、詳細を検討したが、特に顕著な傾向は認められなかった。晩期後葉～弥生時代前期については、土器の出土量をほぼ反映し、いつの時期にも見られる。

(3) 石匙（第418・419図、写真図版268の15・101～写真図版269の104・361～371）

16点出土した。他の器種と比べ、極端に出土点数が少ないのが注目される。点数が少ないので、特に細分しなかった。次年度の詳細は、第2表（4）参照。

前年度出土品と次年度出土品とは、同じⅣa層出土でも、形や石質が大きく異なっている。前年度出土品

がⅣa層のうち下層のⅣa2層を主体とし、次年度出土品がST01捨て場を主体とすることの違いが現れているのだろうか。

361～371の次年度出土石匙は、使用痕分析に出した（第Ⅸ章参照）。通常と異なり、つまみが付いているとは言え、どちらかと言えば石錐への近似を示し、元々石匙の出土量が少ないこと、さらに本遺跡が石器製作址であることから、通常とは異なる特殊な用途に使われたのかと考えたためである。1点（表土）を除き、何れもST01捨て場出土であることも、石器製作址である遺跡の特別な道具であることを思わせたが、使用痕分析では明確な結論は出なかった。ただし、動物解体具等の通常の石匙が明らかに含まれていることと、先端が尖っている石匙は、通常とは異なる用途が想定されることは確認できた（第Ⅸ章参照）。

（4）石篦（第420・421図、写真図版269の105～写真図版270の106・372～376）

18点出土した。磨製石斧などを製作する際にできる剥片に刃が付けられ、全体が石篦状の形をなすものが認められ（Ⅱ類）、これらも含めたが、非常に少なく2点のみである。また、Ⅰ・Ⅱ類とも、剥離の及ぶ範囲によって1～3類に分けたが（1類は一部のみ、2類は一部ない部分あり、3類は中まで剥離が及ぶもの）、ほとんど意味はないようである。

（5）掻・削器等その他・Uフレイク・Rフレイク・ピエス・エスキーユ（第421～427図、写真図版271～276）

石器製作過程で生み出された剥片に二次加工を施したものを主とし、いわゆる不定石器に相当するが、Uフレイク、Rフレイク、ピエス・エスキーユを含む。押圧剥離系列の石器を製作する過程でできる剥片を加工したものをA類、磨製石斧などを製作する過程でできる破片を加工したものをB類とした。

掻・削器等A類（Uフレイク・Rフレイク、ピエス・エスキーユ含む）68点、掻・削器等B類9点出土した。他の器種に比べて非常に少ない。

（a）掻・削器等A類（第421～423図、写真図版271の14・18・23・25・107～写真図版272の382）

楕円形の小さなものが目に付いたので、これを1類、その他を2類とした。

（b）Uフレイク（第421図6、写真図版271の6）

（c）Rフレイク（第426・427図、写真図版275の112～写真図版276の122）

（d）ピエス・エスキーユ（第427図、写真図版276の123～126）

（e）掻・削器等B類（第423～426図、写真図版273の383～写真図版275の391）

9点と非常に少なく、磨製石斧製作時の剥片が大量に出土しているが、これを加工して別の作業を行うという複合的な石器システムではなかったようである。383は、一見独鈷石の未成品に似ているが、ずっと薄く小さいものである。

（B）「ハンマー類」（主として打撃に使われる礫石器）（第431～449図、写真図版279～292）

多面体石器、敲石等である。13,181点のうち2類に含めた493点は、（C）の凹石に含められる可能性が高い（理由は凹石の項で）。

「ハンマー類」という大別を作った理由は、本節冒頭の分類の項で述べた。敲打痕が認められるものを次のように分類した。1類は、片手で持てる通常の大きさの敲石、2類は凹石、3類は板状のもので台石に近いもの（ギリギリ片手で持てる程度の重さ。台石との違いは、敲打痕が縁辺部に見られることで、台石は中央に認められる）、4類は長く棒状のもの、5類は掌に隠れる程度の小さなもの、6類は大きなもので片手では持

てないもの（石皿に近いが、縁辺部に敲打痕を持つもの）。3類に関して補足すると、板状でも、円盤状で縁辺部に敲打痕が認められるものは、環状石斧の未成品と判断した

2類（凹石）を補足する。凹痕が認められる礫石器には、大別すると二種類のものがあり、通常の敲石とクルミ割りに使われるものである（池谷　2004）。前者は、台のように使われるため、凹痕は中央にあり、深いそうで、後者は、片手で握って敲くように使うため、凹痕は中軸線の上下に分かれ、凹痕は小さなクボミ痕の集合体であるそうだ。この話を聞いて改めて金附遺跡の凹石を見ると、凹痕は中央にあり深いものがほとんどであるように見えた。そこで、これらの石器を「ハンマー類」に入れて分類し、念のため、次年度出土分のうち凹痕が比較的はっきりしている14点（396は間違って混入）を分析に出したのだが（第Ⅸ章）、意外にも全て“クルミ割り"とのことであった（報告書の出土点数では、凹石（C類）に変更してカウント）。したがって、2類に含めた493点も、石器製作具ではなく“クルミ割り"の可能性が高いことをお詫びする。

各類の細別について。1類は、1A類は、非常に一般的なもの（花崗岩が多い）、1B類は、1A類に似るが石質が異なるもので（見た目）、多く見られるものを中心に、1Ba類は青いもの、1Bb類は茶色いもの、1Bc類はその他、1C類は多面体石器、1D類は軽石（溶岩）に分けた。3類は、直径10cm以上で片手ではもてあますものをA類、それ以外の小さなものをB類とした。4類は、型として比較的多く見られるものを基準とし、指程度の大きさ（長さ15cm 以内）の小さなものをA類、茶色い石で主として片方の先端を敲いているものをB類、それ以外をC類とした。5類は、丸くコロコロしているものをA類、板状のもの（3B類と区別するため、最大長5cm未満のもの）をB類とした。

次年度に出土した「ハンマー類」について、使用痕からこちらに含めた方が妥当と思われた磨石5類も含めて、出土位置の詳細を検討したが（第2表（8））、分類が適当でないためか、顕著な傾向は読みとれない。晩期後葉～弥生時代前期については、基本的に土器の出土量に比例しており、有意味な偏りは見られない。

以下、特に特徴的な器種について述べる。

（6）多面体石器（第441～444図、写真図版287の189～写真図版288の208・写真図版289の394・395）

野球の硬球程度の大きさの石に面をなすほどの敲打痕が認められるもので、緻密で硬い石材であることを特徴とし、磨製石斧製作時の敲打に使われるものである（阿部　1984、1990ほか）。本書の1C類に相当する。石質だけでも他の器種とはっきり区別できるものが多いので、念のため使用痕のないものも集めてみた。

出土点数が多いので、さらに細分した。大きさにより、1類は掌に中にすっぽりと収まるもの、2類は片手で握れるもの、3類は10cm以上の大きなもの、4類は片手では持てないような大きなもので、破片で不明なものを0類とし、さらにそれぞれの中を、A類敲いていない（使用痕なしの原石）、B類敲いている、C類面ができるほど敲いている（割れている）に分けた。

分類した結果、4類は原石のみで、3類も10cm程度のものを上限として、それ以上はほとんど見つからなかった。出土位置別の詳細では（第2表（9））、やはり顕著な傾向は読みとれず、晩期後葉～弥生時代前期まで継続しているようだが、大きさ（1～3類）と使用状況（A～C類）が顕著に対応しているようだ。これについては、石質も含めて、第Ⅶ章で扱いたい。なお、石質は、緻密で硬い石質である以外に顕著な拘りはないようである。

（7）凹石（B類）（第445～449図、写真図版289の209～写真図版290の222・396～写真図版292の409）

396～409は、使用痕分析に出している（第Ⅸ章参照）。本遺跡からの凹石の出土は少なく、その凹石も、小さく浅い円形の穴が幾つも集まってあばたを形成しているという、よく見られる使用痕でなく、深く、脱落しているという印象を持つものが多かった。そこで、これは石器製作具（台石の一種？）なのではないか

と推測し、使用痕分析を委託した次第であるが、残念ながら報告者の推測は誤りで、通常の一般的な植物加工具のようである。396 ～ 409 ついては、凹石（C 類）としてカウントしたが、凹石（B 類）とした 493 点も、凹石（C 類）の可能性が高い。

（8）その他の「ハンマー類」（第 431 ～ 441 図、写真図版 279 の 19・20・27・28・30・32・写真図版 280 の 33・34・36・37・139 ～写真図版 286 の 188・392・393）

142 は、石器加工具ではなく明らかに植物加工具である

（C）その他の礫石器（第 449 ～ 488 図、写真図版 292 ～ 319）

砥石、磨石、凹石（C 類）、台石、石皿、磨製石斧（未成品含む）、打製石斧 ?、不明品がある。

（9）砥石（第 449 ～ 457 図、写真図版 292 の 1・7・16、写真図版 293 の 24・223 ～写真図版 294 の 234・410 ～写真図版 298 の 435）

3,000 点出土した。

基本的に類型で細分した（1 ～ 3 類までは大きさだが）。1 類は棒板状の一般的な砥石（長さ 15cm 以上）、2 類は石皿状のもの（底が面で窪む A 類と筋状の痕跡を残す B 類に分ける）、3 類は両手でも持てない大きなもの、4 類は拳大のもの（1 類よりは小さく 15cm 未満。「ハンマー類」の 1 類に近いで、板状の A 類と立体的な B 類に分ける）、5 類は平らな茶色いもの（「ハンマー類」の 1Bb 類と同じ石質）、6 類は小石状の小さなもの（5cm 未満で、「ハンマー」の 5 類と同じ大きさ）、7 類は丸棒状のもの（石質は 5 類に似るものが多い。真っ直ぐのものを A 類、バナナ状に屈曲するものを B 類に分ける）、8 類は溶岩（2 類と同様に A、B 類に分ける）、破片でよくわからないものを 0 類とした。分類がわかりづらくて、細分には間違いが含まれている可能性もある。次年度出土分を出土位置別に細分したが（第 2 表（11））、特に顕著な傾向は読みとれない。

（10）磨石（第 458 ～ 460 図、写真図版 299 の 235 ～ 238・436 ～写真図版 300 の 444）

231 点出土。「ハンマー類」に準じて分類し、1 類は片手で持てる楕円形の一般的なもの、2 類は板状、3 類は長い棒状、4 類は掌に収まる小石状（板状も含む）、5 類は赤色顔料が付着しているもので、1 類は、さらに、特に一般的なもの（花崗岩が多い）を A 類、溶岩を B 類、その他を C 類としたが、B 類は存在しなかった。次年度出土分を出土位置別に細分したが（第 2 表（14））、特に顕著な傾向は読みとれない。

（11）凹石（C 類）

前述の凹石（B 類）参照。58 点確認しているが、551 点まで増える可能性がある。

（12）台石（第 461 ～ 468 図、写真図版 301 の 10・17・239、写真図版 302 の 38・写真図版 303 の 240 ～写真図版 304 の 242・244・245、写真図版 305 の 243・445）

石器製作等の台とすると考えられるもので、石皿より薄く小さいものを主とするが、砥石と思われるものでも使用痕がはっきりしない板状のものは本類に含めた。1,037 点出土した。

大きさで分類し、1 類は最大長 22cm 以下で片手で持てるもの、2 類は 23cm ～ 30cm で片手だと苦しいもの、3 類はそれ以上で、A 類と B 類（特大。50cm 以上で二人がかりでも持てないもの）に分けた。破片で不明なものは 0 類。3 類は、台石と言えるかどうか疑問である。次年度出土分を出土位置別に細分したが（第 2 表（10））、特に顕著な傾向は読みとれない。

（13）石皿（第 469 ～ 472 図、写真図版 306 の 21・246・247・446 ～写真図版 308 の 452）

22 点出土した。少ないながら比較的多様なので、分類したが、あまり意味はないようだ。大きさで分類し、（長さでなく）幅が、1 類は 10cm 未満のもの、2 類は 10 ～ 15cm、3 類は 15 ～ 25cm（赤色顔料が付いて、使

用痕が砥石状のものをB類、中央にやや深めの穴が開いているものをC類、その他をA類と細分)、4類は25cm以上の大きなもの(赤色顔料がついているものをB類、付いていないものをA類と細分)、破片で不明なものを0類とした。次年度出土分を出土位置別に細分したが(第2表(12))、特に顕著な傾向は読みとれない。なお、表中の0.2、0.8は別々の場所から出土した破片が接合したもので、出土量に応じて配分した。

(14) 磨製石斧(第473～488図、写真図版308～319)

完成品24点、未成品5,008点出土している。未成品が圧倒的に多い。

(a) 完成品(第473図、写真図版308の248～251・453～457～写真図版309の458)

24点出土し、次年度出土品は少ないので全点掲載した。

(b) 未成品(第473～488図、写真図版309の2・9・29・35・252～写真図版319の345・347)

5,008点出土し、今回発見された単独の「器種」の中では最も多い(群なら「ハンマー類」)。

製作段階によって細分し、原石を0類、剥離段階を1類(形がほぼできあがっているものをB類、それ以外をA類)、敲打段階を2類、研磨段階を3類とした。破片については、少しでも敲打が認められるものを2類、少しでも研磨云々のものを3類としたが、分類の性質上1類が多くなるのは否めない。

次年度出土分を出土位置別に細分したが(第2表(7))、基本的に土器の出土量に一致し、特に顕著な変化は読みとれず、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期まで、同じように石器製作が行われていたようである。

426点の石質を見ると(第Ⅶ章)、意外に分かれるようである。また、長さと幅を見ると、長さ10cm前後、幅4cm程度をふさわしい大きさと考えていたようである(第Ⅶ章)。

252は、第474図に示したように、三つの破片に分かれ、上の破片がHⅧ23、中央がEⅧ18、下がHⅧ6の出土である。この石器について、前任者は次のような主旨のメモを残している。「HⅧグリッドで大形磨製石斧を目的として剥離整形→下の破片が事故で取れてしまう→磨製石斧になりそうもないので、環状石斧への転身を図り、上の破片を折り取る→中央部の、両端が取れた面の剥離、敲打整形に着手→気まぐれで側縁を剥離整形しようとして深く取れすぎEⅧグリッドに廃棄・・・・か?」。三つの破片になった後中央の破片を他とは別に剥離していたことは確実である。

(15) 打製石斧?(第488図346、写真図版319の346)

磨製石斧の未成品とは考えにくいもので、ST02捨て場から1点出土している。

(16) 不明(第488図459、460、写真図版319の459、460)

2点出土しており、両方とも似た形状で、ST01捨て場の近い場所から出土している。全体的な形状は、独鈷石の未成品に似るが、薄く、石質が顕著に異なる。石錘か?

(D) 剥片・残核(第428～431図、写真図版276～279・320～321)

(17) 剥片A類・残核・接合剥片資料(第428～431図、写真図版276の22・123～写真図版279の138・写真図版320の461～写真図版321の462・463)

押圧剥離系列の石器製作時に出る剥片である。221,404.96g出土した。461～463は、接合剥片資料である。それ以外は、原則として掲載を割愛したが、前年度分を一部掲載している。なお、途中まで多面体石器の破片の一部を、それとは気づかずに、剥片A類に含めていたので、重量は若干減る。

次年度出土分を出土位置別に示したが(第3表)、特に顕著な変化は読みとれず、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期まで、同じように石器製作が行われていたようである。

(18) 剥片B類

磨製石斧等の石器製作時に出る剥片である。462,254.17g 出土した。掲載は割愛した。

次年度出土分を出土位置別に示したが（第 3 表）、特に顕著な変化は読みとれず、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期まで、同じように石器製作が行われていたようである。

参考文献

相原康二　1989「岩手県内における弥生時代の石器組成について」『紀要』Ⅸ　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1990「岩手県における弥生時代の石器器種組成」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会（東北大学文学部考古学研究室内）
阿部朝衛　1984「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第 2 号
1990「多面体を呈する敲石　再論」『帝京史学』第 5 号　帝京大学文学部史学科
2000「先史時代人の失敗と練習- 石鏃と磨製石斧の分析から-」『考古学雑誌』第 86 巻第 1 号　日本考古学会
石川日出志　1996「安田町六野瀬遺跡の縄文時代晩期末石器群の検討から」『北越考古学』第 7 号　北越考古学研究会
池谷勝典　2004「縄文時代石器の機能研究」『考古学ジャーナル』No.520　特集石器機能研究の現状　ニューサイエンス社
岡村道雄　1983「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究 7　道具と技術』雄山閣
佐藤嘉広　1997「3　岩手県の石器」『農耕開始期の石器組成 3　北海道・東北・関東』国立歴史民俗博物館資料調査報告書 7
大工原豊　1998「縄文時代の石器研究の方法」『遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集 1　岩田書院
禰冝田佳男　1993「東北の弥生石器」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第 2 集
松本建速　2000「石器から見る弘前市砂沢遺跡につながる世界」『村越潔先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室 OB 会
三上徹也　1990「縄文石器における『完形品』の概念について- 石鏃を例とした考古学的史料批判の試論的実践-」『縄文時代』第 1 号　縄文時代文化研究会

6　石　製　品（第 489 ～ 531 図、写真図版 322 ～ 354、観察表は写真図版の方にある）

今回の調査で出土した石製品は 457 点で、岩偶 1 点、玉類 14 点、その未成品 69 点、垂飾品 6 点、その未成品 10 点、有孔石 6 点、琥珀 3 点、環状石斧 4 点、その未成品 61 点、独鈷石未成品 31 点、石冠未成品 2 点、陽物型石製品 1 点、石棒（ほとんど未成品）8 点、石剣類未成品 219 点、不明（完成品）4 点、不明（未成品）18 点である。コハクと石棒 1 点以外は、ほとんどが縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる。

整理作業の都合で、遺構内出土遺物を種類に関係なく先に番号を付けてしまったので、わかりづらいと思われる。お詫びする次第である。ちなみに、1 ～ 14 が遺構内出土品で、1 は独鈷石（未）、2 は不明品、3、4 は管玉、5 ～ 10 は小玉、11 は石棒、12 は勾玉未成品、13 は不明品、14 は垂飾品である。遺構外は、器種ごとに番号を付け、それぞれの器種の中は、前年度→次年度の順に並べている。

石製品は、石剣類未成品を除いて全点掲載したが、写真のみで済ませたものもある。図は、他の遺物と同様、原則として欠損部分は細い線で示し補助線を引いているが、石製品は未成品が多くわかりづらいため、必ずしもこの原則が守られていない。

本遺跡の石製品は、未成品が多いのが特徴であるが、環状石斧や独鈷石などの未成品は、研磨途上のものが少ない。これは、おそらく、この製作段階では壊れることがほとんどないためであろう。しかし、石剣類は、敲打段階の未製品もあまりないのはなぜであろう。

観察表中の石質の略称について。（奥羽）→（奥羽山脈）、（北上）→（北上山地）、（第四紀）→（第四紀火山）。

以下、それぞれについて概要と表の補足を述べていく。なお、表の見方などの注意事項は本章の冒頭に述べている。

(1) 岩　　偶（第 489 図 15、写真図版 322 の 15）

1 点のみの出土である。岩版あるいは線刻礫と呼ぶ方がふさわしい形状だが、この時期の岩版はほとんどなく土版が主流で、またその文様も幾何学的で本例とは大きく異なっている（磯前・斎藤　1999 ほか）。むしろ、背中の 6 字文など、土偶の方に類似した特徴が見られることから（佐藤　1996）、岩偶と考えた。北上市内でも、蔵屋敷遺跡から岩偶が出土しており 6 字文を持っている（江釣子村教育委員会　1983:p.66）。全体の形状は大きく異なるが。金附遺跡例は、出土層からは山王Ⅲ層式期の可能性がある。15 の印刻は、場所により、深い、浅いの違いがあり、その違いはナゾリの数が多いか少ないかによるもので、6 字文は最初の印刻だけでナゾリはほぼなし。

(2) 玉類・垂飾品（第 489 ～ 494 図、写真図版 322 ～ 326）

(a) 管玉（第 489 図 3・4・16、写真図版 322 の 3・4・16）

3 点の出土である。いずれも、縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われ、4 は山王Ⅲ層式期の可能性が高い。周辺にある軟質石材で作られている。

(b) 勾玉（第 489 図 17 ～ 20、写真図版 322 の 17 ～ 20）

4 点出土した。いずれも、鈴木克彦氏の言う「定形勾玉」で（鈴木　2004）、周囲にある軟質石材で作られ、縄文時代晩期末～弥生時代前期のものと思われる。未成品なのか、遺構から出土したものはない。

(c) 小玉（第 489 図 5 ～ 10・21、写真図版 322 の 5 ～ 10・21）

7 点出土し、そのうちの 6 点が SR02 土器埋設遺構から出土している。広義の副葬品で、大洞 A′ 式古期と思われる。残りの 1 点も、縄文時代晩期末～弥生時代前期のものであろう。全て周辺にある滑石で作られている。

(d) 玉類未成品（第 489 ～ 494 図、写真図版 322 ～ 326）

69 点出土した。産地の限られた石材による玉類の製作遺跡はよく知られているが、本遺跡のように在地の石材を使った玉類製作址は、どの程度知られているのだろうか（玦状耳飾の未成品はしばしば見られるが）。残念ながら今回は類例を見つけることができなかった。

・管玉未成品（第 489 図 22 ～ 24、写真図版の 322 の 22 ～ 24）

3 点認定。22 は、珍しく硬い石材に挑んでいる。いずれも縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる。

・勾玉未成品（第 489 図 12・25 ～ 28、写真図版 322 の 12・25 ～ 28）

5 点認定した。いずれも軟質石材で、縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる。

・玉斧未成品（第 489 図 29、写真図版 322 の 29）

1 点認定した。形状から「玉斧」と呼んだが、一般的な玉斧とは大きく異なる別物のようである（安孫子 2004）。軟質石材を用いており、縄文時代晩期末～弥生時代前期と思われる

・その他（第 489 図 30 ～第 494 図 89、写真図版 323 の 30 ～写真図版 326 の 89）

60 点認定した。製作過程が窺われるものはなく、石質と大きさで判断したもので、ほとんどただの石に近い。かなり怪しいものも含んでおり、特に 30 ～ 51・55・56・59・60 は怪しい。50 は、変な形だが環状石斧の未成品の可能性もある。玉類未成品と垂飾品未成品の違いは、前者が丸いのに対し後者は平らなことであ

る。

(e) 垂飾品（第 494 図 14・90 ～第 495 図 103、写真図版 326 の 14・90 ～写真図版 327 の 103）

垂飾品としたものは、貫通孔と大きさで判断したもので、別のものの可能性も十分ある。垂飾品未成品と玉類未成品の違いは、前者が平らなのに対し後者は丸いことである。16 点出土した。

(3) 有　孔　石（第 495 図 104 ～ 109、写真図版 327 の 104 ～ 109）

中央に穴の開いた自然礫である。前年度に 6 点出土。105 ～ 107 は、ST02 捨て場からの出土である。

(4) 琥　　珀（写真図版の 110 ～ 112）

3 点出土したが、いずれも SK29 土坑からの出土である。SK29 は、その出土土器片から縄文時代後期中葉と考えられており、他に焼粘土塊も出土している。出土した琥珀は、小片であり、加工されているかどうか定かではない。

(5) 環　状　石　斧（第 496 図 113 ～第 508 図 177、写真図版 328 の 113 ～写真図版 337 の 177）

65 点出土し、未成品が 61 点と大多数を占める。これまで環状石斧の未成品の報告はそれほど多くないと思われるので、全点実測掲載した。岡本孝之氏の集成では、岩手県では、これまで 17 遺跡 44 例の出土が確認され、そのうち縄文時代早期の大渡野遺跡の 27 点が最多ということであり、北海道～東北地方でも、134 遺跡 183 点（うち東北地方は 114 遺跡 160 点）しか知られていないので（岡本　2001:p.36）、本遺跡の様相は、岩手県のみならず東北地方全体の様相を大きく塗り替えることになる。

大きさも石質も多様であり、垂飾品より一回り大きい程度のものもある。第Ⅶ章では直径の推定できる 50 点について分布を見たが、直径 5 ～ 9cm に集中し、それより大きなものは分散して出土する（完成度の高い物ほど小さいということもあるだろうが）。石質については、出土地点によって偏りが存在する可能性があると思い ST01 捨て場出土の 30 点に限って検討したが、見事に割れている。真ん中で二つに割れているものがほとんどである。こうした傾向は、縄文時代早期の大渡野遺跡（相原　1979）と製作方法も含めて同じである。

113 ～ 115 は、壊れて出土したので「完成品」かどうかは定かでない。116 は、黒色付着物が付いているので、おそらく使用して壊れたものと思われる（144 も ?）。139 は、環状石斧から独鈷石に転用しようとしたものである。

ST02 捨て場からの出土が約半分を占めており、捨て場の規模を考慮すれば特筆すべきものである。環状石斧の製作に関しては、ST01 捨て場より ST02 捨て場の方で主に行われていたのであろう。

以下、観察表の補足。123 は、場所による厚さの不均衡著しく、左に示した面の右上隅は、左下断面図に示した中央付近より、さらに厚い。139 は、1/2 の破片で、成形時に中央部分敲打により割れてしまったものと思われる。その際、片方の破片で独鈷石を製作しようとしたらしいが、何が気に入らなかったか、成形途中で破棄したようである。144 は、剥離の状態からは未成品のように見えるが、貫通孔に黒色付着物が付いている。147 は、石質の関係か、中央の敲打部分、他の粗くゴツゴツしたものと違って緻密で凹凸なくザラザラしたという程度。148 は、石質や形状（大きさ、厚さ）から環状石斧と判断したが、はっきりしない部分を残す。169 の右図右辺中央に見られる二つの溝状のものは、刻目状で断面は三角形状を呈す。

(6) 独鈷石（第509図1・178～第515図207、写真図版338の1・178～写真図版343の207）

31点出土した（環状石斧から独鈷石に転用しようとした139を含めると32点）。磨製石斧の未成品の中に、独鈷石の未成品が含まれている可能性もある。独鈷石は、ほとんどが破片であり、またほぼ全て未成品と思われたので、他と違って完成品と未成品を分けることなくまとめて位置順で掲載した。全て実測掲載した。

独鈷石も、環状石斧と同様に、形（厚さ）は多様なものを含んでおり、石錘と見間違うようなものもある。また、石器の不明品とした、写真図版319の459、460（第488図459･460）は、形だけ見たら独鈷石未成品に似ているが、非常に薄く、また石質も明らかに異なる。扁平な独鈷石もあるらしいが（岡本　2003）、それとは異なるようである。環状石斧と同様、石質も多様である印象を受けていたが、第Ⅶ章で環状石斧と同様に検討した結果、頁岩がほとんどを占めていることがわかった。

出土位置は、捨て場の規模を反映してST01からが多い。

独鈷石は、現在1,000点以上の出土が確認されているらしいが、東日本と西日本のそれは異なり、また近年の集成は地域･県別に行われているので、その実態はよくわからないようである（岡本　1999）。この時期の独鈷石については、岡本孝之氏が検討を加えている（岡本　1996）。

以下、観察表の補足。189は、石質も石剣状である。

(7) 石　　冠（第516図208・209、写真図版343の208・209）

2点出土した。怪しいもののみであるが、209は確かか。208の写真は、調査員の指示が悪く側面がない。お詫びする次第である。

(8) 陽物形石製品（第516図210、写真図版343の210）

類例をあまり見ないもので、形状から仮称した。本遺跡出土の石棒や石剣類とは明確に異なり、溶岩を加工したものである。1点出土した。

(9) 石　　棒（第517図211～第519図217・11、写真図版の211～写真図版344の217・11・写真図版345の216）

いわゆる大型石棒の類を一括したが、怪しいものがほとんどである。8点出土した。ほぼ全てST01捨て場から出土し、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器のものと思われるが、11は、縄文時代中期末の竪穴住居跡から出土している。

種類の欄に記載してある分類は、次の通りである。まず、石棒の形が見える物をⅠ類、何かよくわからないものをⅡ類とし、それぞれ、剥離の段階を1類、敲打の段階を2類、研磨の段階を3類とし、Ⅰ類の1類は特に、破片を1A類、形がある物を1B類としたが、怪しい物がほとんどであるためか、あまり意味ある分類ではなかったようである。

以下、観察表の補足。11は、敲打痕が残り角に面ができていることから、未成品と考えたが、完成品の可能性もある。頭部も欠けている。

(10) 石　剣　類（小型石棒・石剣・石刀）（第519図218～第527図276、写真図版345の218～写真図版351の276）

219点出土し58点掲載した。ほぼ全て未成品と判断する。掲載した以外に、次年度に出土した石剣類は

161点あり、出土位置については第5表の通りである。掲載分と同様に観察表を作成するつもりであったが、写真も撮影しなかったということで、手違いで「不掲載遺物」の中に入れられてしまい、うずたかく積まれた大量の「不掲載遺物」の中に収納され捜すのも困難という状況に陥ってしまったので、割愛させていただく。これらを不掲載としたのは、基本的に10cm未満の胴部破片で、情報が極端に少ないと判断したためである。

第Ⅶ章では、次年度出土分210点について石質を検討した結果、頁岩が大部分を占めていることがわかった。出土層に偏りはなく、縄文時代晩期末～弥生時代前期にかけてほぼ満遍なく出土しているようである。

石剣類の製作については、近年多くの遺跡で観察されており（後藤　1999、長田　2000、鈴木　2002）、原石採取→剥離→敲打→研磨の過程が確認されている。本遺跡でも全ての段階が確認されるが、やはり剥離～研磨の段階での欠損が多いようである。本書では、原石を0類、剥離段階を1類、敲打段階2類、研磨段階3類、完成品4類とし、1類をさらに、1Z類（破片でA、Bに分類できないもの）、1A類（剥離が一部だけのもの）、1B類（剥離が全体に及んで形ができているもの）に分けたが（観察表の種類の欄）、出土品のほとんどが破片なので意味のない分類であった。

以下、観察表の補足。220は、石質と薄さから石剣類未成品に含めたが、非常に小さいので不明。独鈷石未成品??　233も、同様に、石質と薄さから石剣類未成品に含めたが小さすぎる。

（11）不　　明（第528図2、13、277～第531図295、写真図版352の2、13、277～写真図版354の295）

類例を見つけられず、明瞭な形態的特徴も持たず形容しがたい物を一括した。剥離痕や加工痕が明瞭に残り何らかの未成品と推測されるものとそれ以外に分けた。

（a）完成品（第528図2、13、277、278、写真図版352の2、13、277、278）

4点認定した。

（b）未成品（第528図～第531図、写真図版352の279～写真図版354の295）

18点認定。これらの中で、286、287、290、291は、類似した形状を持つ。独鈷石の未成品と考えるべきであろうか。ただし、形はやや似ていてもずっと薄く石質も異なる。また、これら4つの間も、それほど共通性があるわけではない。石剣類に含めた220も、289の類似性から、ここに含めた方が良かったかも知れない。293は、垂飾品の未成品に似ているが、石質がそれらしくない。294は、黒色付着物が側面に点在する。

参考文献

相原康二　1979「大渡野遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第32集　岩手県教育委員会
安孫子昭二　2004「玉斧」『季刊考古学』第89号　特集縄文時代の玉文化　雄山閣出版
磯前順一・斎藤和子　1999「遺物研究岩版・土版」『縄文時代』第10号第4分冊　縄文時代文化研究会
江釣子村教育委員会　1983『江釣子遺跡群-昭和57年度発掘調査報告-（鳩岡崎上の台遺跡、蔵屋敷遺跡）』
岡本孝之　1996「最後の白河型石器」『異貌』第15号　共同体研究会
1999「遺物研究独鈷状石器（独鈷石・白河型石器）」『縄文時代』第10号第4分冊　縄文時代文化研究会
2001「東北の橋場型石器（環状石斧）」『西相模考古』第10号
2003「扁平な白川型石斧」『利根川』24・25　利根川同人（代表坂本彰）
長田友也　2000「石棒の製作遺跡」『季刊考古学』第73号　特集縄文時代研究の新動向　雄山閣出版
日下部善己　1983「環状石斧」『縄文文化の研究第7巻　道具と技術』雄山閣出版

後藤信祐　1999「遺物研究　石棒・石剣・石刀」『縄文時代』第10号第4分冊　縄文時代文化研究会
佐藤嘉広　1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第81巻第2号　日本考古学会
鈴木克彦　2004「縄文勾玉」『季刊考古学』第89号　特集縄文時代の玉文化　雄山閣出版
鈴木素行　2002「本覚遺跡への途-関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作遺跡について-」『茨城県考古学協会誌』第14号　茨城県考古学協会

7 鉄製品・鉄滓（写真図版355）

(1) 鉄　製　品（写真図版355の1～7）

7点出土し（近現代を含めると13点）、写真のみだが全点掲載した。全て前年度の出土。3は共伴遺物から中世末期であろう。その他は、出土位置からは特定しかねる。ほとんどが近世後半以降と思われるが、4は古い可能性もあるか（出土層に帰属するなら縄文時代晩期末～弥生時代前期になるが）。3は、墓から出土。

(2) 鉄　　滓（写真図版355の1～9）

9点出土し、写真のみだが全点掲載した。全て前年度の出土である。4や5のような例もあるが、基本的には出土位置から古代以降なのは確実である。1のその他の三つの塊の計測値は、長さ×厚さ×幅、重量の順で、3.24×1.70×1.60cm、8.05g、2.90×1.80×1.80cm、14.22g、1.80×1.40×1.02cm、1.58g。最も小さく軽いものは灰色で、その他は錆色。2のもう一つの塊は、1と同様の順で、3.12×2.90×1.52cm、19.70g。7のその他の塊は、1と同様の順で、3.38×1.94×1.56cm、17.09g。本来、写真の最も大きなものと左下の二番目に大きなものと二つの塊だったものであり、その他の小塊は、最大塊から割れたものである。割口は青灰色である。

8 銭　　貨（第532図、写真図版356、観察表は写真図版の方にある）

11点出土し、全て掲載した。全て前年度の出土である。ほとんどが、中世末期の土坑墓の副葬品である（1～9）。

以下、観察表の補足。1は、大きさと見た目からは本銭と思われる。2～5も、同様である。4と5は、背中合わせに癒着し、2と3は、表と裏が癒着していたが、若干ずれていたので同定が可能であった。さらに、5の表と2の裏が癒着していたようである。つまり、4と5と2が重なり、最後の3だけはみ出した状態で出土したのである。また、4の表と3のずれてはみ出していた部分の残存状況が良いのは、表を向いていたためか。6と7は、表面と裏面の癒着で、表を向けている6は、さらに別の銭に癒着していたらしい。大きさは十分だが錆がひどく、本銭かどうか不明である。8は、大きさも見た目からも本銭としか思えないが、断言はできない。9は、前年度担当者により□元□宝とまで特定されている。やや薄い印象で、模鋳銭か？　一部はっきりと緑青を吹いているが、全体的には摩滅した印象を受ける。10は、永井（1996）のNo.105に示された皇宋通寶の③「塩野　真書」とされているもの（p.115）に極めてよく似ている。11は、摩滅ひどく本銭かどうかわからないが、大きさはよく似ている。

参考文献

東北中世考古学会編　2001『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学叢書1　高志書院

永井久美男編　1996『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
羽柴直人　2004「第5章第11節　金属製品」『下構遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第446集　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

9　自然遺物ほか（写真図版357～373、観察表は第4表）

炭化物も、詳細がはっきりしたものはないので、ここに含めて報告するが、小片も含めると数が膨大なので一覧表は作成しなかった。211、212は、赤色顔料を含む土壌と間違って掲載されたものであるが、ただの土壌サンプルである。

（1）動　物　遺　体　（人骨含む）（1～143、写真図版357～364）

形が残っているものについては全て登録し観察表を作成したが、骨粉状のものについてはほとんどを割愛したので、実際の出土量はずっと多い。No.1～48の人骨同定は、前年度担当高木氏による。動物骨はほとんど全て火を受けている。

人骨は、SK01、07土坑、SX01遺構から出土している（全て埋葬遺構であろう）。49のSK70土坑出土物は、その後の検討で人骨ではないらしいことがわかった。その他の動物骨は、ほぼ全て捨て場からの出土で、縄文時代晩期末～弥生時代前期に帰属する可能性が高いが、113～115は新しい可能性が高い。

動物骨のうち骨端が残っていて残存状態が良いものの多くを分析鑑定に出した（第Ⅸ章）。大型獣は、イノシシが複数、その他ニホンジカやキツネ？など一般的なものが同定されている。これに対し、魚骨は、これまで東北地方で出土例の少なかったギギ類が主体で注目されている。

以下、観察表の補足。113は、歯が残っており多くの情報を持つが、出土層がSⅡ～Ⅲ層で、表土に近いため混入がの可能性も高く、同定は割愛した。歯の残り具合から見て、最近のもの（近現代）の可能性が高い。

（2）植　物　遺　体（144～190・213～215、写真図版364～371・373）

種実や繊維、樹皮状のもので、全て登録し観察表を作成した。213～215が別に掲載されているのは、特に214･215の出土位置から、加工物（編物）かと判断したためで、実際には自然のままの植物繊維のようである。153は、加工がされている。

152・213～215を除いて全て捨て場及び捨て場下のSK90土坑からの出土で、ほとんど全て縄文時代晩期末～弥生時代前期に帰属するものであろう。SK90土坑は、上面に焼土が見られ、下に炭化クルミの層が見られた特徴的な土坑である（第Ⅴ章）。152は下の捨て場からの紛れ込みであろう。213～215は、沖積末期の墓の副葬銭の下から確認されたものである。

比較的残りがよく出土点数の多いものを分析鑑定に出し（第Ⅸ章）、180･184は、イネ科タケ亜科、186は不明だった。繊維なので結果についてはあまり期待していなかったが、よくここまでわかったものである。逆に、極めて出土点数が多く、また見た目には壊れていないように見えた146・149・162・163については、遺存状態が悪くて種不明とのことで、意外な結果であった。この他、現地で層ごとにサンプルをとって花粉も含めて分析してもらっている（第Ⅸ章）。

以下、観察表の補足。175は、二種含んでおり、写真図版368の175の一番上の段の右から二番目とそれ

以外である。前者は、お茶の実に大きさ、形とも非常に良く似ており炭化している。完形と思われる。それ以外のものは、全て炭化クルミと思われ、1/2 ～破片まで様々である。177 は、180 と同じ素材。180b の写真は、第Ⅸ章にある。189 の主体は、185 と同じである。

(3) (2) 以外の炭化物、炭化材 (191 ～ 197、写真図版 371)

ST01 捨て場を中心に出土点数は極めて多く、一覧表や掲載は断念した。191 ～ 197 は、前年度出土品で、手違いで掲載品に含まれてしまったものである。

比較的残りの良い一部を分析鑑定に出している (第Ⅸ章)。分析の結果は、クリが圧倒的に多く (24 個体)、その他、ニレ属 5、コナラ節 2、ケヤキ 1、カツラ 1 個体が確認されている。

観察表の補足。193 の写真図版 371 の中央より右側に写っているのは、石器素材剥片である。

(4) アスファルト (198、写真図版 371)

ST01 捨て場の自然堤防上から 1 点出土した。出土層からは山王Ⅲ層式期に帰属する可能性が高い。198 の表面は滑らかで、何かに覆われていた可能性がある。

(5) 生粘土塊 (199 ～ 201、写真図版 372)

遺構内外から 3 点出土した。199 は、縄文時代後期中葉、200・201 は、縄文時代晩期末～弥生時代前期の可能性がある。200 の表面、土師器のケズリ痕状の痕跡。201 の表面、ナデ痕状の痕跡。

(6) 赤色顔料・赤鉄鉱 (202 ～ 210、写真図版 372 ～ 373)

全て、縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺構および遺物包含層から出土したもののようである。顔料については全て登録し、土器に付着するものについては特に厚みを持っているものだけを掲げた。実際には非常に多くの該期の土器に付着している。また、石器に付着するものも、ここでは比較的厚く付着している 209 だけ掲げたが、実際には石皿や磨石等には比較的頻繁に見られた。

205 は、付着場所から、これ自体に塗られたとするよりは赤色顔料の容器と考えた方が良いかも知れない。208 は、付着場所から、これ自体に塗られたと考えた方が自然だが、天井部付着分が異常に厚く、不自然な黒色付着物も併せて考えれば、廃棄後に赤色顔料も同じ場所に捨てられた結果と考えるべきかも知れない。

以下、観察表の補足。205 の付着土器、底部片。外面底部 LR ヨコ、ナナメ、底面ミガキ？(滑らか)。内面ミガキ？、赤色付着物でよくわからない。赤色付着物は内部のみ。208 の付着土器、高坏台部 1/4 周。内外ミガキ、やや摩耗。内外赤色付着物で、内部の天井付近に厚く堆積。内外黒色付着物 (スス、コゲ状)？210 は、第 194 図 1343 の中に入っていたもので、土の塊に銀色の粉～小塊が混じっているような状態で出土した。

第２表　石器集計表（次年度中心）

（1）石鏃

アラビア数字層

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
1層		8	16	3	27	1	7	7					15
1b層		1			1								0
1b層・1-2層		1			1								0
1-2層		6	5	2	13	1	3	3					7
1-2b層			1		1								0
1-2c層		1			1								0
2層		5	5	4	14	1	3	1					5
2b層		3	7		10		1	2					3
2c層				1	1								0
2d層				1	1								0
2-3層		1			1								0
2-3b層		2	1	2	5		3	1		1			5
2-3b上層		1			1								0
2-3b2層		6	8	2	16		1			1		2	4
3層		6	12	2	20		3	4				2	9
3上層			1		1								0
3-4層		2			2								0
4層		8	13	1	22	1	5	4					10
4b層		3	10	5	18		4	3					7
4b層上面				1	1								0
4c層		6	4		10		3	1					4
4c上層		3			3		1						1
4c中層		1		1	2		1						1
4c下層		1	1		2		2						2
4-5層		7	3	1	11		4	3					7
4-5上層					0		1						1
4-5下層			1		1								0
5層		1	5	2	8								0
6層			1		1								0
7層		1			1								0
10層		1			1								0
計	0	75	94	28	197	4	42	29	0	2	0	4	81

捨て場（ST01）

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
アラビア数字層	0	75	94	28	197	4	42	29	0	2	0	4	81
捨て場相当グリッドⅣa層	0	32	37	22	91	4	18	13	0	1	0	0	36
計	0	107	131	50	288	8	60	42	0	3	0	4	117

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
捨て場（ST01）	0	107	131	50	288	8	60	42	0	3	0	4	117
柱穴群					0							1	1
その他のⅣa層				2	2		1						1
計	0	107	131	52	290	8	61	42	0	3	0	5	119

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
Ⅰ～Ⅱ層		1			1								0
SⅡ～Ⅲ層			2		2								0
Ⅲ層		2	4	1	7		3	3					6
Ⅲ層まで			3	2	5								0
Ⅲ層の上				1	1			1					1
Ⅲ（Ⅳa層含む）			1		1		2						2
Ⅳb層			1		1								0
Ⅳb層上面			1	2	3								0
Ⅳc層		2		3	5					5	1		6
計	0	5	12	9	26	0	5	4	0	5	1	0	15

その他

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
う層			1		1								0
撹乱			4		4			2					2
クリーニング中				1	1								0
層なし			1		1		1		1				2
表土			1		1					2			2
表採					0								0
T・TYトレンチ	2	3	31	6	42	5	5	10				1	21
計	2	3	38	7	50	5	6	12	1	2	0	1	27

集計表

出土層＼分類	Ⅰ 0	Ⅰ 1	Ⅰ 21	Ⅰ 22	計	Ⅱ 0	Ⅱ Aa	Ⅱ Ab	Ⅱ Ac	Ⅱ Ba	Ⅱ Bb	Ⅲ Aa	合計
03遺構内					0	2		1		1			4
03Ⅳa層出土分	0	107	131	52	290	8	61	42	0	3	0	5	119
03その他	2	8	50	16	76	5	11	16	1	7	1	1	42
合　計	2	115	181	68	366	15	72	59	1	11	1	6	165

分類

- 未成品　0 …… 破片不明
- 未成品　Ⅰ　1 …… 2類以前
- 21 …… 石鏃の形が出来始めている（剥離半分以上）
- 22 …… ほぼ石鏃（剥離一部未など）
- 完成品　Ⅱ　0 …… 基部欠損していて不明
- A　a … 細長い
- b … 少し幅がある　→凸基
- c … その他鏃
- B　a …
- b …　→凹基
- 完成品　Ⅲ　0 …… 基部欠損していて不明
- 使用痕がある　A　a … 細長い
- b … 少し幅がある　→凸基
- c … その他鏃
- B　a …
- b …　→凹基

※　第２表は、個々の遺物の観察表作成前に作成したもので、若干変動した点があったが、変更はできなかった。

(2) 石鏃

アラビア数字層

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
1層			1			1
1-2層		1	1	7		9
1-2b層				1		1
2層		2		3		5
2b層					1	1
2-3b層		1		1	1	3
2-3b2層		1		4	2	7
3層	1	1		4		6
4層		1		2		3
4b層	1	1			1	3
4c層		1				1
4c上層			1			1
4c下層			1		1	2
4-5層	1	1				2
5層	1					1
計	4	10	4	22	6	46

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
アラビア数字層	4	10	4	22	6	46
捨て場相当グリッドⅣa層	3	2	4	13	1	23
計	7	12	8	35	7	69

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
捨て場（ST01）	7	12	8	35	7	69
柱穴群		1				1
その他のⅣa層						0
計	7	13	8	35	7	70

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
SⅡ～Ⅲ層				1		1
Ⅲ層				2	1	3
Ⅲ層まで			1			1
Ⅲ（Ⅳa層含む）		1				1
計	0	1	1	3	1	6

その他

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
撹乱				1		1
層なし					1	1
T・TYトレンチ	8	3	4	7	1	23
計	8	3	4	8	2	25

集計表

出土層＼分類	0	Ⅰ		Ⅱ		合計
		あ	い	あ	い	
03遺構内		1				1
03Ⅳa層出土分	7	13	8	35	7	70
03その他	8	4	5	11	3	31
合計	15	18	13	46	10	102

分類
0……破片不明
Ⅰあ……棒状欠損
　い……棒状完形
Ⅱあ……持つところ（把手）がある欠損
　い……持つところ（把手）がある完形

(3) 石箆

アラビア数字層

出土層＼分類	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	合計
1層		2					2
1-2b層		1					1
2b層		1					1
2-3b2層		1	1		1		3
3上層		1					1
4-5層		1					1
10層		1					1
計	0	8	1	0	1	0	10

捨て場（ST01）

出土層＼分類	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	合計
アラビア数字層	0	8	1	0	1		10
捨て場相当グリッドⅣa層	1	2			1		4
計	1	10	1	0	2	0	14

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	合計
捨て場（ST01）	1	10	1	0	2		14
柱穴群							0
その他のⅣa層							0
計	1	10	1	0	2	0	14

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	合計
Ⅲ層		1					1
Ⅲ層まで			1				1
計	0	1	1	0	0	0	2

集計表

出土層＼分類	Ⅰ 1	Ⅰ 2	Ⅰ 3	Ⅱ 1	Ⅱ 2	Ⅱ 3	合計
03遺構内							0
03Ⅳa層出土分	1	10	1	0	2		14
03その他	0	1	1	0	0		2
合計	1	11	2	0	2	0	16

分類
Ⅰ 1…剥離がある
2…剥離がある一部は中央まで
3…ほぼ完成（中まで剥離が及んでいる両面）
Ⅱ 1…〔礫石器で使用するような石質の石〕剥離がある
2…〔礫石器で使用するような石質の石〕剥離がある一部は中央まで
3…〔礫石器で使用するような石質の石〕ほぼ完成（中まで剥離が及んでいる両面）

(4) 石匙

アラビア数字層

出土層＼分類		合計
1-2b層	1	1
2-3b2層	1	1
4c層	1	1
計	3	3

Ⅳa層出土分

出土層＼分類		合計
捨て場（ST01）	7	7
柱穴群		0
その他のⅣa層		0
計	7	7

捨て場（ST01）

出土層＼分類		合計
アラビア数字層	3	3
捨て場相当グリッドⅣa層	4	4
計	7	7

その他

出土層＼分類		合計
T8	2	2
T13	1	1
南西区南側表土	1	1
計	4	4

集計表

出土層＼分類		合計
03遺構内	1	1
03Ⅳa層出土分	7	7
03その他	4	4
合計	12	12

分類
なし

(5) 掻・削器等A類

アラビア数字層

出土層＼分類	1	2	合計
1層		4	4
1-2層	1		1
2層	1	1	2
2b層		1	1
2-3b層	1		1
2-3b2層		2	2
3層		1	1
4層		3	3
4b層	1	1	2
4c層	1	1	2
4-5層	1	4	5
11層		1	1
計	6	19	25

捨て場（ST01）

出土層＼分類	1	2	合計
アラビア数字層	6	19	25
捨て場相当グリッドⅣa層	1	16	17
計	7	35	42

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	1	2	合計
捨て場（ST01）	7	35	42
柱穴群	1		1
その他のⅣa層			0
計	8	35	43

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	1	2	合計
Ⅱ層		1	1
Ⅲ層		6	6
Ⅲ層の上		1	1
Ⅲ（Ⅳa層含む）		1	1
Ⅲ（Ⅳa層含む）上面		1	1
Ⅳb層上面		1	1
Ⅳc層		2	2
計	0	13	13

その他

出土層＼分類	1	2	合計
Ⅳa層＋撹乱		2	2
計	0	2	2

集計表

出土層＼分類	1	2	合計
03遺構内		4	4
03Ⅳa層出土分	8	35	43
03その他	0	15	15
合計	8	54	62

分類
1…全体が楕円形のもの
2…その他

(6) 掻・削器等B類

アラビア数字層

出土層＼分類		合計
1層	2	2
3上層	1	1
計	3	3

Ⅳa層出土分

出土層＼分類		合計
捨て場（ST01）	5	5
柱穴群		0
その他のⅣa層		0
計	5	5

捨て場（ST01）

出土層＼分類		合計
アラビア数字層	3	3
捨て場相当グリッドⅣa層	2	2
計	5	5

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類		合計
Ⅲ層の上	3	3
Ⅲ（Ⅳa層含む）	1	1
計	4	4

集計表

出土層＼分類		合計
03遺構内		0
03Ⅳa層出土分	5	5
03その他	4	4
合計	9	9

分類
なし

(7) 磨製石斧　未成品

アラビア数字層

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
1層	4	52	44	11	5	116
1層（一部2b層含む）			1		1	2
1a層				1		1
1b層		3	2	2	1	8
1c層		2		1		3
1-2層		28	30	15	1	74
1-2b層		2		5		7
1-2c層			2			2
2層	3	63	25	29	1	121
2b層	1	58	50	25	8	142
2b層（一部2-3b2層含む）			1			1
2c層		5	1			6
2d層		1				1
2e層		1	1			2
2-3b層	1	24	18	9	2	54
2-3b中層			1			1
2-3b下層		2				2
2-3b2層	1	86	67	51	7	212
3層	4	239	125	123	15	506
3上層		23	21	17	2	63
3中層		11	3	4		18
3中層上部		2				2
3中下層		5	4	3	2	14
3b層	2	11	5	13		31
3b2層		3	2	1		6
3-4層		87	44	50	9	190
3-4上層		2	2	4		8
3-4中層		1		3		4
4層	2	98	82	51	7	240
4b層	5	166	103	89	16	379
4c層		30	24	32	1	87
4c上層		1	4	3	2	10
4c中層		4	4	5	3	16
4c下層		10	17	24	3	54
4-5層	3	167	70	98	19	357
4-5上層		13	7	12	3	35
4-5下層		4	2	2		8
5層		21	14	14	1	50
6層		12	3	1		16
7層		3		2		5
8層		22	15	9		46
9層		18	4	12	1	35
10層	1	29	4	30	2	66
11層		5	5	5		15
計	27	1,314	807	756	112	3,016

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
アラビア数字層	27	1,314	807	756	112	3,016
捨て場相当グリッドⅣa層	37	796	229	411	80	1,553
計	64	2,110	1,036	1,167	192	4,569

分類
- 0 ……原石
- 1 A…割れていない　｝剥離段階
- 1 B…形が出来ている　｝剥離段階
- 2 ……敲打の跡（形を整える様）がある　→敲打段階
- 3 ……磨いている　→研磨段階

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
捨て場（ST01）	64	2,110	1,036	1,167	192	4,569
柱穴群		9		1		10
その他のⅣa層		3		1		4
計	64	2,122	1,036	1,169	192	4,583

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
Ⅱ層		1				1
Ⅱ層上部		1				1
SⅡ～Ⅲ層		1	3	1	1	6
Ⅲ層		10	8	4	2	24
Ⅲ層まで		15		8	1	24
Ⅲ層の上		1	1			2
Ⅲ（Ⅳa層含む）		13	1	6	1	21
Ⅲ（Ⅳa層含む）上部		8	1	1	1	11
Ⅳ層上部		7	1	3		11
Ⅳ～Ⅳa層上部		1				1
Ⅳb層		6	1	7		14
Ⅳb層上面		1	14	3	4	22
Ⅳb層～Ⅴ層				1		1
Ⅳc層	1					1
Ⅳc下層	1					1
計	2	65	30	34	10	141

その他

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
う層			1			1
え層		3		3	1	7
お層		2		1		3
Ⅳa層＋撹乱		1		1		2
撹乱				1		1
表土				1		1
壁掃除		4				4
層なし		7		2	1	10
計	0	17	1	9	2	29

集計表

出土層＼分類	0	1		2	3	合計
		A	B			
03遺構内				1	1	2
03Ⅳa層出土分	64	2,122	1,036	1,169	192	4,583
03その他	2	82	31	43	12	170
合　計	66	2,204	1,067	1,213	205	4,755

(8) ハンマー

アラビア数字層

分類 / 出土層	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
1層	56	187	3	24	55	55	16	16	1	3	2		4	23	4	3				452
1層（一括）					1															1
1層（一部2b層含む）			1						1											2
1層（一部1-2含む）		2		2	3		1							1						9
1上層						1							1							2
1a層		1			1									1						3
1層・1-2層・2層						1														1
1b層	7	5		2	4	10	2	2				1								33
1b層・1-2層	5	1				1														7
1c層	2	2												1						5
1-2層	63	127	1	19	47	34	15	16		4	2	1	10	16						355
1-2b層	7	11		1	4	7	2	2						1						35
1-2b層（2層含む）		2		1		1		1												5
1-2c層		3				1														4
2層	44	176	9	14	25	51	14	18		1	1	1	1	23	1	3				382
2層・4b層	1	3				2	1	1												8
2b層	66	177	9	32	58	58	15	10	1	11	3		10	40	7	1				498
2b層（一部2-3b2層含む）		2		1	1	1								1						6
2c層	2	7		2	2	5					1	1	1	1	1					23
2d層	1	4			1	2								1						9
2e層	7	5			3	3		2					1		1					22
2-3層										1										1
2-3b層	37	70	11	9	35	13	10	4		4	2		5	11	4					215
2-3b上層	1					2	1													4
2-3b中層		1				1														2
2-3b下層		1																		1
2-3b2層	89	227	15	27	84	106	29	18		15	7		13	55	2	2				689
2-3b2中層	1						1													2
2-3b2下層	1	4			1		1	1												8
3層	99	459	40	18	82	189.5	22	41	4	13	3		13	65	9	14		1		1,072.5
3上層	20	100	6	11	29	22	1	4	1	3	1	2	8	14	3	2			1	228
3中層	3	29	2	4	1	11	2	3	2	1	2		1	5	2	1				69
3中層上部		5	1		1	4							1	2	1					15
3中下層	1	6											1	1	1					10
3b層	16	63	2	2	9	4	2	6		2	1		2	10	2					121
3-4層	43	228	16	8	51	49	11	32	3	13	3		7	55	6	4				529
3-4上層		2			2	2		1					1	2						10
3-4中層		10	1		1	2		1	1	1				2						19
3-4下層		2																		2
4層	78	203	28	6	49	157	16	27	3	12	8		7	34	4	11		3	1	647
4b層	96	284	28	23	56	183.5	13	21	7	13	7		4	37	4	6				782.5
4c層	31	74	6	1	13	63	2	9		2	2		3	11	1	2				220
4c上層	8	14	2		1	13	1	2						2						43
4c中層	16	26	4	2	5	34	2	2		1			1	11	1					105
4c下層	33	37	6	6	16	53	5	7	1	2			1	7		2				176
4-5層	62	276	27	6	43	134	11	20	8	14	5		5	43	3	9		1		667
4-5上層	4	45	1		11	17		3		1				4		2				88
4-5下層		15	2	1	1	4	1	1						6						31
5層	21	53	3	2	11	26	4	6	2	1			1	9		1				140
6層	3	14	1		2	4		1	2	2				3		1				33
7層	1	13	1			1		1					1		1					19
8層	15	81	6	2	15	19	1	11	1	4		1	5	9	6	3		1		180
9層	7	41	5		6	1		3	2	2				2	2					71
10層	11	64	1	3	12	22		3	1	4			3	17	2					143
11層	3	13	1	1	5	9		4			1		1	4	3			1		46
計	961	3,175	239	230	747	1,379	202	300	41	130	51	7	112	530	71	67	0	7	2	8,251

捨て場（ST01）

分類 / 出土層	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
アラビア数字層	961	3,175	239	230	747	1,379	202	300	41	130	51	7	112	530	71	67	0	7	2	8,251
捨て場相当グリッドⅣa層	466	1,454	152	149	389	603	90	162	40	46	18	5	48	181	51	43	1	4	3	3,905
計	1,427	4,629	391	379	1,136	1,982	292	462	81	176	69	12	160	711	122	110	1	11	5	12,156

（次頁に続く）

ハンマー

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
捨て場（ST01）	1,427	4,629	391	379	1,136	1,982	292	462	81	176	69	12	160	711	122	110	1	11	5	12,156
柱穴群	17	24	1	1	5	5	1	1		2			1							58
その他のⅣa層	4	1			5								1							11
計	1,448	4,654	392	380	1,146	1,987	293	463	81	178	69	12	162	711	122	110	1	11	5	12,225

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
Ⅰ～Ⅱ層		1																		1
Ⅱ層	1	2			1	1		2												7
Ⅱ層上部	1	7									1	1		2						12
SⅡ～Ⅲ層	3	9	1		3	7	2	1						2						28
Ⅲ層	9	34	4	3	11	15	5	3	1		2		2	4		1				94
Ⅲ層まで	25	51	1	8	16	8	3	2	2	1	4		5	4		1				131
Ⅲ層の上	1	1				3	1													6
Ⅲ（Ⅳa層含む）	6	26	1	1	7	9	1	2	1	2	1	1	2	1	1					62
Ⅲ（Ⅳa層含む）上部	2	12		1	2	3								1						21
Ⅲ（Ⅳa上層含む）	1	1																		2
Ⅳ層		1					1													2
Ⅳ層上部	9	8	2	2	2	2					1			4						30
Ⅳb層	3	15	1		5	5		5		3	1			1	2					41
Ⅳb層上面	14	30	1		5	11	1	5	3	1				6		3		1		81
Ⅳb～Ⅴ層		3			1															4
Ⅳc層	15	32		3	4		2	6					1	3	1					67
Ⅳc中層		1																		1
Ⅳc下層		1																		1
Ⅴ層		1																		1
計	90	236	11	18	57	64	16	26	7	7	10	2	10	28	4	5	0	1	0	592

その他

出土層＼分類	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
い層		1																		1
う層	2	9	3	1	1	3		1												20
え層	1	5				2						1		1					1	11
お層		3			1	1	1							1						7
表土	3	3		1	1								1							9
攪乱		4				2														6
壁掃除	8	5	1	1	3		3	1												22
疑似現象		1																		1
排土																1				1
Ⅳa層攪乱	4	6			1	1								1		2				15
層なし	3	3	1			2	2	1		1				1						14
計	21	40	5	3	7	11	6	3	0	1	0	1	1	4	0	3	0	0	1	107

集計表

出土層＼分類	0	1						2	3		4			5		6	0	1A	2	合計
		A	Ba	Bb	Bc	C	D		A	B	A	B	C	A	B		磨5	磨5	磨5	
03 遺構内		4						1					2	2		1				10
03 Ⅳa層出土分	1,448	4,654	392	380	1,146	1,987	293	463	81	178	69	12	162	711	122	110	1	11	5	12,225
03 その他	111	276	16	21	64	75	22	29	7	8	10	3	11	32	4	8	0	1	1	699
合　計	1,559	4,934	408	401	1,210	2,062	315	493	88	186	79	15	175	745	126	119	1	12	6	12,934

分類

1 A……花崗岩
　B a ……青色
　　b ……茶色
　　c ……その他　（その他の石質）
　C……多面体
　D……溶岩、軽石等　（片手で持てる通常の敲石）
2 ……凹石（中央に凹がある）
3 A……大きい（10cm 以上）
　B……掌より小さい　（板状）
4 A……指程度の長さ、小さい（15cm 以内）
　B……茶色の石で先端を敲いている
　C……A、B 以外のもの　（棒状）
5 A……小石　丸くコロコロ
　B……小石　板状（5cm 未満）　（常に隠れる小さいもの）
6 ……大きくて片手で持てないもの

(9) 多面体（ハンマー 1C 内訳）

アラビア数字層

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
1層	20	4		12			19							55
1上層	1													1
1層・1-2層・2層	1													1
1b層	2	1		5	1		1							10
1b層・1-2層	1													1
1-2層	19			7			7			1				34
1-2b層	1			4			1			1				7
1-2b層（2層含む）							1							1
1-2c層	1													1
2層	19		1	9			21			1				51
2層・4b層	1			1										2
2b層	17	2	3	9	5	5	14			3				58
2b層（一部2-3b2層含む）							1							1
2c層	1			2			1			1				5
2e層	1	1					1							3
2d層				1			1							2
2-3b層	1			4			8							13
2-3b上層				1			1							2
2-3b中層	1													1
2-3b2層	42	1	1	13	1	3	42			3				106
3層	81	6	2	28	2		63.5			6			1	189.5
3上層	6	1	1	6	1		5			2				22
3中層	6	2	1	1	1									11
3中層上部	2		1	1										4
3b層				2			2							4
3-4層	6	2	3	6	2	1	28			1				49
3-4上層							2							2
3-4中層							2							2
4層	70	1		24			58			3			1	157
4b層	54	2	3	29	1		88.5	1		4	1			183.5
4c層	32			6	1		23			1				63
4c上層	6			1			6							13
4c中層	19			2			13							34
4c下層	27			7	1		17			1				53
4-5層	57	2	2	16			56			1				134
4-5上層	11						6							17
4-5下層	1						3							4
5層	14	1		2			9							26
6層	1						2			1				4
7層							1							1
8層	1						18							19
9層							1							1
10層	6			3		1	12							22
11層	1			4			4							9
計	530	26	18	206	16	10	539	1	0	30	1	0	2	1,379

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
アラビア数字層	530	26	18	206	16	10	539	1	0	30	1	0	2	1,379
捨て場相当グリッドⅣa層	218	13	8	131	8	14	198	1	0	12	0	0	0	603
捨て場（ST01） 計	748	39	26	337	24	24	737	2	0	42	1	0	2	1,982

（次頁に続く）

多面体（ハンマー 1C 内訳）

Ⅳ a 層出土分

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
捨て場（ST01）	748	39	26	337	24	24	737	2	0	42	1	0	2	1982
柱穴群	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5
その他のⅣ a 層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	751	39	26	338	24	24	737	2	0	42	2	0	2	1987

Ⅳ a 層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
Ⅱ層							1							1
SⅡ～Ⅲ層	2			3		1	1							7
Ⅲ層	5	2		3			5							15
Ⅲ層まで	4			2			2							8
Ⅲ層の上		1		1			1							3
Ⅲ（Ⅳ a 層含む）	7			1			1							9
Ⅲ（Ⅳ a 層含む）上面	2			1										3
Ⅳ層上部							2							2
Ⅳ b 層	2						3							5
Ⅳ b 層上面	2			1			7			1				11
計	24	3	0	12	0	1	23	0	0	1	0	0	0	64

その他

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
う層	1						2							3
え層	2													2
お層							1							1
撹乱							2							2
Ⅳ a 層撹乱				1										1
層なし							2							2
計	3	0	0	1	0	0	7	0	0	0	0	0	0	11

集計表

出土層＼分類	0	1			2			3			4			合計
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	
03 遺構内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
03 Ⅳ a 層出土分	751	39	26	338	24	24	737	2	0	42	2	0	2	1987
03 その他	27	3	0	13	0	1	30	0	0	1	0	0	0	75
合　計	778	42	26	351	24	25	767	2	0	43	2	0	2	2062

分類

0 ……破片

1 A ……敲いていない
　B ……敲いている　} 掌に収まる
　C ……面が出来ている

2 A ……敲いていない
　B ……敲いている　} 片手で持てる
　C ……面が出来ている

3 A ……敲いていない
　B ……敲いている　} 10cm 以上の大きなもの
　C ……面が出来ている

4 ……片手では持てないような大きなもの

（10）台石

アラビア数字層

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
1層	8	8	3	1	1	21
1b層・1-2層	1					1
1-2層	6		1	1		8
1-2b層			1			1
1-2b層（一部2層含む）		1				1
2層	18	8	12	2	1	41
2b層	10	3	4	3		20
2e層	1	1				2
2-3層	1					1
2-3b層	2	1	1	1	1	6
2-3b2層	13	11	4	2		30
3層	32	27	25	10	1	95
3上層	5	3	6	2		16
3中層		1	6	2		9
3中下層		1	2			3
3b層			3			3
3-4層	4	17	7	1		29
4層	23	23	26	10	1	83
4b層	27	16	26	6	1	76
4c層	9	8	3	2	1	23
4c上層		1				1
4c中層				1		1
4c下層	5	4	3		2	14
4-5層	24	25	19	7	1	76
4-5上層	4	1	5			10
4-5下層			1			1
5層	5	4	8	5		22
6層		2				2
7層	1	2				3
8層		4	3			7
9層	1	3				4
10層	5	3		1		9
計	205	178	169	57	10	619

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
アラビア数字層	205	178	169	57	10	619
捨て場相当グリッドⅣa層	131	68	67	18	1	285
計	336	246	236	75	11	904

分類

0 ……破片　不明
1 ……大きさが22cm以下（片手で持てる）
2 ……大きさが23～30cm（片手では苦しい）
3 A……大きさが30～50cm以上 ｝ 大きさが30cm以上
3 B……大きさが50cm以上 ｝

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
捨て場（ST01）	336	246	236	75	11	904
柱穴群	3	2	4	4		13
その他のⅣa層						0
計	339	248	240	79	11	917

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
Ⅱ層	4	2				6
Ⅱ層上部		1				1
SⅡ～Ⅲ層	2		2			4
Ⅲ層	3	1	1			5
Ⅲ層まで	13	2	1	2		18
Ⅲ（Ⅳa層含む）	3					3
Ⅲ（Ⅳa層含む）上部	1					1
Ⅳb層	2					2
Ⅳb層上面	3	1	1			5
Ⅳc層		1	1			2
計	31	8	6	2	0	47

その他

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
あ層	1					1
え層			1	2		3
お層	1	1				2
壁掃除		1				1
疑似現象		1				1
層なし	1	1				2
計	3	4	1	2	0	10

集計表

出土層＼分類	0	1	2	3		合計
				A	B	
03遺構内		1		1		2
03Ⅳa層出土分	339	248	240	79	11	917
03その他	34	12	7	4	0	57
合　計	373	261	247	84	11	976

（11）砥石

アラビア数字層

分類 / 出土層	0	1	2		3	4		5	6	7		8		合計
			A	B		A	B			A	B	A	B	
1層	8	24	2		2	21	9	11	2	2	1	2	3	87
1層（一部2b層含む）	1	1												2
1b層	1							3						4
1b層・1-2層							1	1						2
1-2層	17	10				20	3	11	5	3		4		73
1-2層・4b層		1								1				2
1-2b層	1	4												5
1-2b層（2層含む）	1	1				1								3
1-2c層		1				1								2
2層	11	40	1		3	17		8		4		2		86
2b層	5	12			1	19	1	9	2	2	1	3	1	56
2c層	1					4								5
2d層	1	1			1	3								6
2e層		1								1				2
2-3層							1							1
2-3b層	4	10				20	4	8	2	1		2	5	56
2-3b上層									1	1				2
2-3b中層						1								1
2-3b下層												1		1
2-3b2層	11	32			5	42	5	29	3	5		3		135
2-3b2上層		1												1
2-3b2下層		1						1						2
3層	27	126	3	1	7	51	4	32	5	6	1		1	264
3上層	2	12			2	6	2	3	3	4		1		35
3中層		7			3	1								11
3中層上部		1												1
3中下層		2												2
3b層		10			2	8		1				2		23
3-4層	10	49	1		2	35	2	5	10	1	1	3	1	120
3-4上層		1				3								4
3-4中層		1				2								3
4層	20	71	3		10	32	1	22	2	4		1		166
4b層	24	87	7		9	54	6	36	6	9	1	1	1	241
4c層	17	15			2	5	1	15	4					59
4c上層		4				2		1	1					8
4c中層	2	1			1	7		3	2		1			17
4c下層	6	14				3	1	9		1				34
4-5層	25	71	1		4	28	5	22	6	4		1	1	168
4-5上層	2	14			1	1		3	6					27
4-5下層	2					2								4
5層	4	19				8	1	5		2				39
6層	1	9			5	3	1	1						20
7層		2				2	1							5
8層	2	14	2		2	8	1							29
9層	2	7				8		1						18
10層	1	7	1		2	1	1	2		1				16
計	209	684	21	1	64	419	51	242	60	52	6	26	13	1,848

捨て場（ST01）

分類 / 出土層	0	1	2		3	4		5	6	7		8		合計
			A	B		A	B			A	B	A	B	
アラビア数字層	209	684	21	1	64	419	51	242	60	52	6	26	13	1,848
捨て場相当グリッドⅣa層	103	352	7	0	24	217	20	151	18	17	3	16	4	932
計	312	1,036	28	1	88	636	71	393	78	69	9	42	17	2,780

（次頁に続く）

砥石

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1	2 A	2 B	3	4 A	4 B	5	6	7 A	7 B	8 A	8 B	合計
捨て場（ST01）	312	1,036	28	1	88	636	71	393	78	69	9	42	17	2,780
柱穴群	2	26			2	4								34
その他のⅣa層														0
計	314	1,062	28	1	90	640	71	393	78	69	9	42	17	2,814

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1	2 A	2 B	3	4 A	4 B	5	6	7 A	7 B	8 A	8 B	合計
Ⅰ～Ⅱ層							1							1
Ⅱ層		1												1
Ⅱ層上部	2	3				1								6
Ⅱ層下部		1												1
SⅡ～Ⅲ層まで		1				1						1		3
Ⅲ層	6	2				4	1	2						15
Ⅲ層まで	6	17				9	1	3		2			1	39
Ⅲ（Ⅳa層含む）	2	2				1		5		1				11
Ⅳ層上部		3				1			1					5
Ⅳb層	3	6				1	1							11
Ⅳb層上面		22				1		1		1				25
Ⅳb層～Ⅴ層					1					1				2
Ⅳc層	1	11	1			4	1	3						21
Ⅳc下層										1				1
Ⅳc最下層		1				1								2
計	20	70	1	0	1	24	5	14	1	6	0	1	1	144

その他

出土層＼分類	0	1	2 A	2 B	3	4 A	4 B	5	6	7 A	7 B	8 A	8 B	合計
う層		1				5		2						8
え層						1								1
表土	1													1
壁掃除	1	2				1								4
疑似現象		1												1
Ⅳa層撹乱		6										1		7
層なし	1	1												2
計	3	11	0	0	0	7	0	2	0	0	0	1	0	24

集計表

出土層＼分類	0	1	2 A	2 B	3	4 A	4 B	5	6	7 A	7 B	8 A	8 B	合計
03遺構内						1	1							2
03Ⅳa層出土分	314	1,062	28	1	90	640	71	393	78	69	9	42	17	2,814
03その他	23	81	1	0	1	31	5	16	1	6	0	2	1	168
合　計	337	1,143	29	1	91	672	77	409	79	75	9	44	18	2,984

分類

0 ……破片
1 ……普通の棒板状（15cm以上）
2 A……底が面で凹んでいる　} 石皿状
　B……底に筋がある　}
3 ……大きい。両手でも運ぶのが大変
4 A……板状（底が面で凹んでいる）　} 1類より小さく15cm未満
　B……立体　}
5 ……平たい茶色の石
6 ……小石
7 A…… （真っ直ぐ）　} 棒状
　B…… （バナナ状に屈曲）　}
8 A……底が面で凹んでいる　} 溶岩
　B……底に筋がある　}

（12）石皿

アラビア数字層

出土層＼分類	0	1	2	3			4		合計
				A	B	C	A	B	
1層							1		1
2層				1					1
3層	2		0.2	2					4.2
3上層			1	1					2
4層				1					1
4b層	1								1
4-5層				1			1		2
計	3	0	1.2	6	0	0	2	0	12.2

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	1	2	3			4		合計
				A	B	C	A	B	
アラビア数字層	3	0	1.2	6	0	0	2	0	12.2
捨て場相当グリッドⅣa層	1		0.8	1	1				3.8
計	4	0	2	7	1	0	2	0	16

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1	2	3			4		合計
				A	B	C	A	B	
捨て場（ST01）	4	0	2	7	1	0	2	0	16
柱穴群									0
その他のⅣa層									0
計	4	0	2	7	1	0	2	0	16

集計表

出土層＼分類	0	1	2	3			4		合計
				A	B	C	A	B	
03遺構内									0
03Ⅳa層出土分	4	0	2	7	1	0	2	0	16
03その他									0
合　計	4	0	2	7	1	0	2	0	16

＊3層出土の0.2(1/5)及び、捨て場相当グリッドⅣa層出土の0.8(4/5)は同一固体の為、接合済

分類

0 ……不明
1 ……大きさが10cm未満
2 ……大きさが10～15cm位
3 A ……B、C以外
　B ……赤色顔料付着　使用痕がある（砥石に似ている）　} 大きさが15～25cm
　C ……真中が凹んでいる
4 A ……赤色顔料が付着していない　} 大きさが25cm以上
　B ……赤色顔料が付着している

（13）凹石

アラビア数字層

出土層＼分類		合計
1-2層	2	2
2-3b層	3	3
2-3b2層	1	1
4層	2	2
4b層	5	5
計	13	13

捨て場（ST01）

出土層＼分類		合計
アラビア数字層	13	13
捨て場相当グリッドⅣa層	1	1
計	14	14

Ⅳa層出土分

出土層＼分類		合計
捨て場（ST01）	14	14
柱穴群		0
その他のⅣa層		0
計	14	14

集計表

出土層＼分類		合計
03遺構内		0
03Ⅳa層出土分	14	14
03その他	0	0
合　計	14	14

分類

なし

（14）磨石

アラビア数字層

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
1層		1							1
1b層			1						1
1-2層	1	1		1	1		1		5
2層		3		3			1		7
2-3b層		2							2
2-3b2層				2	1		1		4
3層	1	10		1			3		15
3層上層		1							1
3b層								1	1
3-4層		1							1
4層		4		1	1	1	2		9
4b層	1	3		3			1		8
4c層	2			1					3
4c中層				1	1				2
4-5層	1	4		5			1	2	13
5層		1							1
8層		2						1	3
9層		1						2	3
計	6	34	1	18	4	1	10	6	80

捨て場（ST01）

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
アラビア数字層	6	34	1	18	4	1	10	6	80
捨て場相当グリッドⅣa層	13	25	0	17	1	2	0	4	62
計	19	59	1	35	5	3	10	10	142

Ⅳa層出土分

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
捨て場（ST01）	19	59	1	35	5	3	10	10	142
柱穴群									0
その他のⅣa層									0
計	19	59	1	35	5	3	10	10	142

Ⅳa層以外のローマ数字層

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
Ⅲ層	1			2					3
Ⅲ層まで				1					1
Ⅲ層の上	2			2					4
Ⅲ（Ⅳa上層含む）		1		1					2
Ⅳb層				1					1
Ⅳb層上面		1							1
計	3	2	0	7	0	0	0	0	12

その他

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
Ⅳa層＋撹乱		1							1
計	0	1	0	0	0	0	0	0	1

集計表

出土層＼分類	0	1			2	3	4	5	合計
		A	B	C					
03遺構内									0
03Ⅳa層出土分	19	59	1	35	5	3	10	10	142
03その他	3	3	0	7	0	0	0	0	13
合　計	22	62	1	42	5	3	10	10	155

分類

0 ……不明（破片）
1 A……一般的なもの（花崗岩が多い）
1 B……溶岩
1 C……その他
　} 片手で持てる楕円形の一般的なもの
2 ……板状 ◯ 又は □
3 ……長い棒状
4 ……小石（掌に入る）
5 ……赤色顔料が付着している

（15）層位別集計表

アラビア数字層

分類 / 出土層	石鏃	石鏃 未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器 等A類	掻・削器 等B類	磨製石斧	磨製石斧 未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
1層	15	27	1	2		4	2	1	116		452	21	87	1		1		730
1層（一括）											1							1
1層（一部1-2層含む）											2		2					4
1層（一部2b層含む）									2		9							11
1層・1-2層・2層											2							2
1上層											3							3
1a層									1		1							2
1b層		1							8		33		4			1		47
1b層・1-2層		1									7	1	2					11
1c層									3		5							8
1-2層	7	13	9		1	1			74		355	8	73		2	5		548
1-2層・4b層													2					2
1-2b層		1	1	1					7		35	1	5					51
1-2b層（一部2層含む）											5	1	3					9
1-2c層		1							2		4		2					9
2層	5	14	5			2		1	121		382	41	86	1		7		665
2層・4b層											8							8
2b層	3	10	1	1		1			142		498	20	56					732
2b層（一部2-3b2層含む）									1		6							7
2c層		1							6		23		5					35
2d層		1							1		9		6					17
2e層									2		22	2	2					28
2-3層		1									1	1	1					4
2-3b層	5	5	3			1			54		215	6	56		3	2		350
2-3b上層		1									4		2					7
2-3b中層									1		2		1					4
2-3b下層									2		1		1					4
2-3b2層	4	16	7	3	1	2			212		689	30	135		1	4		1,104
2-3b2上層													1					1
2-3b2中層											2							2
2-3b2下層											8		2					10
3層	9	20	6			1			506		1,072.5	95	264	4.2		15		1,992.7
3上層		1		1			1		63		228	16	35	2		1		348
3中層									18		69	9	11					107
3中層上部									2		15		1					18
3中下層									14		10	3	2					29
3b層									31		121	3	23			1		179
3b2層									6									6
3-4層		2							190		529	29	120			1		871
3-4上層									8		10		4					22
3-4中層									4		19		3					26
3-4下層											2							2
4層	10	22	3			3			240		647	83	166	1	2	9		1,186
4b層	7	18	3			2			379		782.5	76	241	1	5	8	1	1,523.5
4b層上面		1																1
4c層	4	10	1		1	2			87		220	23	59			3		410
4c上層	1	3	1						10		43	1	8					67
4c中層	1	2							16		105	1	17			2		144
4c下層	2	2	2						54		176	14	34					284
4-5層	7	11	2	1		5		1	357		667	76	168	2		13		1,310
4-5上層	1								35		88	10	27					161
4-5下層		1							8		31	1	4					45
5層		8	1						50		140	22	39			1		261
6層		1							16		33	2	20					72
7層		1							5		19	3	5					33
8層									46		180	7	29			3		265
9層									35		71	4	18			3		131
10層		1		1					66		143	9	16					236
11層						1			15		46							62
計	81	197	46	10	3	25	3	3	3,016	0	8,251	619	1,848	12.2	13	80	1	14,208.2

捨て場（ST01）

分類 / 出土層	石鏃	石鏃 未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器 等A類	掻・削器 等B類	磨製石斧	磨製石斧 未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
アラビア数字層	81	197	46	10	3	25	3	3	3,016	0	8,251	619	1,848	12.2	13	80	1	14,208.2
捨て場相当グリッドⅣa層	36	91	23	4	4	17	2	2	1,553	0	3,905	285	932	3.8	1	62	1	6,921.8
計	117	288	69	14	7	42	5	5	4,569	0	12,156	904	2,780	16	14	142	2	21,130

（次頁に続く）

層位別集計表

Ⅳa層出土分

分類 / 出土層	石鏃	石鏃未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器等A類	掻・削器等B類	磨製石斧	磨製石斧未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
捨て場（ST01）	117	288	69	14	7	42	5	5	4,569	0	12,156	904	2,780	16	14	142	2	21,130
柱穴群	1	0	1	0	0	1	0	0	10	0	58	13	34	0	0	0	0	118
その他のⅣa層	1	2	0	0	0	0	0	0	4	0	11	0	0	0	0	0	0	18
計	119	290	70	14	7	43	5	5	4,583	0	12,225	917	2,814	16	14	142	2	21,266

Ⅳa層以外のローマ数字層

分類 / 出土層	石鏃	石鏃未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器等A類	掻・削器等B類	磨製石斧	磨製石斧未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
Ⅰ～Ⅱ層		1									1		1					3
Ⅱ層						1			1		7	6	1					16
Ⅱ層上部									1		12	1	6					20
Ⅱ層下部													1					1
SⅡ～Ⅲ層		2	1						6		28	4						41
SⅡ～Ⅲ層まで													3					3
Ⅲ層	6	7	3	1		6			24		94	5	15			3		164
Ⅲ層まで		5	1	1					24		131	18	39			1		220
Ⅲ層の上	1	1				1	3		2		6					4		18
Ⅲ（Ⅳa層含む）	2	1	1			1	1		21		62	3	11					103
Ⅲ（Ⅳa上層含む）											2					2		4
Ⅲ（Ⅳa層含む）上部									11		21	1						33
Ⅲ（Ⅳa層含む）上面						1												1
Ⅳ層											2							2
Ⅳ層上部									11		30		5					46
Ⅳ～Ⅳa層									1									1
Ⅳb層		1							14		41	2	11			1		70
Ⅳb層上面		3				1			22		81	5	25			1		138
Ⅳb～Ⅴ層									1		4		2					7
Ⅳc層	6	5				2		1	1		67	2	21					105
Ⅳc中層											1							1
Ⅳc下層									1		1		1					3
Ⅳc最下層													2					2
Ⅴ層											1							1
計	15	26	6	2	0	13	4	1	141	0	592	47	144	0	0	12	0	1,003

その他

分類 / 出土層	石鏃	石鏃未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器等A類	掻・削器等B類	磨製石斧	磨製石斧未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
あ層												1						1
い層											1							1
う層		1							1		20		8					30
え層									7		11	3	1					22
お層									3		7	2						12
表土	2	1			1				1		9		1					15
撹乱	2	4	1						1		6							14
壁掃除									4		22	1	4					31
クリーニング中		1																1
T・TYトレンチ	21	42	23		3													89
疑似現象											1	1	1					3
排土											1							1
Ⅳa層＋撹乱						2			2		15		7			1		27
層なし	2	1	1						10		14	2	2					32
計	27	50	25	0	4	2	0	0	29	0	107	10	24	0	0	1	0	279

石器集計表

分類 / 出土層	石鏃	石鏃未成品	石錐	石篦	石匙	掻・削器等A類	掻・削器等B類	磨製石斧	磨製石斧未成品	打製石斧	ハンマー	台石	砥石	石皿	凹石	磨石	不明	合計
02遺構内	2	1	1	0	0	1	0	0	3	0	9	1	2	0	0	3	0	23
02遺構外	56	44	41	2	4	5	0	18	250	1	238	60	14	6	44	73	0	856
03遺構内	4	0	1	0	1	4	0	0	2	0	10	2	2	0	0	0	0	26
03Ⅳa層出土分	119	290	70	14	7	43	5	1	4,583	0	12,225	917	2,814	16	14	142	2	21,262
03その他	42	76	31	2	4	15	4	5	170	0	699	57	168	0	0	13	0	1,286
合　計	223	411	144	18	16	68	9	24	5,008	1	13,181	1,037	3,000	22	58	231	2	23,453

第３表　石器・石製品剥片重量集計表

剥片 A

捨て場	189,823.62	合計
その他のⅣａ層	1,525.68	
		191,349.30
		191,349.30

捨て場内訳	重さ（g）
1～11層	114,407.78
Ⅳａ層	58,637.64
ST-01	16,489.01
その他	289.19

捨て場＋その他のⅣａ層	191,349.30	
遺構内	49.98	
柱穴群	597.09	
Ⅰ～Ⅳ層＋Ⅳｂ～Ⅴ層	12,821.15	
その他	1,190.57	
03年度全体		206,008.09

02年度剥片	17,354.05	
03年度剥片	206,008.09	
		223,362.14

剥片 B

	重さ（g）	合計
捨て場	424,318.13	
その他のⅣａ層	3,809.90	
		428,128.03

捨て場内訳	重さ（g）
1～11層	265,058.06
Ⅳａ層	135,926.83
ST-01	21,077.98
その他	2,255.26

捨て場＋その他のⅣａ層	428,128.03	
遺構内	85.74	
柱穴群	1,257.96	
Ⅰ～Ⅳ層＋Ⅳｂ～Ⅴ層	18,052.37	
その他	2,327.97	
03年度全体		449,852.07

02年度剥片	13,660.06	
03年度剥片	449,852.07	
		463,512.13

金附遺跡　剥片石器重量集計（g）

剥片 A　223,362.14
剥片 B　463,512.13 総合計　686,874.27

※　ST-01とは、ST01捨て場のこと。

剥片 A
層位別重量（1 層～ 11 層）

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ，Ⅱ、L Ⅱ，Ⅲ、O0～Ⅱ、P Ⅰ	1 層	1 層、1 上 層、1 層（1-2 層含む）	10,217.62	
M Ⅲ	1a 層		0.83	
M Ⅲ、N Ⅲ、L Ⅲ	1b 層		1,198.11	
	1c 層		26.58	
N Ⅲ	1b 層、1-2 層		133.21	
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ	1-2 層		6,965.07	
N Ⅱ，Ⅲ	1-2b 層	1-2b 層（2 層含む）	441.44	
N Ⅲ	1-2c 層		11.14	
N Ⅱ	1 層、1-2 層、2 層		146.06	
M Ⅰ，Ⅱ、N Ⅰ，Ⅱ、L Ⅲ、O0～Ⅱ	2 層	2 層、2 層上部	6,618.47	
K Ⅲ、L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ	2b 層	2b 層、土壌サンプル、2b 層	7,184.55	
M Ⅱ	2c 層		727.44	
N Ⅱ	2d 層		130.60	
N Ⅱ，Ⅲ	2e 層		894.77	
N Ⅱ	2 層、4b 層		58.93	
M Ⅱ、N Ⅰ	2-3 層		144.83	
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ	2-3b 層	2-3b 上層、2-3b 中層、2-3b 下層、黄褐色	4,706.93	
L Ⅱ～Ⅳ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ	2-3b2 層	2-3b2 中層、2-3b2 下層、2-3b2 層土壌サンプル、杭山 2-3b2 層	13,973.09	
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ	3 層	3 層、SN16 焼土下 3 層、SN 焼土下 3 層、3 上層、3 中層、3 中下層、3 中層上部	18,115.35	
	3b 層		725.88	
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ	3-4 層	3-4 層、3-4 中層	2,462.05	
M Ⅰ，Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ	4 層	4 層、SN 焼土下 4 層、SN 焼土下 4 層	8,668.09	
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ	4b 層	4b 層、SN15 焼土下 4b 層、SN16 焼土下 4b 層	12,883.84	
M Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ	4c 層	4c 層、4c 上層、4c 中層、4c 下層	7,195.70	
M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ、O Ⅱ	4-5 層	4-5 層、4-5 上層、4-5 下層	6,881.90	
M Ⅰ，Ⅱ、N Ⅰ，Ⅱ	5 層	5 層、SN 焼 土 下 5 層、SN16 焼土下 5 層	1,724.14	
M Ⅱ，Ⅲ	6 層		885.91	
M Ⅱ	7 層		162.92	
M Ⅱ，Ⅲ	8 層		452.59	
M Ⅱ，Ⅲ	9 層		128.65	
L Ⅲ、M Ⅲ	10 層		469.07	
K Ⅲ、M Ⅲ、N Ⅲ	11 層		72.02	
				114,407.78

剥片 A
層位別重量〔Ⅰ層～（S Ⅱ～Ⅲ層）〕

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
G Ⅷ、M Ⅰ、N Ⅰ	Ⅰ層	Ⅰ層、センター杭Ⅰ層	56.28	
N Ⅰ	Ⅰ～Ⅱ層		133.16	
M Ⅰ～Ⅲ、N0、O Ⅰ	Ⅱ層	Ⅱ層、Ⅱ層上部、Ⅱ層上部（灰色土）、Ⅱ層下部上面クリーニング、Ⅱ層下部	393.52	
M Ⅷ	Ⅱb 層		63.37	
G Ⅷ、K Ⅲ～Ⅴ、L Ⅲ～Ⅴ、M Ⅰ～Ⅳ、N Ⅰ～Ⅳ、O Ⅰ，Ⅱ、南西区南端、南西区南端トレンチ	Ⅲ層	Ⅲ層、Ⅲ層の上、東部Ⅲ層，Ⅲ層まで、南東隅Ⅲ層	5,971.37	
N Ⅱ	Ⅲ層上面撹乱		21.68	
G Ⅷ	ベルトⅢ層		2.46	
K Ⅳ，Ⅴ、L Ⅲ、M Ⅱ～Ⅳ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ	Ⅲ～Ⅳa 層	Ⅲ，Ⅳa 層、Ⅲ，Ⅳa 層上面、Ⅲ，Ⅳa 層上部	2,140.79	
L Ⅲ、M Ⅲ、N Ⅲ	Ⅲ～Ⅳa 層トレンチ	Ⅲ，Ⅳa 層トレンチ、Ⅲ，Ⅳa 上層トレンチ、Ⅲ，Ⅳa 上部トレンチ	556.33	
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、P0，Ⅰ	Ⅳa 層	Ⅳa 層、Ⅳa 層？、Ⅳa 層上面、Ⅳa 層上面？、Ⅳa 層上部、Ⅳa 層上層、Ⅳa 層上、Ⅳa 層（1 層、2b 層含む）	6,282.64	
M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ、O Ⅰ、南西区	Ⅳa 層排土		717.77	
G Ⅷ	ベルトⅣa 層		194.58	
P0、南西区南端トレンチ	Ⅳa 層撹乱	Ⅳa 層撹乱、Ⅳa 層＋撹乱	254.46	
N Ⅲ	試掘トレンチⅣa 層		76.63	
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、P0，Ⅰ、排土	Ⅳa 層トレンチ		49,004.01	
N Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，1 層		391.40	
O Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，2 層		31.71	
O Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，3 層		59.44	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，あ層（暗褐色）		104.86	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，い層（黒色）		229.31	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，う層（暗褐色）		78.81	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ，お層（明黄褐色）		1.09	
N Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 15～30cm		185.43	
N Ⅱ、M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 20cm		163.23	
N Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 20～30cm		295.91	
N Ⅱ、M Ⅲ	Ⅳa 層トレンチ上から 30cm		708.37	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 25～35cm		88.96	
M Ⅱ，Ⅲ	Ⅳa 層トレンチ上から 30～35cm		434.85	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 30～40cm		556.58	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 40cm		74.71	
M Ⅱ	Ⅳa 層トレンチ上から 60cm		184.57	
N Ⅱ	1-2 層とⅣa 層トレンチ		44.00	
N Ⅰ	Ⅳ，Ⅳa 層		8.11	
L Ⅳ，M Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、P Ⅰ	Ⅳb 層	Ⅳb 層、Ⅳb 層上面	1,420.64	
E Ⅸ、G Ⅷ、K Ⅳ，Ⅴ、L Ⅳ，Ⅴ，Ⅷ，Ⅸ、M Ⅳ，Ⅸ，X、N X	Ⅳc 層	Ⅳc 層、Ⅳc 中 層、Ⅳc 最下層、センター杭Ⅳc 層	1,283.20	
M Ⅳ、L Ⅳ	Ⅳb，Ⅴ層		107.19	
	トレンチ Ⅳb，Ⅴ層		27.30	
N Ⅰ、O0，Ⅰ、P0	S Ⅱ～Ⅲ層		635.75	
				72,984.47

剥片 B
層位別重量（1 層～ 11 層）

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ，Ⅱ、O Ⅰ，Ⅱ、P Ⅰ	1 層	1 層	15,413.71	
N Ⅱ		1 層（一部　1-2 層含む）		
L Ⅲ		1 層（一部　2b 層含む）		
O Ⅱ		1 層杭		
M Ⅱ		1 上層		
M Ⅲ、N Ⅲ	1b 層		1,018.88	
L Ⅲ、M Ⅲ	1c 層		21.23	
N Ⅱ	1b 層、1-2 層		1.88	
N Ⅱ	1 層、1-2 層、2 層		47.94	
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ	1-2 層		8,447.76	
N Ⅱ，Ⅲ	1-2b 層		678.75	
N Ⅲ	1-2c 層		8.99	
L Ⅲ、M Ⅰ，Ⅱ、N Ⅰ，Ⅱ、O0～Ⅱ、P0，Ⅰ	2 層	2 層	14,128.29	
O Ⅱ		2 層杭		
K Ⅲ、L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ	2b 層	2b 層	14,320.27	
M Ⅲ		2b 層（2-3b 層）		
M Ⅲ		2b 層（2-3b2 層）		
M Ⅱ	2c 層		1,301.53	
N Ⅱ	2d 層		231.84	
M Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ	2e 層		665.52	
M Ⅱ	2-3 層		43.42	
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅱ	2-3b 層	2-3b 層	30,630.15	
M Ⅱ		2-3b 中層（黄褐色）		
M Ⅲ		2-3b 下層		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ		2-3b2 層		
M Ⅱ		2-3b2 層（土壌サンプル）		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ	3 層	3 層	50,647.15	
M Ⅰ		3 層（SN15 焼土下）		
O Ⅰ		3 層（SN11 焼土下）		
O Ⅱ		3 層（SN26 焼土下）		
O Ⅱ		3 層杭、杭下		
O Ⅱ		3 層杭（SN27 焼土下）		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ		3 上層		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ		3 中層		
L Ⅱ		3 中下層		
L Ⅲ		3 中上部（黄褐色）		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ	3b 層		1,771.96	
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ	3-4 層	3-4 層	11,592.91	
M Ⅲ		3-4 層上部		
L Ⅲ、M Ⅲ		3-4 層上層		
M Ⅲ		3-4 層中層		
M Ⅲ		3-4 層下層		
M Ⅰ，Ⅱ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ	4 層	4 層	18,508.02	
M Ⅰ		4 層（SN15 焼土下）		
M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ	4b 層	4b 層	34,065.18	
M Ⅰ		4b 層（SN15 焼土下）		
M Ⅰ		4b 層（SN16 焼土下）		
M Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ	4c 層	4c 層	15,348.90	
N Ⅲ		4c 上層，中層		
M Ⅲ、N Ⅲ		4c 下層		
M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ、O Ⅱ	4-5 層	4-5 層	30,415.04	
N Ⅱ，Ⅲ		4-5 層，上層，下層		
N Ⅰ，Ⅱ	5 層	5 層	4,697.08	
M Ⅰ、N Ⅱ		5 層（SN 焼土下）		
M Ⅰ		5 層（SN16 焼土下）		
M Ⅱ，Ⅲ	6 層		1,440.50	
M Ⅱ	7 層		202.96	
M Ⅱ，Ⅲ	8 層		2,932.59	
M Ⅱ，Ⅲ	9 層		1,133.67	
L Ⅲ，M Ⅲ	10 層		4,015.94	
M Ⅲ，N Ⅲ	11 層		1,326.00	
				265,058.06

剥片 B
層位別重量〔Ⅰ層～（S Ⅱ～Ⅲ層）〕

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
O Ⅰ	Ⅰ層	Ⅰ層	11.33	
G Ⅷ		Ⅰ層、センター杭		
M Ⅰ，Ⅲ、N0、O0，Ⅰ、P0	Ⅱ層	Ⅱ層	1,028.82	
L Ⅲ		Ⅱ層上部，上部（灰色）		
M Ⅷ	Ⅱb 層		22.84	
N Ⅰ、O0，Ⅰ、P0	S Ⅱ，Ⅲ層		506.00	
L Ⅲ，Ⅳ、M Ⅰ～Ⅳ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、P0，Ⅰ	Ⅲ層	Ⅲ層	9,411.23	
K Ⅲ，Ⅳ、L Ⅲ～Ⅴ、M Ⅲ，Ⅳ、N Ⅲ		Ⅲ層まで		
O Ⅱ		Ⅲ層（一部Ⅳ層含む）		
G Ⅷ		Ⅲ層ベルト		
N Ⅱ		Ⅲ層南東隅		
K Ⅲ、L Ⅲ、M Ⅱ～Ⅳ、N Ⅰ，Ⅱ	Ⅲ～Ⅳa 層	Ⅲ～Ⅳa 層	2,839.29	
N Ⅱ、O Ⅱ		Ⅲ～Ⅳa 層上面		
L Ⅲ、M Ⅲ		Ⅲ～Ⅳa 層上部		
N Ⅲ		Ⅲ～Ⅳa 上層		
M Ⅲ		Ⅲ～Ⅳa 層トレンチ		
L Ⅲ、M Ⅲ、N Ⅲ		Ⅲ～Ⅳa 層上部トレンチ		
L Ⅳ	Ⅳ層		19.12	
G Ⅷ、L Ⅲ，Ⅳ、N Ⅲ、TY	Ⅳa 層	Ⅳa 層	139,736.73	
L Ⅲ，Ⅳ、T		Ⅳa 層？		
L Ⅲ、M Ⅲ、N Ⅰ，Ⅲ、O Ⅱ		Ⅳa 層上面		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ		Ⅳa 層上面？		
M Ⅱ		Ⅳa 層上面？（1 層、2b 層含む）		
L Ⅱ、M Ⅲ、N Ⅲ		Ⅳa 層上部		
O Ⅱ		Ⅳa 層上層		
M Ⅱ，Ⅲ、N Ⅱ，Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、南西区		Ⅳa 層排土		
G Ⅶ，Ⅷ		Ⅳa 層ベルト		
L Ⅱ，Ⅲ、M Ⅰ～Ⅲ、N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ，Ⅱ、P0，Ⅰ、南西区		Ⅳa 層トレンチ		
N Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 15～30cm		
N Ⅰ		Ⅳa 層トレンチ 20～30cm		
M Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 25～35cm		
M Ⅱ，Ⅲ		Ⅳa 層トレンチ 30～35cm		
N Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ（1-2 層含む）		
N Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 20cm		
M Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 20cm 下まで		
N Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 30cm		
N Ⅲ		Ⅳa 層トレンチ上から 30cm		
M Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 30～40cm		
M Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 40cm		
M Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ 60cm		
O Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ，2 層		
O Ⅱ		Ⅳa 層トレンチ，3 層		
グリッド不明		Ⅳa 層トレンチ，排土		
L Ⅳ、M Ⅱ～Ⅳ、N Ⅱ、O Ⅰ，Ⅱ、P Ⅰ	Ⅳb 層	Ⅳb 層	3,832.01	
M Ⅰ、N Ⅰ，Ⅱ、O0，Ⅰ、P0，Ⅰ、Q0		Ⅳb 層上面		
N Ⅱ		Ⅳb 層上面？		
P Ⅰ		Ⅳb 層上層		
O Ⅱ		Ⅳb 層（柱穴？）		
I Ⅳ、K Ⅳ、L Ⅸ、M Ⅳ，Ⅸ	Ⅳc 層	Ⅳc 層	295.70	
G Ⅷ		Ⅳc 層、センター杭		
L Ⅳ、M Ⅳ	Ⅳb～Ⅴ層	Ⅳb～Ⅴ層	86.03	
M Ⅳ		Ⅳb～Ⅴ層までトレンチ		
				157,789.10

剥片 A
撹乱～層位なし　明細表

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
N Ⅱ	い層		7.67	
N Ⅱ	う層		34.47	
N Ⅱ	え層		110.08	
N Ⅱ	お層		136.97	
L V	Ⅲ層まで　類似現象		0.05	
M Ⅰ，Ⅱ、N Ⅰ，Ⅱ、O Ⅰ，Ⅱ、P0，Ⅰ	撹乱	撹乱、南東隅検出面撹乱	459.03	
南東区、T	壁掃除		217.23	
南東区北側、南東区南側、南東区ベルト	表土		318.12	
K Ⅳ	クリーニング中		5.72	
T	排土		62.75	
N Ⅰ～Ⅲ、O Ⅰ、P0，Ⅰ、表採	層位なし		127.67	
				1,479.76

剥片 A
遺構内　明細表

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
SK90（？）土坑	2 層		8.48	
SK90 土坑	2 層（クルミ）		6.59	
SK90 土坑	3 層（焼土）		2.71	
SK90 土坑	4 層		3.08	
SN4 焼土内			26.00	
SN28 焼土（SK90 土坑）			2.84	
SR03 土器埋設遺構			0.28	
				49.98

剥片 B
撹乱～層位なし　明細表

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
M Ⅱ	あ層	あ層（暗褐色）トレンチ	556.25	
M Ⅱ	い層	い層（黒色）トレンチ	257.70	
N Ⅱ	う層	う層	505.33	
M Ⅱ		う層（暗褐色）		
M Ⅱ		う層（暗褐色）トレンチ		
N Ⅱ	え層	え層	356.12	
M Ⅱ		え層（黄褐色）		
N Ⅱ	お層	お層	579.86	
M Ⅱ		お層（明黄褐色）		
M Ⅱ		お層（明黄褐色）トレンチ		
N Ⅰ，Ⅱ、O Ⅰ、P0、Q0、南東区	撹乱	撹乱	321.61	
南西区		撹乱＋Ⅳ a 層トレンチ		
M Ⅰ		層位不明撹乱		
M Ⅰ，Ⅱ		南東隅検出面撹乱		
南西区	表土	南側表土	974.68	
南西区		ベルト表土		
H Ⅶ	ベルト近くの風倒木痕		47.08	
N Ⅰ，Ⅱ、O Ⅰ，Ⅱ	層位不明		268.85	
L V、M Ⅲ	類似現象		68.97	
T	排土		8.32	
T、南東区	壁掃除		539.49	
M Ⅲ	試掘トレンチ		98.97	
				4,583.23

剥片 B
撹乱～層位なし　明細表

出土グリッド	層位	内訳	重さ（g）	計
SK90 土坑	2 層（クルミ）		3.68	
SK90（？）土坑	2 層		3.79	
SK90 土坑	3 層（焼土）		2.59	
SK90 土坑	4 層		25.79	
SN28 焼土（SK90 土坑）	1 層		49.54	
SR03 土器埋設遺構			0.35	
				85.74

02 年度　剥片 A

	出土グリッド	重さ（g）	計
ST02	E Ⅲ～E V、E Ⅷ	1,327.21	
ST02	F Ⅵ～F Ⅸ	687.96	
ST02	G Ⅵ、G Ⅶ、GF Ⅸ	3,638.13	
ST02	H Ⅶ、H Ⅷ、HI Ⅵ，Ⅶ	7,431.62	
ST02	I Ⅵ、I Ⅷ、I Ⅸ	2,415.40	
ST02	L Ⅸ	12.03	
ST02	F Ⅵ 25	84.60	
ST02	F Ⅶ 21	320.00	
ST02	G Ⅷ 12・Ⅳ a2 層	117.50	
ST02	H Ⅶ 10	193.50	
ST02	H Ⅷ 7	259.20	
ST02	H Ⅷ 17	379.00	
ST02	I Ⅶ 2・Ⅳ a2 層	93.20	
	F Ⅵ 19・Ⅳ a 層	141.60	
	H Ⅶ・Ⅱ層	101.70	
	H Ⅶ・Ⅱ層	93.50	
	H Ⅶ・Ⅱ層	31.90	
	I Ⅶ・Ⅱ層	26.00	
			17,354.05

03 年度に入れる剥片 A　捨て場

	出土グリッド	重さ（g）	計
ST01	T8 トレンチ	12,784.45	
	T13 トレンチ	1,786.43	
	TY3 トレンチ	943.00	
	TY4 トレンチ	392.29	
	TY5 トレンチ	179.64	
	TY7 トレンチ	403.20	
			16,489.01

02 年度　剥片 B

	出土グリッド	重さ（g）	計
ST02	F Ⅳ	171.73	
ST02	E，F Ⅷ、G Ⅵ～Ⅷ、F，G Ⅸ、出土地点不明	1,642.23	
ST02	H Ⅶ，Ⅷ	3,670.35	
ST02	H Ⅷ、I Ⅷ	2,852.74	
ST02	G Ⅷ	1,469.34	
ST02	G Ⅷ	2,839.68	
ST02	E Ⅳ	785.36	
ST02	E Ⅳ	228.63	
			13,660.06

03 年度に入れる剥片 B　捨て場

	出土グリッド	重さ（g）	計
ST01	TY4	531.29	
ST01	TY7	725.00	
ST01	TY3	741.53	
ST01	TY5	254.23	
ST01	T8	16,504.42	
ST01	T13	2,321.51	
			21,077.98

※　ST01、02 は、捨て場。

第４表　自然遺物等観察表

No.	出土地点・層位	種類	残存状態	備考	重量(g)	写真図版	分析の有無	本文記載
1	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	上下肢骨　部位不明	-	357		
2	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	上下肢骨　部位不明	-	357		
3	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	上下肢骨　部位不明	-	357		
4	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨　部位不明	-	357		
5	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨　部位不明	-	357		
6	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	頭骨	-	357		
7	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	頭骨	-	357		
8	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	鼻骨　右	-	357		
9	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	頬骨　右	-	358		
10	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	下顎骨　右	-	358		
11	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	下顎骨　右	-	358		
12	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	頭骨	-	358		
13	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	頭骨	-	359		
14	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	四肢骨か？	-	359		
15	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	四肢骨か？	-	359		
16	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨？	-	359		
17	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨　部位不明	-	359		
18	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨　部位不明	-	359		
19	SK01 土坑	人骨	細片（土ごと採取）	骨　部位不明	-	360		
20	SK01 土坑	人骨	細片	部位不明	0.02	360		
21	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	上顎切歯　部位不明	0.05	360		
22	SK01 土坑	人骨（歯？）	細片	部位不明	0.88	360		
23	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	1一？　部位不明	-	360		
24	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	切歯┌2？　部位不明	0.04	360		
25	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	前歯舌面　部位不明	-	360		
26	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	咬合面　部位不明	0.02	360		
27	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	部位不明	0.07	360		
28	SK01 土坑	人骨（歯）	1/4 ？	└3 ？	0.04	360		
29	SK01 土坑	人骨（歯）	1/2 ？	3┘	0.10	360		
30	SK01 土坑	人骨（歯）	完形？	└4	0.15	360		
31	SK01 土坑	人骨（歯）	完形？	4┘	0.11	360		
32	SK01 土坑	人骨（歯）	細片	┌3	0.01	360		
33	SK01 土坑	人骨（歯）	割れている	┌4	0.06	360		
34	SK01 土坑	人骨（歯）	2/3 ？	┌5	0.05	360		
35	SK01 土坑	人骨（歯）	割れている	┌6	0.14	360		
36	SK01 土坑	人骨（歯）	破片	D①Ｉ２？（2┐）？　右下	0.02	360		
37	SK01 土坑	人骨（歯）	割れている	D②C　（3┐）？　右下	0.05	360		
38	SK01 土坑	人骨（歯）	割れている	D②③　（6┘）右上	0.21	360		
39	SK01 土坑	人骨（歯）	完形	D①　（7┘）右上	0.27	360		
40	SK01 土坑	人骨（歯）	完形	D③P1　（4┐）右下	0.14	360		
41	SK01 土坑	人骨（歯）	完形	D④P2　（5┐）右下	0.16	360		
42	SK01 土坑	人骨（歯）	完形	D⑤M1　（6┐）右下	0.37	360		
43	SK01 土坑	人骨（歯）	割れているが完全？	D⑥M2　（7┐）右下	0.30	360		
44	SK07 土坑	人骨？	破片（土ごと採取）	部位不明	-	360		
45	SK07 土坑	人骨（歯）	割れている	3の舌面	0.02	360		
46	SK07 土坑	人骨	粉々に割れている	部位不明	0.51	360		
47	SK07 土坑	人骨（歯）	割れているが完全？	6┐歯	0.17	360		
48	SK07 土坑	人骨（歯）	割れているが完全？	7一　歯	0.10	360		
49	SK70 土坑	人骨	破片（土ごと採取）	「骨（歯）」・歯以外の部位主	-	361		
50	SK90 土坑（SN28 焼土）・1 層	動物骨		資料番号 B1	2.28	361	Ⅸ章	
51	SK90 土坑・2 層	動物骨	細片	骨端あり	0.08	361		
52	SK90（？）土坑・2 層	動物骨		資料番号 B18	0.13	361	Ⅸ章	
53	SK90 土坑・3 層（焼土）	動物骨		資料番号 B14	0.27	361	Ⅸ章	
54	SNQ4 炉（SN5 焼土下）・3 層	動物骨？	細片		0.12	×		
55	E Ⅳ・県教委トレンチ	動物骨？	破片	2点	5.91	361		
56	L Ⅲ 16・2b 層	動物骨？	破片	骨端	0.39	×		

No.	出土地点・層位	種類	残存状態	備考	重量(g)	写真図版	分析の有無	本文記載
57	M Ⅰ 24・4 層	動物骨	破片	資料番号 B29・イノシシ	1.08	361	Ⅸ章	
58	M Ⅰ 24・Ⅳ b 層上面	動物骨？	骨幹？破片		0.70	×		
59	M Ⅰ 25・Ⅳ b 層上面	動物骨？	骨幹？破片		0.90	×		
60	M Ⅰ 25・Ⅳ b 層上面	動物骨？	骨幹？破片		3.34	×		
61	M Ⅰ 25・Ⅳ b 層上面	動物骨？	破片	骨端も少し残っている	5.69	×		
62	M Ⅰ 25（SN16 焼土下）・5 層	動物骨？	破片	骨端あり	1.30	×		
63	M Ⅱ 15・2c 層	桂化木？	破片	未洗のため動物骨幹に分類されていた	1.82	×		
64	M Ⅱ 15 ～ 20・Ⅳ a 層トレンチ	動物骨？	骨幹破片		2.17	×		
65	M Ⅱ 16・2-3b 層	動物骨？	骨幹破片	小動物？・複数点	0.23	361		
66	M Ⅱ 17・2-3b2 層	動物骨？	内部破片		2.88	×		
67	M Ⅱ 17・2-3b2 層	動物骨		資料番号 B42・キツネ？、イノシシ	3.64	361	Ⅸ章	
68	M Ⅱ 17・3 層	動物骨？	破片	骨端あり	1.22	×		
69	M Ⅱ 17・Ⅳ a 層排土	動物骨？	破片	骨端	1.23	×		
70	M Ⅱ 18・2-3b2 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
71	M Ⅱ 18・2-3b2 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
72	M Ⅱ 18・2-3b2 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
73	M Ⅱ 18・2-3b2 層上面	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
74	M Ⅱ 18・2-3b2 層上面	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
75	M Ⅱ 19・2-3b2 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
76	M Ⅱ 22・2-3b 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	下顎骨？？	-	×		
77	M Ⅱ 22・4b 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
78	M Ⅱ 22・4b 層	動物骨？	破片	骨幹	6.23	×		
79	M Ⅱ 23・Ⅳ a 層トレンチ	動物骨？	細片		0.06	×		
80	M Ⅱ 24・2-3b 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
81	M Ⅱ 24・2-3b2 層	動物骨？	細片（土ごと採取）		-	×		
82	M Ⅱ 24・2-3b2 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨端	2.98	×		
83	M Ⅱ 24・2-3b2 層	動物骨？	破片	骨幹	1.39	×		
84	M Ⅱ 24 ～ 25・Ⅳ a 層トレンチ	動物骨？	破片	骨幹	0.50	×		
85	M Ⅱ 25・2-3b 層	動物骨？	極小破片		不能	361		
86	M Ⅱ 25・2-3b 層	動物骨？	破片	骨幹	1.29	×		
87	M Ⅱ 25・4-5 層	動物骨？	破片	骨幹	0.42	×		
88	M Ⅱ 7・2-3b2 層	動物骨？	破片	骨幹小片	0.72	361		
89	M Ⅱ 7・Ⅳ a 層排土	動物骨？	破片	骨端含む？	4.76	×		
90	M Ⅱ 9・3 上層	動物骨？	破片	内部破片	8.23	×		
91	M Ⅲ 11・3 層	動物骨？	破片	骨幹？	1.00	×		
92	M Ⅲ 17・2-3b 層	動物骨	破片	資料番号 B64・イノシシ	3.67	Ⅸ章	Ⅸ章	
93	M Ⅲ 21・4b 層	動物骨	破片	資料番号 B65・ニホンジカ	2.16	361	Ⅸ章	
94	M Ⅲ 21 ～ 1・Ⅳ a 層トレンチ	動物骨？	細片	骨幹	0.18	×		
95	M Ⅲ 22・2-3b 層	動物骨？	細片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
96	N Ⅰ 2・1 層	動物骨？	破片	骨端？	1.38	×		
97	N Ⅰ 6・4 層	動物骨？	破片	骨端？	1.95	×		
98	N Ⅰ 10・5 層	動物骨？	細片	骨幹	0.26	×		
99	N Ⅱ 2・2 層	動物骨？	極小破片	骨幹	0.01	×		
100	N Ⅱ 3・2-3b2 層	動物骨？	破片	骨端近く	1.66	×		
101	N Ⅱ 18・4-5 層	動物骨？	極小破片		0.01	×		
102	N Ⅱ 22・2-3b 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	7.56	×		
103	N Ⅱ 22・3 層	動物骨？	破片	骨幹	1.53	×		
104	N Ⅲ 2・1-2 層	動物骨？	破片	内部破片	2.22	×		
105	N Ⅲ 8・1b 層	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨幹	-	×		
106	N Ⅲ 8・1-2 層	動物骨？	破片の集まり（土ごと）	骨幹	-	×		
107	N Ⅲ 8・1-2 層	動物骨？	破片の集まり（土ごと）	骨幹も・明らかな焼片含む	-	×		
108	N Ⅲ 8・1-2 層	動物骨？	破片	骨幹	2.58	×		
109	N Ⅲ 8・1-2 層	動物骨？	破片	骨幹	2.37	×		
110	N Ⅲ 8・4c 中層	動物骨？	破片	複数点・骨幹含む？	1.60	×		
111	O Ⅱ 2・3 層	動物骨？	破片	骨幹・明らかな焼片	1.01	×		
112	O Ⅱ 3・3 層	動物骨	極小破片	骨幹	0.07	×		

No.	出土地点・層位	種類	残存状態	備考	重量(g)	写真図版	分析の有無	本文記載
113	P04・S Ⅱ～Ⅲ層	動物骨？	顎の骨、粉々に	顎、歯あり	12.98	×		p.217
114	P04・S Ⅱ～Ⅲ層	〃	〃	113と同じものと思われる	12.38	×		
115	P05・S Ⅱ～Ⅲ層	動物骨？	粉々（土ごと採取）	内部破片	-	×		
116	P Ⅰ 6・2層	動物骨？	破片	骨幹破片・明らかな焼片	0.39	×		
117	ST01 捨て場　トレンチ TY5	動物骨？	粉々（土ごと採取）	形ある部分も・「焼骨片」	-	361		
118	ST01 捨て場　トレンチ T8	動物骨？	粉々（土ごと採取）	骨端付近もある	-	361		
119	ST01 捨て場　トレンチ T8	動物骨？	破片	複数・骨端も・「焼骨類」	14.25	361		
120	ST01 捨て場　トレンチ T8	動物骨？	破片	複数点・焼骨	9.69	362		
121	ST01 捨て場　トレンチ T13	動物骨？	破片（土ごと採取）	骨端付近も	-	362		
122	ST01 捨て場　トレンチ TY3	動物骨？	破片	骨端も	12.12	362		
123	SX01 遺構　No. 1骨	人骨？	破片	骨幹	1.81	362		
124	SX01 遺構　No. 1骨下	人骨？	破片（土ごと採取）	複数点	-	362		
125	SX01 遺構　No. 2骨	人骨？	破片	骨幹	0.36	362		
126	SX01 遺構　No. 3骨	人骨？	破片（土ごと採取）	グズグズだが形ある部分も	-	362		
127	SX01 遺構　No. 3骨右下	人骨？	破片（土ごと採取）	グズグズだが形ある部分も	-	362		
128	SX01 遺構　No. 4	人骨？	破片（土ごと採取）	広がりのある部分	-	362		
129	SX01 遺構　No. 4に付着	人骨？	薄片（土ごと採取）	ほんの僅か	-	362		
130	SX01 遺構　下部	人骨？	破片（土ごと採取）	「火葬骨」・骨幹	-	362		
131	SX01 遺構	人骨？	粉々（土ごと採取）	「焼骨一括」	-	362		
132	SX01 遺構　No. 5骨	人骨？	破片		1.55	362		
133	SX01 遺構　No. 6骨	人骨？	破片粉々		5.51	363		
134	SX01 遺構　No. 6骨	人骨？	小片（土ごと採取）		-	363		
135	SX01 遺構　No. 7骨	人骨？	破片（土ごと採取）		-	363		
136	SX01 遺構　No. 8骨	人骨？	破片	広がりのある部分	4.99	363		
137	SX01 遺構　No. 9骨	人骨？	粉々（土ごと採取）		-	363		
138	SX01 遺構　No. 10骨	人骨？	破片	焼骨・骨幹	1.64	363		
139	SX01 遺構　No. 11骨	人骨？	粉々（土ごと採取）	複数点	-	363		
140	SX01 遺構	人骨？	粉々（土ごと採取）	「焼骨」	-	363		
141	SX01 遺構	人骨？	粉々（土ごと採取）	「焼骨」	-	363		
142	SX01　北西部捨て場　E Ⅳ・Ⅳ 1層（パイプライン用地）	人骨？	粉々（土ごと採取）		25.66	364		
143	ST01 捨て場　トレンチ T8・Ⅳ a層？	動物骨？	破片	骨端	0.33	×		
144	SK90 土坑（SN28 焼土）・1層	植物遺体（炭化種実）	破片、細片	炭化クルミ	17.67	364		
145	SK90 土坑・2層	〃（炭化種実）	欠損	1点・炭化クルミ	0.93	×		
146	SK90 土坑・2層	〃（炭化種実）	完形？の集合	資料番号 B5・種不明	6.51	364	Ⅸ章	
147	SK90 土坑・2層	〃（炭化種実）	1/2～粉々	炭化クルミ	1452.74	364～367		
148	SK90 土坑・2層	〃（炭化種実）	完形？～破片	146と同じ	0.60	368		
149	SK90 土坑・2層	〃（炭化種実）	破片	資料番号 B20・種不明	0.18	368	Ⅸ章	
150	SK90 土坑・3層（焼土）	〃（炭化種実）	1/4～粉々	炭化クルミ	12.84	368		
151	SK90 土坑・4層	〃（炭化種実）	粉々	炭化クルミ	6.43	368		
152	SD08 溝跡　覆土	〃（炭化種実）	クリ？完形、クルミ1/4	炭化クリ？、クルミの2点	1.71	368		
153	G Ⅷ 17・Ⅳ a層（ST02 捨て場）	〃（加工種実）	穿孔→完形	両側から穿孔	2.83	368		
154	G Ⅷ 21・Ⅳ a2 層（ST02 捨て場）	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	0.94	368		
155	H Ⅷ 11・Ⅳ a2 層（ST02 捨て場）	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	0.38	368		
156	H Ⅷ 11・Ⅳ a2 層（ST02 捨て場）	〃（炭化種実）	破片粉々	炭化クルミ	0.93	368		
157	H Ⅷ 2・Ⅳ a2 層（ST02 捨て場）	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	0.43	368		
158	M Ⅰ 20・1-2層	〃（炭化種実）	1/2弱・頂部欠	炭化クルミ	1.88	×		
159	M Ⅰ 20・1-2層	〃（炭化種実）	1/2、1/4・頂部欠	2点→同一個体？・炭化クルミ	3.47	×		
160	M Ⅰ 20・1-2層	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	1.28	×		
161	M Ⅰ 20・1-2層	〃（炭化種実）	1/2・頂部欠？	炭化クルミ	1.45	×		
162	M Ⅱ 7・2b層	〃（炭化種実）	1/2	資料番号 B94・種不明	0.03	×	Ⅸ章	
163	M Ⅱ 7・2-3b2 層	〃（炭化種実）	欠損	資料番号 B95・種不明	0.04	Ⅸ章	Ⅸ章	
164	M Ⅱ 16・2-3b2 層	礫	径 3㎜	資料番号 B96・種実と間違い	0.02	×	Ⅸ章	
165	M Ⅱ 17・4b層	〃（炭化種実）	1/2弱	炭化クルミ	0.96	×		
166	M Ⅱ 18・2-3b 層	〃（炭化種実？）	破片	炭化種実？	2.56	×		
167	M Ⅱ 22・2-3b 層	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	0.57	×		
168	M Ⅱ 22・2-3b2 層	〃（炭化種実）	1/2,1/2弱	2点・炭化クルミ	-	×		

No.	出土地点・層位	種類	残存状態	備考	重量(g)	写真図版	分析の有無	本文記載
169	M Ⅱ 24～4・Ⅳa層トレンチ	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	0.98	×		
170	M Ⅲ③・Ⅳa層上部	〃（炭化種実）	1/4	炭化クルミ	0.67	×		
171	N Ⅱ 14～15・Ⅳa層トレンチ	〃（炭化種実）	1/3、頂部欠	炭化クルミ	0.71	×		
172	N Ⅲ 2・1-2層	〃（炭化種実）	1/2弱、頂部欠	炭化クルミ	1.99	×		
173	N Ⅲ 3・2-3b2層	〃（炭化種実）	破片	炭化クルミ	1.37	×		
174	N Ⅲ 7・1b層	〃（炭化種実）	1/3	炭化種実（クルミ）	1.09	×		
175	ST01 捨て場　トレンチ T8	〃（炭化種実）		炭化クルミ他	10.50	368		p.217
176	SK90 土坑・2層	植物遺体	破片	炭化・不明、皮状	1.40	369		
177	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化？・出土時は網代状だった？	0.16	369		p.217
178	SK90・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化？・不明、葦の茎状	9.23	369		
179	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化？・不明、茎状	9.87	369		
180	SK90（？）土坑・2層	〃（繊維）		資料番号 B26・稈	1.64	369	Ⅸ章	p.217
181	ST01 捨て場　トレンチ T8	炭化材	破片の集まり	複数の種類	7.11	370		
182	SK90 土坑・2層	植物遺体（繊維）	破片	炭化・竹の皮状	0.53	370		
183	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化・樹皮、茎等、複数種	11.39	370		
184	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	資料番号 B9・稈	9.23	370	Ⅸ章	
185	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化・植物の茎状	0.48	370		
186	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	資料番号 B11・種不明	1.64	370	Ⅸ章	
187	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化・樹皮状	3.65	370		
188	SK90 土坑・2層	〃（繊維？）	破片の集まり	炭化・小枝？	0.22	370		
189	SK90 土坑・2層	〃（繊維）	破片の集まり	炭化・樹皮主体だが材状も	4.85	370		p.217
190	SK90 土坑・3層（焼土）	〃（繊維）	破片の集まり	炭化・185と同じ？	2.26	371		
191	M Ⅲ 10・Ⅲ層	炭化材	破片	前年度出土・参考	0.65	371		
192	F Ⅵ 19・Ⅳa層	炭化材	破片	前年度出土・参考	0.35	371		
193	ST01 捨て場　トレンチ T8	炭化材	破片の集まり	前年度炭層フローテーション・参考	4.70	371		p.217
194	H Ⅷ 11・Ⅳa2層（ST02 捨て場）	炭化物	破片	前年度出土・参考	0.01	371		
195	H Ⅷ 4（ST02 捨て場）	炭化材	破片	前年度出土・参考	0.46	371		
196	H Ⅷ 18（ST02 捨て場）	炭化材	破片	前年度出土・参考	1.15	371		
197	E Ⅳ 23・Ⅳa層（ST03 捨て場）	炭化材	破片	前年度出土・参考	0.26	371		
198	O Ⅰ 23・1層	アスファルト	塊→調査時割れて	未鑑定	228.74	371		p.217
199	SK29 土坑　覆土下部	生粘土塊	塊破片	ほとんどが土で白色粘土僅か	23.50	372		
200	SN30 焼土	生粘土塊	薄い板状破片	白色粘土・写真左側は、ただの土	43.59	372		p.217
201	N Ⅲ 2・2-3b2層	生粘土塊？	板状破片	黄色粘土・写真左側は、ただの土	35.39	372		p.217
202	SR01 埋設土器内部・2層	赤色顔料	ほとんど土		8.90	372		
203	G Ⅷ 12・Ⅳa2層（ST02 捨て場）	赤色顔料	小塊		0.10	372		
204	G Ⅷ 9・Ⅳa2層（ST02 捨て場）	赤色顔料	小塊		0.05	372		
205	N Ⅰ 17・Ⅳb層上面	〃付土器	土器に付着	比較的厚く残る・浅鉢？	-	372		p.217
206	M Ⅱ 18・2-3b2層	赤色顔料	ほとんど土	散布？	739.04	372		
207	N Ⅲ 7・4-5層	赤色顔料	ほとんど土	散布？	265.28	373		
208	M Ⅲ 22・2-3b上層、N Ⅲ 7・4-5層	〃付土器	土器に付着	厚く残る・高坏台部	0.34	373		p.217
209	H Ⅷ 11（ST02 捨て場）	赤色顔料	敲石に付着	薄い塊	0.07	373		
210	L Ⅲ②・Ⅳa層上部？	赤色顔料	土器内に土の塊として	赤鉄鉱（和賀仙人）	49.41	373		p.217
211	SR01 土器埋設遺構・1層	土壌サンプル		出土遺物なし	182.11	373		
212	SR01 土器埋設遺構・2層	土壌サンプル		出土遺物なし	122.54	373		
213	SK01 土坑	「繊維質遺物」	破片	ただの植物繊維	0.21	373		
214	SK01 土坑　南側・銭貨 No.1の下	植物繊維（茎？）	破片の集まり	「永楽通宝№1の下の繊維」	0.46	373		
215	SK01 土坑・銭貨 No.3の下	植物繊維	破片	「永楽通宝№3の下の繊維」	0.21	373		

Ⅶ　考　　察

1　縄文時代晩期末～弥生時代中期土器の型式編年的検討

①金附遺跡の土器様相

(1) 分類

金附遺跡で出土した縄文時代晩期中葉～弥生時代中期の土器を、ST01 捨て場を中心とした本遺跡の出土状況を基に、既知の土器型式編年と対照して、群別した。その結果、第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群、第Ⅳ群、第Ⅴ群の 5 群に分けられたが、本遺跡での出土量と近年の研究動向から、第Ⅲ群は、さらに 1 類、2 類、第Ⅳ群も、1 類、2 類に細分される。逆に、本遺跡では分離が難しいが、研究動向から、第Ⅰ群は、a ～ c 類、第Ⅳ群 2 類も、a、b 類に細分されるようだ。数字は、主として層位差・地点差に基づく分類で、アルファベットは、主として型式学的分類を示す。

層位的には、第Ⅰ群、第Ⅱ群、第Ⅲ群 1 類、2 類、第Ⅳ群 1 類、第Ⅳ群 2 類～第Ⅴ群の 6 つの階梯にしか分けられず、第Ⅳ群 2 類と第Ⅴ群の分離は、既知の土器型式編年との対照によるものであり、第Ⅰ群と第Ⅱ群の境に位置する第Ⅰ群 c 類と第Ⅱ群の分離も同様である。

各群の序列（上下関係＝新旧関係）が確認された地点については逐一掲げないので、各群の層位的まとまりを比較されたい。参考までに挙げると、N Ⅲ 16、17 グリッドで、第Ⅱ群→第Ⅲ群 1 類→第Ⅲ群 2 類→第Ⅳ群 1 類の序列が確認でき、L Ⅲ 17、18 グリッドで第Ⅰ群→第Ⅱ群の序列が確認でき、あまり明瞭ではないが、N Ⅱ 1、9 グリッドで第Ⅳ群 1 類→第Ⅳ群 2 類の関係が示唆される。

大雑把に言うと、Ⅰ群は、10 層、Ⅱ群は、3 層、3-4 層、4-5 層、Ⅲ群 1 類は、4 層、4b 層、4c 層、Ⅲ群 2 類は、2b 層、2-3b 層、2-3b2 層、Ⅳ群は、1 層、1-2 層、2 層、2b 層に主として見られるが、第Ⅴ章に記したように、層相が途中で変化して上下層との識別が難しい地点があり、絶対的なものではない（特に 2b 層は微妙）。特に、L グリッドは、上下の層に違いが少なく自然堤防の崩れた再堆積層を基本としているため、N Ⅰ～O グリッドは、自然堤防上で表土が薄く包含層が薄いため、上下の混入が多い。遺物包含層が薄い地点では上下混じり合うことが多いので、一つの層を全体に敷衍せずに、むしろ地点ごとの層序の重なりを見ていただいた方が良いと思われる。

(2) 各群の内容

群ごとに内容を述べていくが、御多分に漏れず本遺跡の出土土器も破片が主体で、他遺跡の残りの良い類例との比較検討を経ないと型式内容は十分に掴みきれない。今回類例を検討する十分な余裕がなかったので、型式内容については、概要と特に気の付いた点にとどまっていることをお断りしておく。なお、第Ⅱ群～第Ⅳ群については集成図を作成したが（第 533 図～第 536 図）、第Ⅵ章では原則として出土地点・層別に並べたので、ここでは層位的なまとまりより残りの良い土器を中心に掲げた。

ST01 捨て場では、第Ⅲ、Ⅳ群が主体を占め、次いで第Ⅱ群で、第Ⅰ群は少なく、第Ⅴ群はほとんどない（第Ⅵ章参照）。最近の研究動向を見ると（品川　2002、2005a、b、石川　2005b、c）、第Ⅲ、Ⅳ群土器はさらに分かれる可能性が高く、本遺跡でまとまった量が出土したことから、その可否についても検討を試みた。ST02、03 捨て場は、ST01 捨て場と比べて出土量はずっと少ないが、ST03 捨て場の場合は調査面積によるところが大きく、ST01 捨て場と一連のものである可能性が高い。ST02 捨て場は、概ね第Ⅱ群～第Ⅲ群 1 類を

主体とし、2層に細分されているが、隣接する時期のせいか層位差にあまり反映されていない。ST03捨て場は、ST01捨て場と同じ後背湿地に形成されているためか、ST02捨て場より新しい第Ⅳ群1類を主体とする。

・第Ⅰ群土器

〔概要・相当型式〕ST01捨て場では最下層に出土した土器のうち、型式学的に第Ⅱ群より古いと判断されるものを一括した。量的に少なく層位的には分けにくいが、周知の型式編年（山内　1930、1971、鈴木　1987ほか）を参照すれば、三つの異なる型式を含むことは確実である。そのうち、大洞C2式に相当するものをa類、大洞A1式に相当するものをb類、大洞A2式に相当するものをc類とする。

〔出土グリッド・層〕a類は、LⅢ20グリッド（以下、「グリッド」省略）・10層でまとまりが確認される。これ以外にはほとんど出土していないが、第186図1255もa類に含められ、これも10層からの出土である。

b類は、LⅢ17と18・10層でまとまった資料が見られる。これ以外にはほとんど出土していないが、第171図1111・1112もb類に含められ、これらも10層から出土している。

a類とb類の両方とも10層からまとまりが確認されていることからわかるように、10層は、縄文時代以来の自然堤防（の砂）が崩れてできた再堆積層で、他のST01捨て場のほとんどの層のような廃棄層ではない。供給元も、他の層のほとんどが西側の新しい自然堤防上から供給されたと考えられるのに対し、10層は明らかに東側の縄文時代以来の自然堤防上から供給されている。したがって、この層から主として出土する第Ⅰ群a、b類を、c類以降の土器群と全く同様に扱うわけにはいかない。

c類には、層位的なまとまりは認められない。NⅠ10・5層が、これに相当する可能性もあるが、基本的には次の第Ⅱ群に混在して出土する（第181図1195など）。まとまりは認められないが、明らかに新しい自然堤防上からの廃棄層に含まれているということで、a、b類とは一線を画す。

〔内容〕a類LⅢ20・10層出土土器は、大洞C2式の中でも、さらに細かい時期のまとまりを示しており、高橋龍三郎氏の第Ⅲ段階に相当する（高橋　1993）。b類は大洞A1式なので、この間（第Ⅳ～Ⅴ段階）の時期の土器が欠落している可能性が高い。

a類は、磨消縄文の磨消部が合体して水平方向に連続し工字文に向かい始める時期で（第186図1261）、沈線文も棘を出し工字文への胎動が窺われる（第186図1261）。b類は、いわゆる工字文の時期で（第184図1230）、粗製深鉢は頸部に連続して施されてきた水平沈線が整理される（第184図1228）。c類は、本遺跡ではまとまりが認められず、他遺跡の成果を型式学的に敷衍しただけなので、特に述べることはないが、文様帯が狭まり、匹字文に代表される時期で、同じ文様の繰り返しだけでなく他の文様が間に入ることがある（第181図1195・第186図1252・第277図2268・第381図3514）（山内ほか　1971、鈴木　1987、小林　1997、高瀬　2000ほか）。

・第Ⅱ群土器（第533図）

〔概要・相当型式〕大洞A′式の古段階に相当する。山内清男氏の設定した大洞A′式（山内　1930）が新古に分かれることは、宮城県山王囲遺跡での出土状況（須藤　1987）などから示唆され（小林　1997ほか）、近年では「大洞A′式」と言えば、いつのまにか古段階の土器を指すことになっているようだ（須藤　1987、高瀬　2000、品川　2002、石川　2003など）。文様帯がまだ狭く、この時期を代表する変形工字文は立体的で、変形工字文を描く斜線は直線的で瘤はまだ小さい段階である。高坏の台部はまだ小さい。

〔出土グリッド・層〕LⅡ25・3上層、LⅢ16・3層（中層含む）、LⅢ18・3-4層、MⅡ4・3層（上層含む）、MⅢ2と6の3-4層、NⅡ14と15と18と20と24の4-5層、NⅡ16・3層、NⅢ1と3と6～8と11と16の4-5層、OⅡ3・3層～4-5層などにまとまりが見られる。

〔内容〕器種組成の中に、四脚付浅鉢がこの時期まで明確に位置づけられているが、これ以後消滅するようだ。「三角形モチーフを主体とした定型的な変形工字文」（小林　1997:p.85）が出現するが、大洞A2式の匹字文に代表される彫り去り技法が残り、交叉部を彫り去って余った粘土を左右に寄せ集めて瘤を形成するという施文技法が採られる。このため、別途粘土粒を用意する第Ⅲ群土器に比べて貧弱な瘤となり、土器によっては不明瞭で実測図に描かれない場合もある。前段階に盛行した匹字文は、この段階まで残る。

・第Ⅲ群土器

第Ⅱ群と第Ⅳ群の間は、悩ましい時期である。この間に、大洞A′式の新しい部分と青木畑式が入るのは確実であるが、それがどのような関係なのか今一つはっきりしないからである。青木畑式は型式学的に導出され、前後の型式との関係が同時に層位的に確かめられていないのである。山王囲遺跡では、縄文時代晩期末～弥生時代前期の資料が細分が可能なほど豊富に層位的に出土しているのに、青木畑式だけ欠けているようだ（不自然?）。該期の地点別一括資料が得られた山形県北柳1遺跡でも、大洞A′式古段階と青木畑式段階のブロックは認められたが、大洞A′式新段階のブロックは欠けている（小林　1997）。須藤隆氏によれば、岩手県中神遺跡の北斜面包含層A東区では両者が確認され、14～18層から山王囲Ⅳ上層出土土器、8～13層から青木畑式が出土しているとのことだが（須藤　1997:p.64）、第13図の図示には、肝心の9～18層分が省略されており、追認できない。

青木畑式を設定した佐藤信行氏（佐藤　1980、1981）も、須藤氏（須藤　1983）も、青木畑式の型式学的特徴を述べており、大洞A′式との違いについてもふれている。佐藤氏は、その違いを、甕口唇部の刻みが青木畑式にはなくなること、高坏台部の波状文、蓋形土器、甕b種が青木畑式から出現し、高坏台部が大形化することとして挙げている（佐藤　1981: 表1）。しかし、これでは、代表的な浅鉢や高坏の胴部文様（特に変形工字文）の違いについては全くわからず、甕b種に至っては、南部しか出土しないようである。須藤氏の指摘も同様だが、他に高坏台部の「透し孔」を挙げている（須藤　1983:p.25）いずれにしても、一部の器種や一部の部位の特徴しかわからない。

金附遺跡では、この第Ⅲ群土器が最も多く出土しており、違いを掴むのに打ってつけなはずである。資料を見ると、確かに上記のような特徴は窺え、瘤の付く変形工字文と付かない流水文（小林　1997:p.77）では、流水文の割合が徐々に増えていく傾向は看取される。しかし、変形工字文の施された土器片だけを見せられて、これがどちらに帰属するか問われても答えられない。

このような微妙な違いで土器型式を分けるのは現実的ではないだろう。先に、山内清男氏が、（第Ⅲ群土器の）古い方も含めて大洞A′式としたので（山内　1930）、後進の我々がそれに従うのは当然ではあるが、混乱を招いてまで古いものに縛られるのは本末転倒である。ここは、現実にそうなりつつあるように（第Ⅱ群で前述）、大洞A′式は、古い部分だけに限定して、新しい部分は「青木畑式」と一括し、両者を併せて青木畑式と呼び、その中で新古を指摘できる場合のみ、古段階、新段階とするのが現実的なやり方であろう。新古がいろいろ出てきてわかりづらいが、整理すると、大洞A′式新＋佐藤、須藤氏の「青木畑式」＝青木畑式ということで、青木畑式の古段階が従来の大洞A′式新段階、青木畑式の新段階が従来の「青木畑式」である。

同じ大洞A′式の後出型式でも、青森県を中心に分布する砂沢式は、もっとわかりやすいようである（品川　2002）。文様帯の広がり方がより顕著なこと、変形工字文自体が変化し（複線化など）、次型式につながる「連携入組文Rsr系列」（品川　2002）が目立ち始め、胴部の文様帯より下の地文が消失し、逆に文様内に刺突を充填するようになるなど、変化がより見えやすいためである。品川欣也氏は、金附遺跡の第Ⅲ群に相

当する時期の土器（品川氏はこの時期全てを砂沢式と呼称）を三段階に分け、これは青森県砂沢遺跡での遺物集中区による地点差によって裏づけられている（品川　2002、品川　2005a）。品川（2005a）の第1図28に図示した高坏土器は、狭義の「青木畑式」にも類似するものが認められ（本遺跡の933、2166など）、狭義の「青木畑式」は品川氏の砂沢式第3期に併行する可能性が高い。すると、それ以前の段階は、砂沢式に倣えば二段階に分けられることになるが、前述のように変化が漸移的でとても見極められない。狭義の「青木畑式」さえ見極められないものがあるのだから。そこで、狭義の「青木畑式」を新段階と捉え、それ以前を古段階と一括したい。ここでは、後者を第Ⅲ群1類、前者を第Ⅲ群2類とする。再編された青木畑式は、品川氏の示す砂沢式とほぼ完全に併行すると考えて良さそうである。このことは、後述のように、砂沢式を基準として東北地方の弥生時代を捉えようとする研究動向にとって極めて都合が良い（石川　2005d:p.1）。

・第Ⅲ群1類土器（第534図）

〔概要・相当型式〕大洞A′式の新しい部分に相当し、広義の青木畑式の古段階に相当する（前述）。第Ⅱ群土器との違いは、「変形工字文の多段化や、斜線の平行沈線構成・弧線化」「口縁部突起の発達、台付の大型化」（小林　1997:p.85）として比較的明瞭に捉えられるが、この特徴は次の2類にも当てはまるため、次の段階との違いははっきりしない。この時期の多数の遺物包含層が認められた本遺跡についても同様である。大洞A′式古（第Ⅱ群）→新（第Ⅲ群1類）への変化がより顕著に進展したのが2類なのであり、流水文についても、第Ⅲ群2類が主体だとは言え、本段階にも一定割合見られるので、明瞭な区分にはならない。

〔出土グリッド・層〕NⅡ3・4b層に特に良好なまとまりが見られる。その他、MⅠ15・2-3b2層、MⅠ20と25の4b層、MⅡ17と20の3層、MⅡ21と22と23の4b層、MⅢ21・2-3b2層、NⅡ4と5と9の4b層、NⅡ15・4層、NⅢ1・4b層、NⅢ2・4c層、NⅢ3・4層、NⅢ6・4b、4c層、NⅢ7・4層、NⅢ12・4c層、NⅢ16・4層などにまとまりが見られる。

〔内容〕第Ⅱ群に比較的頻繁に認められた四脚付浅鉢は見られなくなるが、蓋が存在するのかはっきりしない（第325図2799が可能性あり）。主要な文様は、交叉部に瘤を持つ変形工字文と瘤を持たない流水文で、前者の割合がかなり多い。前者は、第Ⅱ群の変形工字文と異なり、前述のような変化が認められ、さらに交叉部を抉りそれを左右に盛り上げることで瘤を形成していたのが、別途粘土粒を用意するようになり、これに伴って瘤は大形化する。浅鉢を中心とした胴部の文様帯の下には二本沈線が出現し、やがて文様から遊離し独立色を強めていく（Ⅲ文様帯?）。匹字文は消滅するようである。地域的な特徴なのか、突出部に刻目を施す土器が見られる（第371図3381）。

・第Ⅲ群2類土器（第535図）

〔概要・相当型式〕狭義の「青木畑式」、広義の青木畑式新段階に相当する（前述）。台部の発達した高坏を特徴とし、台部には3本沈線による波状文がよく見られるが、透かしが入る場合もある（第140図746）。文様帯がかなり広がった浅鉢も認められる。

〔出土グリッド・層〕LⅡ24・2b層、LⅢ16・2b層、MⅡ18・2b層、MⅡ17～20と22の2-3b～2-3b2層、MⅡ23・2-3b層、MⅡ24・2b、2-3b、2-3b2層、MⅡ25・2-3b層、NⅡ5・2-3b2層、NⅢ6と7の2-3b2層などにまとまりが見られる。MⅢ1と2・2b層も第Ⅲ群の範疇で捉えられるか。

〔内容〕蓋が明確に器種組成の中に位置づけられる。文様は、流水文が主体だが瘤を持つ変形工字文も残るようだ。胴部および台部とも、2～3本の水平沈線のみの文様も多い。この段階にも突出部に刻目を施す土器が見られる（第246図1909）。壷頸部の隆帯上は、断続した沈線あるいは縦の刻目が施されることが多い。

第208図1524の砂沢式の深鉢は、本段階の土器と共伴しており、併行関係が窺われる。

・第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器は、山王Ⅲ層式に相当する（須藤　1983）。精製土器は、胎土に金雲母を顕著に含み、また色調もこげ茶色を呈するなど、それまでの段階とは見た目でも顕著に異なる。壷の口縁部の装飾として、二本沈線が顕著に認められる。

近年、石川日出志氏ほかが、研究史を遡って名称の変更を求め、最近の資料に基づいて三細分を提唱している（石川　2005b、2005c、品川　2005b）。氏の示した三段階の変遷は、NⅡ1グリッドで1層→新、1-2層→中、2層→古段階と朧気ながら窺われるが、金附遺跡では、中段階以降の資料が少なく、はっきりしない。しかし、NⅡ9グリッドでも、1-2層が古、1層が新段階と、細分の妥当性が示唆され、古段階の資料は金附遺跡でも比較的まとまっており、層位的なまとまりも認められる（後述）。そこで、石川氏の「古段階」を古段階とし、「中段階」「新段階」を新段階とまとめ、それぞれを第Ⅳ群1類、2類と称したい。2類についても、層位的なまとまりがある程度認められるが、1類と2類が上下に重なっている地点は少なく、むしろ地点差として認められるようである。それも、「中段階」「新段階」が混ざっているのではなく、「中段階」は「中段階」、「新段階」は「新段階」と分けてまとまる場合が多い。したがって、1、2類（古、新段階）ではなく、1～3類（古、中、新段階）に分類しても良いが、資料が少なく、また破片が主体であることに用心して、1、2類の二細分とし、2類をa、b類に細々分することにした。

・第Ⅳ群1類土器（第536図）

〔概要・相当型式〕石川日出志氏ほかの谷起島式古段階に相当する（石川　2005b、2005c、品川　2005b）。「変形工字文頂部の沈線反転部が角張る」（石川　2005c:p.8）須藤隆氏のC1型（須藤　1983）が主体を占め、磨消縄文はまだない。

〔出土グリッド・層〕MⅢ18と21と22と23の1-2層に良好なまとまりが見られる。その他、LⅢ21・2b層、MⅡ8・1層、MⅡ9・2b層、MⅡ14・1層、MⅡ19・1～2層、MⅡ20・1～1-2層、MⅡ22・1-2～2層、MⅡ23・2層、MⅡ24・1、1-2層、MⅡ25・1-2層、MⅢ11・1、1-2、2b層、MⅢ12・2b層、NⅡ5・1層、NⅢ2と6と7と8の1-2層、NⅢ3・1b、1-2層、NⅢ11の1～1-2層、NⅢ12・1-2層などにまとまりが見られる。

〔内容〕蓋が器種組成の中で大きな割合を占めてくる。Ⅲ群2類にも顕著に見られた、2～3本の上下の区画線だけで肝心の胴部文様がないような高坏も、まだ存在する（第217図1605、第289図2364）。第238図1809のような、蓋を想定した紐孔らしきものが見られる壷も存在する。二山突起が盛行し、それを省略したような水平口縁を一箇所窪ませただけのような装飾も見られる（第217図1605）。

・第Ⅳ群2類土器（第536図）

〔概要・相当型式〕磨消縄文が復活する段階であり、壷の胴部にも磨消縄文が見られるようになる。a類は、石川日出志氏ほかの谷起島式中段階に相当し、b類は、谷起島式新段階に相当する（石川　2005b、2005c、品川　2005b）。a類は、「変形工字文を描く沈線の頂点が大きなπ字形をなし、斜辺や底辺に沈線が沿う須藤氏〔須藤1983〕のC2型と、C2型に縄文充填する類、変形工字文が一本描きの扁平8字形となるC3型に縄文が充填される類」（石川　2005c:p.8）などからなる。変形山字文の祖型には、副線が伴う（品川　2005b:p.41）。b類は、沈線のみの類が稀で、ほとんどが磨消縄文の段階である。

〔出土グリッド・層〕a類は、MⅠ20の1、1-2、2層（2b層も?）、MⅠ25・2層、MⅡ17・1-2層、NⅠ9・1層、NⅠ15・2層などにまとまりが見られる。b類は、MⅡ21・1-2層、NⅡ6・1-2層（b類も含むか）、NⅡ9・1層、NⅡ11・1層、NⅡ16と17と21の1層などにまとまりが見られる。OⅠ～Ⅱグリッドの1

層に比較的多く出土しているが、表土と包含層自体が浅かったためカクランが多く良好な出土状態ではない。〔内容〕資料に乏しく、はっきりしないが、a類は、1類に縄文を充填したような段階、b類は、縄文部が独立色を強め、細くなる段階と言えようか。

第336図2934は、胴部には谷起島式の文様、台部には仙台平野に分布する原式（石川　2005a）の文様が見られ、両者の併行関係を裏付ける良い例であろう。第198図1388、第202図1454、第337図2951、第338図2963第395図3675などには、磨消縄文の区画沈線（文様描線）に沿って刺突列がめぐる。これは、石川氏によれば、次の川岸場古段階に顕著なようだが（石川　2005b、c）、その“走り"と考えて良いものであろうか。しかし、氏の提示した岩手県湯舟沢遺跡の中段階の例（Ⅶ-1a住居）に混じって似たようなものが見られるが（石川　2005b: 第4図40）、氏は、谷起島式土器に後続する土器に位置づけている（石川　2005b: 註2、2005c: 第2図14）。ただし、1454の高坏台部に見られる磨消縄文の意匠自体は、谷起島式に非常に良く似ており、谷起島式の段階にも存在する可能性を捨てきれないように思われるが。

・第Ⅴ群土器

既知の型式編年と対照して型式学的に第Ⅳ群以降と判断されるもので、実際には第Ⅳ群と一緒に出土することが多い。全て破片で、出土点数は少ない。第131図619、第207図1506?、1507、第290図2373、2374、第343図3022、第388図3613?などが相当する。全て桝形囲式と判断される。

この時期の土器は、近年、石川日出志氏が、より地域性に配慮しながら二細分し、前半を高田B式、後半を中在家南式と称した（石川　2003、2005a）。報告者は、仙台平野の土器をほとんど見たことがないので確かではないが、全て高田B式に相当するようだ。

第Ⅴ群に相当する在地の土器は、存在しないのであろうか。該期のこの地域の土器型式は、最近まではっきりしなかったが（石川　2005b:p.23）、石川氏により川岸場式が設定され、三段階の変遷が辿られている（石川　2005b、c）。本遺跡では、明確に川岸場式と言える土器を見つけることができないが、基準となる石川氏の提示した資料がそれほど多くなく、本遺跡もこの時期の土器については破片しか出土していないので、過って谷起島式に含めている可能性がある。第Ⅳ群2b類の中で、刺突文がめぐる類が、これに相当するのであろうか。確かに、第395図3675は、川岸場式に入れても良さそうだ。しかし、前述のように、第202図1454は谷起島式の可能性も捨てきれない。第337図2951、第338図2963を含むNⅡ11～12グリッドの1～2層には新しそうな特徴を持つ土器が多く（特に第338図2953）、これらは川岸場式に含められるのかも知れない。しかし、第338図2953の口縁部は大波状で波頂部に刻目が認められ、谷起島式に存在してもおかしくない。第343図3022の高田B式が出土したNⅡ16グリッド1層出土土器も、新しい特徴を持つものが多く、川岸場式に含められるかも知れない。歯切れは悪いが、川岸場式が存在すると考えた方が良さそうである。

（3）異系統土器

第Ⅵ章に記したように、金附遺跡からは比較的多くの異系統土器が出土している。その多くは、平成17年の岩手考古学会の際に識者から指摘されたものである。地域別に記す。まず北から。弥生時代前期の1524、2645?は、東北地方北部の粗製系。特に1524は、砂沢式の粗製深鉢の搬入品か。弥生時代初頭の3094は、東北地方北部系の深鉢？　2864は、砂沢系か。3645の突起も、砂沢式の影響か。2975も、砂沢式の搬入品だそうである。

次に南。大洞A2式の3514は、阿武隈川流域（仙台市赤生津遺跡より南）からの搬入品だそうである。大洞A′式の2318は、仙台湾周辺からの搬入品か。谷起島式新段階と共伴する2822、2823も、仙台湾からの搬入品か（原式?）。2056、2658、3619は、鱸沼式（搬入品？あるいはそのもの）らしい。619、1506?、1507、

2373、2374、3022、3613?は、高田B式らしい。2934は、胴部は谷起島式、台部は原式の文様の“キメラ"である。3623は、胴部上半が原式、下半が谷起島式の“キメラ"か。3221は、福島県辺りからの搬入品か。3613は、内面ハケメ整形で明らかに“弥生"系の甕のようである。

最後に、その他の地域。1317は、大船渡市下船渡貝塚の土器によく似ているようだ。2040は、秋田県横長根遺跡の土器に似るが、そのものではない。2427は、山形県小田島城跡などの土器に似るが、交点の処理の仕方が異なるようだ。

大洞A2式、砂沢式、鱸沼式には、変形していない「そのもの」の土器が存在するようだ。特に阿武隈川流域との結びつきは継続的で、それはむしろ地理的に近い松島湾と比べて顕著である。北は、砂沢式期だけ出土しているようだ。そして、石川日出志氏が北上川流域ほかの特徴として指摘するように（石川 2003:p.363、2005:p.2）、類遠賀川系土器は全く認められなかった。搬入土器の量は、在地の土器の出土量にほぼ比例しているようだが、第Ⅴ群期は、搬入土器の割合が高いようである。ただし、調査は遺跡の一部にしか及んでいないので、調査していない箇所に第Ⅴ群期の在地の土器が多く存在している可能性もあるが。

②該期の型式編年をめぐる諸問題

(1) 編年研究と呼称

本書では、これまで（特に第Ⅵ章）、第Ⅳ群に相当する型式名を「山王Ⅲ層式」と呼んできた。これは、報告書という性格上周知のものを使うべきとの判断によるものだが、当該型式については、近年、石川日出志氏ほかが、学史を紐解き、「谷起島式」の“再審請求"をしている（石川　2005b、品川　2005bほか）。実にもっともと思われるので、報告者も以後「谷起島式」の名称を使うことにしたい。

岩手県では、これまで該期については須藤隆氏の編年が主として使われてきた（須藤　1983、1987ほか）。氏の研究は、主として宮城県山王囲遺跡の出土状況に基づくものである。しかし、氏は、慎重なあまり、山王囲遺跡から離れようとせず、型式学的に踏み込んだ検討（あるいは一般化）を避けるため、そこから導かれた型式が前後の型式と型式学的にどう違うのか不明な点が残る。例えば、山王囲遺跡のⅣa、k、Ⅳ1、m出土土器（須藤　1987: 第5・8図）には異質なものを含んでおり混入が推測されるが、氏は、「この中で○と○は混入である」という指摘はしない。出土状況に型式学的に踏み込み、そこから型式学的特徴を抽出するという作業を避けるからだ。そして、そのまま「山王Ⅳa、k層出土土器群」のように扱い話を進めてしまうので、読者は、山王囲遺跡から一歩も外へ出ることはできない。他の遺跡の土器に応用して判断することはできないのである。ある遺跡でポロリと出た一片の土器を何式と判断したら良いか悩む埋文関係者には、どうしても不満が残る。この点、近年当該土器の研究を積極的に推し進めている石川氏とその高弟は、型式学的にもかなり踏み込んだ検討をしているので、今後大いに期待される。

慎重な型式操作に対して明瞭に示されているのが、須藤氏の併行型式の判断である。これについては、石川氏に「各地域での序列は妥当であろうが、宮城県内でも仙台平野の原式と県北の山王Ⅲ層式に編年的ズレがあるし、さらには東北北部や西日本との編年対比にも問題がある」と批判されている（石川　2005a:p.9）。東北北部とのズレについては、本遺跡でも、砂沢式は青木畑式と共伴し、氏の指摘（須藤　1987: 第1表）とは異なることがわかった。土器型式が時間軸の目盛りなら、少なくとも日本全体で統一すべきであり、須藤氏に従って前期と判断してきた山王Ⅲ層式も、西日本との併行関係に配慮した、石川氏の中期初頭との判断に従うべきであろう（石川　2005aほか）。弥生時代の始まりも、「砂沢式併行の土器群をもって弥生前期と理解する」（石川　2005d:p.1）という考えに従って、青木畑式（第Ⅲ群）からとする。

(2) 細分と併行型式

既に前項で示しているが、金附遺跡の土器の出土状況からは、第Ⅰ群c類→第Ⅱ群→第Ⅲ群1類→第Ⅲ群2類→第Ⅳ群1類→第Ⅳ群2類→第Ⅴ群に分けられ、それぞれ、大洞A2式→大洞A′式（古のみ）→大洞A′式（新）＝青木畑式古段階→青木畑式新段階＝従来の「青木畑式」→谷起島式古段階→谷起島式新段階→川岸場式（古段階?）、高田B式に相当する。谷起島式については、本遺跡では出土量が少なくて細分を保留したが、石川氏ほかが指摘するように、三細分の可能性は十分ある（前述）。第Ⅰ群、第Ⅴ群も、出土量が少なくて検討に値しない。

逆に、出土量は十分あるのに不明な点が多いのが、第Ⅲ群（青木畑式）である。石川氏は、該期の岩手県域の土器について、「大洞A′式や谷起島式との識別に難渋する資料が該当するようである。少なくとも私は苦慮のさなかであり、北上市金附遺跡で纏まりがつかめることを期待する」と述べているが（石川 2005d:pp.1～2）、あまり期待に応えられないかも知れない。確かに、出土量は多く層位的まとまりも認められるので、他遺跡との検討を経て型式学的検討を推し進めれば、理解が進むであろう。しかし、元々大洞A′式からの変化に乏しいようで、併行する砂沢式が比較的明瞭な形で三細分される（品川 2002、2005a）のに対し、二細分がやっとである（前述）。それも、従来の大洞A′式の新しい部分と従来の青木畑式に相当するということで、型式区分は以前のままである。二細分でさえ、どちらに含めたら良いか悩む資料が存在する。今後の識者の検討に期待したい。

併行関係について。まず量的に恵まれた青木畑式と砂沢式の関係。第208図1524の砂沢式の深鉢は、青木畑式の古段階に共伴する可能性が高い。搬入品と指摘された第339図2975も、青木畑式古段階に共伴するようだ。前述のように、品川欣也氏が砂沢式第3期とした高坏土器は（品川 2005a: 第1図28）、青木畑式新段階に類似するものが認められ、以上から、再編した青木畑式は、品川氏の砂沢式に完全に併行する可能性が高い。

搬入土器およびキメラ土器から、谷起島式新段階が原式新段階に併行する可能性が高いことは、前述した。鱸沼式は、本遺跡の出土状況からは、どれに伴うのか判断できない。

③土器型式編年からみた金附遺跡

石川日出志氏の指摘に従えば（石川 2005d:p.1）、砂沢式併行の土器群から弥生土器ということになるので、本遺跡では第Ⅲ群からということになる。四脚付土器の消滅、蓋の出現（?）がここにあり、確かに一つの画期であろうが、変形工字文に代表されるように、むしろ系統性の強さが指摘できる。本遺跡の出土量の傾向も、第Ⅰ群c類から、第Ⅱ群を経て第Ⅲ群にかけて目に見えて増え、第Ⅳ群で減少するという連続性が認められる。これは、土器の系統性の強さをほぼ反映しているように思えるし（目に見えて減少する第Ⅳ群2類から磨消縄文土器）、搬入土器も、この間継続的に存在する（搬入土器は第Ⅴ群まで顕著）。金附遺跡の土器は、縄文/弥生の時代の画期には左右されておらず、第Ⅵ章に見たように、石器生産についても土器と同様である。

搬入土器が比較的顕著に継続的に認められるというのは、何を意味するのだろうか。本遺跡は、石器製作跡なので、その対価（あるいは対価の入れ物）と考えるべきだろうか。中でも、阿武隈川流域との結びつきが強いことが窺われるが、交易相手と見るべきであろうか。

本遺跡では明らかな移入品として他にアスファルト塊がある（第4表198）。OⅠ23グリッド・1層から出土したものである。掲載土器がなく、また自然堤防上で表土が浅いため混入土器が多く不確かだが、層から

言えば谷起島式期である。本遺跡のこの時期には、第258図2040の秋田県横長根遺跡（若美町教育委員会1984）付近の土器に似ると指摘された破片がある。そのものではないらしいが、この時期この地域と何らかの交流があったことは確実である。搬入あるいは影響を受けた土器が存在する時期・地域については、同様に考えて良いのではないか。

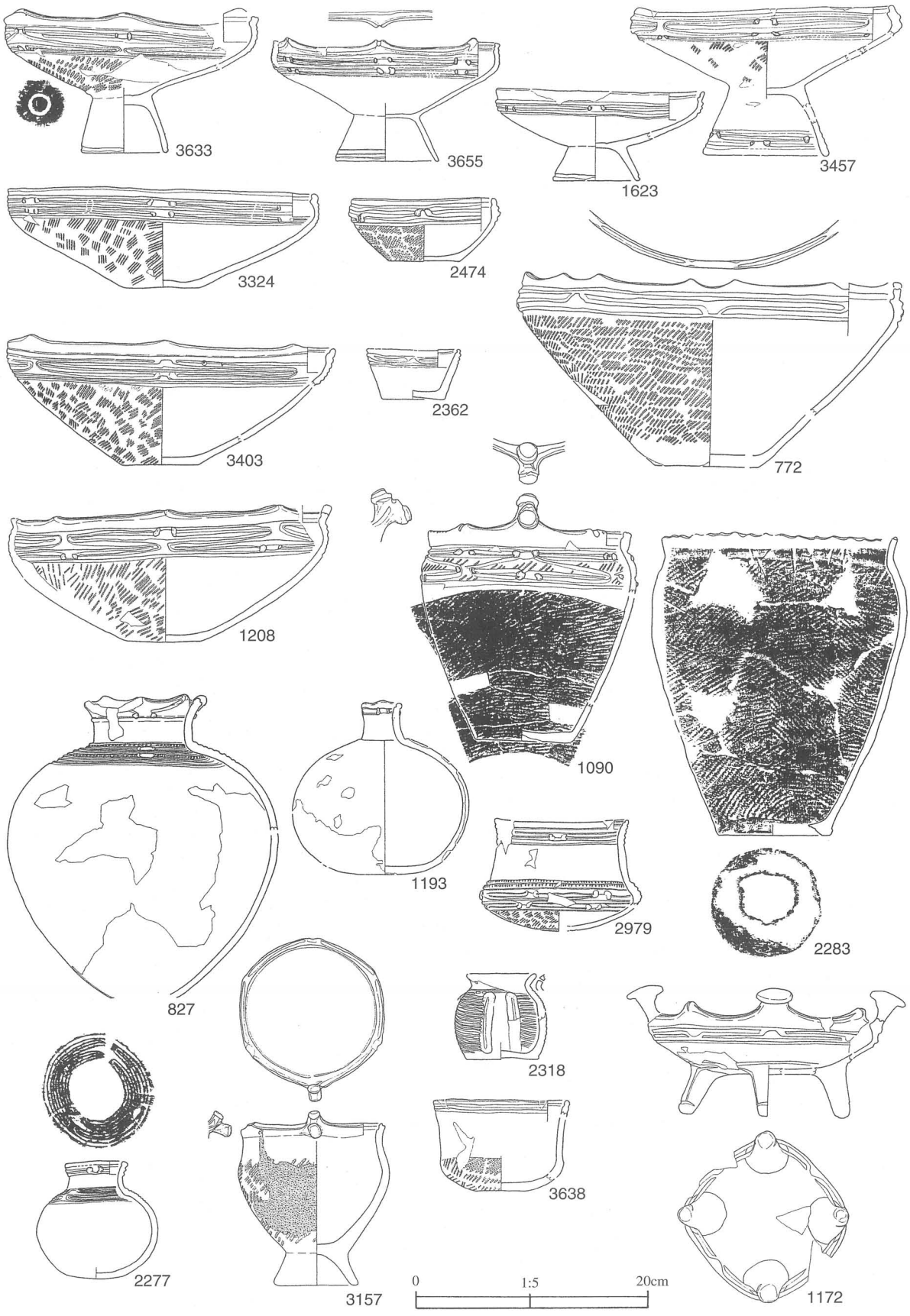
参考文献

石川日出志　2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観第1巻　弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館
2005a「仙台平野における弥生中期土器編年の再検討」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年　平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書』明治大学文学部考古学研究室
2005b「北上川流域の谷起島式とその後続型式」同上
2005c「弥生中期谷起島式と後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第17号　岩手考古学会
2005d「岩手の弥生文化研究の諸問題」『2005年岩手考古学会第34回研究大会　岩手県における弥生前期から中期の諸問題』岩手考古学会
小田野哲憲　1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号
小林圭一　1997「Ⅴ　調査の成果」『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
佐藤信行　1980「東北地方南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化ー弥生式土器への移行過程の認識ー（上）」『考古風土記』第5号　特集・亀ヶ岡文化　（青森県鈴木克彦氏）
佐藤信行　1981「東北地方南部における縄文晩期終末とその直後の土器文化ー弥生式土器への移行過程の認識ー（下）」『考古風土記』第6号　特集・亀ヶ岡文化Ⅱ　（青森県鈴木克彦氏）
品川欣也　2002「砂沢式土器の型式学」『2002年度駿台史学会大会研究発表要旨』駿台史学会
2005a「砂沢式土器の細分と五所式土器の位置づけ」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年　平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書』明治大学文学部考古学研究室
2005b「谷起島式土器の再評価」『2005年岩手考古学会第34回研究大会　岩手県における弥生前期から中期の諸問題』岩手考古学会
鈴木正博　1985「『荒海式』生成論序説」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
1987「続　大洞A2式考」『古代』第84号　早稲田大学考古学会
須藤　隆　1983「東北地方の初期弥生土器-山王Ⅲ層式-」『考古学雑誌』第68巻第3号　日本考古学会
1987「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』第73巻第1号　日本考古学会
1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89輯　東北史学会
高瀬克範　2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集
高橋龍三郎　1993「大洞C2式土器細分の諸課題」『先史考古学研究』第4号　阿佐ヶ谷先史学研究会
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号
山内清男ほか　1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号　北奥古代文化研究会
若美町教育委員会　1984『横長根A遺跡』

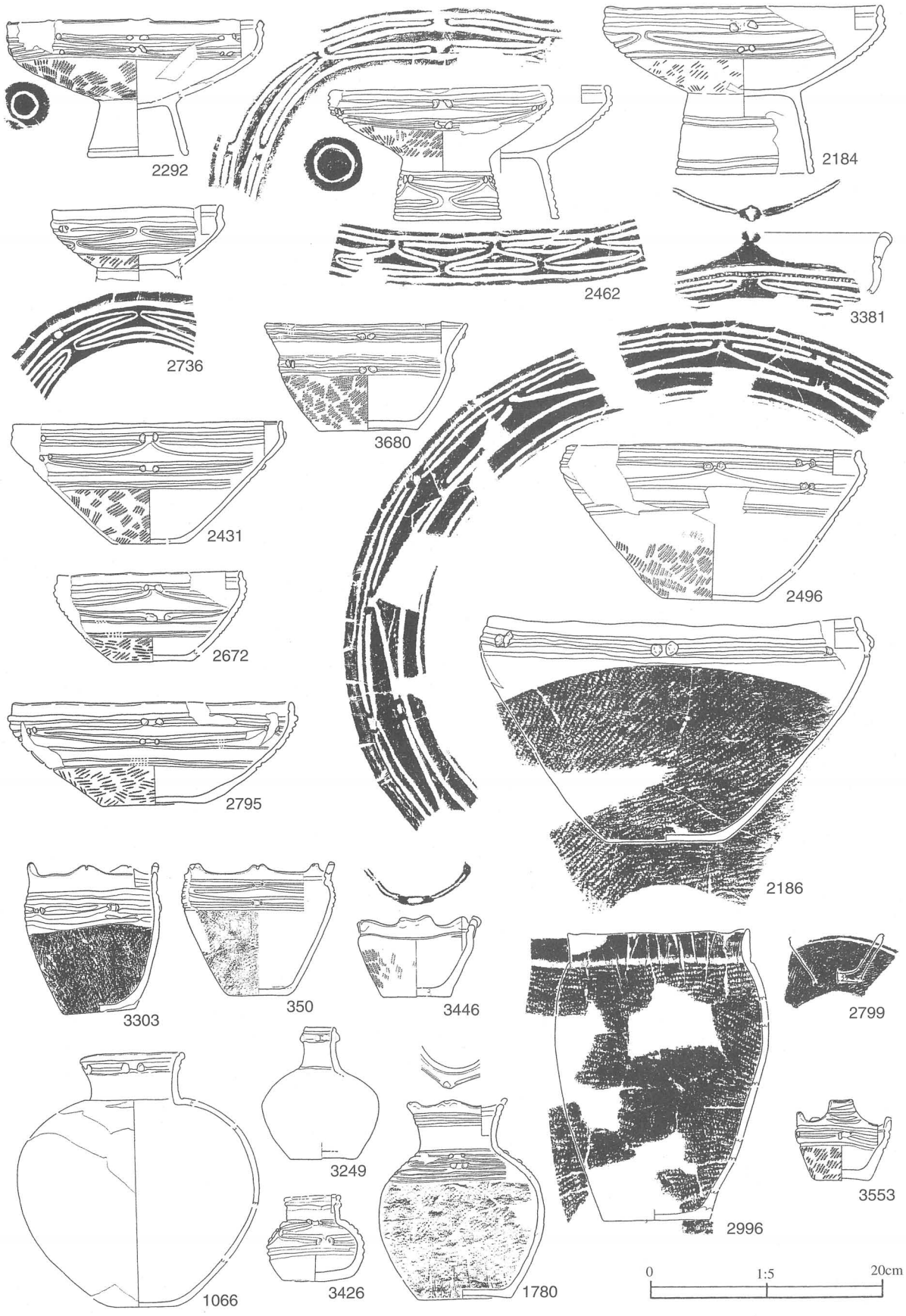
追記

岩手県における弥生土器研究の第一人者、岩手県教育委員会文化財保護監故小田野哲憲氏が、調査中に本遺跡を訪れたことがあった。その時はST01捨て場の覆土をやっと剥ぎ終わった段階で、残念ながら土器について御教示を受けることはできなかった。

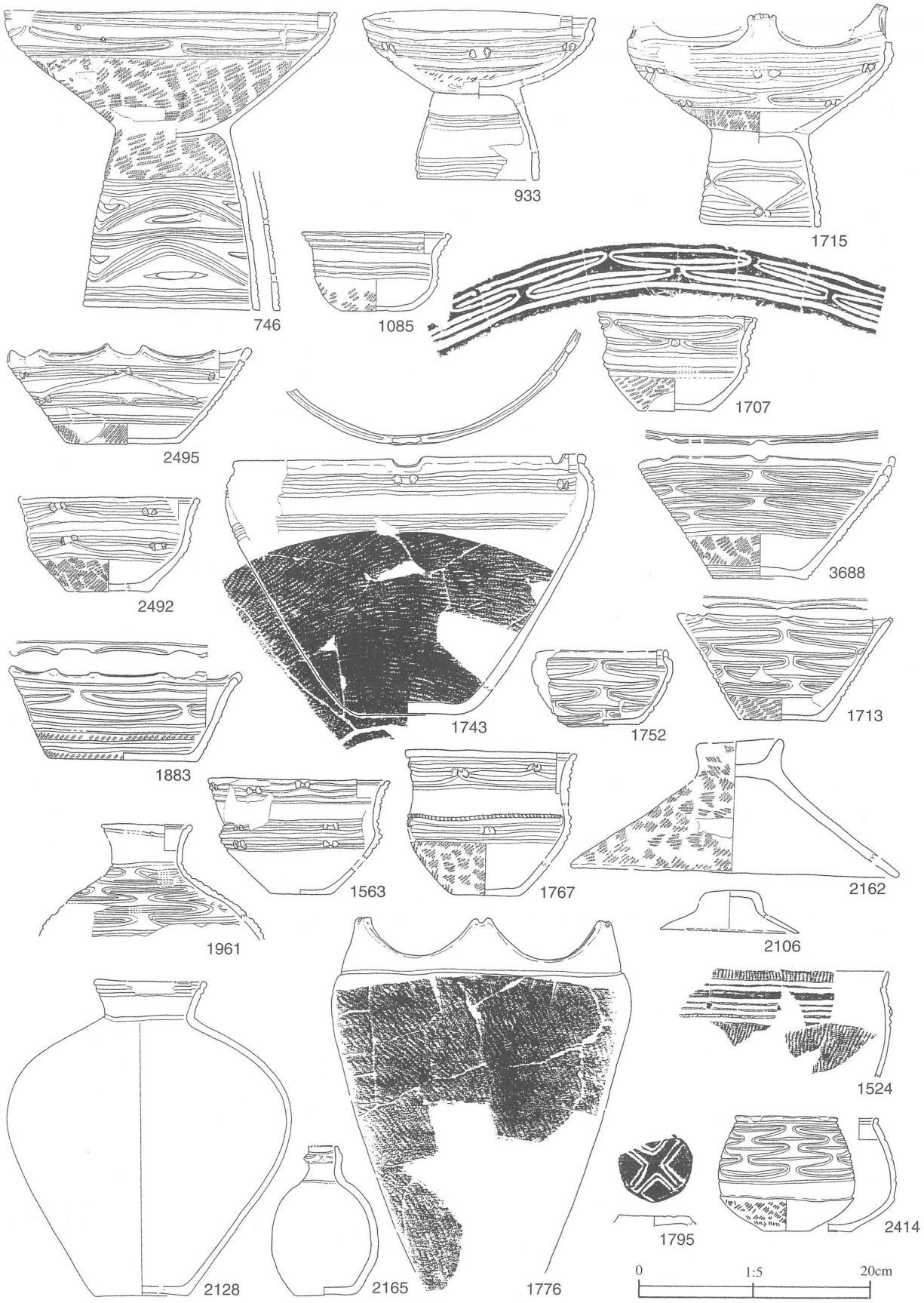
平成17年7月23日（土）、小田野氏の一周忌に合わせて、岩手考古学会第34回研究大会「岩手県における弥生前期から中期の諸問題-土器型式と地域間交流-」が開催され、石川日出志氏を初め、氏に縁のある研究者が集い、研究発表がなされた。まさに、金附遺跡の報告書作成のために開催されたと言っても良いような研究大会で、大変ためになった。翌日には、当センターにおいて金附遺跡の土器を見ていただき、多くの御教示をいただいた。異系統土器のほとんどは、この時の御教示によるものである。



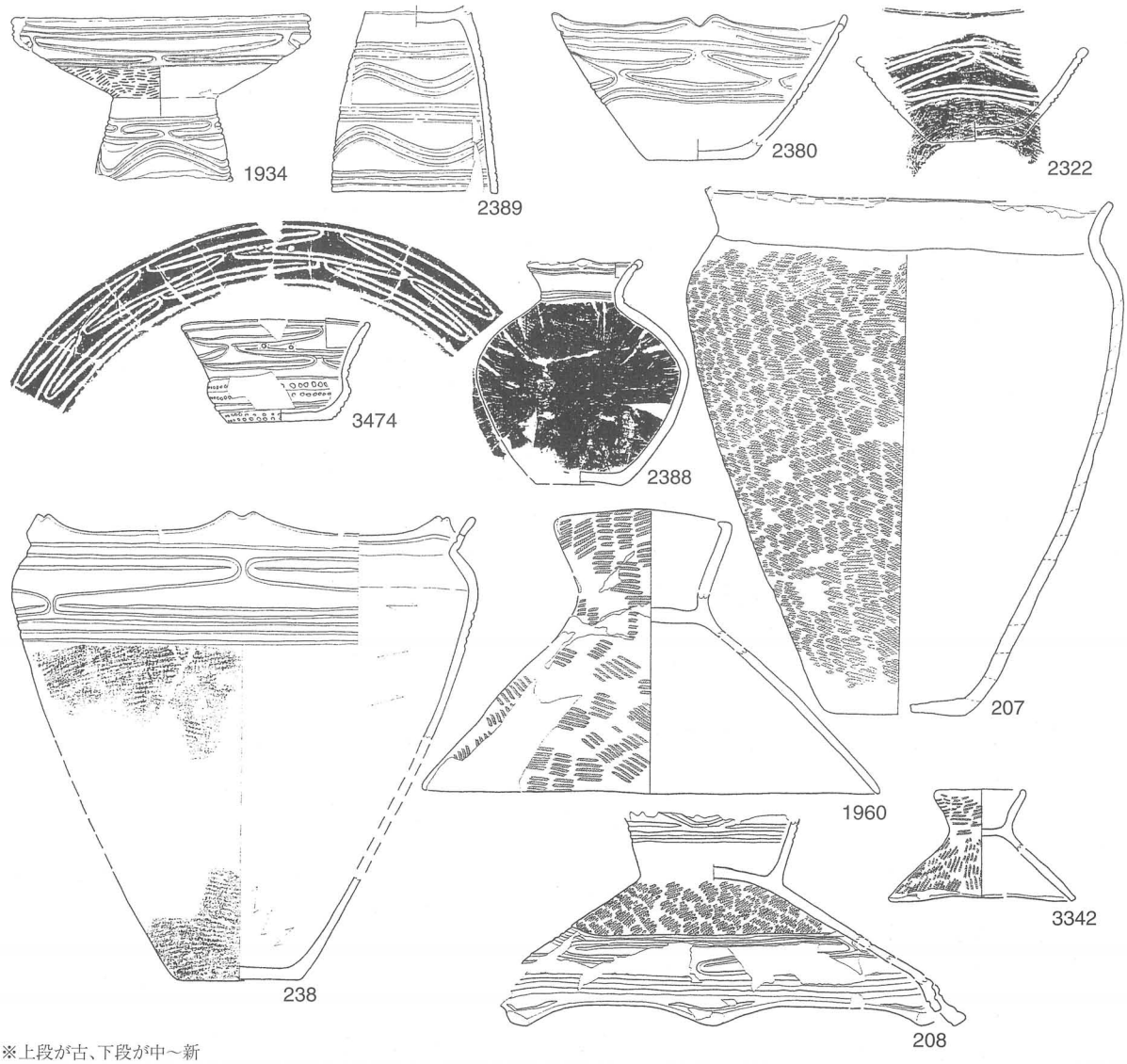
第 533 図　金附遺跡の大洞 A´ 式古土器

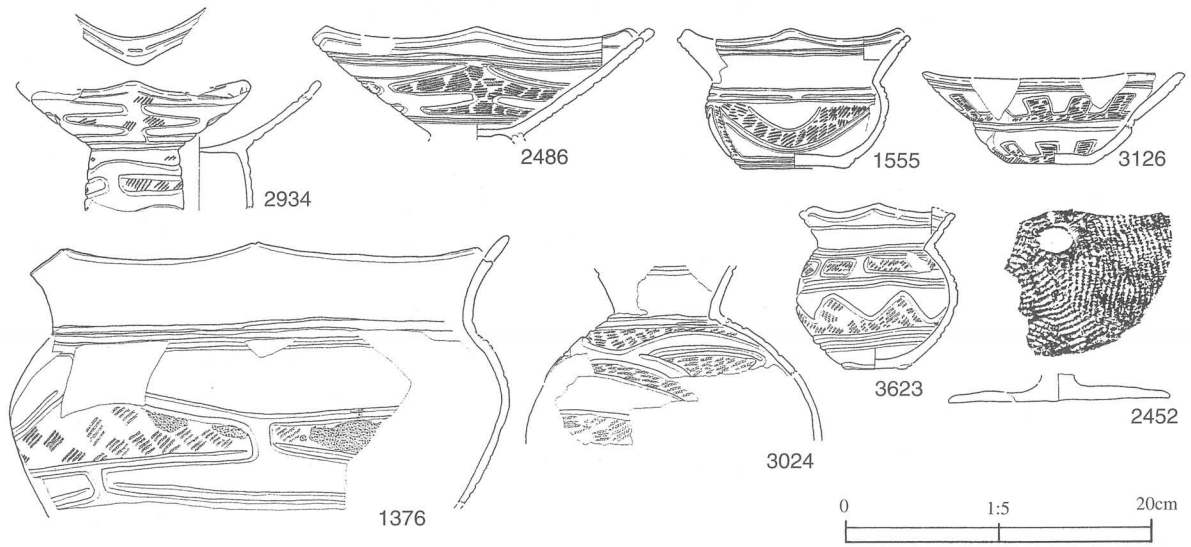


第 534 図　金附遺跡の青木畑式古（大洞 A ′ 式新）土器（2292 は大洞 A′ 式古？）



第 535 図　金附遺跡の青木畑式新土器





第 536 図　金附遺跡の谷起島式土器

2　縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の製作・使用状況

文様の系統などの型式編年的観点からは、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて強い連続性（系統性）が見られ、この間に大きな変化はほとんど見られなかった。器種として蓋が出現するのが、縄文時代と弥生時代を分ける、ほとんど唯一の違いといって良い（他の地域では、遠賀川式系土器も）。それでは、その蓋はどのように使用されたのだろうか。土器の製作や使用の状況には、変化は認められるだろうか。十分な検討はできないが、これらの問題について少し考えてみたい。幸い、平成16年12月に所内の研修で、北陸学院短期大学の小林正史氏から、焼成時の黒斑、使用時のスス・コゲについて若干の指導を受けることができたので、黒斑、スス・コゲを中心に検討していきたい。第537図～第573図は、小林氏の指導を元に金子が作業員に指示して作成したものである。スス・コゲが認められる器種・器形のうち基本的に底まで残っている土器について作成した。僅かな時間の研修だけで理解が十分でないと思われるので、間違いが存在する可能性が高く（下の記載についても同様である）、御配慮いただければ幸いである。

①製　　作

(1) 黒斑から見た焼成状況（第537図～第573図）

深鉢は、一般的な縄文土器と同様の黒斑を持つものがほとんどのようであり（小林ほか　1999、2003）、中に薪を差し込んで焼いているようだ。小型の鉢や浅鉢は、黒斑が残っていないものも多く、はっきりしない部分もあるが基本的に深鉢類に準じているようだ。また、縄文土器と弥生土器との間に違いはないようである。

蓋は、傘の外側に黒斑が付くことが多く、特に把手頂部からその底への付着が顕著である。傘の内面に付くものも比較的多く見られることから全部そうだとは言い切れないが、基本的には傘を下にして置き周囲に薪を立てかけて焼いているのではないだろうか。内面に見られるのは、途中で倒しているためか。内面に見られるのは小形に顕著なことから、小形の場合は必ずしも傘を下にして置いていないのかも知れない。

(2) その他

山王Ⅲ層式の精製土器に金雲母を多く含むことは、よく知られている（須藤　1983:p.5）。本遺跡の様子を見ると、青木畑式にも見られ、大洞A′式古にも僅かながら確認された（第387図3602など）。しかし、顕著になるのは山王Ⅲ層式からである。

色調も、山王Ⅲ層式は、焦げ茶色というか、土色帖で言えば黒褐色（7.5YR3/2）～暗褐色（7.5YR3/4）を呈しているのが特徴的である。それ以前の土器が、赤みというか「橙み」（7.5YR6/8）を呈するのに対し、その違いは比較的顕著である。

胎土や色調が、土器製作上においてどの程度の意味を持つのか、わからないが、山王Ⅲ層式期が一つの画期となっている可能性がある。これは、この時期に磨消縄文（単なる帯縄文でなく文様内に）が復活するという大きな変化が見られる点にも符合する。

しかし、色調と磨消縄文以外の変化については漸移的で、また縄文と弥生時代の境にも符合しているわけでもない。

②使用状況－スス・コゲ－（第537図～第573図）

小林正史氏が、金附遺跡の北北西約3kmにある北上市九年橋遺跡の縄文時代晩期後半の土器について分析

したのと同様の傾向を示す。すなわち、「コゲが付かない土鍋は特小型にしかない点と、特大型でも高い比率で水面下にバンド状コゲが付く点が特徴です」（小林　1999:p.7）。「出土土器量が多い東北地方中部の縄文晩期では、浅鉢に炭化物が付く比率は低いです」（同 :p.45）。

弥生時代から新たに出現する蓋はどうだろうか。今回の調査では、文様を持つ装飾性の高い蓋は稀だが、第573図1874や3677は器形が顕著に異なり、壷用の蓋の可能性がある。第238図1809と第243図1872のような壷には口縁部に貫通孔が巡り、おそらく蓋とセットになるのだろうが、同じく貫通孔を持つ蓋は今回見つけられなかった。なお、第103図208を見ると、合わせ口土器棺墓で深鉢と組み合うのは高坏に非常に近い装飾蓋のようである。

これら以外の大部分は煮炊きに使われたものと思われる。基本的には傘と把手からなる形態がほとんどを占めるが、中には第573図2106、3618のようなやや異形のもの、さらには把手部を持たない第573図2181のようなものも存在する。

スス・コゲの付き方としては、口端に帯状に巡るものとほぼ全体に及ぶものなどが見られるが、大きさなどで顕著なまとまりは読みとれない。しかし、第568図に示した大きさの一群は、中央に巡るということで、他の大きさのものに比べ、比較的統一性が見られる。これらは主として「かぶせ蓋」として使用され、他は主として「落とし蓋」として使用されたことを意味するのであろうか。

小林正史氏によれば、弥生土鍋においての蓋は、「大半が落とし蓋」（小林　1999:p.47）とのことである。東北地方の中でも明らかに稲作が行われ米を炊いていたであろう、弥生時代中期の宮城県仙台市中在家南遺跡（仙台市教育委員会　1996）の蓋も、落とし蓋と考えている（p.50）。中在家遺跡の蓋は、桝形囲式のもので、金附遺跡の山王Ⅲ層式のものと比べ、把手が退化して「つまみ」と呼ぶような状態になり、逆に傘の部分は発達している。この違いを、単に時期による型式変化によるものとすべきか、用途が異なるためと考えるべきか。

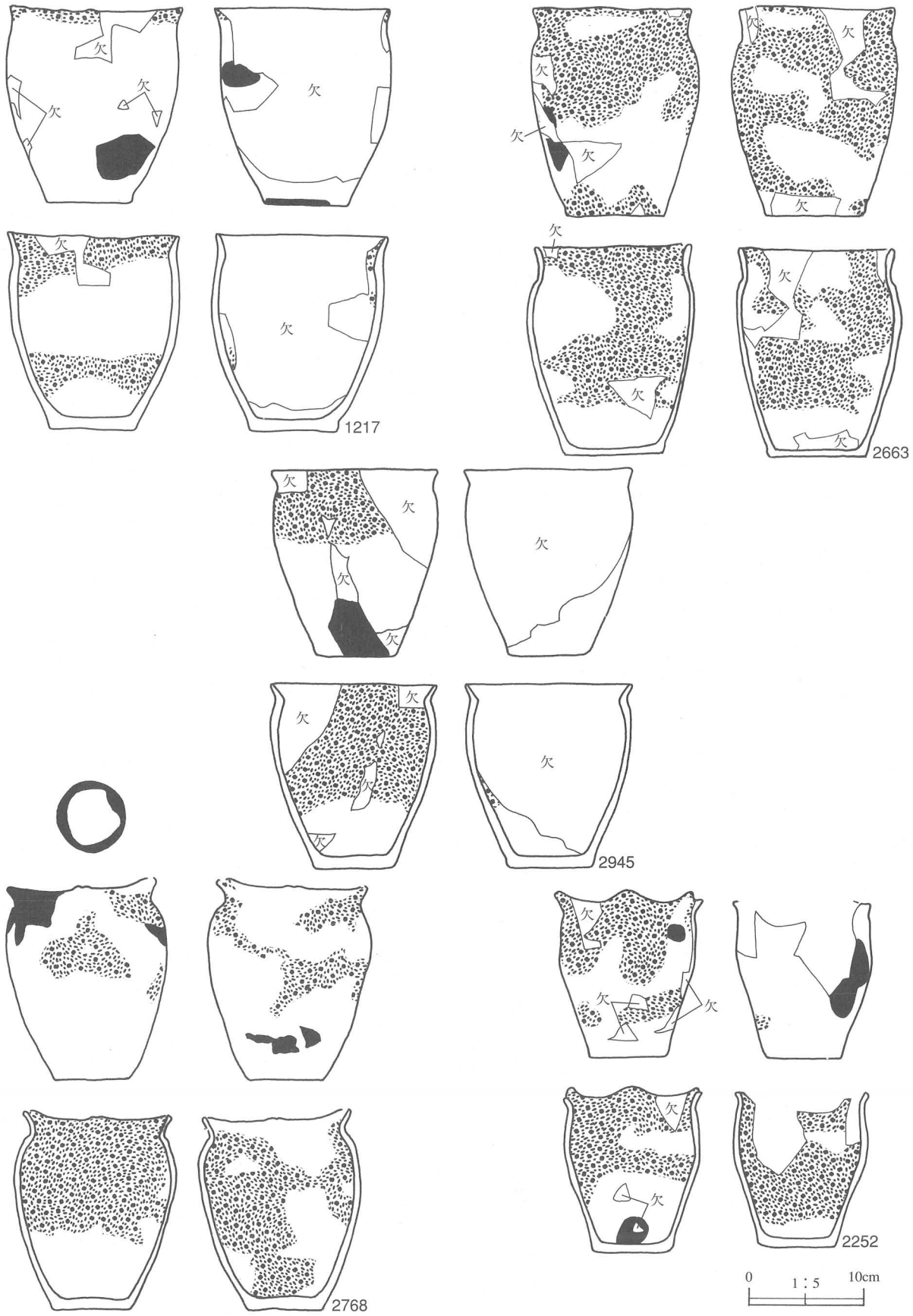
岩手県の蓋については、小田野哲憲氏の先駆的研究があり（小田野　1983）、炭化物の付着状況から「かぶせ蓋」と「落とし蓋」の区分もしている。そして、「すぐに『米』と結びつけるつもりはないが、いずれ従来は無かった食糧の調理に蓋形土器は大いに使用されたであろう。新しい食糧として米だけに限らずアワ、ヒエなどの穀類一般を想定することは、あながち見当違いとは言い切れぬであろう」（p.73）としている。

今回の調査では、炭化米や籾圧痕など米の存在を裏付けるものは全く出土しなかった。これをもってして米がなかった証拠とするわけにはいかないが、小田野氏が指摘した米以外の穀類の可能性は今後も検討していく必要があろう。

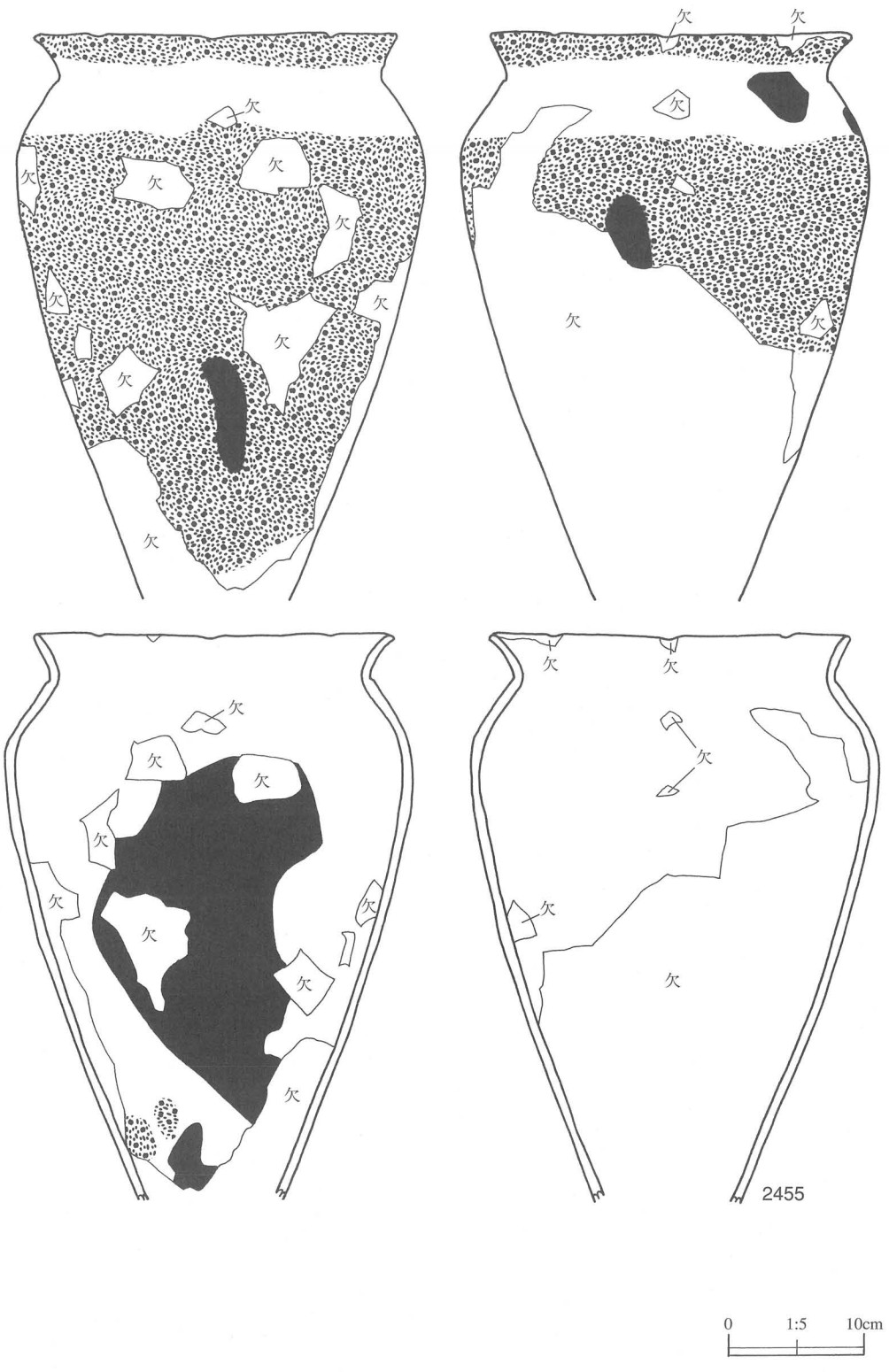
以上、金附遺跡における縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の製作、使用の状況を見てきたが、はっきりした結論を導くことはできなかった。しかし、この時期細かな変化は確かに認められるが、どちらかと言えば継続性の強さの方が目に付いた。つまり、土器の型式編年的検討と同じ結論となる。

参考文献

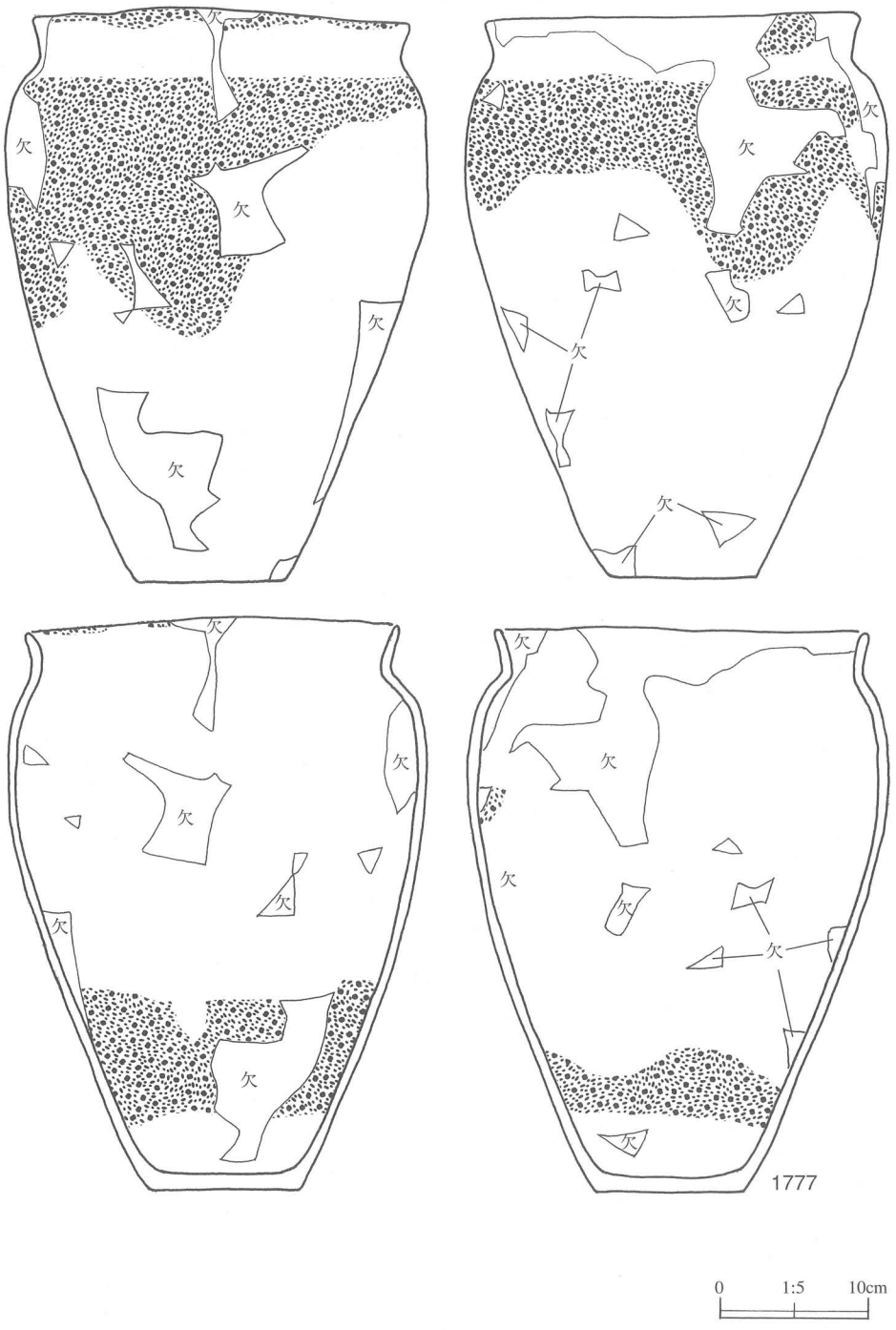
小田野哲憲　1983「岩手県出土の『蓋形土器』について」『岩手県立博物館研究報告』第1号
小林正史　1999「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元- 遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所　研究集会報告集2
2003「使用痕跡からみた縄文・弥生土器による調理方法」『石川考古学研究会々誌』第46号
小林正史ほか　1999「黒斑からみた縄文土器の野焼き方法」『日本考古学』第8号
2003「黒斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」『日本考古学』第16号　日本考古学協会
須藤　隆　1983「東北地方の初期弥生土器- 山王Ⅲ層式-」『考古学雑誌』第68巻第3号　日本考古学会
仙台市教育委員会　1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第213集



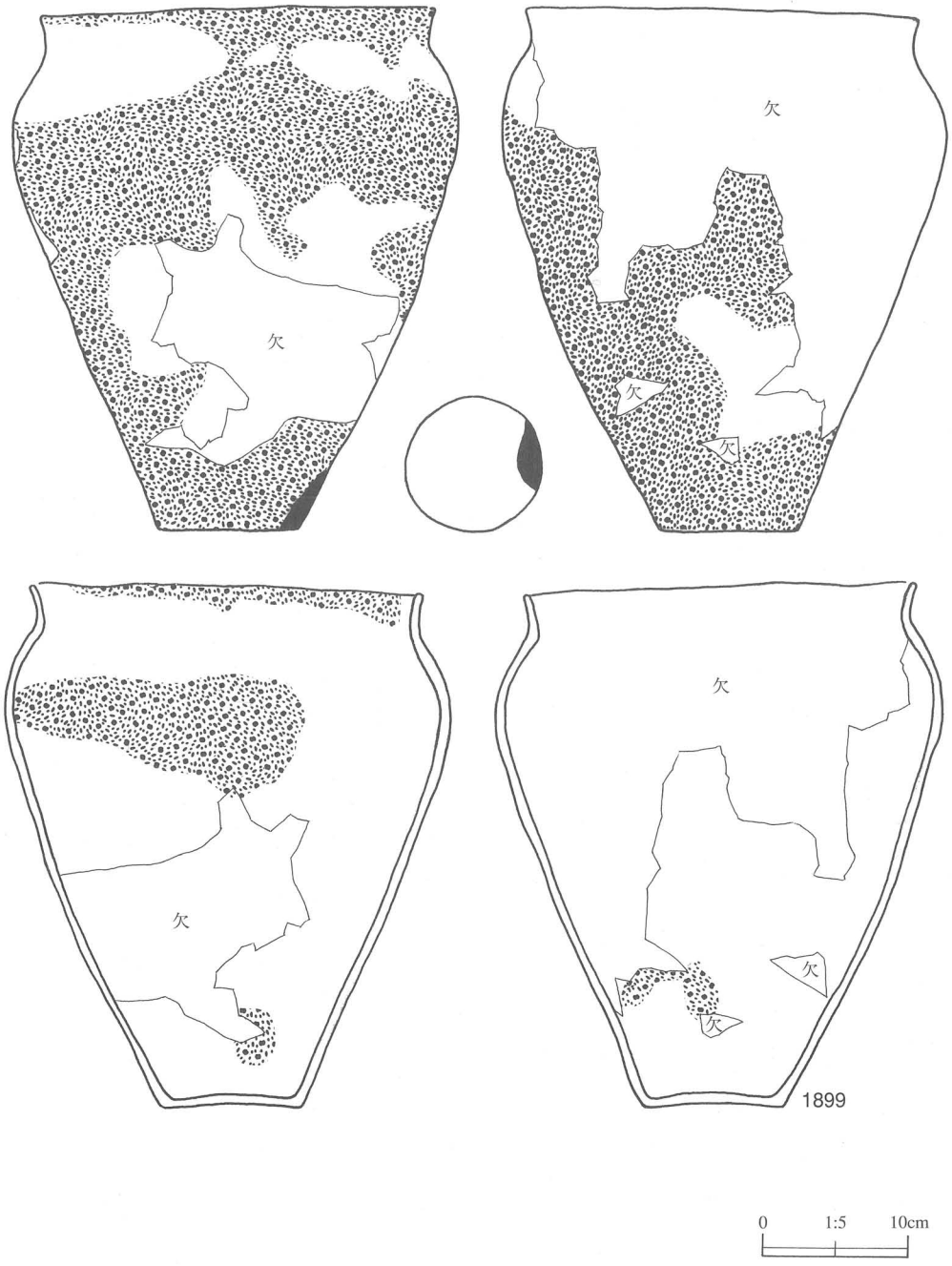
第 537 図　金附遺跡の黒斑・ス、コゲ痕（1）



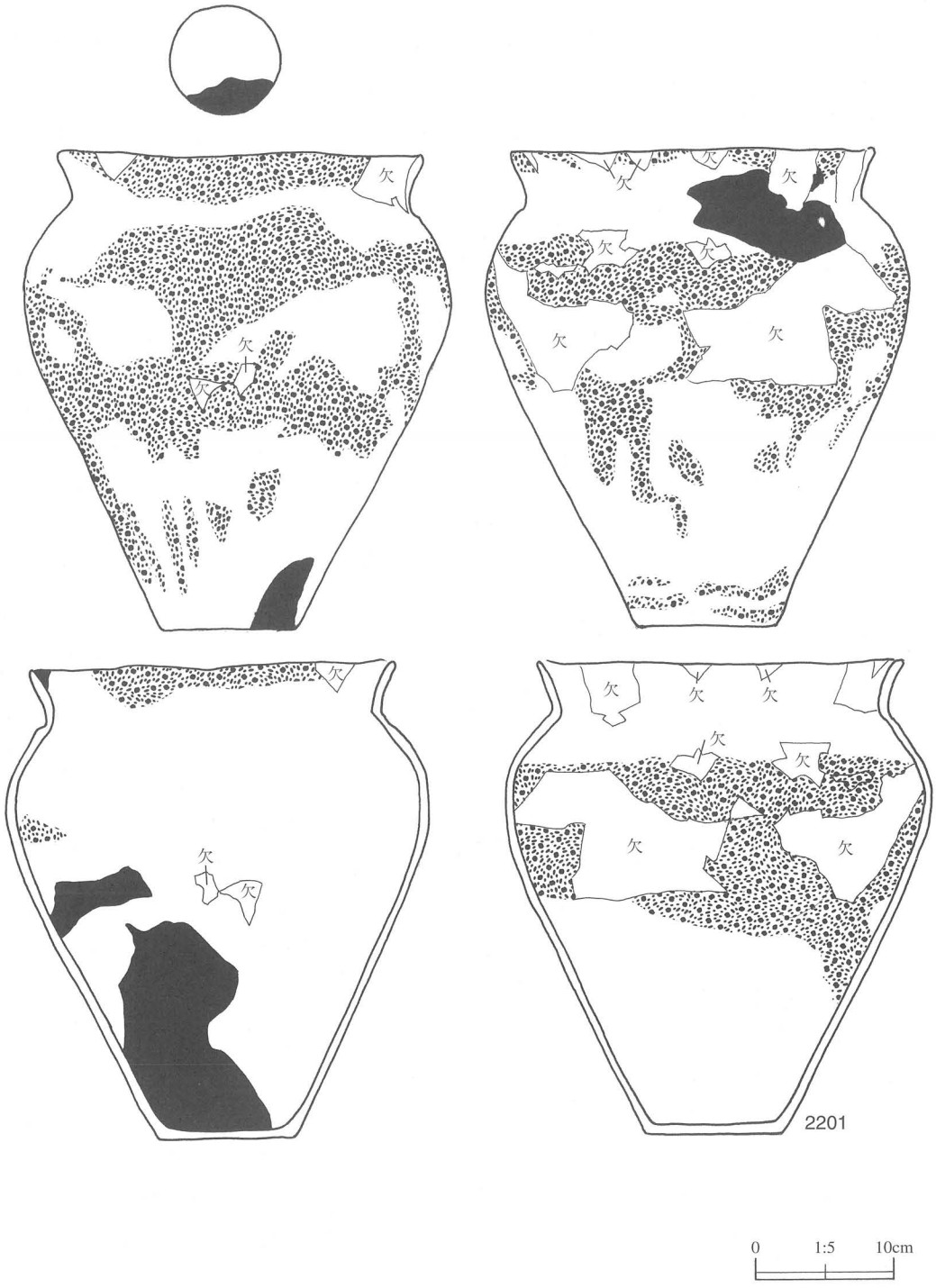
第 538 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（2）



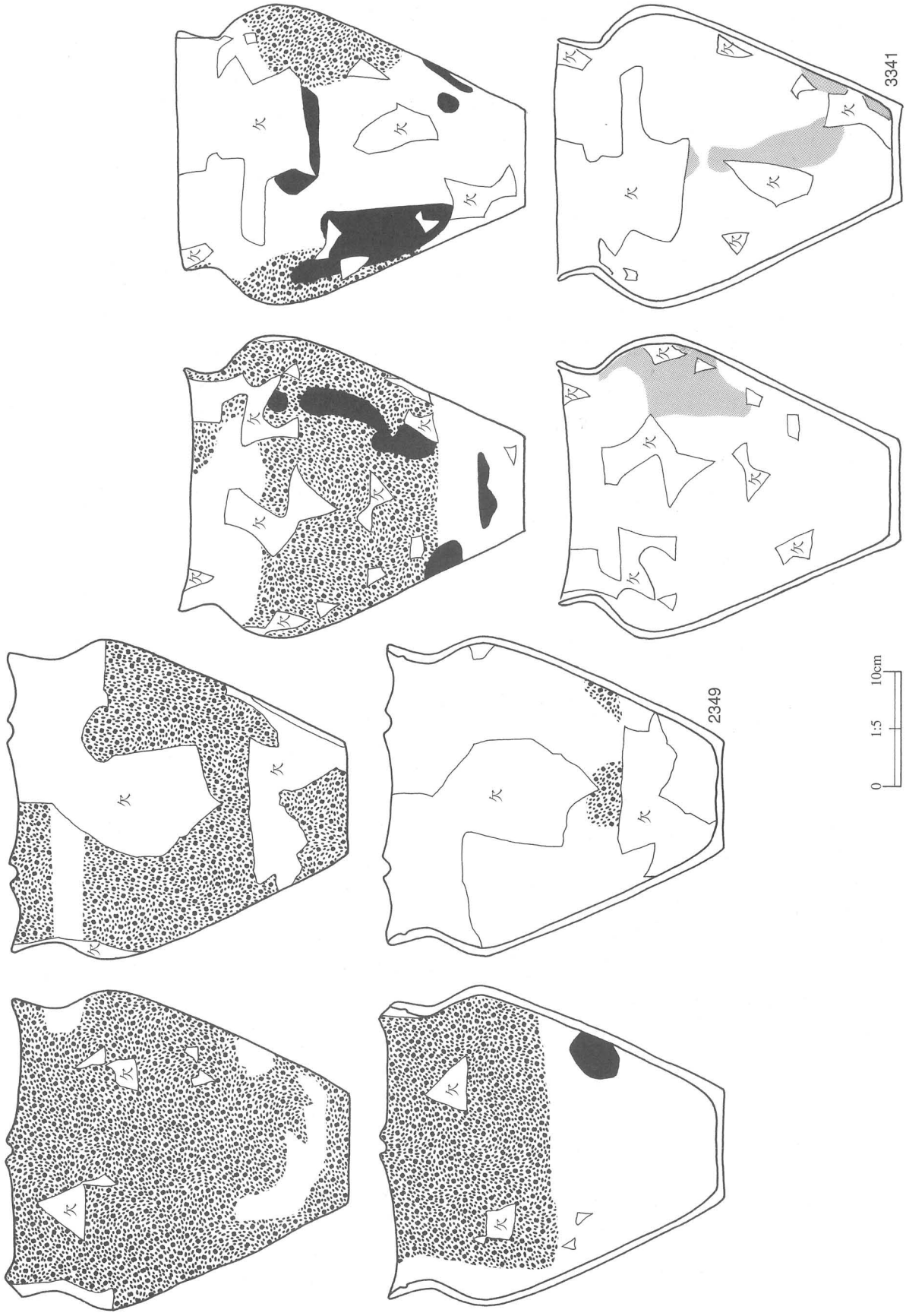
第 539 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（3）



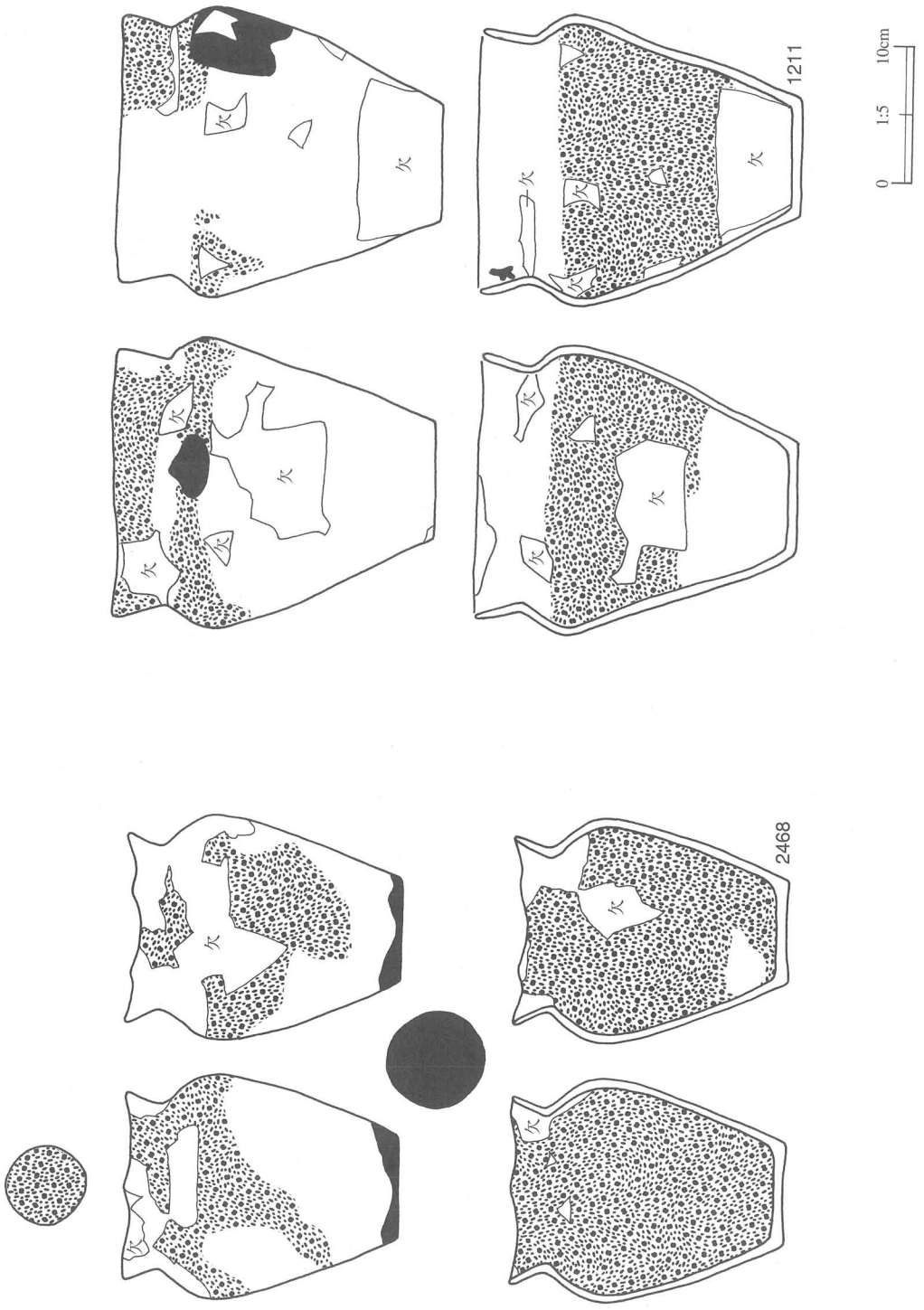
第 540 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（4）



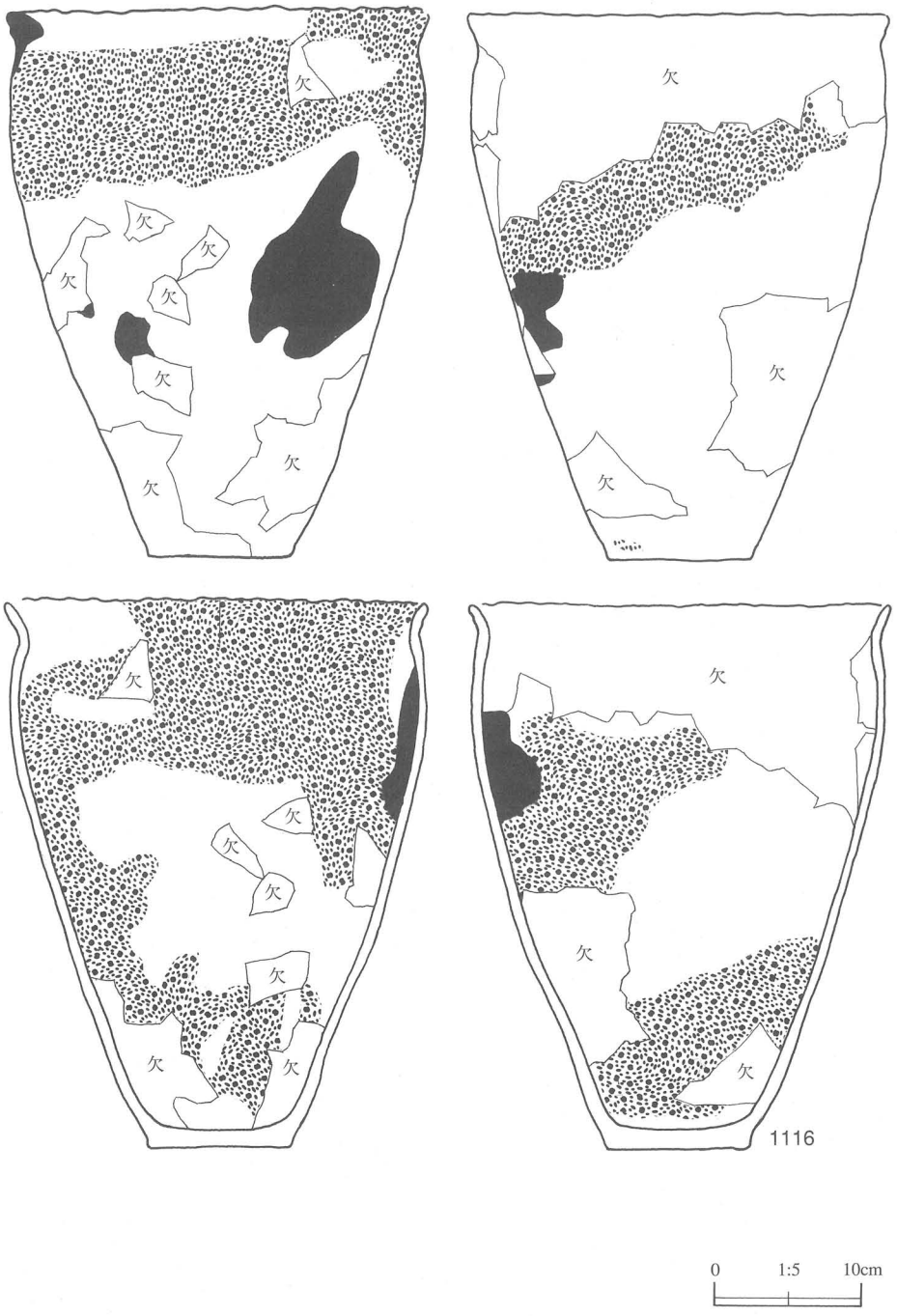
第 541 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（5）



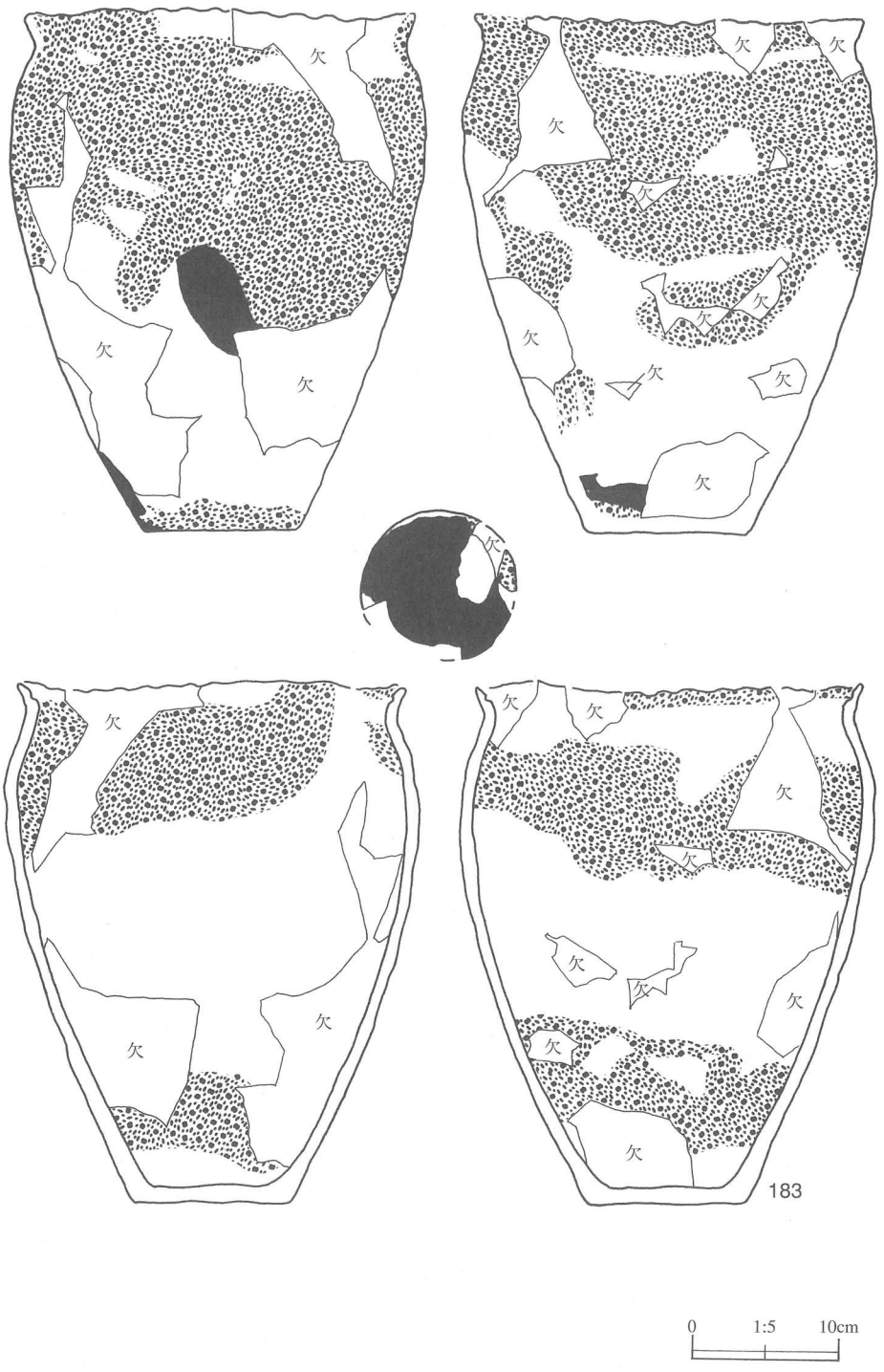
第 542 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（6）



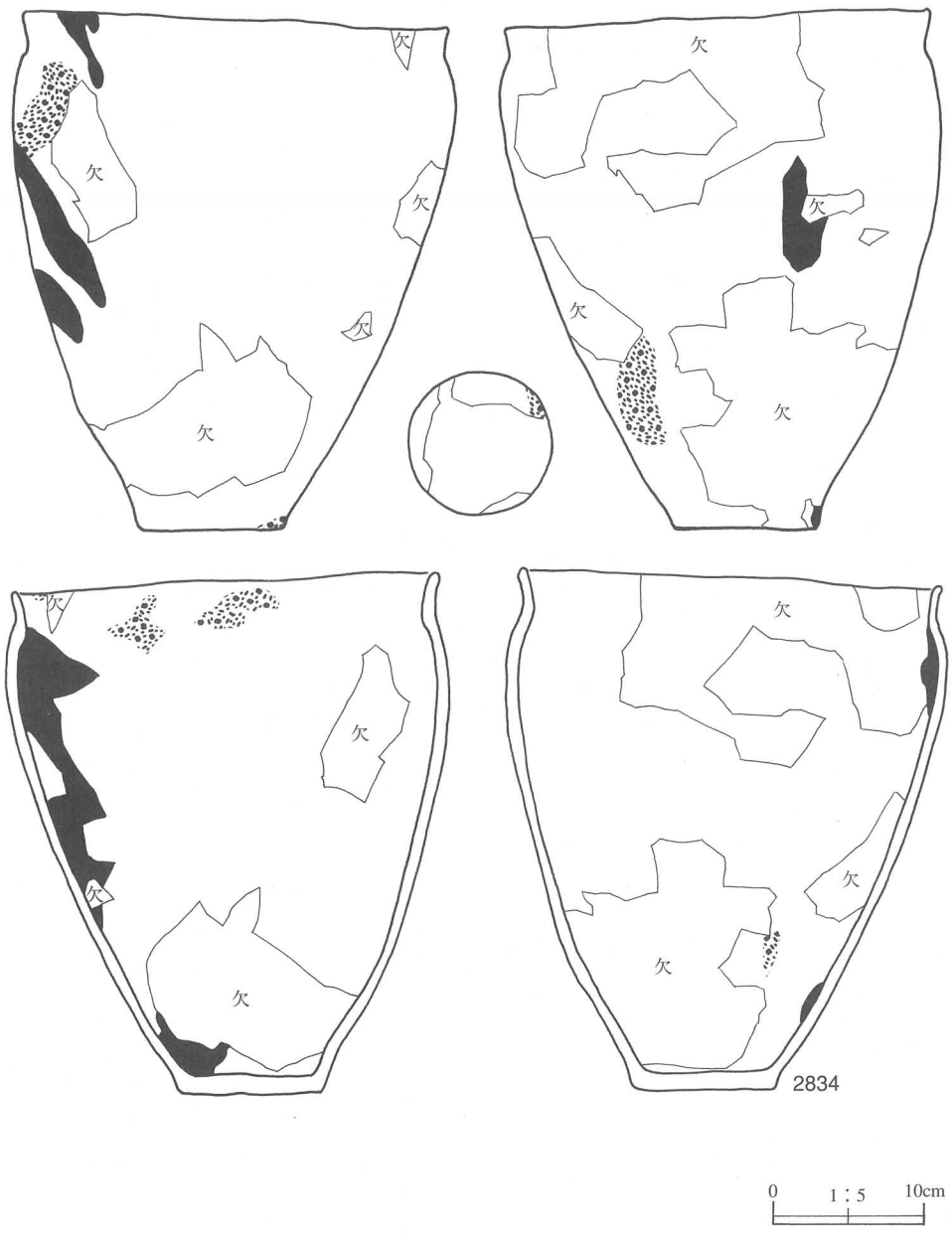
第 543 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（7）



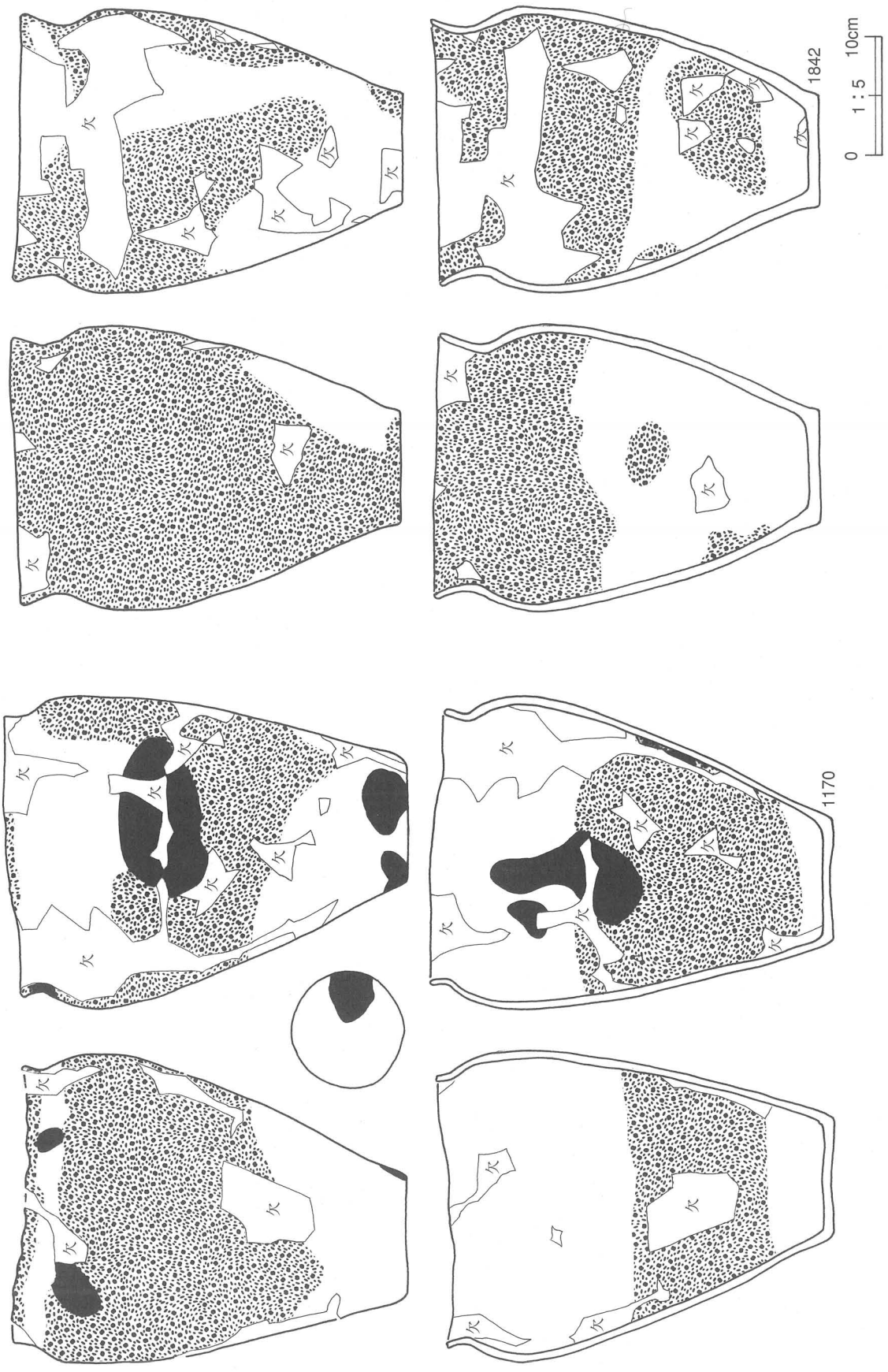
第544図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（8）



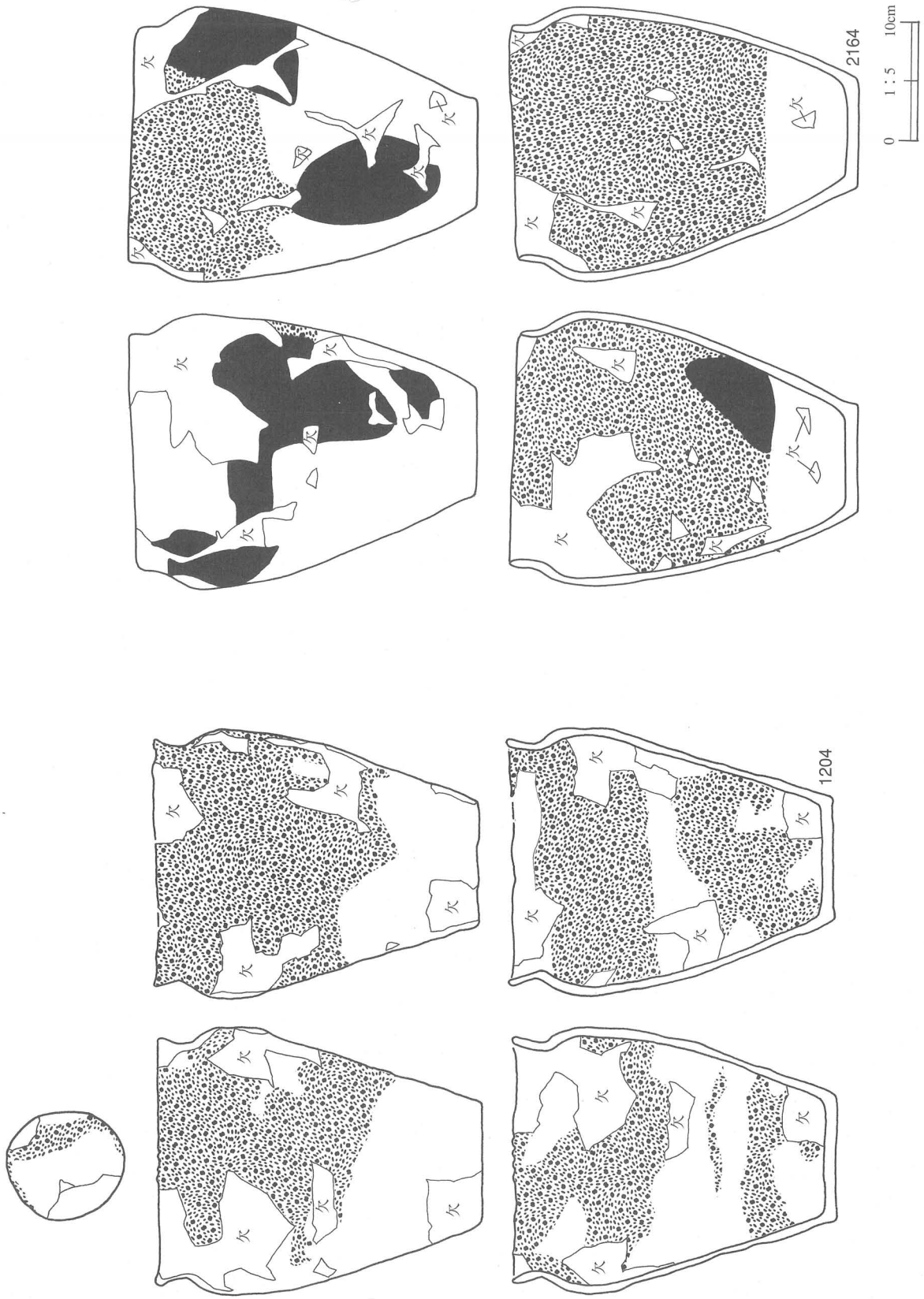
第 545 図　金附遺跡の黒斑・ススヽコゲ痕（9）



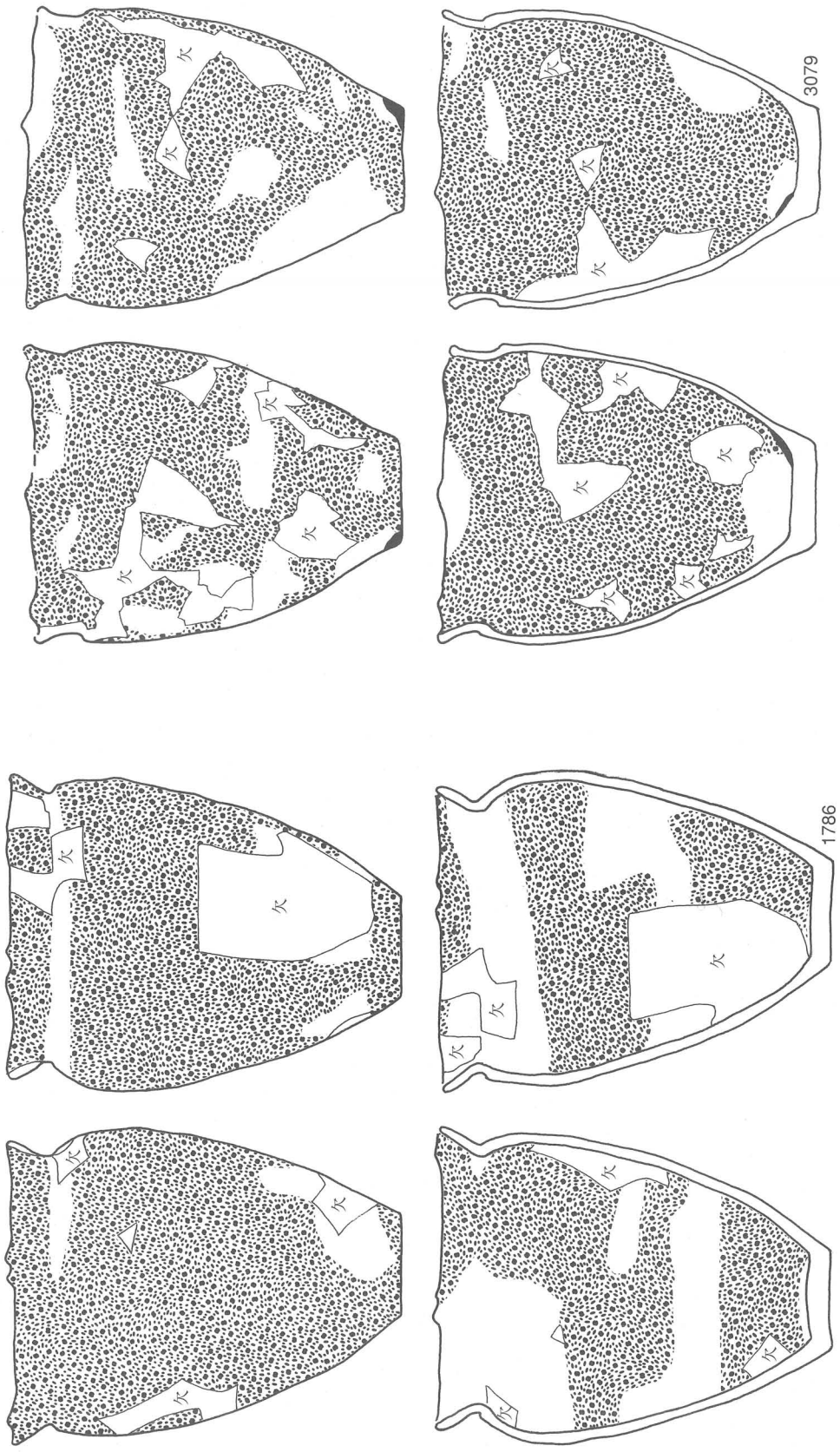
第546図　金附遺跡の黒斑・ス ス、コゲ痕（10）



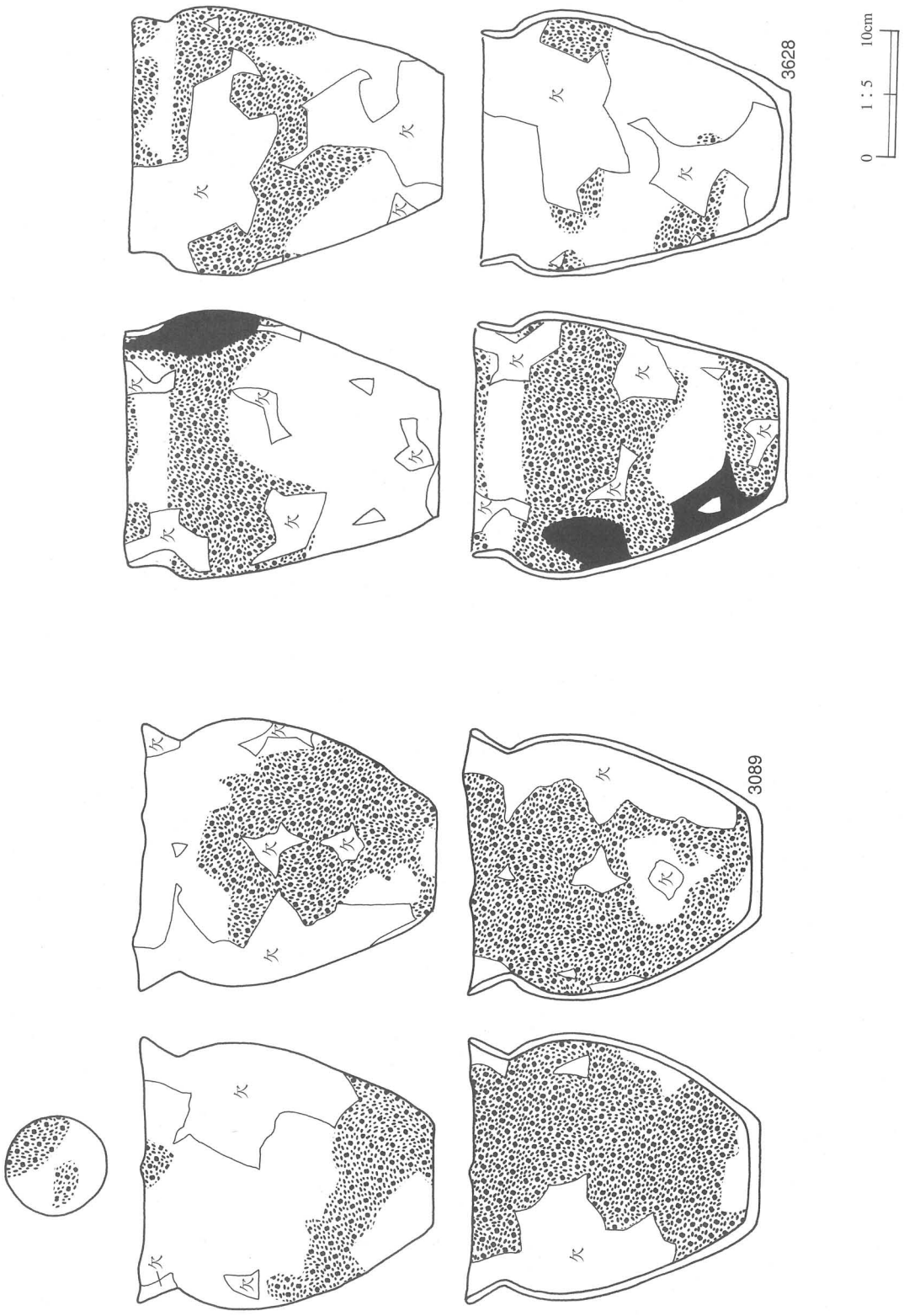
第 547 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（11）



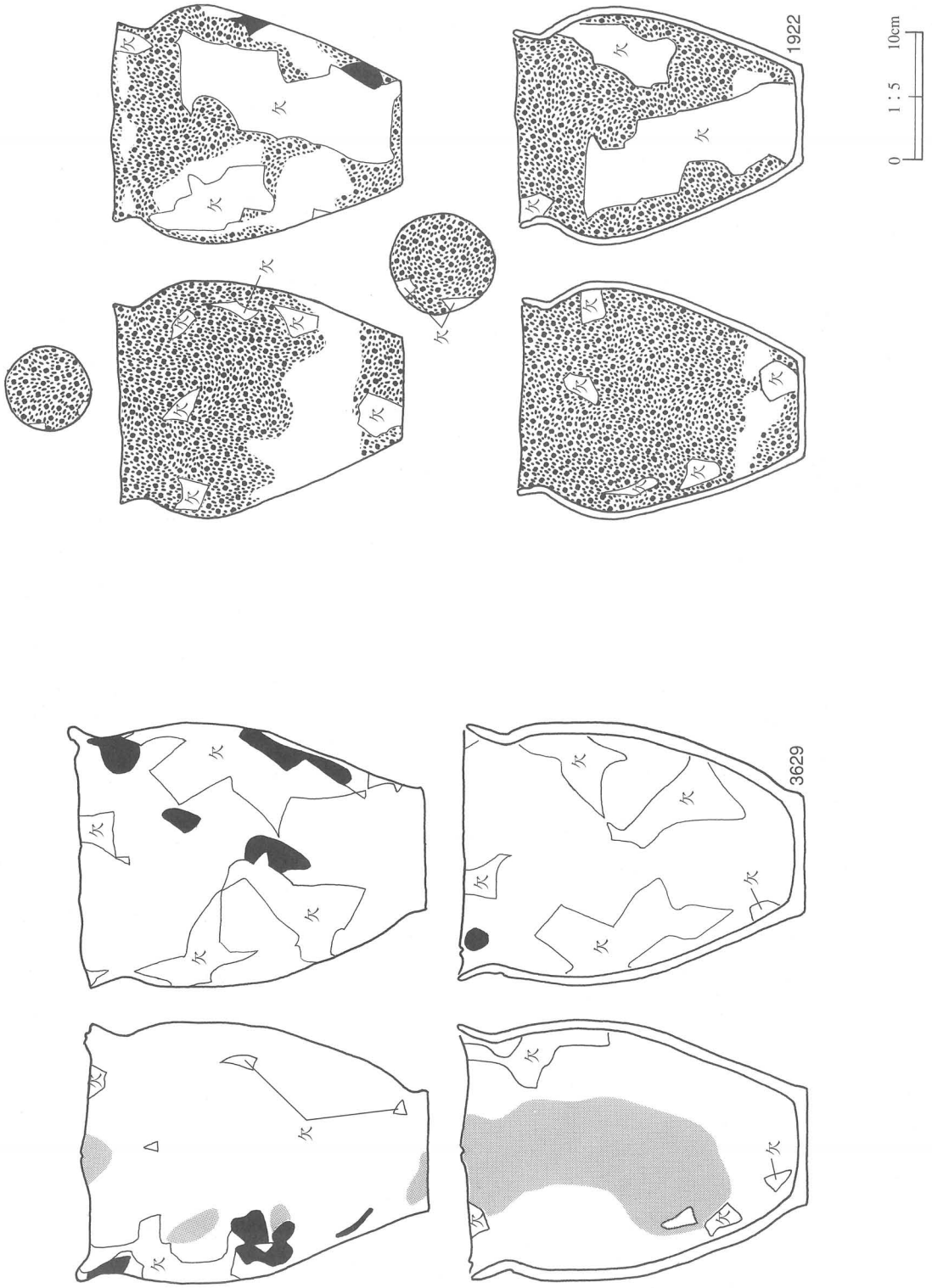
第548図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（12）



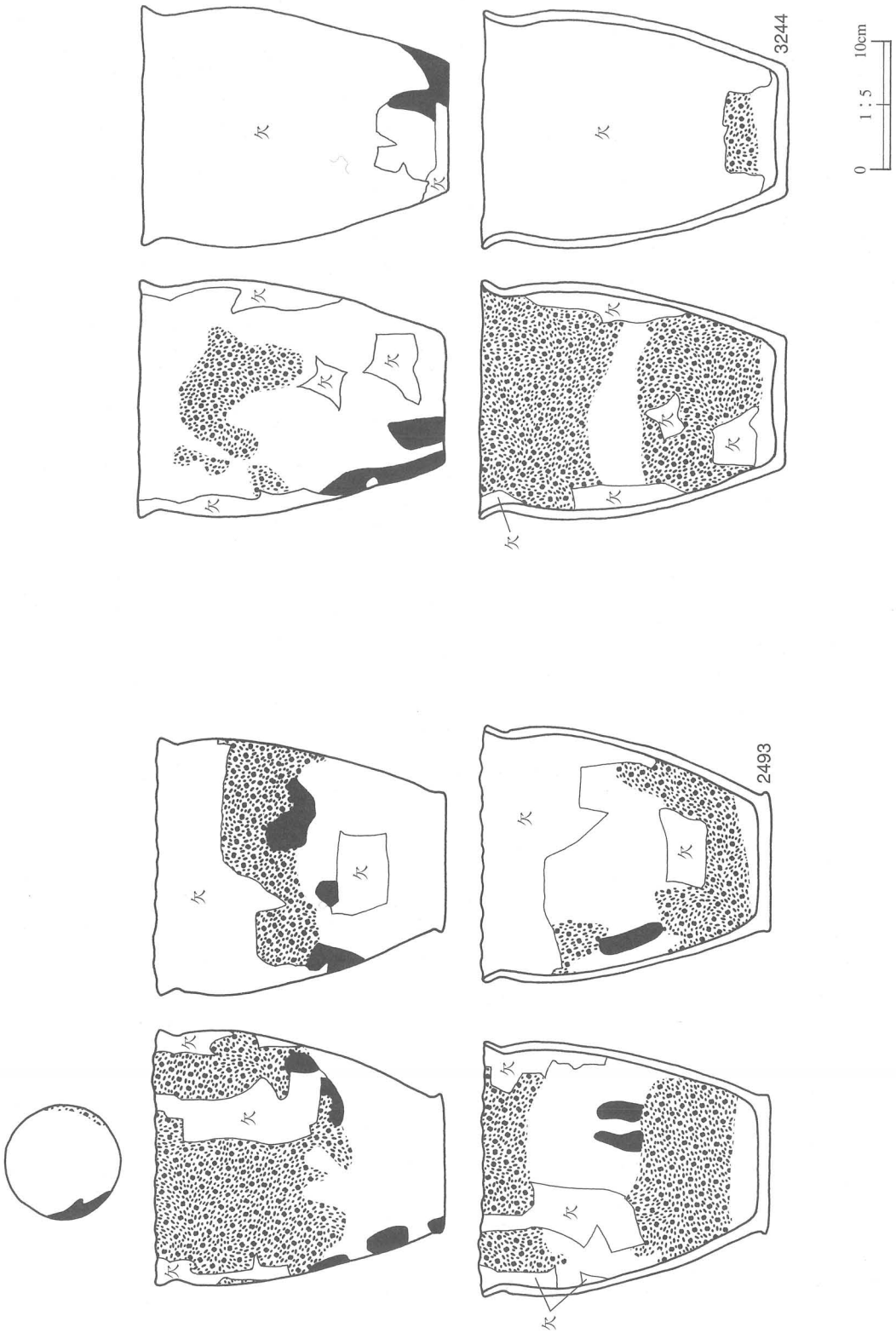
第549図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（13）



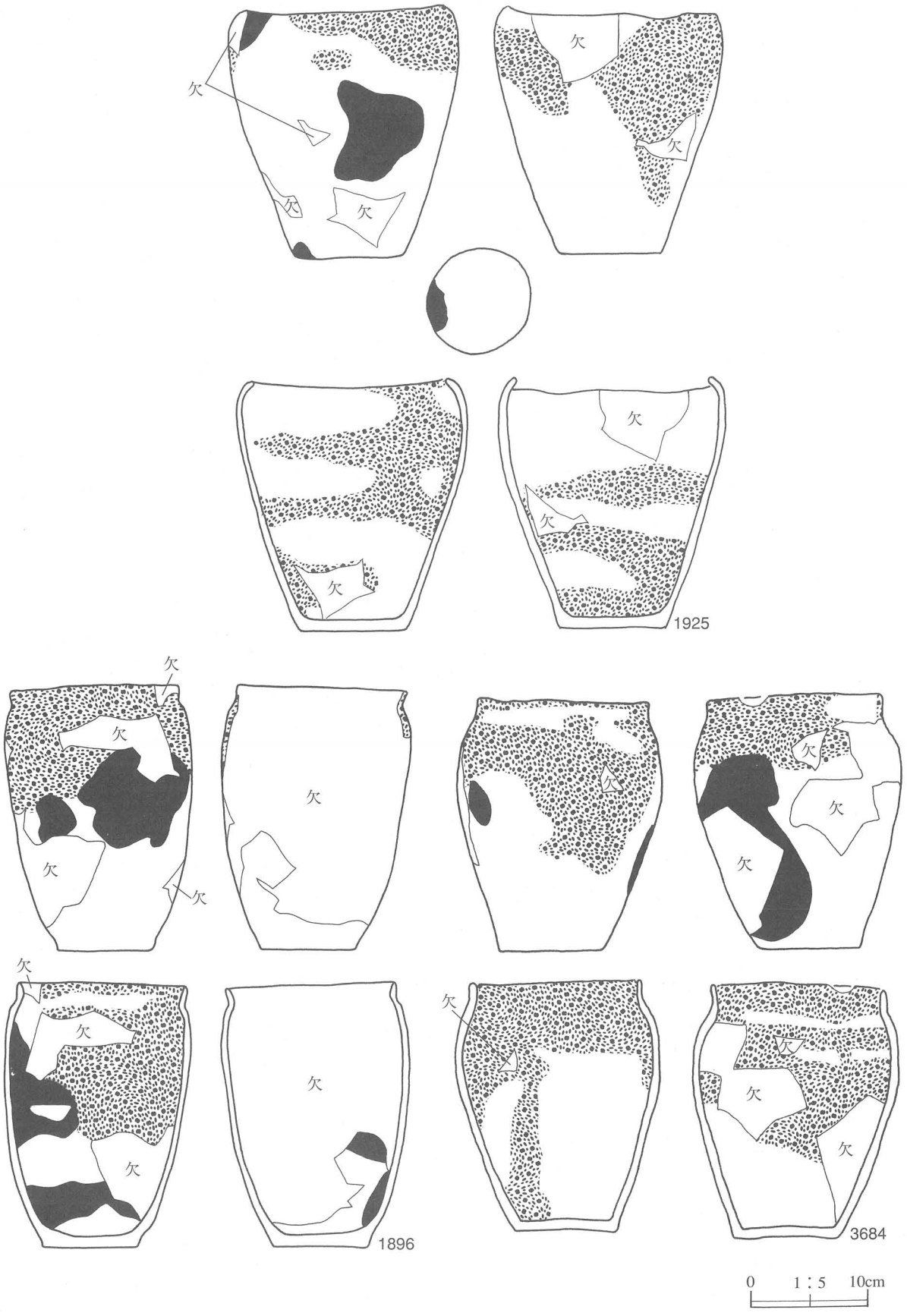
第 550 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（14）



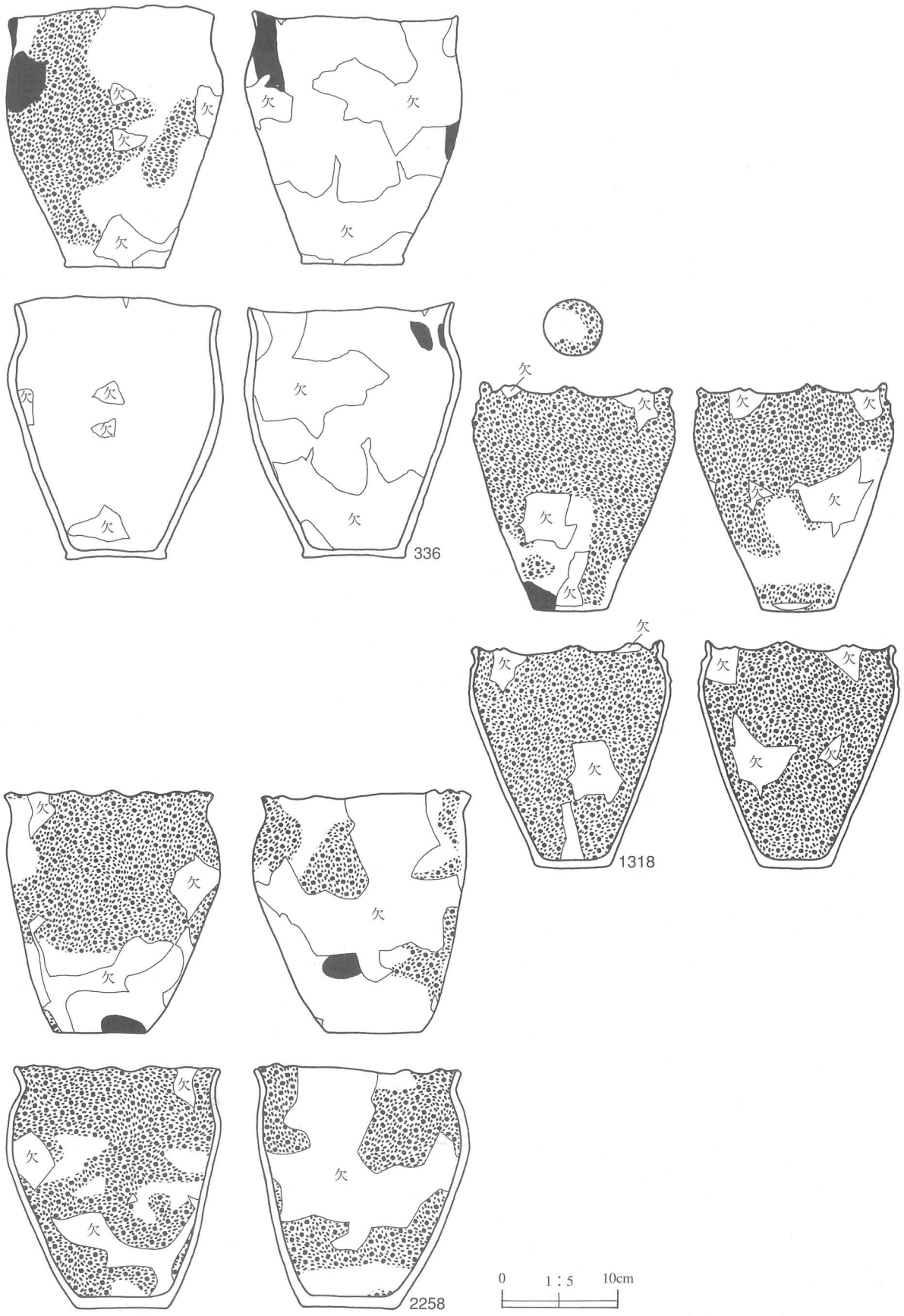
第 551 図　金附遺跡の黒斑・ス ス、コゲ痕（15）



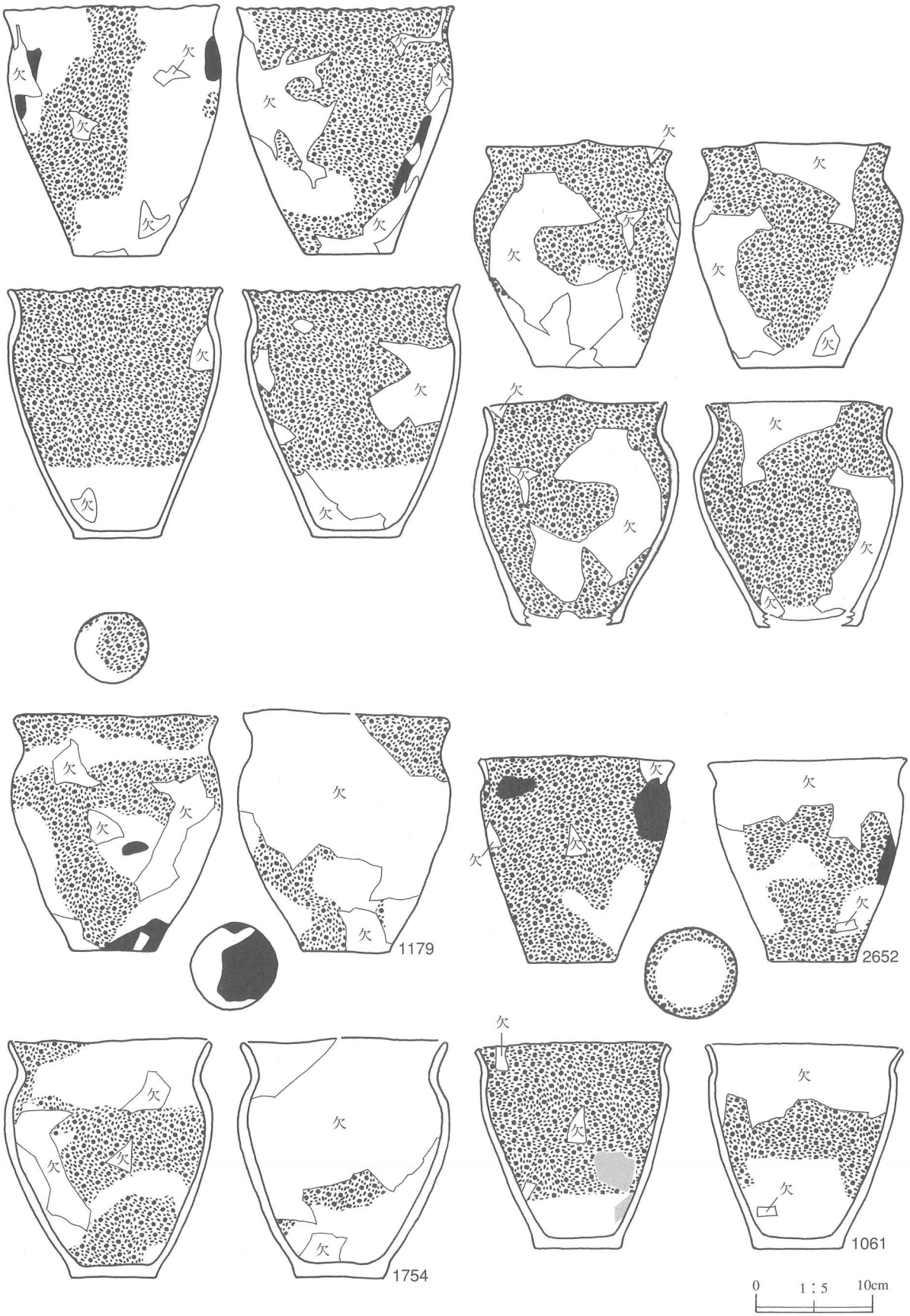
第 552 図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（16）



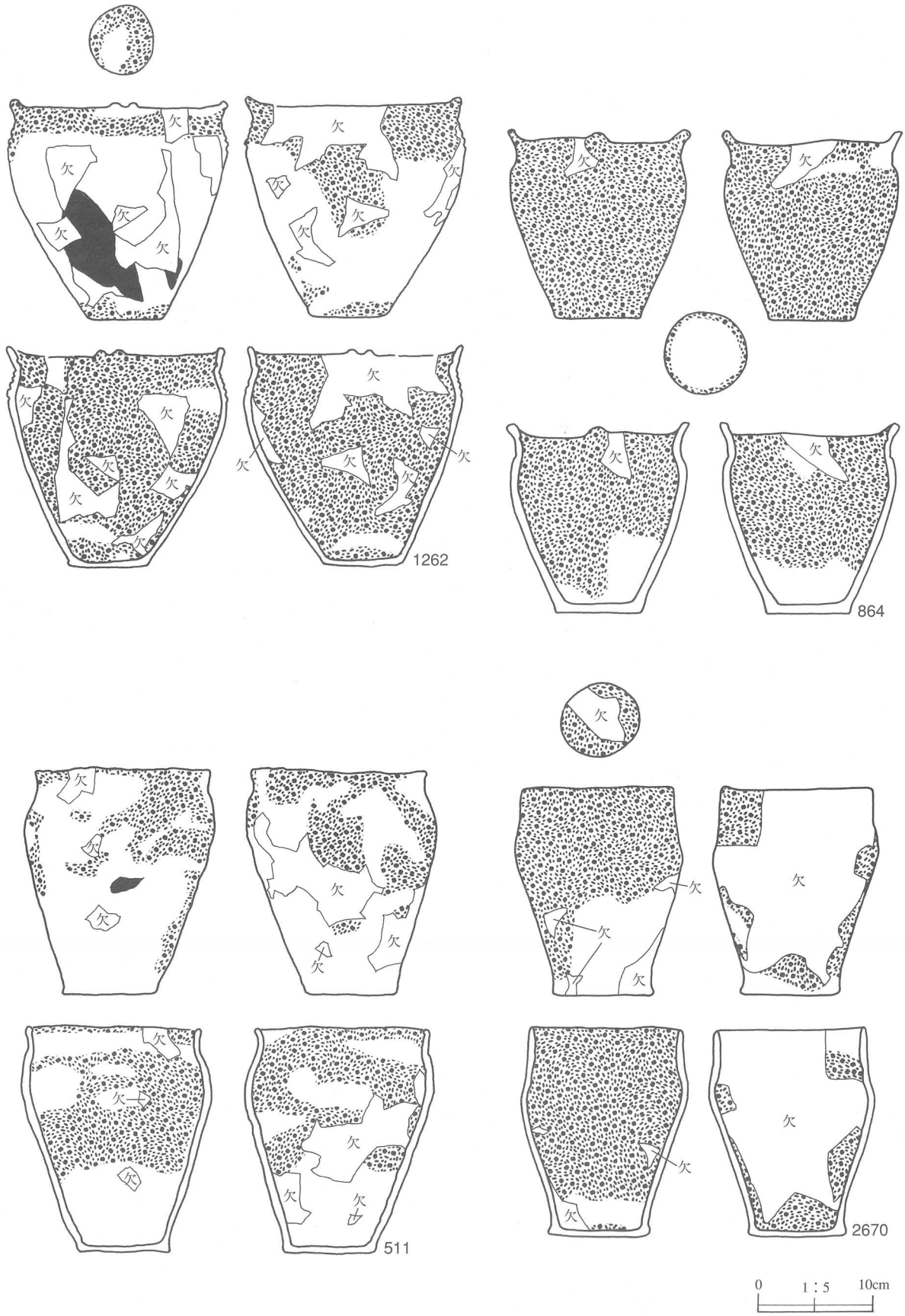
第 553 図　金附遺跡の黒斑・ス ス、コゲ痕（17）



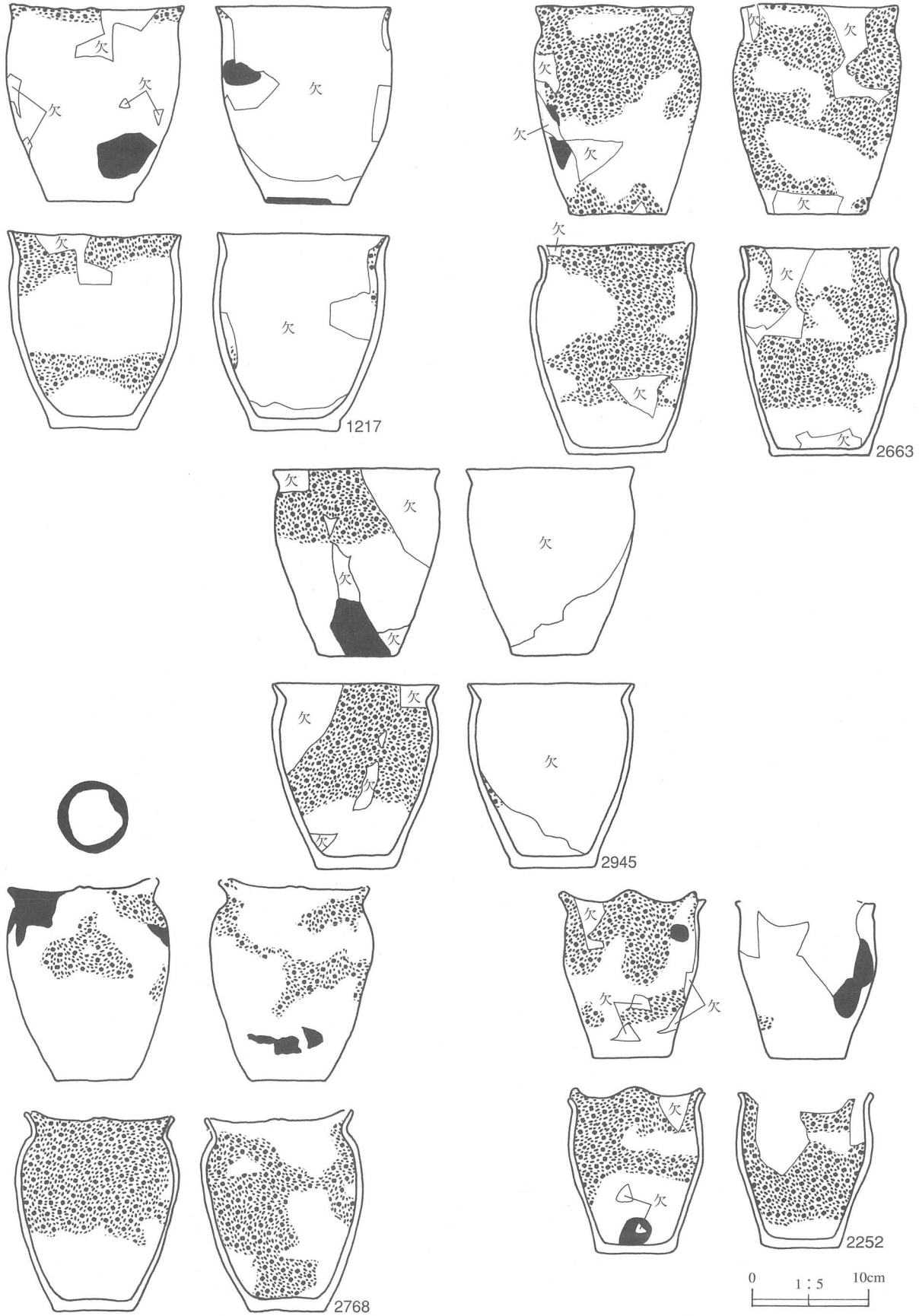
第 554 図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（18）



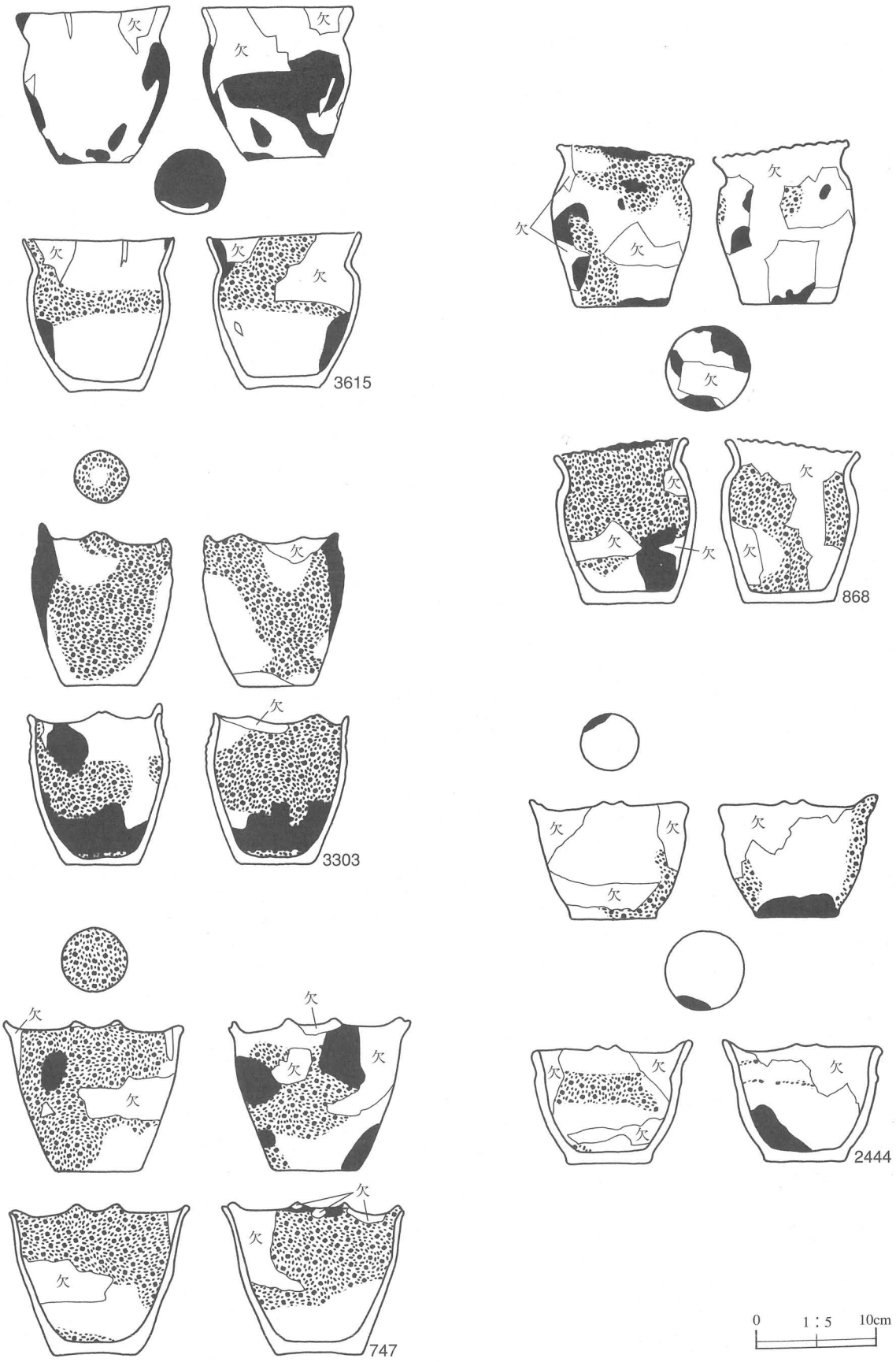
第555図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（19）



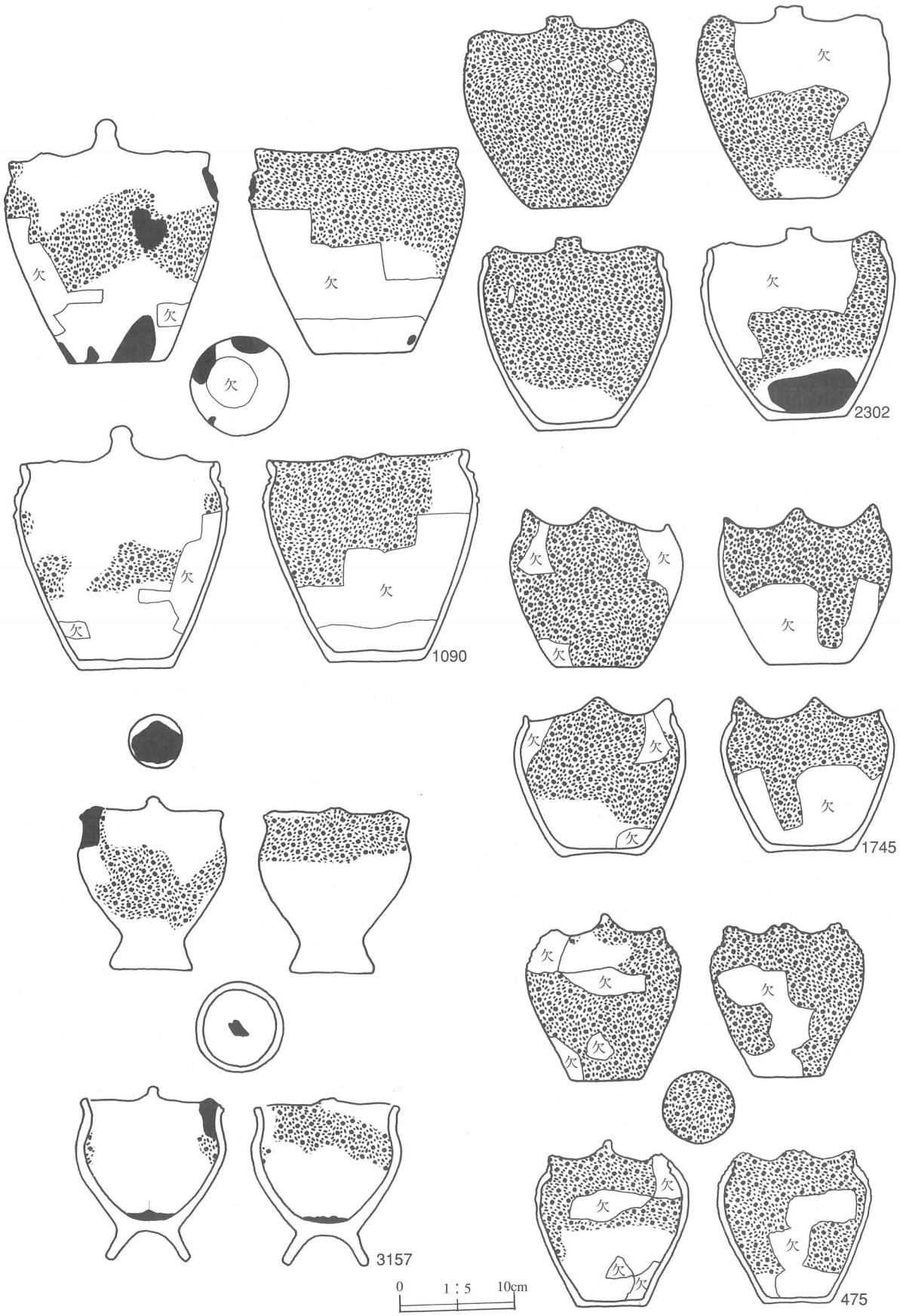
第 556 図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（20）



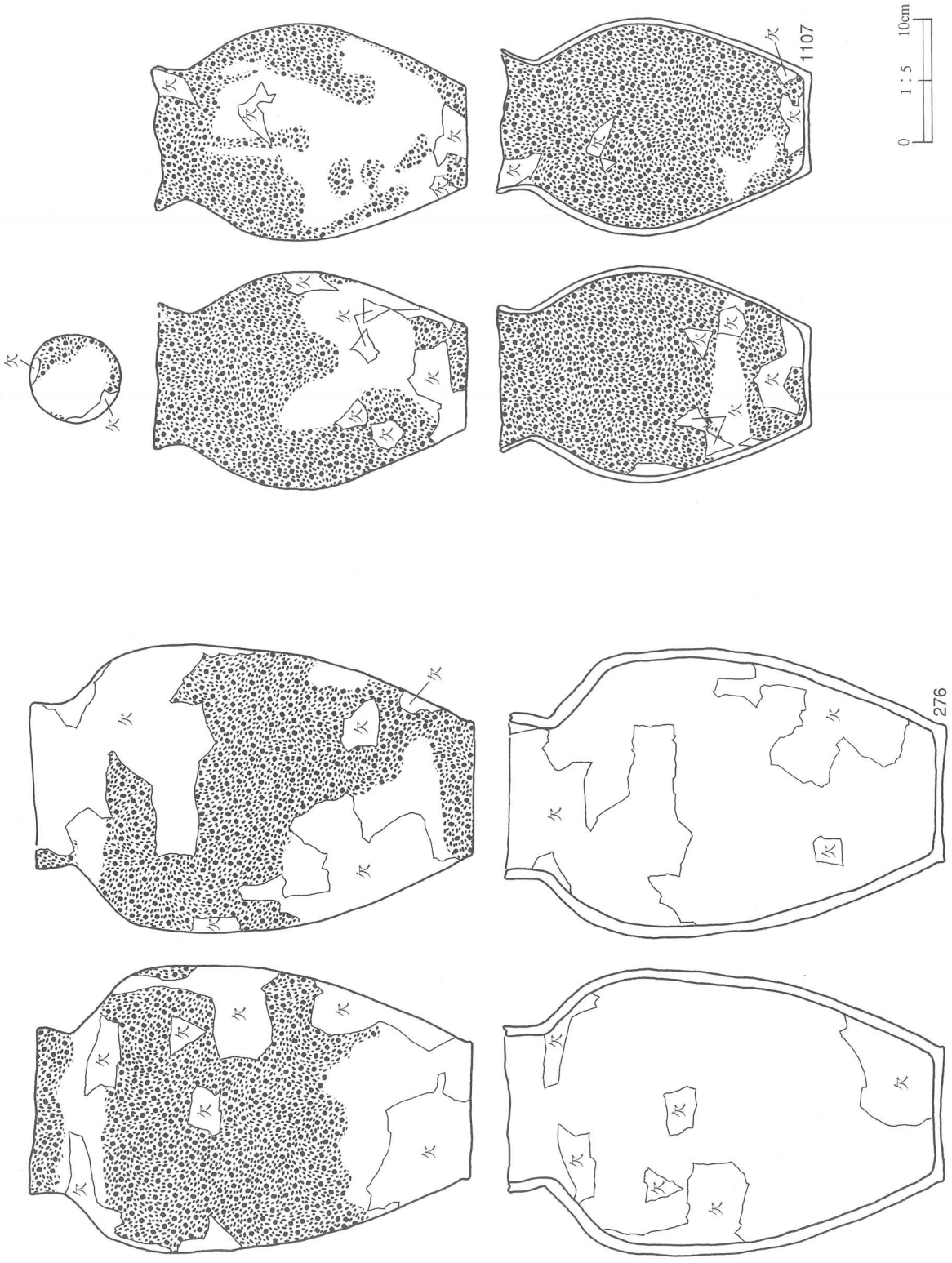
第 557 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（21）



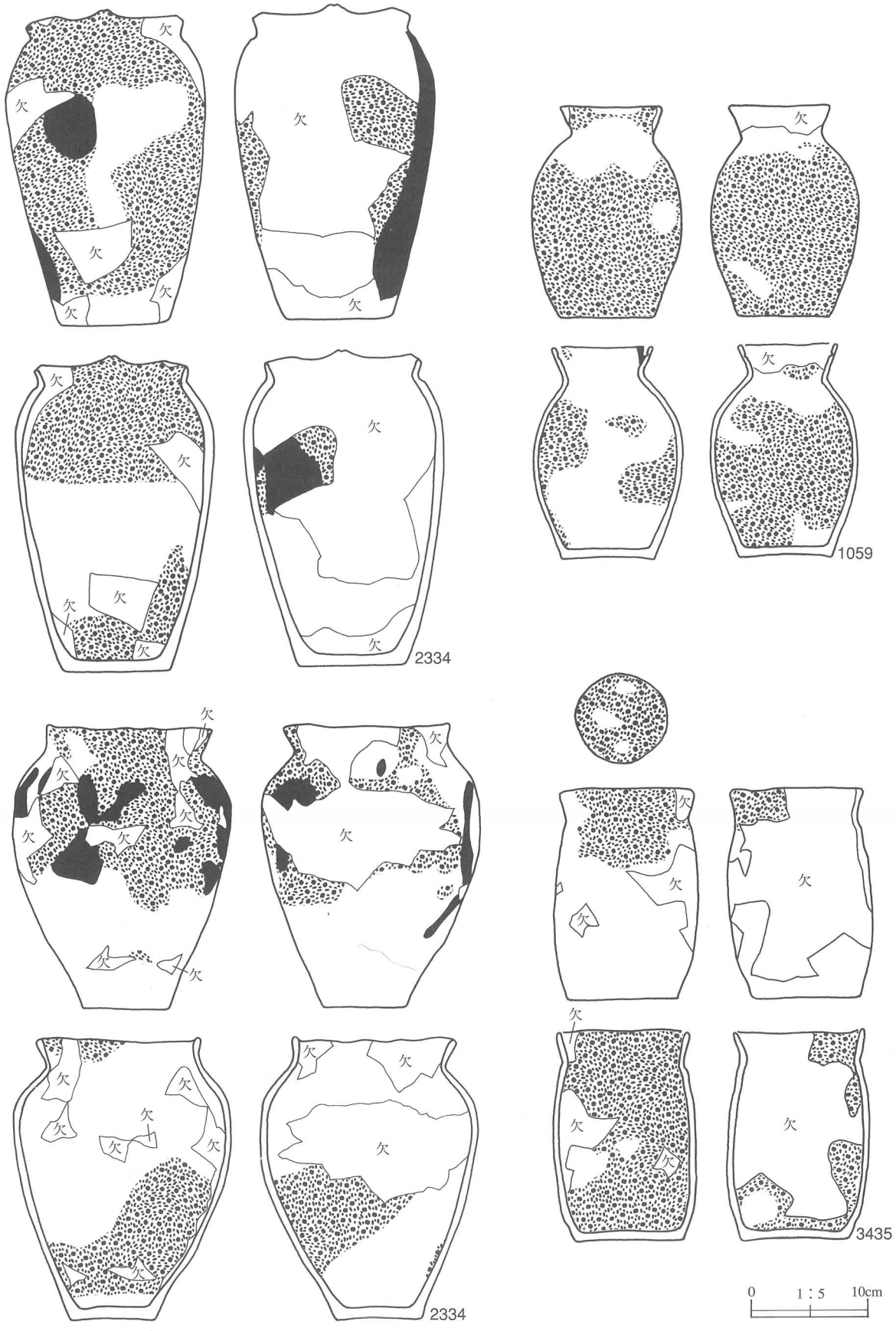
第 558 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（22）



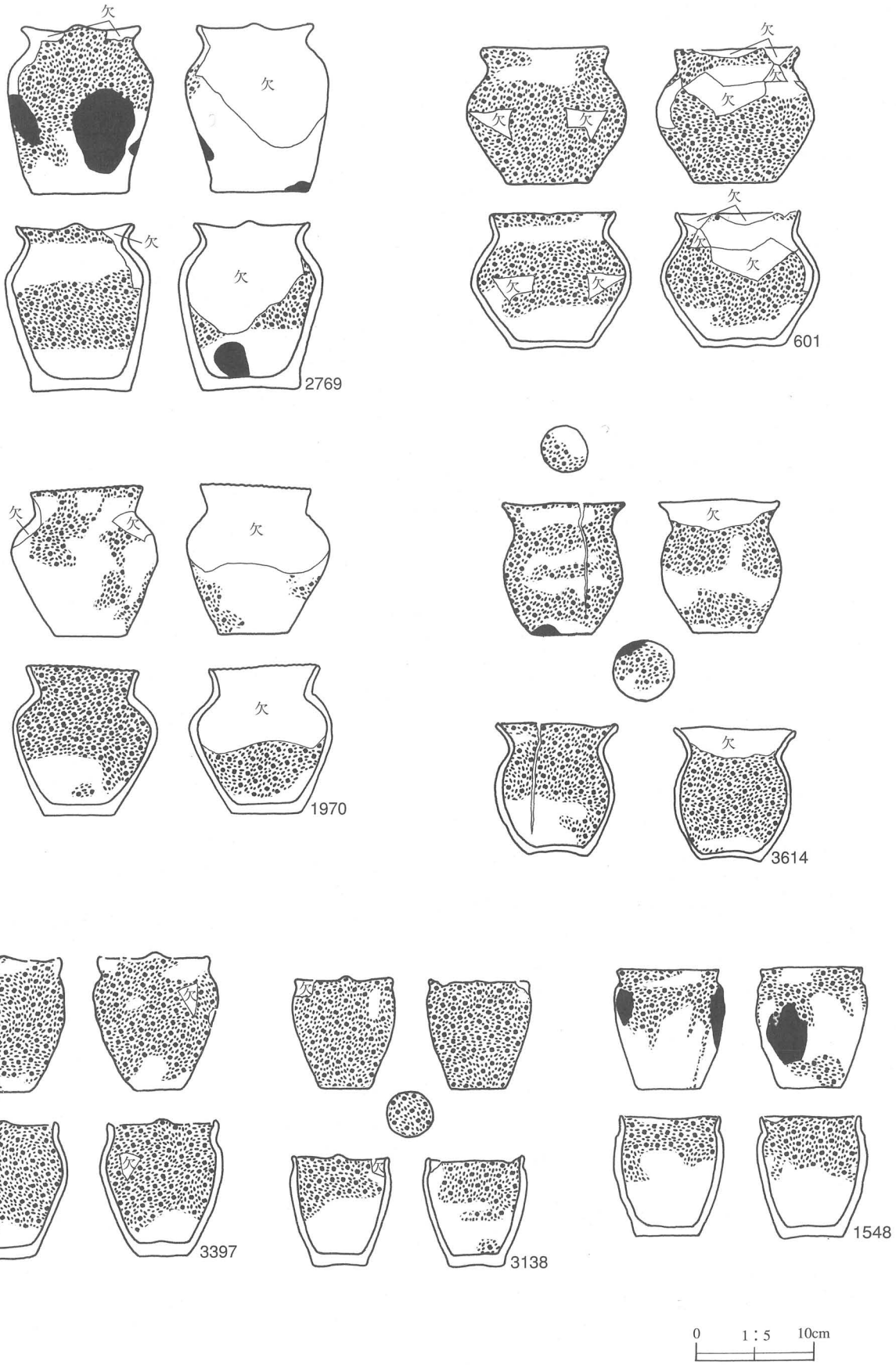
第 559 図　金附遺跡の黒斑・ス ス、コゲ痕（23）



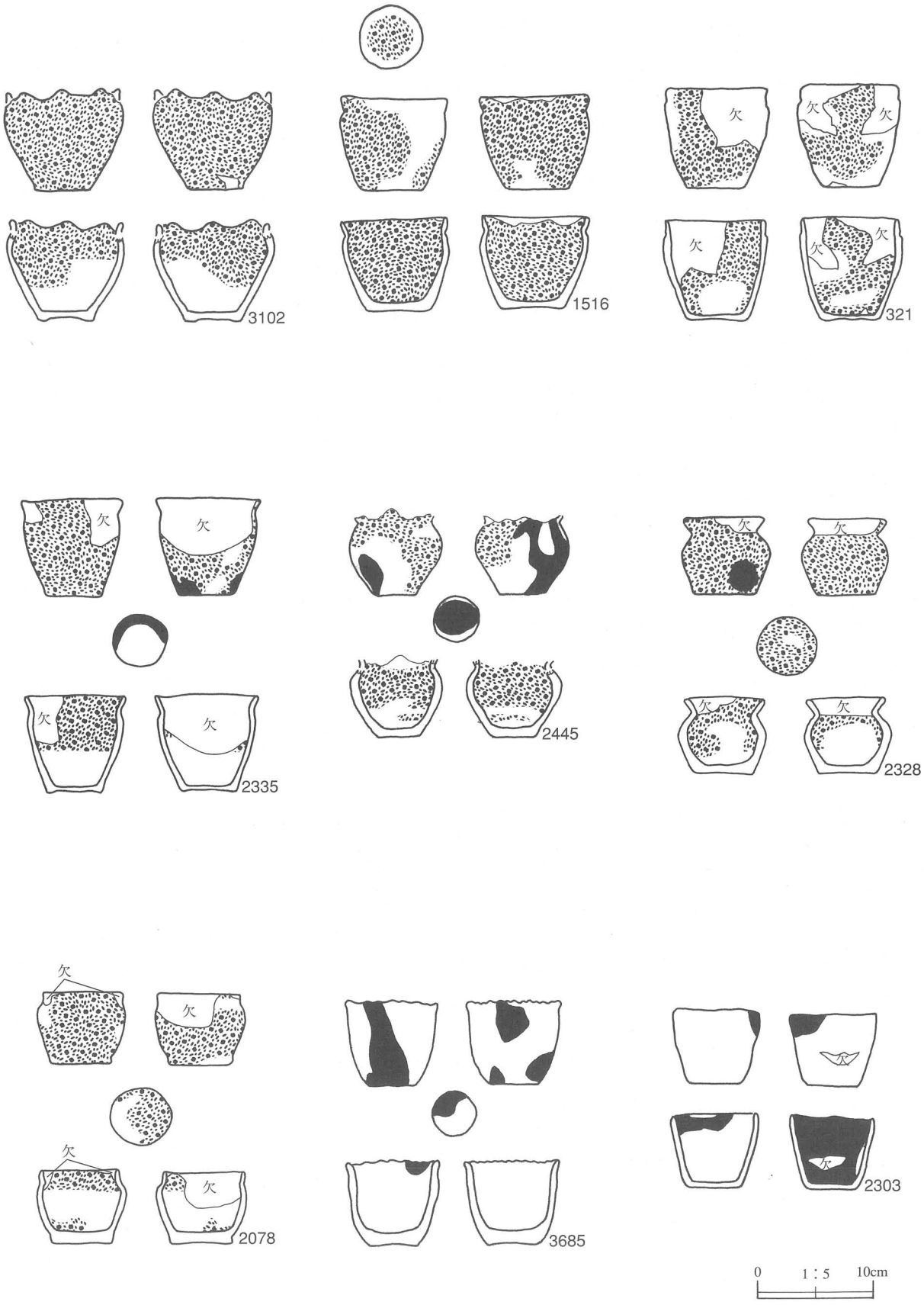
第 560 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（24）



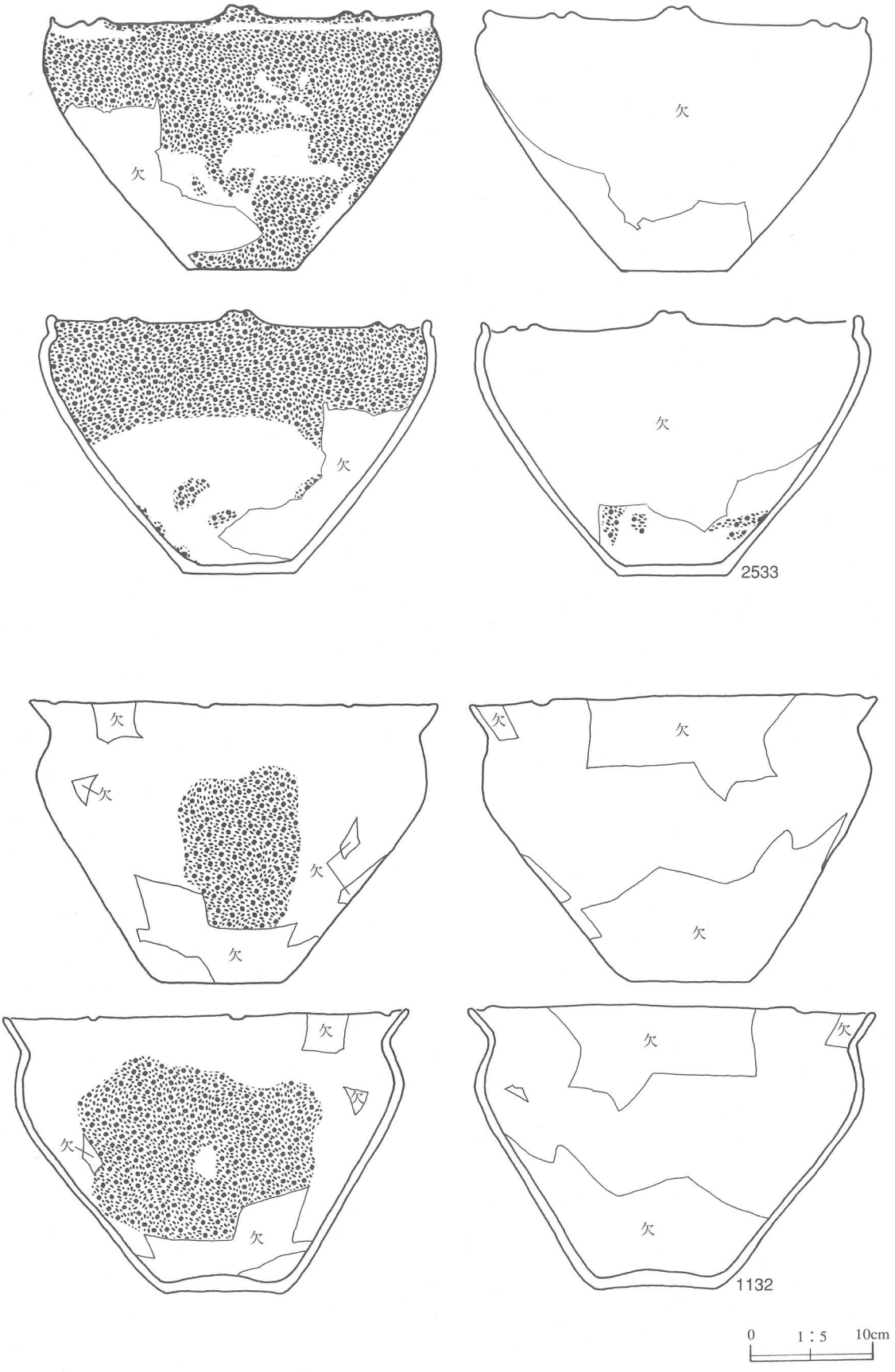
第 561 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（25）



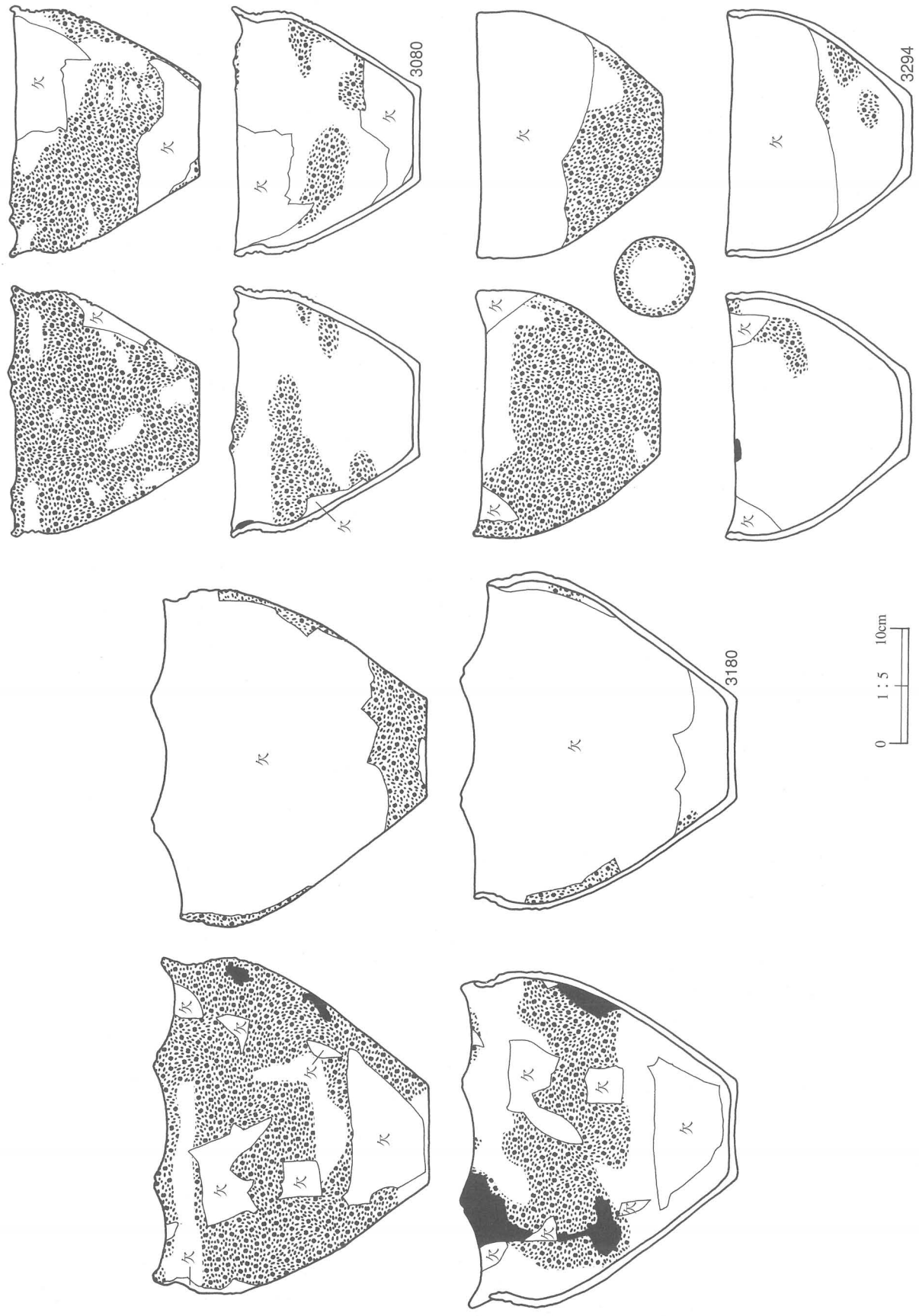
第 562 図　金附遺跡の黒斑・ス ス、コゲ痕（26）



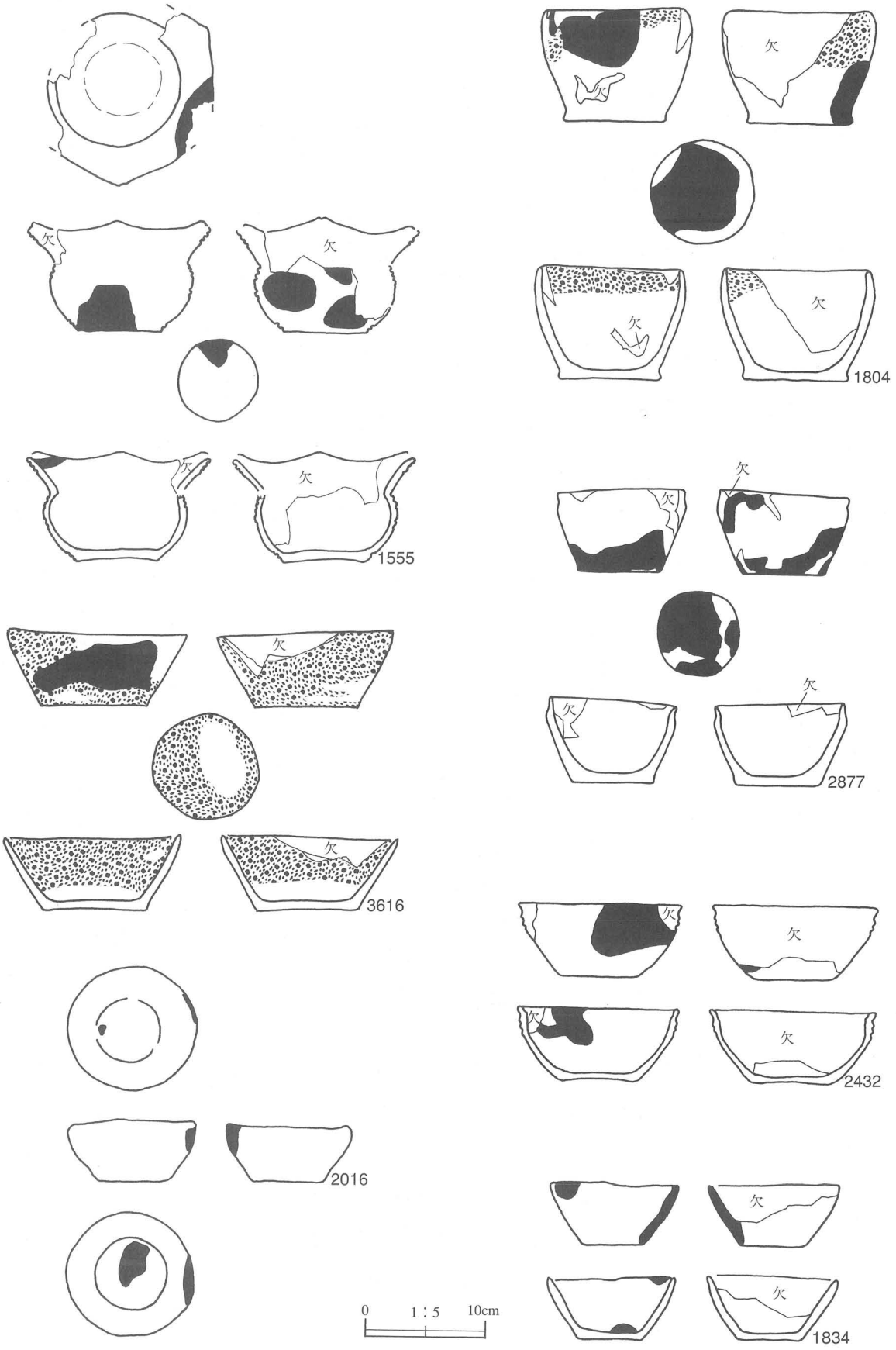
第 563 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（27）



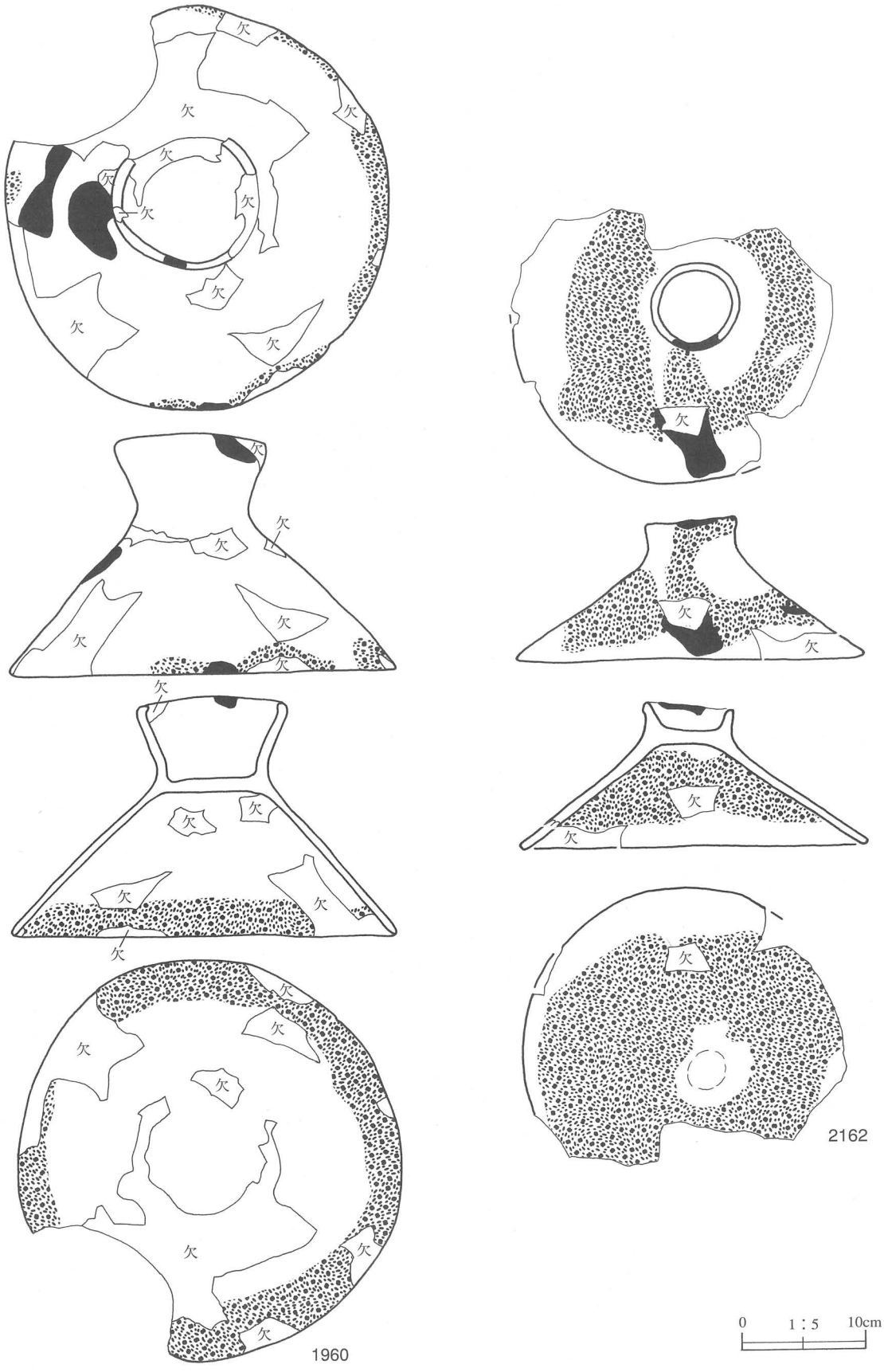
第564図　金附遺跡の黒斑・ス、コゲ痕（28）



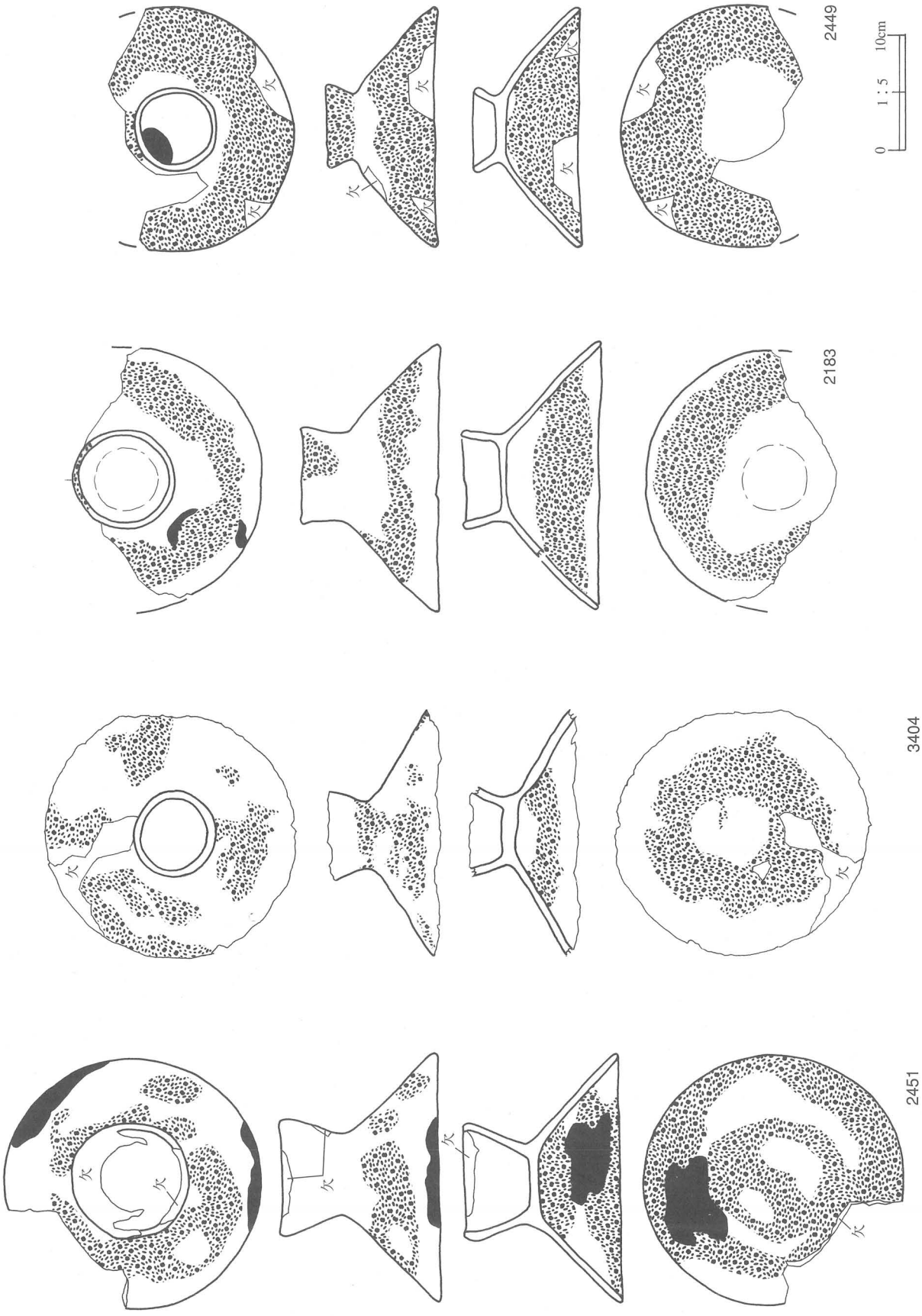
第 565 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（29）



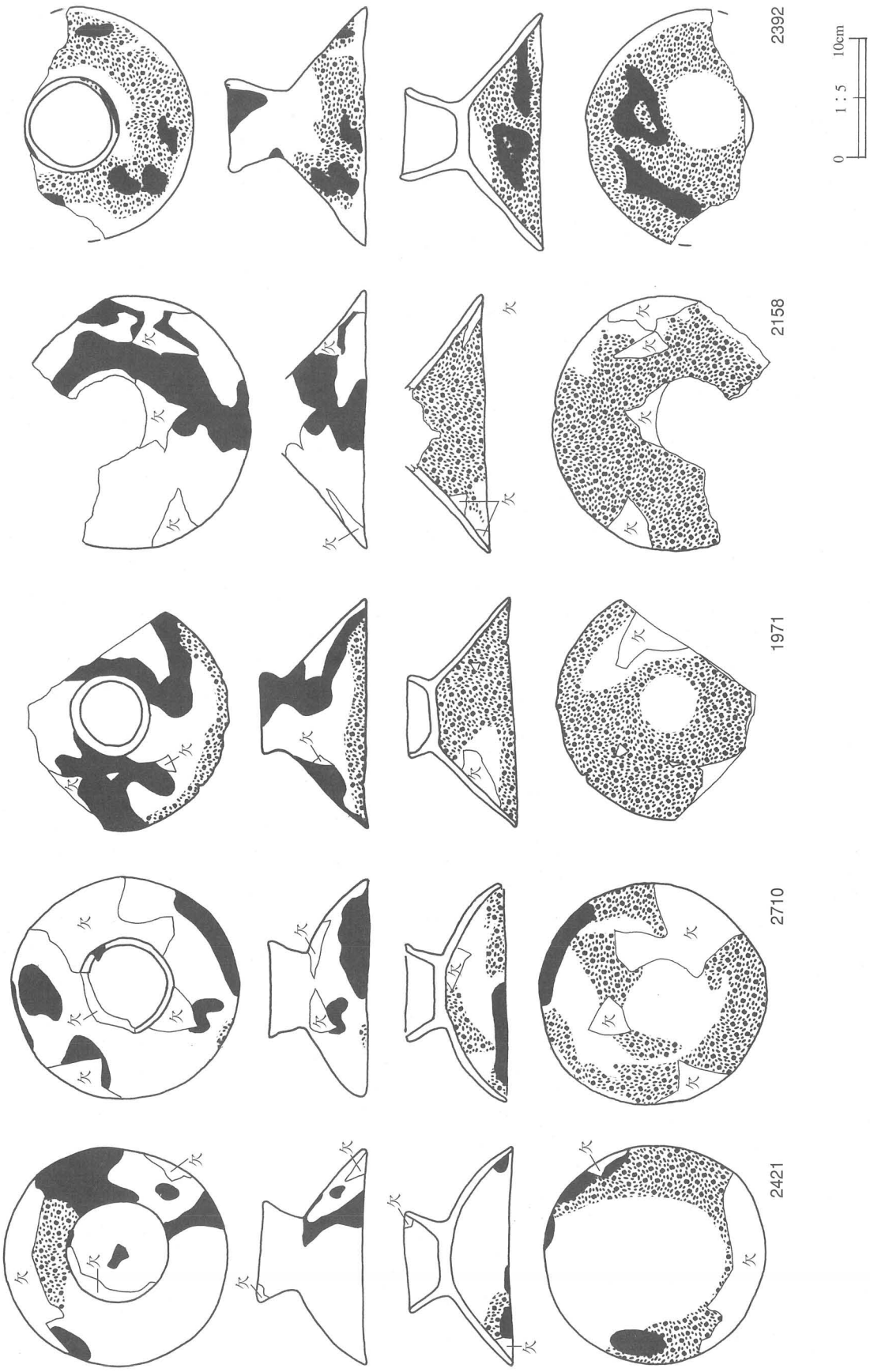
第 566 図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（30）



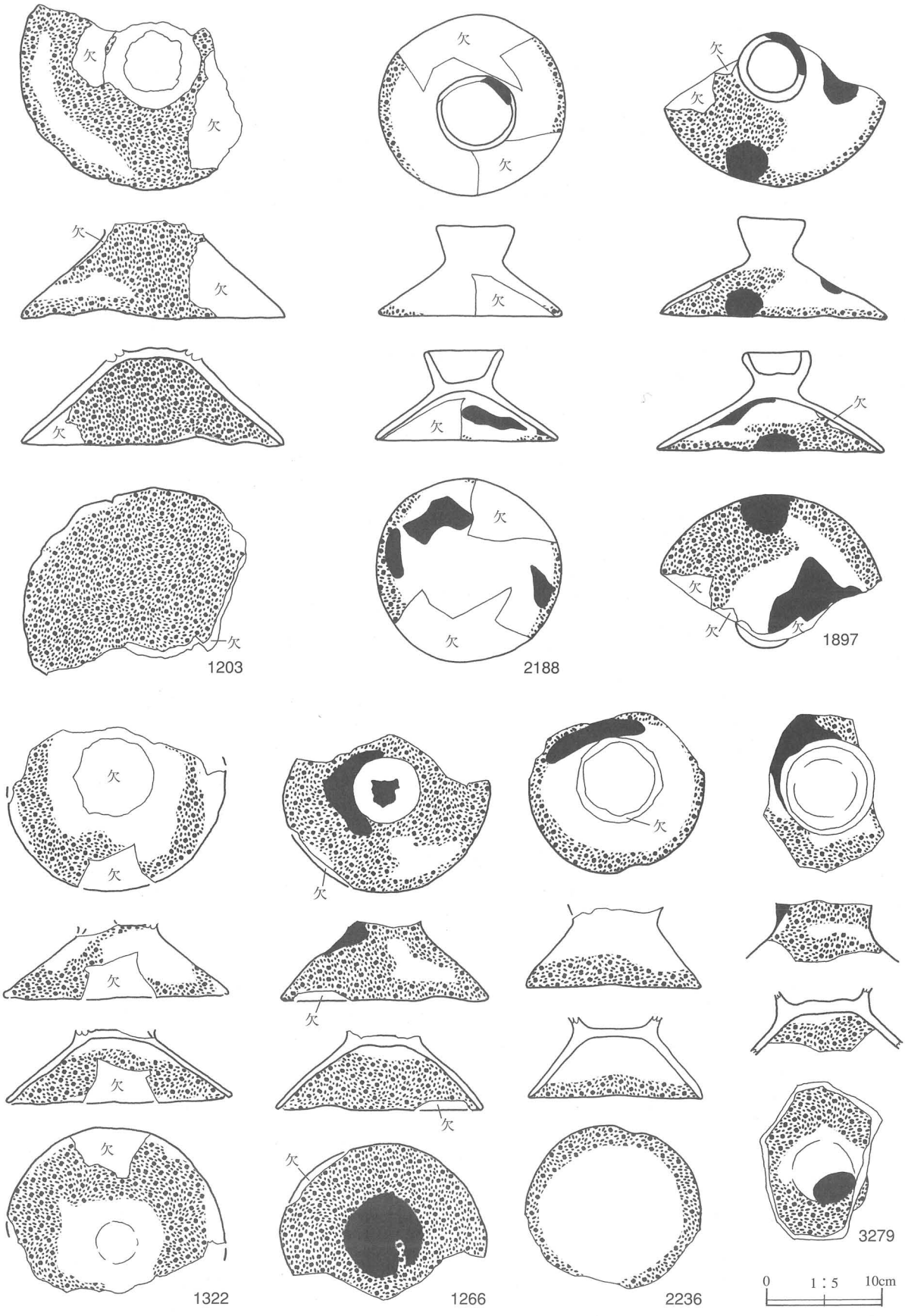
第 567 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（31）



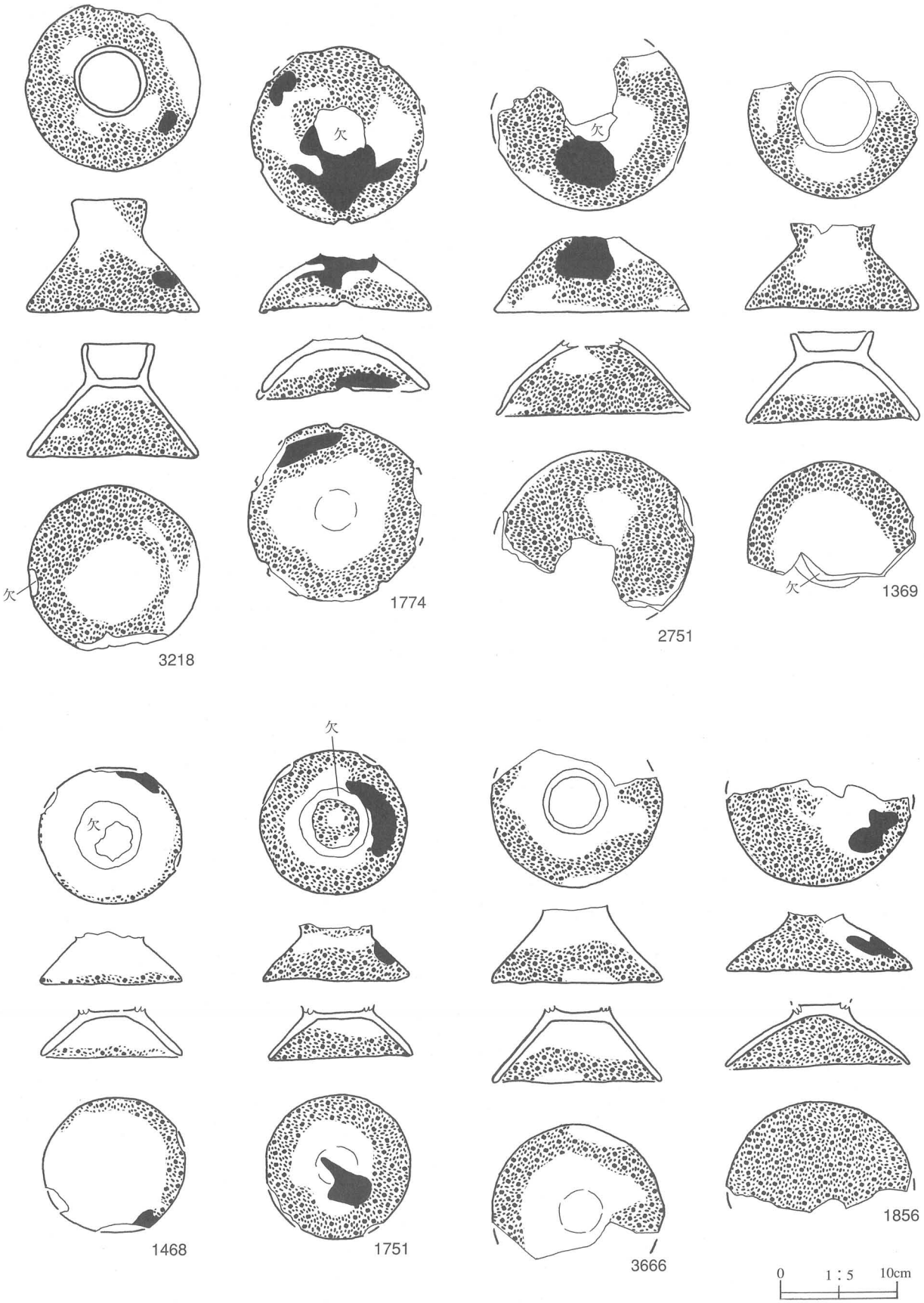
第 568 図　金附遺跡の黒斑・ススコゲ痕（32）



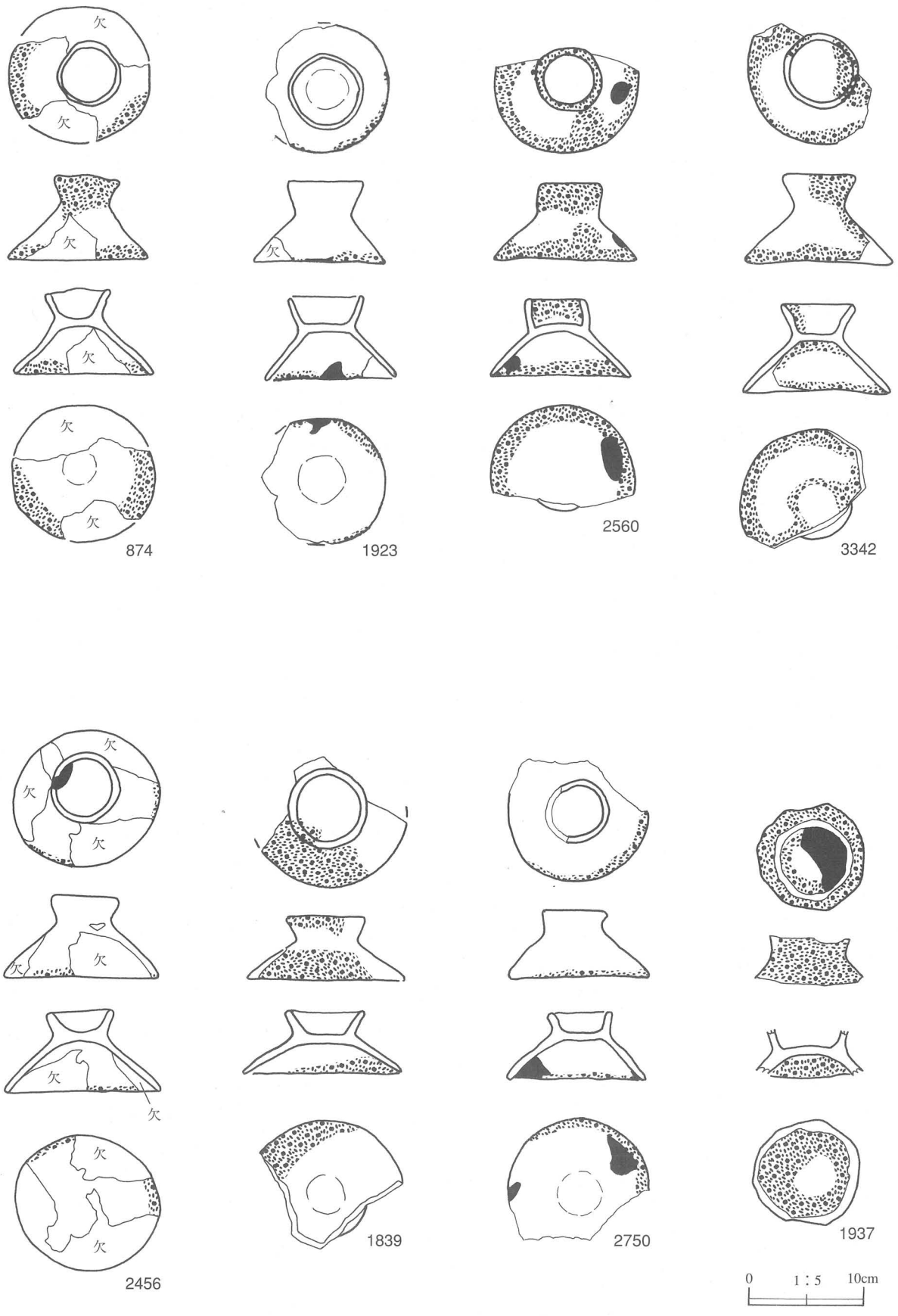
第 569 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（33）



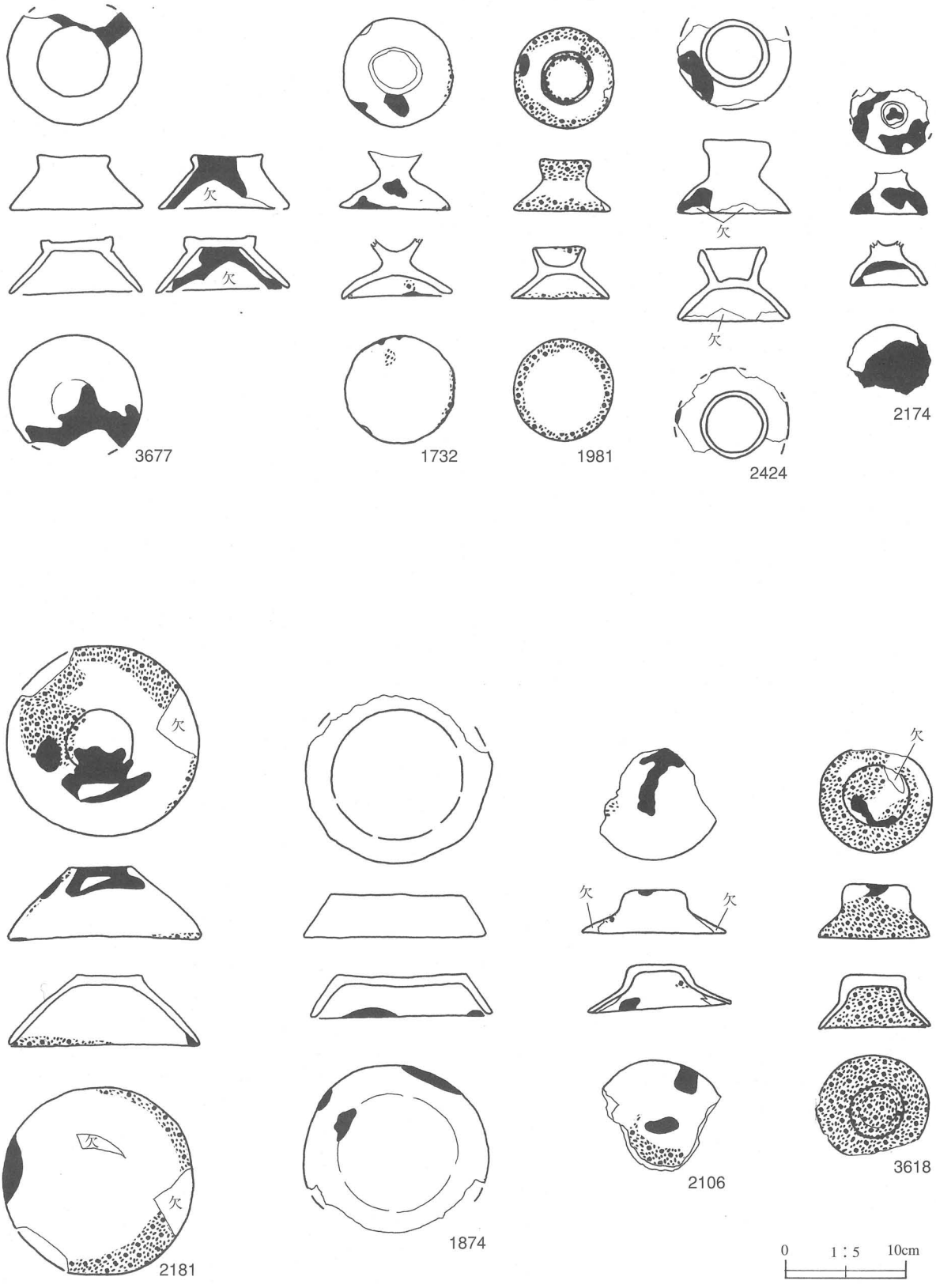
第 570 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（34）



第 571 図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（35）



第 572 図　金附遺跡の黒斑・ス、、コゲ痕（36）



第573図　金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕（37）

3　縄文時代晩期末～弥生時代前期の石器・石製品

金附遺跡の土器については、この間に顕著な変化は認められなかったが、石器については、どうであろうか。石器は、普通に出土する遺物の中で最も生業や生活・社会を反映していると考えられるので、幾つかの問題について検討してみたい。なお、環状石斧のように、石器と石製品のどちらに含めたらよいかわからない遺物が存在するので、ここでは両方扱うことにする。

(1) 組　　成

第Ⅵ章に記したように、石器は、原料も含めると、30 × 40 × 20cm のコンテナで約 780 箱出土している。石器は 23,453 点、剥片類は 683,659.13g 出土した。内訳は、石鏃 223 点、石鏃未成品 411 点、石錐 144 点、石篦 18 点、石匙 16 点、掻・削器等 A 類（U フレイク・R フレイク、ピエス・エスキーユ含む）68 点、掻・削器等 B 類 9 点、磨製石斧 24 点、磨製石斧未成品 5,008 点、打製石斧 1 点、「ハンマー類」13,181 点、台石 1,037 点、砥石 3,000 点、石皿 22 点、凹石 58 点、磨石 231 点、不明 2 点、剥片石器製作時の剥片 221,404.96g、その他（磨製石斧の製作剥片主体）の剥片 462,254.17g が調査で出土した。「ハンマー類」13,181 点のうち、2,086 点は多面体石で、また 493 点は通常の凹石に分類される可能性がある。

石製品は 457 点で、岩偶 1 点、玉類 14 点、その未成品 69 点、垂飾品 6 点、その未成品 10 点、有孔石 6 点、琥珀 3 点、環状石斧 4 点、その未成品 61 点、独鈷石未製品 31 点、石冠未製品 2 点、陽物型石製品 1 点、石棒（ほとんど未成品）8 点、石剣類未成品 219 点、不明（完成品）4 点、不明（未成品）18 点である。

縄文時代中期や後期の石器が混じっているとは言え大きな変動はないはずである。磨製石斧を中心として環状石斧や独鈷石、石剣類の製作が主として行われていた場所であることは間違いない。石鏃の未成品は、第Ⅵ章で見たように、この時期の拠点的な集落の一般的な在り方を示しているだけかも知れない。少ないとは言え、石匙や不定形石器、石皿も出土しているので、単なる製作跡ではなく集落跡でもあったのだろう。何より、大量に出土した土器が、それを裏づけるものと思われる。

第 574 図、第 575 図に、晩期の代表的な遺跡の石器組成を示した。目に付いた報告書のうち、出土石器が 100 点を越えていて他時期の土器の混じりが比較的少ないものを選んだだけで（川岸場Ⅱ遺跡は混じりが多い）、ここから云々するのは問題が多いが、最大公約数を捜せば、それほど的はずれな結果は出ないと考える。これを見ると、晩期の遺跡は、石鏃もしくは石匙や不定形石器が突出する遺跡が多いことがわかる（尖頭器とされているものの多くは、石鏃の未成品と考えて良いだろう）。また、この中で基準となるのは、比較的短期間に営まれ、立地からそれほど偏った生業でないと判断される、岩手県盛岡市本宮熊堂 A 遺跡である。他の遺跡と比べて、実にバランスの取れた石器組成を示している。

以上の点に配慮して再び金附遺跡に戻る。石器製作跡と通常の集落跡を比較するのは意味がないので、それ以外の器種をみると、石錐や磨製石斧、磨石や凹石、石皿に比べて、石匙や不定形石器が極端に少ないように思われる。

本遺跡の石匙の検討結果（第Ⅸ章））を他の晩期の遺跡にも敷衍できるとすれば、主として動物の解体作業に使われたことになる。あるいは毛皮の加工（皮なめし）まで含めても良いのだろうか。第 574 図、第 575 図によれば、石匙と不定形石器の両方とも多い遺跡は少なく、もし補い合う関係にあるとすれば、不定形石器も同様に使われる道具であるのかも知れない。

想像に想像を重ねてしまったが、いずれにしろ、本遺跡では、礫石器製作関係の石器が多いと共に、石匙と不定形石器が少ないのが特徴と言える。礫石器製作を主体とする生業と石匙や不定形石器を使用する生業とは両立しないのかも知れない。なお、第Ⅶ章で見たように、石器の製作は、晩期末から弥生前期まであまり大きな変化はなく続くようである。

(2) 石　　材

前任者から、基本的に本遺跡の石材は近接する北上川起源であるとの見通しを示されていたが、この方面の知識のない報告者（金子）には、よくわからない。また、この地域の石材についてまとめた論攷もないようである。したがって、現時点で明らかになることは少ないが将来に向けて、幾つかの器種の石材について検討してみた。まず、本遺跡で作っていた、石鏃、磨製石斧、石剣類、環状石斧、独鈷石、玉。本遺跡での製作品なら、周辺の石材の在り方を反映しているだろうとの見通しによる。基本的に100点を越えないと有意味な結果と言えないが、環状石斧や独鈷石にそれを求めても無理であろう。玉は、遺跡によっては100点を越える場合もあるだろうが。この他に、多面体石器を取り上げてみた。主に磨製石斧を敲くための石器であり、磨製石斧より珪質で硬く緻密な石材でならねばならない（阿部　1990）。つまり、特に石材を選ぶ石器で、そんな石でも近接する北上川河原から拾ってきたのか検討してみたのである。

掲載していないものが大部分なので、第5表に、その内訳を示した。結果を示したのが、第576図～第579図である。以下、特に気の付いた点について述べていく。

まず、石鏃。黒曜石の少なさに、石材を近隣に求める本遺跡の特徴が窺える。それでも鋭利さを追求するゆえか頁岩に拘っていると言える。頁岩への拘りは、石剣類にも見られ、さらに何故か独鈷石にも認められる。もっとも、独鈷石の場合は、対象点数が少ないことによる偶然の可能性も高い。玉類は、加工しやすい凝灰岩とそれに硬さをプラスした頁岩を選んでおり、残りの石材の点数から考えれば、偶然でなく必然の可能性が高い。

その他の環状石斧、磨製石斧、多面体石器は、石材が分かれることを積極的に評価した方が良いようだ。磨製石斧は、製作点数が多いので選んでいられないのだろう。多面体石器も同様で、とにかく硬くて緻密なら何でも良いという姿勢が窺える。環状石斧が分かれるというのがよくわからない。点数も少ないのだから、もっと積極的に石材に拘っても良いように思うのだが。用途を推測する手がかりになるかも知れない。

(3) そ　の　他

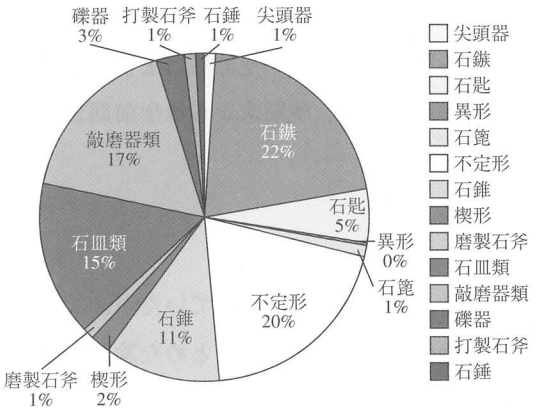
その他、幾つかの点について検討してみた。

・石鏃の完成品と未成品の大きさの違い

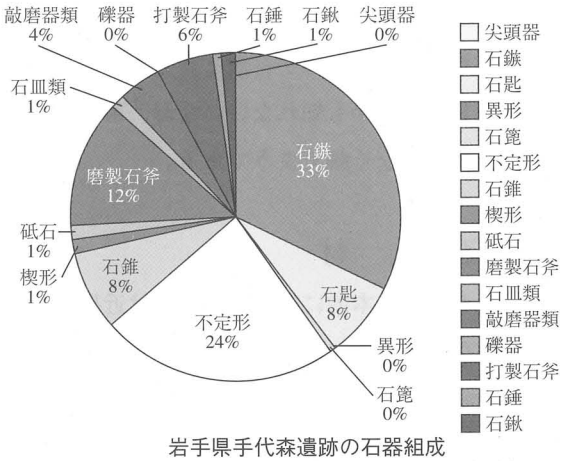
内訳を第6表に、結果を第580図に示した。当然といえば当然だが、未成品はバラつき、完成品より大きい方に偏るのに対し、完成品は比較的集中している。未成品の中でもより完成品に近いⅠ22の方がバラツキが少ないのも納得できる。完成品は、幅に比べて長さが比較的バラついており、これはおそらく欠損による再生の有無を物語っているのであろう（三上　1990）。したがって、本遺跡は、石鏃を作るだけではなく使用もしていたことが窺われる。

・磨製石斧の完成品と未成品の大きさの違い

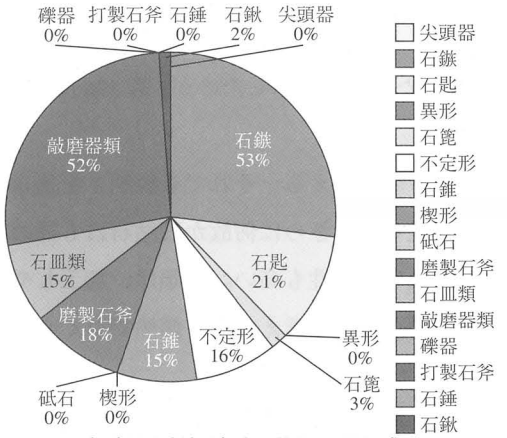
内訳を第6表に、結果を第581図に示した。石鏃と同様で、完成に近づくにつれ一箇所に集中してくるが、石鏃と違って破片がほとんどで全体のわかるものが少なく、それ以上はよくわからない。



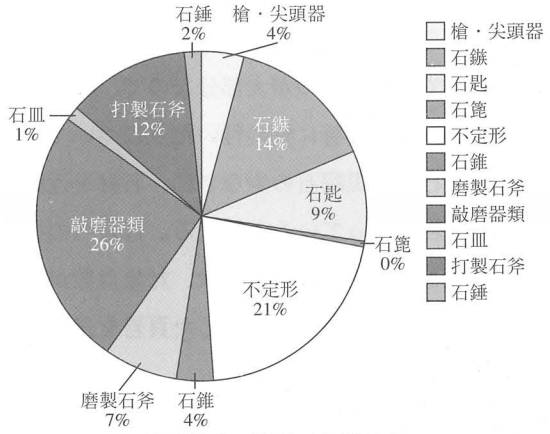
岩手県本宮熊堂Ａ遺跡の石器組成
（(財）岩手県文化振興事業団 2004 より作成）



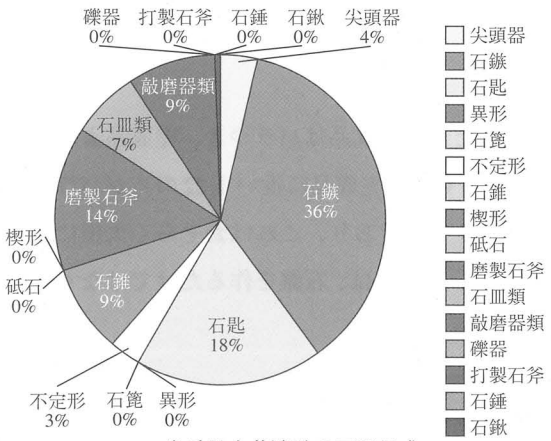
岩手県手代森遺跡の石器組成
（(財）岩手県文化振興事業団 1986 より作成）



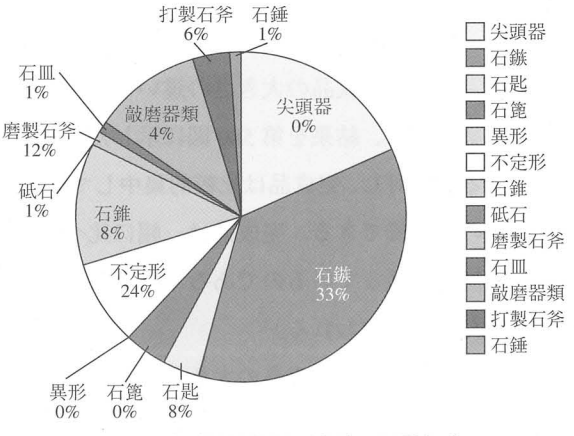
岩手県上杉沢遺跡の住居石器組成
（浄法寺町教育委員会 2001 より作成）



岩手県小田遺跡の石器組成
（大迫町教育委員会 1979 より作成）

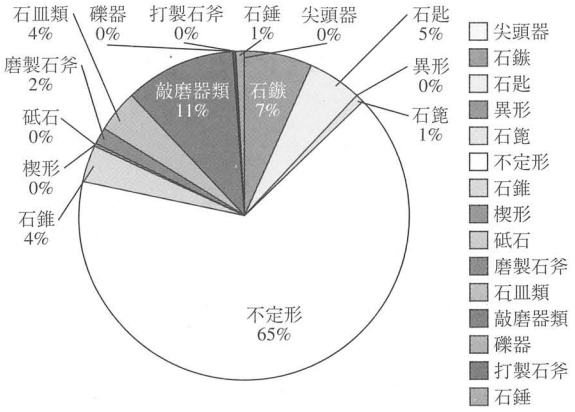


岩手県山井遺跡の石器組成
（一戸町教育委員会 1995 より作成）

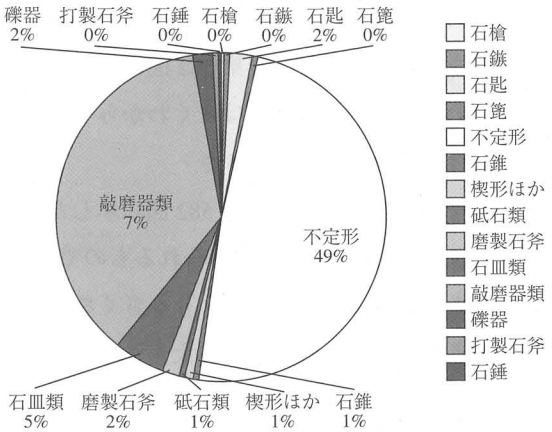


岩手県川岸場Ⅱ遺跡の石器組成
（(財）岩手県文化振興事業団 2000 より作成）

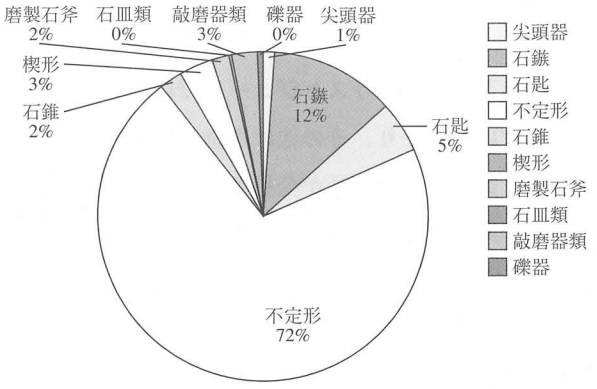
第 574 図　縄文時代晩期の石器組成（1）



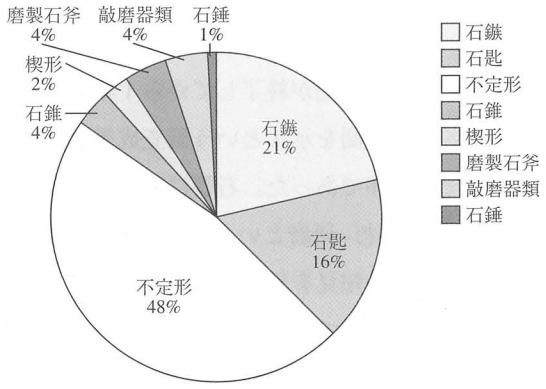
青森県是川中居遺跡の石器組成
（八戸市教育委員会 2005 より作成）



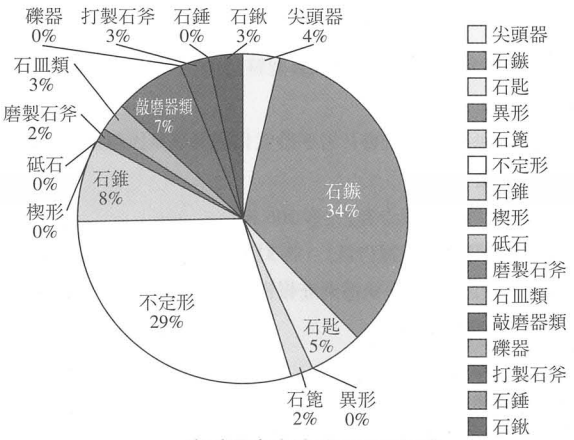
秋田県家ノ後遺跡の石器組成
（秋田県教育委員会 1992 より作成）



岩手県大芦Ⅰ遺跡捨て場の石器組成
（(財) 岩手県文化振興事業団 1999 より作成）



秋田県戸平川遺跡Ｃ区の石器組成
（秋田県教育委員会 2000 より作成）



岩手県東裏遺跡の石器組成
（岩手県教育委員会 1981 より作成）

第 575 図　縄文時代晩期の石器組成（2）

・環状石斧の完成品と未成品の大きさの違い

内訳を第6表に、結果を第582図に示した。磨製石斧と同様で、完成に近づくにつれ一箇所に集中してくるのはわかるが、それ以上はよくわからない。

・多面体石器の廃棄時の大きさ

内訳を第6表に、結果を第582図に示した。分類が不適当でわかりづらくなってしまったが、1～4は大きさで、B、Cが使用痕が認められるものである。4cm付近のものは破片（0類）を間違って分類している可能性もあり、基本的には6cmより小さくなってしまうと耐用限度を超え、捨てられる運命にあったと考えて良さそうである。これは、手の大きさと敲打という激しい作業におそらく関係しているのだと思われる。すなわち、これより小さいと手を打ち付ける恐れが高いということであろう。

組成に示したように、本遺跡は石器製作跡であり、この点に関しての多くの情報が含まれているはずである。特に磨製石斧については、東北地方でも有数の製作跡であり、検討すべき課題も多く、文献もそれなりに集めてみた。近年刊行された報告書では、新潟県朝日村アチヤ平遺跡が石器製作跡であり、詳細な分析がなされているが（朝日村教育委員会　2002）、東北地方では、まだ規模の大きな石器製作跡の報告はないようであり、本報告書の果たす役割は大きいのであろう。

しかし、遺物水洗が終了してから1年4ヶ月後に図版まで終了するというスケジュールでは、土器を中心として各層の時期を示すという調査成果の基本中の基本を示すにとどまり、その他は遺物の観察表を作成するだけで精一杯であった。石器に不慣れな報告者（金子）は、最も多く未成品が発見された磨製石斧についても、剥離-敲打-研磨という通常の製作段階を経ていること、研磨段階での失敗は少ないこと、など当たり前の事実以上の知見を短期間の観察で得ることはできなかった。

ただし、第Ⅲ章で述べたように、遺物はなくなるわけではない。各層の時期は示したつもりなので、これを元に石器について再整理することも十分可能である。意欲的な研究者を待望するものである。

参考文献

秋田県教育委員会　1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-家ノ後遺跡-』秋田県文化財調査報告書第229集
2000『戸平川遺跡』（第294集）
朝日村教育委員会　2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡上段』朝日村文化財報告書第21集
阿部朝衛　1990「多面体を呈する敲石　再論」『帝京史学』第5号　帝京大学文学部史学科
一戸町教育委員会　1995『山井遺跡』一戸文化財調査報告書第36集
岩手県教育委員会　1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（一関地区　東裏遺跡）』岩手県文化財調査報告書第55集
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986『手代森遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集
1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（第306集）
2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（第317集）
2004『本宮熊堂A遺跡第17次発掘調査報告書』（第453集）
大迫町教育委員会　1979『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第4集
浄法寺町教育委員会　2001『上杉沢遺跡』
八戸市教育委員会　2005『是川中居遺跡4』八戸市埋蔵文化財調査報告書第107集
三上徹也　1990「縄文石器における『完形品』の概念について」『縄文時代』第1号　縄文時代文化研究会

第５表　石質分析資料一覧

環状石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	備考
114	ＭⅠ20・2-3b2層	凝灰岩（奥羽）	完形品
115	ＭⅡ22・2-3b2層	デイサイト（奥羽）	完形品
116	ＮⅡ13・Ⅱ層	閃緑岩（北上）	完形品
145	ＭⅠ24・4b層、ＭⅡ16・4b層	砂岩（奥羽）	
146	ＭⅠ25・4b層	デイサイト（奥羽）	
147	ＭⅡ11，16・Ⅳａ層トレンチ、ＭⅡ22，2・Ⅳａ層トレンチ	砂岩（奥羽）	
148	ＭⅡ20・1層	安山岩（奥羽）	
149	ＭⅡ22・1層	砂岩（奥羽）	
150	ＭⅡ22，3・Ⅳａ層トレンチ	デイサイト（奥羽）	
151	ＭⅡ23・4b層	デイサイト（奥羽）	
152	ＭⅡ24，4・Ⅳａ層トレンチ	安山岩（奥羽）	
153	ＭⅡ24，25・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
154	ＭⅢ4・2-3b2層	安山岩（奥羽）	
155	ＭⅢ13・3-4層	デイサイト（奥羽）	
156	ＭⅢ21・2-3b層	安山岩（奥羽）	
157	ＭⅢ②・Ⅳ層上部	閃緑岩（北上）	
158	ＭⅢ④・Ⅲ～Ⅳａ層上部	凝灰岩（奥羽）	
159	ＮⅠ5・4層	安山岩（奥羽）	
160	ＮⅠ④・Ⅲ～Ⅳａ層	凝灰岩（奥羽）	
161	ＮⅡ6，11・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
162	ＮⅡ7，8・Ⅳａ層トレンチ	砂岩（奥羽）	
163	ＮⅡ9・1-2層と4b層トレンチ	砂岩（奥羽）	
164	ＮⅡ10・3層	砂岩（奥羽）	
165	ＮⅡ16，21・Ⅳａ層トレンチ	デイサイト（奥羽）	
166	ＮⅡ19，24・Ⅳａ層トレンチ	安山岩（奥羽）	
167	ＮⅢ1・3層	凝灰岩（奥羽）	
168	ＮⅢ6，11・Ⅳａ層トレンチ	安山岩（奥羽）	
169	ＮⅢ11・4層	花崗閃緑岩（北上）	
171	ＯⅠ2・1層	デイサイト（奥羽）	
172	ＯⅠ22・2層	凝灰岩（奥羽）	

独鈷石（未成品）

番号	出土地点	石質	備考
181	ＬⅡ24・2b層	デイサイト（奥羽）	
183	ＬⅢ②・Ⅲ～Ⅳａ層トレンチ	頁岩（北上）	
184	ＬⅢ②・Ⅲ～Ⅳａ層トレンチ	頁岩（北上）	
185	ＭⅡ4・3層	頁岩（北上）	
186	ＭⅡ5・3-4層	斑糲岩（北上）	
187	ＭⅡ9，16・Ⅳａ層トレンチ	斑糲岩（北上）	
188	ＭⅡ15・3-4層	凝灰岩（奥羽）	
189	ＭⅡ16・2-3b2層	頁岩（北上）	
190	ＭⅡ23・2層	頁岩（北上）	
191	ＭⅢ1，6・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（北上）	
192	ＭⅢ21・9層	頁岩（北上）	
193	ＭⅢ22，2・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（奥羽）	
194	ＭⅢ②・Ⅲ～Ⅳａ層上部トレンチ	頁岩（北上）	
195	ＮⅡ3・4b層	頁岩（北上）	
196	ＮⅡ16・3層	安山岩（奥羽）	
197	ＮⅢ1・4c層	ホルンフェルス（北上）	
198	ＮⅢ2・4c層	頁岩（北上）	
199	ＮⅢ4，5・Ⅳａ層、ST01　T8	頁岩（奥羽）	
200	ＮⅢ7・4c下層	頁岩（奥羽）	
201	ＮⅢ16・4-5層	砂岩（北上）	
202	ＯⅠ2・1層	斑糲岩（北上）	
203	ＯⅠ5・2層	頁岩（北上）	
204	ＯⅡ3・3層	頁岩（北上）	
205	ＯⅡ3，8・Ⅳａ層トレンチ	砂岩（北上）	

玉（未成品）

番号	出土地点	石質	備考
31	ＬⅡ22・3b層	頁岩（奥羽）	
32	ＬⅡ24，25・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（奥羽）	
33	ＬⅢ7・10層	凝灰岩（奥羽）	
34	ＬⅢ9・10層	凝灰岩（奥羽）	
35	ＬⅢ10・1c層	凝灰岩（奥羽）	
36	ＬⅢ16・3中層	凝灰岩（奥羽）	
37	ＬⅢ16，21・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
38	ＬⅢ18・10層	凝灰岩（奥羽）	
39	ＬⅢ19・2-3b2層	頁岩（奥羽）	
40	ＬⅢ21・10層	凝灰岩（奥羽）	
41	ＬⅢ23・3-4層	凝灰岩（奥羽）	
42	ＬⅢ23・3-4層	凝灰岩（奥羽）	
44	ＭⅠ15・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（奥羽）	
45	ＭⅠ25・3層	頁岩（奥羽）	
46	ＭⅠ25・4b層（SN16焼土下）	デイサイト（奥羽）	
47	ＭⅠ25，21・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
48	ＭⅡ6・3上層	凝灰岩（奥羽）	
49	ＭⅡ10・Ⅳｂ層	凝灰岩（奥羽）	
50	ＭⅡ10・6層	凝灰岩（奥羽）	
51	ＭⅡ13，18・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
52	ＭⅡ22，23・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
53	ＭⅡ23・2層	頁岩（奥羽）	
54	ＭⅡ23，3・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（奥羽）	
55	ＭⅢ25・2-3b層	頁岩（奥羽）	
56	ＮⅠ5・5層	頁岩（奥羽）	
57	ＮⅡ3・4b層	頁岩（奥羽）	
58	ＮⅡ4・3層	頁岩（奥羽）	
59	ＮⅡ4・4b層	凝灰岩（奥羽）	
60	ＮⅡ5・3層	頁岩（奥羽）	
61	ＮⅡ10・4-5層	頁岩（奥羽）	
62	ＮⅡ15・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
63	ＮⅡ17，18・Ⅳａ層トレンチ	凝灰岩（奥羽）	
64	ＮⅡ19・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
65	ＮⅡ19・4-5層	頁岩（奥羽）	
66	ＮⅡ24・4-5層	頁岩（奥羽）	
67	ＮⅢ1・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
68	ＮⅢ1，2・Ⅳａ層トレンチ	頁岩（奥羽）	
69	ＮⅢ2・4c層	頁岩（奥羽）	
70	ＮⅢ2・4c層	凝灰岩（奥羽）	
71	ＮⅢ6・　1-2層	頁岩（奥羽）	
72	ＮⅢ8・1b層	瑪瑙（北上）	
73	ＮⅢ11・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
74	ＮⅢ12・1-2層	頁岩（奥羽）	
75	ＮⅢ16・1-2b層	頁岩（奥羽）	
76	ＮⅢ16・2-3b2層	頁岩（奥羽）	
77	ＮⅢ16・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
78	ＮⅢ②・Ⅳａ層	頁岩（奥羽）	
79	ＯⅡ2・3層	凝灰岩（奥羽）	
80	ＯⅡ3・3層	頁岩（奥羽）	
81	ＯⅡ4・4-5層	凝灰岩（奥羽）	
82	ＯⅡ11・2層	頁岩（奥羽）	
83	ＯⅡ11・2層	凝灰岩（奥羽）	
84	ＰⅠ6・2層	閃緑岩（北上）	

※　第５～６表（および第576～582図）は、個々の遺物の観察表作成前に作成したもので、個々の遺物の観察表と若干違う点がある。

石剣類（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
227	L Ⅱ 25・3 層	頁岩（北上）	2			
228	L Ⅲ 11・2b 層	頁岩（北上）	2			
229	L Ⅲ 12・2-3b2 層	砂岩（北上）	3			
230	L Ⅲ 16，17・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	3			
231	M Ⅰ 20・2-3b2 層	頁岩（北上）	3			
232	M Ⅰ 24・4b 層	頁岩（北上）	3			
233	M Ⅱ 3・2c 層	頁岩（北上）	2			
234	M Ⅱ 5・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	3			
235	M Ⅱ 5・3 層	頁岩（北上）	1B			
236	M Ⅱ 5，10・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1B			
237	M Ⅱ 9・2b 層	頁岩（北上）	1B			
238	M Ⅱ 9，10・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
239	M Ⅱ 12，17・Ⅳa 層トレンチ上から 60cm 下まで	頁岩（北上）	2			
240	M Ⅱ 13・1 上層	珪化木（北上？）	1B			
241	M Ⅱ 14・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
242	M Ⅱ 15・2b 層	頁岩（北上）	3			
243	M Ⅱ 20・3 層	砂岩（北上）	2			
244	M Ⅱ 21・3 層	砂岩（北上）	1B			
245	M Ⅱ 21，1・3 層	頁岩（北上）	1B			
246	M Ⅱ 22・2-3b 層	ホルンフェルス（北上）	3			
247	M Ⅱ 23・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
248	M Ⅱ 23・3 層	砂岩（北上）	3			
249	M Ⅱ 23，3・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
250	M Ⅱ 24・2-3b2 層	頁岩（北上）	1A			
251	M Ⅱ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1B			
253	M Ⅲ 3・3-4 層	頁岩（北上）	3			
254	M Ⅲ 6・2b 層	頁岩（北上）	3			
255	M Ⅲ 11・3-4 層	砂岩（北上）	3			
256	M Ⅲ 11，16・Ⅳa 層トレンチ	砂岩（北上）	1B			
257	M Ⅲ 13・2-3b2 層	砂岩（北上）	1B			
258	M Ⅲ 21，22・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
259	M Ⅳ①・南端トレンチⅣb～Ⅴ層	頁岩（北上）	3			
260	N Ⅰ 5・Ⅳb 層上面	頁岩（北上）	2			
261	N Ⅰ 5，1・Ⅳa 層トレンチ	砂岩（北上）	3			
262	N Ⅰ 10・5 層	頁岩（北上）	3			
263	N Ⅱ 3・4b 層	頁岩（北上）	2			
264	N Ⅱ 5・4b 層	頁岩（北上）	1A			
265	N Ⅱ 6・1-2 層	頁岩（北上）	2			
266	N Ⅱ 10，15・Ⅳa 層トレンチ上から 15～30cm まで	頁岩（北上）	2			
267	N Ⅲ 1・4c 層	頁岩（北上）	1A			
268	N Ⅲ 1・4c 層	頁岩（北上）	3			
269	N Ⅲ 1，2・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1B			
270	N Ⅲ 7・4c 下層	頁岩（北上）	3			
271	N Ⅲ 7，12・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1B			
272	N Ⅲ 11・4 層	頁岩（北上）	2			
273	O Ⅱ 3・4-5 層	頁岩（北上）	2			
274	O Ⅱ 7，8・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1B			
275	P Ⅰ 2・1 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
276	P Ⅰ 2・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	L Ⅱ 20・3 上層	頁岩（北上）	1Z			
	L Ⅱ 20・3 上層	?岩（北上）	2			
	L Ⅱ 24・2b 層	頁岩（北上）	2			
	L Ⅲ 10・2b 層	頁岩（北上）	1Z			
	L Ⅲ 12・2-3b2 層	ホルンフェルス（柘榴石混入）（北上）	1A			
	L Ⅲ 12・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	L Ⅲ 12・3-4 層	頁岩（北上）	2			
	L Ⅲ 13・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	L Ⅲ 17・2b 層	?岩（北上）	3			
	L Ⅲ 18・3-4 層	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅲ 18・10 層	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅲ 20・10 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	L Ⅲ 17，22・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅲ 17，22・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1Z			
	L Ⅲ 17，22・Ⅳa 層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	3			
	L Ⅱ 20，25・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅱ 20，25・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅱ 24，25・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅱ 24，25・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1Z			

石剣類（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	L Ⅱ④・Ⅳa 層上部	頁岩（北上）	1Z			
	L Ⅲ③・Ⅲ層	頁岩（北上）	1A			
	L Ⅳ③・Ⅲ層まで	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅰ 15・2-3b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 15・2-3b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 15・2-3b2 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 15，20・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 20・2-3b2 層	閃緑岩（北上）	3			
	M Ⅰ 20・3 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅰ 20・4b 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅰ 20・4b 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅰ 20・4b 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅰ 20，16・Ⅳa 層トレンチ	デイサイト（奥羽）	1A			
	M Ⅰ 24・2-3b 層（SN15 焼土下）	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 24・4 層	閃緑岩（北上）	1Z			
	M Ⅰ 24・4 層	玢岩（北上）	2			
	M Ⅰ 24・Ⅳb 層上面	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅰ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 25・2-3b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 25・3 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅰ 25，21・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅰ 25，21・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 2，3・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 2，7・Ⅳa 層トレンチ	デイサイト（奥羽）	1A			
	M Ⅱ 3・2b 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 3・2b 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅱ 3・2b 層	玢岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 3・2c 層	ホルンフェルス（北上）	2			
	M Ⅱ 3・3 上層	閃緑岩（北上）	1Z			
	M Ⅱ 5・2b 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 6・2b 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 6・2-3b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 6・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 7・2b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 7・2c 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 7・3 上層	閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 8・3 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 8・3 上層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 8・3 上層	玢岩（北上）	2			
	M Ⅱ 9・2b 層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 9・2b 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅱ 9，10・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 13・2b 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 14，15・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 14，19・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	3			
	M Ⅱ 15，20・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 16・4b 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅱ 17・2-3b 層	頁岩（北上）	3			
	M Ⅱ 17・4b 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅱ 17・4b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 5・2b 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 20・3 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅱ 21・4b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 22・4b 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 22・4b 層	砂岩（北上）	3			
	M Ⅱ 22，2・Ⅳa 層トレンチ	玢岩（北上）	2			
	M Ⅱ 22，23・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 23・2-3b 層	頁岩（北上）	3			
	M Ⅱ 23・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 23・4b 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅱ 23・4b 層	頁岩（北上）	3			
	M Ⅱ 24・2b 層	頁岩（奥羽）	1A			
	M Ⅱ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	玢岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅱ 24，4・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 24，25・Ⅳa 層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅱ 25・1-2 層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 25，5・Ⅳa 層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1Z			

（次頁へ続く）

石剣類（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	M Ⅱ 25, 5・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 1・3-4 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 1, 2・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅲ 1, 6・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 2・3-4 層	玢岩（北上）	3			
	M Ⅲ 4・2-3b2 層	斑糲岩（北上）	3			
	M Ⅲ 6, 7・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅲ 8・3-4 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅲ 9・3-4 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅲ 11・2b 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 11・3b 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 11・3-4 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅲ 11, 16・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 21・2-3b 層	頁岩（北上）	3			
	M Ⅲ 21・4b 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 21, 1・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 23・1-2 層	頁岩（北上）	1Z			
	M Ⅲ 24・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ 24・8 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	M Ⅲ 25・4 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ②・Ⅳ層上部	頁岩（北上）	2			
	M Ⅲ④・Ⅲ層まで	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	N Ⅰ 5・4 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅰ 15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	N Ⅰ 22・S Ⅱ～Ⅲ層	頁岩（北上）	0			
	N Ⅱ 3・2 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅱ 4・4b 層	頁岩（北上）	2			
	N Ⅱ 4, 5・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	N Ⅱ 4, 5・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅱ 5・3 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅱ 5・3 層	頁岩（北上）	2			
	N Ⅱ 5・3 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅱ 5・4b 層	閃緑岩（北上）	2			
	N Ⅱ 6・1-2 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	N Ⅱ 13・4 層	頁岩（北上）	1Z			
	N Ⅱ 15・4-5 層	頁岩（北上）	1Z			
	N Ⅱ 17, 22・Ⅳa層トレンチ上から30cmまで	頁岩（北上）	1Z			
	N Ⅱ 19, 24・Ⅳa層トレンチ	玢岩（北上）	3			
	N Ⅱ 19, 24・Ⅳa層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1A			
	N Ⅱ 23・4-5 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	N Ⅱ①・Ⅲ層	砂岩（北上）	1Z			
	N Ⅲ 1・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	N Ⅲ 2・4c 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅲ 2・4c 上層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅲ 3・4-5 上層	ホルンフェルス（北上）	2			
	N Ⅲ 6・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	N Ⅲ 6・4b 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅲ 6, 11・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	N Ⅲ 8・1-2 層	頁岩（北上）	1A			
	N Ⅲ 8・4-5 上層	頁岩（北上）	1Z			
	N Ⅲ 16・4c 層	ホルンフェルス（北上）	2			
	N X①・Ⅳc 層	頁岩（北上）	1A			
	O05・Ⅱ層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	O Ⅰ 2・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	1A			
	O Ⅰ 4・Ⅳa層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1A			
	O Ⅰ 15・3 層	頁岩（北上）	1Z			
	O Ⅰ 21・Ⅳa層トレンチ	ホルンフェルス（北上）	1A			
	O Ⅰ 23・1 層	玢岩（北上）	2			
	O Ⅱ 2・3 層	頁岩（北上）	1A			
	O Ⅱ 3・3 層	閃緑岩（北上）	1A			
	O Ⅱ 3・3 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	O Ⅱ 3・3 層	頁岩（北上）	1Z			
	O Ⅱ 3・4-5 層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	O Ⅱ 4・3 層	頁岩（北上）	1Z			
	O Ⅱ 7・1 層	頁岩（北上）	1A			
	O Ⅱ 7・2 層	頁岩（北上）	1A			
	O Ⅱ 7, 8・Ⅳa層トレンチ	頁岩（北上）	2			
	O Ⅱ②・Ⅲ層	頁岩（北上）	1A			
	O Ⅱ②・Ⅲ層	頁岩（北上）	1Z			
	O Ⅱ②・Ⅲ層	ホルンフェルス（北上）	1Z			
	P Ⅰ 3・1 層	頁岩（北上）	2			

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
26	SK87 土坑	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			未成品
348	N Ⅰ 23・（層位不明）	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ac			
349	M Ⅱ 25・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅲ Aa			
350	M Ⅲ 1・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅲ Aa			
351	N Ⅱ 3・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅲ Aa			
352	N Ⅲ 8・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅲ Aa			
355	N Ⅰ 25・4 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 1			未成品
356	N Ⅲ 6, 11・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 1			未成品
357	N Ⅲ 8・1b 層, 1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 1			未成品
358	N Ⅲ 8・4c 中層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ 1			未成品
359	M Ⅱ 22, 23・Ⅳa層トレンチ上から25～35cm	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			未成品
	G Ⅷ 21 ベルト・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 20・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 20・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 20, 25・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 23・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 24・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅱ 25・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅲ 15・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅲ 16・3 上層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅲ 17, 22・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅲ 18・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅲ 22・2b 層	安山岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅳ①・Ⅲ層まで	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅴ③・Ⅲ層まで	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	L Ⅴ③・Ⅲ層まで	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 20・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 20, 16・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 23・撹乱	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 25・5 層（SN16 焼土下）	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 7, 8・う層（暗褐色）	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 10・2b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 10・6 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 11・1 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 11・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 16・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 17・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 17・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 17・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 17, 18・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 18・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 19・3 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 21・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 22・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 22, 2・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 23, 3・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 24・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 24・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 24, 4・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 24, 4・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 24, 4・Ⅳa層トレンチ	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 25・1-2 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 25・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 25, 5・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅱ 25, 5・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 2・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 16・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 21・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 21・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 22・Ⅳa層上面？	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 22, 2・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ 23・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	M Ⅲ③・Ⅳa層上部	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	N015・S Ⅱ～Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			
	N Ⅰ 5・2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 21			

（次頁へ続く）

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	ＮⅠ5・5層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ5・5層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ5・5層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ10・5層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ11・Ⅳa層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ13・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ13・撹乱	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ14・1層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ15・1-2層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ15・3層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ15・3層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ16・SⅡ～Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ18・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ20・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ22・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ23・1層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅠ25・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ2・2層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ2・4b層	頁岩（北上）	Ⅰ21			
	ＮⅡ4・3層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ4・3層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ5・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ7・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ7，8・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ7，8・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ8，13・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ9・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ9・5層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ9，10・Ⅳa層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10・4層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10・4b層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10・4b層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10・4b層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10・4b層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ10，15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ11・2層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ12・1層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ13・4層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ14，15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ15・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ15・4層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ15・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ15・4層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ16・3層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ17・1層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ18・Ⅳa層上面？	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ22・Ⅳb層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ23・3層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ24・4-5層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅡ③・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ1・4b層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ1・4c層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ2・4c層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ2・4c下層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ6・4層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ6・4層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ6，11・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ7・4c下層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ11・1-2b層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ11・4c層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ12・1-2層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ12・4-5下層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ16・2-3b2層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＮⅢ16・4層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ2？・1層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ3・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ3	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ4・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ7・1層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	ＯⅠ15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ18・1層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ20・3層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ21・撹乱	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ23・1層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ④・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅠ・Ⅳb層上面	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ1・3層（SN26焼土下）	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ2・3層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ3・2層	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ7・1層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ7・Ⅳb層上面？	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ7，8・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ①・Ⅲ～Ⅳa層上面	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＯⅡ②・撹乱	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＰⅠ2・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ＰⅠ6・2層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T13	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T13	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T13	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　T13	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　TY7	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	ST01　排土	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	T8・Ⅳa層？	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	表採	頁岩（奥羽）	Ⅰ21			
	GⅦ21ベルト・Ⅳa層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	GⅦ21ベルト・Ⅳa層	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	KⅣ③・クリーニング中	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	LⅣ①・Ⅲ層まで	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	LⅣ②・Ⅲ層まで	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ15，20・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ23・Ⅳb層上面	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ23・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ25・Ⅳb層上面	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ25・Ⅳb層上面	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ25・5層（SN16焼土下）	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ25，21・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅠ25，21・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ3・2c層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ14・1層	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ16・2-3b層	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ21・4b層	頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ22・4b層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ22，23・Ⅳa層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ22			
	ＭⅡ25・2-3b層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ22			

（次頁へ続く）

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	M Ⅲ 1・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	M Ⅲ 18・1-2 層	頁岩（北上）	Ⅰ 22			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	M Ⅹ③・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 10・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 10・5 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 18・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 20・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 24・4 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅰ 25・2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 1・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 1・Ⅳ a 層排土	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 2・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 3・2d 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 3・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 4・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 5・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 6，11・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 7，12・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 7，12・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 7，12・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 10，15・Ⅳ a 層トレンチ上から 15 ～ 30cm まで	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 12・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 18，23・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 21・2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅱ 23・2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅲ 6・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅲ 7・4c 中層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	N Ⅲ 16・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	O Ⅰ 3・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	O Ⅰ 8・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	O Ⅰ 13・2 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	O Ⅱ 3・3 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅰ 22			
	O Ⅱ 6・3 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	黒曜石（産地不明）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	南西区南端トレンチ②・Ⅲ層の上	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	南西区南端トレンチ③・Ⅳ a 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	南西区南端トレンチ④・Ⅳ a 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	南西区南端トレンチ⑤・Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	南西区南端トレンチ⑤・Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	Ⅰ 22			
	G Ⅷ 22・Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	L Ⅱ 15・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	L Ⅱ 20・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	L Ⅱ 24・1 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ O			
	L Ⅱ 24・2b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	L Ⅲ 7・Ⅳ a 層排土	凝灰岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	L Ⅲ 20・Ⅳ a 層上面？	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅰ 24・1-2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅰ 24・4 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 5，10・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 9・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 9，10・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ba			
	M Ⅱ 11・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 11・2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 14・2b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 16・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 16・2-3b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 16・2-3b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			土壌サンプル

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	M Ⅱ 16・3 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 16・3 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 17・4b 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 17，18・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 20・1 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 21，1・2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	M Ⅱ 22・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 22・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 22，2・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 22，23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 22，23・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 25・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 25・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅱ 25・2-3b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅱ 25・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ 25，5・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	M Ⅱ 25，5・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅱ④・撹乱	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	M Ⅲ 21・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	M Ⅲ 22・Ⅳ a 層上面？	黒曜石（産地不明）	Ⅱ Aa			
	M Ⅸ①・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅸ②・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	凝灰岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	M Ⅸ④・Ⅳ c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Bb			
	N Ⅰ 2・撹乱	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 4・Ⅲ～Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 5，1・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	N Ⅰ 5，1・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 9・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 10・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 12・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 14・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 14・4 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 14・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	N Ⅰ 15・2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・4 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 15・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 15・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 15・Ⅳ a 層トレンチ	黒曜石（産地不明）	Ⅱ O			
	N Ⅰ 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 23・4 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅰ 25・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ 25・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅰ④・Ⅲ～Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 1・Ⅳ a 層排土	凝灰岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 2・4 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	N Ⅱ 2・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 2，3・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 2，3・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 2，3・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 2，3・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 6・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 6・4 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 7・4 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 9，14・Ⅳ a 層トレンチ	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	N Ⅱ 10・4 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 10，15・Ⅳ a 層トレンチ上から 15 ～ 30cm まで	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 10，15・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 12・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ 16・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			

（次頁へ続く）

石鏃

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	N Ⅱ 16・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 16・3 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 16・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 20・4-5 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅱ 23・3 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅱ③・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 1・1-2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 1・4c 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 2・2-3b2 層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 2・4c 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 2・4c 層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 3・1-2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 6・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 6・4b 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 6・4b 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 6・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 6，7・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 7・4c 下層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 7・4c 下層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 7・4-5 下層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	N Ⅲ 8・4c 上層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 8・4c 中層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 8・4-5 上層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 11・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ba			
	N Ⅲ 11・4-5 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 12・4 層	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 16・4c 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 16・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 16・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	N Ⅲ 16・4-5 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	O05・Ⅱ層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	O Ⅰ 5・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	O Ⅰ 5・2 層	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	O Ⅰ 13・2 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	O Ⅰ 18・1 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	O Ⅰ 23・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	O Ⅰ 23・1 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	O Ⅱ 6・3 層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	P Ⅰ 3・Ⅳa 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	P Ⅰ 5・Ⅳa 層トレンチ	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	ST01　T8	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	珪質頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T8	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T8	玉ズイ（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T13・Ⅳa～Ⅳb 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T13	頁岩（奥羽）	Ⅱ O			
	ST01　T13	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　T13	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	ST01　TY4	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	南西区南端トレンチ②・Ⅲ層の上	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	南西区南端トレンチ⑤・Ⅲ層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	南西区南端トレンチ⑤・Ⅲ層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Ab			
	南西区南端トレンチ⑥・Ⅳa 層	頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	南西区南端・Ⅲ層	赤色頁岩（奥羽）	Ⅱ Aa			
	南西区南側　表土	黒曜石（産地不明）	Ⅱ Ba			
	南西区南側　表土	頁岩（奥羽）	Ⅱ Ba			

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
29	SK90 土坑・1 層	砂岩（北上）	2			
35	SK90 土坑・2 層	頁岩（北上）	3			
453	N Ⅰ 23・1 層	ホルンフェルス（北上）	完形			
454	N Ⅱ 2，3・Ⅳa 層トレンチ	砂岩（北上）	完形			
455	N Ⅱ 14・2 層	砂岩（北上）	完形			
456	N Ⅱ 20・4-5 層	砂岩（北上）	完形			
457	N Ⅱ 22，23・Ⅳa 層トレンチ	砂岩（北上）	完形			
458	N X①・Ⅳc 層	砂岩（北上）	完形			
	M Ⅱ 10・1 層	閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・1 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・2b 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・2b 層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・2b 層	頁岩（奥羽）	1B			
	M Ⅱ 10・2b 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 10・2b 層	ホルンフェルス（北上）	2			
	M Ⅱ 10・2b 層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 10・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・2-3b2 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・3 上層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・3 上層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・3 上層	頁岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・3 上層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・3 上層	砂岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 10・3 上層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 10・3 上層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 10・6 層	花崗閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	斑糲岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	安山岩（奥羽）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 10・6 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 10・6 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 11・2-3b 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 11・2-3b 層	頁岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	火山礫凝灰岩（北上？）	1A			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	砂岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	砂岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	閃緑岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	頁岩（北上）	2			
	M Ⅱ 11・3 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 12・1 層	砂岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 12・1 層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 12・2-3b 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	火山礫凝灰岩（北上？）	1A			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	頁岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	砂岩（北上）	1B			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	砂岩（北上）	2			
	M Ⅱ 13・1 層	斑糲岩（北上）	3			
	M Ⅱ 13・2c 層	閃緑岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 13・2c 層	安山岩（奥羽）	1A			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	砂岩（北上）	1A			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	ホルンフェルス（北上）	1B			

（次頁へ続く）

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	MⅡ21・2-3b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ21・2-3b層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ21・2-3b層	閃緑岩（北上）	3			
	MⅡ21・3層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21・3層	石英斑岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21・4b層	閃緑岩（北上）	1B			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ21・4b層	斑岩（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	石英斑岩（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	3			
	MⅡ21・4-5層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4-5層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21・4-5層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4-5層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4-5層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ21・4-5層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ21・4-5層	角閃岩（北上）	1A			
	MⅡ21・4-5層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ21・4-5層	安山岩（北上）	1B			
	MⅡ21・4-5層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ21・4-5層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ21・4-5層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ21・4-5層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ21・4-5層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ21・4-5層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	0			
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	花崗岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	斑岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	角閃岩（北上）	1A			
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	デイサイト（奥羽）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ21，1・4b層	安山岩（北上）	2			
	MⅡ21，1・4b層	砂岩（北上）	2			
	MⅡ21，1・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ21，1・4b層	デイサイト（奥羽）	2			
	MⅡ21，1・4b層	デイサイト（奥羽）	2			
	MⅡ22・1層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・1層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ22・1層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・1層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・1層	ホルンフェルス（北上）	1B			

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	MⅡ22・1-2層	安山岩（北上）	1B			
	MⅡ22・1-2層	安山岩（北上）	1B			
	MⅡ22・2-3b層	頁岩（北上）	0			
	MⅡ22・2-3b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	デイサイト（奥羽）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ22・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・2-3b2層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ22・3層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・3層	デイサイト（奥羽）	1B			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	角閃岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	頁岩（北上）	1B			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ22・4b層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ23・2層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ23・2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ23・2層	頁岩（北上）	1B			
	MⅡ23・2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ23・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ23・2-3b2層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ23・2-3b2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ23・2-3b2層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ23・2-3b2層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ23・2-3b中層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ23・3層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ23・3層	蛇紋岩（北上）	1B			
	MⅡ23・3層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ23・3層	砂岩（北上）	2			
	MⅡ23・3層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ23・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ23・4b層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ23・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ23・4b層	凝灰岩（奥羽）	1A			
	MⅡ23・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ23・4b層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ23・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ23・4b層	閃緑岩（北上）	1B			
	MⅡ23・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ23・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			

（次頁へ続く）

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	ＭⅡ23・4b層	安山岩（奥羽）	1B			
	ＭⅡ23・4b層	閃緑岩（北上）	1B			
	ＭⅡ23・4b層	閃緑岩（北上）	2			
	ＭⅡ23・4b層	玢岩（北上）	3			
	ＭⅡ24・1層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ24・1層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・1層	安山岩（奥羽）	1A			
	ＭⅡ24・1層	安山岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・1層	砂岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・1層	閃緑岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・1層	玢岩（北上）	3			
	ＭⅡ24・1-2層	安山岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b層	砂岩（北上）	2			
	ＭⅡ24・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b2層	安山岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・2-3b2層	頁岩（北上）	2			
	ＭⅡ24・3層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	砂岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	安山岩（奥羽）	1A			
	ＭⅡ24・3層	安山岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	頁岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	安山岩（奥羽）	1A			
	ＭⅡ24・3層	チャート（北上）	1A			
	ＭⅡ24・3層	閃緑岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	閃緑岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	砂岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	斑糲岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	砂岩（北上）	1B			
	ＭⅡ24・3層	斑糲岩（北上）	2			
	ＭⅡ24・3層	ホルンフェルス（北上）	2			
	ＭⅡ24・3層	砂岩（北上）	2			
	ＭⅡ24・3層	玢岩（北上）	3			
	ＭⅡ24・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ25・1-2層	安山岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・1-2層	デイサイト（奥羽）	1A			
	ＭⅡ25・1-2層	砂岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・1-2層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・1-2層	玢岩（北上）	2			
	ＭⅡ25・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ25・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ25・2-3b2層	斑糲岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・3層	頁岩（北上）	1B			
	ＭⅡ25・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ25・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ25・3層	砂岩（北上）	2			
	ＭⅡ25・4層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・4層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・4b層	玢岩（北上）	1B			
	ＭⅡ25・4b層	頁岩（北上）	1B			
	ＭⅡ25・4b層	閃緑岩（北上）	2			
	ＭⅡ25・4b層	ホルンフェルス（北上）	2			
	ＭⅡ25・4b層	玢岩（北上）	3			
	ＭⅡ25・4-5層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ25・4-5層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	ＭⅡ25・4-5層	玢岩（北上）	1B			
	ＭⅡ25・8層	頁岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・8層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	ＭⅡ25・8層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・8層	玢岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・8層	砂岩（北上）	2			
	ＭⅡ25・8層	安山岩（北上）	2			
	ＭⅡ25・9層	閃緑岩（北上）	1A			
	ＭⅡ25・9層	頁岩（北上）	1A			

多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
394	ＭⅠ20・4b層	流紋岩（奥羽）	3C			
395	ＭⅡ10・3上層	流紋岩（奥羽）	3C			
	ＭⅠ24・3層（SN15焼土下）	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・3層（SN15焼土下）	石英（奥羽）	4C			
	ＭⅠ24・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	ＭⅠ24・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	ＭⅠ24・4b層	花崗閃緑岩（北上）	0			
	ＭⅠ24・4b層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	ＭⅠ24・4b層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	チャート（北上）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ24・4b層	赤色頁岩（奥羽）	4A			
	ＭⅠ25・3層	石英（奥羽）	1C			
	ＭⅠ25・4b層（SN16焼土下）	珪化変質岩（奥羽）	0			
	ＭⅠ25・4b層（SN16焼土下）	石英（奥羽）	0			
	ＭⅠ25・4b層（SN16焼土下）	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層（SN16焼土下）	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	ＭⅠ25・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅠ25・5層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	ＭⅠ25・5層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	ＭⅠ25・5層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	ＭⅠ25・5層	閃緑岩（北上）	2C			
	ＭⅠ25・5層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ2・2e層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	ＭⅡ2・2e層	デイサイト（奥羽）	3C			
	ＭⅡ2・3上層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ3・2b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	ＭⅡ3・2b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	ＭⅡ3・2b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ3・3層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ3・3層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ3・3上層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	ＭⅡ3・3上層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	ＭⅡ4・1層	デイサイト（奥羽）	2C			
	ＭⅡ4・2b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ4・2b層	珪化変質岩（奥羽）	3C			
	ＭⅡ5・2b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ5・3上層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	ＭⅡ5・3-4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ5・3-4層	石英（奥羽）	2C			
	ＭⅡ6・2-3b2層	閃緑岩（北上）	2C			
	ＭⅡ6・3上層	閃緑岩（北上）	2C			
	ＭⅡ7・2c層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	ＭⅡ7・2c層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	ＭⅡ7・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ7，8・う層（暗褐色）	赤色頁岩（奥羽）	0			
	ＭⅡ7，8・う層（暗褐色）	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	ＭⅡ7，8・う層（暗褐色）	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ8・2c層	石英（奥羽）	2C			
	ＭⅡ8・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	ＭⅡ8・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ8・3層	石英（奥羽）	2C			
	ＭⅡ9・1層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	ＭⅡ9・1層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ9・2b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ10・1層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	ＭⅡ10・1層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ10・2b層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	ＭⅡ10・2b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	ＭⅡ10・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	ＭⅡ10・3上層	石英（奥羽）	0			
	ＭⅡ10・3上層	石英（奥羽）	0			
	ＭⅡ10・6層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	ＭⅡ10・6層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ10・6層	石英（奥羽）	2C			
	ＭⅡ10・6層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	ＭⅡ11・2-3b2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	ＭⅡ11・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	ＭⅡ11・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			

（次頁へ続く）

多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 13・2-3b 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	石英（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 13・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 13・3 上層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 14・1 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 14・1 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 14・1 上層	石英（奥羽）	0			
	M Ⅱ 15・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 15・2b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 15・3 層	デイサイト（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 15・3-4 層	石英（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 15・7 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 16・1 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 16・2-3b 層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 16・2-3b 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 16・2-3b 層	片麻岩（北上）	2C			古生代デボン紀（母体変成岩類）
	M Ⅱ 16・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 16・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	M Ⅱ 16・3 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 16・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 16・4b 層	水晶（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 17・2-3b 層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 17・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 17・2-3b2 層	砂岩（北上）	2C			
	M Ⅱ 17・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 17・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 17・3 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 18・2-3b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 18・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 18・3 層	ホルンフェルス（北上）	2C			
	M Ⅱ 18・3 層	アプライト（北上）	2C			
	M Ⅱ 19・1-2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 19・2-3b 層	石英（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 19・3 層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 20・2-3b 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	M Ⅱ 20・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 20・3 層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	玉ズイ（奥羽）	0			
	M Ⅱ 21・4b 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	水晶（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4-5 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21・4-5 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21，1・2 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	デイサイト（奥羽）	0			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	玉ズイ（奥羽）	0			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 21，1・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	M Ⅱ 22・2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・2 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 22・2-3b2 層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・3 層	砂岩（北上）	2C			
	M Ⅱ 22・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	斑糲岩（北上）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	安山岩（北上）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 22・4b 層	デイサイト（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・2 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			

多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	M Ⅱ 23・2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・2-3b 中層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 23・3 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	M Ⅱ 23・3 層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 23・3 層	水晶（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・3 層	石英（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・3 層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	M Ⅱ 23・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 23・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	石英（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	チャート（北上）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 23・4b 層	閃緑岩（北上）	2C			
	M Ⅱ 24・2-3b2 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	M Ⅱ 24・3 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 24・3 層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 24・3 層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 24・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 24・3 層	頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 24・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 24・3 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 24・3 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 24・3 層	珪化変質岩（奥羽）	3C			
	M Ⅱ 24・2-3b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・2-3b2 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・2-3b2 層	チャート（北上）	2C			
	M Ⅱ 25・3-4 層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	M Ⅱ 25・3-4 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・4b 層	玉ズイ（奥羽）	0			
	M Ⅱ 25・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅱ 25・4b 層	水晶（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅱ 25・8 層	玉ズイ（奥羽）	0			
	M Ⅲ 1・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 1・3-4 層	閃緑岩（北上）	2C			
	M Ⅲ 2・2b 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	M Ⅲ 2・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 2・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 2・3-4 層	？岩（北上）	2C			
	M Ⅲ 3・2-3b2 層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 3・3-4 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 3・10 層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	M Ⅲ 6・2b 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	M Ⅲ 6・2b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 6・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 6・3 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	M Ⅲ 6・3 上層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	M Ⅲ 6・3-4 層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	M Ⅲ 6・8 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 6・10 層	角閃岩（北上）	2C			古生代デボン紀（母体変成岩類）
	M Ⅲ 7・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 7・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	M Ⅲ 7・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 7・3-4 層	石英（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 8・3b 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 8・3-4 上層	赤鉄鉱（和賀仙人）	2C			
	M Ⅲ 8・3-4 中層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 8・3-4 中層	角閃岩（北上）	2C			古生代デボン紀（母体変成岩類）
	M Ⅲ 8・10 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 9・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 9・3 上層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 9・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 11・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 11・3 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 11・3 層	閃緑岩（北上）	2C			
	M Ⅲ 11・3b 層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	M Ⅲ 11・3b 層	頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 11・3-4 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 12・3-4 上層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 13・2b 層（2-3b2 層含む）	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 13・3-4 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 13・8 層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	M Ⅲ 13・8 層	珪化変質岩（奥羽）	2C			

（次頁へ続く）

多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	MⅢ14・3-4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ16・2e層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ16・3層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ17・1-2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ18・1-2層	頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ18・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ18・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ18・3-4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ18・8層	チャート（北上）	2C			
	MⅢ18・9層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	MⅢ19・1b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	MⅢ19・3-4層	斑糲岩（北上）	2C			
	MⅢ19・8層	石英（奥羽）	2C			
	MⅢ19・8層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ19・8層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	MⅢ19・8層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ19・8層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ20・2-3b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ21・2-3b層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	MⅢ21・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ21・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ21・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ22・2-3b上層	オパール（奥羽）	1C			
	MⅢ22・2-3b上層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	MⅢ23・1-2層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	MⅢ23・1-2層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	MⅢ23・3-4層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	MⅢ23・4c下層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・4-5層	閃緑岩（北上）	2C			
	MⅢ23・8層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	石英（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	ホルンフェルス（北上）	2C			
	MⅢ23・8層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	MⅢ23・8層	斑糲岩（北上）	2C			
	MⅢ23・11層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	MⅢ24・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	MⅢ24・11層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ2・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅠ2・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ4・3層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅠ4・3層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅠ4・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ4・4層	珪質頁岩（奥羽）	1C			
	NⅠ4・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ4・4a層上面？	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・3層	頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ5・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ5・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ5・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅠ5・4b層	チャート（北上）	2C			
	NⅠ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	NⅠ5・5層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・5層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・5層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ5・5層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ5・5層	石英（奥羽）	2C			
	NⅠ5・5層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ5・5層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	NⅠ5・5層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ5・5層	石英（奥羽）	2C			
	NⅠ6・4層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ6・4層	石英（奥羽）	0			
	NⅠ6・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ6・4層	デイサイト（奥羽）	2C			
	NⅠ6・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ6・4層	デイサイト（奥羽）	3C			
	NⅠ7・4層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ8・1層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	NⅠ8・4層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅠ8・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ9・3層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ10・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ10・4層	珪化変質岩（奥羽）	0			

多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	NⅠ10・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ10・5層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅠ10・5層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ10・5層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ11・4層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅠ11・4層	頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ11・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ12・1層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ12・1層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ13・1層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅠ13・1層	石英（奥羽）	2C			
	NⅠ13・1層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ13・1層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ14・4層	石英（奥羽）	1C			
	NⅠ14・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ15・2層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ15・2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ15・3層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅠ15・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ15・3層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ15・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ15・3層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ15・4層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ15・4層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅠ15・4層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅠ15・4層	石英（奥羽）	0			
	NⅠ15・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ16・4層	石英（奥羽）	0			
	NⅠ17・4層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ17・4層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	NⅠ17・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ18・1層	頁岩（奥羽）	1C			
	NⅠ18・1層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ19・4層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ19・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ20・1層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ20・1層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ20・1層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ20・1層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	NⅠ20・2層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ22・4層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ22・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ23・1層	赤鉄鉱（和賀仙人）	1C			
	NⅠ23・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ23・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ23・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ24・1層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・2層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・3層	珪化変質岩（奥羽）	3C			
	NⅠ25・3層	?岩（北上）	3C			
	NⅠ25・3層	角閃岩（北上）	3C			古生代デボン紀（母体変成岩類）
	NⅠ25・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅠ25・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅠ25・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅠ25・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ1・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ1・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ1・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	NⅡ1・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ1・4b層	赤色頁岩（奥羽）	3A			
	NⅡ2・1層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・1層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ2・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・3層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・3層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ2・3層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ2・4層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ2・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・4層	デイサイト（奥羽）	0			
	NⅡ2・4層	赤色頁岩（奥羽）	1C			

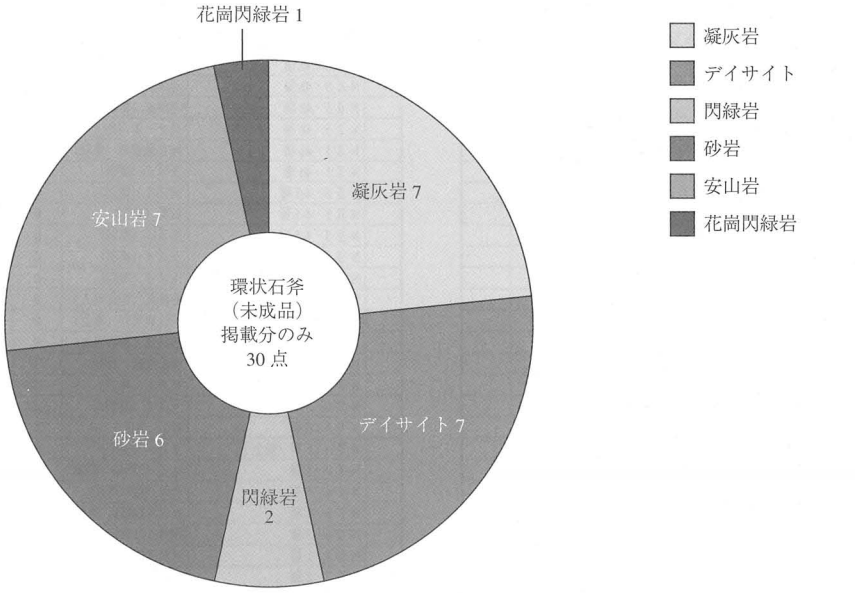
（次頁へ続く）

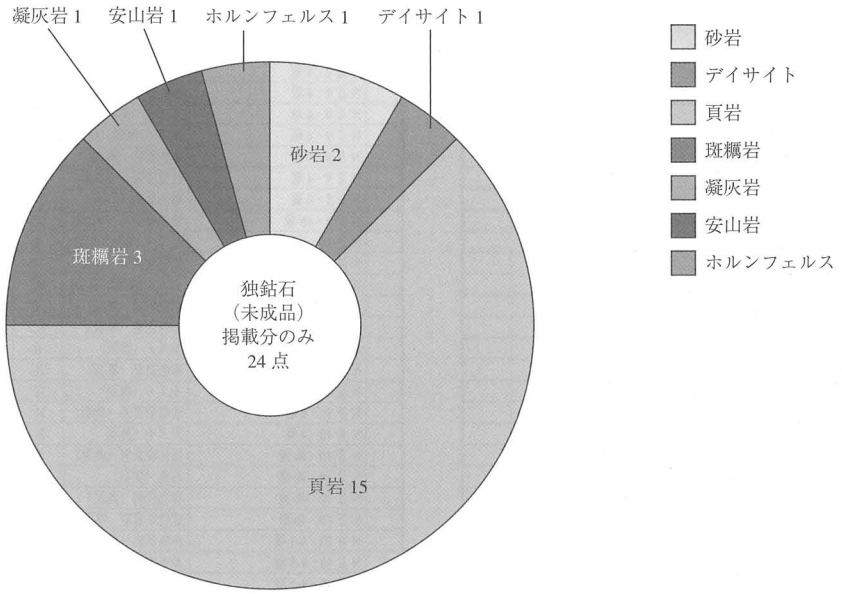
多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	NⅡ2・4層	赤色頁岩（奥羽）	3C			
	NⅡ2・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ2・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ2・4b層	石英（奥羽）	1B			
	NⅡ2・4b層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ2・4b層	頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・1-2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・2層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・2層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・2層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・2d層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ3・2-3b2層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・2-3b2層	石英（奥羽）	0			
	NⅡ3・2-3b2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1B			
	NⅡ3・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・2-3b2層	頁岩（奥羽）	2B			
	NⅡ3・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ3・3層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・3層	石英（奥羽）	1B			
	NⅡ3・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ3・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ3・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・4b層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ3・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ3・4b層	珪質頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ4・2層	頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ4・2d層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ4・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ4・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ4・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ4・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ4・3層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ4・3層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ4・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅡ4・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	石英（奥羽）	0			
	NⅡ4・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ4・4b層	ペグマタイト（北上）	2C			
	NⅡ4・5層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ4・5層	花崗閃緑岩（北上）	0			
	NⅡ5・1層	珪質頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ5・1-2層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅡ5・1-2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・1-2層	頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ5・1-2層	珪化変質岩（奥羽）	3C			
	NⅡ5・2e層	玉ズイ（奥羽）	1A			
	NⅡ5・2-3b2層	珪質頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・2-3b2層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・2-3b2層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ5・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・3層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ5・4b層	石英（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（奥羽）	1A			
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1A			
	NⅡ5・4b層	頁岩（奥羽）	1B			
	NⅡ5・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			

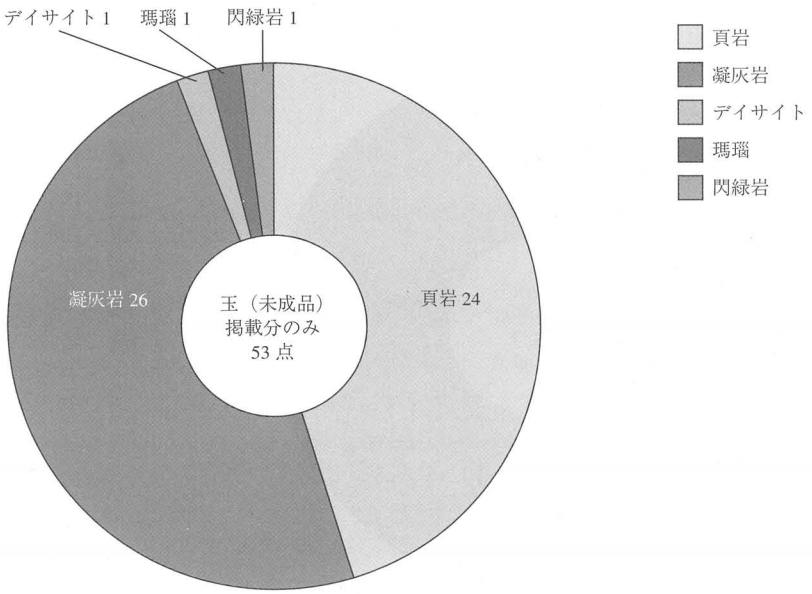
多面体

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ5・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ5・4b層	赤鉄鉱（和賀仙人）	2A			
	NⅡ5・4b層	チャート（北上）	2C			
	NⅡ5・4b層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ5・4b層	玉ズイ（奥羽）	3C			
	NⅡ5・4-5層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・4-5層	石英（奥羽）	0			
	NⅡ5・4-5層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ5・4-5層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ6・1層，1-2層，2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ6・1-2層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅡ6・2層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ6・2層	赤鉄鉱（和賀仙人）	0			
	NⅡ6・3層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ6・3層	玉ズイ（奥羽）	1A			
	NⅡ6・3層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ6・4層	砂岩（北上）	2C			
	NⅡ6・5層（焼土下）	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ6・5層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ6・5層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ6・5層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1A			
	NⅡ6・5層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ7・1層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ7・2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ7・2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	2C			
	NⅡ7・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ7・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ7・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ7・4層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ7・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ7・4層	珪質岩（北上）	2C			
	NⅡ7・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ8・1層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ8・2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ8・2層	石英（奥羽）	0			
	NⅡ8・2層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ8・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ8・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ9・2層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ9・2層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ9・2-3b2層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ9・4層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ9・4層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ9・4層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ9・4層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ9・4層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	NⅡ9・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ9・4層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ9・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ9・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・1-2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ10・1-2層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・1-2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	1C			
	NⅡ10・1-2層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ10・1-2b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・3層	玉ズイ（奥羽）	0			
	NⅡ10・3層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4層	玉ズイ（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4層	玉ズイ（奥羽）	2C			
	NⅡ10・4b層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ10・4b層	石英（奥羽）	1B			
	NⅡ10・4b層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4b層	珪化変質岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4-5層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ10・4-5層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ10・4-5層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ11・1-2層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ11・3層	赤色頁岩（奥羽）	0			
	NⅡ11・3層	珪化変質岩（奥羽）	0			
	NⅡ11・3層	石英（奥羽）	2C			
	NⅡ11・3層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ11・3層	珪化変質岩（奥羽）	2C			
	NⅡ12・1-2層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	0			
	NⅡ12・2層	赤色頁岩（奥羽）	1C			
	NⅡ12・4層	赤色頁岩（奥羽）	2C			
	NⅡ12・5層	赤色頁岩（奥羽）	2C			

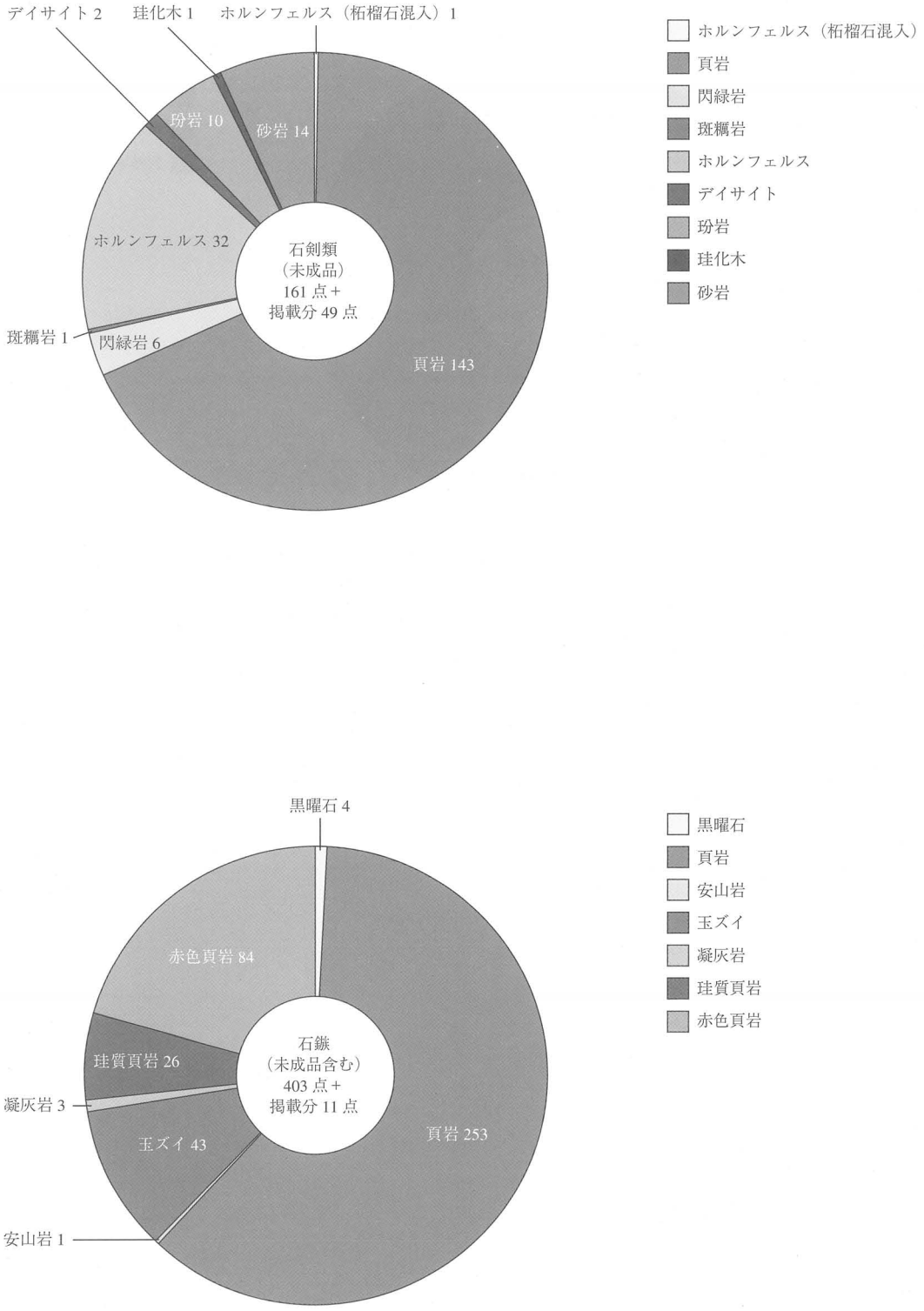




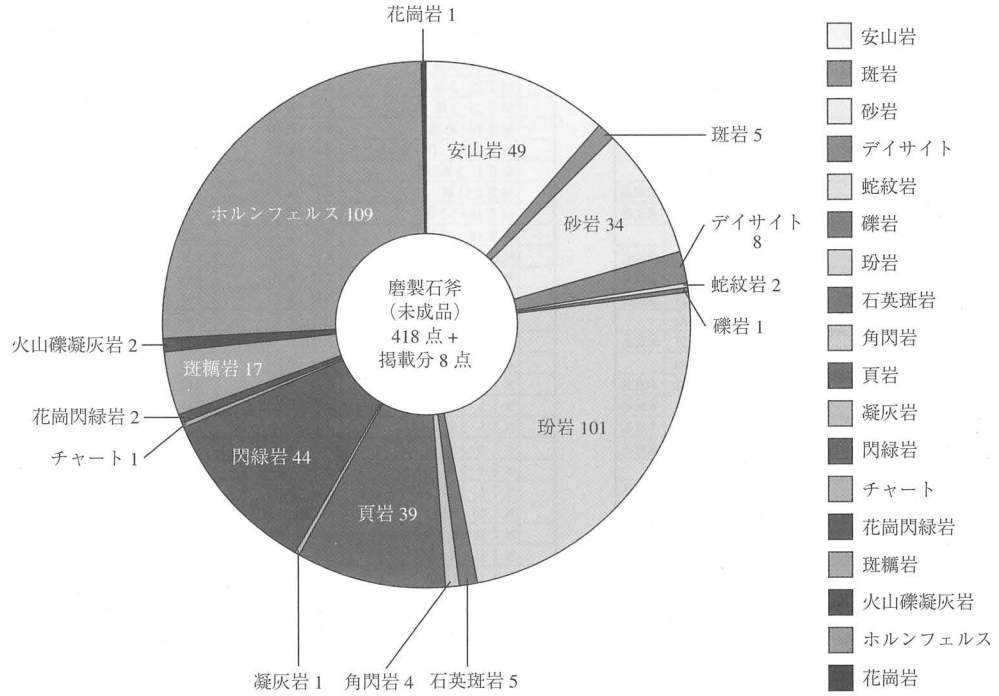
第 576 図　石質分析グラフ（1）

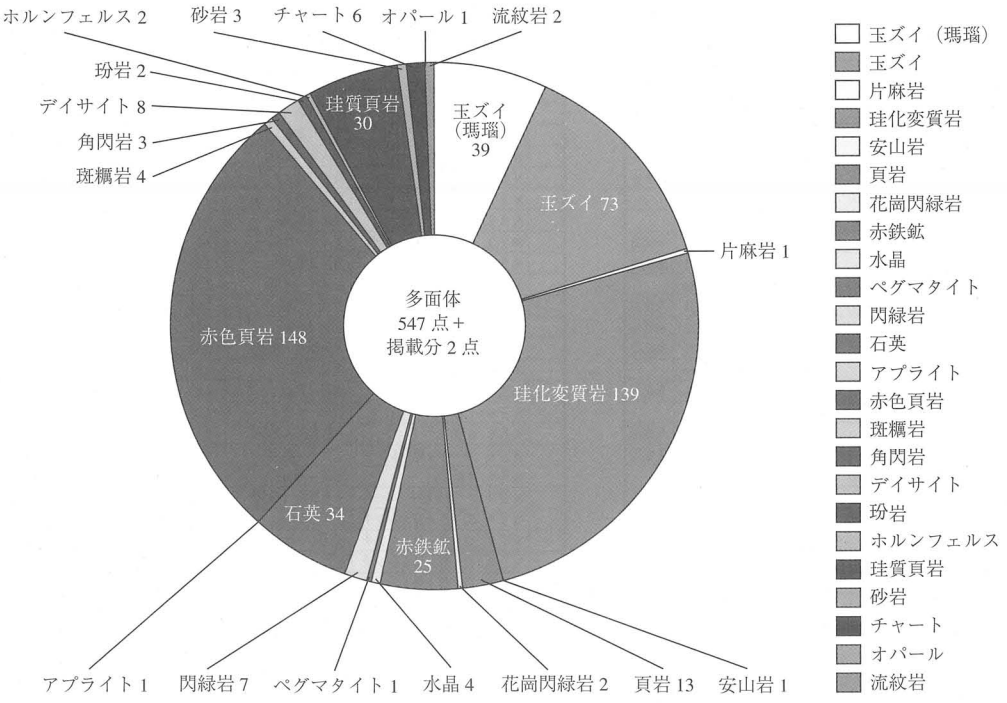


第 577 図　石質分析グラフ（2）



第 578 図　石質分析グラフ（3）





第 579 図　石質分析グラフ（4）

第６表　石器・石製品法量分析資料一覧

石鏃

番号	出土地点	石質	最大計測値（cm）		種類	備考
			長さ	幅		
348	N Ⅰ 23・(層位不明)	頁岩（奥羽）	4.6	1.7	Ⅱ Ac	
349	M Ⅱ 25・3 層	頁岩（奥羽）	2.9	1.1	Ⅲ Aa	
350	M Ⅲ 1・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	3.55	1.2	Ⅲ Aa	
351	N Ⅱ 3・3 層	頁岩（奥羽）	3.45	1.2	Ⅲ Aa	
352	N Ⅲ 8・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	4.1	1.1	Ⅲ Aa	
359	M Ⅱ 22, 23・Ⅳ a 層トレンチ上から 25 ～ 35cm	頁岩（奥羽）	3.85	2.0	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 15・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	3.15	1.4	Ⅱ Ab	
	L Ⅱ 20・1 層	頁岩（奥羽）	3.1	2.1	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 20・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2.55	1.4	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 20・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	1.8	1.05	Ⅱ Ab	
	L Ⅱ 20, 25・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.5	2.5	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 23・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2.45	2	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 24・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2.85	1.9	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅱ 24・2b 層	頁岩（奥羽）	2.65	0.95	Ⅱ Aa	
	L Ⅱ 25・1 層	頁岩（奥羽）	3.7	2.3	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅲ 7・Ⅳ a 層排土	凝灰岩（奥羽）	2.7	1.3	Ⅱ Aa	
	L Ⅲ 15・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2.6	2.4	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅲ 16・3 上層	頁岩（奥羽）	2.7	1.45	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅲ 17, 22・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.2	1.95	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅲ 18・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	6.25	3.6	Ⅰ 21	未成品
	L Ⅲ 20・Ⅳ a 層上面？	頁岩（奥羽）	2.4	1.15	Ⅱ Aa	
	L Ⅲ 22・2b 層	安山岩（奥羽）	5	2.65	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅰ 15, 20・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.65	2	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅰ 20・1 層	頁岩（奥羽）	2.4	1.9	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅰ 20, 16・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	2.95	1.8	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4	2.2	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.55	1.2	Ⅱ Aa	
	M Ⅰ 23・Ⅳ b 層上面	赤色頁岩（奥羽）	4.05	2.1	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅰ 24・1-2 層	赤色頁岩（奥羽）	2.25	0.95	Ⅱ Aa	
	M Ⅰ 24・4 層	頁岩（奥羽）	3.97	1.46	Ⅱ Aa	
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.51	2.25	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.07	1.66	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.49	2.5	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅰ 25, 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.99	1.77	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅰ 25・5 層（SN16 焼土下）	赤色頁岩（奥羽）	3.24	2.25	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 5, 10・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.14	1.07	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 7, 8・う層（暗褐色）	赤色頁岩（奥羽）	3.57	1.89	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 10・2b 層	頁岩（奥羽）	3.71	2.46	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 11・1 層	玉ズイ（奥羽）	2.51	1.38	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 11・1 層	赤色頁岩（奥羽）	3.43	2.08	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 11・1 層	赤色頁岩（奥羽）	1.8	1.13	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 11・2 層	頁岩（奥羽）	1.96	0.81	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	5.31	2.96	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 12・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	4.08	2.16	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 14・1 層	頁岩（奥羽）	2.01	1.67	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅱ 14・2b 層	頁岩（奥羽）	2.07	1.02	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 16・1-2 層	頁岩（奥羽）	2.25	1.03	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 16・2-3b 層	頁岩（奥羽）	2.12	1.33	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅱ 16・2-3b 層	赤色頁岩（奥羽）	3.09	1.26	Ⅱ Aa	土壌サンプル
	M Ⅱ 16・3 層	赤色頁岩（奥羽）	2.37	1.01	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 16・3 層	赤色頁岩（奥羽）	2.25	1.11	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 16・4b 層	頁岩（奥羽）	3.13	1.63	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 17・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	2.57	1.29	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 17, 18・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	3.3	1.44	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 18・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	2.42	1.76	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 21・4b 層	頁岩（奥羽）	4.79	1.35	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅱ 21・4-5 層	頁岩（奥羽）	4.49	3.36	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 22・1 層	頁岩（奥羽）	2.99	0.84	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 22・3 層	頁岩（奥羽）	4.72	1.41	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 22・3 層	頁岩（奥羽）	3.05	1.39	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	3.76	1.89	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	3.26	0.97	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 22, 2・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	2.85	1.16	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 22, 23・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	2.69	1.41	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅱ 22, 23・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	2.75	1.51	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 23, 3・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.34	1.37	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 24・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	3.68	1.75	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 24, 4・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	5.01	3.16	Ⅰ 21	未成品

石鏃

番号	出土地点	石質	最大計測値（cm）		種類	備考
			長さ	幅		
	M Ⅱ 24, 4・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	3.33	2.18	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 25・1 層	頁岩（奥羽）	2.31	0.85	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 25・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	1.9	0.79	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅱ 25・2-3b 層	玉ズイ（奥羽）	2.53	1.27	Ⅱ Ab	
	M Ⅱ 25・3 層	頁岩（奥羽）	3.27	2.22	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅱ 25・4b 層	頁岩（奥羽）	3.91	0.78	Ⅱ Aa	
	M Ⅱ 25, 5・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.03	1.14	Ⅱ Aa	
	M Ⅲ 1・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	3.4	1.37	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅲ 2・1 層	頁岩（奥羽）	4.91	2.74	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 16・1-2 層	頁岩（奥羽）	3.39	2.12	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 18・1-2 層	頁岩（北上）	4.25	0.97	Ⅰ 22	未成品
	M Ⅲ 21・1 層	頁岩（奥羽）	3.77	1.48	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 21・2-3b2 層	頁岩（奥羽）	4.01	1.7	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 21・4-5 層	頁岩（奥羽）	4.07	0.99	Ⅱ Aa	
	M Ⅲ 22・Ⅳ a 層上面？	頁岩（奥羽）	2.74	1.83	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 22, 2・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	4.27	2.58	Ⅰ 21	未成品
	M Ⅲ 23・4-5 層	頁岩（奥羽）	3.25	0.97	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 4・Ⅲ～Ⅳ a 層	頁岩（奥羽）	2.82	1.06	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 5・2 層	頁岩（奥羽）	2.14	1.76	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 5・5 層	頁岩（奥羽）	2.77	1.21	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 5・5 層	頁岩（奥羽）	3.18	2.53	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 5・5 層	玉ズイ（奥羽）	3.24	2.25	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 5, 1・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.53	0.9	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 10・5 層	赤色頁岩（奥羽）	3.77	2.99	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 10・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	2.67	1.17	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 11・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	4.02	1.83	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 14・4 層	頁岩（奥羽）	3.23	1.17	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 14・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	1.89	0.85	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	3.18	1.54	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	3.14	1.11	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 15・1-2 層	頁岩（奥羽）	1.74	0.79	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 15・2 層	頁岩（奥羽）	2.33	1.3	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 15・3 層	頁岩（奥羽）	3.43	2.32	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 15・3 層	頁岩（奥羽）	3.35	1.64	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 15・4 層	頁岩（奥羽）	2.2	0.96	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 15・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.84	1.94	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 15・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.56	1.24	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 20・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.19	1.68	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 21・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.94	1.05	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 23・1 層	頁岩（奥羽）	3.13	2.68	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 23・4 層	頁岩（奥羽）	3.37	1.1	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.85	1.74	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	珪質頁岩（奥羽）	2.08	1	Ⅱ Ab	
	N Ⅰ 23・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.66	1.34	Ⅱ Aa	
	N Ⅰ 24・4 層	玉ズイ（奥羽）	3.34	1.83	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅰ 25・2 層	赤色頁岩（奥羽）	2.66	1.58	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅰ 25・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.83	1.87	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅰ 25・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	2.2	0.95	Ⅱ Ab	
	N Ⅱ 1・4b 層	頁岩（奥羽）	4.43	1.87	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 1・Ⅳ a 層排土	凝灰岩（奥羽）	2.35	1.44	Ⅱ Ab	
	N Ⅱ 2・4b 層	頁岩（北上）	7.67	2.46	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅱ 2・4b 層	頁岩（奥羽）	3.23	0.96	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 2・4b 層	頁岩（奥羽）	3.35	1.41	Ⅱ Aa	
	N Ⅱ 2, 3・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	3.37	1.14	Ⅱ Aa	
	N Ⅱ 2, 3・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.19	1.07	Ⅱ Aa	
	N Ⅱ 2, 3・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	2.12	1.05	Ⅱ Ab	
	N Ⅱ 3・2d 層	頁岩（奥羽）	2.95	1.49	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 3・4b 層	頁岩（奥羽）	4.08	1.68	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 4・1 層	赤色頁岩（奥羽）	2.38	1.22	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 4・3 層	頁岩（奥羽）	4.91	3.23	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅱ 5・4b 層	頁岩（奥羽）	4.03	1.08	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 6・1 層	頁岩（奥羽）	3.19	1.32	Ⅱ Ab	
	N Ⅱ 6・4 層	赤色頁岩（奥羽）	2.35	1.3	Ⅱ Ab	
	N Ⅱ 6, 11・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	1.97	1.55	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 7・4 層	頁岩（奥羽）	3.03	2.08	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅱ 7, 8・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	3.07	1.69	Ⅰ 21	未成品
	N Ⅱ 7, 12・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.79	1.39	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 7, 12・Ⅳ a 層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	2.33	0.89	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 7, 12・Ⅳ a 層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.41	1.78	Ⅰ 22	未成品
	N Ⅱ 8, 13・Ⅳ a 層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	5.86	3.29	Ⅰ 21	未成品

（次頁へ続く）

石鏃

番号	出土地点	石質	最大計測値（cm）		種類	備考
			長さ	幅		
	NⅡ9・5層	赤色頁岩（奥羽）	2.83	1.48	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10・4b層	珪質頁岩（奥羽）	2.34	1.26	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10・4b層	頁岩（奥羽）	2.7	1.6	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10・4b層	頁岩（奥羽）	4.13	2.49	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10・4b層	赤色頁岩（奥羽）	3.71	1.99	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10，15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.39	1.96	Ⅰ21	未成品
	NⅡ10，15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.31	1.3	ⅡAb	
	NⅡ10，15・Ⅳa層トレンチ上から15～30cmまで	頁岩（奥羽）	2.71	1.72	Ⅰ22	未成品
	NⅡ11・2層	頁岩（奥羽）	6.15	4.28	Ⅰ21	未成品
	NⅡ12・1層	頁岩（奥羽）	3.34	2.68	Ⅰ21	未成品
	NⅡ12・1層	頁岩（奥羽）	2.8	1.08	Ⅰ22	未成品
	NⅡ12・1層	頁岩（奥羽）	2.99	0.99	ⅡAa	
	NⅡ13・4層	赤色頁岩（奥羽）	4.14	1.95	Ⅰ21	未成品
	NⅡ14，15・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.44	2.33	Ⅰ21	未成品
	NⅡ15・4層	頁岩（奥羽）	3.18	2.09	Ⅰ21	未成品
	NⅡ15・4層	珪質頁岩（奥羽）	2.18	0.89	Ⅰ21	未成品
	NⅡ16・1層	赤色頁岩（奥羽）	2.8	1.18	ⅡAb	
	NⅡ16・1層	頁岩（奥羽）	2.88	1.62	ⅡAb	
	NⅡ16・3層	玉ズイ（奥羽）	2.72	1.77	Ⅰ21	未成品
	NⅡ16・3層	玉ズイ（奥羽）	1.8	1.15	ⅡAb	
	NⅡ17・1層	赤色頁岩（奥羽）	4.21	2.46	Ⅰ21	未成品
	NⅡ18・Ⅳa層上面？	赤色頁岩（奥羽）	2.52	1.49	Ⅰ21	未成品
	NⅡ18，23・Ⅳa層トレンチ	玉ズイ（奥羽）	2.93	2.12	Ⅰ22	未成品
	NⅡ20・4-5層	玉ズイ（奥羽）	2.45	1.28	ⅡAb	
	NⅡ21・2層	頁岩（奥羽）	4.16	1.65	Ⅰ22	未成品
	NⅡ23・2層	赤色頁岩（奥羽）	4.73	2.06	Ⅰ22	未成品
	NⅡ23・3層	頁岩（奥羽）	3.6	2.36	Ⅰ21	未成品
	NⅡ23・3層	頁岩（奥羽）	4	0.9	ⅡAa	
	NⅡ24・4-5層	珪質頁岩（奥羽）	2.95	1.84	Ⅰ21	未成品
	NⅢ1・1-2層	赤色頁岩（奥羽）	2.53	1.04	ⅡAb	
	NⅢ1・4b層	珪質頁岩（奥羽）	2.11	1.5	Ⅰ21	未成品
	NⅢ2・2-3b2層	珪質頁岩（奥羽）	2.87	1.17	ⅡAa	
	NⅢ2・4c下層	頁岩（奥羽）	3.3	2.18	Ⅰ21	未成品
	NⅢ2・4c層	頁岩（奥羽）	2.92	1.84	Ⅰ21	未成品
	NⅢ3・1-2層	頁岩（奥羽）	2.73	0.96	ⅡAa	
	NⅢ6・4層	珪質頁岩（奥羽）	2.85	1.55	Ⅰ21	未成品
	NⅢ6・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2.92	1.02	ⅡAa	
	NⅢ6・4b層	頁岩（奥羽）	2.85	1.37	ⅡAb	
	NⅢ6・4b層	赤色頁岩（奥羽）	2.26	1.44	ⅡAb	
	NⅢ6・4-5層	頁岩（奥羽）	5.97	4.45	Ⅰ22	未成品
	NⅢ6，7・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	3.89	1.14	ⅡAa	
	NⅢ6，11・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	4.14	2.61	Ⅰ21	未成品
	NⅢ7・4c下層	玉ズイ（奥羽）	2.63	1.03	ⅡAa	
	NⅢ7・4c中層	赤色頁岩（奥羽）	4.72	3.07	Ⅰ22	未成品
	NⅢ8・4c中層	珪質頁岩（奥羽）	2.18	0.98	ⅡAa	
	NⅢ8・4-5上層	頁岩（奥羽）	3.37	1.05	ⅡAa	
	NⅢ11・1-2b層	頁岩（奥羽）	2.73	1.76	Ⅰ21	未成品
	NⅢ12・1-2層	赤色頁岩（奥羽）	3.42	2.59	Ⅰ21	未成品
	NⅢ12・4-5下層	頁岩（奥羽）	3.1	1.15	Ⅰ21	未成品
	NⅢ12・4層	玉ズイ（奥羽）	4.02	1.24	ⅡAa	
	NⅢ16・2-3b2層	頁岩（奥羽）	3.75	2.2	Ⅰ22	未成品
	NⅢ16・4層	赤色頁岩（奥羽）	3.59	1.97	Ⅰ21	未成品
	NⅢ16・4c層	赤色頁岩（奥羽）	2.53	0.89	ⅡAa	
	NⅢ16・4-5層	頁岩（奥羽）	3.22	1.13	ⅡAa	
	NⅢ16・4-5層	頁岩（奥羽）	2.61	0.93	ⅡAa	
	NⅢ16・4-5層	頁岩（奥羽）	2.69	1.61	ⅡAb	
	OⅠ2？・1層	頁岩（奥羽）	2.65	1.63	Ⅰ21	未成品
	OⅠ3・Ⅳa層トレンチ	赤色頁岩（奥羽）	2.36	1.03	Ⅰ22	未成品
	OⅠ7・1層	玉ズイ（奥羽）	3.71	2.34	Ⅰ21	未成品
	OⅠ23・1層	珪質頁岩（奥羽）	4.4	2.33	Ⅰ21	未成品
	OⅠ23・1層	赤色頁岩（奥羽）	1.82	1.14	ⅡAb	
	OⅠ23・1層	赤色頁岩（奥羽）	2.42	1.17	ⅡAb	
	OⅡ2・3層	珪質頁岩（奥羽）	3.74	2.62	Ⅰ21	未成品
	OⅡ3・2層	頁岩（奥羽）	4.55	2.5	Ⅰ21	未成品
	OⅡ6・3層	赤色頁岩（奥羽）	2.33	1.14	Ⅰ22	未成品
	OⅡ7・1層	珪質頁岩（奥羽）	2.72	1.82	Ⅰ21	未成品
	OⅡ7，8・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.77	2	Ⅰ21	未成品
	OⅡ①・Ⅲ～Ⅳa層上面	頁岩（奥羽）	2.77	1.17	Ⅰ21	未成品
	PⅠ5・Ⅳa層トレンチ	頁岩（奥羽）	2.86	1.33	ⅡAa	

磨製石斧

番号	出土地点	石質	最大計測値（cm）		種類	備考
			長さ	幅		
3	SK90土坑・1層	玢岩（北上）	16.0	8.1	2	未成品
4	SK90土坑・2層	頁岩（北上）	10.5	5.5	3	未成品
107	NⅡ22，23・Ⅳa層トレンチ	玢岩（北上）	10.7	4.2		完形品
	MⅡ10・2b層	頁岩（奥羽）	9.75	3.1	1B	未成品
	MⅡ10・2b層	ホルンフェルス（北上）	12.4	4.45	1B	未成品
	MⅡ10・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	7.05	3.55	1A	未成品
	MⅡ10・3上層	頁岩（北上）	12.25	6.05	1A	未成品
	MⅡ10・3上層	ホルンフェルス（北上）	13.35	7.45	1B	未成品
	MⅡ10・3上層	玢岩（北上）	9.3	4.55	2	未成品
	MⅡ10・6層	斑糲岩（北上）	13.7	9	1A	未成品
	MⅡ10・6層	玢岩（北上）	18.8	13.4	1A	未成品
	MⅡ11・2-3b層	頁岩（北上）	7.4	5.2	1B	未成品
	MⅡ11・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	8.35	4.2	1B	未成品
	MⅡ11・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	8.65	5.1	1B	未成品
	MⅡ11・2-3b2層	閃緑岩（北上）	13.35	8.9	1B	未成品
	MⅡ11・3層	ホルンフェルス（北上）	8.35	4.5	1B	未成品
	MⅡ12・2-3b層	玢岩（北上）	19.65	11.55	1A	未成品
	MⅡ12・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	10.3	4	1B	未成品
	MⅡ13・1層	斑糲岩（北上）	16.15	4.65	3	未成品
	MⅡ13・3上層	ホルンフェルス（北上）	9.1	4.45	1B	未成品
	MⅡ14・2b層	ホルンフェルス（北上）	13.15	6.6	1A	未成品
	MⅡ14・2b層	頁岩（北上）	12.15	4.5	3	未成品
	MⅡ14・7層	玢岩（北上）	15.8	8.5	2	未成品
	MⅡ15・3-4層	砂岩（北上）	11.25	5.3	1B	未成品
	MⅡ15・3-4層	ホルンフェルス（北上）	12.1	5.3	1B	未成品
	MⅡ16・2-3b2層	砂岩（北上）	20.05	5.86	2	未成品
	MⅡ16・3層	玢岩（北上）	17.8	7.63	1A	未成品
	MⅡ16・4b層	ホルンフェルス（北上）	8.97	4.2	1B	未成品
	MⅡ17・2-3b層	安山岩（北上）	12.13	5.83	1B	未成品
	MⅡ17・2-3b2層	砂岩（北上）	8.59	3.82	1B	未成品
	MⅡ17・2-3b2層	砂岩（北上）	12.97	4.81	2	未成品
	MⅡ17・3層	砂岩（北上）	8.14	4.89	1A	未成品
	MⅡ17・3層	斑糲岩（北上）	10.97	6.78	1A	未成品
	MⅡ17・3層	玢岩（北上）	9.92	6.11	1B	未成品
	MⅡ18・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	11.84	5.04	1B	未成品
	MⅡ18・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	10.12	3.75	1B	未成品
	MⅡ18・3層	玢岩（北上）	9.14	4.13	2	未成品
	MⅡ19・1層	ホルンフェルス（北上）	8.35	3.59	1B	未成品
	MⅡ19・3層	閃緑岩（北上）	15.05	10.64	1A	未成品
	MⅡ19・3層	頁岩（北上）	14.24	4.66	3	未成品
	MⅡ20・1-2層	閃緑岩（北上）	12.29	5.73	3	未成品
	MⅡ20・2-3b層	頁岩（奥羽）	7.78	3.56	1B	未成品
	MⅡ21・2-3b層	斑糲岩（北上）	8.51	4.96	2	未成品
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	11.61	6.76	1B	未成品
	MⅡ21・4b層	石英斑岩（北上）	8.26	5.46	2	未成品
	MⅡ21・4b層	ホルンフェルス（北上）	10.03	7.11	2	未成品
	MⅡ21，1・4b層	ホルンフェルス（北上）	14.2	6.35	0	未成品
	MⅡ21，1・4b層	玢岩（北上）	10.68	4.44	1B	未成品
	MⅡ21，1・4b層	閃緑岩（北上）	11.28	4.15	1B	未成品
	MⅡ22・1-2層	安山岩（北上）	7.24	3.49	1B	未成品
	MⅡ22・1-2層	安山岩（北上）	6.99	2.57	1B	未成品
	MⅡ22・2-3b2層	玢岩（北上）	10.5	5.88	1B	未成品
	MⅡ22・4b層	閃緑岩（北上）	10.64	6.41	1A	未成品
	MⅡ22・4b層	玢岩（北上）	8.38	4.55	1B	未成品
	MⅡ22・4b層	ホルンフェルス（北上）	16.2	6.24	1B	未成品
	MⅡ23・2層	頁岩（北上）	6.53	4.54	1B	未成品
	MⅡ23・2-3b2層	閃緑岩（北上）	15.9	6.78	1A	未成品
	MⅡ23・4b層	玢岩（北上）	19.05	10.52	1A	未成品
	MⅡ23・4b層	ホルンフェルス（北上）	9.54	4.34	1B	未成品
	MⅡ23・4b層	閃緑岩（北上）	12.45	5.53	1B	未成品
	MⅡ24・1層	ホルンフェルス（北上）	9.34	3.84	1A	未成品
	MⅡ24・1層	閃緑岩（北上）	13.29	6.64	1B	未成品
	MⅡ24・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	11.19	5.34	1A	未成品
	MⅡ24・3層	ホルンフェルス（北上）	9.77	4.04	1B	未成品
	MⅡ25・4層	玢岩（北上）	18.4	11.66	1A	未成品
	MⅡ25・4層	玢岩（北上）	21.1	10.35	1A	未成品
	MⅡ25・4b層	玢岩（北上）	14.47	4.65	1B	未成品
	MⅡ25・4-5層	玢岩（北上）	15.05	8.98	1B	未成品
	MⅡ25・8層	安山岩（北上）	13.26	5.42	2	未成品

（次頁へ続く）

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	MⅡ13・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ13・2-3b2層	閃緑岩（北上）	3			
	MⅡ13・3層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ13・3上層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ14・1層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ14・1層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ14・1層	頁岩（北上）	1B			
	MⅡ14・1層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ14・1層	頁岩（奥羽）	2			
	MⅡ14・2b層	火山礫凝灰岩（北上？）	1A			
	MⅡ14・2b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ14・2b層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ14・2b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ14・2b層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ14・2b層	頁岩（北上）	3			
	MⅡ14・2b層	頁岩（北上）	3			
	MⅡ14・2b層	頁岩（北上）	3			
	MⅡ14・2-3b2層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ14・2-3b2層	玢岩（北上）	3			
	MⅡ14・3層	頁岩（奥羽）	1A			
	MⅡ14・3層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ14・3層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ14・7層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ14・7層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ14・7層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ15・2b層	花崗閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ15・2b層	斑糲岩（北上）	1A			
	MⅡ15・2b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ15・3-4層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ15・3-4層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ15・3-4層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ15・7層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ15・8層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ16・1-2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ16・1-2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ16・1-2層	頁岩（北上）	1B			
	MⅡ16・2-3b2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ16・2-3b2層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ16・2-3b2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ16・2-3b2層	砂岩（北上）	2			
	MⅡ16・2-3b2層	閃緑岩（北上）	3			
	MⅡ16・3層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ16・3層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ16・3層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ16・3層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ16・3層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ16・3層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ16・3層	石英斑岩（北上）	1B			
	MⅡ16・3層	石英斑岩（北上）	1B			
	MⅡ16・3層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ16・4b層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ16・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ16・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ16・4b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ16・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ16・4b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ16・4b層	斑糲岩（北上）	1B			
	MⅡ16・4b層	砂岩（北上）	2			
	MⅡ17・1層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・1-2層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ17・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ17・2-3b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・2-3b層	安山岩（北上）	1B			
	MⅡ17・2-3b2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・2-3b2層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ17・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ17・2-3b2層	砂岩（北上）	2			
	MⅡ17・3層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ17・3層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・3層	斑糲岩（北上）	1A			
	MⅡ17・3層	ホルンフェルス（北上）	1A			

磨製石斧（未成品）

番号	出土地点	石質	種類	最大計測値（cm）		備考
				長さ	幅	
	MⅡ17・3層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・3層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ17・3層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ17・3層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ17・3層	安山岩（北上）	2			
	MⅡ17・4b層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	斑糲岩（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ17・4b層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ17・4b層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ18・2b層	頁岩（北上）	1A			
	MⅡ18・2b層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ18・2b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ18・2b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ18・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ18・2-3b2層	角閃岩（北上）	1A			
	MⅡ18・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ18・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ18・2-3b2層	砂岩（北上）	1B			
	MⅡ18・2-3b2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ18・3層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ18・3層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ18・3層	頁岩（北上）	1B			
	MⅡ18・3層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ18・3層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ19・1層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ19・1-2層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ19・1-2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ19・2層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b層	斑糲岩（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b層	斑岩（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b2層	蛇紋岩（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b2層	頁岩（奥羽）	1A			
	MⅡ19・2-3b2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ19・2-3b2層	頁岩（北上）	2			
	MⅡ19・3層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ19・3層	閃緑岩（北上）	1A			
	MⅡ19・3層	閃緑岩（北上）	2			
	MⅡ19・3層	頁岩（北上）	3			
	MⅡ20・1層	玢岩（北上）	2			
	MⅡ20・1-2層	閃緑岩（北上）	3			
	MⅡ20・2-3b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ20・2-3b層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ20・2-3b層	斑糲岩（北上）	1A			
	MⅡ20・2-3b層	安山岩（奥羽）	1B			
	MⅡ20・2-3b層	玢岩（北上）	1B			
	MⅡ20・2-3b層	頁岩（奥羽）	1B			
	MⅡ20・2-3b層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ20・2-3b2層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ20・2-3b2層	デイサイト（奥羽）	1A			
	MⅡ20・2-3b2層	安山岩（北上）	2			
	MⅡ20・3層	安山岩（奥羽）	1A			
	MⅡ20・3層	砂岩（北上）	1A			
	MⅡ20・3層	斑岩（北上）	1A			
	MⅡ20・3層	安山岩（北上）	1A			
	MⅡ20・3層	礫岩（北上）	1B			
	MⅡ20・3-4層	斑糲岩（北上）	2			
	MⅡ20・3-4層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ20・9層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ20・9層	ホルンフェルス（北上）	1A			
	MⅡ20・9層	石英斑岩（北上）	1A			
	MⅡ20・9層	玢岩（北上）	1A			
	MⅡ20・9層	デイサイト（奥羽）	1B			
	MⅡ20・9層	安山岩（北上）	1B			
	MⅡ20・9層	ホルンフェルス（北上）	2			
	MⅡ21・2層	ホルンフェルス（北上）	1B			
	MⅡ21・2-3b層	斑岩（北上）	1A			

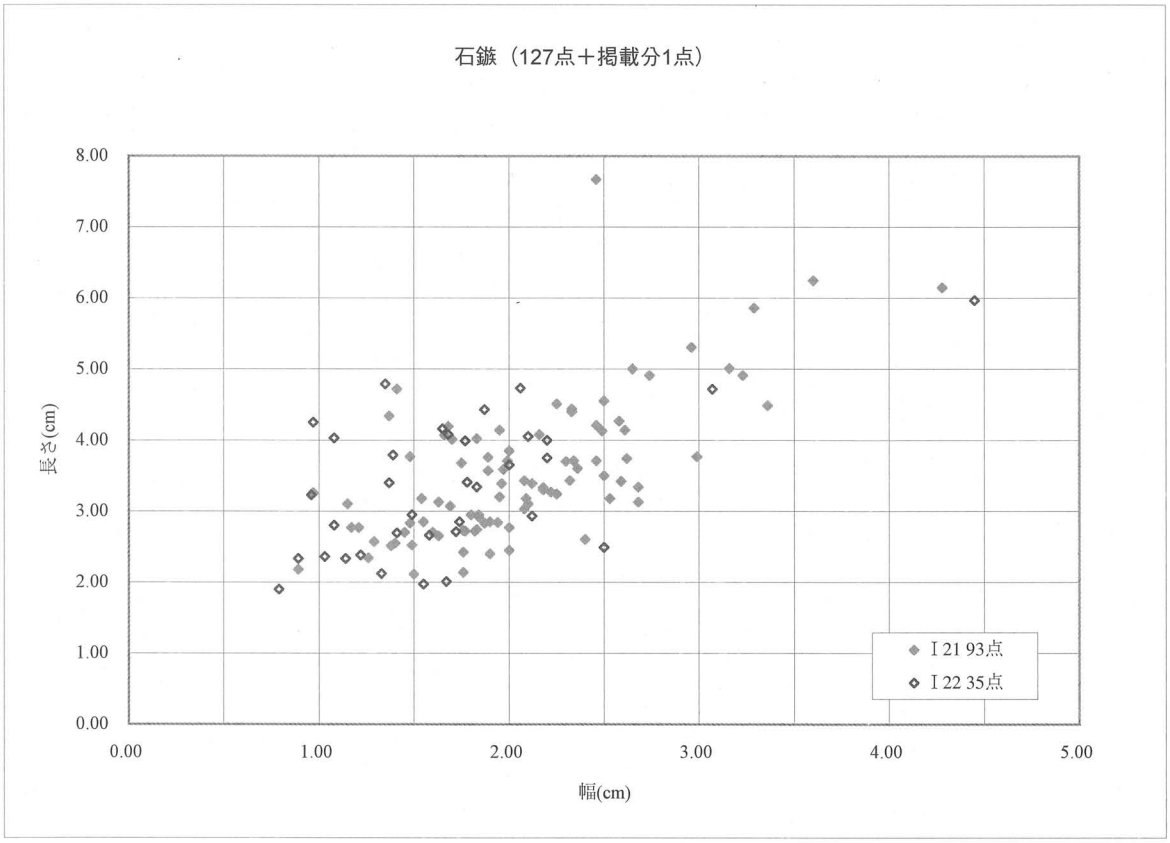
環状石斧

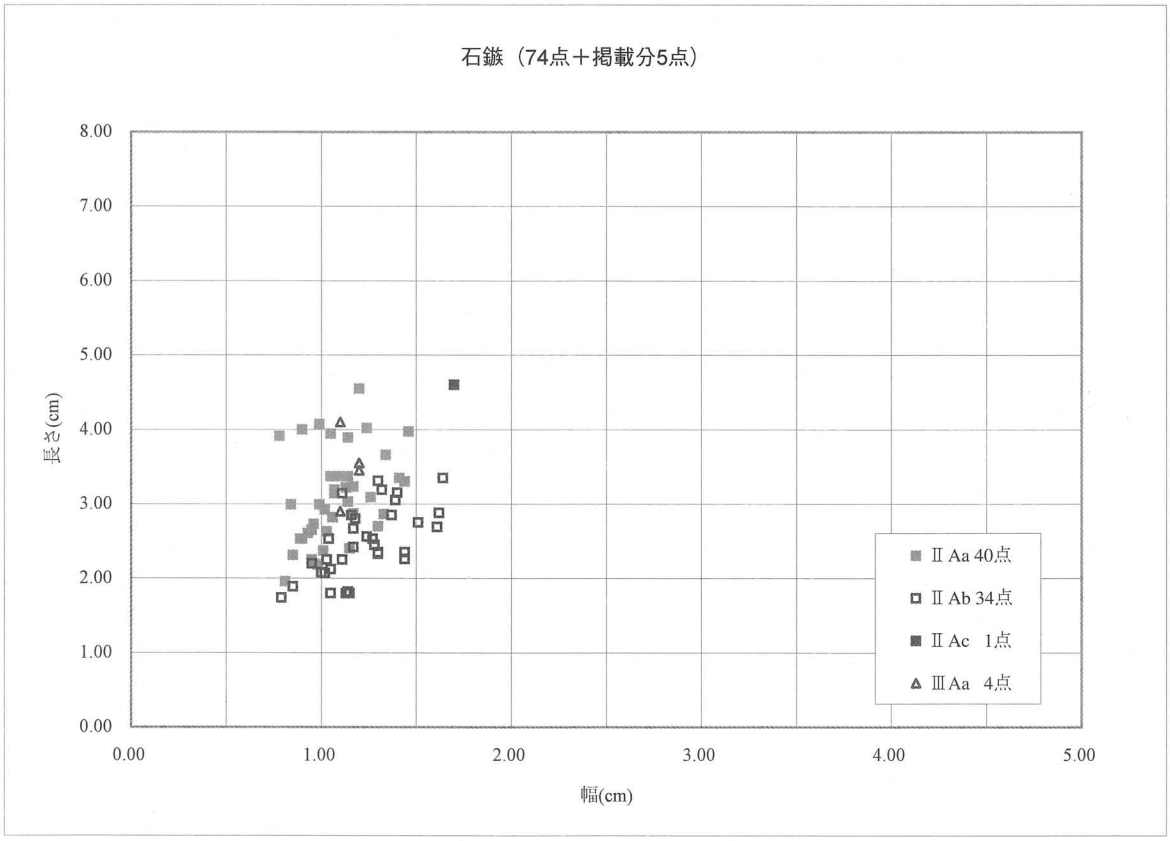
番号	出土地点	種類	残存	最大計測値（cm）		直径（平均値含）	重量	石質
				長さ	幅			
113	G Ⅷ 12・Ⅳ a2 層	完形品	1/2	5.8	(3.6)	5.8	40.6	砂岩（北上）
115	M Ⅱ 22・2-3b2 層	完形品	1/2	5.9	(3.7)	5.9	40.4	デイサイト（奥羽）
116	N Ⅱ 13・Ⅱ層	完形品	1/2	7.6	(4.2)	7.6	71.8	閃緑岩（北上）
117	F Ⅶ・Ⅳ a 層	未成品	全	13.85	15.2	14.5	1524.1	安山岩（奥羽）
118	F Ⅶ	未成品	1/2	8.6	(5.9)	8.6	150.3	安山岩（奥羽）
119	F Ⅷ 12・Ⅳ a2 層、F Ⅷ 17	未成品	全	7.7	8.6	8.2	150.8	砂岩（北上）
120	F Ⅷ 15・Ⅳ a1 層	未成品	全	8.1	7.5	7.8	175.2	デイサイト（奥羽）
121	F Ⅷ 22、G Ⅷ 1・Ⅳ a2 層	未成品	全	8.5	8.8	8.7	189.7	安山岩（奥羽）
122	G Ⅶ 20・Ⅳ a2 層	未成品	1/2	7.5	(5.6)	7.5	110.4	砂岩（北上）
123	G Ⅷ 20・Ⅳ a2 層	未成品	全	10.9	11.8	11.4	579.9	砂岩（北上）
124	G Ⅷ 11・Ⅳ a2 層	未成品	1/2	11.2	(6.3)	11.2	168.7	ホルンフェルス（北上）
125	G Ⅷ 12・Ⅳ a2 層	未成品	1/2	8.7	(5.5)	8.7	133.5	デイサイト（奥羽）
126	G Ⅷ 16・Ⅳ a2 層	未成品	1/2	6.3	(4.1)	6.3	59.2	安山岩（北上）
129	G Ⅷ 22・Ⅳ a 層	未成品	全	6.4	6.9	6.7	94.0	頁岩（北上）
130	G Ⅷ 22・Ⅳ a2 層	未成品	全	7.5	7.6	7.6	137.7	安山岩（北上）
131	H Ⅶ 3 ～ 5	未成品	1/2	6.9	(4.4)	6.9	44.6	安山岩（奥羽）
132	H Ⅶ 5、H Ⅷ 1	未成品	全	12.85	12.9	12.9	675.4	安山岩（奥羽）
133	H Ⅶ 6 ～ 9	未成品	全	8.55	9.6	9.1	260.5	安山岩（北上）
135	H Ⅷ 1	未成品	1/2	7.5	(4.9)	7.5	86.5	安山岩（奥羽）
136	H Ⅷ 12	未成品	1/2	7.8	(5.1)	7.8	120.5	安山岩（奥羽）
137	H Ⅷ 12，18	未成品	全	12.2	13.0	12.6	811.0	砂岩（奥羽）
138	H Ⅷ 14・Ⅳ a2 層	未成品	1/2	5.0	(3.3)	5.0	19.3	砂岩（北上）
139	H Ⅷ 16、H Ⅷ 21・Ⅳ a2 層	未成品	全	12.1	11.4	11.8	524.5	砂岩（北上）
143	E，F，Ⅴ～Ⅶ・Ⅰ，Ⅱ層	未成品	1/2	7.6	(3.25)	7.6	28.8	閃緑岩（北上）
144	Ⅰ Ⅷ・Ⅲ層	未成品	全	8.2	8.55	8.4	120.0	頁岩（奥羽）
145	M Ⅰ 24・4b 層、M Ⅱ 16・4b 層	未成品	全	9.7	7.15	8.4	188.3	砂岩（奥羽）
146	M Ⅰ 25・4b 層	未成品	1/2	12.1	(6.8)	12.1	296.9	デイサイト（奥羽）
147	M Ⅱ 11，16・Ⅳ a 層トレンチ、M Ⅱ 22，2・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	全	12.2	10.9	11.6	390.3	砂岩（奥羽）
149	M Ⅱ 22・1 層	未成品	1/2	8.2	(4.0)	8.2	66.4	砂岩（奥羽）
150	M Ⅱ 22，3・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	11.6	(5.8)	11.6	180.1	デイサイト（奥羽）
151	M Ⅱ 23・4b 層	未成品	全	6.65	6.55	6.6	143.1	デイサイト（奥羽）
152	M Ⅱ 24，4・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	全	13.3	13.0	13.2	624.7	安山岩（奥羽）
153	M Ⅱ 24，25・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	7.55	(4.55)	7.6	86.1	凝灰岩（奥羽）
154	M Ⅲ 4・2-3b2 層	未成品	全	8.7	7.8	8.3	197.1	安山岩（奥羽）
156	M Ⅲ 21・2-3b 層	未成品	全	10.35	10.1	10.2	427.5	安山岩（奥羽）
157	M Ⅲ②・Ⅳ層上部	未成品	1/2	11.9	(5.5)	11.9	174.2	閃緑岩（北上）
158	M Ⅲ④・Ⅲ～Ⅳ a 層上部	未成品	1/2	6.4	(3.4)	6.4	34.3	凝灰岩（奥羽）
159	N Ⅰ 5・4 層	未成品	1/2	8.35	(5.5)	8.4	148.9	安山岩（奥羽）
161	N Ⅱ 6，11・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	6.0	(3.2)	6.0	29.7	凝灰岩（奥羽）
162	N Ⅱ 7，8・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	6.0	(2.8)	6.0	34.9	砂岩（奥羽）
163	N Ⅱ 9・I-2 層と 4b 層トレンチ	未成品	1/2	5.6	(3.55)	5.6	33.7	砂岩（奥羽）
164	N Ⅱ 10・3 層	未成品	1/2	4.9	(3.8)	4.9	28.8	砂岩（奥羽）
165	N Ⅱ 16，21・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	7.8	(4.5)	7.8	54.4	デイサイト（奥羽）
166	N Ⅱ 19，24・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	1/2	11.9	(6.5)	11.9	258.6	安山岩（奥羽）
167	N Ⅲ 1・3 層	未成品	1/2	6.1	(3.3)	6.1	31.8	凝灰岩（奥羽）
168	N Ⅲ 6，11・Ⅳ a 層トレンチ	未成品	全	15.0	13.7	14.4	1415.6	安山岩（奥羽）
174	ST01　T8	未成品	1/2	(4.15)	7.5	7.5	136.3	デイサイト（奥羽）
175	ST01　T8	未成品	1/2	(5.3)	8.6	8.6	145.3	デイサイト（奥羽）
176	ST01　T8	未成品	全	7.05	8.3	7.7	123.5	凝灰岩（奥羽）
177	南西区南端トレンチ①・Ⅲ層の上	未成品	1/2	6.6	(5.9)	6.6	111.3	砂岩（奥羽）

※　第 5 ～ 6 表（および第 576 ～ 582 図）は、個々の遺物の観察表作成前に作成したもので、個々の遺物の観察表と若干違う点がある。

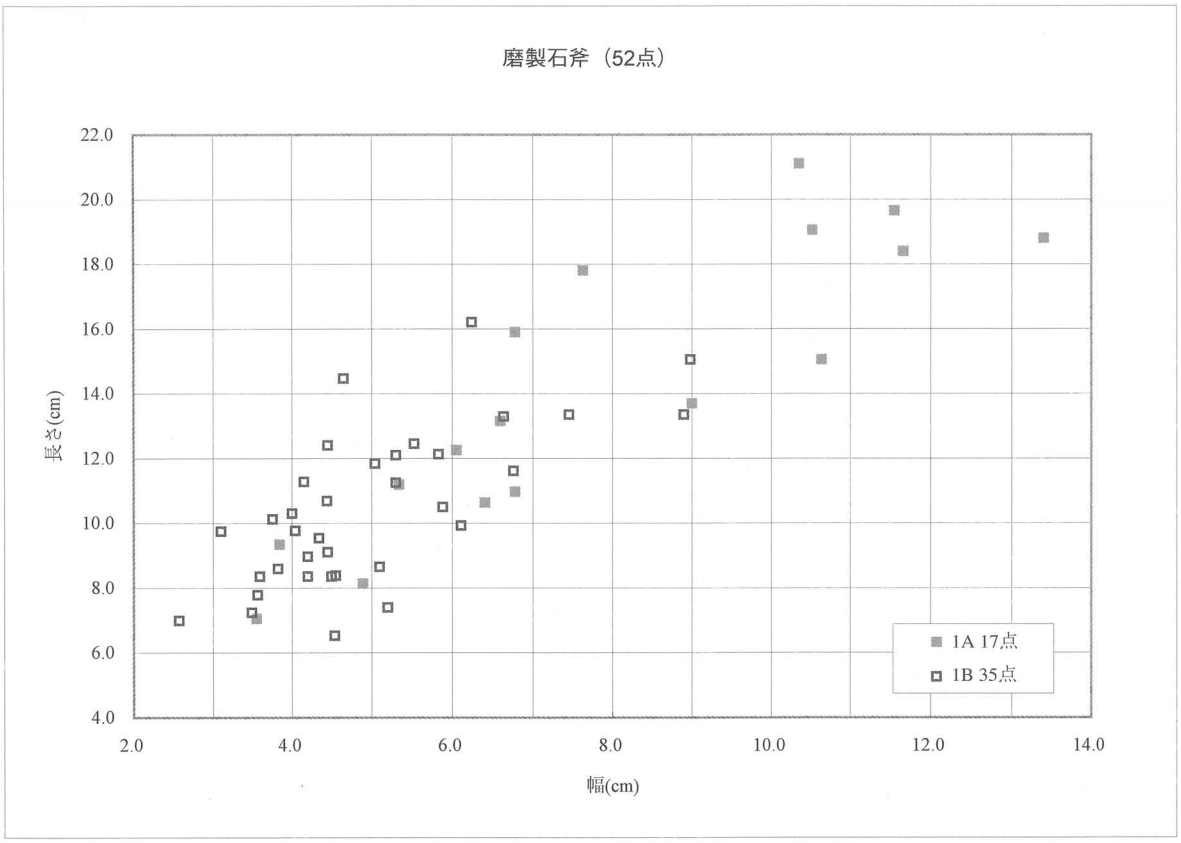
多面体

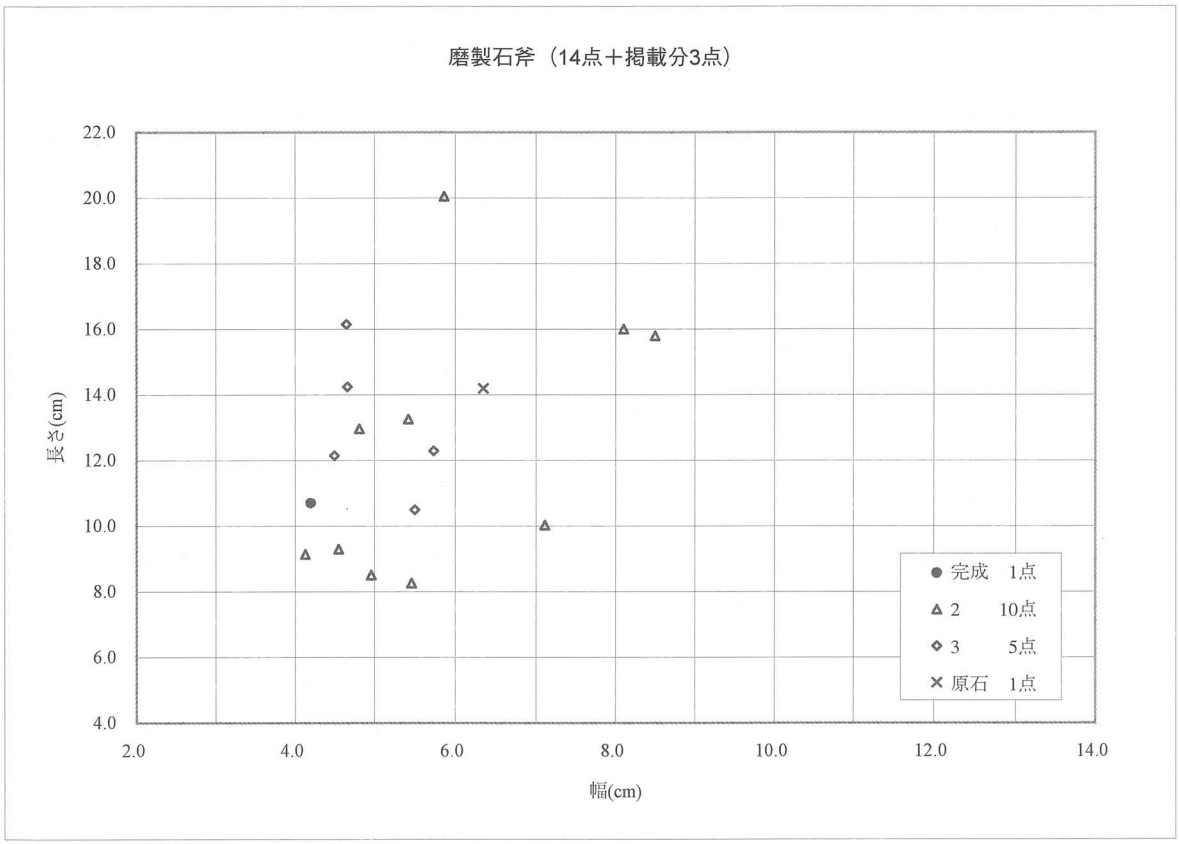
番号	出土地点	石質	最大計測値（cm）		種類	備考
			長さ	幅		
394	M Ⅰ 20・4b 層	流紋岩（奥羽）	12.4	10.1	3C	
395	M Ⅱ 10・3 上層	流紋岩（奥羽）	12.1	10.8	3C	
	M Ⅰ 24・4b 層	チャート（北上）	5.95	5.45	2C	
	M Ⅰ 24・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	6.7	6.55	2C	
	M Ⅰ 24・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	24.45	23.6	4A	
	M Ⅰ 25・5 層	閃緑岩（北上）	6.4	5.9	2C	
	M Ⅱ 4・1 層	デイサイト（奥羽）	8.75	7.75	2C	
	M Ⅱ 5・3-4 層	石英（奥羽）	9.2	8.1	2C	
	M Ⅱ 6・2-3b2 層	閃緑岩（北上）	10.8	7.6	2C	
	M Ⅱ 7・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	9.4	8.7	2C	
	M Ⅱ 8・3 層	石英（奥羽）	8.45	6.05	2C	
	M Ⅱ 10・1 層	赤色頁岩（奥羽）	5.65	5.3	2C	
	M Ⅱ 10・6 層	石英（奥羽）	9.05	8.15	2C	
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	8.15	6.9	2C	
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	7.8	7.5	2C	
	M Ⅱ 11・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	10.15	9.5	2C	
	M Ⅱ 13・2-3b 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	7.3	6.85	2C	
	M Ⅱ 13・3 上層	玉ズイ（奥羽）	8.05	6.7	2C	
	M Ⅱ 14・1 層	珪化変質岩（奥羽）	6.9	6.1	2C	
	M Ⅱ 15・7 層	珪化変質岩（奥羽）	7.5	6.85	2C	
	M Ⅱ 16・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	8.15	7.1	2C	
	M Ⅱ 16・4b 層	水晶（奥羽）	10.3	10.05	2C	
	M Ⅱ 17・2-3b2 層	赤色頁岩（奥羽）	5.8	4.9	2C	
	M Ⅱ 18・3 層	ホルンフェルス（北上）	7.4	6.85	2C	
	M Ⅱ 18・3 層	アプライト（北上）	9.65	6.7	2C	
	M Ⅱ 21・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	6.65	5.8	2C	
	M Ⅱ 21・4b 層	頁岩（奥羽）	7.7	7.45	2C	
	M Ⅱ 21・4b 層	珪化変質岩（奥羽）	8.9	6.7	2C	
	M Ⅱ 21・4-5 層	赤色頁岩（奥羽）	7.3	6.6	2C	
	M Ⅱ 22・3 層	珪化変質岩（奥羽）	7	6.65	2C	
	M Ⅱ 22・4b 層	頁岩（奥羽）	5.85	5.75	2C	
	M Ⅱ 22・4b 層	玉ズイ（奥羽）	6.65	6.4	2C	
	M Ⅱ 23・4b 層	チャート（北上）	6	5.95	2C	
	M Ⅱ 23・4b 層	閃緑岩（北上）	8.25	8.2	2C	
	M Ⅱ 25・2-3b2 層	玉ズイ（奥羽）	7.05	6.1	2C	
	M Ⅲ 1・3-4 層	閃緑岩（北上）	11.65	7.2	2C	
	M Ⅲ 6・2b 層	赤色頁岩（奥羽）	6.85	6.4	2C	
	M Ⅲ 6・10 層	角閃岩（北上）	11.95	7.75	2C	古生代デボン紀（母体変成岩類）
	M Ⅲ 8・3-4 中層	珪化変質岩（奥羽）	7.95	6.2	2C	
	M Ⅲ 8・3-4 中層	角閃岩（北上）	10	7.15	2C	古生代デボン紀（母体変成岩類）
	M Ⅲ 11・3 層	珪化変質岩（奥羽）	6.25	5.4	2C	
	M Ⅲ 11・3b 層	頁岩（奥羽）	5.9	5.65	2C	
	M Ⅲ 13・8 層	赤色頁岩（奥羽）	8	5.7	2C	
	M Ⅲ 13・8 層	珪化変質岩（奥羽）	8.1	7.5	2C	
	M Ⅲ 17・1-2 層	珪化変質岩（奥羽）	5.75	5.2	2C	
	M Ⅲ 18・3-4 層	珪化変質岩（奥羽）	7.1	6.8	2C	
	M Ⅲ 19・3-4 層	蛇紋岩（北上）	9.55	8.4	2C	
	M Ⅲ 23・4-5 層	閃緑岩（北上）	10.75	7.95	2C	
	M Ⅲ 23・8 層	石英（奥羽）	6.7	6.6	2C	
	M Ⅲ 23・8 層	赤色頁岩（奥羽）	5.95	5.5	2C	
	M Ⅲ 23・11 層	玉ズイ（奥羽）	11.25	8.8	2C	
	N Ⅰ 5・5 層	石英（奥羽）	6.95	5.75	2C	
	N Ⅰ 6・4 層	珪化変質岩（奥羽）	9.5	8.65	2C	
	N Ⅰ 8・1 層	玉ズイ（奥羽）	7.05	6.8	2C	
	N Ⅰ 12・1 層	赤色頁岩（奥羽）	7	6.75	2C	
	N Ⅰ 13・1 層	赤色頁岩（奥羽）	7.25	6.5	2C	
	N Ⅰ 14・4 層	石英（奥羽）	5.25	4.55	1C	
	N Ⅰ 20・1 層	玉ズイ（瑪瑙）（奥羽）	5.55	5.35	1C	
	N Ⅰ 25・3 層	角閃岩（北上）	13.95	8.45	3C	古生代デボン紀（母体変成岩類）
	N Ⅱ 1・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	8.4	7.25	2C	
	N Ⅱ 1・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	13.9	10.7	3A	
	N Ⅱ 2・4 層	赤色頁岩（奥羽）	6.3	4.8	1C	
	N Ⅱ 2・4b 層	石英（奥羽）	6.1	5	1B	
	N Ⅱ 3・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	6.95	6.5	2C	
	N Ⅱ 4・2 層	頁岩（奥羽）	6.4	5.85	2C	
	N Ⅱ 4・4b 層	ペグマタイト（北上）	5.6	5	2C	
	N Ⅱ 5・2-3b2 層	珪化変質岩（奥羽）	5.95	5.7	2C	
	N Ⅱ 5・4b 層	玉ズイ（奥羽）	5.1	5	1C	
	N Ⅱ 5・4b 層	チャート（北上）	5.9	5.9	2C	
	N Ⅱ 6・2 層	赤鉄鉱（和賀仙人）	3.64	3.05	0	
	N Ⅱ 6・3 層	赤色頁岩（奥羽）	6.5	5	2C	
	N Ⅱ 6・4 層	砂岩（北上）	9.15	9	2C	
	N Ⅱ 7・4 層	蛇紋岩（北上）	11.45	6.7	2C	
	N Ⅱ 7・4b 層	赤色頁岩（奥羽）	5.95	5.45	2C	
	N Ⅱ 10・1-2 層	赤色頁岩（奥羽）	6	5.7	2C	
	N Ⅱ 10・4b 層	石英（奥羽）	6.2	4.1	1B	
	N Ⅱ 11・3 層	珪化変質岩（奥羽）	7.7	6.9	2C	
	N Ⅱ 12・2 層	赤色頁岩（奥羽）	4.8	4.35	1C	
	N Ⅱ 12・4 層	赤色頁岩（奥羽）	7.4	6.35	2C	
	N Ⅱ 12・5 層	赤色頁岩（奥羽）	7.2	6.3	2C	



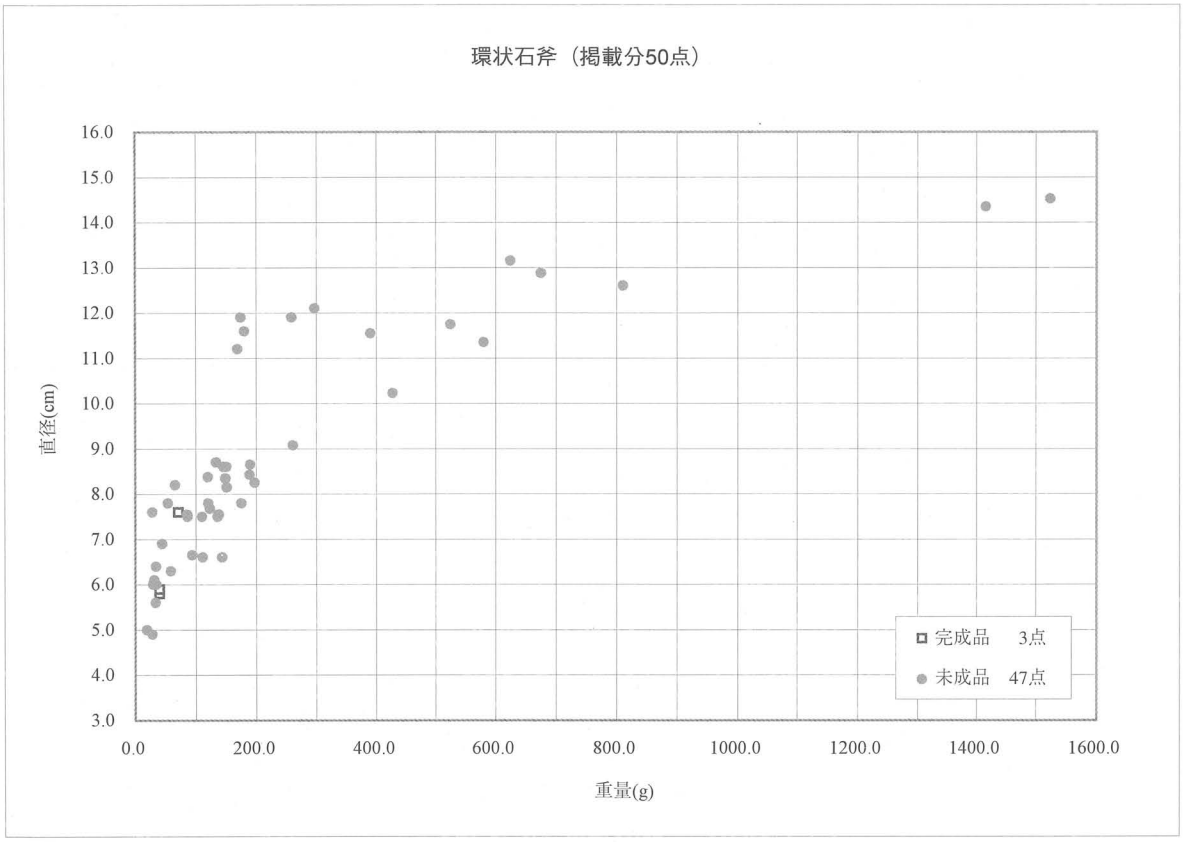


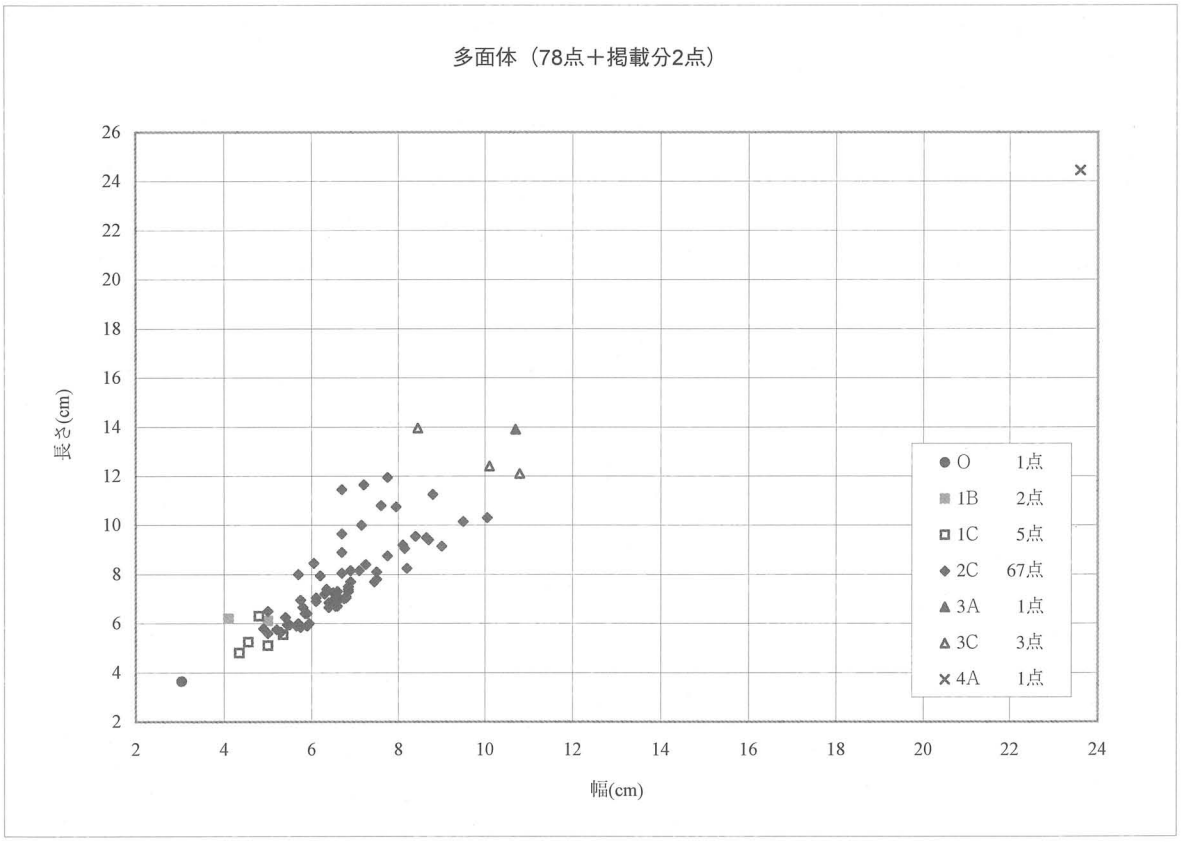
第 580 図　石器・石製品法量分析（1）





第 581 図　石器・石製品法量分析（2）





第582図　石器・石製品法量分析（3）

Ⅷ　ま　と　め

今回の調査成果をまとめ、若干の解釈を加えて今後の課題としたい。もっとも大きな成果があった縄文時代晩期末～弥生時代中期を中心に述べる。

1　縄文時代晩期末～弥生時代中期の金附遺跡

①遺物

土器が大コンテナ（30 × 40 × 30cm）で約 200 箱、石器は、原料も含めると、30 × 40 × 20cm のコンテナで約 780 箱、土製品は 386 点、石製品は 453 点で、土器以外は、他時期のものが若干含まれている（特に石器、円盤状土製品）。そのほとんどは捨て場、特に ST01 捨て場から出土している。

土製品の内訳は、耳飾 1 点、小玉・垂飾品 2 点、土偶 96 点、動物形土製品 2 点、動物形把手 4 点、土版 2 点、「スタンプ状」土製品 2 点、円盤状土製品 184 点、三角状土製品 1 点、焼粘土塊 75 点（以上）、不明 17 点。

石器は 23,453 点、剥片類は 683,659.13g 出土した。内訳は、石鏃 223 点、石鏃未成品 411 点、石錐 144 点、石篦 18 点、石匙 16 点、掻・削器等 A 類（U フレイク・R フレイク、ピエス・エスキーユ含む）68 点、掻・削器等 B 類 9 点、磨製石斧 24 点、磨製石斧未成品 5,008 点、打製石斧 1 点、「ハンマー類」13,181 点、台石 1,037 点、砥石 3,000 点、石皿 22 点、凹石 58 点、磨石 231 点、不明 2 点、剥片石器製作時の剥片 221,404.96g、その他（磨製石斧の製作剥片主体）の剥片 462,254.17g が調査で出土した。「ハンマー類」13,181 点のうち、2,086 点は多面体石で、また 493 点は通常の凹石に分類される可能性がある。

石製品の内訳は、岩偶 1 点、玉類 14 点、その未成品 69 点、垂飾品 6 点、その未成品 10 点、有孔石 6 点、環状石斧 4 点、その未成品 61 点、独鈷石未成品 31 点、石冠未成品 2 点、陽物型石製品 1 点、石棒（ほとんど未成品）7 点、石剣類未成品 219 点、不明（完成品）4 点、不明（未成品）18 点である。

自然遺物として、アスファルト塊 1 点、生粘土塊 3 点、動物遺体（人骨含む。魚骨ではギギあり）、植物遺体（炭化クルミほか）、赤色顔料・赤鉄鉱、その他大量の炭化物（樹種はクリが多い）が出土している。

土器と石器・石製品については、第Ⅶ章で検討しているので、ここでは土製品について若干見ていきたい。

土製品の中で比較的まとまって出土した土偶について（第 401 ～ 409 図）。まず、土器型式編年と対応する形で土偶を編年した金子（2004）の結果と照らしてみる。結髪土偶では、乳房の形に変遷が顕著に認められるとしており、その形から、88・95・98 は大洞 A′ 式古、81・93 は大洞 A′ 式新と判断され、共伴土器あるいは出土層を見ると確かに符合する。95 の場合は、大洞 A′ 式新を主体とする層だが、周囲には大洞 A′ 式古も見られる（第 366 図 3312）。しかし、乳房の形では大洞 A′ 式新と判断される 90 は、大洞 A′ 式古を主体とする層から出土している。小形のためであろうか（金子　2004:p.24）。

46・64・67・80・106 などは、出土層や共伴土器から、従来の青木畑式期の可能性が高く、小形扁平化し、刺突文や短沈線を多用するなど、宮城県青木畑遺跡の出土土偶に似る（宮城県教育委員会　1982: 第 22 図）。大きさやつくりから、急速に土偶の造形が衰えていることが窺える。75 は、1b 層の出土ということで比較的新しい時期と推定されるが、明確な共伴土器がなく、周囲から出土する土器からは、青木畑式（新）～谷起島式古期としかわからない。

以下、単純に型式学的に判断して、大洞 A′ 式古期と思われるのは、45・57、大洞 A′ 式新期以降と思わ

れるのは、21・24・28・75・100・101・104。小破片が多く、また共伴土器が明確でないものも多いため、時期ごとの細かい変遷については不明である。青木畑式期の土偶が比較的多いのは、土器の出土量を反映しているのだろうが、大洞A′式古期は土器の出土量に比べて土偶の割合が多いと言える。

石製品は、土器の出土量にほぼ比例しているようだが、ST02捨て場から出土した環状石斧（未成品）は、土器の出土量に比べて多い。

以下、今回の調査でわかったことを箇条書きにする。

・該期の遺物は、ST01捨て場を中心に出土しており、この捨て場は、後背湿地底に形成されて覆土が厚く、包含層自体も最大厚が1.5mを超えているため、層位的に比較的良好な状態で遺物が出土しており、編年学的な検討を可能にしている。このうち土器については、第Ⅶ章に記し、基本的に石川日出志氏ほかの編年案を追認したが、最も出土量の多い青木畑式については、その系統性の強さゆえか、本遺跡においても実態を掴めず細分することはできなかった。

・土器の出土量は、大洞A2式から徐々に増え始め、青木畑式でピークを迎え、山王Ⅲ層式で減少し、桝形囲式併行期で激減し、その後見られなくなる。

・この間、継続して異系統土器が見られ、砂沢式以外はほとんどが阿武隈川下流域の土器である。

・土製品、石器・石製品の出土量は、基本的に土器の出土量の変化に比例するが、土偶は、もともと時期による盛衰があるため若干異なり、環状石斧にもやや変わった点が見られた。

・土器の製作痕、使用痕についても若干検討したが（第Ⅶ章）、使用痕（スス・コゲ）は、金附遺跡から約4km程度しか離れていない晩期後葉の九年橋遺跡と同様の傾向が認められ、製作痕については、山王Ⅲ層式とそれ以前の土器に顕著な違いが認められる（胎土、色調）。

・石器・石製品には未成品が多く認められ、磨製石斧を中心に、石鏃、環状石斧、独鈷石、石剣類、石棒、玉類・垂飾品が本遺跡で製作されていたと推測される。出土量の変遷から、その製作時期は、ほぼ土器の盛衰に合わせているようである。

・石器・石製品の石材のほとんどは、北上川起源の可能性が高い（第Ⅶ章）。石鏃や石剣類、玉類、独鈷石？には、石材の拘りが窺われ（頁岩中心）、環状石斧、磨製石斧、多面体石器は、石材が分かれることを積極的に評価すべきようだ（第Ⅶ章参照）。

・磨製石斧の製作（敲打）具である多面体石器は、直径6cmより小さくなると捨てられるようだ（第Ⅶ章）。

・明らかな移入品は、異系統土器の他はアスファルト塊しか認められない。

②遺構

・遺跡は、幅約40mある縄文時代以来の自然堤防と、その西側にある幅約20mの縄文時代晩期以降の自然堤防、この二つの自然堤防の間の後背湿地、縄文時代以来の自然堤防とその東側に広がる段丘の間の後背湿地に立地する。

・該期の捨て場は、後者の後背湿地にも小規模なものが見られるが（ST02捨て場。大洞A′式古～新期が主）、前者が主で、大洞A2式～山王Ⅲ層式期に主として形成された（ST01・03捨て場）。

・該期の竪穴住居跡は検出されていないが、新しくできた自然堤防の上から4基の炉跡と27基の焼土、おびただしい数の柱穴が検出されている。これらは、遺物包含層の上、中、下から検出されたもので、平地住居の残骸の可能性が高い。

・土坑は、7基検出されているが、このうち3基は柱穴と考えられ、また3基は疑似現象の可能性がある。残り1基（SK90）は、上面から焼土と炭化物層の交互層が認められ、炭化物層には大量のクルミや種子などの植物遺体が、焼土層には魚骨を中心にした動物骨が含まれていた。魚骨には、東北地方で出土例の少ないギ

ギが出土しており注目される（第Ⅸ章第4節）。

・この他に、土器棺墓が検出されているが、3基と非常に少ない。おそらく再葬墓であり改変を受けているのだろうが、出土遺物量の割に極めて少なく、該期の土坑墓も全くといって良いほど認められない。

③遺跡

・金附遺跡の「縄文晩期から弥生時代においてクリ、トチノキ、オニグルミが食料として利用されていたことは確かで、さらにクリは建築材や燃料材などに多用されていたとみられる。周辺の植生を復元するための資料は少ないが、少なくとも河畔ないし谷筋にはオニグルミやトチノキ、カツラが分布し、その後背の山地にクリ、ニレ属、コナラ節、ケヤキなどの落葉広葉樹、林縁にはニワトコ属などが分布していたと推定される」（第Ⅸ章第1節）。

・金附遺跡の周囲には、同じような立地で大量の遺物が出土している、牡丹畑遺跡（大洞C2式主体）、九年橋遺跡（大洞C2～A1式）などがあるが（第Ⅱ章）、金附遺跡の場合は、これらとは異なって石器製作跡としての性格が顕著である。

・大量の未成品（失敗品）の存在から、作られた石器は、自家消費ではなく交易品であったと考えられるが、明らかな移入品は土器とアスファルト塊しかない。土器に入っていたものが対価であったのだろうか。異系統土器は、阿武隈川下流域のものが顕著だが、そちらにこちらの製品が見つかるかどうか。

・石鏃の大きさや土器の使用状況（第Ⅶ章）から、本遺跡は、石器製作跡だけでなく集落跡でもあることが窺われるが、石匙や不定形石器が極端に少ないなど、通常の集落跡の石器組成とは大きく異なる（第Ⅶ章）。

・隣接する相田遺跡との関係。相田遺跡の方が古い時期から長期に認められるが、晩期末は重なっている。相田遺跡は段丘上に立地し、金附遺跡はその下の自然堤防に立地する石器製作跡ということで、集落と作業場という機能による使い分けを想定したくなるが、金附遺跡では、大量のススコゲが認められる土器も出土し、土偶などの土・石製品も少なからず出土している。

・以上とも関係するが、今回の調査は、遺跡の北端の一部にとどまっており、遺跡の範囲・存続期間が確定しているわけではないので、今後確認する必要がある。

・金附遺跡では、縄文/弥生時代の画期はほとんど関係なく、むしろ出土遺物の変遷や集落の在り方からみれば、晩期末から始まって弥生時代へ極めて継続性が強いと言える。時代の画期は、四脚付浅鉢の消滅/蓋の出現くらいにしか認められなかった。

参考文献

金子昭彦　2004「結髪土偶と刺突文土偶の編年」『古代』第114号　早稲田大学考古学会
宮城県教育委員会　1982『青木畑遺跡』宮城県文化財調査報告書第85集

2　金附遺跡の歴史

・縄文時代中期末

自然堤防上に竪穴住居が作られた（南西区北端）。覆土から石棒（未成品？）が出土している。土坑も掘られたらしい。出土土器も比較的多い。

・縄文時代後期初頭～前葉

数は非常に少ないが、土器片が出土している。

・縄文時代後期中葉

比較的多くの土坑が掘られ（中央区）、完形に近い土偶がSK32土坑から出土し、土器も比較的多い。

・縄文時代後期中葉～晩期中葉

数は非常に少ないが、この間ほぼ継続して土器片が出土している。土坑（墓？）の中にこの時期のものが含まれている可能性がある。

新しい自然堤防は、この間に起こった大洪水によって形成されたと考えられるが、土器が継続しているため特定できない。土器の摩滅状態から推測すれば、後期末あたりか。

・縄文時代晩期中葉後半～後葉前半

ST01捨て場では、最下層の縄文時代以来の自然堤防が崩落した再堆積層の中に、完形に近い土器が出土しており（南西区）、後期中葉以来の積極的な活動が推測される。土坑（墓？）の中にこの時期のものが含まれている可能性がある（中央区）。

・縄文時代晩期後葉～弥生時代中期

前節のとおり、縄文時代晩期以降の自然堤防を中心に集落が形成され、石器の製作が盛んに行われた（南西区、東区）。

・弥生時代中期～奈良時代（8世紀前半）

本遺跡では全くの空白期で、土器も出土していない。この時期のいつか、再び大洪水が起き、捨て場を含む斜面を覆った。

・奈良時代（8世紀中頃）

竪穴住居がつくられた（北西区の縄文時代以来の自然堤防の西端）。

本遺跡は、背後に国見山、南南東約3kmに瀬谷子窯、対岸約7km南に胆沢城、という古代の重要な遺跡に囲まれた場所に立地するが（第Ⅱ章）、自然堤防という低い土地が当時嫌われたのか、あまりぱっとしない。

・平安時代（10世紀初頭前後）

土坑や焼土が検出され（南東区南部、南西区）、二つの自然堤防の間の両方の斜面から比較的多くの土器が出土している（南西区）。SK80、84土坑は、焼土や火を受けた礫など特殊な状況が認められ、埋葬に関係する施設であろうか。

今回の調査では竪穴住居は確認されていないが、立地からいっても、おそらく、この時期に見られる小規模集落の拡散化現象の一部と捉えられよう（第Ⅱ章）。また、奈良時代の集落との間の断絶は、志波城廃絶の原因と同じ理由が考えられる。すなわち、この間、洪水等にさらされ、近づきにくい場所であったのではないか。洪水堆積砂層が明瞭でないので、それほどの規模ではなかったと思われるが。

・中世

中世前半に製作された常滑焼の破片が出土しているが、この時期に捨てられたものかどうか定かではない（南西区）。土坑墓などの埋葬施設は、副葬銭が出土し中世末期と判断される（東区SK07、10土坑）。

本遺跡のこの時期の考古学的痕跡は薄いが、もともと考古学的証拠が少ない時期なので、実際にどの程度の活動が行われていたか定かではない。なお、本遺跡で奈良時代以後に顕著な大洪水の痕跡を認めることができないのは、おそらくこの時期以後に堤防が築かれたためであろう。

・近世

南北方向に延びる大溝（SD08）、墓壙が検出され、陶磁器小片が出土している（南西区）。この大溝は、江刺平野に灌漑用水を提供した大堰に関係があるものと推測される（第Ⅱ章）

Ⅸ　自然科学的分析

金附遺跡で行った自然科学的分析は、古環境復元（1）、動植物遺体の同定（2～4）、石器の使用痕分析（5・6）、炭素14年代測定（7・8）である。以下、その分析を委託した理由と結果についての若干のコメントを述べていく。なお、本章は、変則的な構成（書式、割付）になっているが、図表を既に割り付けして原稿を提出してきた場合には、変更するとその主旨を損なう恐れがあると判断したためである。また、本章は本来なら第Ⅷ章の前に入るべきものだが、造本上の理由で最後になったことをお断りしておく。

1　金附遺跡における縄文晩期から弥生時代の植物化石群

引き継ぎ時の打ち合わせで、前年度の担当者から、ST01捨て場にトレンチを入れたところ（T8）厚い炭化物層が検出され、次年度に採取から含みで分析を委託しようと考えていたとの判断を受けて委託した。

後背湿地に形成された捨て場ということで花粉の残存が期待されたが、報告のように、ほとんど残っていなかったようである。それは、土層からも裏付けられ、薄い縞状の交互層という水成堆積を示すのは、一番低い場所だけであり（第57図下の8層）、それ以外は、地山が砂層ということで、洪水の後比較的早い段階で乾燥してしまったのであろう。せっかく現地にまで来ていただいて採取したのに残念なことであった。花粉が残っていないということで、代わりに炭化材を多めに分析していただいた。

炭化した植物遺体しか得られなかったので限界があるのだろうが、金附遺跡では、オニグルミ、トチノキ、クリが主に利用され、青森県是川中居遺跡における植物利用に共通するものがあったと推測している。

周辺では、北上市九年橋遺跡（第Ⅱ章参照）の遺物包含層で花粉分析が行われている（山田　1980）。共通する点も多いが、九年橋遺跡の方がより湿地性が強いようである。

2　金附遺跡の炭化種子

SK90土坑は、縄文時代後期以降に形成された自然堤防の東斜面で、晩期末～弥生時代前期の遺物包含層の下から検出された土坑で、焼土層と炭化物層が交互に見られ、炭化物層から多量のクルミなどの植物遺体が出土した特異な土坑である。炭化物層から種子も多く出土したため、その同定を委託し、併せて他の遺物包含層から出土した種子の同定を委託した。結果は、種不明とのことである。SK90土坑出土資料は、素人目にはそれほど残りが悪いようには見えず、何よりその出土量から楽観していたが。

3　金附遺跡の炭化植物遺体

同じくSK90土坑の炭化物層から出土した樹皮状のもの、植物の茎状のものの同定を委託した。同定が困難な部位で望みは薄いと考えていたが、茎状のものについては、イネ科タケ亜科の稈と同定された。

4　金附遺跡出土骨の同定

同じくSK90土坑の焼土層から出土した骨の同定を委託し、併せて捨て場出土資料のうち骨端の残っている骨片の幾つかの同定も委託した。後者については、骨端が残っている資料がまだこれと同じくらいあるが、出土地点・層もマチマチで、何より第Ⅴ章に記したような粗い調査で偶然発見されたものだけを悉く同定してもコスト的にどうかと考えたので、特に出土層が明確で撹乱の少ない資料を選んで委託した。

報告の表2のような結果が得られ、同定した金子浩昌氏は、東北地方で出土例の少ないギギに注目している。その他は、縄文時代に一般的な動物であろう。

5　金附遺跡出土石匙の使用痕分析

（次年度）出土石器のうちで、石匙は特に少なく、またその形も通常とは異なり石錐に似たものが多かった。通常とは異なる用途、特に石器製作跡ならではの用途があったかと考えて使用痕分析を委託した。

分析の結果、一般的な形態のNo.364、365、369、370は、動物解体等の通常の石匙の用途に使われたことがわかった。結果が期待された石錐に似た形態を示す一群は、No.361以外は光沢が検出できなかったようである。No.361は、植物で生じるAタイプ光沢で、前・中期の石匙への近似を示すものか。

6　金附遺跡出土礫石器の使用痕分析

（次年度の）調査で出土した凹石は、前・中期の遺跡で多く見られる一般的な凹石の窪みとは見た目が異なり、細かく浅いあばたの集合体というより鋭角的で深い穴が多い気がした。石器製作具の一種ではないかと考え、使用痕分析を委託した。

結果は、一般的な凹石であり、クルミなどの尖ったものを打撃した結果生じた使用痕で、筆者の判断は全くの誤りであることがわかった。本遺跡の石器分類（第Ⅵ章）は有効でないことになる。

7　金附遺跡の放射性炭素年代測定

調査当時の調査課長の指示で委託したものである。コスト面から3点の委託となった。また、本格的な整理作業の始まる前に委託したため、単純に炭化材の残りの良さと汚染の有無の可能性で選んだので、結果的には周囲にあまり良好な土器が出土しておらず時期推定の困難な地点を選んでしまった。具体的に示すと、試料3は、MⅡ21グリッド4b層上面から出土しているが、4b層上面には掲載に足る土器は出土していない。4b層からは、第255図2005、2018、2019の土器が出土しており、これらは大洞A′式新と判断される。試料4は、MⅡ25グリッド4b層で、第275図2229～2231の土器が出土しており、大洞A′式古～新に相当する。試料5は、MⅢ8グリッド10層から出土しているが、掲載に足る土器は出土していない。他のグリッドでは、10層は大洞C2式～A1式が主として出土しているようである（第Ⅶ章第1節参照）。

試料3から判断すると、暦年較正年代では、大洞A′式新のころが紀元前400年ということになる。試料4は芳しい結果が得られていないので、試料5を参考にすると、確かにこれより古い年代が得られているので、一応の目安と考えて良さそうである。

8　金附遺跡出土試料の^{14}C年代測定

金附遺跡の時期に興味を示された小林謙一氏（国立歴史民俗博物館）の御厚意で、土器付着炭化物と出土炭化物の両方を分析していただいた。なお、IWM9～12については、手違いで報告書に付着土器を掲載できなくなってしまったことをお詫びする。

土器付着炭化物については、海洋に由来するおこげのためか古い値を示しているが、多くの資料が伴出する炭化材と整合的である。出土炭化物については、層位と整合した良好な結果が得られているようである。

小林氏は、今回の測定による実年代を次のように推定している。弥生時代中期山王Ⅲ層相当期を、較正年代で紀元前400～200年、大洞A′式・砂沢併行期を、較正年代で紀元前350年頃よりおおむね古い年代。

パリノ・サーヴェイ株式会社の分析は、試料が少なくて正当な比較はできないかも知れないが、大洞A′式　新期（砂沢式併行期）を紀元前400～200年と判断する小林氏の結論とは符合すると言える。

参考文献

山田悟郎　1980「第3章第6節　花粉分析」『九年橋遺跡第6次調査報告書』北上市教育委員会　文化財調査報告第29集

1　金附遺跡における縄文時代晩期から弥生時代の植物化石群

吉川純子・吉川昌伸（古代の森研究舎）

(1)　は　じ　め　に

金附遺跡は、北上川左岸の自然堤防上に立地する縄文中期から近世にわたる遺跡である。縄文晩期末から弥生時代前期には最も栄えた時期とみられ、石器やその未製品、原料の石、土器など多量の遺物が出土し、北上川の礫を利用して斧などの石器をつくっていたと考えられている。この時期の堆積物には夥しい炭化物や木炭片が含まれ、さらに自然堤防間に旧河道跡が確認された。こうしたことから、生業と周辺の植生復元のための資料を得ることを目的に花粉化石、大型植物化石、木材化石の植物化石群の調査を行った。

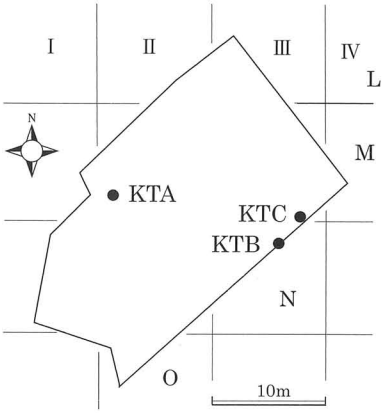


図1　分析試料採取位置図

(2)　堆積物の概要

調査は自然堤防上のKTA、及び旧河道のKTB、KTCで行った。調査地点の位置を図1に、分析採取地点の地質柱状図を図2に示す。各地点とも縄文晩期から弥生時代の堆積層からなる。堆積物は、自然堤防上のKTAではシルト質細粒砂ないし砂質シルトからなり、2-3bや2-3b2層には夥しい炭化物を含むため黒色を呈する。旧河道内のKTBとKTCは、主に灰オリーブ色ないしオリーブ黒色シルト質細粒砂からなり、4-5層や3-4層、KTCの2-3b層ではシルト分を多く含む。また、木炭片が散在し、4-5、4、2-3b2、1-2各層では部分的に炭化物を多く混入する。8層ではシルト質細粒砂から砂質シルトへの級化成層が4サイクルみられる。なお、堆積物の詳細な記載については関係する章を参照されたい。

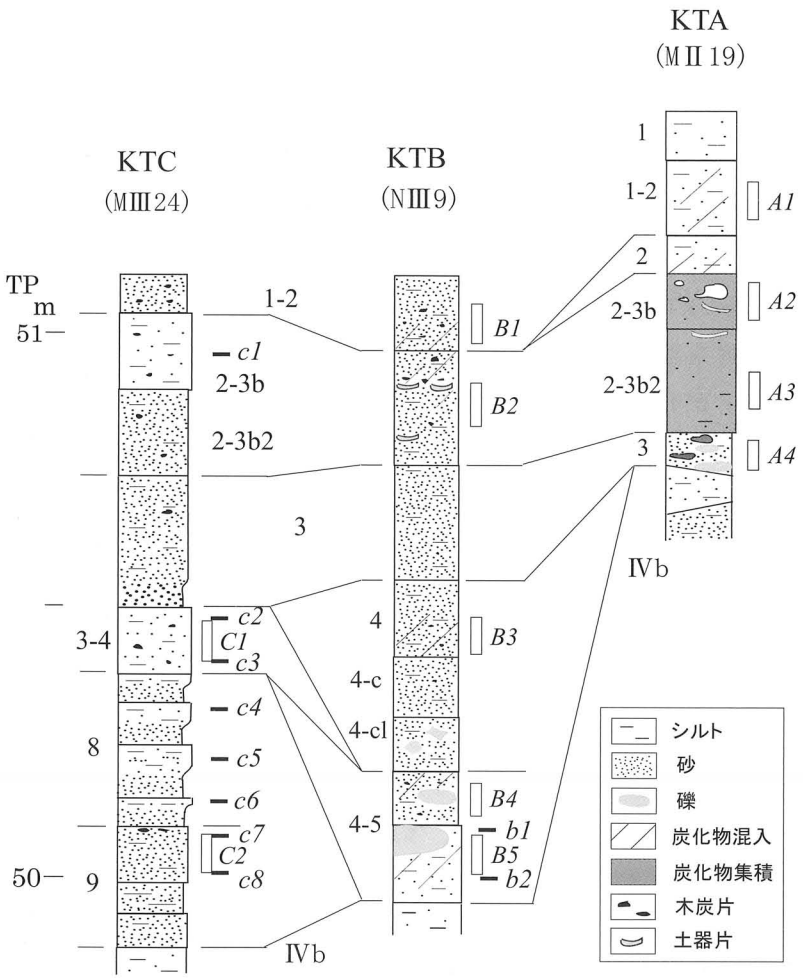


図2　金附遺跡の地質柱状図と分析試料採取層準

大文字のイタリックは大型植物化石用試料、小文字のイタリックは花粉分析用試料を示す

(3)　花粉化石群

花粉化石群の調査は旧河道のKTBとKTC地点で行った（図2）。花粉化石の抽出は、単位体積あたりの花粉量を算出するため体積を測定後、10%KOH（湯煎約15分）－傾斜法により粗粒な砂を取り除く－48%HF（約15分）－重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）－アセトリシス処理（濃硫酸1: 無水酢酸9の混液で湯煎7分）の順に処理を行った。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び微粒炭量について調査した。有機物量の変動については強熱減量を測定した。強熱減量は、るつぼと乾燥試料約2gの質量をはかり、るつぼを電気マッフル炉内に置き、750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのNIH Imageで微粒炭の面積を測定した。

表1　金附遺跡の花粉分析試料の堆積物の性質（重量%）

試料	層位	堆積物の特徴	堆積物の性質（重量%） 含水比	砂	泥	強熱減量（有機物量）	微粒炭量（㎟/㎤）
KTB（NⅢ9）							
b1	4-5	オリーブ黒色細粒砂質シルト	28.6	47.4	41.1	11.5	2653
b2	4-5	オリーブ黒色細粒砂質シルト	43.3	40.1	48.8	10.8	998
KTC（MⅢ24）							
c1	2-3b	オリーブ灰色シルト質細～中粒砂	28.3	61.0	32.5	6.5	281
c2	3-4	灰オリーブシルト質細～中粒砂	30.4	64.6	29.1	6.3	312
c3	3-4	灰オリーブシルト質細～中粒砂	35.2	51.9	41.2	6.9	512
c4	8	灰色シルト質細粒砂	40.9	55.7	36.7	7.6	583
c5	8	灰色シルトに灰オリーブ細粒砂が不定形に混入	41.8	44.5	46.7	8.8	1412
c6	8	灰色シルト質細粒砂	40.7	54.9	37.5	7.6	830
c7	9	灰オリーブシルト質細粒砂	42.4	50.9	39.5	9.6	1270
c8	9	灰オリーブシルト質細粒砂	37.4	64.3	28.3	7.4	779

旧河道のKTBとKTC地点の10層準で花粉化石の調査を行ったが、c4でカバノキ属（*Betula*）が1粒、b2でハンノキ属（*Alnus*）1粒とヨモギ属（*Artemisia*）3粒が産出したのみで、それ以外の試料からは産出しなかった。一方、図3に示したように各試料には夥しい微粒炭が含まれ、特にb1では著しく多い（表1）。

分析層準の堆積物は、有機物量が6～12%、泥分量が29～49%占め、砂は細粒砂を主とする（表1）。花粉は流水環境ではシルト以下の細粒成分と挙動を伴にするため、本遺跡の粒度組成からは通常含まれていることが多い。一方で、処理後の残渣は微粒炭からなり炭化していない植物片は含まれない。こうしたことから、花粉の大半は分解されたものと推定される。花粉の外壁は、湿地や水域など還元

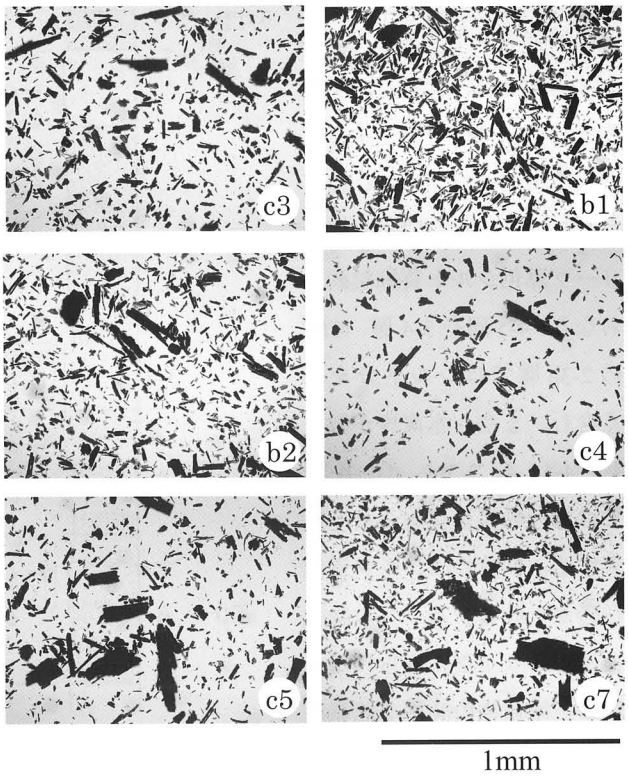


図3　花粉処理後の残渣の状況

環境下では保存性は高いが、陸上の土壌のような酸化条件下では化学的分解やバクテリアの食害により保存性は著しく低い。したがって、旧河道は増水した短期間のみ河川環境にあったが、普段は水のない乾陸化した状態であったと推定される。

(4)　大型植物化石群

1）大型植物化石群の記載

大型植物化石の分析は、KTA、KTB、KTC の 11 層準で行った（図 2）。各層準から堆積物をブロックで採取し、0.25mm 目の篩で水洗を行った。実体顕微鏡を用いて残渣から同定可能な植物化石を選別し、分類群別、産出部位別に計数した。選び出した炭化物は 60% のアルコール液侵標本にしてガラス瓶で保管されている。

各試料には、多量の炭化物のほか、木炭片、土器片、石質剥片などの生業に由来する遺物を含む。旧河道堆積物には炭化していない植物遺体が含まれていることが予想されたが、堆積物中の黒色を呈する部分はいずれも炭化物に由来し、根や細かい葉片などの腐敗していない植物遺体はまったく認められなかった。

産出した大型植物遺体を表 2 に、また堆積物 500cc あたりに換算した層位別産出個数を表 3 に示す。各試

表２　金附遺跡より出土した炭化種実

		K T A				K T B					K T C	
	試料番号	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2
	層位	1-2	2-3b	2-3b2	3	1-2	2-3b2	4	4-5 上	4-5	3-4	9
分類群	出土部位＼体積 (cc)	330	400	440	200	250	260	800	340	320	160	350
オニグルミ	内果皮 1/4 片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
	内果皮破片	2	1	7	3	33	20	49	14	12	5	34
クリ	果皮破片	-	-	2	-	-	-	2	-	-	1	2
ブナ科	果皮破片	-	-	3	-	-	1	3	1	3	1	2
トチノキ	種皮破片	-	-	9	-	19	16	22	17	7	5	22
	子葉破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ属	内果皮	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
サナエタデ近似種	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-

表３　金附遺跡より出土した層位別の炭化種実

	分類群	出土部位＼層位	1-2	2-3b	2-3b2	3
KTA	オニグルミ	内果皮破片	3	1	7	7
	クリ	果皮破片	-	-	2	-
	ブナ科	果皮破片	-	-	3	-
	トチノキ	種皮破片	-	-	9	-
		子葉破片	-	1	-	-
	サナエタデ近似種	果実	-	-	1	-

	分類群	出土部位＼層位	1-2	2-3b2	4	4-5
KTB	オニグルミ	内果皮 1/4 片	2	-	-	-
		内果皮破片	66	40	30	20
	クリ	果皮破片	-	-	1	-
	ブナ科	果皮破片	-	2	2	3
	トチノキ	種皮破片	38	32	14	18
	ニワトコ属	内果皮	2	-	-	1
	核菌綱	菌核	-	-	1	-

	分類群	出土部位＼層位	3-4	9
KTC	オニグルミ	内果皮破片	16	49
	クリ	果皮破片	3	3
	ブナ科	果皮破片	3	3
	トチノキ	種皮破片	16	31

各試料の出土個数は堆積物 500cc あたりの個数

料から産出した大型植物遺体はすべて炭化したものであった。1～9各層の炭化種実の産出傾向は、有意な差は無く概ね類似する。つまり、オニグルミとトチノキが大半の試料でいくぶん多く産出し、クリ、ブナ科、ニワトコ属、サナエタデ近似種が一部層位で産出している。また、2-3b2層には細かい炭片が多く含まれ、中にはイネ科の草本と確認できる節のある炭片があった。試料の処理量を増しても種類の増加はみられず、同じ分類群の個数が増加する傾向にある。これは主にオニグルミやトチノキ、クリの果皮がしばしば燃料としても利用されたことを示唆させる。

2）炭化種実の形態記載

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.)：内果皮が4分の1程度に割れたものと、3-12mm程度の破片を出土した。オニグルミの内果皮は大変緻密で硬く、炭化すると断面に光沢がしばしば見られる。果皮内部は複雑な曲面で構成されており平滑で、果皮表面は緩やかなおうとつがあり、不規則な線が入る。

ブナ科 (Fagaceae)：5mm程度の破片を出土した。果皮は3層構造で果実の上下方向に配列する細胞のため上下に筋が走り、縦に裂けやすい。クリの果皮も同様の特徴を持ちブナ科と区別がつきにくいため、基部を付随しない果皮破片はすべてブナ科と同定した。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：5-13mm程度の破片を出土した。果皮はブナ科の特徴を持ち基部を付随している。基部は果皮が厚く表面はいぼ状もしくはそれらがつながった突起がある。

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)：5-13mm程度の種皮の破片と9mmの子葉の破片を出土した。種皮は3層構造だが、細胞が不規則に配列しているため、ブナ科のように縦には裂けずに不規則な形になりやすい。表面は平滑で大変細かい網目もしくは指紋状や流理状の模様になる。炭化した子葉は子葉の中心部に向かって割れ目が無数に入り、その割れ目に沿って割れ易い。

ニワトコ (*Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn.)：内果皮の完形を出土した。内果皮の外観は基部が突出した楕円形で、横面観は薄く表面全面に波状のおうとつがあり、基部には孔がある。

サナエタデ近似種 (*Polygonum* cf. *scabrum* Moench)：完形の果実を出土した。果実は2面形で円形、扁平で中央部分がへこむ。果実の基部と花柱が果実から突出する。表面は平滑である。

核菌綱 (Pyrenomycetes)：菌核を出土した。核菌綱の仲間は樹皮などに着生して最外部に菌核を作る。菌核は球体が多い。

（5）　木材化石群

1）炭化材の樹種

炭化材試料は、発掘調査時に層位別に取り上げられた試料を用いた。炭化材は乾燥させてから横断面、放射断面、接線断面を割り出し、プレパラートに粘土で固定した後、落射光を使って顕微鏡で観察し、樹種を同定した。表4に出土した炭化材の樹種を層位ごとにまとめた。表中で破片とした試料は、炭化材が2-3mm程度の細かい破片で堆積したもので同定不可能であった。

出土した炭化材は、4層及び4-5層は大半がクリで、4b層に1試料だけニレ属が産出した。3層はクリ、2層はほとんどがクリで1試料のみコナラ節であった。1層にはクリのほかにニレ属が多く、コナラ節、カツラ、ケヤキが各1試料産出している。また、試料2、4、31は年輪の発達状態から枝とみられ、14、38、39は木材組織構造から根材とみられる。大半の炭化材がクリであることから、クリが食料や建築材などに多用されていたことが伺える。また、ニレ属やカツラ、ケヤキ、コナラ節も利用しているため、これらは周辺に分布していたと推定される。

表４　金附遺跡より出土した炭化材の樹種

層位	位置	樹種	試料番号
1	L Ⅱ 20	クリ	21
1	M Ⅲ 21	ニレ属	35
1b	M Ⅲ 23	クリ	32
1-2	M Ⅲ 22	クリ (枝材)	2
1-2	M Ⅲ 23	散孔材	6
1-2	N Ⅲ 2	ニレ属	16
1-2	M Ⅲ 17	散孔材	18
1-2	M Ⅲ 22	ケヤキ	19
1-2	M Ⅱ 25	クリ	24
1-2	M Ⅲ 22	ニレ属	25
1-2	M Ⅲ 17	ニレ属	28
1-2	M Ⅲ 18	カツラ	30
1-2	M Ⅲ 18	クリ	33
1-2	N Ⅲ 3	コナラ節	37
2	N Ⅱ 4	クリ	10
2b	M Ⅲ 12	コナラ節	7
2b	L Ⅲ 21	クリ	40
2-3b	M Ⅱ 22	クリ	5
2-3b	M Ⅱ 17	破片	12
2-3b	M Ⅱ 25	破片	15
2-3b	M Ⅲ 22	クリ (枝材)	31
2-3b	M Ⅱ 17	破片	42
2-3b	M Ⅱ 25	散孔材 (根材)	39
2-3b2 上	M Ⅱ 16	クリ (枝材)	4
2-3b2	M Ⅱ 16	クリ	1
2-3b2	M Ⅱ 16	クリ	8
2-3b2	N Ⅱ 20	クリ	9
2-3b2	N Ⅲ 16	破片	34
2-3b2	M Ⅱ 12	クリ	38
2-3b2	M Ⅱ 16	クリ	41
2e	M Ⅲ 21	クリ	13
3 上	L Ⅱ 25	クリ	36
3	M Ⅱ 7	破片	43
4	N Ⅲ 16	クリ	23
4b	N Ⅱ 5	ニレ属	17
4b	M Ⅰ 25	クリ	20
4c 上	N Ⅲ 7	樹皮	3
4c	M Ⅲ 22	クリ (根材)	14
4c 下	N Ⅲ 3	散孔材	26
4c 下	M Ⅲ 23	クリ	27
4-5 上	N Ⅲ 3	クリ	11
4-5	M Ⅲ 2	クリ	22
4-5	M Ⅲ 17	クリ	29

2）炭化材の組織構造の記載

コナラ節 (*Quercus* sect. Prinus)：年輪の初めに大きい道管が 1-3 列並び、その後急に径が小さくなって火炎状に並ぶ環孔材。小道管は壁が薄く角ばっている。放射組織は単列と大きい集合放射組織がある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：はじめに大きい道管が並んでその後徐々に径を小さくしながら火炎状に小道管が配列する環孔材。道管は単穿孔で中にチロースが炭化したものが薄い膜状に見られる。放射組織は単列のみ。

ニレ属 (*Ulmus*)：はじめに大きい道管が 2-3 列並んで小道管は複数が接合して複合管孔を形成し、これが花弁状や接線状にやや規則的に配列する。道管は単穿孔で、小道管の側壁にはらせん肥厚がある。放射組織は 6-7 列でほぼ同性。東北の河川沿いにはしばしばハルニレが多く生育している。

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)：はじめに大きい道管がほぼ 1 列並んで小道管は複数が接合して複合管孔を形成し、これが花弁状や接線状にやや規則的に配列する。道管は単穿孔で、小道管の側壁にはらせん肥厚がある。放射組織は 6-7 列で異性、上下の細胞にはときどきシュウ酸石灰の結晶が見られるが、炭化材ではわかりにくい。

カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)：道管が単独または 2-3 個連結して年輪内にほぼ均一に分布する散孔材。年輪界はややわかりにくい。階段穿孔で道管中にはチロースが発達する。放射組織は単列から 2 列で異性。

（6）　金附遺跡の堆積環境および古植生と生業に関する若干の考察

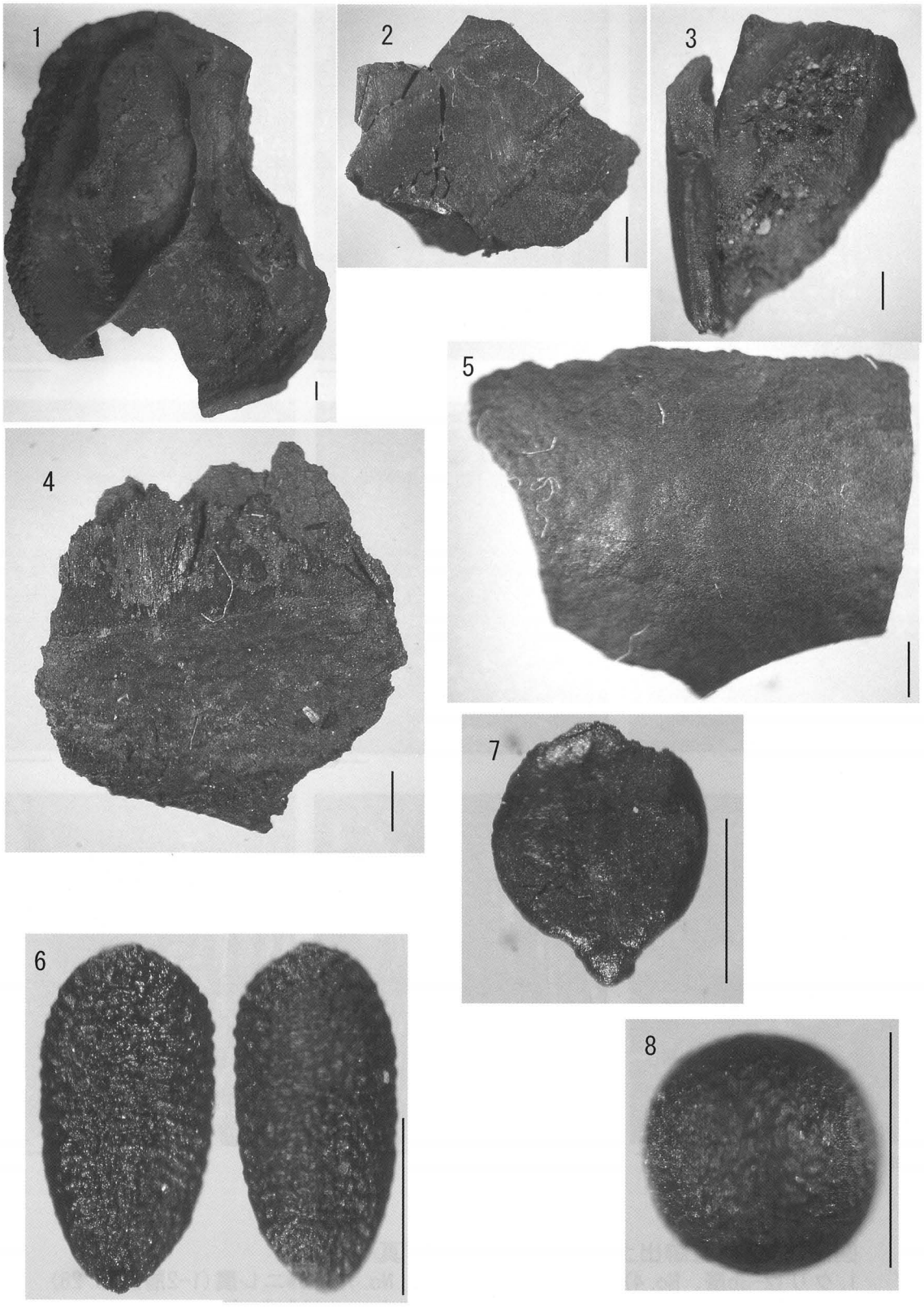
自然堤防間に形成された旧河道内堆積物は、8 層で級化成層が 4 サイクルみられるなど明らかに流水域で形成された堆積物である。しかし、堆積物中には炭化種実や木炭片などの炭化した植物遺体しか残っていなかった。また、堆積物の粒度特性からは花粉が含まれていることが多いことから、炭化していない植物遺体は酸化環境下で分解されたとみられる。つまり、旧河道は洪水や増水した期間のみ河川環境であったが、普段は水のない干あがった環境であったと推定される。

縄文晩期から弥生時代に産出した木炭片は、クリが24個体と最も多く、次いでニレ属5、コナラ節2、ケヤキ、カツラ各1である。大型植物化石では、オニグルミが多く、トチノキ、クリ、ニワトコ属、ブナ科などを産出している。こうしたことから、縄文晩期から弥生時代においてクリ、トチノキ、オニグルミが食料として利用されていたことは確かで、さらにクリは建築材や燃料材などに多用されていたとみられる。周辺の植生を復元するための資料は少ないが、少なくとも河畔ないし谷筋にはオニグルミやトチノキ、カツラが分布し、その後背の山地にクリ、ニレ属、コナラ節、ケヤキなどの落葉広葉樹、林縁にはニワトコ属などが分布していたと推定される。縄文晩期の是川中居遺跡では住居址の周囲にクリ林、開析谷沿いや河畔にトチノキ林やオニグルミ林を配置して、人為的な生態系をつくり植物食を確保していたことが推定されている（吉川、2002）。金附遺跡においてもオニグルミ、トチノキ、クリが主要であることから、植物利用が是川中居遺跡と同様であったことを示唆させる。

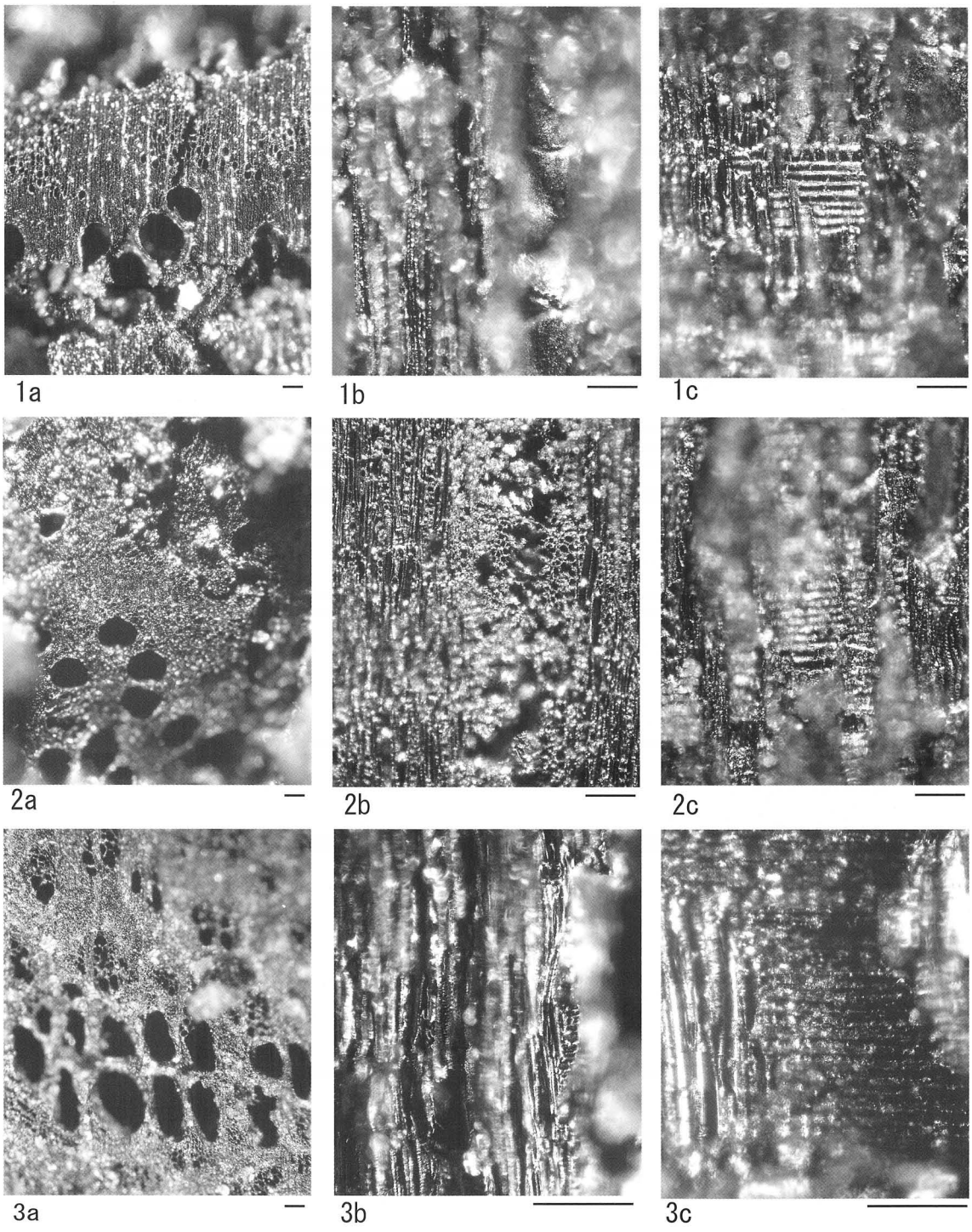
以上のように炭化した植物遺体しか得られなかったため選択的な資料ではあるが、縄文晩期から弥生時代にはオニグルミ、トチノキ、クリが主に利用されていたことが明らかになった。

引用文献

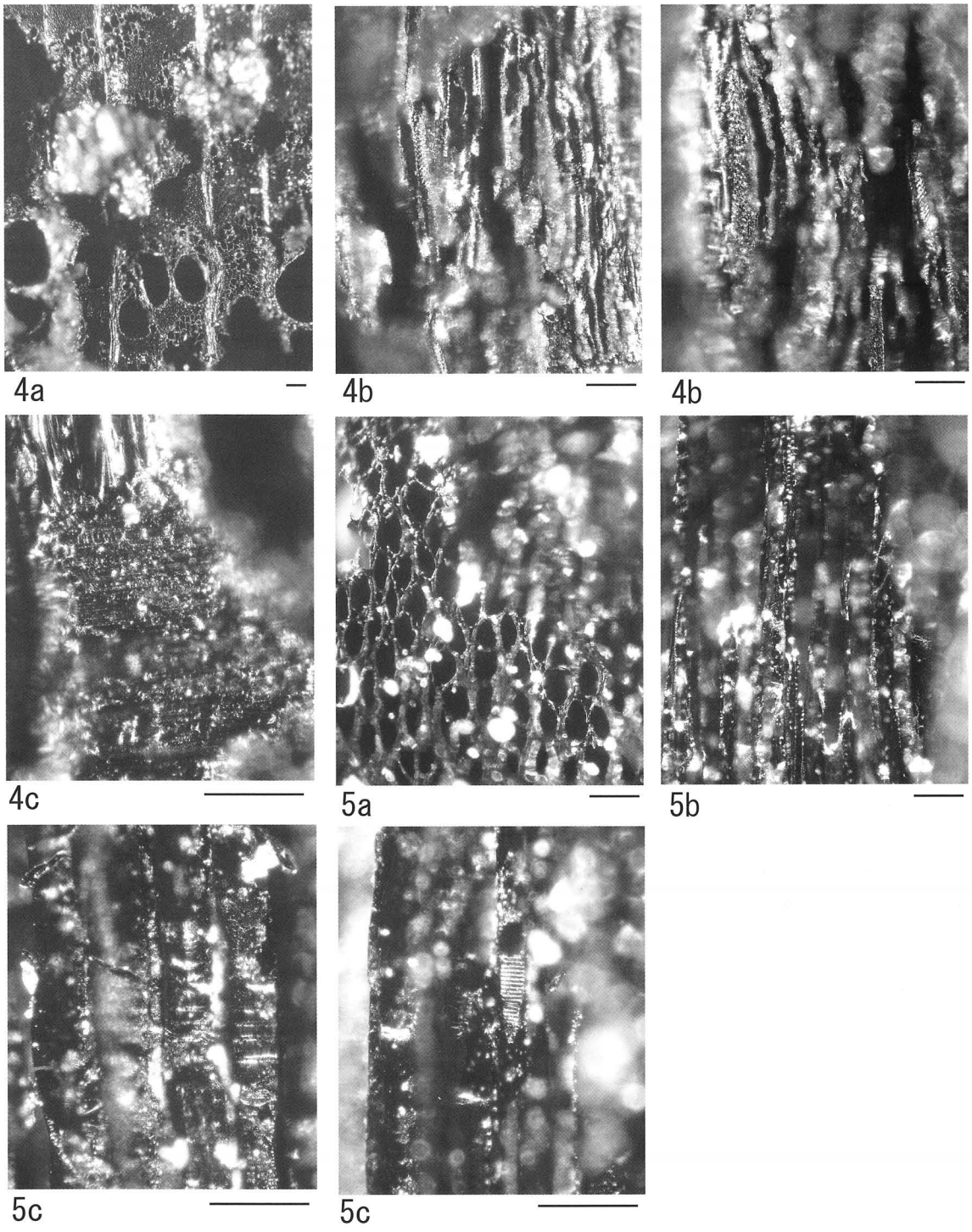
吉川昌伸（2002）是川中居遺跡Ｄ区における縄文時代晩期の花粉化石群．八戸市教育委員会編「八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集　是川中居遺跡1」，70-75.



図版1　金附遺跡より産出した炭化種実
1.オニグルミ、内果皮1/4破片(B3)　2,3.オニグルミ、内果皮破片(2:B3,3:A3)　4.クリ、果皮基部破片(A3)　5.トチノキ、種皮破片(B3)　6.ニワトコ、内果皮(左は腹面、右は背面)(B4)　7.サナエタデ近似種、果実(A3)　8.核菌綱、菌核(B3)
(スケールは1mm)



図版2　金附遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(1)
1.クリ(2-3b層、No.4)　2.コナラ節(2b層、No.7)　3.ニレ属(1-2層、No.28)
(a:横断面　b:接線断面　c:放射断面　スケールは0.1mm)



図版3　金附遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(2)
4.ケヤキ(1-2層、No.19)　5.カツラ(1-2層、No.30)
(a:横断面　b:接線断面　c:放射断面　スケールは0.1mm)

2　金附遺跡の炭化種子

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

金附遺跡は、岩手県北上市稲瀬町字金附に所在し、北上川右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、包含層と洪水堆積層が認められており、包含層については、検出された遺構及び遺物から、縄文時代中-後期の遺物包含層、弥生時代、古代-近世以降であることが確認されている。

本報告では、弥生時代と考えられる遺構や土層から検出された炭化種実遺体の検討を行い、当該期の植物利用に関わる資料を作成する。

(1)　試　　料

試料は、SK90 土坑 2 層（B5）、SK90 土坑（?） 2 層（B20）、M Ⅱ 7 2b 層（B94）、M Ⅱ 7 2-3b2 層（B95）、M Ⅱ 16 2-3b2 層（B96）より検出された炭化種実遺体 5 試料である。SK90　2 層から出土した炭化種実遺体は 1000 個体以上からなり、この他の試料では 1-5 点以上認められる。試料の詳細は、結果と共に表 1 に示す。

(2)　分　析　方　法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川 ,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか ,2000）等と比較して種類を同定し、個数と重量を求める。分析後の種実遺体は、種類毎にビンおよびプラケースに入れて保管する。種実以外の分析残試料は、袋に戻して保管する。

(3)　結果及び考察

結果を表 1 に示す。SK90 土坑 2 層(B5)から 1155 個、M Ⅱ 7 2-3b2 層（B95）から 1 個の計 1156 個の種実が検出された。ただし、いずれも、遺存状態は不良であり、種類の特定には至らなかった。その他に、部位・種類不明の植物片（M Ⅱ 7 2b 層（B94）・M Ⅱ 7 2-3b2 層（B95））や、部位・種類不明の炭化物（SK90 土坑（?） 2 層（B20））、土塊、礫等が検出された。検出された種実遺体は、全個体とも炭化しており、遺存状態は不良である。以下に、本分析で得られた種実遺体の形態的特徴を記す。

表 1　種実同定結果

試料名			種類名	個数	重量
KT030929	SK90 土坑 2 層	B5	不明種実 A	1155 個	0.4g
			土の塊	2 個	<0.1g
KT030930	SK90 土坑 (?) 2 層	B20	不明炭化物	>5 個	<0.1g
KT030822	M Ⅱ 7 2b 層	B94	不明植物	1 個	<0.1g
KT030822	M Ⅱ 7 2-3b2 層	B95	不明種実 B	1 個	<0.1g
			不明植物	1 個	<0.1g
KT030822	M Ⅱ 16 2-3b2 層	B96	礫	1 個	<0.1g

・不明種実 A（UnknownA）

SK90 土坑 2 層（B5）から 1155 個確認された。全て炭化しており黒色を呈す。広卵体でやや偏平。二枚からなる果皮の中に種子が入る。径 3㎜ 程度。頂部に突起状の花柱基部が残る。基部はわずかに突起し、萼が残る個体もみられる。両面の正中線上には鈍稜がある。果皮は薄く堅く、表面は微細な網目模様が縦列する。タデ科タデ属（Polygonum）の果実に似る。

・不明種実 B（UnknownB）

M Ⅱ 7 2-3b2 層(B95)から 1 個確認された。上述の不明種実 A とは異なる形態であることから区別した。炭化しており黒色を呈す。紡錘体で頂部と基部がやや尖る。長さ 4㎜、径 2㎜ 程度。表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

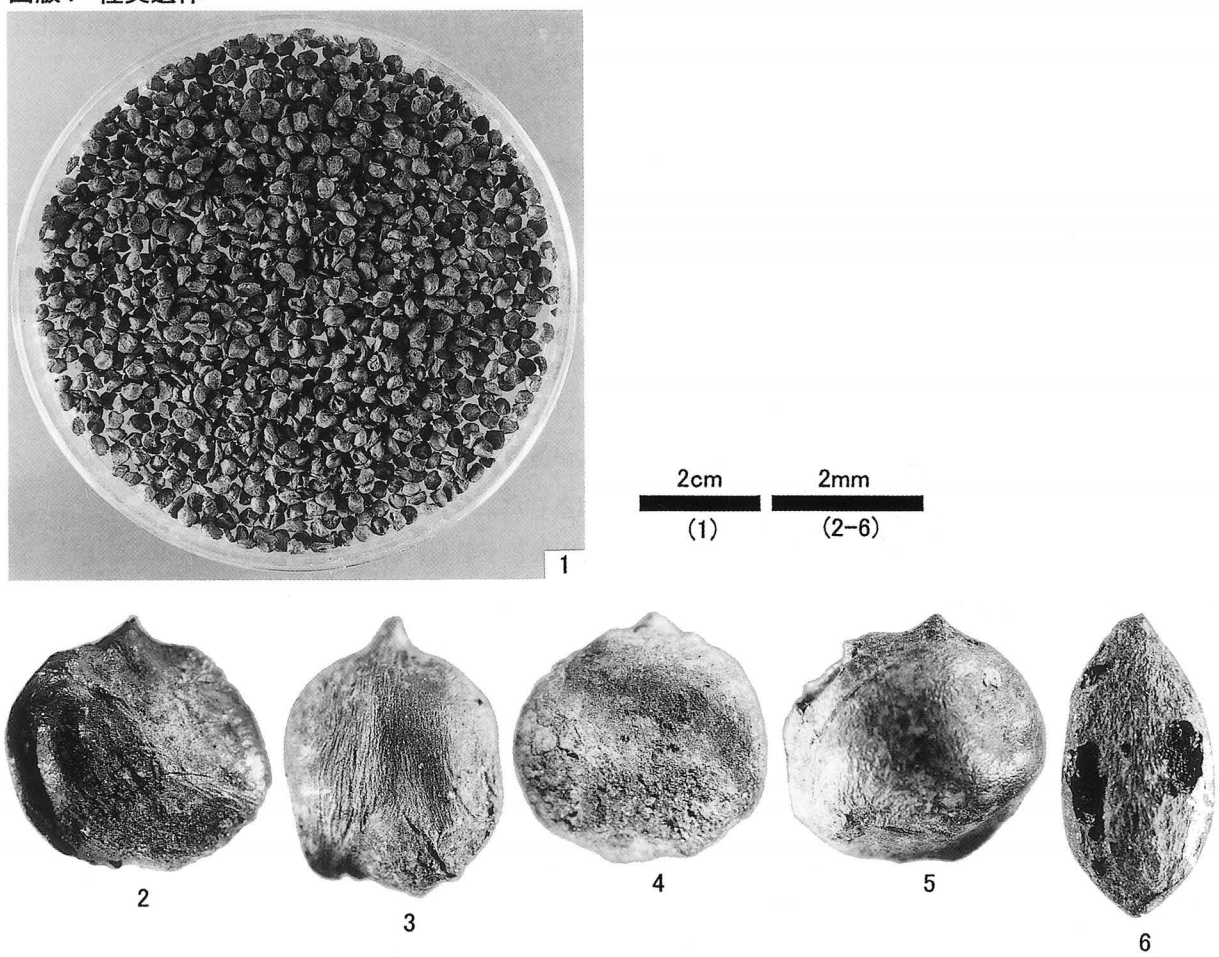
SK90 2 層（B5）や M Ⅱ 7 2-3b2 層（B95）から検出された種実遺体は、上述のように種類の特定には至ら

なかった。ただし、本分析結果によれば、少なくとも食用可能な堅果類（オニグルミやトチノキ）や、穀類等の栽培種などの有用植物に由来する種実とは区別される。また、恐らく、これらの種実遺体は全個体炭化していることから、火熱の影響を受けたと考えられ、何らかの用途で利用されていた痕跡の可能性がある。

引用文献

石川　茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p

図版1　種実遺体



1．不明種実A(SK90土坑 2層;B5)
2．不明種実A(SK90土坑 2層;B5)
3．不明種実A(SK90土坑 2層;B5)
4．不明種実A(SK90土坑 2層;B5)
5．不明種実A(SK90土坑 2層;B5)
6．不明種実B(MⅡ7 2-3b2層;B95)

3　金附遺跡の炭化植物遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

金附遺跡は、岩手県北上市稲瀬町字金附に所在し、北上川右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、包含層と洪水堆積層が認められており、包含層については、検出された遺構及び遺物から、縄文時代中-後期の遺物包含層、弥生時代、古代-近世以降であることが確認されている。

本報告では、弥生時代と考えられる遺構より検出された植物遺体の検討を行い、当該期の植物利用に関わる資料を作成する。

(1)　試料

試料は、SK90 土坑 2 層より検出された植物遺体 3 試料点（B9,B11,B26）である。各試料中には複数の試料が認められる。試料の詳細は、結果と共に表 1 に示す。

(2)　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡と一部を走査型電子顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本や図鑑等と比較して種類を同定し、重量を求める。分析後の種実遺体は、プラケースに入れて保管する。

(3)　結果及び考察

表 1　種実同定結果

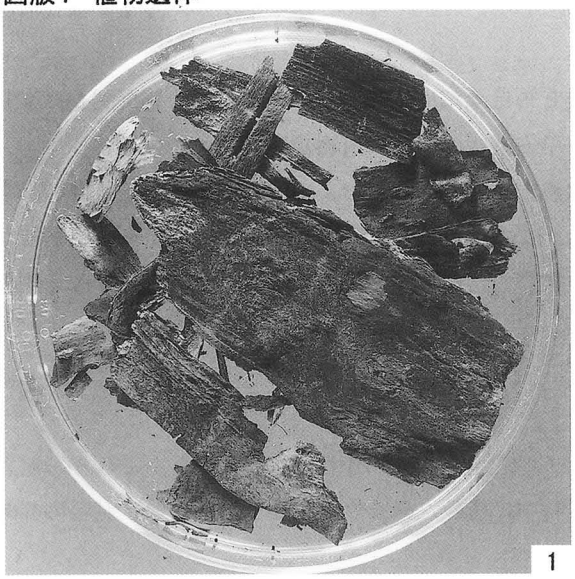
試料名			種類名	部位	状態	重量
KT030929	SK90 土坑 2 層（クルミ）	B9	イネ科タケ亜科	稈	炭化	8.9g
KT030929	SK90 土坑 2 層（クルミ）	B11	種類不明木本類	樹皮		1.5g
KT030930	SK90(?) 土坑 2 層	B26	イネ科タケ亜科	稈	炭化	1.9g

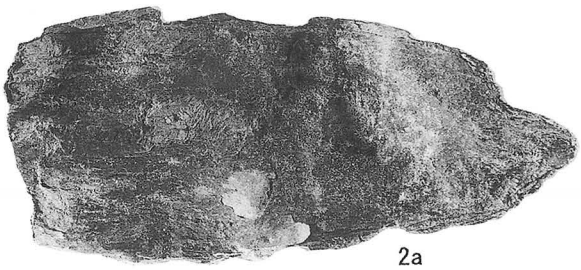
結果を表 1 に示す。SK90 2 層から出土した B9・B26 は、炭化しており黒色、径 5 ～ 9㎜程度の円柱状で、中空。節はやや膨らむ。内部は縦方向の繊維が密に配列する。イネ科の稈と判断される。形態的特徴から得られた所見をさらに検証するため、B9 試料中より遺存状態の良好な試料を 1 点抽出し、横断面の走査型電子顕微鏡下で観察を行った。その結果、維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められないことから、イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）に同定された。

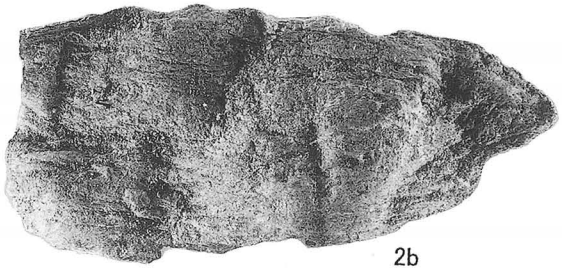
一方、B11 は、木本類の樹皮であった。未炭化であり灰褐色を呈し、内部は黄褐色を呈する。樹皮は、種類毎に特徴的な組織が認められない点や、いずれの種類も組織が類似するため、種類の特定は困難である。

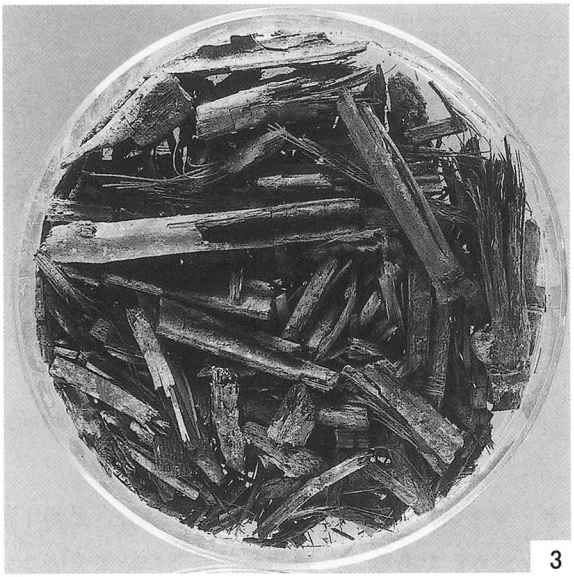
なお、これらの試料とともに、別報で行った炭化した種実遺体も検出されている。出土状況や同定された種類からは、詳細な用途について言及することはできないが、イネ科の稈は炭化していることから火熱の影響を受けたことが示唆される。

図版1　植物遺体

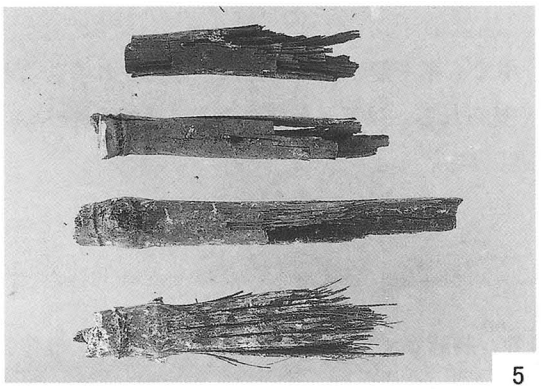

1

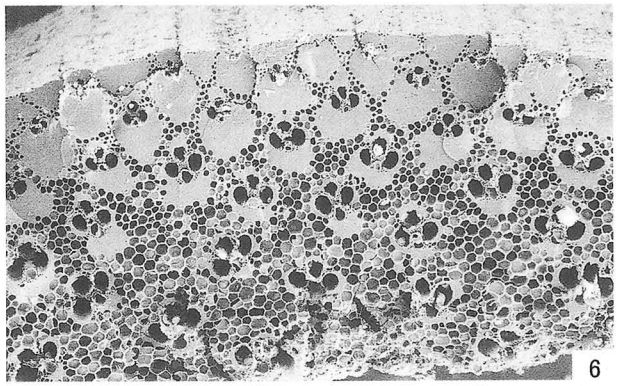

2a


2b


3

4


5


6

2cm　2cm　200 μ m
(1,3,4)　(2,5)　(6)

1．樹皮(SK90土坑 2層;B11)
2．樹皮(SK90土坑 2層;B11)
3．イネ科タケ亜科 稈(SK90土坑 2層;B9)
4．イネ科タケ亜科 稈(SK90(?)土坑 2層;B26)
5．イネ科タケ亜科 稈(SK90土坑 2層;B9)
6．イネ科タケ亜科 稈(SK90土坑 2層;B9)

4　金附遺跡出土骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

金附遺跡は、岩手県北上市稲瀬に所在し、北上川の後背の低地部に位置する。これまでの発掘調査により、縄文時代中期・後期中葉、縄文時代末～弥生時代初頭、平安時代の遺構、遺物が検出されている。

これらの遺構の内、縄文時代晩期から弥生時代初頭の焼土を伴う土坑、および同時期とされる包含層から骨が出土した。これら出土骨は、当時の動物利用を明らかにする上で貴重な資料を提供してくれると期待された。そこで、今回の調査では、焼土を伴う土坑覆土および包含層中から出土した骨の種類や部位等を明らかにする。

(1)　試　　料

試料は、焼土（SN28）を伴う土坑（SK90）の覆土、および包含層から出土した骨である。これらの試料は、既にクリーニングされた状態にあり、いずれも1試料中に複数点の骨片が混在する。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

(2)　分　析　方　法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。

計測は、デジタルノギスを用いて測定する。同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を頂いた。

(3)　結果および考察

金附遺跡出土骨について

金子浩昌

(1) 試料別出土状況

確認された種類は、魚類3種類（ウグイ、ギギ類、サケ・マス類）、両生類1種類（カエル類）、鳥類1種類（スズメ類）、哺乳類3種類（キツネ?、イノシシ、ニホンジカ）である（表1）。各試料別の結果を表2に示す。

焼土（SN28）を伴う土坑（SK90）で概して魚類が多く、中でもギギ類の多くの部位が確認される。これに対して、包含層では、中型ないし大型獣など、獣類が多く見られる。以下、各試料ごとに産状を述べる。

<B1　SN28焼土（SK90土坑）　1層>

・ウグイ

鰭棘片が4点みられる。

・ギギ類

上顎骨、左右口蓋骨、舌顎骨、舌骨、頭骨、椎骨、擬鎖骨、胸鰭第1棘が確認される。椎骨は、椎体長2.02-2.97㎜を計る椎体の他、破片となっている中に椎体径5.08㎜に達するものがみられるなど、大小の椎体が出土する。これより、大小の個体が含まれていたことがわかる。

・その他

魚類の鰭棘や魚骨片が多くみられ、鳥獣類の破片が僅かに出土する。この他にも、種類不明の破片も多くみられる。

<B14　SK90 土坑　3 層（焼土）>

・ウグイ

尾椎が 1 点みられる。

・ギギ類

腹椎、椎骨、部位不明破片がみられる。

・サケ・マス類

1 点ほぼ完存する椎体と椎骨の破片がみられる。

・カエル類

左寛骨の骨体片が 1 点みられる。

・スズメ目

脛骨の骨体片が 1 点みられる。

・その他

魚類の鰭棘や破片、獣類の破片が僅かにみられる。

<B18　SK90（?）土坑　2 層>

・ウグイ

尾椎が 1 点確認される。

・ギギ類

胸鰭第 1 棘が 3 点確認される。内、1 点は、ほぼ完存する。残り破損した 2 点も、ほぼ同程度の大きさと思われる。体長 20cm 程度と推定される。

・カエル類

左寛骨の破片が 1 点確認される。

<B29　M Ⅰ 24　4 層>

・イノシシ

第 1 指基節骨の近位端である。近位端部に新しい破損がみられ、埋没時に完存していたと思われる。

<B42　M Ⅱ 17　2-3b2 層>

・キツネ？

左下顎骨の破片がみられる。小片のために原形が伺い難たいが、キツネ程度の大きさである。

・イノシシ

第Ⅲ / Ⅳ中節骨である。近位端の一部が欠損する。ただし、破損が新しいことから、埋没時、完存していたと思われる。

<B64　M Ⅲ 17　2-3b 層>

・イノシシ

左脛骨の遠位端である。4 片となっているが、本来は同一個体同部位とみられる。ただし、2 片のみ接合できただけで、残り 2 片の接合が困難であった。破砕がはげしく、断片が回収できなかったと思われる。この脛骨は大型になることが予想される。

<B65　M Ⅲ 21　4b 層>

・ニホンジカ

中手骨 / 中足骨の遠位端片である。両面に新しい破損口をみるので、埋存時に今少し残された部分があったと推定される。ただし、骨体部にみる破損口が古いことから、骨端の破片であったと思われる。

表 1　出土分類群一覧

脊椎動物門	Phylum　Vertebrata
硬骨魚綱	Class　Osteichthyse
条鰭亜綱	Subclass　Actinopterygii
コイ目	Order　Cypriniformes
コイ科	Family　Cyprinidae
ウグイ亜科	Subfamily　Leuciscinae
ウグイ	*Tribolodon hakonensis*
ナマズ目	Order　Siluriformes
ギギ科	Family Bagridae
ギギ類	Bagridae
サケ目	Order　Salmoniformes
サケ科	Family　Salmonidae
サケ・マス類	*Oncorhynchus sp.*
両生綱	Class　Amphibia
無尾目	Order　Anura
カエル類	Anura
鳥綱	Class　Aves
スズメ目	Order　Passeres
スズメ類	Passeres
哺乳綱	Class　Mammalia
ネコ目（食肉目）	Order　Carnivora
ネコ亜目	Suborder　Fissipedia
イヌ科	Family　Canidae
キツネ？	*Vulpes vulpes?*
ウシ目（偶蹄目）	Order　Artiodactyla
イノシシ科	Family　Suidae
イノシシ	*Sus scrofa*
シカ科	Family　Cervidae
ニホンジカ	*Cervus nippon*

表２　骨同定結果

番号	試料	年月日	種類	分類群	部位	左　右	部分	計測値 (mm)	数量	備考
B1	SN28 焼土 (SK90 土坑)　1 層	030929	硬骨魚綱	ウグイ	鰭棘		破片		4	
				ギギ類	上顎骨		破片		2	
					口蓋骨	左	破片		1	
						右	破片		1	
					舌顎骨		破片		1	
					舌骨		破片		1	
					頭骨		破片		6	
					椎骨		椎体	椎体長 2.97	1	
								椎体長 2.58	1	
								椎体長 2.02	1	
							椎体片	椎体径 5.08	1	
									2	
					擬鎖骨		破片		1	
					胸鰭第 1 棘	右	近位端		1	
							破片		2	
				サケ・マス類	椎骨		椎体	椎体長 4.63	1	
							椎体	椎体長 4.16	1	
							椎体片		3	
				魚類	鰭棘		破片		15	
					不明		破片		多	0.8g
			鳥綱	鳥類	四肢骨		破片		6	
			哺乳綱	獣類	不明		破片		2	
			脊椎動物門	不明	不明		破片		多	0.3g
B14	SK90 土坑　3 層 (焼土)	030930	硬骨魚綱	ウグイ	尾椎		椎体	全長 2.65	1	
				ギギ類	腹椎		椎体	全長 2.25	1	
					椎骨		椎体		1	
					不明		破片		1	
				サケ・マス類	尾椎		椎体	椎体長 4.31	1	
					椎骨		破片		2	
				魚類	鰭棘		破片		4	
					不明		破片		6	
			両生綱	カエル類	寛骨	左	破片	骨体長 1.99	1	
			鳥綱	スズメ類	脛骨		破片		1	
			哺乳綱	獣類	不明		破片		1	
B18	SK90(?) 土坑　2 層	030930	硬骨魚綱	ウグイ	尾椎		椎体	椎体長 2.46	1	
				ギギ類	胸鰭第 1 棘	左	ほぼ完存	全長 20.57	1	
							先端		1	
							破片		1	
				魚類	不明		破片		3	
			両生綱	カエル類	寛骨	左	破片		1	
B29	M Ⅰ 24　4 層	030902	哺乳綱	イノシシ	第Ⅰ指基節骨		近位端	近位端幅 11.79	1	
B42	M Ⅱ 17　2-3b2 層	030924	哺乳綱	キツネ？	下顎骨	左	破片		1	
				イノシシ	第Ⅲ / Ⅳ中節骨	左	破損	現長 25.63	1	
B64	M Ⅲ 17　2-3b 層	030909	哺乳綱	イノシシ	脛骨	左	遠位端片		1	接合 , 他破片 2
B65	M Ⅲ 21　4b 層	030912	哺乳綱	ニホンジカ	中手骨 / 中足骨		遠位端		1	

2）種類別特徴

本遺跡の動物遺体は、縄文時代晩期から弥生時代初頭の土坑および包含層から出土しているが、土坑が魚骨を中心とし、包含層が大型獣を中心とすることが特徴である。

上記したように土坑では、魚骨を主とする焼骨、魚骨を主として獣骨も含まれる細片がみられ、両生類が僅かに確認される。土坑内には焼土が混入しており、この中に焼骨が混在していたのであろう。採集された焼土中には魚骨片が多く、魚を調理した際に残渣が混じったと思われる。魚種は、ウグイ類とギギ類の 2 種が知られている。両種類ともに、遺跡付近の河川に棲息した淡水魚である。ギギ類は、現在、内水面漁業でも主要な位置を占めないようであるが、古くから漁獲もあり、かなりの漁獲があったと思われる。これまでの調査によると、ギギ類は、河川や湖沼に面した縄文時代の遺跡から検出されることが多く、内陸部で漁獲されていたことを示す報告がある（例えば、金子 ,1970; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1997 など）。北上川流域では、フナの出土の多い中にギギ類が混在する状態である事例がある（金子 ,1982）。本遺跡の場合は、むしろギギ類が主体となっており、これまで東北地方で出土例の少なかったギギ類の検出例として注目される。これには、ギギ類の胸鰭は頑丈で保存され易いことも関係すると思われる。ところで、今回の試料中には、椎骨からみると、体長 5-6cm 程度の個体になるとみられる幼魚も出土している。このことから、本遺跡付近の水域には、産卵およびふ化する場所もあったと推測され、網を使っての漁獲が考えられる。なお、ギギ類は、鰭棘が鋭いため、直接手で持つことが禁物である。漁獲の際に、どのような工夫がされたか興味深い。

両生類の骨片は、僅かに骨片を残すのみであった。大きさからみると、トノサマカエル（Rana nigromaculata）、ニホンアカガエル（Rana japonica）など、中型のカエルと思われる。これらのカエル類は、当時遺跡付近の沼地などに棲息していたと思われる。

一方、大型獣骨片は、いずれも現状でかなり破損しているが、新しい割れ口もみられるものも多く、埋存時に完存していたことが推定される。一般には、焼骨で完存するような例が少なく、多数の焼骨片中に幾つかの完存あるいはそれに近い状態の骨が残されるのが普通である。本遺跡の場合のような骨の保存状況からすると、高熱で何度も被熱することがなかったと思われる。形を残す程度の焼成であるとすると、骨を焼くことに目的意識があったことも考えられ、祭祀的な意図もあった可能性も考慮しなければならないだろう。以上、本遺跡では、魚骨を中心として獣骨が確認される。これは、当時の内水面漁業の一つの様相を示しているのであろう。今回出土した骨の状況を見る限り、本遺跡は、内水面漁業を行い、時に狩猟も行う人々の生活址であったと推定される。この点については、隣接地あるいは周辺地域における資料を蓄積した上で、改めて検討を行う必要があるだろう。

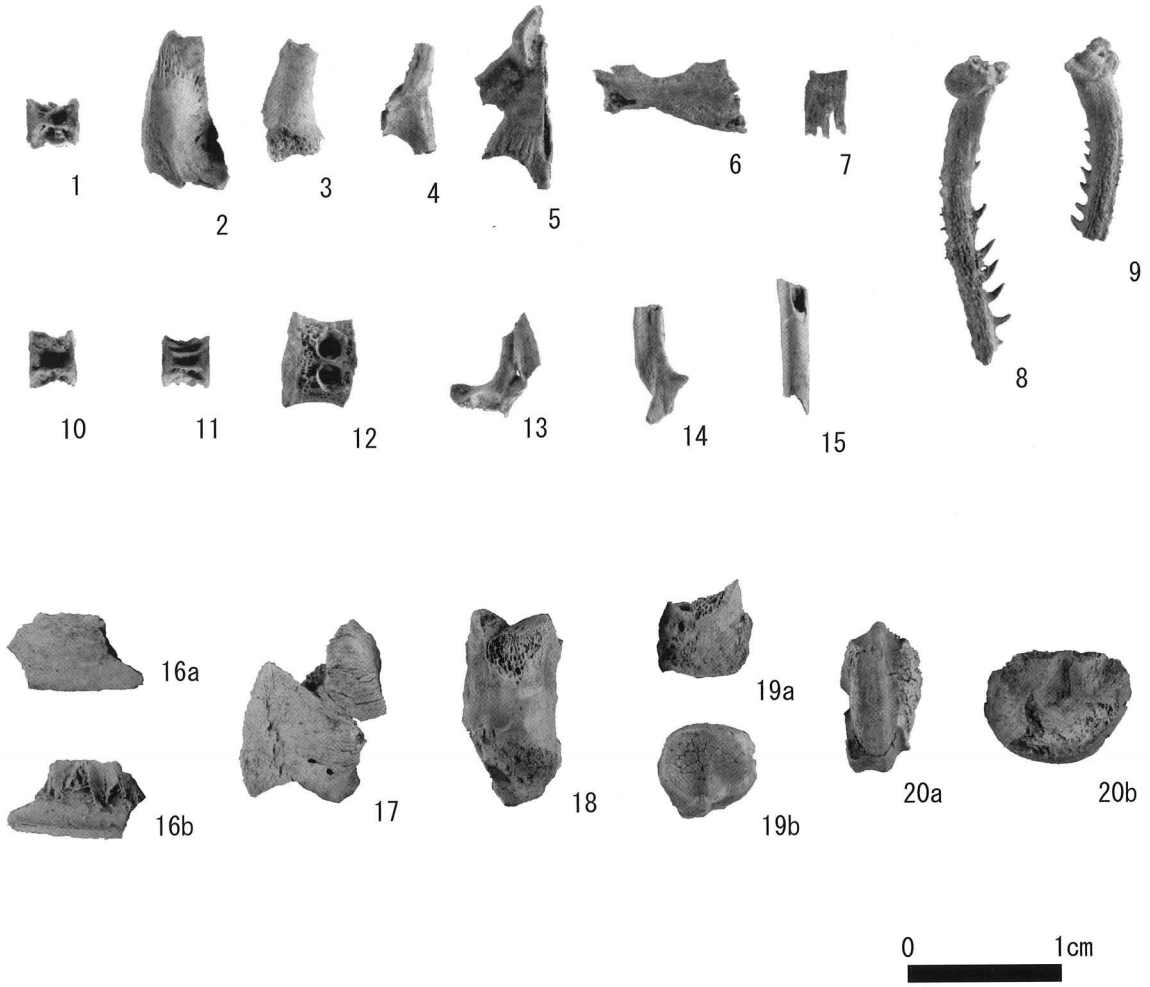
引用文献

金子　浩昌,1970,神明貝塚出土の動物遺存体の概要.庄和町文化財調査報告2　神明貝塚,庄和町教育委員会,61-69.

金子　浩昌,1982,魚介と日本人.世界の食べもの　日本編,週刊朝日百科11,102,朝日新聞社,29-33.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997,側ヶ谷戸貝塚出土貝類・魚骨・獣骨の同定.大宮市遺跡調査会報告第58集側ヶ谷戸貝塚　－第2次調査－,大宮市遺跡調査会,75-76.

図版１　出土骨



1. ウグイ尾椎(B14)
2. ギギ類上顎骨(B1)
3. ギギ類上顎骨(B1)
4. ギギ類左口蓋骨(B1)
5. ギギ類右口蓋骨(B1)
6. ギギ類舌顎骨(B1)
7. ギギ類舌骨(B1)
8. ギギ類左胸鰭第1棘(B18)
9. ギギ類右胸鰭第1棘(B1)
10. ギギ類椎骨(B1)
11. ギギ類椎骨(B1)
12. サケ・マス類尾椎(B14)
13. カエル類左寛骨(B18)
14. カエル類左寛骨(B14)
15. スズメ類脛骨(B14)
16. キツネ?左下顎骨(B42)
17. イノシシ脛骨(B64)
18. イノシシ第Ⅲ/Ⅳ中節骨(B42)
19. イノシシ第Ⅰ指基節骨(B29)
20. ニホンジカ中手骨/中足骨(B65)

5　金附遺跡出土石匙の使用痕分析

（株）アルカ　高橋哲

は　じ　め　に

岩手県北上市金附遺跡出土石匙11点の使用痕分析を行った。これまで東北地方の縄文時代前期･中期の分析資料から、石匙が植物の切断に使用されている事例が多く確認されている。縄文晩期・弥生の石匙は分析事例が少なく、その機能が注目される。

分析方法と観察項目

分析方法

キーエンス社のデジタルマイクロスコープVHX-100の落射型レンズ（VH-Z450）を用いた。観察前に試料表面の手の脂などによる汚染をエタノールで拭き取った。

使用痕光沢

東北大学使用痕研究チームの成果に基づいている（梶原･阿子島1981, 芹沢他1982）。同種実験は、高橋も行っており（高橋2003）、その際得られた結果も、東北大学において行われた実験成果と大きく異なることはない。

線状痕

石器は被加工物と接触した際に生じる傷であり、石器の運動方向を示す重要な属性である。そのため、線状痕の方向の検出に努めた。刃部に対して直交に線状痕が走る場合「直交」、平行して走る場合「平行」、斜めに走るのを「斜め」とした。「不明」は線状痕が刃部にみられるが、方向を特定できないことを指す。

摩耗

顕微鏡下で観察できる程度を「軽微」、肉眼でも摩耗が観察できるのを「重度」とした。縁辺の本来の鋭さが残っている場合、「なし」とした。

石匙の形態

石匙の形態を以下の様に分類した。

A1a: 縦形石匙。細身の刃部をもち、先端部が尖る形態の石匙である。
Nos.361・362・363・367・368

A1b: 縦形石匙。幅広の刃部をもち、先端部が尖る形態の石匙である。 No.365

A2: 縦形石匙。先端部は尖頭形態でない。 Nos.370・371

B: 横形石匙。 Nos.364・369

No.366は加工がないため、この分類からはずれる。

観察結果

No.362　C1　（図1）

両面加工の縦形石匙である。細身で、先端が尖頭形態である。

表面を観察したところ、石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた。

縁辺を検鏡したが、摩耗、光沢、線状痕とも確認できなかった（写真1から3）。

No.363　C2　（図1）

両面加工の縦形石匙である。細身で、先端が尖頭形態である。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた。

右辺の先端部側の両面に軽微の摩耗が確認できた（写真 1・2）。左辺には使用痕は観察できなかった（写真 3）。

No.364　C3　（図 1）

横形石匙である。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた。特に主要剥離面と、背面に強い変化がみられた。

刃部両面に、摩耗と光沢が確認できた（写真 1・2）。光沢は、小パッチ状で、パンチ上はまるく、縁辺の狭い範囲に広がる。E1 タイプと考えられる。

摘み部に光沢と摩耗がみられた（写真 4）。

No.366　C4　（図 2）

縦形石匙である。摘みを作り出している他は、刃部などに加工は確認できない。

石器の表面は、変化がほとんどみられなかった（写真 3）。

縁辺も検鏡したが、光沢、線状痕、摩耗はみられなかった（写真 1・2）。

No.365　C5　（図 2）

両面周辺加工の縦形石匙である。幅広で、先端が尖頭形態である。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた（写真 3）。特に主要剥離面などが鈍く粗い光沢で覆われている。

右辺刃部両面の稜上に、光沢と刃部に対して平行方向の線状痕、それに伴い摩耗が確認できた（写真 1・2）。使用痕光沢は、石器表面を覆う光沢と重なるが、表面のきめなどの特徴から E タイプに分類できると考えられる。

左辺には、線状痕、摩耗は確認できなかった。

No.371　C6　（図 3）

縦形石匙である。細身の片面加工である。摘み部にアスファルト状付着物がみられる。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた（写真 3）。また背面稜上に摩耗が観察できた（写真 5）。

刃部右辺両面には粗い光沢がみられる（写真 1・2）。刃部に対して平行方向の線状痕が確認できた。

刃部左辺の両面には軽微の摩耗と非常に発達の弱い光沢がみられた（写真 4）。

主体的な刃部は使用痕の発達程度から右辺と考えられる。しかし、石器全面の光沢と類似しているため、光沢タイプは同定できない。線状痕の方向から切断に使用されたと考えられる。

No.370　C7　（図 3）

両面周辺加工の縦形石匙である。やや幅広で、先端が丸い。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた（写真 3）。

両側辺の両面に、鈍い光沢と摩耗が確認できた（写真 1・2）。E1 タイプ光沢と考えられる。線状痕はみられないが、光沢が各刃部の両面にみられることから、平行方向に使用し、被加工物を切断したと考えられる。

No.361　C8　（図 3）

両面加工の縦形石匙である。幅広で、先端が尖頭形態である。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた。

刃部先端付近に肉眼でも光沢が確認できた。顕微鏡で観察した結果、この光沢は植物で生じる A タイプ光沢であった（写真 1・2）。刃部に対して斜めに走る線状痕が確認できた。光沢が広がるのは、先端部近くの非常に限定された部分であり、摘み部に近いところには使用痕は観察できなかった（写真 3）。

刃部中央付近には刃部尖頭部分を利用して植物の切断に使用されたと考えられるが、その光沢の範囲が非常に限定される。先端部を利用して植物でも木質の堅いものを溝切りした操作が考えられ、それが斜めの線状痕を生成したと考えられる。

No.367　C9　（図 4）

両面加工の縦形石匙である。細身で、先端が尖頭形態である。摘み部にアスファルトが付着している。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた（写真 3）。

縁辺を検鏡したが、摩耗、光沢、線状痕とも確認できなかった（写真 1・2）。

No.368　C10　（図 4）

両面加工の縦形石匙である。細身で、先端が尖頭形態である。摘み部にアスファルトが付着している。摘み部分は欠損している。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた。

縁辺には使用痕は確認できなかった（写真 1・2）が、先端部分に、摩耗が確認できた（写真 3）。

No.369　C11　（図 4）

片面加工の横形石匙である。

石器全体の原因不明の摩耗や光沢がみられた（写真 2）。摘み部分に摩耗と光沢がみられた（写真 3）。

刃部の主要剥離面側に、粗い光沢や摩耗が確認できた（写真 1）。光沢がつながり面的に広がっているが大小ピットが多く、滑らかな表面でないことから E2 タイプ光沢と考えられる。

考　　察

観察できた使用痕の特徴

11 点中 8 点に使用痕が確認できた。使用痕光沢は、A タイプ光沢が 1 点、E タイプ光沢が 4 点、摩耗のみが 3 点の他は、光沢は検出できなかった。

6 点の石匙に使用痕光沢が観察できなかった理由として、被加工物が非常に柔らかいことが考えられる。他の石匙で確認できた光沢が E タイプという、動物の皮や肉などで生じる光沢であるため、これらの石器も同様な被加工物に使用されて、使用痕光沢が形成されなかった可能性がある。実際これらの被加工物は、実験でも光沢形成が遅い。

線状痕は、溝切りに用いたと考えられる No.361（C8）に斜め方向の線状痕が確認できた以外は、すべて平行方向の線状痕であった。

摘み部に摩耗や光沢がみられる。保持により生じたと考えられるが、現時点で石匙の保持の実験データがないため、柄なのか紐づれなのかまでは特定できなかった。

器種類型と使用痕

光沢分布、線状痕の方向と、石匙の形態がどのような関係かを検討していく。

A1a 類は、先端部やその付近に光沢や摩耗が確認できた。木質の被加工物に対して溝切りの作業に用いられた No.361（C 8）や、先端部に摩耗が確認できた No.363（C2）と No.368（C10）がこれに属する。多くは使用痕が確認できないうえ、側辺に表面の変化はみられず、きれいな縁辺がほとんどである。このことから考えられることは、この A1a 類は、石匙の側辺より、先端部が重要な機能部であったことが考えられる。

A1b,A2 類は、ともに石匙の側辺に使用痕が確認できた。確認できた光沢は E タイプであることから、主に動物の解体作業であったと考えられる。

B 類の横形石匙は、A1b,A2 類同様に刃部縁辺に使用痕が確認できた。確認できた光沢は E タイプであり、線状痕は平行であることからやはり主に動物の解体作業に使用されたものと考えられる。

以上まとめると、石匙の形態において、少なくとも先端部の尖頭形態を利用して作業する石匙と、側辺を利用して作業する石匙に分類できた。縦形と横形においては、明確な区分はみられなかったが、用途に応じて石匙の形態を作り分けていた可能性も考えられる。

他地域・時代との比較

これまで、青森県、山形県、岩手県の使用痕分析成果によると（高橋 2002,2003,2004）、縄文時代前期・中期の多くの石匙から A タイプ光沢が検出されている。遺跡によってその確認数は異なるが、比較的高い割合で A タイプ光沢が確認されている。

縄文時代晩期の使用痕分析の事例は非常に少ない。岩手県北部の浄法寺町上杉沢遺跡においては、C タイプが確認されている（高瀬 2001）。岩手県花泉村の中神遺跡出土の両面加工の紡錘形の石匙 1 点には F タイプが確認されている（須藤編 1997）。

このことから晩期以降の石匙の機能は、縄文時代中期以前と異なる可能性も 1 つ考えられる。

ま と め

・石匙 11 点に確認できた光沢は A タイプ 1 点、E タイプ 4 点である。縄文前期・中期の石匙に A タイプが多く観察できるのと異なる。

・線状痕は、刃部に対して平行方向が主に観察できた。先端で溝切りに使用された石匙は、縁辺に斜めに線状痕がみられる。作業に応じた石匙刃部の形態の作り分けの可能性がある。

石匙の使用方法が、縄文時代前中期と晩期の間で異なるのか、作業に応じて石匙形態を作り分けていたのかは今後さらに資料を増やしていき検討する必要がある。

参考文献

阿子島香　1981「マイクロフレイキングの実験的研究（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 1）」『考古学雑誌』66-4　pp.1-27

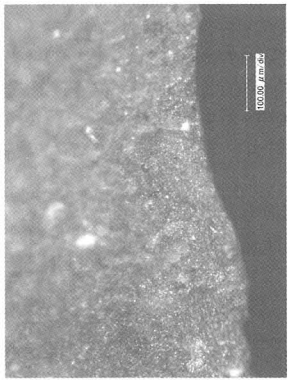
1989『石器の使用痕』考古学ライブラリー 56　ニュー・サイエンス社

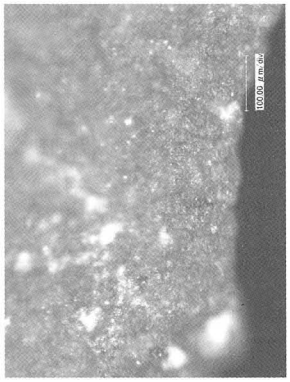
1992「実験使用痕分析と技術的組織- パレオインディアン文化の一事例を通してー」『東北文化論のための先史学歴史学論　集』加藤稔先生還暦記念会編　pp.27-53

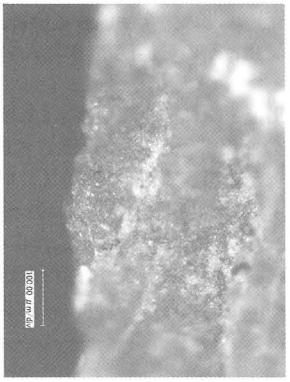
梶原洋・阿子島香　1981「頁岩製石器の実験使用痕研究- ポリッシュを中心とした機能推定の試み ?（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 2）」『考古学雑誌』67-1pp.1-35

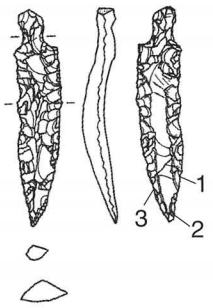
須藤隆編　1997 『中神遺跡の調査』東北大学文学部考古学研究室・岩手県花泉町教育委員会
芹沢長介他　1982 「実験使用痕研究とその可能性？(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 4)」『考古学と自然科学』14　pp.67-87
高瀬克範　2001 「上杉沢遺跡の出土遺物に関する考察」『上杉沢遺跡』浄法寺町教育委員会　pp.169-174
高橋哲　2002 「中川原 C 遺跡の使用痕分析」『中川原 C 遺跡・立泉川遺跡』 山形県埋蔵文化財センター
2003 「使用痕実験報告と使用痕研究の課題」『アルカ研究論集』1　pp.54-59
2004 「剥片石器の使用痕」『和野 I 遺跡』pp.492-502, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
2004 「岩渡小谷（4）遺跡の使用痕分析」『岩渡小谷（4）遺跡 II』pp.260-277, 青森県埋蔵文化財調査センター
2004 「稲山遺跡出土石器の使用痕分析」『稲山遺跡 V』pp.45-65, 青森市教育委員会
2004 「向田（18）遺跡出土の石器について　1 向田（18）遺跡の使用痕分析」『向田（18）遺跡』pp.304-309, 野辺地町教育委員会

	No.	アルカ器種	分類	石材	使用痕光沢	線状痕の方向	刃部の摩耗度	備考	図版番号
C1	362	縦形石匙	A1a	頁岩	なし	なし	なし		図 1
C2	363	縦形石匙	A1a	頁岩	なし	なし	軽微		図 1
C3	364	横形石匙	B	頁岩	E	平行	軽微		図 1
C4	366	縦形石匙	Z	頁岩	なし	なし	なし	摘み部以外に加工はない。	図 2
C5	365	縦形石匙	A1b	頁岩	E1	平行	軽微		図 2
C6	371	縦形石匙	A2	頁岩	なし	平行	軽微		図 3
C7	370	縦形石匙	A2	頁岩	E1	平行	軽微		図 3
C8	361	縦形石匙	A1a	頁岩	A	斜め	軽微		図 3
C9	367	縦形石匙	A1a	頁岩	なし	なし	なし		図 4
C10	368	縦形石匙	A1a	頁岩	なし	なし	軽微	先端部に摩耗が確認。	図 4
C11	369	横形石匙	B	頁岩	E2	平行	軽微		図 4

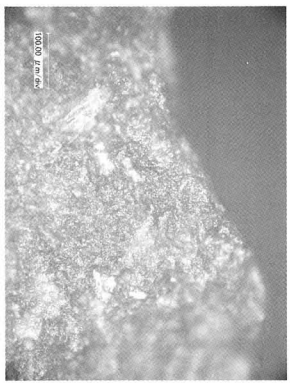

1　縁辺の状況

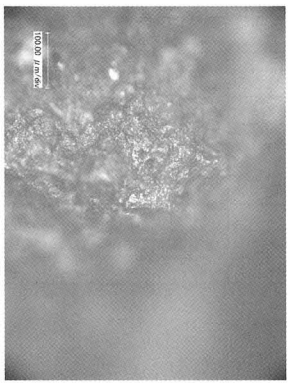

2　縁辺の状況

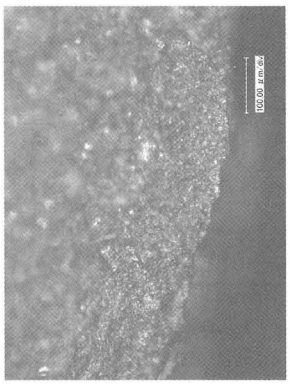

3　縁辺の状況

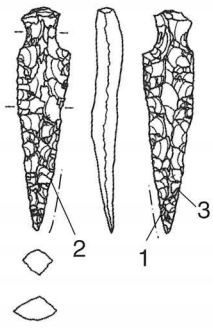


C1
No.362

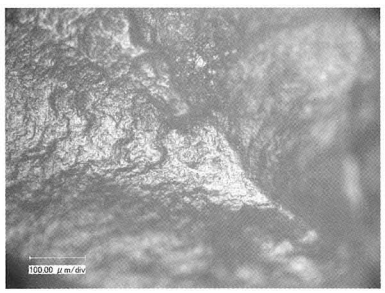

1　刃部の摩耗

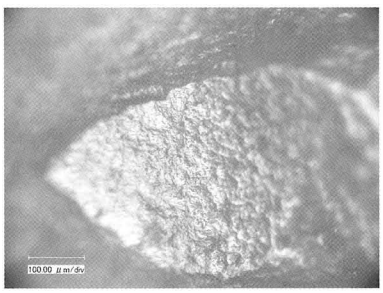

2　刃部の摩耗

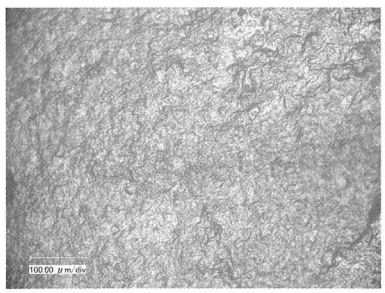

3　縁辺の状況

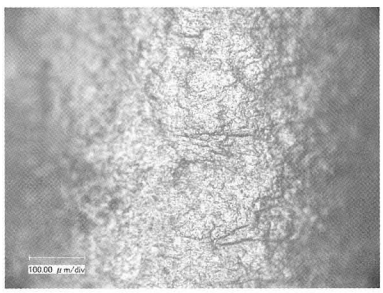


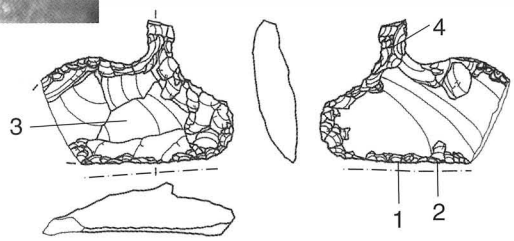
No.363　C2


1　刃部の摩耗と光沢


2　刃部の摩耗と光沢


3　石器の表面(埋没光沢)

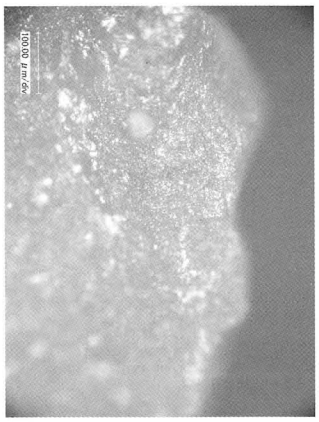

4　摘み部分の表面



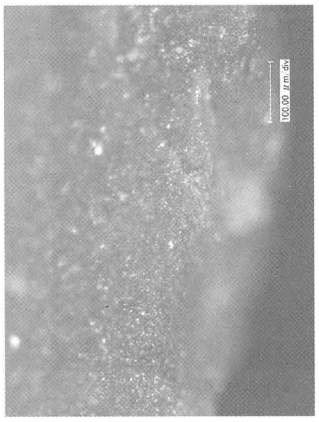
No.364　C3

――――――――― 使用痕のみられた範囲

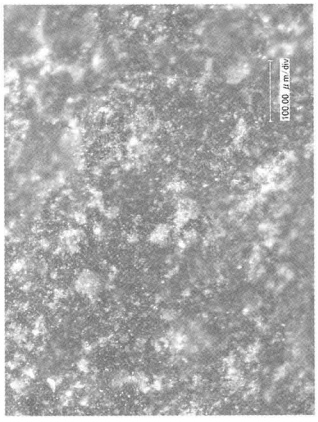
図1　石匙の使用痕



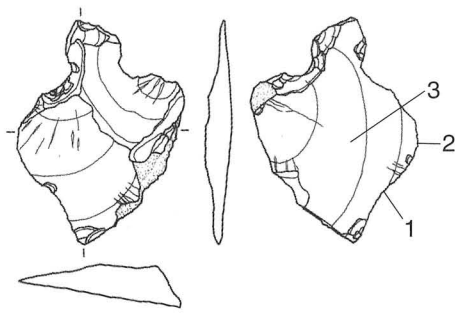
1　縁辺の状況



2　縁辺の状況

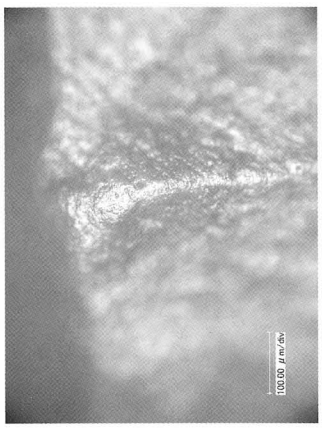


3　石器の表面

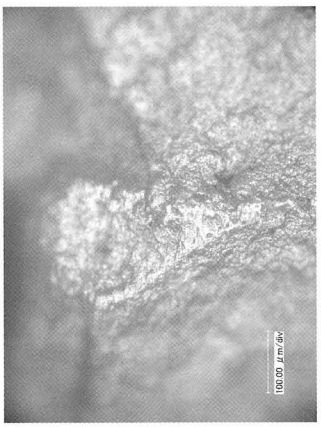


No.366

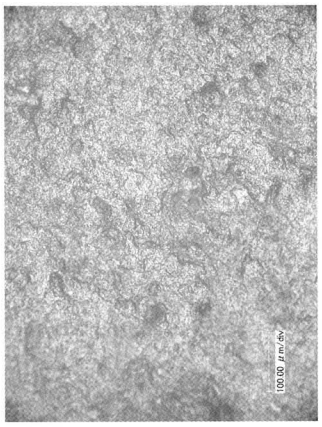
C4



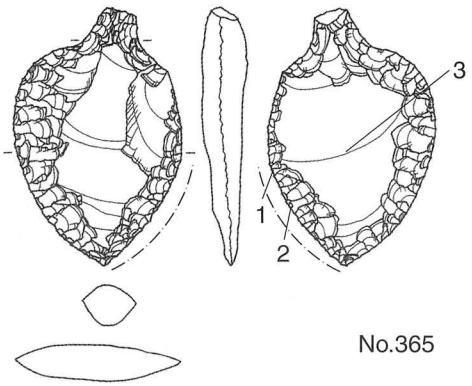
1　刃部稜上の摩耗と光沢



2　刃部稜上の摩耗と光沢



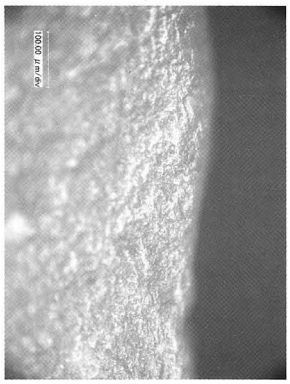
3　石器の表面



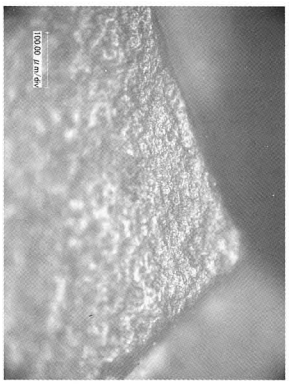
No.365　C5

使用痕のみられた範囲

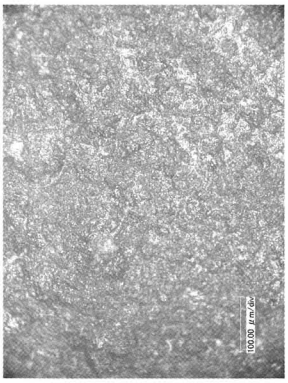
図2　石匙の使用痕



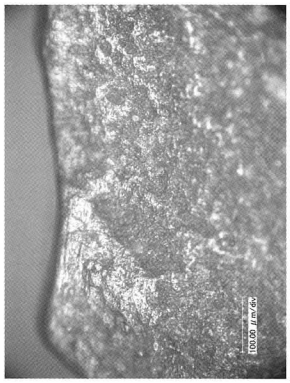
1　刃部の摩耗



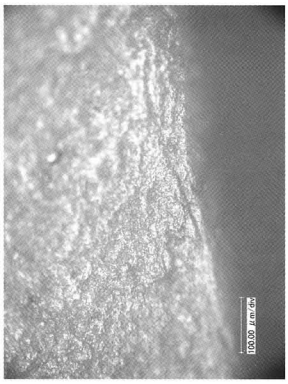
2　刃部の摩耗



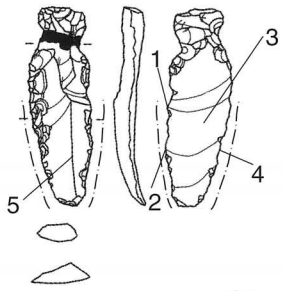
3　石器の表面



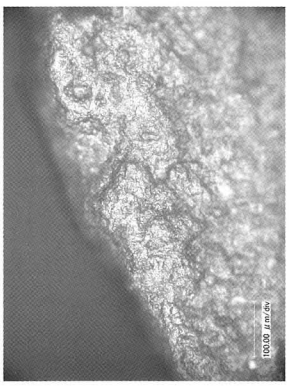
4　刃部の摩耗と
線状痕(刃部に対して平行方向)



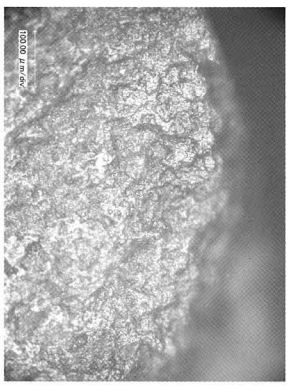
5　背面稜上の摩耗と光沢



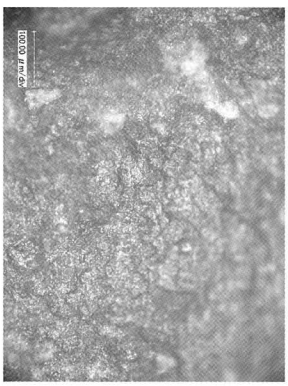
No.371　C6



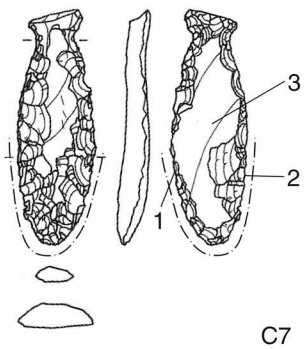
1　刃部の摩耗と光沢



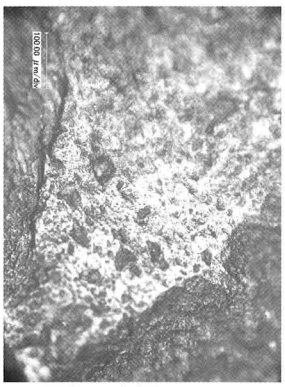
2　刃部の摩耗と光沢



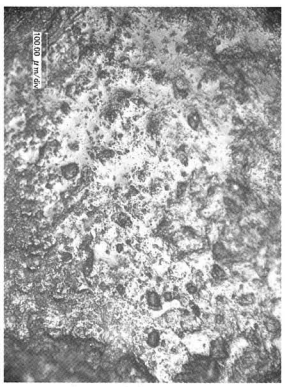
3　石器の表面



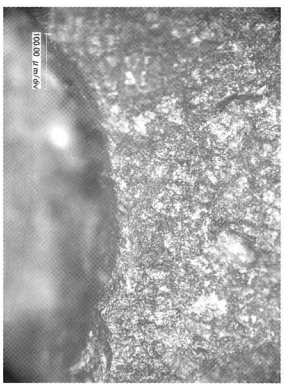
No.370　C7



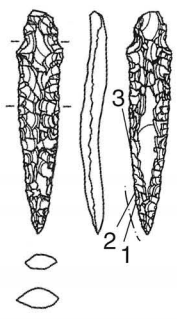
1　刃部の光沢
（Aタイプ光沢）



2　刃部の光沢
（Aタイプ光沢）



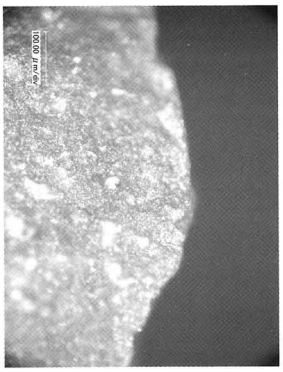
3　縁辺の状況



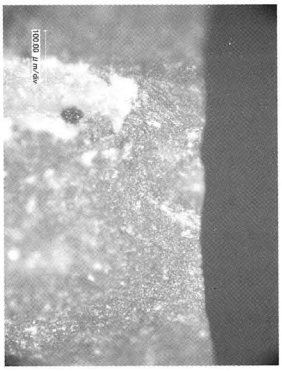
No.361　C8

使用痕のみられた範囲

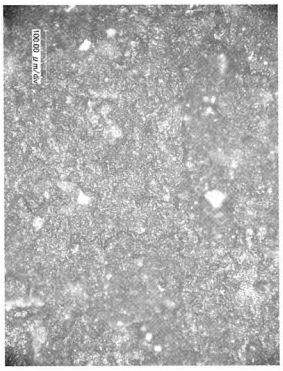
図3　石匙の使用痕



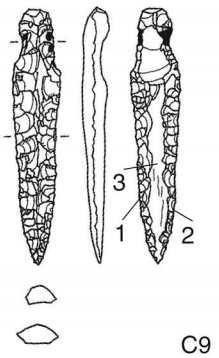
1　縁辺の状況



2　縁辺の状況

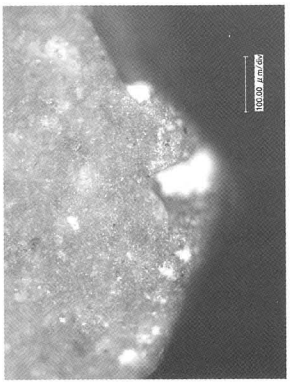


3　石器の表面

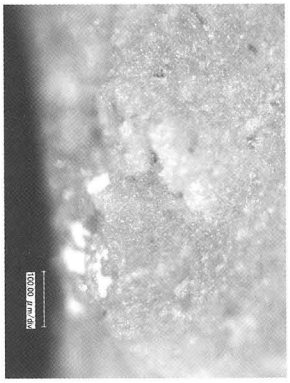


C9

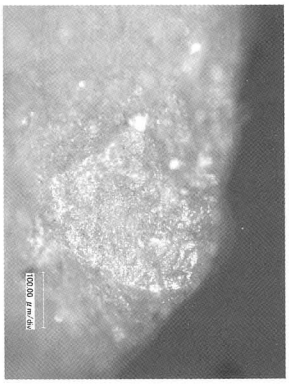
No.367



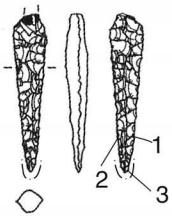
1　縁辺の状況



2　縁辺の状況

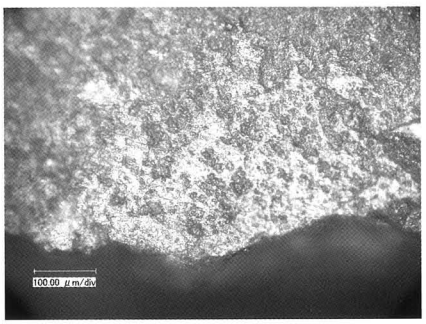


3　先端部の摩耗と光沢

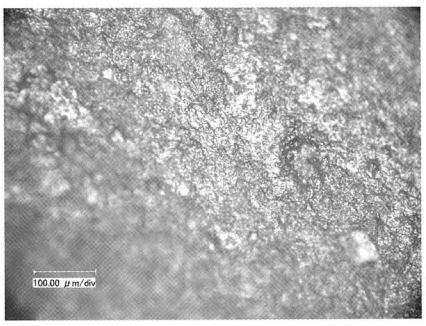


C10

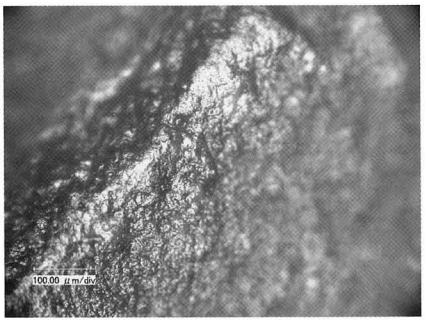
No.368



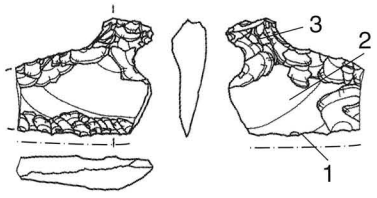
1　刃部の摩耗、光沢



2　石器の表面



3　摘み部の摩耗、光沢



No.369　　C11

使用痕のみられた範囲

図4　石匙の使用痕

6　金附遺跡出土礫石器の使用痕分析

考古学研究所（株）アルカ・池谷勝典

はじめに

金附遺跡（岩手県北上市稲瀬町・縄文時代晩期～弥生時代前期）からは、多量の礫石器が出土している。ここでは、まずそれらの中で摩耗面をもつ石器と敲打痕をもつ石器14点を分析対象とし、その摩耗や敲打痕について人為的なものであるのか自然的なものであるのか分析をおこなった。人為的なものである場合は、どのような使い方によって形成されたものであるのかを明らかにするためにより詳しい分析をおこなった。これらの分析により遺跡内でどのような作業が行われていたのという点について、石器からどういう情報を引き出し、そのことによって当時の作業を復原していけるのか試みたい。

分析資料と分析方法

多量に出土している礫石器の中から、摩耗面と敲打痕をもつ石器14点を分析対象とした。それら14点を分析資料とし、使用痕の特徴について詳細に観察した。

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VHX-100）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍率ズームレンズ（VH-Z100）を用いて低倍率と高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と200倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、手の脂分などの汚染を取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は東北大学の分類基準梶原・阿子島1981、芹沢他1982、阿子島1989)、および池谷（2003）によっている。

観察時には、適宜観察面のデジタル写真を撮影し記録した。さらに、器種分類、石材、使用痕については、属性表にまとめた（表1)。

分析資料の観察所見

396 敲石（安山岩）図1

風化により全体的に摩耗が見られる。素材はいびつな形をした亜角礫である。正面側に敲打痕の集中が観察される（写真1・2)。敲打痕自体も表面が摩耗している。敲打痕は、敲打による一つ一つの敲打痕の集積によって形成されている。分布は石器の中心よりもやや上に偏る位置にある。

400 敲石（安山岩）図1

風化により全体的に摩耗が見られる。小形の楕円礫を素材としている。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1,2)。正面側の敲打痕はかなり顕著であるが、裏面側は面的に凹むほどにはなっていない。敲打痕は、敲打による一つ一つの敲打痕の集積によって形成されている。分布は石器の中心よりもやや上下に偏る位置にある。

409 敲石　閃緑岩）図2

素材は、楕円礫である。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1-3)。正面側には縦軸方向に上下に並ぶ敲打痕の集中がある。敲打痕の分布は石器の中心から上下に偏る位置に分布している。裏面には敲打痕の集中が一カ所あり、中央部よりわずかに下に偏る位置に分布している。敲打痕の広がりは、横方向に広がるものである。

表裏面は一見磨面のように見えるが、人為的な磨面は形成されておらず、線状痕も観察されない（写真4-5)。

402 敲石（凝灰岩）図3

素材は、ややいびつな形の縦長の亜角礫である。正面、側面、裏面に敲打痕の集中が見られる（写真1-4)。正面側の敲打痕の集中は、縦軸方向に上下二カ所あり、上の敲打痕は凹みの中が大きな凹凸もなく滑らかな状況が観察される（写真2)。一方、下の敲打痕は敲打による打撃痕が明瞭であり、上の敲打痕を切っている状況である（写真1)。敲打痕の広がりは、横軸方向に広がるものである。側面の敲打痕は、正面側に比べる

と程度の弱いものである（写真3）。敲打痕の広がりもほぼ円形になるものである。裏面側の敲打痕は、上記2面の敲打痕よりも程度が弱いもので、凹みが形成されるまでには至っていない（写真4）。
敲打痕の広がり方は横方向に広がるものである。

404　敲石（安山岩）図4

素材は、楕円礫である。被熱資料である。先端部がわずかに欠損している。正面に見られる凹痕は中の石材の色が他と違い、敲打痕や線状痕も観察されない。おそらく自然に形成されたものと考えられる（写真5,6）。裏面には凹痕は形成されていないが、敲打痕の集中範囲が形成されている（写真1･2）。側面には、部分的に敲打痕の集中が見られる（写真4）。正裏面は自然面であり、いわゆる磨面は形成されていない（写真3）。

406　敲石（安山岩）図5

素材は、いびつな楕円礫である。正面に敲打痕の集中が観察される（写真1・2）。敲打痕の特徴は、一つ一つの敲打痕が観察され、横軸方向に広がる。石器中央部よりも上に偏る位置に分布している。敲打痕以外の使用痕は観察されない。全体的に摩耗しているのは自然摩耗である。（写真3・4）。

407　敲石（凝灰岩）図6

素材は扁平な楕円礫である。その礫が分割されている。折れ面には裏面側の中央付近に打撃が加えられているのが分かる。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1・2）。正面側の敲打痕が顕著で、裏面側は数個の打撃痕が観察される程度のものである。敲打痕の分布位置を見る限りでは、分割された後の使用によって形成されている可能性がある。したがって、分割は意図的なものである可能性も否定できない。

401　敲石（凝灰岩）図6

素材は楕円礫である。断片資料である。全体的に風化が激しい。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1,2）。敲打痕は、敲打の集積により深さ4㎜ほど凹んでいる。敲打痕の広がりは横軸方向に広がっている。石器の表面形状から正裏面に磨面が形成されていた可能性があるが風化により不明瞭である。

397　敲石（凝灰岩）図7

素材はややいびつな楕円礫である。被熱資料である。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1-4）。敲打痕は、正面側に縦軸方向に上下に一カ所ずつ形成されている。敲打痕は石器の中心から上下に偏る位置に分布している。裏面側は、一カ所形成されている。敲打痕の広がりは横軸方向である。また、敲打痕の集中部周辺は平坦な磨面が形成されている。この磨面は、いわゆる磨石等に見られる磨面とは違い、表面が荒れた状態のものである。推測されるのは、この磨面は敲打面を平坦にするための加工ではないかということである。

399　磨石＋敲石（凝灰岩）図8

素材は楕円礫である。正面側に顕著な敲打痕の集中が観察される（写真1）。裏面側は程度が弱いが敲打痕の集中が形成されている（写真2）。敲打痕は、石器の中心からやや上に偏る位置に分布している。敲打痕の広がりは横軸方向であるが、やや左斜め上方向に広がる。敲打痕は、一つ一つの敲打痕が確認できるものである。また、正裏面には磨面が形成されているが部分的に強い摩耗部見られる程度である（写真3-6）。磨面は原礫面の形状に沿うように形成され、線状痕も縦軸にほぼ直交するか斜行する方向に主体的に見られる。

405　　磨石＋敲石（凝灰岩）図9

素材はやや縦長の楕円礫である。正裏面に敲打痕の集中が観察される（写真1・2）。敲打痕の集中は縦軸方向に石器中央を境として上下一カ所ずつ形成されている。敲打痕は、一つ一つの敲打痕が確認できるものである。また、裏面側には磨面が形成されており、縦軸に対してほぼ直交か斜行する方向に主体的に観察される（写真3,4）。

398　磨石＋敲石（凝灰岩）図10,11

素材は、楕円礫である。正面に顕著な敲打痕の集中が見られる。敲打痕は一つ一つの敲打痕が明瞭で横軸方向に広がる特徴をもつものである。また、正裏面には磨面が形成され、原礫面の形状に沿うように磨面が形成されている（写真2・5・6）。線状痕は、縦軸に対してほぼ直交するかやや斜行するものである。右側面には敲打によって形成された細長い面が形成され、その面の凸部は摩耗している状態である（写真3･4）。左側は右側よりも激しい敲打痕みられ、縁辺に敲打による剥離がみられる。

磨面の遺存状態がよいと判断し、高倍率による観察を試みたが使用痕光沢は非常に微弱なものであった（写真 7・8）。線状痕は横軸方向に主体的に観察することができた。

408　磨石＋敲石（緑色凝灰岩）図 11

小形の楕円礫を素材としている。正面に敲打痕の集中が顕著にみられる（写真 1・2）。敲打痕は、一つ一つの敲打痕が明瞭であり、横軸方向に広がる。また、正面側に磨面が形成され、線状痕が明瞭である。線状痕は、縦軸方向と横軸方向に主体的に見られる。線状痕は部分的に敲打痕を切っている場合とまたその逆も観察されることから敲く、磨るという行為が交互に為されていたと考えられる。この石器に見られる磨面は、いわゆる磨石に見られるような磨面とは違い、面的な摩滅は見られず激しい線状痕のみで形成されている磨面である。鋭い凹凸のある対象物に対して擦り付けるように使用したものではないかと推定される。裏面側には特に使用痕は観察されない。

403　被熱礫（安山岩）図 12

いびつな形の楕円礫である。被熱資料である。使用痕は観察されない（写真 1,2,3）

まとめと考察

今回の分析結果から石器に観察される主体的な使用痕（敲打痕と磨面）の特徴が明らかとなった。以下、敲打痕と磨面の特徴について箇条書きで挙げていきたい。

（主面部に見られる敲打痕の特徴）
- 敲打痕は一つ一つの敲打痕の集積によって形成されている。
- 敲打痕の集中は、縦軸方向の対称軸線上に石器中央部から上下にやや偏った位置に分布する
- 敲打痕の広がりは横軸方向に広がり、縦軸に対してやや斜めに傾く傾向がある。

（主面部に見られる磨面の特徴）
- 礫面の形状に沿って形成されている。
- 石器の横軸方向に主体的な線状痕が伴う。
- 主面部を覆い尽くすような顕著な磨面は観察されない。

（※ 408 の磨面は例外的なもので上記の特徴には当てはまらないものである。）

以上、二つの使用痕が本分析資料に見られる主なものである。これらの使用痕はどのような作業の結果形成されたものなのだろうか。敲打痕から考えてみたい。観察から得られた使用痕の特徴は、使用者の動作、被加工物について有益な情報を与えてくれる。まず、一つ一つの敲打痕が観察される点からは、対象物に角があるものや尖った部分があるものを敲いた結果であると推測することができる。また、敲打痕の集中する位置や広がり方からは、石器の保持の仕方や動作について推測することができる。敲打痕が集中する位置が対象軸線上で石器の中心からやや上下に偏るという特徴は、図15のような石器の持ち方をしていることが推測される。また、広がりが横軸方向に展開することは、石器の運動方向を示しており、右手で石器を持った場合、図 16 のような右斜め前方向に振り抜く動作が復原される。

これらのことから主面部にみられる敲打痕は、クルミなどの尖ったものを図 16･17 のような動作で打撃した結果であると考えられる（池谷 2003）。

磨面の特徴については、礫面形状に沿って形成されている点から手首を返しながら石器を動かしていたことが推測される。線状痕の方向からは、石器の保持の仕方が推測され、横軸（短軸）方向に石器を保持して磨っていたと考えられる。摩耗度が低いことからは、本遺跡での磨るという作業があまり行われていなかったことが考えられる。

以上のように使用痕の特徴を個別に観察し、特徴を把握していくことで遺跡内でどのような使用痕が主体であり、どういう使用痕が少ないのか明らかにしていければ、遺跡内の活動内容がより具体的に復原できるのではないかと考えられる。

本遺跡は、縄文晩期から弥生前半期にかけての遺跡であり、時代の過渡期にあたる。このような遺跡の内容を詳細に分析することで、東北地方での弥生文化へ移行がどのような変化をとげたのかをより具体的に解明していけると考える。このような視点から、礫石器は食物加工具としての機能・用途をもつものが多く、当時の食生活を復原していく上で重要な石器群である。今後、本遺跡での礫石器の全体的な使用痕の内容把握が食物加工の実態解明において重要になっていくと思われる。

参考文献

阿子島香·梶原洋 1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 2)」『考古学雑誌』67-1

芹沢長介・梶原洋・阿子島香　1982 「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その 4)」『考古学と自然科学』14 号

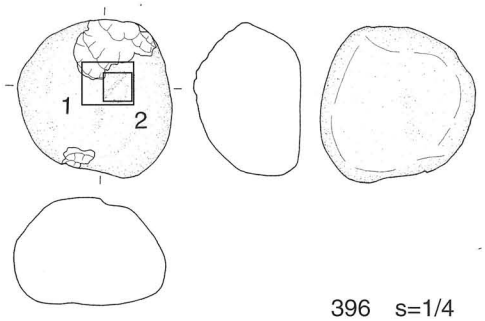
阿子島香　1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー 56　ニュー・サイエンス社

池谷勝典　2004 「縄文時代の機能研究—使用痕分析を中心に－」『考古学ジャーナル』520　ニュー・サイエンス社

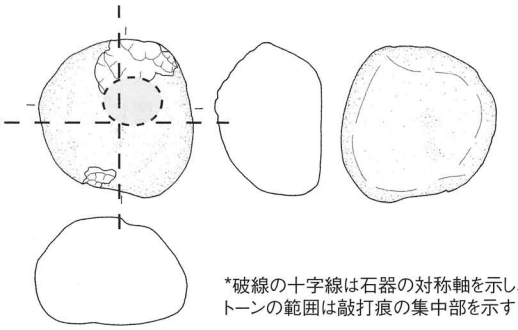
池谷勝典　2003 「礫石器の使用痕研究—磨石類を中心として－」『古代』115 早稲田大学考古学会

池谷勝典　2003 「磨石・敲石・石皿の実験考古学的研究」『アルカ研究論集』第 1 号　考古学研究所（株）アルカ

図版番号	分析 No.	器種	石材	素材形態	残存度	所見	重さ（g）
1	396	敲石	安山岩	楕円礫	完形	表面風化顕著、正面に敲打痕の集中あり	505.0
7	397	敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正裏に敲打痕の集中あり、敲打痕の集中面は平坦に磨られている。	396.7
10	398	磨石＋敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正裏に磨面が形成され、正面側に顕著な敲打痕の集中がある。側面には敲打により形成された面があり、表面に摩耗がみられる。	752.4
8	399	磨石＋敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正裏に磨面が形成され、正面側に顕著な敲打痕の集中が見られる、裏面にも敲打痕の集中があるが程度は弱い。	577.7
1	400	敲石	安山岩	楕円礫	端部欠	表面風化顕著、正裏面に敲打痕の集中あり、裏面側は程度が弱い。	248.3
6	401	敲石	凝灰岩	楕円礫	半欠	表面風化顕著、正裏に敲打痕の集中あり、磨面が形成されていた可能性があるが風化により不明瞭	242.4
3	402	敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正、側面に顕著な敲打痕の集中あり、裏面は凹みが構成されない程度の敲打痕の集中あり。	619.9
12	403	被熱礫	安山岩	楕円礫	完形	被熱	385.9
4	404	敲石	安山岩	楕円礫	頂部欠	被熱、裏面に敲打痕の集中があるが、程度は弱い。正面側に滑らかな凹痕があるが人為的なものかどうか不明である。裏面側はよく摩耗しており一見磨面のように見えるが、磨面は形成されていない。側面にも敲打痕が見られるが、散漫である。	573.3
9	405	磨石＋敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正裏面に敲打痕の集中あり、裏面には磨面が形成されている。	355.3
5	406	敲石	安山岩	楕円礫	完形	正面に敲打痕の集中あり。	598.3
6	407	敲石	凝灰岩	扁平楕円礫	端部断片	正裏に敲打痕の集中あり。	145.8
11	408	磨石＋敲石	凝灰岩	楕円礫	完形	正面に磨面と敲打痕の集中あり、磨面には線状痕が明瞭である。	80.4
2	409	敲石	閃緑岩	楕円礫	完形	正裏面に敲打痕の集中あり。	410.0



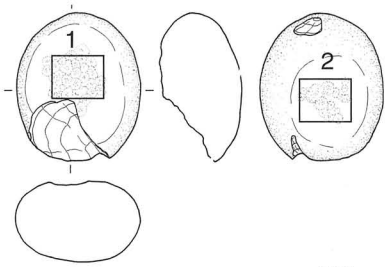
396　s=1/4



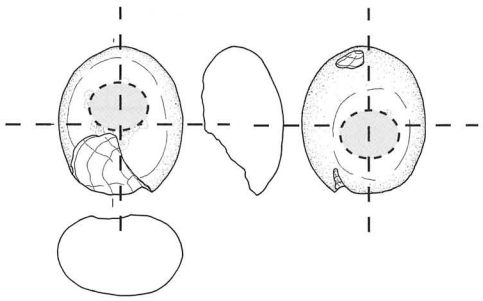
*破線の十字線は石器の対称軸を示し、
トーンの範囲は敲打痕の集中部を示す

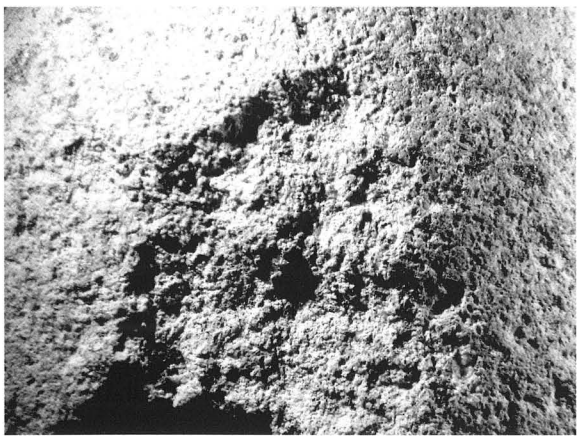
1　正面敲打痕拡大

2　写真1の拡大

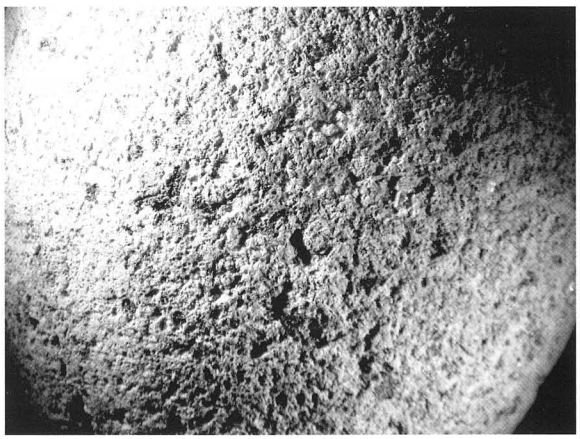


400　s=1/4





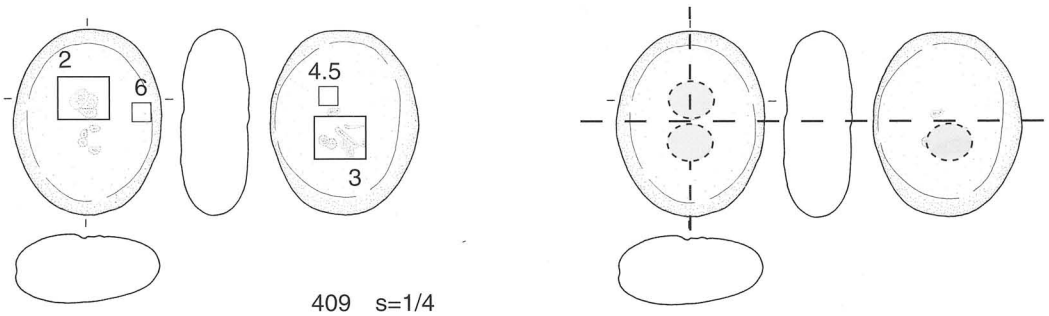
1　正面敲打痕の拡大



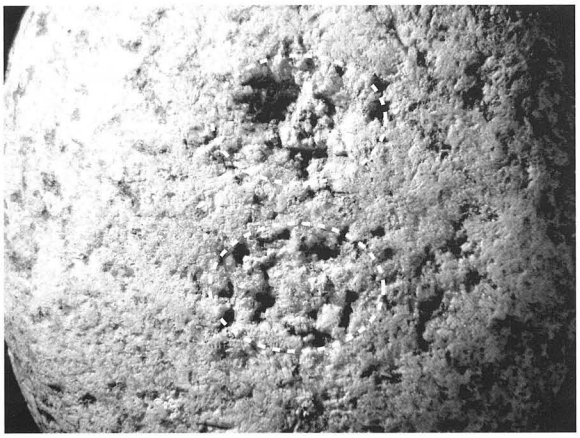
2　裏面の弱い敲打痕

図1　敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応



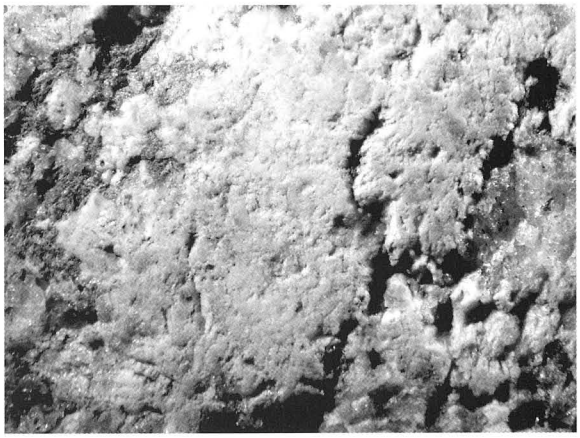
409　s=1/4



1　正面敲打痕拡大

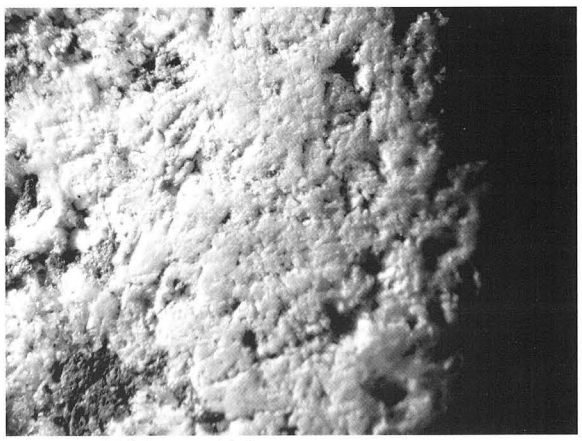
2　写真1の拡大

3　裏面敲打痕の拡大



4　裏面側自然面の拡大

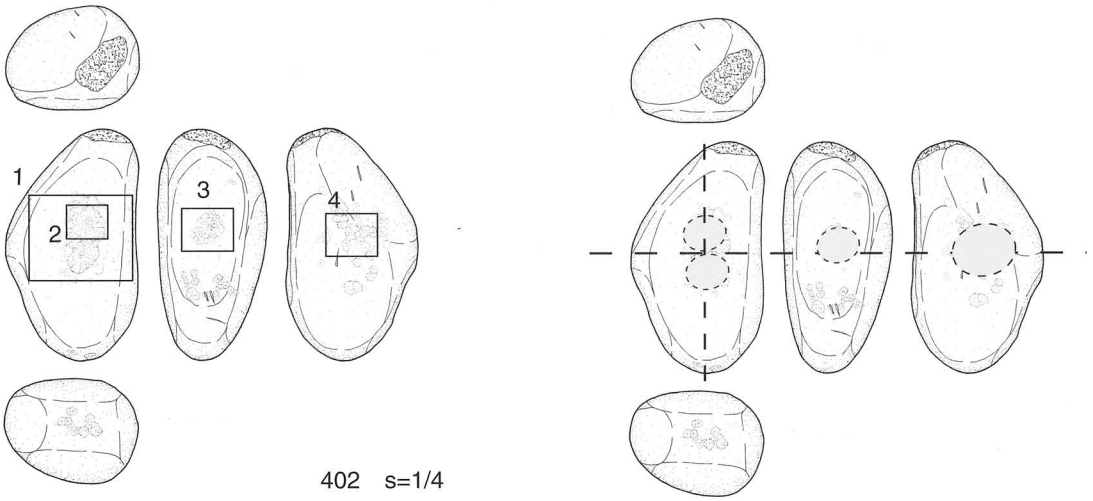
5　写真4の拡大



6　正面側自然面の拡大

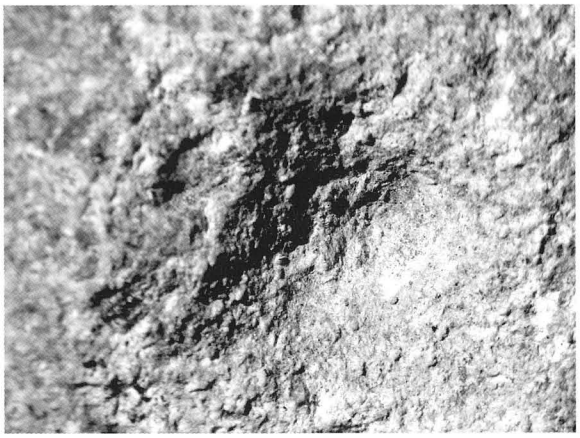
図2　敲石の低倍率観察

*数字の天地が写真の天地に対応

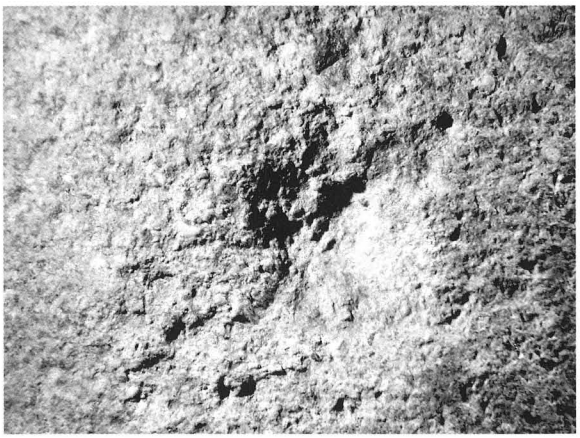


402　s=1/4

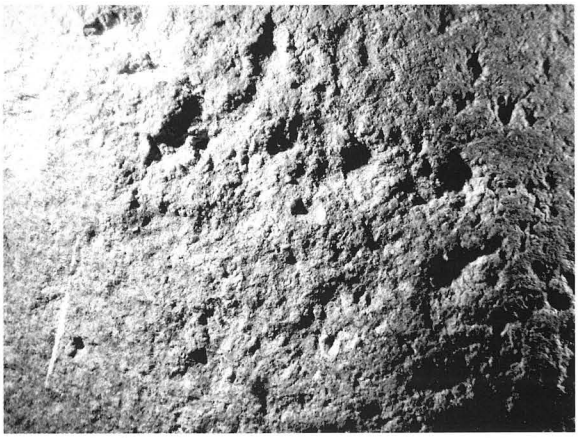
1　正面敲打痕拡大



2　敲打痕の拡大（やや滑らかな表面）



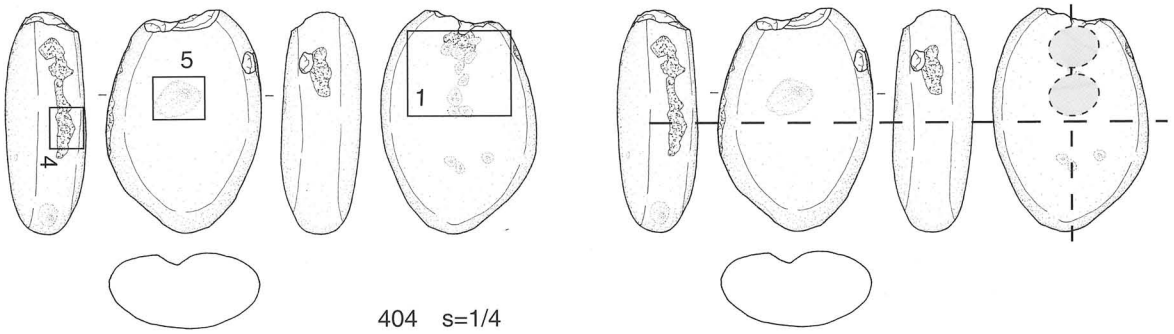
3　側面の敲打痕の拡大



4　裏面側敲打痕

図3　敲石の低倍率観察

*数字の天地が写真の天地に対応



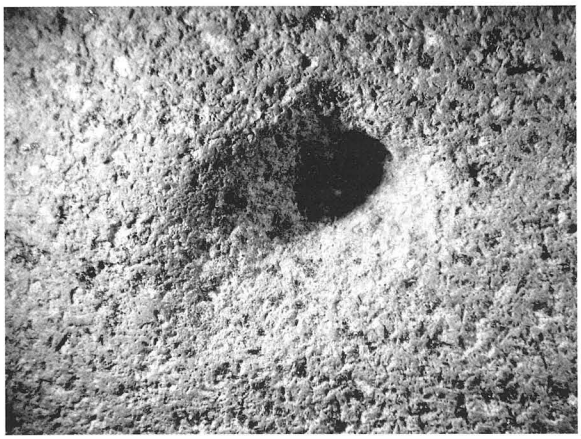
404　s=1/4

1　裏面側敲打痕

2　裏面の敲打痕の拡大

3　正面の自然面の拡大

4　側面の敲打痕の拡大

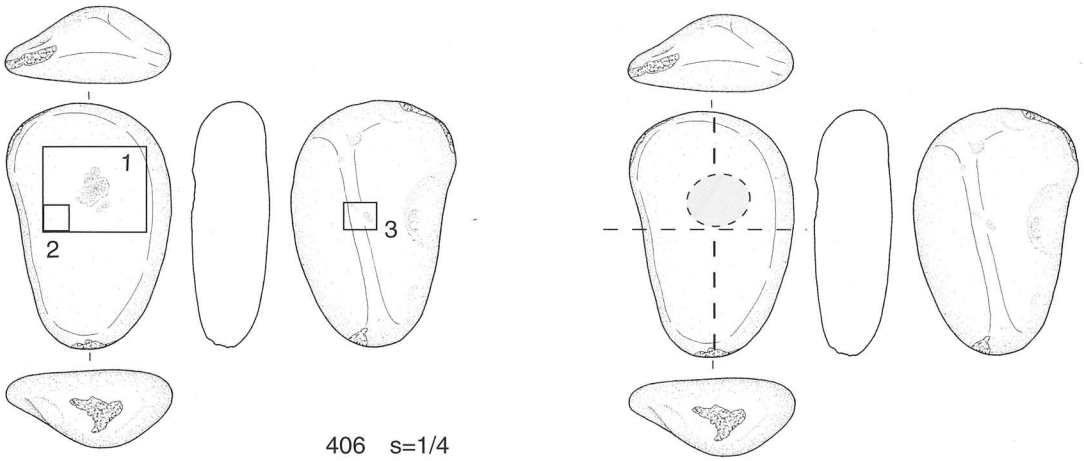


5　凹痕の拡大(滑らかな表面)

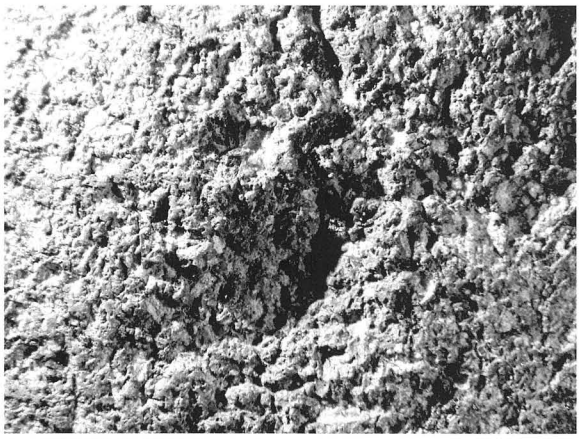
6　正面の凹痕と自然面の境界

図4　敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応



406　s=1/4



1　正面敲打痕拡大

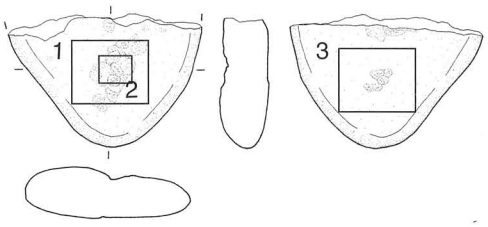
2　写真1の敲打痕の拡大

3　正面の自然面の拡大

4　裏面の自然面の拡大

図5　敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応

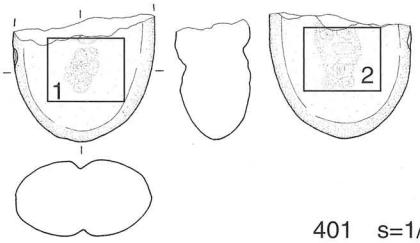


407　s=1/4

1　裏面の敲打痕の拡大

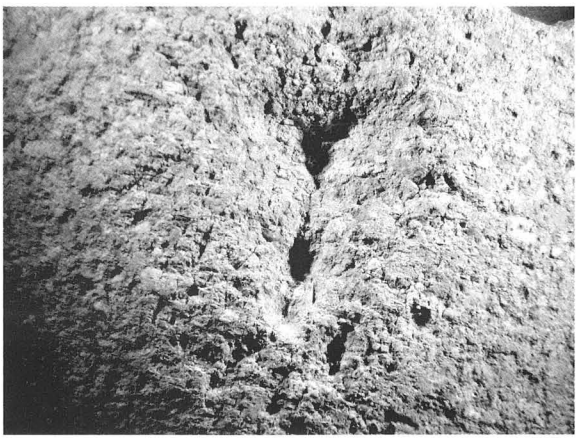
2　正面敲打痕の拡大

3　正面敲打痕の拡大



401　s=1/4

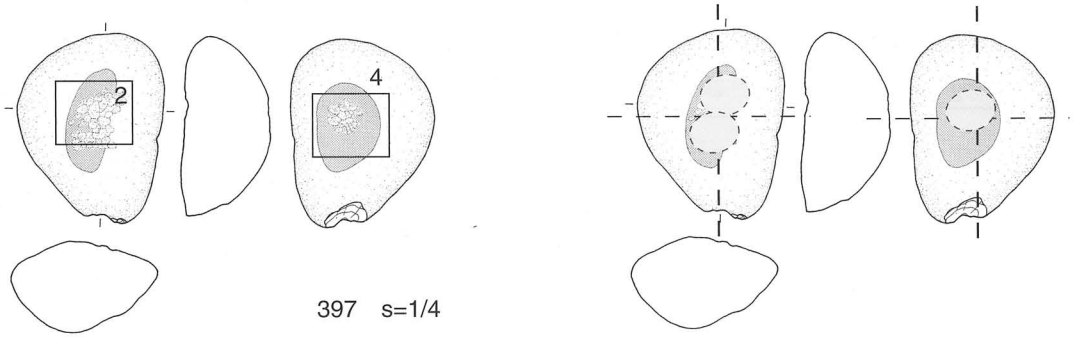
1　正面の敲打痕の拡大



2　裏面の敲打痕の拡大

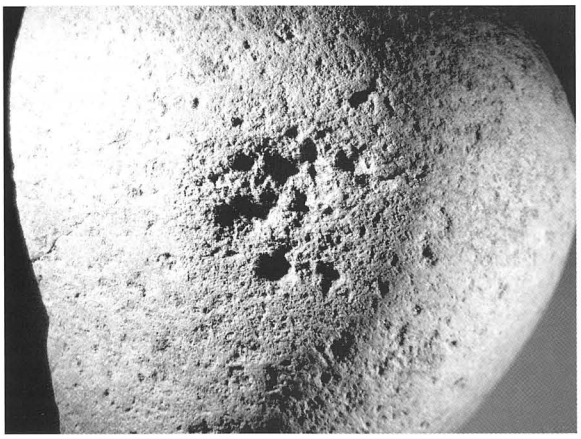
図6　敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応



1　正面の敲打痕と磨面の拡大

2　写真1の拡大


3　裏面の敲打痕と磨面の拡大

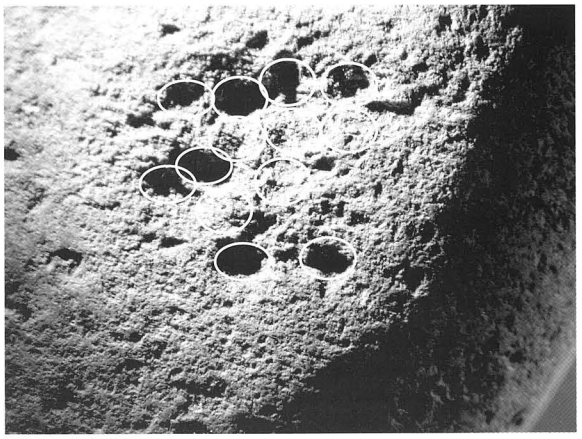
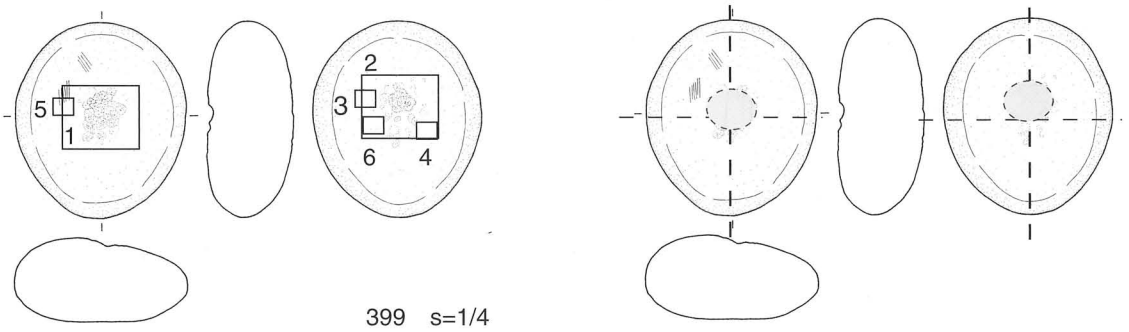

4　写真3の拡大

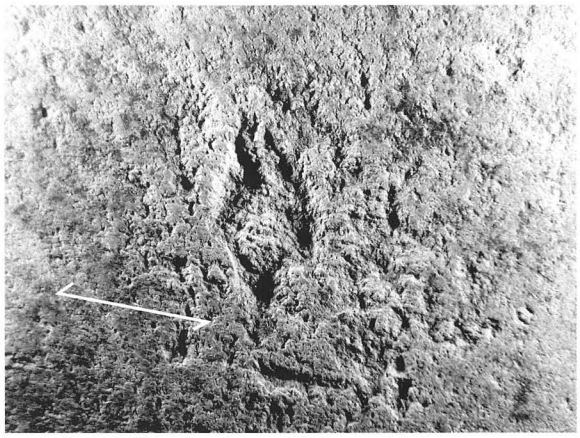
図7　敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応

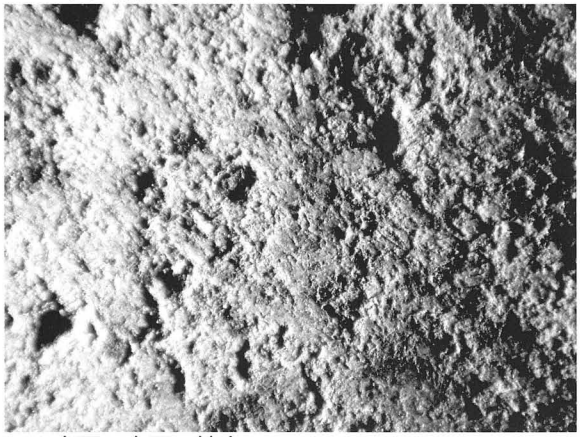


399　s=1/4

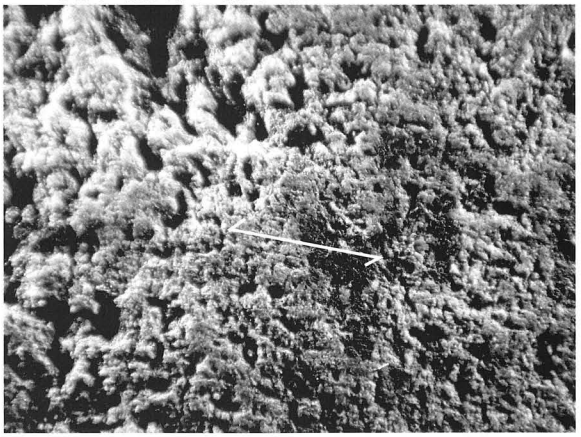
1　正面の敲打痕と磨面の拡大



2　裏面の敲打痕と磨面の拡大

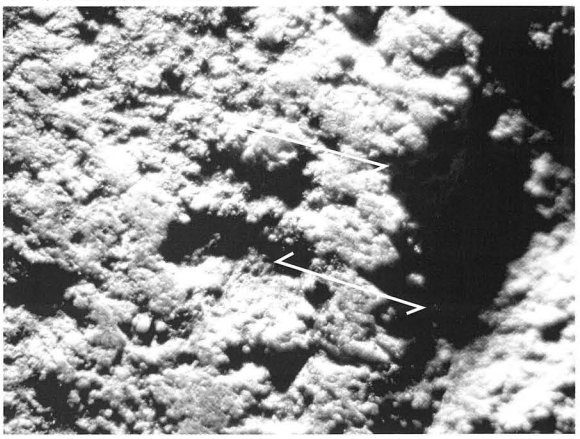


3　裏面の磨面の拡大



4　裏面の磨面の拡大

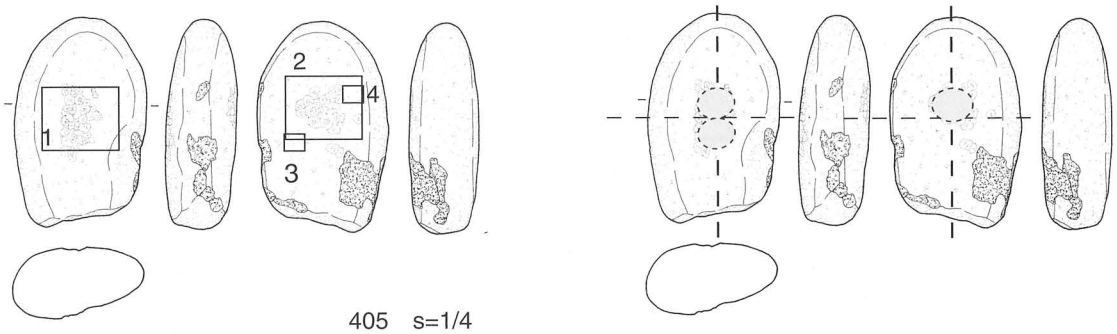
5　正面の磨面の拡大



6　裏面の磨面の拡大

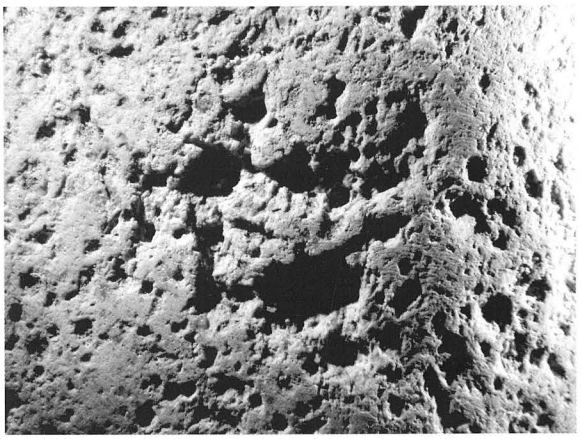
図8　磨石＋敲石の低倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応

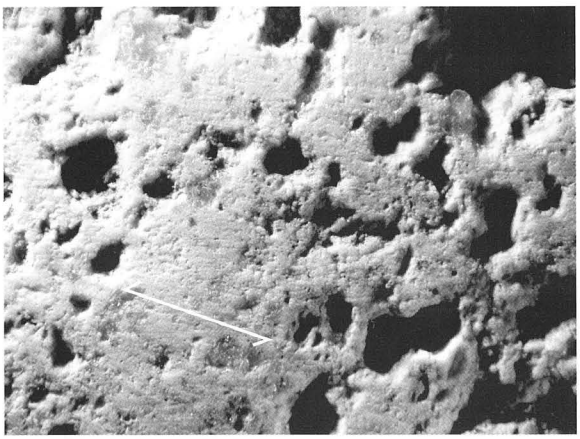


405　s=1/4

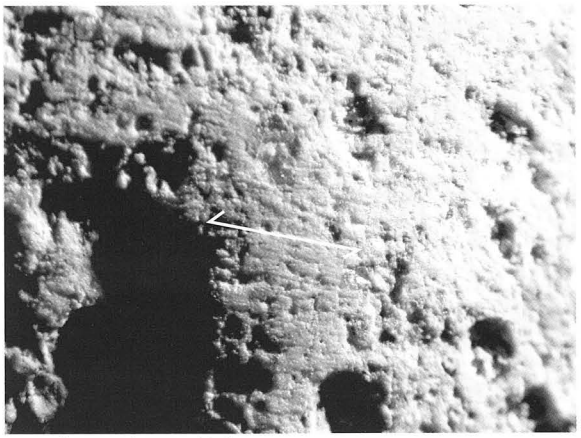
1　正面の敲打痕と磨面の拡大



2　裏面の敲打痕と磨面の拡大



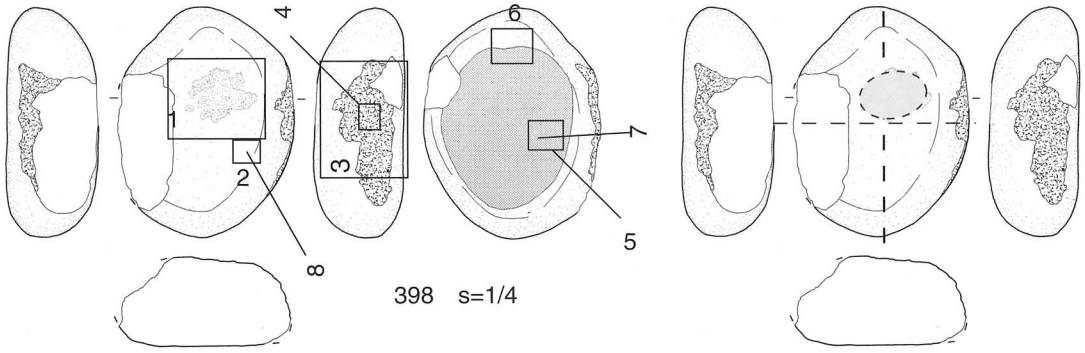
3　裏面の磨面の拡大



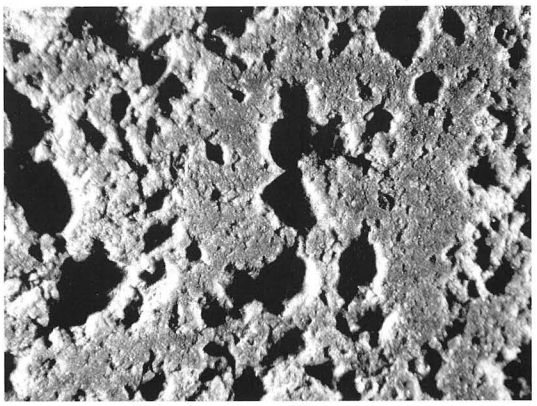
4　裏面の磨面の拡大

図9　磨石＋敲石の低倍率観察

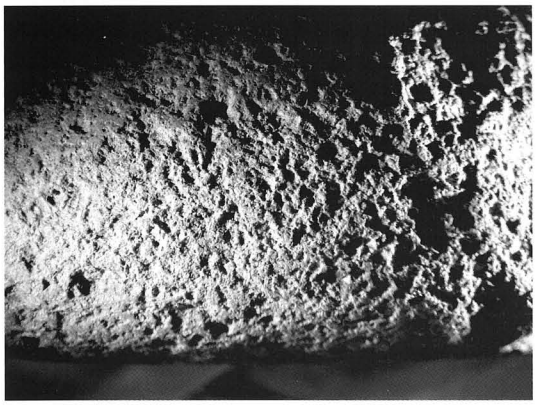
＊数字の天地が写真の天地に対応



1　正面の敲打痕と磨面の拡大

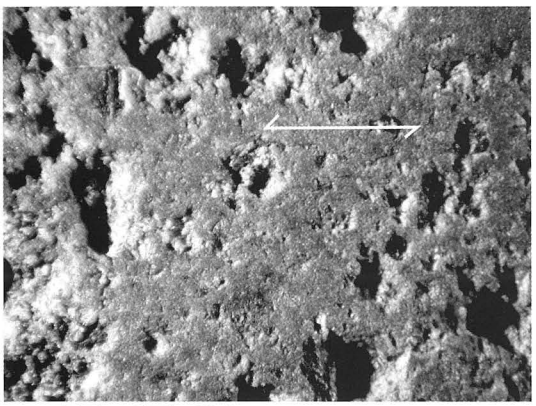


2　裏面の敲打痕と磨面の拡大

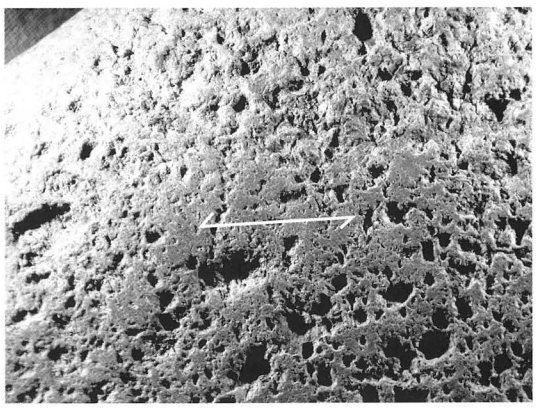


3　裏面の磨面の拡大

4　裏面の磨面の拡大



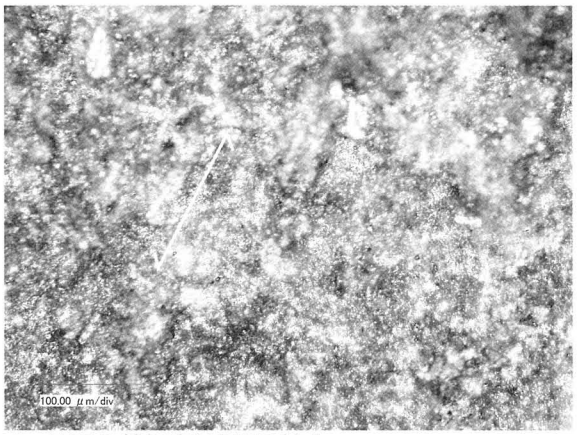
5　裏面の磨面の拡大



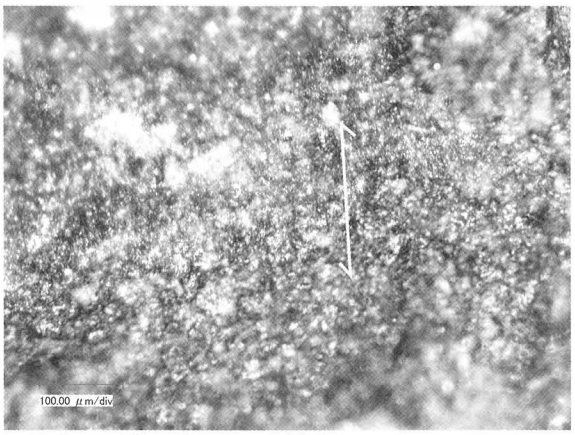
6　裏面の磨面の拡大

図10　磨石＋敲石の低倍率観察

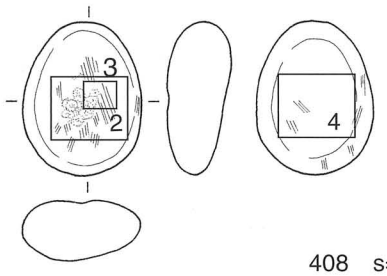
＊数字の天地が写真の天地に対応

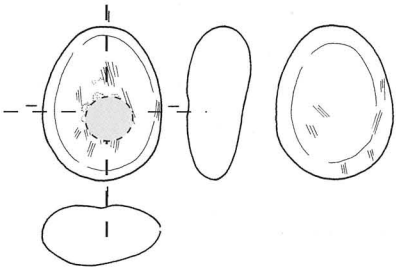


7　正面の敲打痕と磨面の拡大



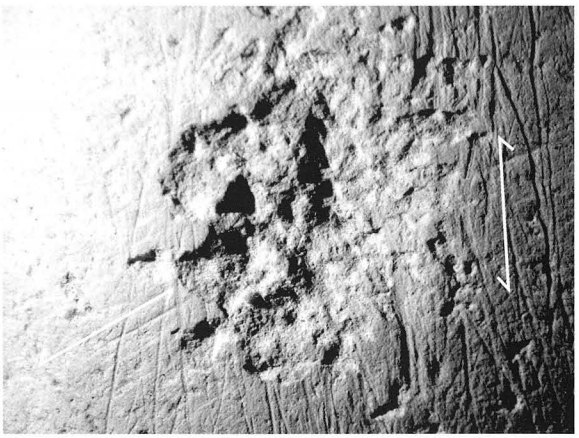
8　裏面の敲打痕と磨面の拡大



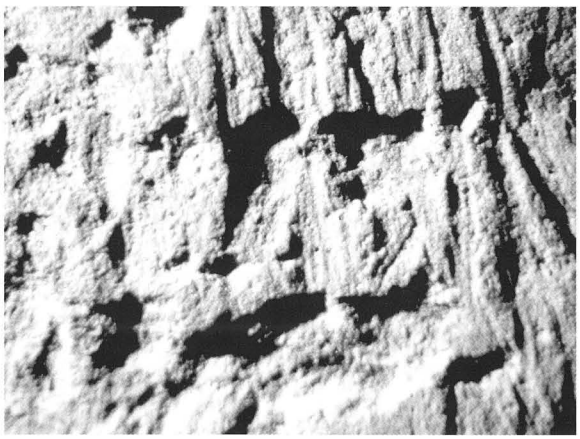


408　s=1/3

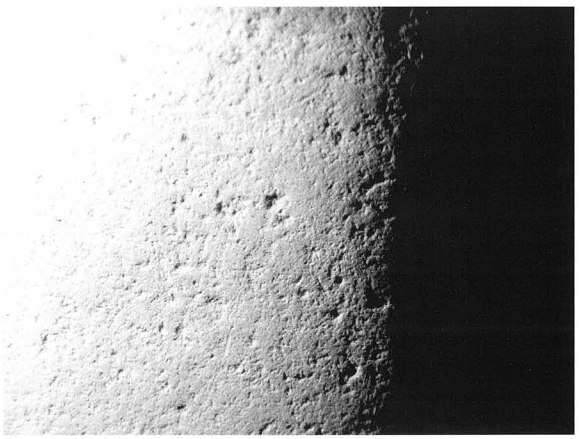
1　正面の磨面と敲打痕



2　正面の磨面と敲打痕の拡大



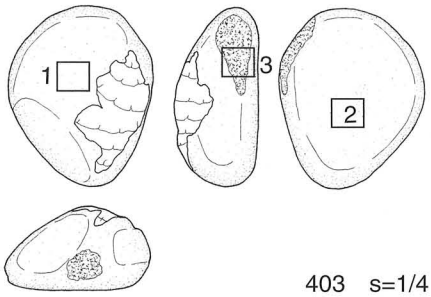
3　正面の磨面と敲打痕の切り合い



4　裏面自然面の拡大

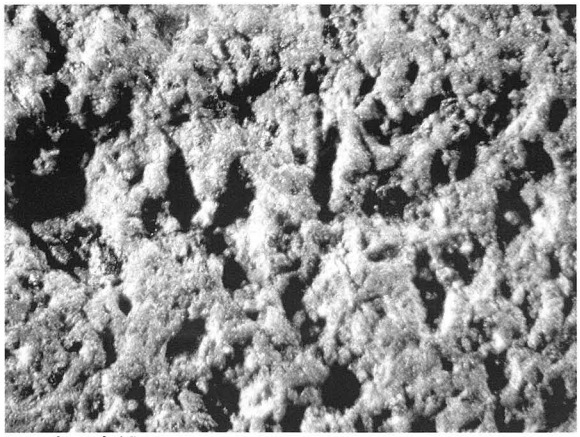
図11　磨石＋敲石の低･高倍率観察

＊数字の天地が写真の天地に対応

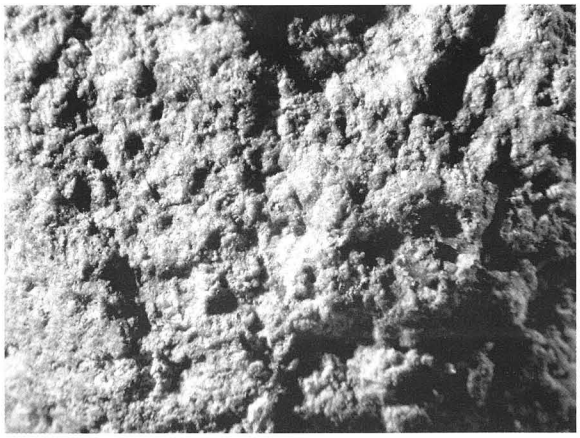


403　s=1/4

1　正面自然面



2　裏面自然面



3　側面自然面

図12　被熱礫の低倍率観察

*数字の天地が写真の天地に対応

オニグルミ（鋭く堅い尖頭部をもつ）

図13　クルミとクルミ割り実験石器（敲打痕が集中し横軸方向に連続している）

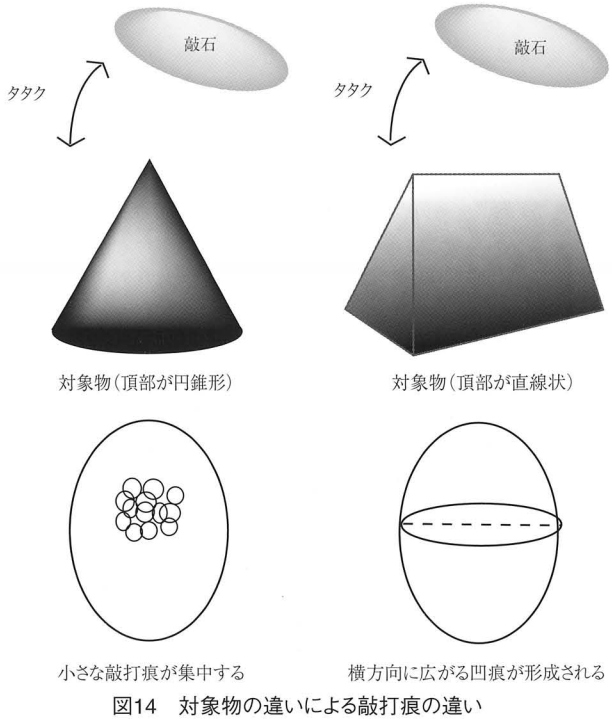


図14　対象物の違いによる敲打痕の違い

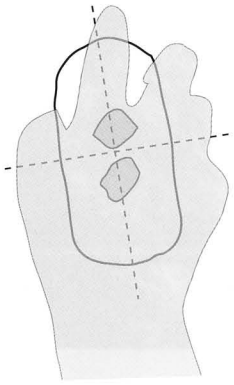


図15　敲石の持ち方模式図

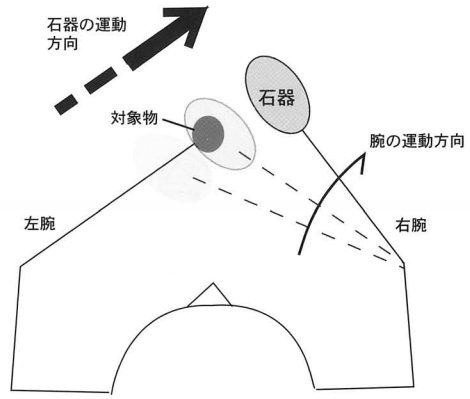


図16　敲石の使い方（動作）の模式図（俯瞰）

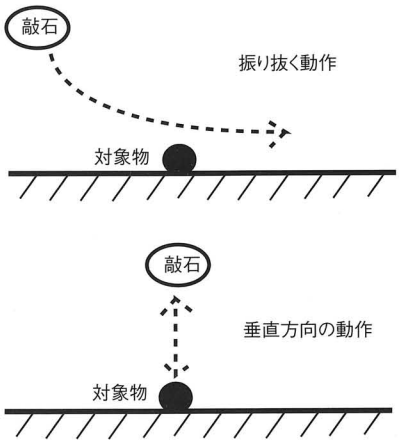


図17　敲石の運動軌跡（側面から見た図）

7　金附遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県北上市稲瀬町に所在する金附遺跡は、北上川と和賀川の合流点から南へ約 2.5km の付近に位置し、北上川左岸の低位段丘に形成された自然堤防上から後背湿地にかけて立地している。本遺跡の発掘調査の結果、縄文時代晩期～弥生時代前期を主体として、縄文時代中期末～後期中頃、さらに、平安時代、中世末、近世の遺構・遺物が確認されている。

本報告では、上記した自然堤防の後背湿地にかけて検出されている捨て場遺構の年代を検証するため、各土層から採取された炭化材を対象に放射性炭素年代測定を行う。

(1)　試　　料

試料は、捨て場遺構の縄文時代晩期後葉（大洞 A1 式期）～弥生時代前期（山王 III 式期）の遺物が検出される土層中より採取された炭化材 5 点(No.1 ～ 5)である。これらの試料から、MII21 4 b 層上面(No.3)、MII25 4b 層（No.4)、MIII8　10 層（No.5）の 3 点を放射性炭素年代測定の対象とする。

No.3 は、旧河道東側の自然堤防上より、No.4・5 は前述の自然堤防間の旧河道際より採取された試料で、いずれも発掘調査で確認された土層下部、あるいは地山直上の土層に相当する。なお、炭化材は 5 点全点とも炭化材同定を行い、樹種や由来等に関する情報を合わせて得ることとした。結果は、放射施炭素年代測定結果とともに表 1 に示す。

(2)　分　析　方　法

1）放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS 法により行った。なお、放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

2）炭化材同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

(3)　結　　果

結果を表 1・2 に示す。試料の測定年代（補正年代）は、いずれも約 2300 ～ 2400 年前の値を示す。一方、暦年較正年代は、No.3 は約 2200 ～ 2400 年前（calBP)、No.4 は約 2300 ～ 2700 年前（calBP)、No.5 は約 2300

表 1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	出土位置	試料の質	樹種	補正年代　BP	$\delta^{13}C$（‰）	測定年代　BP	Code.No.
1	M Ⅱ 12 2-3b 層	炭化材	クリ	-	-	-	-
2	M Ⅱ 12 2-3b2 層	炭化材	クリ	-	-	-	-
3	M Ⅱ 21 4b 層上面	炭化材	広葉樹	2320±40	-22.76±0.86	2290±30	IAAA-31466
4	M Ⅱ 25 4b 層	炭化材	クリ	2440±40	-24.10±0.99	2430±30	IAAA-31467
5	M Ⅲ 8 10 層	炭化材	クリ	2360±40	-22.62±1.18	2320±30	IAAA-31468

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２　暦年較正結果

試料番号	出土位置	補正年代 BP	暦年較正年代（cal）												相対比	Code.No.
3	M Ⅱ 21　4b 層 上面	2320±40	cal	BC	406	-	cal	BC	377	cal	BP	2,356	-	2,327	0.963	IAAA-31466
			cal	BC	267	-	cal	BC	264	cal	BP	2,217	-	2,214	0.037	
4	M Ⅱ 25　4b 層	2440±40	cal	BC	757	-	cal	BC	695	cal	BP	2,707	-	2,645	0.317	IAAA-31467
			cal	BC	656	-	cal	BC	654	cal	BP	2,606	-	2,604	0.009	
			cal	BC	541	-	cal	BC	477	cal	BP	2,491	-	2,427	0.346	
			cal	BC	473	-	cal	BC	411	cal	BP	2,423	-	2,361	0.328	
5	M Ⅲ 8　10 層	2360±40	cal	BC	502	-	cal	BC	488	cal	BP	2,452	-	2,438	0.082	IAAA-31468
			cal	BC	484	-	cal	BC	463	cal	BP	2,434	-	2,413	0.182	
			cal	BC	451	-	cal	BC	439	cal	BP	2,401	-	2,389	0.085	
			cal	BC	427	-	cal	BC	422	cal	BP	2,377	-	2,372	0.036	
			cal	BC	414	-	cal	BC	383	cal	BP	2,364	-	2,333	0.615	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

～ 2500 年前（calBP）の年代を示す。№ 4 で暦年代の幅が大きい要因としては、当該期の較正に用いられる較正曲線の傾きが水平に近くなるためと考えられる。

既存の東北地方における縄文土器型式と放射性炭素年代との対応関係の研究成果（キーリ・武藤 ,1982）によれば、縄文時代晩期は 3250 ～ 2250 年前（BP）という年代値が与えられている。したがって、この所見によれば、本分析結果は、縄文時代晩期の範囲にある。現段階では、各土層の考古学的所見は検討中であるが、発掘調査時に得られている所見と概ね整合する結果と言える。

引用文献

キーリ C.T.・武藤康弘 ,1982, 縄文時代の年代 . 縄文文化の研究 1　縄文人とその環境 , 雄山閣 ,246-275.

8　岩手県北上市金附遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定

小林謙一[1)]・坂本　稔[1)]・尾嵜大真[1)]・新免歳靖[1)]・村本周三[2)]・金子昭彦[3)]
1）国立歴史民俗博物館　炭素14年代測定グループ
2）総合研究大学院大学
3）（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター

岩手県北上市金附遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定を試みた。試料は、縄紋時代晩期～弥生時代前期包含層出土の炭化材片と、土器付着物である。岩手県埋蔵文化財センターにおいて、金子昭彦が提供した資料から、小林・村本が採取した。試料番号はIWMとした。
試料については、表1に示す。炭化材は細かく破砕し、樹種は不明である。

(1)　炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1) の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免、(2) (3) は、坂本・尾嵜が行った。IWM-13の試料は、炭素量が少なく、(3) については、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。炭化材は、(2) (3) について㈱パレオラボ社に委託した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（1回）。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（1回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、1回目0.001N、2回目以降0.01N、5回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。5～6回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N-HCl、10時間以上）を行い中和後、純水により洗浄した（4回）。

炭化材および漆のAAA処理は自動処理装置（Sakamoto　et　al.　2002）を用いた。炭化材は、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（1N-NaOH）でフミン酸等を除去する工程を5回、さらに2回酸処理（1N-HCl、240分以上）を行い中和後、純水を使って洗浄した（5回）。漆については、酸処理3回、アルカリ処理3回、酸処理3回、純水4回の設定で行った。

試料は、AAA前処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素化燃焼に供した量（燃焼）を表に記す。処理した量に対するAAA処理後に回収された試料の重量による重量比を含有率1、二酸化炭素に精製して得られたガスの炭素相当量による炭素含有率（含有率2）、含有率1と2を掛けて処理した量に対する炭素量の重量比を含有率3として表2に付す。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを

電気炉でおよそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

(2)　測定結果と暦年較正

AMSによる^{14}C測定は、1WM-13は、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。土器付着物は、㈱加速器分析研究所（機関番号IAAA）で行った。炭化材は、（株）パレオラボ（機関番号PLD）に委託した。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr　BPと記すことも多いが、本稿では^{14}CBPとする）。^{14}Cの半減期は5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）偏差値に対する千分率δ^{13}C（パーミル，‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{13}C比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる。

δ^{13}C値は、加速器分析研究所・パレオラボ測定分については、加速器による測定であるため、土器付着物については資料に余分がある場合、前処理済みの試料を（株）昭光通商に委託し、安定同位体質量分析計で測定した。昭光通商に委託しなかった試料については、加速器による測定を（）で参考として付す。ベータアナリティック社の測定分は、^{13}C用ガス試料を質量分析計により測定した^{13}C/^{12}C比の値を示してある。

測定値を較正曲線IntCal04（^{14}C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimeretal, 2004）と比較することによって暦年代を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal　Programに準じた方法で作成したRHcalを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal　BCで示す。（）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

(3)　年代的考察

まず、土器付着物のδ^{13}C値について検討しておく。これまでの測定例から（小林ほか2004など）、δ^{13}C値が-20～24‰の値を取るもののなかに、同一の時代と考えられる試料より、数百年程度ふるい炭素14年代を示す例が多く、海洋リザーバー効果の影響を考える必要が認識されている。通常は、海岸部の遺跡や貝塚遺跡の土器付着物に認められるが、東日本の縄紋文化では、サケ・マスの遡上や交易等での内陸での海洋資源の利用も考慮する必要があり、割合としては少ないながらも、北海道・青森県・秋田県などにおいて、いくつかの事例が報告されている。今回の測定結果を見ると、すべての土器付着物において安定同位体質量分析計で測定していないものの、おおむね一定の数値を示している。IWM11・12を除いて、δ^{13}C値が-25‰より軽く、陸生の植物質資源由来の炭化物である可能性が高い。IWM11・12については、ともに内面付着物で約-23‰と、微妙な数値であり、検討を要する。ともに3層出土の胴部小破片であり、土器自体の編年的位置づけが不明瞭であるため、年代が整合的かどうかは検討しにくいが、1WM12は2540^{14}CBPと、金附遺跡の測

定結果の中では比較的に古い測定値となっており、海産物または海洋に由来する炭素が付着していたために、古い年代が測定された可能性がある。

土器付着物では、同一個体の土器から、部位を異にして採取した、1WM1a-c、2ab、3ab、4a-c、5abについて検討する。1a,3a,4aは口縁外面、1b,2a,4b,5aは胴部外面のスス、1c,2b,3b,4c,5bは胴部または蓋口縁内面の焦げ付き状の付着物である。1については、1aが2200^{14}CBPとやや新しく、1bが2290^{14}CBPとやや古いが、1cの2230^{14}CBPを中心に考えると、1abとも1cの誤差範囲に収まり、ほぼ一致するとみなせ、較正年代で紀元前380-200年の中に含まれると考えられる。2abと3abおよび4abc、5abは、ともに内面付着物である2b・3b・4c・5bが外面のススよりも^{14}C年代で約100年古い測定値となっている。δ^{13}C値は、内外付着物ともに、-26‰程度であり、海洋リザーバー効果の影響は認めがたい。これらは、2・3は弥生中期の所産と考えられ、年代的には2200^{14}C年ころの大きく波行する時期に当たり、4は弥生前期の2400^{14}C年ころの横に寝る較正曲線の時期に当たる。前者は2200年問題、後者は2400年問題と呼ばれる、暦年較正の上で広い範囲に確率密度が及んでしまう問題がある時期とされている。そのため、実年代が同一でも、その実年代を含む幅広い炭素年代を示してしまうことがあり、そうした事例になってしまった可能性もある。しかしながら、4例もの事例で内面付着物が^{14}C年代で約100年古い測定値であることは、偶然とは捉えがたく、なんらかの要因が介在していることも否定できない。年代としては較正年代を幅広く取っておく必要があり、今後年代を絞っていく上で検討していく必要がある。

つぎに、層位別出土の炭化物についてみると、おおむね上層（1-2b層）は新しく、下層（3層以下）は古いことがわかり、前者は弥生中期山王Ⅲ層期、後者は縄紋晩期～弥生前期に相当するものと考えられる。層位的に出土している土器付着物の測定結果とも矛盾はない。

上記の点を勘案して、今回の測定による実年代の推定を行っておく。

弥生時代中期山王Ⅲ層相当（金附遺跡2層）は、炭化物ではC1～4、土器付着物では1～3、7が相当し、^{14}C年代では2200～2300^{14}CBPの^{14}C年代であり、暦年較正の結果では紀元前400～200年の間に含まれる。

より古い大洞A'式・砂沢式併行の土器付着物4～6・9および、3層以下の出土炭化物C6～10、弥生前期末砂沢式併行の漆IWM13は、炭素年代で2500-2300^{14}CBP、較正年代で紀元前350年頃よりおおむね古い年代に高い確率で含まれる。

以上の推定は、これまでの東日本での小林による実年代比定と整合的であり、大洞A'式期は紀元前400年より古く、砂沢式併行期はそれ以降を含む年代から紀元前350年頃まで、東日本弥生中期前半は、さらにそれよりも新しい年代から紀元前200年頃までを含む年代であると推定できる。

この報告は、平成17年度文部科学省・科学研究費補助金　学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表　西本豊弘）の成果の一部である。本稿を草するに当たり、国立歴史民俗博物館今村峯雄教授には、暦年較正についてご協力を得ている。

＜参考文献＞

小林謙一 2004「東日本」『弥生時代の実年代』（春成秀爾・今村峯雄編）学生社

Reimer, Paula J.; Baillie, Mike G.L.; Bard, Edouard; Bayliss, Alex; Beck, J Warren; Bertrand, Chanda J.H.; Blackwell, Paul G.; Buck, Caitlin E.; Burr, George S.; Cutler, Kirsten B.; Damon, Paul E.; Edwards, R Lawrence; Fairbanks, Richard G.; Friedrich, Michael; Guilderson, Thomas P.; Hogg, Alan G.; Hughen, Konrad A.; Kromer, Bernd; McCormac, Gerry; Manning, Sturt; Ramsey, Christopher Bronk; Reimer, Ron W.; Remmele, Sabine; Southon, John R.; Stuiver, Minze; Talamo, Sahra; Taylor, F.W.;

van der Plicht, Johannes; Weyhenmeyer, Constanze E. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 – 26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46（3）, 1029-1058（30）.

M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon daging. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224: 298-301.

表 1　年代測定用試料一覧

試料番号	種類	時期	型式	器種	出土区・層位	付着状況
IWM-C　1	炭化材	弥生中期	山王 3 層		M Ⅲ　21 区 1 層	
IWM-C　2	炭化材	弥生中期	山王 3 層		M Ⅲ　23 区 1b 層	
IWM-C　3	炭化材	弥生中期	山王 3 層		M Ⅲ　22 区 1-2 層	
IWM-C　4	炭化材	弥生中期	山王 3 層		M Ⅲ　7 区 2b 層	
IWM-C　5	炭化材	弥生			M Ⅲ　18 区 2-3b2 層	
IWM-C　6	炭化材	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢		M Ⅲ　17 区 3 層	
IWM-C　7	炭化材	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢		M Ⅲ　17 区 3-4 層	
IWM-C　8	炭化材	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢		M Ⅲ　7 区 4 層	
IWM-C　9	炭化材	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢		M Ⅲ　22 区 4b 層	
IWM-C　10	炭化材	縄紋晩期	大洞 A'		M Ⅲ　19 区 8 層 (3-4 層の下)	
IWM-　1a	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	深鉢	M Ⅱ　13 区 2b 層　B376	口縁外面ススト
IWM-　1b	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	深鉢	M Ⅱ　13 区 2b 層　B376	胴上部外面ススト
IWM-　1c	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	深鉢	M Ⅱ　13 区 2b 層　B376	胴上部内面焦げ
IWM-　2a	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	深鉢	N Ⅲ　1 区　C2060	胴上部外面ススト
IWM-　2b	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	深鉢	N Ⅲ　1 区　C2060	胴上部内面焦げ
IWM-　3a	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	蓋	L Ⅲ　22 区　2b 層　B280	口縁外面ススト
IWM-　3b	土器付着	弥生中期	山王Ⅲ層	蓋	L Ⅲ　22 区　2b 層　B280	口縁内面焦げ
IWM-　4a	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	N Ⅲ　6 区　4 層　C2415	口縁外面ススト
IWM-　4b	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	N Ⅲ　6 区　4 層　C2415	胴中部外面ススト
IWM-　4c	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	N Ⅲ　6 区　4 層　C2415	胴中部内面焦げ
IWM-　5a	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	L Ⅱ　19 区　2b 層	胴中部外面ススト
IWM-　5b	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	L Ⅱ　19 区　2b 層	胴中部内面焦げ
IWM-　6	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	L Ⅲ　16 区　3 層　C602	胴内面焦げ
IWM-　7	土器付着	弥生中期	山王 3 層	深鉢	M Ⅲ　12-17 区 4a 層トレンチ　B499	胴中部外面ススト
IWM-　9	土器付着	縄紋晩期～弥生前期	大洞 A'～砂沢	深鉢	L Ⅲ　16 区　3 上層	口縁外面ススト
IWM-　10	土器付着			鉢	L Ⅲ　17 区　2b 層	胴上部内面焦げ
IWM-　11	土器付着			深鉢	O1　5 区　3 層	胴中部内面焦げ
IWM-　12	土器付着			深鉢	L Ⅲ　21 区　3 層	胴中部内面焦げ
IWM-　13	漆	弥生前期末		漆容器？	M Ⅲ　21 区　1 層	底部内面　漆塗膜

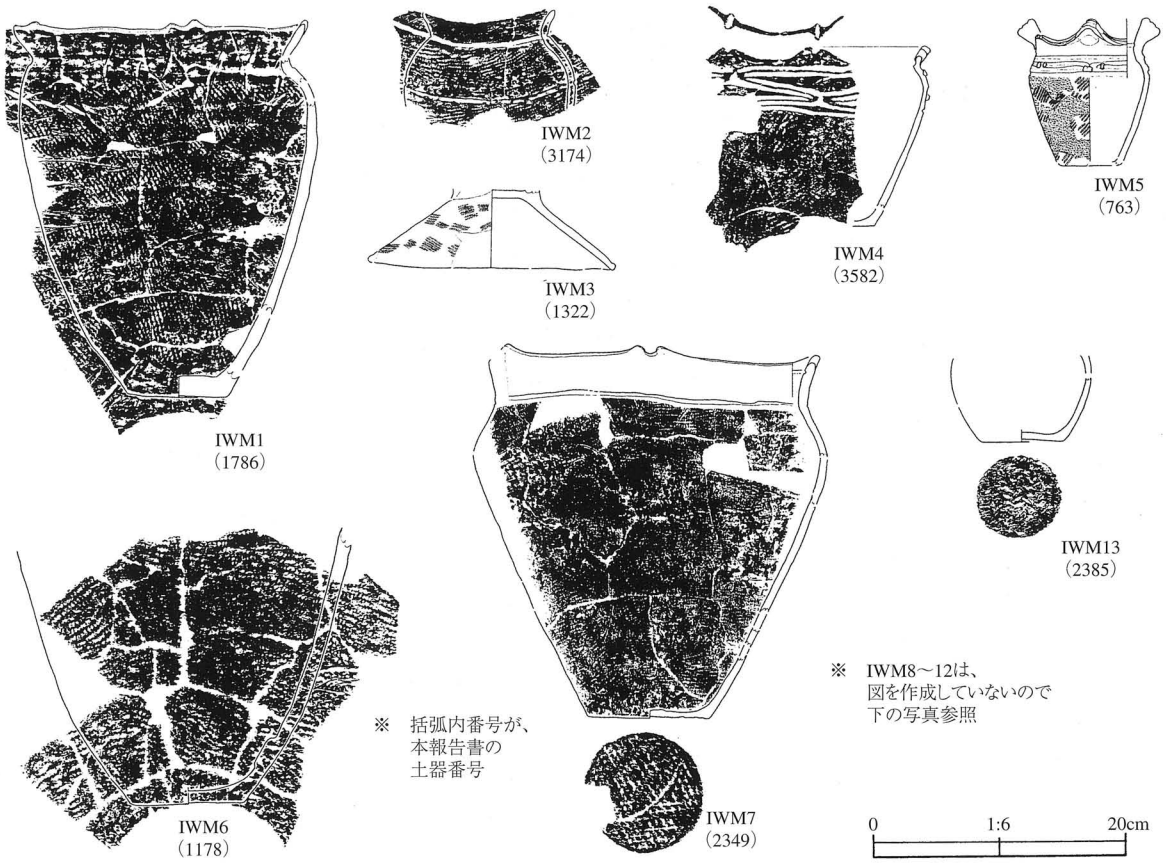
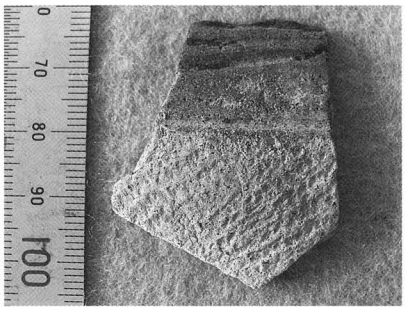
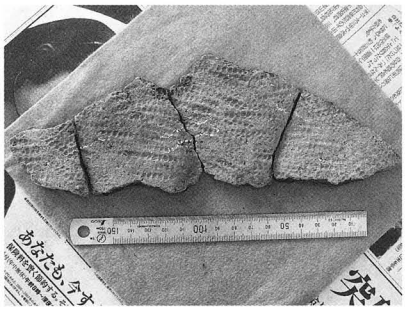


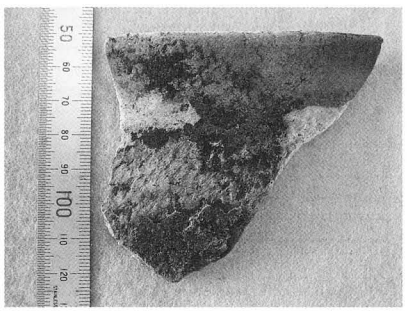
図１　試料付着土器



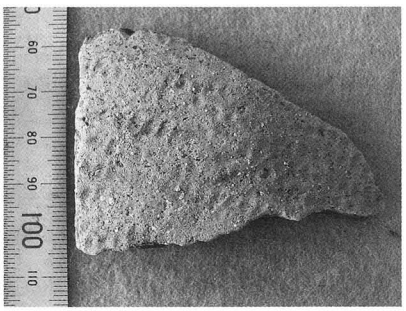
IWM10



IWM12



IWM9



IWM11

表２　試料の出土位置と時期推定根拠

試料番号	種類	出土位置		同一箇所出土土器		備　考
		出土区・層位	出土層序図	掲載箇所	時期	
IWM-C　1	炭化材	M Ⅲ 21 区・1 層	第 70 図	第 291 図 2385 ～ 2387	谷起島式古～新	
IWM-C　2	炭化材	M Ⅲ 23 区・1b 層	第 71 図	第 297 図 2457、2458	大洞 A′ 新～青木畑式	
IWM-C　3	炭化材	M Ⅲ 22 区・1-2 層	第 71 図	第 294 図 2424 ～ 2428	谷起島式古	
IWM-C　4	炭化材	M Ⅲ 7 区・2b 層	第 68 図	第 283 図 2313、2314	時期不詳	
IWM-C　5	炭化材	M Ⅲ 18 区・2-3b2 層	第 71 図	掲載土器なし		
IWM-C　6	炭化材	M Ⅲ 17 区・3 層	第 71 図	第 290 図 2377	大洞 A′ 式古	
IWM-C　7	炭化材	M Ⅲ 17 区・3-4 層	第 71 図	掲載土器なし		
IWM-C　8	炭化材	M Ⅲ 7 区・4 層	第 68 図	掲載土器なし		
IWM-C　9	炭化材	M Ⅲ 22 区・4b 層	第 71 図	掲載土器なし		
IWM-C　10	炭化材	M Ⅲ 19 区・8 層 (3-4 層の下)	第 71 図	掲載土器なし		
IWM-　1a	土器付着	M Ⅱ 13 区・2b 層　B376	第 67 図	第 235 図 1777、第 236 図 1786 ～ 1792	青木畑式らしいものもあるが、谷起島式古主。	土器自体も、谷起島式古であろう。
IWM-　1b	土器付着	M Ⅱ 13 区・2b 層　B376				
IWM-　1c	土器付着	M Ⅱ 13 区・2b 層　B376				
IWM-　2a	土器付着	N Ⅲ 1 区・1-2 層　C2060	第 73 図	第 356 図 3174 ～ 3177	青木畑式～谷起島式古	土器自体は、谷起島式古であろう。
IWM-　2b	土器付着	N Ⅲ 1 区・1-2 層　C2060				
IWM-　3a	土器付着	L Ⅲ 22 区・2b 層　B280	第 66 図	第 193 図 1322 ～第 194 図 1322 ほか	青木畑式新	土器自体も、青木畑式新であろう。
IWM-　3b	土器付着	L Ⅲ 22 区・2b 層　B280				
IWM-　4a	土器付着	N Ⅲ 16 区・4 層　C2415	第 75 図	第 386 図 3580 ～ 3590	大洞 A′ 式（古～）新	土器自体は、大洞 A′ 古か。
IWM-　4b	土器付着	N Ⅲ 16 区・4 層　C2415				
IWM-　4c	土器付着	N Ⅲ 16 区・4 層　C2415				
IWM-　5a	土器付着	L Ⅱ 19 区・2b 層	図なし	第 142 図 762 ～ 765	大洞 A′ 式～青木畑式	土器自体は、大洞 A′ 新か（古の可能性？）
IWM-　5b	土器付着	L Ⅱ 19 区・2b 層				
IWM-　6	土器付着	L Ⅲ 16 区・3 層　C602	第 64 図	第 178 ～ 180 図 1172 ～ 1182	大洞 A′ 式古	大洞 A′ 古か？
IWM-　7	土器付着	M Ⅲ 17・1-2 層ほか　B499	第 71 図	第 289 ～ 290 図 2364 ～ 2374	谷起島式古	高田 B 式片含む。
IWM-　9	土器付着	L Ⅲ 16 区・3 上層	第 64 図	第 177 図 1169、第 178 図 1170	大洞 A′ 式古？	土器自体も大洞 A′ 式古？
IWM-　10	土器付着	L Ⅲ 17 区・2b 層	第 64 図	第 182 図 1207、第 183 図 1212 ～ 1214	谷起島式古	土器は青木畑式～？
IWM-　11	土器付着	O15 区・3 層	図なし	掲載土器なし		O Ⅰ 5 と判断。土器の時期不明。
IWM-　12	土器付着	L Ⅲ 21 区・3 層	第 65 図	第 189 ～ 190 図 1294 ～ 1300 等	大洞 A′ 式古？	土器自体は判断不可能。
IWM-　13	土器付着漆	M Ⅲ 21 区・1 層	第 70 図	第 291 図 2385 ～ 2387	谷起島式古～新	谷起島式古？

表３　炭素量一覧

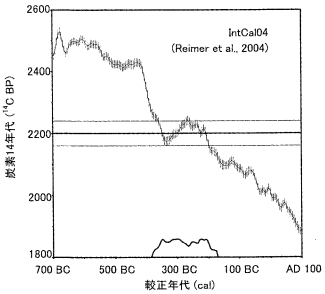
試料番号	採取量	処理量	回収量	含有率 1	前処理後	燃焼量	ガス	含有率 2	含有率 3
IWM-C　1	223.00	223.00	38.41	17.2%	良	5.70	3.37	59.1%	10.2%
IWM-C　2	147.00	147.00	94.33	64.2%	良	6.30	3.96	62.9%	40.3%
IWM-C　3	182.00	182.00	17.18	9.4%	良	4.70	2.68	57.0%	5.4%
IWM-C　4	25.00	25.00	8.81	35.2%	良	4.20	2.35	56.0%	19.7%
IWM-C　5	119.00	119.00	78.51	66.0%	良	7.30	4.44	60.8%	40.1%
IWM-C　6	153.00	153.00	25.06	16.4%	良	4.40	2.58	58.6%	9.6%
IWM-C　7	58.00	58.00	15.09	26.0%	良	5.50	3.07	55.8%	14.5%
IWM-C　8	103.00	103.00	74.24	72.1%	良	6.10	3.65	59.8%	43.1%
IWM-C　9	101.00	101.00	52.14	51.6%	良	6.20	3.61	58.2%	30.1%
IWM-C　10	79.00	79.00	36.20	45.8%	良	6.10	3.58	58.7%	26.9%
IWM-　1a	134.50	67.11	30.71	45.8%	良	4.10	2.66	64.8%	29.6%
IWM-　1b	626.80	37.81	16.05	42.4%	良	4.07	2.16	53.1%	22.5%
IWM-　1c	47.38	47.38	22.07	46.6%	ミネラル少	4.08	2.66	65.2%	30.4%
IWM-　2a	155.94	50.91	11.28	22.2%	良	4.11	2.27	55.2%	12.2%
IWM-　2b	83.62	36.91	8.65	23.4%	良	4.38	2.55	58.2%	13.6%
IWM-　3a	31.51	31.51	2.99	9.5%	良	2.37	1.08	45.6%	4.3%
IWM-　3b	160.89	45.96	21.19	46.1%	良	4.07	2.48	60.9%	28.1%
IWM-　4a	78.01	47.61	14.73	30.9%	良	4.06	2.44	60.1%	18.6%
IWM-　4b	76.51	50.31	12.09	24.0%	良	4.15	2.57	61.9%	14.9%
IWM-　4c	38.01	38.01	11.07	29.1%	良	4.05	2.06	50.9%	14.8%
IWM-　5a	95.74	47.72	4.02	8.4%	良	3.33	1.73	52.0%	4.4%
IWM-　5b	70.42	45.22	11.43	25.3%	良	4.08	2.39	58.6%	14.8%
IWM-　6	143.99	67.98	43.44	63.9%	良	4.12	2.77	67.2%	43.0%
IWM-　7	580.46	54.39	21.35	39.3%	ミネラル少	4.21	2.40	57.0%	22.4%
IWM-　9	329.85	57.79	23.68	41.0%	良	4.13	2.76	66.8%	27.4%
IWM-　10	13.21	13.21	3.17	24.0%	良	2.82	1.81	64.2%	15.4%
IWM-　11	486.53	65.41	34.12	52.2%	良	4.09	2.71	66.3%	34.6%
IWM-　12	132.18	43.36	26.67	61.5%	良	4.15	2.77	66.7%	41.1%
IWM-　13	101.35	47.93	22.55	47.0%	良	5.50	3.86	70.2%	33.0%

採取量・処理量・回収量・燃焼量は、炭化物の重量 (mg)、ガスは二酸化炭素の炭素相当量 (mg)、含有率は % 含有率 1 は回収量 / 処理量 (%)、含有率 2 はガス / 燃焼量 (%)、含有率 3 は含有率 1* 含有率 2(%)

表４　測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	炭素年代 δ ^{13}C‰	^{14}C BP（補正値）	暦年較正 cal BC (%) は確率密度	
IWM　C1	PLD-4069	(-26.37)	2280　±25	400-355	63.5%
				290-230	31.9%
IWM　C2	PLD-4070	(-24.96)	2220　±25	380-340	18.8%
				325-200	76.6%
IWM　C3	PLD-4071	(-27.06)	2240　±30	390-345	26.9%
				320-205	68.6%
IWM　C4	PLD-4072	(-25.06)	2245　±25	390-350	30.1%
				310-205	65.4%
IWM　C5	PLD-4073	(-23.29)	2400　±25	720-695	4.7%
				540-400	90.8%
IWM　C6	PLD-4074	(-25.76)	2435　±25	750-685	20.4%
				665-645	5.5%
				590-575	1.6%
				560-405	67.9%
IWM　C7	PLD-4075	(-22.89)	2440　±25	750-685	22.7%
				665-640	6.6%
				590-405	66.5%
IWM　C8	PLD-4076	(-25.35)	2335　±25	485-465	2.3%
				450-440	0.6%
				415-365	92.6%
IWM　C9	PLD-4077	(-26.84)	2225　±30	385-340	21.7%
				330-200	73.8%
IWM　C10	PLD-4078	(-26.97)	2455　±25	750-685	27.7%
				665-630	11.5%
				625-610	2.5%
				595-410	53.8%
IWM　1a	IAAA-41899	-26.7	2200　±40	380-170	95.4%
IWM　1b	IAAA-41900	-26.4	2290　±40	405-350	52.3%
				310-205	43.1%
IWM　1c	IAAA-41901	-27.7	2230　±40	385-200	95.5%
IWM　2a	IAAA-41902	-25.2	2270　±40	400-345	39.8%
				320-205	55.6%
IWM　2b	IAAA-41903	-25.6	2360　±40	730-690	4.9%
				660-650	0.8%
				545-375	89.7%
IWM　3a	IAAA-41904	(-28.38)	2210　±40	385-185	95.4%
IWM　3b	IAAA-41905	-25.3	2310　±40	505-495	0.4%
				485-460	2.3%
				450-440	0.8%
				415-350	64.5%
				315-205	27.5%

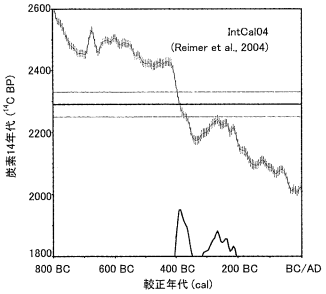
試料番号	測定機関番号	炭素年代 δ ^{13}C‰	^{14}C BP（補正値）	暦年較正 cal BC (%) は確率密度	
IWM　4a	IAAA-41906	-26.3	2440　±40	750-685	21.6%
				665-610	12.6%
				595-405	12.6%
IWM　4b	IAAA-41907	-26.2	2450　±40	755-685	23.2%
				670-605	15.4%
				600-405	56.9%
IWM　4c	IAAA-41908	-26.1	2610　±40	890-875	1.2%
				845-750	85.8%
				685-665	5.0%
				640-615	1.4%
				615-590	2.1%
IWM　5a	IAAA-41909	(-26.4)	2430　±40	750-685	19.8%
				665-630	7.7%
				625-610	1.8%
				595-400	66.1%
IWM　5b	IAAA-41910	-26.5	2520　±40	795-515	93.0%
				460-450	1.0%
				435-430	0.5%
				415-410	0.5%
IWM　6	IAAA-41911	-24.4	2390　±40	745-685	11.4%
				665-645	2.8%
				585-580	0.5%
				550-390	80.7%
IWM　7	IAAA-41912	-27.2	2240　±40	390-335	27.4%
				330-200	67.8%
IWM　9	IAAA-41913	-26.9	2430　±40	750-685	19.8%
				665-630	7.7%
				625-610	1.8%
				595-400	66.1%
IWM　10	IAAA-41914	(-28.38)	2450　±40	755-685	23.2%
				670-605	15.4%
				600-405	56.9%
IWM　11	IAAA-41915	-23.2	2470　±40	765-680	26.9%
				670-480	57.1%
				470-410	11.5%
IWM　12	IAAA-41916	-23.0	2540　±40	800-705	36.9%
				695-540	58.6%
IWM　13	Beta-201256	-29.5	2320　±40	510-435	10.8%
				430-350	67.4%
				290-230	16.1%
				220-210	0.8%



試料番号　IWM-1a
機関番号　IAAA-41899
炭素14年代　2200 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
380 cal BC	–	170 cal BC	95.4%
			95.4%

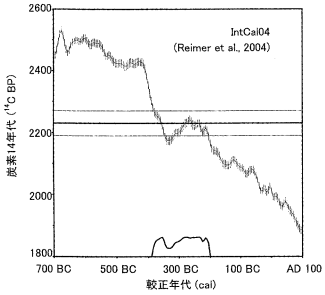
中央値　290 cal BC
最頻値　295 cal BC



試料番号　IWM-1b
機関番号　IAAA-41900
炭素14年代　2290 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
405 cal BC	–	350 cal BC	52.3%
310 cal BC	–	205 cal BC	43.1%
			95.4%

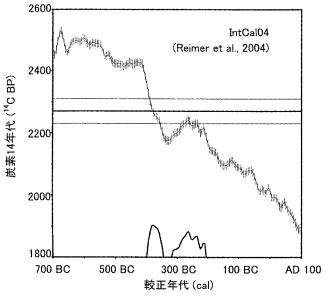
中央値　365 cal BC
最頻値　385 cal BC



試料番号　IWM-1c
機関番号　IAAA-41901
炭素14年代　2230 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
385 cal BC	–	200 cal BC	95.5%
			95.5%

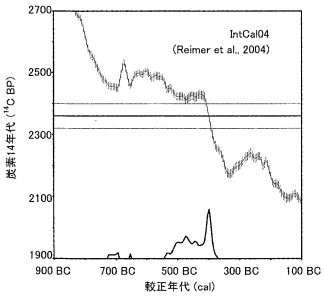
中央値　290 cal BC
最頻値　235 cal BC



試料番号　IWM-2a
機関番号　IAAA-41902
炭素14年代　2270 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
400 cal BC	–	345 cal BC	39.8%
320 cal BC	–	205 cal BC	55.6%
			95.4%

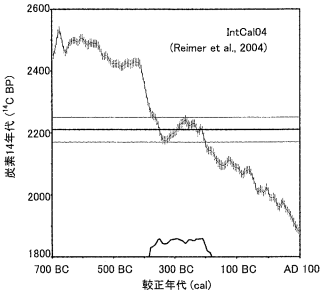
中央値　295 cal BC
最頻値　380 cal BC



試料番号　IWM-2b
機関番号　IAAA-41903
炭素14年代　2360 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
730 cal BC	–	690 cal BC	4.9%
660 cal BC	–	650 cal BC	0.8%
545 cal BC	–	375 cal BC	89.7%
			95.4%

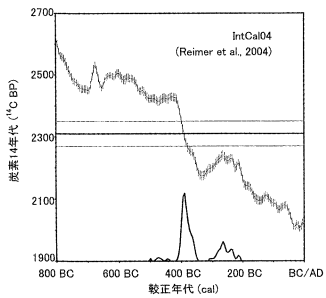
中央値　450 cal BC
最頻値　400 cal BC



試料番号　IWM-3a
機関番号　IAAA-41904
炭素14年代　2210 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
385 cal BC	–	185 cal BC	95.4%
			95.4%

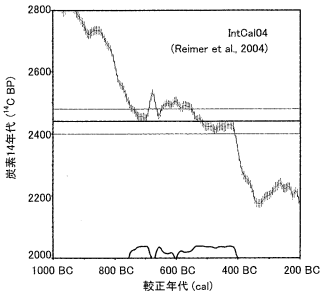
中央値　290 cal BC
最頻値　295 cal BC



試料番号　IWM-3b
機関番号　IAAA-41905
炭素14年代　2310 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
505 cal BC	–	495 cal BC	0.4%
485 cal BC	–	460 cal BC	2.3%
450 cal BC	–	440 cal BC	0.8%
415 cal BC	–	350 cal BC	64.5%
315 cal BC	–	205 cal BC	27.5%
			95.4%

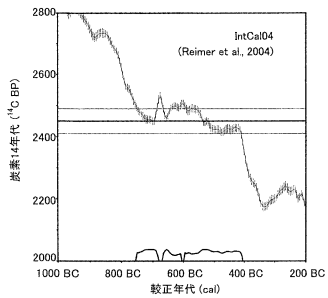
中央値　385 cal BC
最頻値　390 cal BC



試料番号　IWM-4a
機関番号　IAAA-41906
炭素14年代　2440 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
750 cal BC	–	685 cal BC	21.6%
665 cal BC	–	610 cal BC	12.6%
595 cal BC	–	405 cal BC	61.3%
			95.4%

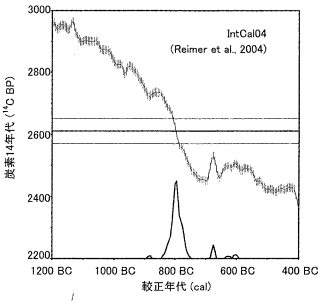
中央値　540 cal BC
最頻値　515 cal BC



試料番号　IWM-4b
機関番号　IAAA-41907
炭素14年代　2450 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
755 cal BC	–	685 cal BC	23.2%
670 cal BC	–	605 cal BC	15.4%
600 cal BC	–	405 cal BC	56.9%
			95.4%

中央値　565 cal BC
最頻値　535 cal BC

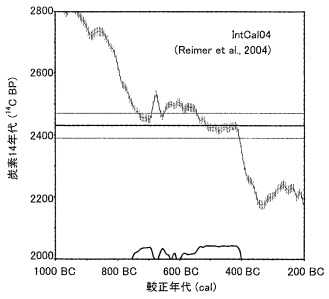


試料番号　IWM-4c
機関番号　IAAA-41908
炭素14年代　2610 ± 40 ^{14}C BP

較正年代			
890 cal BC	–	875 cal BC	1.2%
845 cal BC	–	750 cal BC	85.8%
685 cal BC	–	665 cal BC	5.0%
640 cal BC	–	615 cal BC	1.4%
615 cal BC	–	590 cal BC	2.1%
			95.4%

中央値　800 cal BC
最頻値　795 cal BC

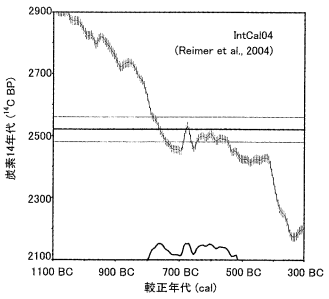
図２　確率密度分布



試料番号	IWM-5a
機関番号	IAAA-41909
炭素14年代	2430 ± 40 14C BP

較正年代			
750 cal BC	–	685 cal BC	19.8%
665 cal BC	–	630 cal BC	7.7%
625 cal BC	–	610 cal BC	1.8%
595 cal BC	–	400 cal BC	66.1%
			95.4%

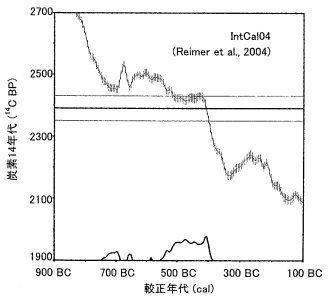
中央値	525 cal BC
最頻値	510 cal BC



試料番号	IWM-5b
機関番号	IAAA-41910
炭素14年代	2520 ± 40 14C BP

較正年代			
795 cal BC	–	515 cal BC	95.4%
			95.4%

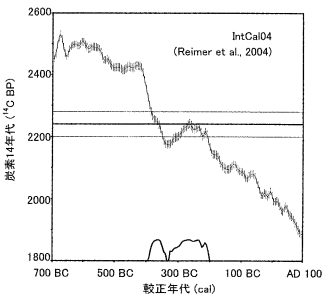
中央値	650 cal BC
最頻値	670 cal BC



試料番号	IWM-6
機関番号	IAAA-41911
炭素14年代	2390 ± 40 14C BP

較正年代			
745 cal BC	–	685 cal BC	11.4%
665 cal BC	–	645 cal BC	2.8%
585 cal BC	–	580 cal BC	0.5%
550 cal BC	–	390 cal BC	80.7%
			95.4%

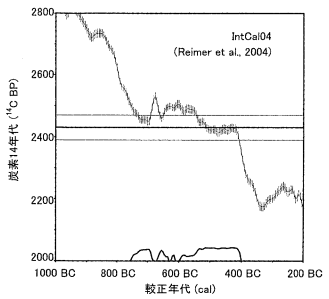
中央値	480 cal BC
最頻値	405 cal BC



試料番号	IWM-7
機関番号	IAAA-41912
炭素14年代	2240 ± 40 14C BP

較正年代			
390 cal BC	–	335 cal BC	27.4%
330 cal BC	–	200 cal BC	67.8%
			95.2%

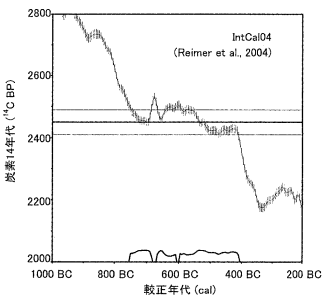
中央値	285 cal BC
最頻値	360 cal BC



試料番号	IWM-9
機関番号	IAAA-41913
炭素14年代	2430 ± 40 14C BP

較正年代			
750 cal BC	–	685 cal BC	19.8%
665 cal BC	–	630 cal BC	7.7%
625 cal BC	–	610 cal BC	1.8%
595 cal BC	–	400 cal BC	66.1%
			95.4%

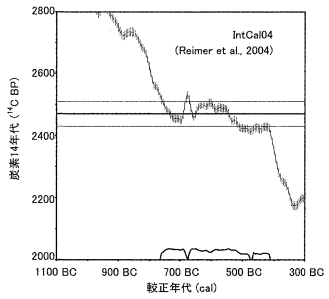
中央値	525 cal BC
最頻値	510 cal BC



試料番号	IWM-10
機関番号	IAAA-41914
炭素14年代	2450 ± 40 14C BP

較正年代			
755 cal BC	–	685 cal BC	23.2%
670 cal BC	–	605 cal BC	15.4%
600 cal BC	–	405 cal BC	56.9%
			95.4%

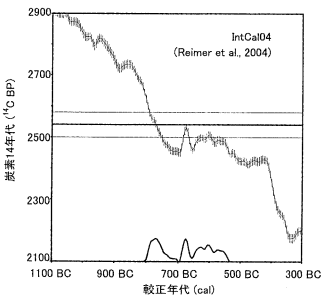
中央値	565 cal BC
最頻値	535 cal BC



試料番号	IWM-11
機関番号	IAAA-41915
炭素14年代	2470 ± 40 14C BP

較正年代			
765 cal BC	–	680 cal BC	26.9%
670 cal BC	–	480 cal BC	57.1%
470 cal BC	–	410 cal BC	11.5%
			95.4%

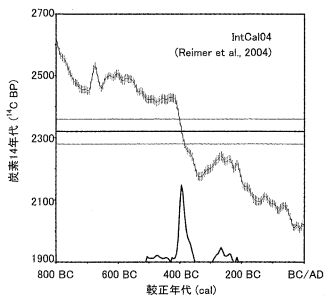
中央値	610 cal BC
最頻値	650 cal BC



試料番号	IWM-12
機関番号	IAAA-41916
炭素14年代	2540 ± 40 14C BP

較正年代			
800 cal BC	–	705 cal BC	36.9%
695 cal BC	–	540 cal BC	58.6%
			95.5%

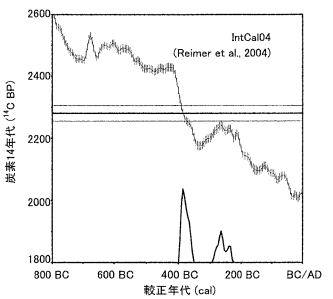
中央値	675 cal BC
最頻値	770 cal BC



試料番号	IWM-13
機関番号	Beta-201256
炭素14年代	2320 ± 40 14C BP

較正年代			
510 cal BC	–	435 cal BC	10.8%
430 cal BC	–	350 cal BC	67.4%
290 cal BC	–	230 cal BC	16.1%
220 cal BC	–	210 cal BC	0.8%
			95.2%

中央値	395 cal BC
最頻値	395 cal BC

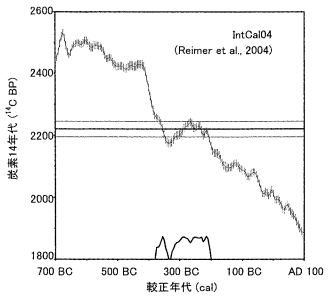


試料番号	IWM-C1
機関番号	PLD-4069
炭素14年代	2280 ± 25 14C BP

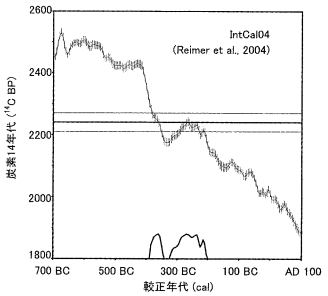
較正年代			
400 cal BC	–	355 cal BC	63.5%
290 cal BC	–	230 cal BC	31.9%
			95.4%

中央値	375 cal BC
最頻値	385 cal BC

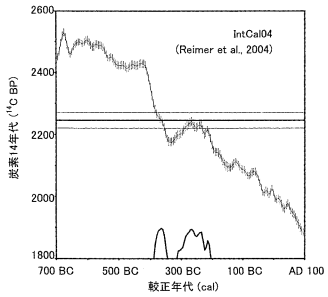
図３　確率密度分布



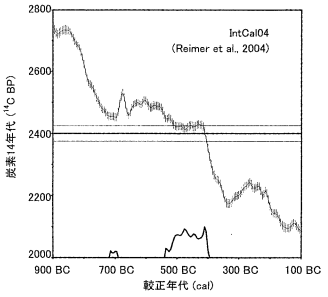
試料番号	IWM-C2			
機関番号	PLD-4070			
炭素14年代	2220	± 25	^{14}C BP	
較正年代	380 cal BC	–	340 cal BC	18.8%
	325 cal BC	–	200 cal BC	76.6%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.4%
中央値	280 cal BC			
最頻値	215 cal BC			



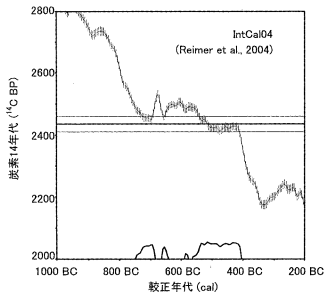
試料番号	IWM-C3			
機関番号	PLD-4071			
炭素14年代	2240	± 30	^{14}C BP	
較正年代	390 cal BC	–	345 cal BC	26.9%
	320 cal BC	–	205 cal BC	68.6%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.4%
中央値	280 cal BC			
最頻値	360 cal BC			



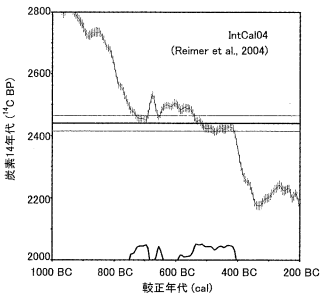
試料番号	IWM-C4			
機関番号	PLD-4072			
炭素14年代	2245	± 25	^{14}C BP	
較正年代	390 cal BC	–	350 cal BC	30.1%
	310 cal BC	–	205 cal BC	65.4%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.4%
中央値	280 cal BC			
最頻値	365 cal BC			



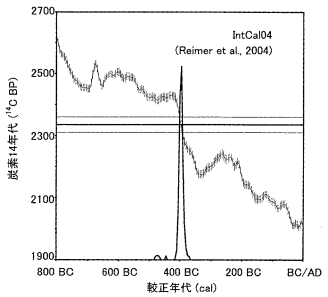
試料番号	IWM-C5			
機関番号	PLD-4073			
炭素14年代	2400	± 25	^{14}C BP	
較正年代	720 cal BC	–	695 cal BC	4.7%
	540 cal BC	–	400 cal BC	90.8%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.5%
中央値	470 cal BC			
最頻値	410 cal BC			



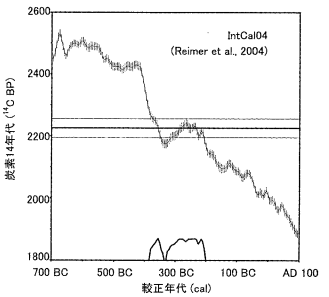
試料番号	IWM-C6			
機関番号	PLD-4074			
炭素14年代	2435	± 25	^{14}C BP	
較正年代	750 cal BC	–	685 cal BC	20.4%
	665 cal BC	–	645 cal BC	5.5%
	590 cal BC	–	575 cal BC	1.6%
	560 cal BC	–	405 cal BC	67.9%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.5%
中央値	510 cal BC			
最頻値	515 cal BC			



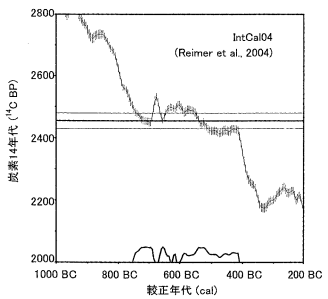
試料番号	IWM-C7			
機関番号	PLD-4075			
炭素14年代	2440	± 25	^{14}C BP	
較正年代	750 cal BC	–	685 cal BC	22.7%
	665 cal BC	–	640 cal BC	6.6%
	590 cal BC	–	405 cal BC	66.5%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.7%
中央値	525 cal BC			
最頻値	515 cal BC			



試料番号	IWM-C8			
機関番号	PLD-4076			
炭素14年代	2335	± 25	^{14}C BP	
較正年代	485 cal BC	–	465 cal BC	2.3%
	450 cal BC	–	440 cal BC	0.6%
	415 cal BC	–	365 cal BC	92.6%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.5%
中央値	400 cal BC			
最頻値	395 cal BC			



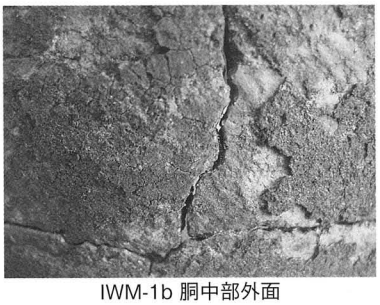
試料番号	IWM-C9			
機関番号	PLD-4077			
炭素14年代	2225	± 30	^{14}C BP	
較正年代	385 cal BC	–	340 cal BC	21.7%
	330 cal BC	–	200 cal BC	73.8%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.4%
中央値	285 cal BC			
最頻値	355 cal BC			



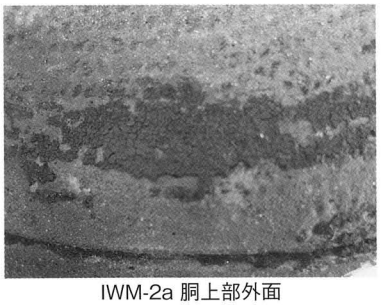
試料番号	IWM-C10			
機関番号	PLD-4078			
炭素14年代	2455	± 25	^{14}C BP	
較正年代	750 cal BC	–	685 cal BC	27.7%
	665 cal BC	–	630 cal BC	11.5%
	625 cal BC	–	610 cal BC	2.5%
	595 cal BC	–	410 cal BC	53.8%
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
	–	–	–	–
				95.4%
中央値	575 cal BC			
最頻値	655 cal BC			

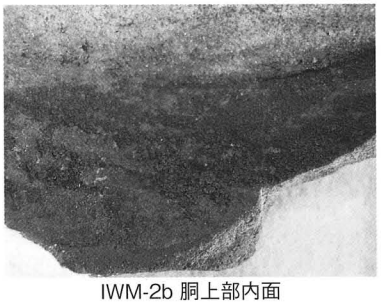
図４　確率密度分布

IWM-1a 胴上部外面

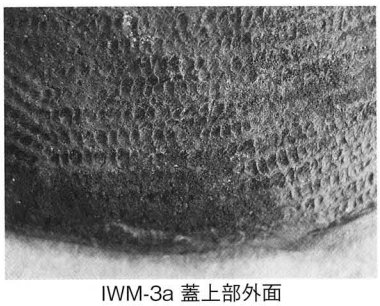

IWM-1b 胴中部外面

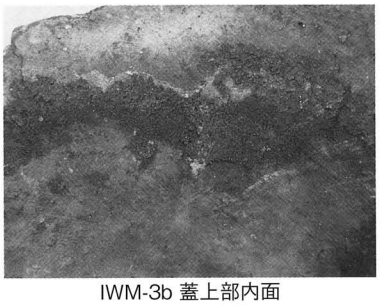
IWM-1c 胴上部内面

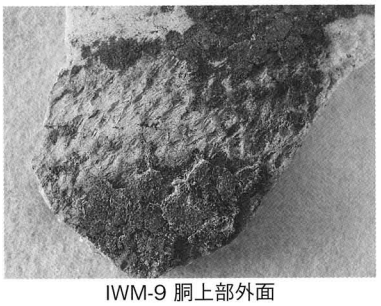

IWM-2a 胴上部外面

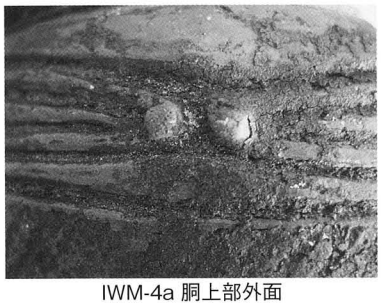

IWM-2b 胴上部内面

IWM-7 胴中部外面


IWM-3a 蓋上部外面

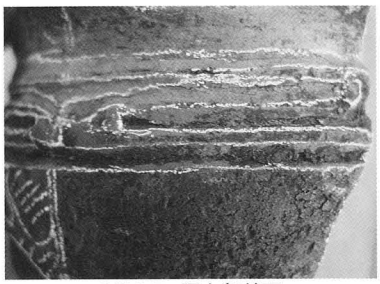

IWM-3b 蓋上部内面

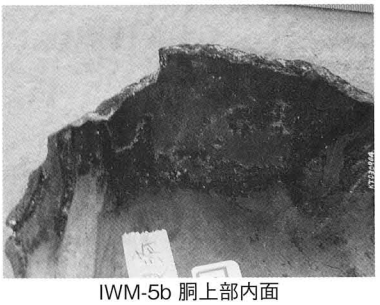

IWM-9 胴上部外面

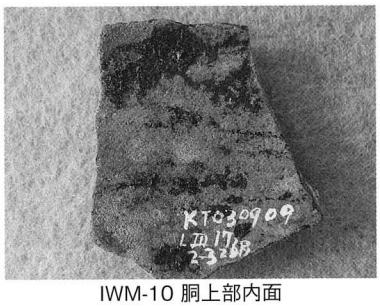

IWM-4a 胴上部外面

IWM-4b 胴中部外面

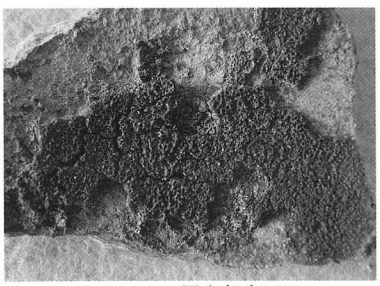
IWM-4c 胴上部内面

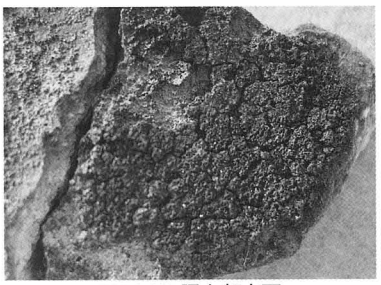

IWM-5a 胴上部外面

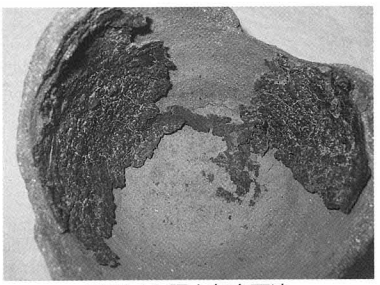

IWM-5b 胴上部内面



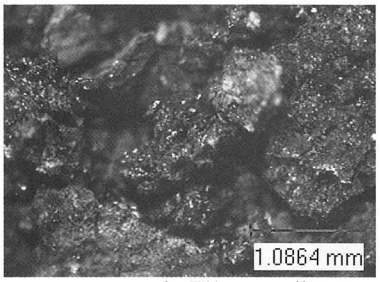
IWM-10 胴上部内面


IWM-11 胴上部内面

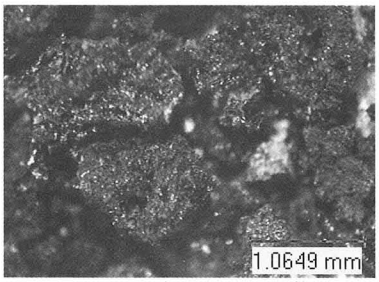

IWM-12 胴上部内面


IWM-13 胴上部内面漆

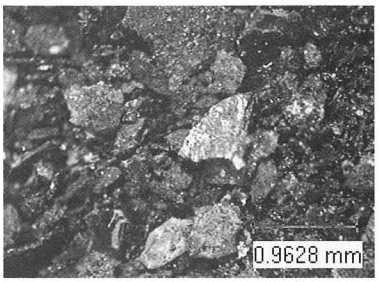
写真図版　1



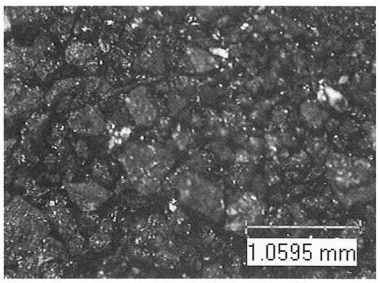
IWM-1a　処理前　12.5 倍



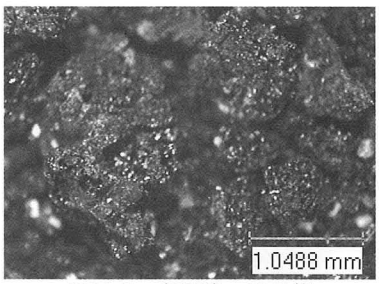
IWM-1b　処理前　12.5 倍



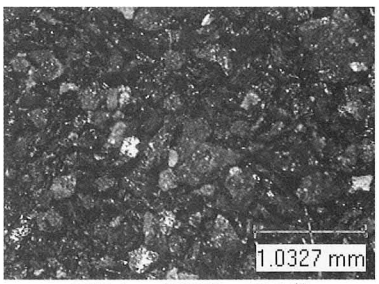
IWM-1c　処理前　12.5 倍



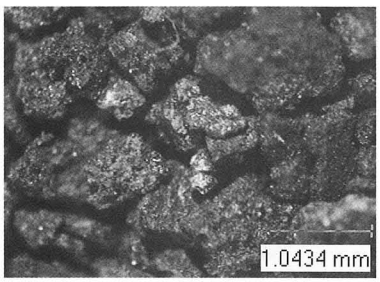
IWM-1a　処理後　12.5 倍



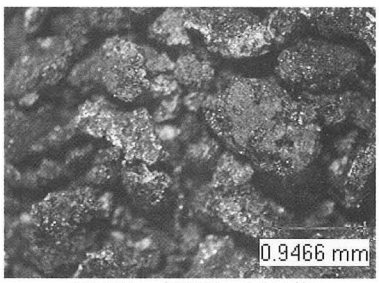
IWM-1b　処理後　12.5 倍



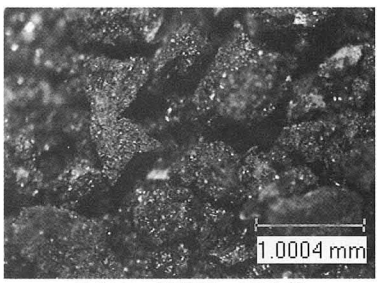
IWM-1c　処理後　12.5 倍



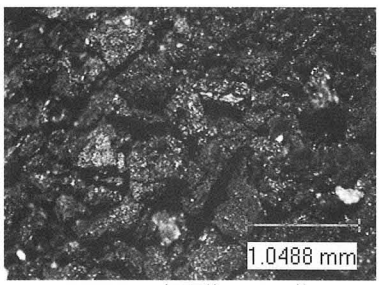
IWM-2a　処理前　12.5 倍



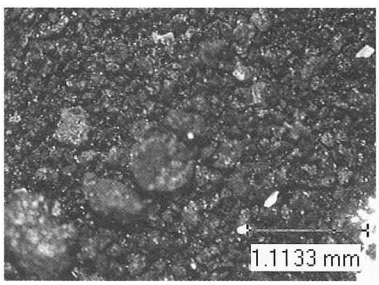
IWM-2b　処理前　12.5 倍



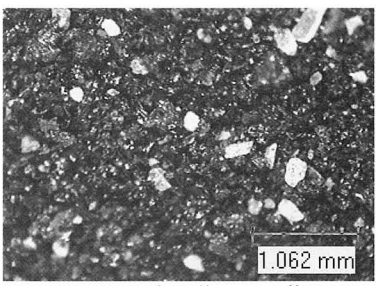
IWM-7　処理前　12.5 倍



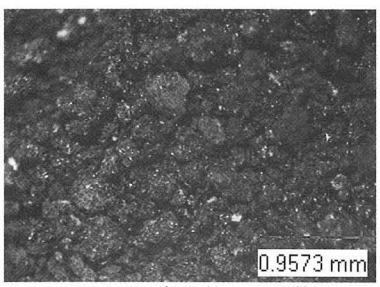
IWM-2a　処理後　12.5 倍



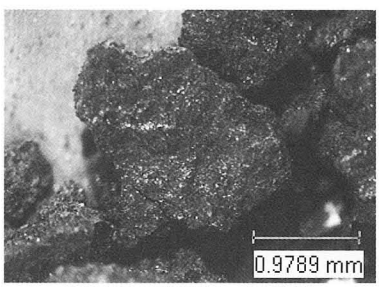
IWM-2b　処理後　12.5 倍



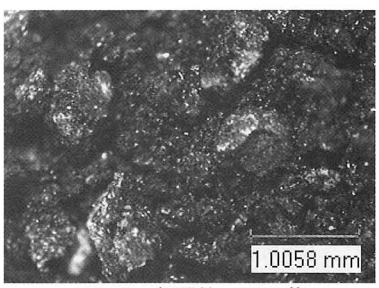
IWM-7　処理後　12.5 倍



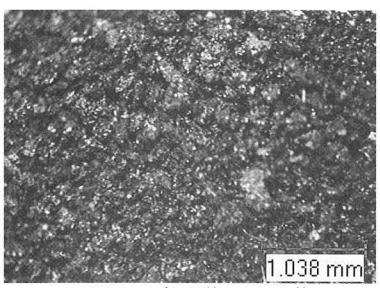
IWM-3a　処理前　12.5 倍



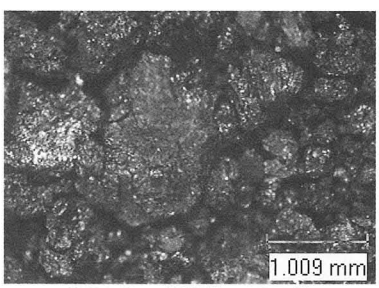
IWM-3b　処理前　12.5 倍



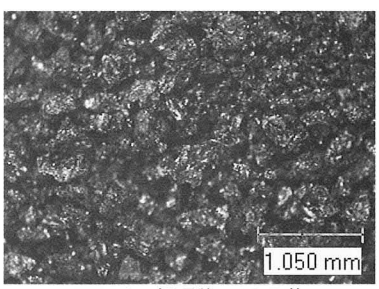
IWM-9　処理前　12.5 倍



IWM-3a　処理後　12.5 倍

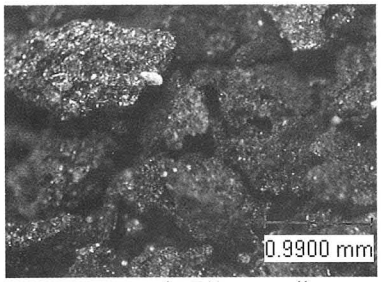


IWM-3b　処理後　12.5 倍

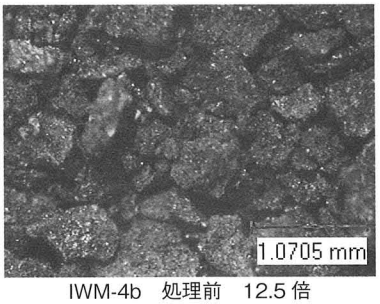


IWM-9　処理後　12.5 倍

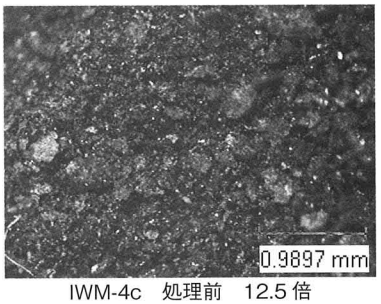
写真図版　2



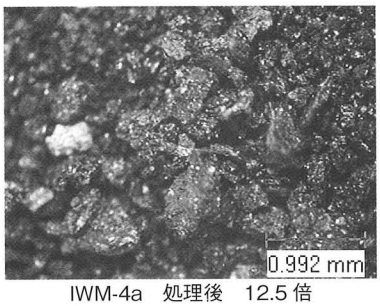
IWM-4a　処理前　12.5 倍



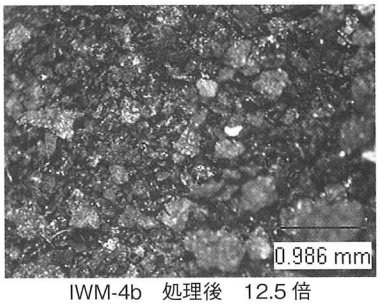
IWM-4b　処理前　12.5 倍



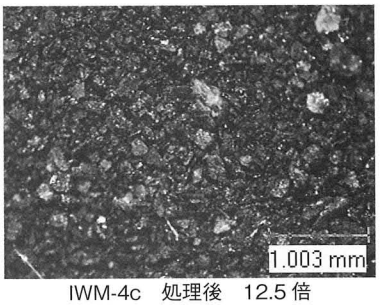
IWM-4c　処理前　12.5 倍



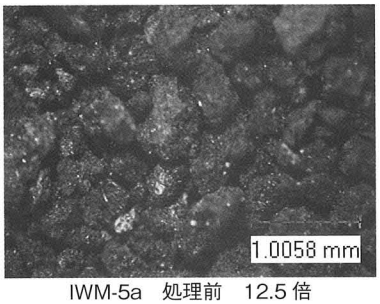
IWM-4a　処理後　12.5 倍



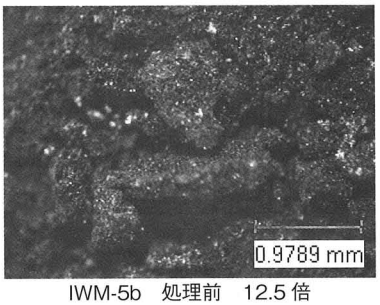
IWM-4b　処理後　12.5 倍



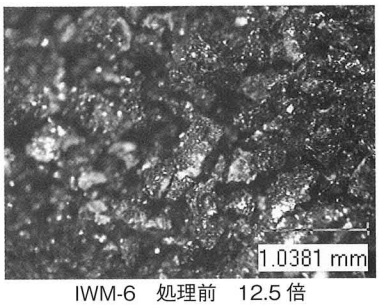
IWM-4c　処理後　12.5 倍



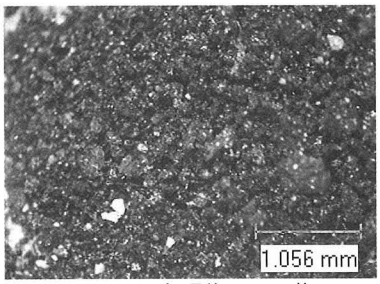
IWM-5a　処理前　12.5 倍



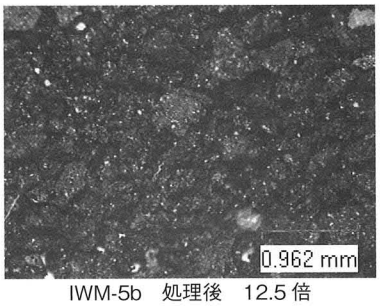
IWM-5b　処理前　12.5 倍



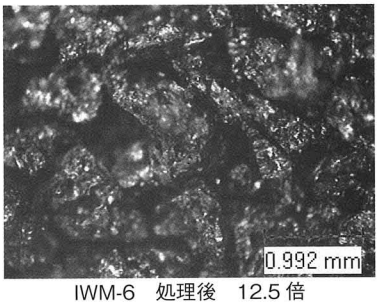
IWM-6　処理前　12.5 倍



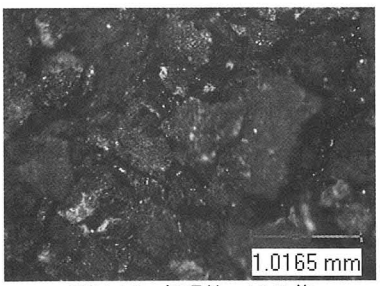
IWM-5a　処理後　12.5 倍



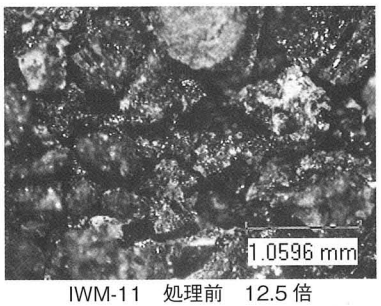
IWM-5b　処理後　12.5 倍



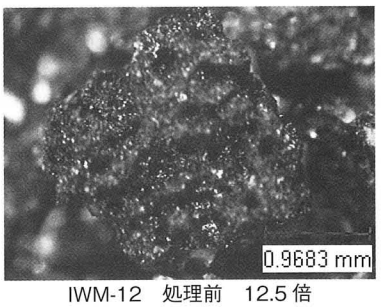
IWM-6　処理後　12.5 倍



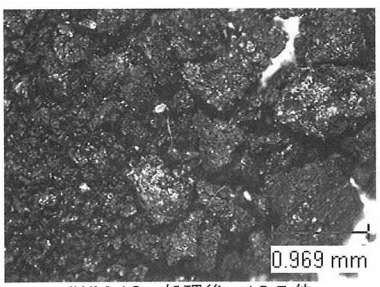
IWM-10　処理前　12.5 倍



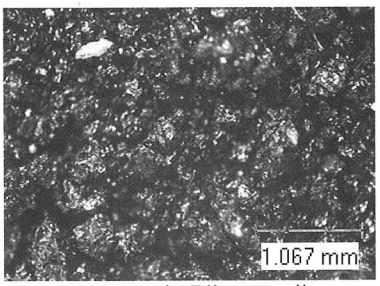
IWM-11　処理前　12.5 倍



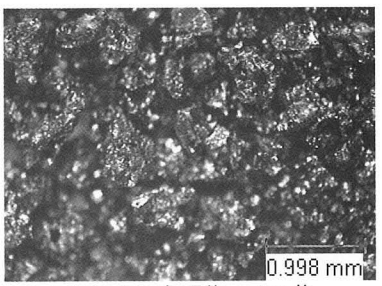
IWM-12　処理前　12.5 倍



IWM-10　処理後　12.5 倍



IWM-11　処理後　12.5 倍



IWM-12　処理後　12.5 倍

写真図版　3

報告書抄録

ふりがな	かねつきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	金附遺跡発掘調査報告書
副書名	緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査・県営ほ場整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第482集
編著者名	金子昭彦　高木　晃
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2006年3月7日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
かねつきいせき 金附遺跡	いわてけんきたかみしいな 岩手県北上市稲 せちょう 瀬町 あざかねつき 字金附195-1ほか	03206	ME76-2058	35度 14分 57秒	138度 46分 16秒	2002.04.11 ～ 2002.08.22 2002.10.17 ～ 2002.11.14 2003.0409 ～ 2003.10.10	800㎡ 142㎡ 2,205㎡	緊急地方道路整備事業および県営ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金附遺跡	集落跡	縄文中期末 〃後期 〃晩期	竪穴住居跡1棟（縄文中期） 土坑・土坑墓 焼土　・遺物包含層	土器（中期末△、後期中葉△、 後期後葉△、晩期前～中葉△） 土偶・耳飾	
		縄文晩期末～弥生時代中期	掘立柱建物跡？（柱穴群） 炉跡4基、焼土27基 土坑8基 土器棺墓3基 捨て場3ヶ所	土器（大洞A2式△、桝形囲式？△ 大洞A′～山王Ⅲ層式◎） 土偶、土版、クマ把手 石製玉類 磨製石斧、環状石斧、石剣、石鏃 の未成品	
		奈良時代 平安時代	竪穴住居跡1棟 土坑・焼土？	土師器、須恵器 鉄製品・鉄滓	
		中世	火葬墓	陶器片・古銭	
		近世	溝跡16条・土坑墓？ 柱穴状土坑群？	陶磁器片	江刺平野に続く大溝跡1条

要約

北上川に近接する自然堤防上と後背湿地に立地。斜面は、厚い洪水堆積層を間層に挟むことで、縄文時代晩期以前、晩期後葉～弥生時代中期初頭、奈良時代以降の層に分けられる。

主な時期と遺構は、縄文時代中期末の竪穴住居跡、晩期末～弥生時代中期初頭の集落跡、奈良、平安時代の小規模集落跡、中世の火葬墓、近世の集落跡と大溝跡（江刺平野に向かう）。

最も多くの遺構、遺物が発見されたのは、晩期末～弥生時代中期初頭の集落跡で、新しくできた西側の細い自然堤防上に主に住み（掘立柱建物）、東側の縄文時代以来の大きな自然堤防の間にできた後背湿地に大量の土器、石器を捨てている。磨製石斧等の未成品が大量に出土したことから、石器製作を主たる生業としていたと推測される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集

金附遺跡発掘調査報告書

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
県営ほ場整備事業下門岡地区関連遺跡発掘調査
（第1分冊　本文、遺構・分析・考察編）

印　刷　平成18年3月1日
発　行　平成18年3月7日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　（019）638－9001
ＦＡＸ　（019）638－8563

印　刷　川嶋印刷株式会社
〒029-4194　岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電　話　（0191）46－4161

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006